

1981-2011

30 YEARS OF THE SHOTO MUSEUM OF ART

渋谷区立松濤美術館 30年のあゆみ

開館30周年に寄せて

渋谷区立松濤美術館は、本年度開館して30周年を迎えました。区民及び美術関係者の多くの方々のご理解とご協力をいただき、長きに亘り活動が続けられましたことをお礼申し上げます。

美術館が区民の喜びとやすらぎの場となることを望むのは、当然のことではありますが、この美術館は、小規模ながら文化的情緒の豊かさと落ち着いた雰囲気求めて、そこに区民が楽しみ、憩いの場となるようにしたいと考えました。幸い、白井晟一設計になる建物はその意図を満ち、建物の何処にいても飽くことのない魅力に導かれるものとなっています。

展観事業はその美術館の性格を決める重要な柱ではありますが、渋谷にゆかりのある美術家、コレクションの展示からはじめて、さらには古今東西を問わずまた分野も限定せず絵画、彫刻、写真から陶磁器、染織などの工芸にいたるまで、たとえ小規模であっても優れた美術品を展示することに力をそそぎました。1981年秋の開館記念展「森芳雄」にはじまり、本年12月の「渋谷ユートピア1900-1945」展まで、じつに150回にも上る特別展を開催してまいりました。

さらには、区民に身近な美術館として区民公募展、小中学生絵画展のほか、講演会、美術映画会、絵画教室、コンサートなどを行い、幅広く教育普及活動にもつとめてまいりました。

私は30数年前、当館建設の時に社会教育課長として関わっておりました。当時の開館までの経緯を思い起こしますと、建築家白井晟一氏、そして土方定一先生をはじめとする「美術館建設懇談会」の委員の方々々と直に接したことなどが思い出されます。また数多い展覧会のなかで特に記憶に残っているものは、1988年特別陳列「大正の詩人画家富永太郎」展です。富永は日本近代文学史上において異彩を放った夭折の詩人画家ですが、私が敬愛して止まない大岡昇平氏が、富永を惜しんで当館での展覧会開催をお薦めくださったものです。富永が逝去した場所は松濤美術館からほんの600メートルほどの場所であり、大岡氏も松濤公園のそばにいました。なにか深い地縁を感じます。ご来館いただきました皆様にも、こうした年月を経ても忘れられない展覧会があるのではないかと想像いたします。

これからの時代は、心豊かに生きるべき時代を迎えましたが、その時代にふさわしい特色のある施設として、今後とも渋谷区の文化行政の象徴的、中核的役割を果たし、区民を初めとする多くの方々に愛し親しまれる美術館となるよう努力してまいりたいと考えております。お支えくださいました皆様方に心からお礼申し上げ、より一層のご声援をお願い申し上げます。

2011年12月

渋谷区長 桑原敏武

展覧会時代と美術館

当館は今年2011年、開館30周年を迎えました。開館以来、美術館を支えてこられた皆様に深く感謝いたします。

当館が開館した1981年当時は、日本各地に公私の美術館が誕生し、“美術館ブーム”と呼ばれた時代の只中でした。高度経済成長、GNP大国という日本が未体験の新しい時代に入り、“美術”を取り巻く様相も一大転機を迎えておりました。たまたま私は新聞社の一美術記者として美術界の現場で働いておりました。

激動の戦後美術界も1970年代には“沈静期”と呼ばれる時期に入り、“具象復活”をかかげ、デパートを会場にする美術展が盛んになり、相い次いで“百貨店美術館”も登場しました。ピュフェなどと共に脚光を浴びた人気画家たちの一人林武も渋谷に住んで旺盛な制作活動を展開していました。渋谷のデパートの画廊で“横山大観の軸に一億円の値がついた”噂と共に“絵画ブーム”の時代に入り、“東京芸大受験に親が同伴”というニュースも続きました。

新聞社、テレビ局が主催する国内外の展覧会は日常化し、日本各地で多種多様なコンクールが開かれ、画廊、美術館が輩出する“美術館ブーム”に至りました。

こうした時代を象徴する画廊が渋谷に登場しました。パリの大画廊の指導のもと、最も富裕層の密集地を立地調査の末、鉢山町に1972年オープンした「ギャラリー・ジェイコ」でした。商社マン出身の松井文彦氏は、江戸以来の徒弟修業、古道具古物商の流れも引く画商界とは一線を画し、企業界を対象に予測通り成果を挙げました。さらに世界最初のIT美術館設立をめざし、多摩センターに、世界各地の美術館の収蔵品を即時に観賞できる「東京国際美術館」を1990年にオープンさせました。1999年には多摩美大に移管され、現在は同大美術館として活動を続けています。

当館誕生前後の渋谷の異色画廊には、映画監督の故亀井文夫氏が晩年開いた画廊がありました。渋谷ゆかりの竹久夢二の渡欧療養時代の晩年の写生、肉筆を主に紹介し、もう一つの“夢二像”が衝撃的でした。

フェノロサ、岡倉天心が欧米視察のもと、日本最初のミュージアム、帝国博物館が誕生して以来、博物館、美術館と呼ばれる施設は5千を越えました。博覧会、共進会などとともに始った近代日本の展覧会時代は、無限とも思える広がりを見せています。多種多様な創作活動に対応して美術館も推移していくでしょう。皆様とともに未来への美術館を支えていきたいと思えます。

2011年12月

渋谷区立松濤美術館 館長 村瀬雅夫

目次

Contents

あいさつ	2
沿革	7
展観一覧	8
特別展	17
特別陳列	169
渋谷区ゆかりの美術と作家	192
松濤美術館公募展	195
渋谷区小中学生絵画展	203
事業記録	
講演会	212
美術映画会	222
美術教室	235
美術相談	247
夏休み見学会	260
コンサート	262
学芸員実習	264
入館状況	272
収蔵年度、収蔵作家一覧	284
収蔵作品リスト	285
施設・運営	
施設	308
渋谷区立松濤美術館条例	313
渋谷区立松濤美術館条例施行規則	315
財団について	
設立趣旨	317
組織図	318
定款	319
利用案内	326

沿革

- 1972(昭和47)年 3月 • 渋谷区の「長期基本計画」策定される。文化施設として、美術館、音楽室、集会所(文化センター)の必要性が答申された。
- 1977(昭和52)年 3月 • 「長期基本計画」に基づく、「昭和52年度～昭和54年度の3カ年実施計画案」のなかで、美術館の建設予定地を渋谷区松濤二丁目14番14号に予定し、建設計画を区議会に提案、地質調査、基本設計予算13,035千円可決。
- 11月 • 美術館建設のため、専門的立場から指導、助言をする懇談会の発足(以後6回開催)。
- 1978(昭和53)年 4月 • 基本設計を白井晟一研究所に委託。
- 9月 • 区議会において美術館建設予算806,635千円可決(一部債務負担行為限度額を含む)。
- 10月 • 最終基本設計できあがる。
- 12月 • 美術館建設工事契約
(竹中工務店東京支店 契約金額787,000千円)。
• 美術館建設工事着工。
- 1979(昭和54)年 4月 • 美術館準備室設置。
- 1980(昭和55)年 1月 • 美術館建設について区内美術作家への説明会開催(3回)。
- 5月 • 美術館建設工事竣工。
- 10月 • 区議会において「東京都渋谷区立松濤美術館条例」議決。
- 1981(昭和56)年 2月 • 美術館準備室長に藤田國雄就任。
- 3月 • 美術館事業運営のため、財団法人渋谷区美術振興財団設立発起人開催。
- 4月 • 財団法人渋谷区美術振興財団設立。
- 9月 • 「東京都渋谷区立松濤美術館条例」の施行。
• 東京都渋谷区立松濤美術館発足。
• 館長に藤田國雄就任。
• 美術館運営を、財団法人渋谷区美術振興財団に委託。
• 開館披露。
- 10月 • 開館 一般公開。

展観一覧

昭和56(1981)年度

- | | | |
|---|-----------------------------|-----|
| 1 | 開館記念特別展 森 芳雄 | 18 |
| | 併催：開館記念特別陳列 菱田春草 | 170 |
| | 併催：開館記念特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | 18 |
| 2 | 特別展 鍋 島 | 19 |
| | 併催：特別陳列 伊藤若冲 | 170 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | 19 |
| 3 | 特別展 三枝朝四郎50年の写真記録 アジアの人間と遺跡 | 20 |
| | 併催：特別陳列 江戸の人物画谷信一コレクション | 170 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | 20 |

昭和57(1982)年度

- | | | |
|------|-----------------------------------|-----|
| 4 | 特別展 院展の彫刻 | 21 |
| | 併催：特別陳列 琳派再生 神坂雪佳 | 171 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | 21 |
| 5 | 特別展 恩地孝四郎 | 22 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | 22 |
| 6 | 特別展 江戸の櫛・簪 岡崎智予コレクション | 23 |
| | 併催：渋谷区在住作家の作品 | 23 |
| 7 | 特別展 19世紀のヨーロッパの染織・デザイン 亀井茲明コレクション | 24 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | 24 |
| 1983 | 松濤美術館公募展 | 196 |
| | 併催：特別陳列 江戸時代の花鳥画(前期) | 171 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | |
| 第1回 | 渋谷区小中学生絵画展 | 204 |
| | 併催：特別陳列 江戸時代の花鳥画(後期) | 171 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | |

昭和58(1983)年度

- | | | |
|------|--------------------------|-----|
| 8 | 特別展 山口 薫 | 25 |
| 9 | 特別展 台湾高砂族の服飾 瀬川コレクション | 26 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | 26 |
| 10 | 特別展 明治文学とランプ 榎コレクションを中心に | 27 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | 27 |
| 11 | 特別展 辻 晉堂 | 28 |
| 1984 | 松濤美術館公募展 | 196 |
| | 併催：特別陳列 麻生三郎(前期) | 171 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | |
| 第2回 | 渋谷区小中学生絵画展 | 204 |
| | 併催：特別陳列 麻生三郎(後期) | 171 |
| | 併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品 | |

昭和59(1984)年度

- | | | |
|----|---------------------------|----|
| 12 | 特別展 橋本コレクション 中国の絵画 明・清・近代 | 29 |
|----|---------------------------|----|

	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	29
13	特別展 ガラス絵 ヨーロッパからアジアへの流れ	30
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	30
14	特別展 山脇洋二 金工の世界	31
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	31
15	特別展 戸栗コレクション 有田の染付と色絵 伊万里・柿右衛門・鍋島	32
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	32
1985	松濤美術館公募展	196
	併催：特別陳列 森 芳雄(前期)	172
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	
	第3回渋谷区小中学生絵画展	204
	併催：特別陳列 森 芳雄(後期)	172
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	

昭和60(1985)年度

16	特別展 19世紀アメリカインディアンの染織 パーラントコレクション・ナバホブランケット	33
17	特別展 中近東遊牧民の染織 松島コレクション	34
18	特別展 メトロポリタン美術館所蔵 ジャクソン・ポロックの素描	35
	併催：特別陳列 伊藤隆康	172
19	渋谷区・パリ市六区文化交流協定成立記念特別展	36
	パリ市六区の三美術館所蔵 エベール・ドラクロワ・ザッキン エベールの絵画初公開	
20	特別展 美とわざとのハーモニー 19世紀末ヨーロッパの捺染布 亀井茲明コレクション	37
	併催：受贈記念特別陳列 村田勝四郎の彫刻	173
1986	松濤美術館公募展	196
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	
	第4回渋谷区小中学校絵画展	204
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	

昭和61(1986)年度

21	特別展 橋本コレクション 中国の絵画 来舶画人	38
	併催：特別陳列 大久保泰	173
22	特別展 Lufthansaコレクション 現代ドイツの素描	39
23	特別展 小堀四郎	40
	併催：受贈記念特別陳列 脇田愛二郎	174
24	渋谷区立松濤美術館開館5周年記念特別展 堀内正和	41
25	特別展 伊東コレクション 古玩の世界	42
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	42
1987	松濤美術館公募展	196
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	
	第5回渋谷区小中学生絵画展	204
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	

昭和62(1987)年度

26	特別展 ジョルジュ・ビゴー 明治日本を生きたフランス人画家	43
----	-------------------------------	----

27	特別展 福武コレクション 国吉康雄	44
28	特別展 岡山市立オリエント美術館所蔵 オリエントのガラス	45
29	特別展 松濤美術館 現代の版画1987	46
30	特別展 橋本コレクション 中国の墨竹	47
	併催：特別陳列 近岡善次郎	174
1988	松濤美術館公募展	197
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	
第6回	渋谷区小中学生絵画展	205
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	

昭和63(1988)年度

31	特別展 前田寛治	48
32	特別展 石垣栄太郎	49
33	特別展 タイ・ベトナムの古陶磁	50
34	特別展 アメリカの水彩画 ホイッスラーからワイエスまで	51
	併催：特別陳列 大正の詩人画家 富永太郎	175
35	特別展 京都国立近代美術館所蔵 アメリカの写真家たち	52
1989	松濤美術館公募展	197
	併催：特別陳列 ガストン・ブティ	175
第7回	渋谷区立小中学生絵画展	205
	併催：特別陳列 久我修・勝野正則	176

平成元(1989)年度

36	特別展 木村忠太	53
37	特別展 橋本コレクション 中国近現代絵画	54
38	特別展 三雲祥之助	55
39	渋谷区・パリ市六区文化交流特別展 19世紀ローマ賞絵画 パリ国立高等美術学校所蔵	56
40	特別展 秋山泰計の版画	57
1990	松濤美術館公募展	197
	併催：特別陳列 磯村敏之	176
	併催：特別陳列 橋本コレクション 中国の墨梅図	177
第8回	渋谷区小中学生絵画展	205
	併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品	
	併催：特別陳列 来舶画人と長崎派	177

平成2(1990)年度

41	特別展 〈具体〉未完の前衛集団 兵庫県立近代美術館所蔵作品を中心に	58
42	特別展 版画に見るジャポニスム アメリカ・ジマーマン美術館所蔵	59
43	特別展 松濤美術館 現代の版画1990	60
44	特別展 オリエンタリズムの絵画と写真	61
45	特別展 海老原喜之助 その生涯と作品	62
1991	松濤美術館公募展	197
	併催：特別陳列 遠藤 享・森本潤一	178
第9回	渋谷区小中学生絵画展	205

併催：特別陳列 山口 薫 178

平成3(1991)年度

46	特別展 橋本コレクション 中国の絵画 明末清初	63
47	特別展 渋谷区立松濤美術館所蔵作品展	64
48	特別展 野島康三とその周辺 日本近代写真と絵画	65
49	開館10周年記念特別展 中国の漆工芸	66
50	特別展 多田美波 光の迷宮	67
1992松濤美術観公募展		197
併催：特別陳列 清原啓一(前期)		179
第10回渋谷区小中学生絵画展		205
併催：特別陳列 清原啓一(後期)		179

平成4(1992)年度

51	日中国交正常化20周年記念展 江蘇省美術館所蔵 明清の書と絵画	68
52	特別展 文明の十字路・ダゲスタン コーカサスの民族美術	69
53	特別展 生誕百年 中川紀元	70
54	特別展 中野恵祥 板金の造形	71
55	特別展 三木富雄	72
1993松濤美術館公募展		198
併催：特別陳列 野島康三とレディス・カメラ・クラブ(前期)		179
第11回渋谷区小中学生絵画展		206
併催：特別陳列 野島康三とレディス・カメラ・クラブ(後期)		179

平成5(1993)年度

56	特別展 現代ドイツのジュエリー・デザイン	73
併催：特別陳列 柚木沙弥郎の染織		180
57	特別展 片瀬和夫 なげるかけ	74
58	特別展 フィリップ・バロス コレクション 絵はがき芸術の愉しみ 忘れられていた小さな絵	75
59	特別展 中世庶民信仰の絵画 参詣曼荼羅・地獄絵・お伽草子	76
60	特別展 ベイズリー文様の展開 カシミアショールを中心に	77
1994松濤美術館公募展		198
併催：特別陳列 児玉幸雄(前期)		180
第12回渋谷区小中学生絵画展		206
併催：特別陳列 児玉幸雄(後期)		180

平成6(1994)年度

61	特別展 橋本コレクション 十八世紀の中国絵画 乾隆時代を中心に	78
62	特別展 残された楽園 ネイチャーフォトグラフィー	79
63	特別展 フランスの肖像 ルノワール、ピカソ、マン・レイからバルテュスまで	80
64	特別展 渋谷区・パリ市六区文化交流特別展 フランス国立貨幣博物館	81
65	特別展 現代の版画1994	82
1995松濤美術館公募展		198
併催：特別陳列 西嶋俊親		181

第13回渋谷区小中学校絵画展	206
併催：特別陳列 傳抱石の絵画 武蔵野美術大学美術資料図書館所蔵	181

平成7(1995)年度

66 特別展 香港・梅雲堂所蔵 張大千の絵画	83
67 特別展 変容する神仏たち 近世宗教美術の世界	84
68 特別展 大正・昭和の水彩画 蒼原会の画家を中心に	85
69 特別展 闇を刻む詩人 日和崎尊夫 木口木版画の世界	86
70 特別展 映画伝来 シネマトグラフと〈明治の日本〉	87
1996松濤美術館公募展	198
併催：特別陳列 浜田浜雄 シュールレアリスムの世界	182
第14回渋谷区小中学生絵画展	206
併催：特別陳列 谷中安規と料治熊太 『白と黒』の仲間たち	182

平成8(1996)年度

71 特別展 江戸の人形 祈りと遊びの世界	88
72 特別展 版画の1970年代	89
73 特別展 日本の象牙美術 明治の象牙彫刻を中心に	90
74 開館15周年記念特別展 文字絵と絵文字の系譜	91
75 特別展 女性の肖像 日本現代美術の顔	92
1997松濤美術館公募展	198
併催：特別陳列 アジアとの出会い ポルトガル現代絵画(前期)	183
第15回渋谷区立小中学生絵画展	206
併催：特別陳列 アジアとの出会い ポルトガル現代絵画(後期)	183

平成9(1997)年度

76 特別展 中山岩太 Modern Photography	93
77 特別展 久保 守	94
78 特別展 日中国交正常化25周年記念・江蘇省美術館所蔵 20世紀の中国絵画	95
79 特別展 山口蓬春 新日本画への軌跡	96
80 特別展 慈愛の造形 木喰の微笑仏	97
1998松濤美術館公募展	199
併催：特別陳列 区政施行65周年記念 区民所蔵品展	183
第16回渋谷区小中学生絵画展	207
併催：特別陳列 区政施行65周年記念 区民所蔵品展	183

平成10(1998)年度

81 特別展 イギリス工芸運動と濱田庄司 工芸家たちのユートピア1900s - 1930s	98
82 特別展 中国絵画をたのしむ 橋本コレクションを中心に	99
83 特別展 江戸の遊び絵 遊びと祝いの浮世絵の世界	100
84 特別展 児島善三郎 日本の油彩画の創造者	101
85 特別展 写真芸術の時代 大正期の都市散策者たち	102
1999松濤美術館公募展	199
併催：特別陳列 日本ペルー国交125周年・移民100周年記念展 陶芸にみるアンデスの造形美(前期)	184

第17回渋谷区小中学生絵画展	207
併催：特別陳列 日本ペルー国交125周年・移民100周年記念展 陶芸にみるアンデスの造形美(後期)	184

平成11(1999)年度

86 特別展 創作版画の誕生 近代を刻んだ作家たち	103
87 特別展 浮世絵師たちの神仏 錦絵と大絵馬に見る江戸の庶民信仰	104
88 特別展 江戸小紋と型紙 極小の美の世界	105
89 特別展 20世紀中国画壇の巨匠 傅抱石 日中美術交流のかけ橋	106
90 特別展 戦後美術を読み直す 吉仲太造	107
2000松濤美術館公募展	199
併催：特別陳列 川本喜八郎展 人形のドラマ・半世紀の軌道(前期・三国志の世界)	184
第18回渋谷区小中学生絵画展	207
併催：特別陳列 川本喜八郎展 人形のドラマ・半世紀の軌道(後期・平家物語の世界)	184

平成12(2000)年度

91 特別展 石井柏亭 絵の旅	108
92 特別展 セーヌの岸辺から 画業60年 村山 密	109
93 特別展 アラベスク文様の世界 中近東・イスラムの祈りと幻想	110
94 特別展 ZENGA 帰ってきた禅画 アメリカギッター・イエレン夫妻コレクションから	111
95 特別展 細江英公の写真1950-2000	112
2001松濤美術館公募展	199
併催：特別陳列 榎コレクション 口もととあかりの浮世絵(前期)	185
第19回渋谷区小中学生絵画展	207
併催：特別陳列 榎コレクション 口もととあかりの浮世絵(後期)	185

平成13(2001)年度

96 特別展 今純三・和次郎とエッチング作家協会 採集する風景／銅版画と考現学の出会い	113
97 開館20周年記念特別展 中国美術の精華 台北・鴻禧美術館所蔵品展	114
98 特別展 祈りと装いの「ぬの」 ミャンマー・カンボジア・タイ・ラオスの染織	115
99 特別展 眼の革命 発見された日本美術	116
100 特別展 瀧口修造の造形的実験	117
2002松濤美術館公募展	199
併催：特別陳列 新収蔵品展	185
第20回渋谷区小中学生絵画展	207
併催：特別陳列 新収蔵品展	185

平成14(2002)年度

101 特別展 雪村 戦国時代のスーパー・エキセントリック	118
102 特別展 百面のかたち 橋岡一路 能面の心と技	119
103 特別展 20世紀写真の探索 写真のモダニズム／ジャポニズム 石田喜一郎とシドニーカメラサークル	120
104 特別展 渋谷区制70周年記念 友好都市ゆかりの美術展 黒田清輝・東郷青児・菱田春草・郷倉和子など 併催：特別陳列 渋谷区制70周年記念 岸田麗子展 「麗子像」以後を生きる	185
105 特別展 生誕100周年記念展 小林秀雄 美を求める心	122

106 特別展 現代日本の水彩表現 にじみ、ぼかし、重ね、線	123
2003松濤美術館公募展	200
併催：特別陳列 2003日本におけるトルコ年 アイドウン・ドアン財団国際漫画コンクール展	186
第21回渋谷区小中学生絵画展	208
併催：特別陳列 2003日本におけるトルコ年 トルコ中央銀行コレクション展	187

平成15(2003)年度

107 特別展 武者絵 江戸の英雄大図鑑	124
108 特別展 上海博物館展 中国文人の世界	125
109 特別展 エイコ・クスマコレクション 木綿の島々 インドネシアの染織	126
併催：特別陳列 ジャワ島・スマトラ島の染織 福岡市美術館所蔵エイコ・クスマコレクションより	187
110 特別展 2003日本におけるトルコ年 トルコ共和国文化省 現代絵画展 工芸とイズニックタイル展 —伝統を今に引きつぐ魅力にせまる幻のイズニック—	127
111 特別展 合田佐和子 映像 絵画・オブジェ・写真	128
112 特別展 谷中安規の夢 シネマとカフェと怪奇のまぼろし	129
2004松濤美術館公募展	200
併催：特別陳列 村林忠写真展1932-1987(前期)	188
第22回渋谷区小中学生絵画展	208
併催：特別陳列 村林忠写真展1932-1987(後期)	188

平成16(2004)年度

113 特別展 表現者 河井寛次郎 陶芸・木彫・家具・詞	130
114 特別展 南京・江蘇省美術館所蔵 20世紀の中国水彩画 風景と詩情	131
115 特別展 瑛九 前衛画家の大きな冒険	132
116 特別展 生誕百年 安井仲治 写真のすべて	133
117 特別展 華麗なるペルシャ絨毯の世界 イラン、ミラー工房の復元作品と古典作品	134
2005松濤美術館公募展	200
併催：特別陳列 日韓現代メタルアート ジュエリーとオブジェのパレット(前期)	188
第23回渋谷区小中学生絵画展	208
併催：特別陳列 日韓現代メタルアート ジュエリーとオブジェのパレット(後期)	188

平成17(2005)年度

118 特別展 梅原龍三郎 晩年の造形と愛蔵品	135
119 特別展 會田雄亮展 変貌する陶土 練込・陶壁・モニュメント	136
120 特別展 ドラマとポエジーの画家 和田義彦展	137
121 特別展 現代を生きる青磁 中島 宏展	138
122 特別展 幻想のコレクション 芝川照吉 劉生、達吉、柏亭らを支えたもう一つの美術史	139
2006松濤美術館公募展	200
併催：特別陳列 むさしの 東松友一の写真	189
第24回渋谷区小中学生絵画展／中国小中学生絵画展	208

平成18(2006)年度

123 特別展 台湾の女性日本画家 生誕100年記念 陳進展	140
124 開館25周年記念特別展 骨董誕生 日本が愛した古器物の系譜	141

125 特別展	ポーランド国立ウッチ美術館所蔵 ポーランド写真の100年展	142
126 特別展	ISHIODORI SHOWCASE 石踊達哉展	143
127 特別展	迷宮+美術館 コレクター砂皿富男が見た20世紀美術	144
2007松濤美術館公募展		200
併催：特別陳列 渋谷区立松濤美術館所蔵品展		189
第25回渋谷区小中学生絵画展		208
併催：特別陳列 渋谷区立松濤美術館所蔵品展		189

平成19(2007)年度

128 特別展	清原啓一 遊鶏の賦	145
129 特別展	大辻清司の写真 出会いとコラボレーション	146
130 特別展	景德鎮千年展 皇帝の器から毛沢東の食器まで	147
131 特別展	Great Ukiyo-e Masters 春信、歌麿、北斎、広重 ミネアポリス美術館秘蔵コレクションより	148
132 特別展	上海 近代の美術	149
2008松濤美術館公募展		201
併催：特別陳列 岩井 敏写真展 マスケラの夢—ヴェネツィア(前期)		189
第26回渋谷区小中学生絵画展		209
併催：特別陳列 岩井 敏写真展 マスケラの夢—ヴェネツィア(後期)		189

平成20(2008)年度

133 特別展	中西夏之新作展 絵画の鎖・光の森	150
134 特別展	大正の鬼才 河野通勢 新発見作品を中心に	151
135 特別展	生誕100年記念 けとばし山のおてんば画家 大道あや展	152
136 特別展	池口史子展 静寂の次	153
137 特別展	素朴美の系譜 江戸から大正・昭和へ	154
2009松濤美術館公募展		201
併催：特別陳列 とよた真帆 絵ときもの展 すべての季、すべての宙(前期)		190
第27回渋谷区小中学生絵画展		209
併催：特別陳列 とよた真帆 絵ときもの展 すべての季、すべての宙(後期)		190

平成21(2009)年度

138 特別展	台湾の心・台湾の情 廖修平・江明賢二人展	155
139 特別展	江戸の幟旗 庶民の願い・絵師の技	156
140 特別展	生誕120年 野島康三 肖像の核心展	157
141 特別展	没後90年 村山槐多 ガランスの悦楽	158
2010松濤美術館公募展		201
併催：特別陳列 魚住誠一写真展 ブロムオイルの美学1920's-1930's(前期)		190
第28回渋谷区小中学生絵画展		209
併催：特別陳列 魚住誠一写真展 ブロムオイルの美学1920's-1930's(後期)		190

平成22(2010)年度

142 特別展	ケンブリッジ大学創立800周年記念 志村博がシルクスクリンと映像で綴る 遙かなるグランチェスター・メドー	159
143 特別展	中国の扇面画 中國美術館所蔵	160
特別陳列	エキレキリエブルアート展 色のシンフォニー	191

併催：松濤美術館 30年の記録	191
144 特別展 岡田菊恵 画業60年のあゆみ—色彩と空間—	161
145 特別展 大正イマジユリイの世界 デザインとイラストレーションのモダニズム	162
2011松濤美術館公募展	201
併催：特別陳列 平成23年所蔵品展 渋谷区立松濤美術館所蔵品展	191
第29回渋谷区小中学生小中学生絵画展	209

平成23(2011)年度

146 開館30周年記念特別展 牛島憲之 至高なる静謐	163
147 特別展 チェコ・アニメ もうひとりの巨匠 カレル・ゼマン展 トリック映画の前衛	164
148 特別展 岡本信治郎展「空襲25時」	165
149 特別展 宗廣コレクション 芹沢銈介展	166
150 開館30周年記念特別展 渋谷ユートピア1900—1945	167

開館記念特別展 森 芳雄

会期=昭和56(1981)年10月1日(木)~11月7日(土)

会場=地下1階主陳列室

併催：開館記念特別陳列 菱田春草

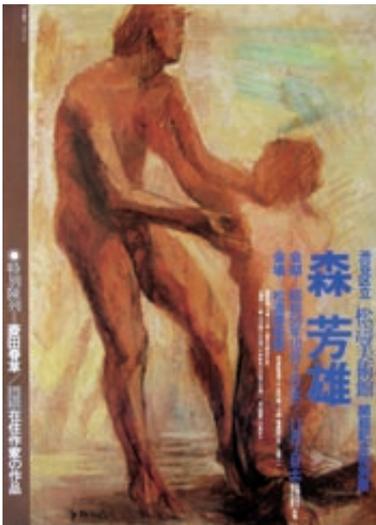
併催：開館記念特別陳列 渋谷区在住作家の作品



開館記念の特別展として開催された本展は、長年、渋谷区に在住し洋画界の重鎮として活躍されている森芳雄氏の作品を陳列した。

森芳雄氏は、明治41(1908)年に生まれ、戦後、渋谷区西原に転居し現在に至っている。1930年協会洋画研究所に入所し、中山巍の指導を受けた後、昭和6(1931)年より3年間渡仏した。「少女像」「肱つく女」はその頃の作品である。帰国後、独立美術協会展に出品するなど、渡仏時代に親交を結んだ矢橋六郎・山口薫らと作品を発表した。戦後は、自由美術協会から昭和39(1964)年主体美術協会の結成に加わり、現代日本美術展、平和美術展等の数々の美術展に出品した。

氏は、欧米の抽象絵画の盛んな時期においても、常に具象絵画の新しい開拓者として進んだ。透明感のある茶色系の肌合いと、画面の骨格をさぐる線は、重厚な作品を現出させている。回顧展としては、昭和50(1975)年東急本店で開かれて以来の企画となり、それ以降の作品も十数点陳列した。近作の動向と共にこれまでの氏の芸術を系統的に知ることでできる展観となった。



■開館記念特別展 森 芳雄
240×25.0cm B判変形 56P
カラー図版 24P
モノクローム図版 15P
「森芳雄さんの絵」 今泉篤男
作品目録/略歴

鍋島

会期=昭和56(1981)年12月2日(水)～昭和57(1982)年1月24日(日)

会場=地下1階主陳列室

併催：伊藤若冲

併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品

この展覧会は、江戸時代、肥前鍋島家の藩窯である鍋島焼60余点を陳列したものである。

有田を中心に展開した伊万里・柿右衛門・鍋島の諸窯は、染付・赤絵などの焼造をもってわが国瓷業史上重要な存在である。なかでも、鍋島焼は、藩窯として経営されたので、独特の作風と粋を尽くした技術で知られる。

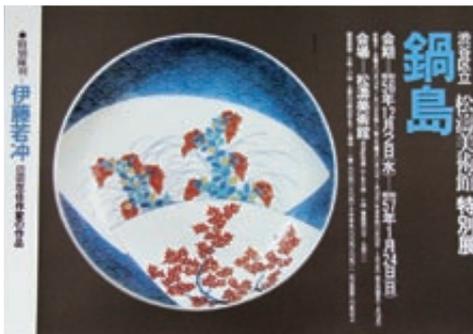
鍋島藩窯は、有田岩谷川内で寛永5(1628)年に始まるとされ、寛文年間に南川原、延宝3年に大川内山二本柳に移った。南川原以前の作品を初期鍋島、大川内山時代完成期の作品を盛期鍋島、文化年間以後衰退期の作品を後期鍋島と称し、初期鍋島・盛期鍋島ともに木盃形と呼ばれる高台の高い円形の皿が多く、口径も1尺・7寸・5寸・3寸と規格にあわせてある。

絵柄は、初期鍋島では、絵付瓷器に色釉をのせる技法、墨はじき技法を用い、盛期以上に巧妙な技術が見られる。又、色絵の場合、絵付する紋様を染付で輪郭隈取りする厳格さを見ることができる。

盛期鍋島の絵柄の特色として、中央白抜ききの構図をとるものが多く、その題材を絵本稽古帳や服飾の雛形・様本にとるなど多様で、独特の構図にまとめられていく。

本展では、初期と盛期の作品を陳列し、両期の特色を十分にうかがい知れる展観となった。

なお、当館の所在せる松濤の地名は、嘗てこの地に鍋島家の茶園があり、そこでつくられた茶の銘が「松濤」であったことに由来する。当館で鍋島焼の陳列をするというのも一つの因縁であろうか。



■特別展 鍋島
25.7×18.2cm B5判 64P
カラー図版 16p
モノクローム図版 32p
(作品解説付・矢部良明)
「鍋島焼の色絵と染付
—孤高の唯美—」 矢部良明
出品目録

三枝朝四郎50年の写真記録 アジアの人間と遺跡



会期=昭和57(1982)年2月17日(水)~4月4日(日)

会場=地下1階主陳列室

併催：特別陳列 江戸の人物画 谷信一コレクション

併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品

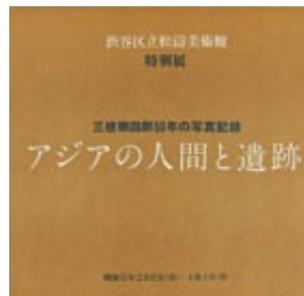
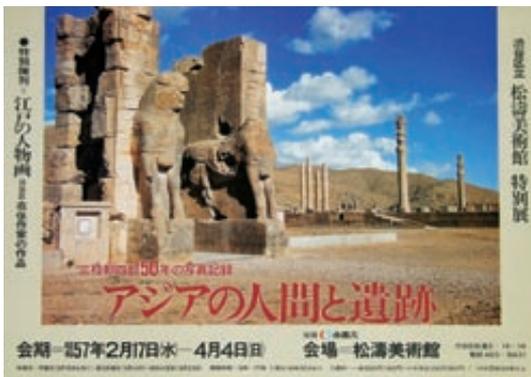
写真は、対象を捉えると同時に、撮す側の人格をも表わす。三枝朝四郎氏の写真は、あるがままの大自然と、そこに住む人々の姿を奇をてらうことなく淡々と捉え、あくまでも明るく、静かである。しかも、半世紀に亘って蓄積された写真は、そのまま、アジアの激動の歴史をも物語っている。

三枝氏は、東京で生れ育ち、4年余のロンドン留学後、昭和8(1933)年から、満洲を舞台に活動を始めた。日満文化協会主事として、奉天をはじめとする多くの博物館の創設、熱河古建築、遼の慶陵、輯安の高句麗遺跡、遼陽の漢代古墓などの学術調査、協力、美術展、出版などの文化事業に尽力した。

戦後の氏の活躍は、東京大学イラン・イラク遺跡調査団、東京大学インド史蹟調査団、ティグリス川遺宝引き揚げ事業などの調査に参加し、文化財専門の野外、遺跡写真家として、大きく貢献した。

氏の温厚篤実、明朗闊達な人柄は、多くの人々の敬愛と信頼を得、大規模な調査隊のマネージャーとして、雑多な問題の処理と調整に才能を発揮し、調査団の大黒柱的役割をも果たした。

今回の展観は、氏の生田の貴重な写真の中から69点を厳選したもので、初めて公開されたものである。トルコから中国に亘る広大なアジアの大地に散りばめられ、悠久たる時の流れの中に埋れ、生きのびた遺跡と、そこに生きる民族と人々の姿は、多くの来館者に感動を与えた。



■特別展 三枝朝四郎50年の写真記録
アジアの人間と遺跡
24.0×25.0cm B判変形 40P
「三枝さんと私」 江上波夫
「三枝さんの写真記録」 山本達郎
「インド史蹟調査行」 荒松 雄
「西アジアにおける学術調査」 深井晋司
「イスラーム世界の装飾美」 杉村棟
「三枝さんと満洲(中国東北地区)」 三宅俊成
「私の履歴書」 三枝朝四郎
出品写真リスト・地図/年表・三枝朝四郎年譜

院展の彫刻

会期=昭和57(1982)年4月28日(水)~6月12日(土)

会場=地下1階主陳列室

併設：特別陳列 琳派再生 神坂雪佳

併設：特別陳列 渋谷区在住作家の作品

日本美術院は明治31(1898)年東京美術学校(現東京藝術大学)校長を辞任した岡倉天心を中心に結成されたが、横山大観、下山観山、菱田春草等の幾多の俊英を輩出しながらも途中で立ち消えになった。大正3(1914)年横山大観が文展の審査員をはずされたことから、日本美術院を再興し、日本画とならんで付属の彫刻研究所が生まれ、第一回院展が発足した。昭和36(1961)年まで続いたこの院展の中で、本展は大正初期から昭和初期までの、いわば草創期の作品を陳列した。

平櫛田中は、高村光雲から影響を受け、気迫あふれる豪放な木彫を完成させた。やはり木彫家として大きな足跡をのこした佐藤朝山、そしてその朝山に師事した橋本平八は、気骨ある純朴な作品を制作した。一方、ロダンに傾倒し夭折した荻原守衛に影響を受けた中原悌二郎、戸張孤雁、又、ブールデルに師事した保田龍門は、西洋塑像の造形を日本において定着させた。本展では、以上の作家のほかに、吉田白嶺、石井鶴三、喜多武四郎を加えて陳列した。

これらの作家はそれぞれ個性の違いがあるにもかかわらず、それまで多く見られた伝統的あるいは宗教的なテーマから離れ、日常我々を取り巻く題材に眼を注ぎそれらを自己の内面に深く取り込んでいる。この時期の院展の彫刻をとおして、日本の近代彫刻確立期の情熱が感じられたことと思われる。



- 特別展 院展の彫刻
- 特別陳列 琳派再生 神坂雪佳
- 24.0×25.0cm B判変形 36P
- カラー図版 2P
- モノクローム図版 17P
- 「院展の彫刻」 原田実
- 作家略歴(原田実)・年表・出品目録
- 「神坂雪佳の世界」 小林忠
- 雪佳年譜/参考文献(小林忠)・
- 出品目録

恩地孝四郎

会期=昭和57(1982)年7月7日(水)~8月15日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室

併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品

日本創作版画の父、恩地孝四郎は明治24(1891)年に生まれ、昭和30(1955)年に亡くなった。日本には元々江戸時代から続く浮世絵版画の伝統があったが、恩地孝四郎は敢えてこの呪縛を解き、先ず創作方法を変え、それまでの浮世絵版画が画師、彫師、刷師三者の共同作業で行なわれていたのを全て一人でこなすようにした。次にその画題を浮世絵版画に多く見られる風俗的なものから、自己の内面に鋭く突き刺さる感情、苦悩、喜び、悲しみといったものの重視に傾け、その内容も一種のロマンチズムを濃厚に漂わせる表現、非常に抽象的、幾何学的なものに向かい、いわば日本の近代の足跡を明確に残した人となる。原色の強い浮世絵版画を見慣れた人々にとっては、くすんだ中間色のデリケートな重なりが多い恩地孝四郎の版画は理解しにくく、大衆の人気を勝ち取るにまでは至らなかったが、芸術の真髄に眼を見開いていた一部の人々から圧倒的な支持を受けていた。事実その生活は版画だけでは苦しく、その溢れる才能を本の装丁などに向け、その分野で生活の資を得ていた時期もあった。この陳列ではそれらの装丁本、その他、油絵、彫刻、オブジェなども加え、恩地孝四郎の全貌を捉えた。とにかく様々な技法による版画が試みられる昨今、主に木版で日本の版画芸術に新たな一ページを加えた恩地孝四郎の芸術に触れることは、大変有意義なことで、パイオニアとしての苦しみ喜びの大きさ深さに胸打たれることとなろう。



■特別展 恩地孝四郎
24.0×25.0cm B判変形 96P
カラー図版 24P
モノクローム図版 36P
「恩地孝四郎の芸術」 桑原住雄
「恩地先生覚え書き少々」 畦地梅太郎
出品目録・年譜・
恩地孝四郎に関する参考文献

江戸の櫛・簪

—岡崎智予コレクション—

会期=昭和57(1982)年9月7日(火)~10月24日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室

併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品

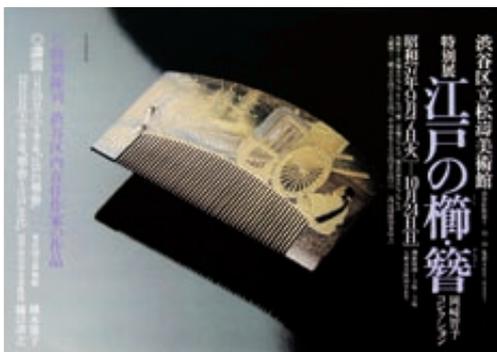


この展覧会は、渋谷区在住の岡崎智予氏が多年にわたり蒐集された櫛・簪などの髪飾りの中より、江戸期のものの二百数十点を選び陳列したものである。

所謂日本髪は、江戸時代にその型ができ、その間に、幾多の流行・変遷が見られた。それらは、基本的には前髪・びん・たば・髷などから構成され、これらの部分が統一されて美しさを示すものであった。この統一美に一役買ったのが櫛であり、簪であった。古代には宗教的意味すら持って使用された櫛・簪は、江戸時代には実用品、そして装飾品として、女性の髪を飾ったのであり、日本髪という制約のある髪型の中に、個々の女性の個性を表現するのに重要な役割を示したのである。いいかえれば、江戸女性の趣味性を最も端的に表わすのが、櫛・簪であった。

これら櫛・簪は、風俗資料として貴重であることは勿論であるが、工芸品としても優れている。木・金属・象牙などの材質に、蒔絵・螺鈿・象嵌・透かし彫りなどの装飾技法を施し、花鳥草木・風景・人物さらには南蛮風物などの種々の意匠が、可憐な形の中に描かれている。作者として、光琳に始まる琳派の原羊遊斎・中山胡民、御用蒔絵師の古満家・梶川家などの名があげられるほか、無名の工人の優れた造形感覚と技を見ることができた。

この展覧は、陳列内容の関係からも女性の入館者が多く、極めて好評であった。



■特別展 江戸の櫛・簪
—岡崎智予コレクション—
24.0×25.0cm B判変形 60P
カラー図版 32P
「櫛とわたしの人生」 岡崎智予
「櫛・簪について」 橋本澄子
髪と櫛、簪各部名勝・出品目録
出品目録・作家略歴／
技法・主要参考文献

19世紀のヨーロッパの染織・デザイン —亀井茲明コレクション—

会期=昭和57(1982)年11月16日(火)～昭和53(1983)年1月23日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

共催=社団法人霞会館

併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品

「亀井コレクション」は、旧津和野藩主亀井茲明伯爵が、主にドイツで蒐集された六千余点の染織・図案の集大成である。

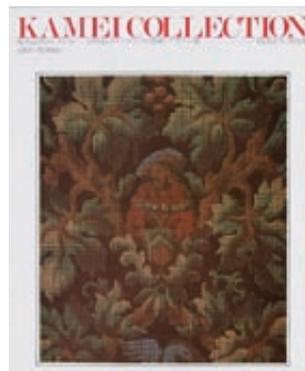
亀井伯爵は、明治中期にイギリス、後に、ドイツへ留学し、当時の日本人としては珍しい美学美術史を学んだ。帰国後は、自ら建築の設計、「美術論」の執筆などを行い、美術界に於けるその後の活躍が期待されたが、日清戦争従軍後、36歳で夭折した。

亀井伯爵が留学された頃のヨーロッパは、産業革命の進展、中産階級の胎頭など数々の社会変革が起り、それまで富裕層に独占されていた高価な染織品が、一般市民層の需要にも答えて大量に生産されるようになっていった。植民地からの安価な原料輸入、織機の改良捺染機、人工染料の発明などが、それを可能にしたと同時に、オリエントのカーペット、東南アジアの更紗などの文様をヨーロッパのデザインの中に混合、消化して、次々と斬新で活力溢れるデザインがフランスを中心に産み出されていった。

現在、非常に貴重な資料となったこれらの染織・デザイン蒐集に着眼した亀井伯爵の先見性と、質のよい作品を選び抜いた識見の高さが窺われる。これらの染織品は、亀井伯爵のヨーロッパでのもう一つの蒐集品、美術図書と共に、現在、東大図書館に所蔵されているが、それらの中から染織、壁紙、デザイン画、捺染布等計142点、貴重図書19点を陳列した。加えて、自筆油絵、カメラ等も合わせて展示し、亀井伯爵の活動の全貌が窺えるよう配慮した。

今回の企画は、テレビにもとり上げられ、女性層、デザイン関係者を中心に、全国的な反響を得た。

今日のデザインの繁栄の直接的な礎となった19世紀ヨーロッパの染織、デザインの華麗にして多様な広がりや豊さを、再認識する好機となったことと思われる。



■特別展 19世紀のヨーロッパの染織・デザイン
—亀井茲明コレクション—
27.5×21.0cm A4変形判 67P
カラー図版 56P
美学美術の魁・亀井茲明
「亀井コレクションの現代的意義」 北村哲郎
コレクション図録索引・年表

山口 薫

会期=昭和58(1983)年4月12日(火)~5月29日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室



この展観は山口薫の作品93点を陳列した。

山口薫の代表的作品を軸に選定した。各時期の重要な作品、典型的な作品は殆んど選んだが、若干初期の作品が少ないのが残念であった。会期を前期、後期と二度に分けて陳列替えをし、可能な限りの作品を陳列した。死去した後の昭和44(1969)年の京都国立近代美術館、昭和50(1975)年の群馬県立近代美術館での大規模な回顧展には及ばないものの、油彩画68点、デッサン25点の陳列は初期の東京美術学校在学時から最晩年までの作品を網羅した、近年では系統的に見ることのできる貴重な展観であった。

初期の渡仏から自由美術家協会に参加した時期には「緑衣横臥婦人像」にみられるフォービックな大胆な色彩、筆触で力強い画面を創り、次第に抽象化していった生涯にわたる画業の骨子を作り上げた。戦後は「十和田紀行」「季節の哀歎―田圃と鳥―」「田園詩」といった盛期の代表作を次々に発表すると共にモダンアート協会を結成し、戦後美術の牽引車の役割を果たした。晩年には「月と土産子」「金環色の若駒」など視点を地平線から高く天空に向けた作品が多くみられる。

平面を構成する色面、奥行を象徴する独特な菱形、空間感を表出する色彩、これらが一つに相俟って上昇する力に裏付けられ統一されている。

山口薫の芸術の特色は他の多くのすぐれた作品がそうであるように、その時代の一典型を示したことである。ヨーロッパの近代絵画の造形を日本的に消化し戦後のモダニズムを表現した。写実と抽象化の中を振幅し独自の叙情性を融合した作品は、その後の洋画界に多大な影響をもたらした。



■特別展 山口薫
25.0×25.0cm B判変形 86P
カラー図版 24P
モノクローム図版 36P
「山口薫の画業」 桑原住雄
出品目録・主要文献

台湾高砂族の服飾 —瀬川コレクション—

会期=昭和58(1983)年6月21日(火)~8月14日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室
併催:特別陳列 渋谷区在住作家の作品



台湾は九州ほどの大きさの島であるが、その地形はまことに複雑で、起伏に富み、三千メートル以上の山々が数多く連なっている。亜熱帯に属するにもかかわらず雪が降る所もあるというように気候、風土はきわめて変化に富んでいる為、各地域ごとに独自の文化が育まれてきている。この島に最も古くから住んでいたのが高砂族とよばれる人々である。高砂族は言語、習俗などの違いにより、タイヤル族、サイセット族、ブヌン族、ツォウ族、ルカイ族、パイワン族、ブユマ族、アミ族そして紅頭嶼の島にすむヤミ族などの9種類に加え、平地居住の平埔族などに大きく分類される。本展出品の染織品はこれら10種族の女性達が日常の生活の中で織り上げた長衣、上衣、腰巻、褌、帯などを中心として構成されている。中でも、袋と装飾を兼ねた衣服であるツォウ族の胸当、珠裙といわれる貝を切つてぬい付けたタイヤル族の祭礼用衣服などは高砂族独自の衣服として注目される。更に、足飾、耳飾、帽子、入墨用具、大陸から伝えられたビーズやガラス製品などは、民俗学、考古学資料としてまことに興味深い資料となっている。

本展出品の作品はヤミ族の研究家として知られる渋谷区在住の瀬川孝吉氏が、戦前、台湾滞在中に現地で直接入手されたもので、現在では入手困難な品々となっている。高砂族の赤を基調とした大胆で斬新なデザインは、今日にも通じるものとして大きな反響を呼んだ。更に、日本文化の源流の一つとして東南アジア、太平洋地域の文化が脚光を浴びている現在、その要としての高砂族の物質文化の一端を紹介した本展の意義は大きい。



■特別展 台湾高砂族の服飾
—瀬川コレクション—
24.0×25.0cm B判変形 96P
カラー図版 24P
モノクローム図版 48P
「私の台湾土俗品」 瀬川孝吉
「台湾高砂族の生活と文化」 宮本延人
台湾高砂族分布図・出品目録・
用語解説・参考資料
主要参考文献・高砂族戸口調査

明治文学とランプ

—榎コレクションを中心に—

会期=昭和58(1983)年9月6日(火)~10月23日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室

併催:特別陳列 渋谷区在住作家の作品



うす暗い街燈や蠟燭から、明るいランプに移る明治時代、それは、庶民にとり、最も身近に感じられる新しい日本の夜明けだった。そして、明治一代の間に、石油ランプ・瓦斯燈・電燈へと燈火は急速に発達する。

明治初期には、江戸時代にひきつづき、燈火の主流は、燭台・行燈であり、さらに貧しい燈火として「ひで」と呼ばれる松の根などを燃やすひでばちなどが用いられ、旅行用には小田原提燈・懐中燭台などが使われた。

そして、この頃、油を用いる日本独自の燈火器として、田中久重・大隈源助が発明した無盡燈と呼ばれる一種のランプがあった。しかし、これらの燈火器は、石油ランプの登場により漸次駆逐されていった。芥川龍之介の『籬』という小品に、「その晩の夕飯は何時もより花やかな気がしました。それは申す迄もございません。あの薄暗い無盡燈の代りに、今夜は新しいランプの光が輝いてゐるからでございます。兄やわたしは食事のあひ間も、時々ランプを眺めました。石油を透かしたガラスの壺、動かない焰を守った火屋—さう云ふものの美しさに満ちた珍らしいランプを眺めました。」とある如く、ランプの明るさは、それ自体が美であり、驚きでもあったのだ。このランプも、当初は輸入されていたが、国内での製造が可能になると、日本の生活様式や和室に適した行燈ランプ・竹台ランプ・箱台つきランプなどの独自の工夫も加えられていったのである。また、欧米よりもたらされた美しいガラスの笠をもったランプが上流の人々の間にもてはやされ、それを模した日本製の笠が作られるなど、近代硝子工業の興起にも、ランプの与えた影響は大きかったといえる。

この石油ランプを並行する形で、瓦斯燈が用いられた。その青白い光は、北原白秋・芳井勇らにより詠いあげられたのである。しかし、瓦斯燈の命は短かく、明治11(1878)年のアーク燈の試験点燈の成功に始まる電燈の普及により、瓦斯燈はそのシェアを漸次奪われ、明治末のタングステン電球の発明により、その使命は終わり、以後、今日に至る電燈の時代となったのであった。

本展では、渋谷区在住で、照明文化研究会会員・米国Rushlight Club会員として、照明文化の研究に活躍される榎恵氏が、多年にわたり蒐集された明治期に使用された各種の燈火器、行燈・提燈からカンテラ・ランタンそして国内外で製作された各種のランプ、そして瓦斯燈を中心に、がす資料館・電球工業会などの協力を得て、明治一代の燈火の歴史を概観することができ、燈火器の生活美術としての一面をうかがい知るものとなった。陳列会場には、四つの時期に分けて、燈火器の使用状況を復原するとともに、漱石・鷗外らの文学作品に見られる燈火器の描写をパネルで紹介し、また、小林清親・井上安治・川上澄生らの燈火器を描いた版画を陳列し、当時の文学者・芸術家たちが、如何に燈火に関心を抱いたかを示した。これら文学者・芸術家達が燈火に対して抱いていた関心、それは、燈火の美しさを知りえた明治人であったから持ちえたのだと思われる。



■特別展 明治文学とランプ

—榎コレクションを中心に—

24.0×25.0cm B判変形 64P

カラー図版 12P

モノクローム図版 24P

「明治のあかり—

文学を通してみた燈火の変遷」

榎 恵

出品目録・明治期のランプ・瓦斯燈・

電燈の比較年表

「主要参考文献・石油ランプの構造」

榎 恵

辻 晉堂

会期=昭和58(1983)年11月15日(火)～昭和59(1984)年1月15日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



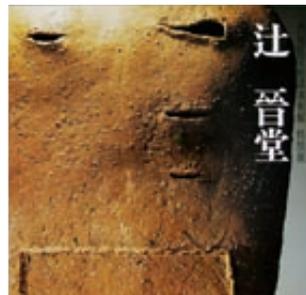
辻晉堂(明治43(1910)年-昭和56(1981)年)は、鳥取に生まれ、昭和6(1931)年上京、翌年独立美術研究所に入る。昭和8(1933)年日本美術院展に塑像「千家元麿氏像」を出品、その後毎年院展に出品を続けるが、途中から木彫を試み、「出家」「婦人像」等により注目を集めた。その木彫作品は、平櫛田中をして「人材欠乏の木彫界の将来、辻を置いて他に期待すべき木彫人はない」といわしめた程のものである。直彫(石膏等の原型を使わず、直接木材に向い、彫り上げていくやり方)が多く、そこに木彫独自の表現を行った。「詩人(大伴家持試作)」「琵琶を弾く男」等も代表作である。作風は新鮮ながらどこか古拙美を帯びたものであり、当時の彫刻界に新風を吹き込んだものであった。

昭和25年頃から次第に抽象表現に傾き、やがてそれは独自の陶彫世界に結実する。昭和31(1956)年丸善の個展で「跼々跼々」「顔(拾得)」「猫の頭」「禁煙(禁煙の名人)」等の陶彫作品を発表し、人々に多大な衝撃を与えた。陶彫作品は昭和32(1957)年サンパウロ・ビエンナーレ、昭和33(1958)年ベニス・ビエンナーレに出品される。「沈黙」「馬と人」「牡牛」「巡礼者」等の大作を仕上げ、陶彫作家としての基盤を着実に固めて行った。一方、木と鉄を組み合わせた「詩人(これ我かまた我に非ざるか)」、鉄の「寒山」「歩く壁」等も発表する。

テーマは時代に密着した「オバQ」「詰込主義教育を受けた子供」「イタイ・イタイ」もあるが、禪に心酔したことのある辻晉堂は、やはり禪にどこか関連のあるものを好み、俗を嫌い古典に親しむ精神世界は絶えず時代を批判し続けた。

晩年は自称「粘土細工」なる作品を作り続けるが、これは彼自身の言葉「私が現在やってゐることは、『粘土細工』を焼いたものに過ぎないし、力み返って彫刻だ芸術だと云ひたてる必要はない。」で表わされるものである。

永年、京都市立芸術大学において教鞭を取ったが、その妥協の無い作品と、情熱溢るる人柄は様々な分野の人々からも愛され続けている。



■特別展 辻 晉堂
24.0×25.0cm B判変形 84P
カラー図版 24P
モノクローム図版 24P
「辻晉堂小論」 三木多聞
「晉堂断章」 堀内正和
出品目録・年譜・主な参考文献・
辻晉堂執筆文献
主な野外彫刻・モニュメント

橋本コレクション 中国の絵画 一明・清・近代一

会期=昭和59(1984)年4月10日(火)~5月27日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室

併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品



橋本コレクションは、橋本末吉氏が、賞鑑家・研究者としての卓越した識見をもって蒐集された中国絵画のコレクションであり、国内外に高い評価を受けている。本展では、橋本コレクション700余点の中から、明末清初を中心に140点余を列した。

明代、漢民族文化復興政策のもとに再興された画院で活躍した邊文進・石銳・王誨・朱端は、宋代画院の伝統を受け継ぎ、皇帝に供奉した。この画院画家の一人戴進は、南宋院体を基調に李郭派を学び水墨をもって雄渾な山水を描いたが、その筆墨法には粗放狂逸ともいえる一面があり、それが呉偉や張路に受け継がれ、後代浙派と称される職業画家のスクールが生まれた。浙派は末流になると、技術としての筆墨法のみが強調され、表現内容と乖離し、呉派系文人画家達から狂態邪学との批判を受け、浙派から人材の供給を受けていた画院とともに明代中葉には衰退していった。

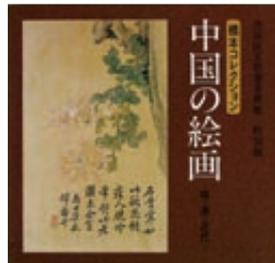
文人画は、元末四大家により確立され、明初にはやや低調であったが、蘇州の経済的繁栄を背景に沈周・文徵明がでて、呉派文人画として方向づけられ、松江の董其昌により理論的にも完成された。

文化的爛熟期を迎えた明末には、その政治的混乱を反映するかの如く、尚古越味やデフォルメをもって描かれたエキセントリック絵画が、呉彬・丁雲鵬らにより描かれた。また、八大山人・石濤らの明の遺民は、清朝の異民族支配に抗して、自由かつ個性的な画を残した。正統的の文人画の伝統が四王呉によって受け継がれる一方で、明末清初の都市経済の発展を背景に、松江・金陵・揚州・杭州・新安などに独自の画風が成立した。

そして、乾隆年間には、揚州に、金農・鄭板橋らの揚州八怪がでて、文人画本来の精神に立ち返り、四王呉以来の伝統的形式主義に墜ちいていた文人画に新風を吹き込んだ。

阿片戦争以後、絵画の中心は、新興都市上海に移り、呉昌碩・任伯年らが活躍し、やがて、民国になると、国画という様式が完成されるに至った。

本展では、明初より現代に至る中国絵画の流れが、作品を通して概観しうものとなった。これも、橋本コレクションの優れた点といえよう。但し、作品保護のため、会期を三期に分けざるを得なかった。全作品を一度に陳列しえたならと思う次第である。



■特別展 橋本コレクション
中国の絵画 一明・清・近代一
24.0×25.0cm B判変形 132P
カラー図版 24P
モノクローム図版 60P
「南山の如く、欠けず崩れず」
古原宏伸
「任伯年と黄賓虹
—近代絵画への転回点—」
鶴田武良
出品目録明・清・近代の
「中国絵画の流れ」 味岡義人
中国江南要図・画人略伝・
主要参考文献・年表

ガラス絵 —ヨーロッパからアジアへの流れ—

会期=昭和59(1984)年6月19日(火)～8月5日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室
併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品



ガラス絵は透明な板ガラスの裏から絵具を重ねていくという特殊な技法をもつ絵画である。一般的に普及している名称とは言いがたく、ステンド・グラスなどと混同されることが多かった。その意味でも貴重な展観であった。

佐藤春夫は「永久に新鮮な骨董」としてガラス絵の新しい評価をした。岸田劉生もこのガラス絵を数点蒐集していたと言われており、我が国でもその芸術性が徐々に評価され愛蔵されることが少なくない。明治末期から大正にかけて伝統的なガラス絵は姿を消し、小出楯重が現代作家としてガラス絵を制作して以来、現在は油絵作家により創作の一部として制作されている。

江戸末期、日蘭、日中貿易の交易品として長崎の出島を通して紹介されたガラス絵は、油絵具の光沢のある質感、写実的な表現になる明暗法、遠近法により、西洋絵画の特色を示すものとして珍重され受け入れられた。銅版画家の司馬江漢、さらには葛飾北斎らも興味を持ったと言われていた。同時期に生まれた遠近感のみ強調された透視図法で描かれた眼鏡絵や、油絵具を日本古来の顔料で表現しようとした泥絵などと共に、明治前期に本格的に始まった油彩画の前史となっている。

今回の展観には技法、題材を地域・時代において比較し易いようガラス絵だけの陳列とし、日本で制作されたものばかりでなく、ヨーロッパ、中近東、インド、インドネシア、中国のガラス絵を約100点陳列した。中部ヨーロッパに起源を持つこのガラス絵がやがてヨーロッパ全域に拡がり、東西貿易により中近東を経てアジアに伝播された。その内容は多岐にわたり、地域に根ざした様々の図像が展開され“ヨーロッパからアジアへの流れ”という副題が指すように伝播の東漸を辿る形となった。

民衆の中で生まれ、周辺の技法を摂取しながら発達し、サブカルチャーとして生き続けた素朴な美しさを充分鑑賞することが出来たことと思う。



- 特別展 ガラス絵—ヨーロッパからアジアへの流れ—
24.0×25.0cm B判変形 100P
カラー図版 12P
モノクローム図版 38P
「硝子絵—そのコンセプトとマテリアル」 佐々木静一
「ヨーロッパ硝子絵の技法とアジアの硝子絵技法について」 平井達郎
「東洋ガラス絵の種々相—発生・技法・伝播・意義—」 金原宏行
出品目録・主要参考文献

山脇洋二 金工の世界

会期=昭和59(1984)年8月28日(火)~10月21日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室

併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品



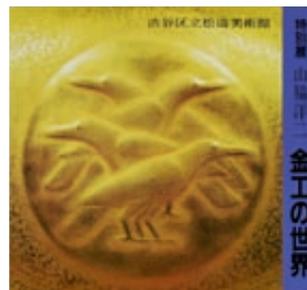
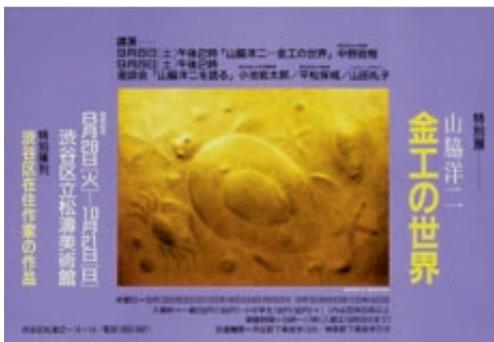
山脇洋二(明治40(1907)年-昭和57(1982)年)は、永年東京藝術大学教授として後進の指導にあたりと共に意欲的な作品を創造し続けた。彫金家としての山脇洋二は、大正14(1925)年東京美術学校彫金部に入学したことに始まる。在学中の昭和2年金工芸界への革新を標榜する北原千鹿の主宰する「工人社」の創立に参加する。

昭和5年東京美術学校を卒業、卒業制作の『犬置物』は斬新な感覚の横溢しているもので、形姿を簡略化し犬の特長をとらえて誇張した作品であった。

昭和8(1933)年東京帝室博物館に入り6年間古典彫金の模索を手がける。模刻作品として国宝『狩獵文銀小壺』(東大寺蔵)国宝『迦陵頻伽文華鬘』(中尊寺蔵)等がある。その一方毎年帝展・新文展に意表をつく発想で新感覚の力作を発表し、次々と受賞する。例えば昭和13(1938)年第2回新文展出品の『銀竜文亀置物』は、動物を写實的にあらわさず頭だけを出し手や足を省略することで、亀の柔和な感じを出したものである。

戦後昭和21(1946)年第2回日展出品の『舞御堂小箱』、第3回日展出品の『蜥蜴文硯箱』など一作一作が新鮮な感覚を持ち多くの注目を集めた。

昭和32(1957)年第13回日展には『金彩馬額』を出品する。一枚の大きな銅板を荒々しく鋳出して奔馬を浮彫風に表現し、表面全体に金銷しをかけて金彩としたものである。これ以後『金彩誕額』『金彩游砂額』とこの手法の作品を続けて出品する。作品のテーマも馬・牛・蝶・亀・蟹等の動物の世界、誕生等の生喜の世界、金鶏・八咫鳥、白兔等の神話の世界、阿修羅、持国天・曼陀羅等の仏教の世界、踊る・奏でる等の古代埴輪の世界というように色とりどりであり、銅板の中にその想を広げていった。これには一種の平和な明るさがあり、山脇洋二最後の到達点であったといえよう。



■特別展 山脇洋二 金工の世界

24.0×25.0cm B判変形 72P

カラー図版 12P

モノクローム図版 36P

「山脇洋二金工の世界」 中野政樹

「山脇洋二先生追想」 末田利一

出品目録・略歴

戸栗コレクション 有田の染付と色絵 —伊万里・柿右衛門・鍋島—

会期=昭和59(1984)年11月13日(火)～昭和60(1985)年1月20日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室
併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品



17世紀初頭の肥前有田郷において、磁器の焼造が始められたことは、日本陶磁史上の画期的な事件だった。

そして、中国に生まれた染付・色絵の技法が、この地で独自の展開をとげ、伊万里・柿右衛門・鍋島という様式を生み出し、さらには、17世紀後半、オランダ東印度会社の手により、中国磁器に代るものとして、ヨーロッパ各地に輸出され、彼地の王侯貴族を中心に愛好され、ついには、ヨーロッパ各地の窯業の発達にも大きな影響を与えたのである。

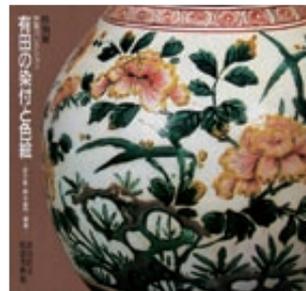
本展では、渋谷区在住の戸栗亨氏が多年にわたり蒐集された陶磁器の中から、初期伊万里・古伊万里・柿右衛門・鍋島という有田で焼造された各様式の磁器108点を陳列した。

出品作の中には、李朝染付と酷似する「染付面取徳利」の如く、有田磁器の創造に力あった李朝陶工の望郷の思いをうかがわせる初期伊万里の作、或いは、宣徳青花に類似する「染付唐花文扁壺」、そしてオランダ東印度会社の略号V.O.C.を染付で描いた「染付二果文皿」など、鎖国時代にもかかわらず、朝鮮・中国・日本・オランダという広範囲にわたる文化交流を如実にうかがわせる各種の染付の名品があり、また、元禄時代の華やかな商人文化の一端をうかがわせる、「色絵寿字宝尽文鉢」「色絵荒磯文鉢」などの型物伊万里の代表作がある。

一方、鍋島藩の御用窯で作られた鍋島焼は、藩主の御用・将軍家や諸大名への献上品として作られたために染付・色絵の技法を駆使し、高い気品、今日に通用するすぐれたデザインを有し、中国の官窯とは一味違った完成度を示している。

また、出品作の中には、嘗ては古九谷とされていた「色絵牡丹文瓶」や錆地の皿など、伊万里と九谷の関係を考える点でも、興味深いものになったと考える。

本展を通して、有田磁器の系譜が一応概観しえた点、個人コレクションという制約がありながらもそれが可能であったことは、戸栗コレクションの一つの特長として評価しえるものと考えられる。



■特別展 戸栗コレクション有田の染付と色絵
—伊万里・柿右衛門・鍋島—
24.0×25.0cm B判変形 108P
カラー図版 24P
モノクローム図版 48P
「江戸前期の日本の磁器」 林屋晴三
「戸栗コレクションに見る貿易陶磁」 西田宏子
出品目録・有田陶磁関係年表・伊万里窯址分布図
主要参考文献

19世紀アメリカインディアンの染織 バーラントコレクション・ナバホブランケット

会期=昭和60(1985)年4月2日(火)～5月19日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロン・ミュージーゼ、特別陳列室
共催=町田市立博物館、下関市立美術館、日図デザイン博物館



アメリカインディアン・ナバホ族は、北アメリカ南西部に住む部族であるが、彼等の織り成すブランケットは斬新なデザインと鮮やかな色彩で有名である。本展はアメリカ在住のコレクター・アンソニー・バーラント氏の所蔵にかかるナバホブランケットを展覧したものであるが、日本で見ることの稀なナバホブランケットの全貌を把えたことは有意義であった。ナバホブランケットそのものが、近隣のプエブロ族から教わった技術を基にしたものであり、その製作時期も比較的新しく、本展も19世紀のもものが中心となっているが、このわずかな期間に様様に変貌したナバホブランケットのデザインと色彩には、興味の尽きない魅力を感じる。

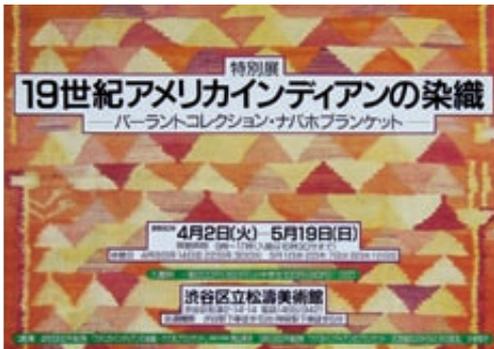
本展には、先述したとおりの、ナバホブランケットに影響を与えたプエブロインディアンの織物も4点陳列したが、他は大小各種のナバホ族のブランケット、ラグなど47点を陳列した。

その特異な色彩は、時には植物染料、他には化学染料と社会状況の変遷につれて対応して行くのだが、材料である羊毛も、工業の進化と共にサクソニー、ジャーマンタウンなどがもたらされ、双方が刺激し合い、独自の風格のあるブランケットを作り上げていったのである。

ここで、ナバホブランケットの代表的なものを2点を紹介しておく。

“アイダズラー” (目眩し模様) …1870年代末までに化学染料が導いた、その名のとおり目映いばかりの赤や原色の織り成すスタイル。原色で細い、機械生産のジャーマンタウンの糸の出現が、このスタイルに一役かっている。一定間隔に繰り返す鋸歯状線や、三角形と組合せた菱文様が主要モチーフとなる。

“ウェッジウィープスタイル” (くさび織) …緯糸を経糸に対して、直角でなく斜めに織り入れる技法。緯糸が縞柄で角度をつけて一方的にならぶ段と、その逆方向にならぶ段とが交互に繰り返し、縦方向ジグザグの縞模様となることが多い。織耳は直線にならず、経糸に力がかかり蛇行線になるのが特徴である。



■特別展 19世紀アメリカインディアンの染織
バーラントコレクション・ナバホブランケット
24.0×25.0cm B判変形 80P
カラー図版 48P
「メッセージ」 アンソニー・バーラント
「ナバホの染織とその背景」 小谷凱宣
出品目録・用語解説・
主要参考文献

中近東遊牧民の染織 —松島コレクション—

会期=昭和60(1985)年6月11日(火)~7月28日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



西はトルコから東はアフガニスタン、パキスタンに至る中近東の国々は、古くから家畜を飼育し、牧草を求めて移動する遊牧民の活躍した舞台であった。近年、遊牧民の生活形態は消えつつあるが、今もなお、その一部は苛酷な風土の中で生き続けている。移動と自給自足の生活を基本とする遊牧民は、自ら飼育する家畜の毛を利用して生活用品の大部分を織物で作ったといっても過言ではない。動く家屋としてのテントから、カーペット、衣類、袋物など生活のあらゆる細部にまで部族独自の文様で織られた織物が使用された。このように遊牧民の染織品は、彼らの生活形態、文化、美意識の集約されたものといえる。

本展のコレクションは、医師である夫とともに、北インド、イラク、ナイジェリアなどで長年生活された松島きよえ氏が、現地の遊牧民を積極的に尋ね歩き、直接収集された貴重な染織品の中から選び構成したものである。10ヶ国、13部族の敷物を中心にテント用具、袋類、帯、装飾品など100点余りを陳列し、実際の暮らしの中での使われ方を理解できるように、パキスタンのプロイ族のテントを基本に構成してテント内部の様子に分るようにした。

本展の見どころの一つは、商業用の華やかなパイル織カーペットではなく、遊牧民が本来生活に使用していたフラット・ウィーグ技法の敷物の優品ならびにハザラ族のフェルトなど日本ではほとんど紹介されたことのない作品を数多く展示した点にあり、日本での初めての本格的な展示となった。染織品に対する知識と関心が深まりつつある日本において、長い歴史を持つ中近東遊牧民の染織品の本格的な展示は、大きな反響を呼び多数の来館者を記録した。



■特別展 中近東遊牧民の染織 —松島コレクション—

24.0×25.0cm B判変形 116P

カラー図版 24P

モノクローム図版 49P

「アジアの敷物」 山辺知行

「遊牧民の生活と織物—旅日記より」 松島きよえ

「遊牧民の染織にみる織物の技法と歴史」 小笠原小枝

出品目録・中近東遊牧民の染織関連地図・

中近東遊牧民の民族解説・主要参考文献

メトロポリタン美術館所蔵 ジャクソン・ポロックの素描

会期=昭和60(1985)年8月20日(火)~9月29日(日)

会場=地下1階主陳列室

共催=東京新聞

併催：特別陳列 伊藤隆康



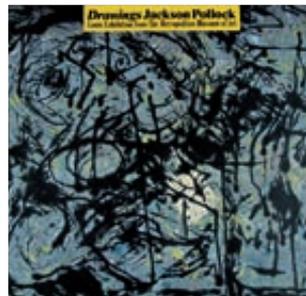
ポロックはアメリカ現代美術を代表する画家で、抽象表現主義の代表的存在として活躍した。

1912年ワイオミング州コディに生まれ、1930年よりニューヨークのアート・スチューデント・リーグに学んだ。そこでは“地方主義”の写実画家トーマス・ベントンに師事する。この頃のニューヨークではピカソを始めミロ、カンディンスキーらのヨーロッパの前衛芸術が盛んに流入しており、一方、“地方主義(レジオナリズム)”などのいわゆる“アメリカン・シーン”の作家群があり、一種混沌とした状況であった。1938年からニューディール政策の一環としての連邦美術計画に雇われ、シケイロスの「実験工房」に参加した。ここでの壁画制作はポロックに大画面での制作を示唆するとともに、新技法に接する機会でもあった。1943年「今世紀の美術」画廊で最初の個展を開催する。40年代には少年時代を過ぎた西部の記憶-インディアンの砂絵や、神話からのヒントを得た作品を描いた。

1947年ポロックは初めてのドロッピングの技法による作品を描く。床に敷いた巨大なキャンバスに流動的な絵具でドロッピングし、文字どおり“絵の中に入って”制作する状態であった。評論家ハロルド・ローゼンバーグはこれを「アクション・ペインティング」と命名し絶賛した。ポロックのこうした芸術の誕生に大きな影響を与えたのは、40年代に大戦を逃れてアメリカに亡命してきた、アンドレ・ブルトン、エルンスト、ダリ、マッソンのシュールレアリストたちであり、無意識世界の探究から主題を引きだそうとするシュールレアリスムの理論であった。壮大な宇宙空間ともいえるポロックの絵画は、一面、精神内奥にあるカオスの表現でもあった。

1956年、イースト・ハンプトンで自動車事故のため死去。激的な生涯を閉じた。ポロックはその短い生涯にもかかわらず、抽象表現主義の中心的作家としての役割を果たし、アメリカ絵画の地位を国際的なものまで押し上げ、以後のいわゆる“アメリカ型絵画”を決定した。

本展はポロック夫人であるリー・クラズナーが1982年にニューヨーク・メトロポリタン美術館に寄贈した貴重な素描の中から34点を選び初公開陳列したものである。なお、参考出品として日本国内に所蔵してあるタブロー作品3点を陳列した。



■特別展 メトロポリタン美術館所蔵

ジャクソン・ポロックの素描

24.0×25.0cm B判変形 78P カラー図版 36P

「ジャクソン・ポロック画家の素描について」 ウィリアム・S・リーバーマン

「ジャクソン・ポロックの芸術」 木島俊介

「アクション・ペインティングとパフォーマンス」 南條史生

「ジャクソン・ポロックの素描技法」

マーガレット・ホールベン・エリス、アイダ・バルボウル

「ジャクソン・ポロックの生涯」 木島俊介

作品目録・主要参考文献

渋谷区・パリ市六区文化交流協定成立記念特別展 パリ市六区の三美術館所蔵 エベール・ドラクロワ・ザッキン —エベールの絵画初公開—

会期=昭和60(1985)年11月3日(日)~12月8日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュゼ、特別陳列室
主催=渋谷区、パリ市六区
後援=外務省、フランス大使館、国立エベール美術館



本展は渋谷区とパリ市六区との文化交流協定締結を記念して、パリ市六区に所在する三美術館、国立エベール美術館、国立ドラクロワ美術館、パリ市立ザッキン美術館の作品を陳列したものである。パリ市六区は、パリ市中央部、セヌ川南岸にあり、リュクセンブル公園、美術学校、各種の美術館など、文化施設が多い区である。

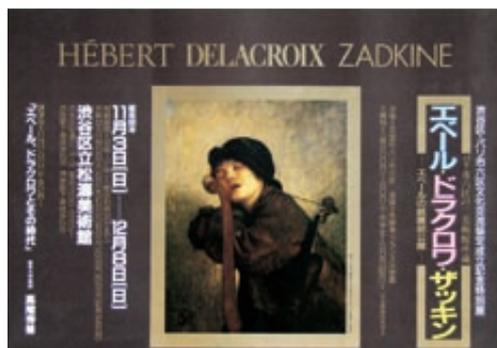
渋谷区は、パリ市六区との友好関係を深めていたが、昭和60(1985)年の5月に、正式に両区間の文化交流協定を締結した。

エベール美術館からは、油彩13点、水彩18点、デッサン32点を陳列した。エルネスト・エベールは、19世紀フランス・アカデミーの代表的な画家で、フランス市民文化が爛熟した19世紀後半に、品格ある夢みるような女性を描く肖像画像としてパリ市民の間に名声を馳せた。エベールは若くしてローマ大賞を受け、ローマのフランス・アカデミーで学んだ。帰国後、彼はパリの画壇で歴史画家、肖像画家としての地位をゆるぎないものにしていった。彼は二度にわたりローマのフランス・アカデミーの校長を務め、生涯の通産三十年間をイタリアで過ごし、後進の教育にあたった。本展では、イタリアの農民や風景を描いた多数のデッサン、水彩、油彩作品、そして肖像画家としての力量を示す「眠るバイオリン弾きの子供」などの人物画、さらに「聖女マルガレーテ」のような象徴派風の作品などが出品され注目された。

ドラクロワはフランス・ロマン派の巨匠であるが、本展は、ドラクロワ美術館所蔵のリトグラフ、書簡など9点、ドラクロワ友の会から、デッサン類4点、弟子の作品2点を加えて陳列した。

ザッキンは立体派の彫刻家として、現代彫刻界に大きな足跡を残している。「オルフェ」「三美神」など彼の代表的な彫刻のブロンズ小品8点に加えて源氏物語から題材を得た「ゲンジ」などのタピスリー2点、版画7点を出品した。

本展は、パリ市六区の三美術館所蔵の優品が公開され、特に、サロンの画家エルネスト・エベールの絵画が日本で初公開されたことは、世界的にアカデミーの画家の再評価の動きが起っている現在、専門家の注目を集め評価され、又本展は開館以来の最高入場者数を記録した。



■渋谷区・パリ市六区文化交流協定成立記念特別展
パリ市六区の三美術館所蔵 エベール・ドラクロワ・ザッキン
—エベールの絵画初公開—
24.0×25.0cm B判変形 92P
カラー図版 24P モノクローム図版 36P
「メッセージ」天野房三、ピエール・バス
「エベール美術館とエベールの作品」イザベル・ジュリア
「ドラクロワ美術館とドラクロワの作品」アルレット・セリユラス
「ザッキン美術館とザッキンの作品」コリー・クロード・ダン
出品目録・エベール略歴・ドラクロワ略歴・ザッキン略歴

美とわざとのハーモニー 19世紀末ヨーロッパの捺染布 亀井茲明コレクション

会期=昭和60(1985)年12月24日(火)～昭和61(1986)年2月2日(日)

会場=地下1階主陳列室

共催=社団法人霞会館

併催：受贈記念特別陳列 村田勝四郎の彫刻



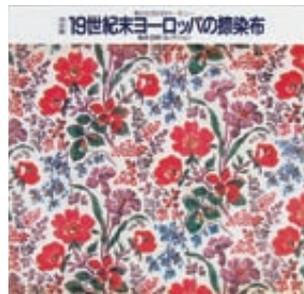
亀井コレクションは、明治中期、当時海外留学生としてドイツに赴いた旧津和野藩主亀井家第13代亀井茲明伯爵が、現地で美学美術研究の一環として蒐集した染織を中心とする図案資料の集大成である。昭和57(1982)年当館で初公開したのに続き、今回の展観では捺染布(プリント布)に限定し、約180点で構成した。

19世紀、産業革命と市民革命に象徴されるように、染織産業にとっても大きな変革をもたらされた。織物や捺染技術の発展、合成染料の出現を背景に、捺染布は廉価に供給されるようになり、大量消費時代をむかえた。産業技術の革新によって、次第に染めの制約から解放され、より自由なデザインの創作が可能になったが、それは同時にコストの低い、仕上げのしやすい、しかも「流行」にあった模様でなければならなかった。

会場では、コレクションの中から織物風模様・単彩調・多彩調・濃い地色の模様・点描手法・虹色のぼかし模様・バラのモチーフ・ペイズリー模様のバリエーション・小花模様・アールヌーボー調の模様を選び、額装にして陳列した。これらの模様からも、オリエントや東南アジアの模様やヨーロッパの伝統・様式を混合した、時代の特徴を示す、創意と工夫が窺える。

また、文化学園服飾博物館の協力を得て、当時の染織・デザインによる服飾5点を参考出品することにより、具体的に捺染布が使用された例、あわせてクリノリース・トゥールニユール・S字形シルエットといった服飾デザインの変遷も概観出来るよう配慮した。

染織研究科はもとより、デザイナー・染織工芸家等各方面で、織り・染め・模様・流通をはじめとして多くの点で今日の工業プリントデザインの基礎となった19世紀末捺染布を再認識する貴重な資料になったと思われる。



■特別展 美とわざとのハーモニー 19世紀末ヨーロッパの捺染布
亀井茲明コレクション
24.0×25.0cm B判変形 84P
カラー図版 48P
「祖父・亀井茲明について」 亀井茲建
「近世ヨーロッパの捺染布」 北村哲郎
「19世紀ヨーロッパの染織」 石山彰
出品目録・19世紀ヨーロッパの捺染布誕生の背景・
19世紀を中心とする染織・服飾史年表・亀井茲明年譜・
ヨーロッパの染織工芸中心地・参考文献

橋本コレクション 中国の絵画 —来船画人—

会期=昭和61(1986)年4月15日(火)~5月25日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室

併催：特別陳列 大久保泰



本展は、橋本コレクションの中国絵画の2回目の展覧となった。本展では、17世紀から19世紀、つまり、明末から清朝一代にかけての中国から、江戸時代、明治初期の日本を訪れた中国人画家、いわゆる来船画人44作家86点の作品と12点の書跡などを陳列した。

いうまでもないことながら、日本と中国の間には長い交流の歴史があり、日本文化の相当の部分が中国の影響をうけて成立している。江戸時代は、その大部分が鎖国体制にあったわけであるが、唯一の開港場長崎を窓口にして中国文化の受容は続けられ、文物・書籍などが輸入され、儒者、僧侶、医師、そして画家などが往来し、日本人と接触し文化を伝えたのである。

絵画に関していえば、明末清初に来日した黄檗僧と随伴してきた画人達が北宗系の画技を伝え長崎漢画の基を築いたのにつづいて、沈南蘋一派が来日し、長崎派花鳥画の形成に力があり、広い範囲にわたり影響を与えたことは周知の如くである。彼らは、中国商船に乗ってきたわけであるが、その中国商船の船主の中に、伊予九・江大来などの画技を善くする者がいて、長崎を訪れた日本の文人たちに画法を伝授し、それが日本南画の展開に多大な貢献をしたのである。こうした意味で、近世日本絵画の展開における来船画人の果たした役割は極めて大きいと言わねばなるまい。

また、注目すべきは、来船画人の名は、中国の画史には残らず、日本にのみ作品が残り名が伝えられているという点である。その意味では、中国絵画史の埋もれた一断面、中国の地方(浙江・福建など)文化を知るといふ事で貴重であり、中国文化の底の深さを知る意味でも意義があった。そして、このことは、賞鑑家・研究者としての橋本末吉氏の卓越した識見・研究者としての姿勢を示すものともいえるであろう。



- 特別展 橋本コレクション 中国の絵画 —来船画人—
24.0×25.0cm B判変形 136P
カラー図版 24P
モノクローム図版 48P
「波濤を越えて」 古原宏伸
「江戸時代絵画における中国と日本」 山岡泰三
出品目録
「近世日中交渉の中の来船画人」 味岡義人
画人・書人略伝・年表・文献・欧文出品目録

Lufthansaコレクション 現代ドイツの素描

会期=昭和61(1986)年6月10日(火)~7月20日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室



本展はケルンのルートヴィヒ美術館で最初に公開されて以来、各国を巡回している素描コレクションの日本での展覧会である。このコレクションは、ルフトハンザドイツ航空がルートヴィヒ美術館の協力のもとに収集したもので、現在、ドイツ連邦共和国(西ドイツ)で活躍している43名の作家による123点の素描作品で構成されている。作家・作品の選定にあたっては1970年代から1980年代初頭におけるドイツの美術状況を現わし、現代に通用する生々しいテーマを持つということが考慮されている。特徴的なことに、選ばれた作家は現在西ドイツで活躍しているものの東ドイツ、あるいはチェコスロバキアなどの東欧出身の作家が相当数含まれており、国境を越えた美術の関わりが如実に現われている。また、その中には版画、タブローを主にした作家から立体作品、スペース・アート、ビデオ・アートと呼ぶべき作品を手掛ける作家まで含まれるなど多種多様な人選が見られ、彼らが制作した素描もまた現代ドイツの美術を総括すべく様々である。

展覧会の構成は8部から成っている。ベルナルト・ツェルツェなどの“アンフォルメル”やハインツ・マックの“ゼロ・グループ”の第2次大戦後の前衛芸術隆盛期から始まり、パレルモ、ヨゼフ・ボイスを経て、A.R.ペンク、ゲオルグ・バゼリツなどの近年注目されている新表現主義まで、戦後美術史を踏まえつつ表現内容やテーマによって分類している。

今日の素描は決して従来の枠で捉えられるものではなく、多彩な表現手段と意味をもっている。今回陳列した作品も技法の点からみれば、鉛筆、インク、チョークといった伝統的画材ばかりでなく、ラッカーや油性木炭を用いたり、コラージュの手法や表面の引っ掻きなど新しいテクニックを使っている。また、その意味するところは、タブローや立体作品の下絵的な素描ばかりでなく、作品の技術的なプログラム、プロジェクトの行動計画・記録・ビデオ作品の概念説明といったものがみられる。このように、多くの作家は素描の意味を全く新たな観点から独立した表現形態として捉えている。その一つの特徴として、画面が大きくなりタブロー絵画のような感覚でそれ自体で完結した作品として取り込む姿勢がみられる。

こうした現代の美術状況を反映した本展の作品ではあるが、その中には実直、厳格な国民性が随所にみられるのも事実である。その様な要素を含め、この素描展は現代ドイツ美術の表現と感性を知ることのできる貴重な展覧会であったといえる。



■特別展 Lufthansaコレクション 現代ドイツの素描
24.0×25.0cm B判変形 126P
「メッセージ」 ルフトハンザドイツ航空会社
「序文」 クリストフ・ブロックハウス
「素描芸術—その理論と歴史抄」 千足伸行
出品目録・作家索引

小堀四郎

会期=昭和61(1986)年7月29日(火)~9月7日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室

併催:特別陳列 脇田愛二郎



小堀四郎は孤高の画家といわれる。その故は、画業の大半を画壇から離れ、良き夫人と良き友人の間に育まれ制作を続けて来たからである。小堀四郎は明治35(1902)年、愛知県名古屋市の漢学者の家に生まれた。愛知一中卒業後、東京美術学校西洋画科に進む。在学中に安田稔の模写、レンブラント「兜の男」を模写、後の渡仏中の模写制作の手始めとする。卒業後、昭和3(1928)年に渡仏、ルーブル美術館でレンブラント「ベッサベ・オー・パン」、コロロ「青衣の女」、ドーミエ「洗濯女」、「クリスパンとスキヤパン」などの模写を手掛け、西洋油絵の正統技法を身につけ、その延長上で「赤衣の女」、「プルターニュの男」などの作品を残す。帰国後、一時帝展にも出品するが昭和10(1935)年、松田文相の帝展改組から美術界が混乱するのを見て失望、藤島武二の奨めにより画壇を離れ昭和9(1934)年、藤島武二の媒酌により、森鷗外の次女杏奴と結婚。以後は年1回、美校同期の学友と結成した上社会にのみ出品することとなる。

昭和15(1940)年頃から、東洋の精神的なものにひかれ、東北地方に目を向ける。昭和20(1945)年からは戦争による疎開をきっかけに、蓼科に一人移り住み、昭和30(1955)年まで、周囲の自然に親しみ、その風景を描くことになる。この時の作品に、「高原の夕陽」、「斜陽」、「諏訪湖の夏花火」、「秋の星」などがあり、凝縮した孤独と、それを包み込む母なる自然との、混然一体となった融合が面白い。色彩も穏やかで温く、人々の内に潜む善良な意識を捕えて離さない。帰京後、東北・北陸地方に旅し、その地に在る題材を描き続ける。「黒湯温泉」、「恐山の巫女」などがその作品であるが、色調も暗く激しい部分と、燃え盛る火の様な情熱的な部分とが同居し、ダイナミックな画面を作り上げている。日本に残る土着的な風俗・精神に強くひかれた結果なのであるが、そこに一種の寂漠感を見て取ることも出来る。昭和51(1976)年東京大学イラン・イラク学術調査団の発掘に立会い、その地で見た風景を、「人生とは」、「無限静寂、信、望、愛」で描く。これは、この画家が最後に辿り着いた、自然と人生に対する畏敬と愛情の集約的成果であり、人々の心を捕えて離さない、強くしかも澄んだ意識に裏付けられた作品である。



■特別展 小堀四郎
24.0×25.0cm B判変形 78P
カラー図版 24P モノクローム図版 23P
「老人の独語」 小堀四郎
「選ばれた人」 小堀杏奴
「人生のランナー小堀四郎さん」 平川祐弘
出品目録・年譜

渋谷区立松濤美術館 開館5周年記念特別展 堀内正和

会期=昭和61(1986)年9月30日(火)~11月24日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

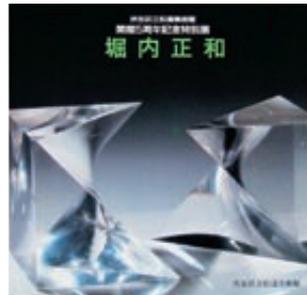


渋谷区立松濤美術館は、昭和61(1986)年10月に開館5周年を迎えた。開館5周年を記念して、当館は渋谷区在住の彫刻家、堀内正和氏の彫刻展を開催した。堀内氏は開館当初より、当美術館の評議員を務め、「特別陳列 渋谷区在住作家の作品」に毎年出品している。

堀内氏は明治44(1911)年、京都に生まれ、東京高等工芸学校彫刻部で学び、その後、早くも抽象彫刻を制作し、一貫して抽象彫刻を制作し続けている。明快な幾何学的形態の中にユーモア感覚を盛り込んだ独自の芸術によって、現代日本彫刻界に確固とした地歩を築いた。昭和38(1963)年、第6回高村光太郎賞受賞、昭和42(1967)年第9回アントワープ国際彫刻ビエンナーレに出品、昭和44(1969)年第1回国際彫刻展で大賞を受賞するなど数多くの展覧会に出品、受賞を重ねている。更に、京都市立美術専門学校(現京都市立芸術大学)の教授を務め、美術教育にもたずさわってきた。

本展は、氏の多数の作品の中から、初期の具象彫刻から各時期の代表作、特に最近の秀作を網羅して彫刻51点、氏の制作課程を窺える紙模型、版画、デッサン18点を加えて、全69点で構成した。主な出品作としては、初期の具象から抽象への推移を示す「壺」、「Cubi」、線と面の構成時代の「五つの正方形と五つの長方形」、「四角と丸の組み合わせ」、円筒、円錐シリーズの「偶像」、「海の風」、「しかくい杵のなかのねじれた杵」。そして昭和40年代からの、「お尻があつい」、「Androgynos」、「のどちんことはなのあな」、「箱は空にかえてゆく」、「Cubes et tubes」などは幾何学的形体に人体を複合させたエロスとユーモア感あふれる作品である。その後、「円筒をななめに通りぬけるもう一つの円筒」などの貫入彫刻シリーズ、「三つの立方体C」などの三つの立方体シリーズ、三本の直方体シリーズの作品群、そして「体積が等しい五つの半円柱」などの最近5、6年の単純形態を組み合わせた作品などの構成により氏の芸術的様式の発展、展開が窺える展覧となった。

堀内正和氏の長年の業績と本展の展覧に対して、昭和61年度の毎日芸術賞が授与されたことは、開館5周年記念特別展としての本展の成功と意義の大きさを物語るものであると考えらる。



■渋谷区立松濤美術館 開館5周年記念特別展
堀内正和
240×250cm B判変形 92P
カラー図版 20P モノクローム図版 38P
「明晰な神秘—堀内正和の世界」 針生一郎
「立方体と球」 堀内正和
出品目録・年譜・主要参考文献

伊東コレクション 古玩の世界

会期=昭和61(1986)年12月9日(火)～昭和62(1987)年1月25日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階特別陳列室

併催：特別陳列 渋谷区在住作家の作品



古玩とは、いとおしみ、愛でてやりたくなるような魅力的な、趣のある古器のことをいう。

これらは、単なる美術品ではなく、かといって純然たる鑑賞の芸術ではなく、鑑賞家の身近な“かたらいの相手”である。そして、探し求めて得られたものには、自然と情熱が湧き、接した時の直接的な感激を呼び覚ますものである。

本展は、渋谷区在住で日本陶磁協会理事を務めておられる伊東祐淳氏が多年にわたり蒐集され、身近におかれている古玩を約120点陳列した。

伊東氏の古陶磁蒐集は、京都帝国大学在学中にはじまり、当初より名品主義的な態度にとらわれることなく、ことに江戸時代に興った地方の窯で焼かれた、愛好家の間で“国焼もの”と呼ばれる作品の蒐集・研究に力を注がれた。この国焼の蒐集としては、特にボストン美術館のモールズ・コレクションが有名であるが、戦前は関西の山口吉郎兵衛氏、内貴清兵衛氏、東京の伊東祐淳氏、竹内金平氏の名前が知られていた。しかし、残念なことに四千点を数えたという伊東コレクションのほとんどは戦災で焼失した。

本展では、伊東氏の六十有余年の古美術遍歴によって培われた知識と、あくことのない探究心をもって見立てられた古玩から醸し出される独自の“あじわいの世界”を表現した。

主陳列室には、古信楽茶碗の代表作として知られる信楽茶碗 銘挽臼をはじめとする抹茶道具、懐石道具、香合、木米作・急須等の煎茶道具、文房具、特別陳列室には隅田川焼、相馬焼などの国焼を集め、文化文政以降の地方窯の興隆の流れを概観出来るよう配慮した。

これらの古玩の世界を形成するそれぞれの作品の意匠にふれることにより、心を和ませ、感激を催す雅品に出会う楽しみを享受出来たのではなからうか。



■特別展 伊東コレクション 古玩の世界
24.0×25.0cm B判変形 84P
カラー図版 24P モノクローム図版 31P
「古玩趣味雑感」伊東祐淳
「伊東祐淳先生の古玩」林屋晴三
出品目録・参考文献・伊東コレクション・
江戸時代(主要)窯場地図・伊東祐淳氏略歴

ジョルジュ・ビゴー 明治日本を生きたフランス人画家

会期=昭和62(1987)年4月7日(火)～5月17日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
共催=美術館連絡協議会、読売新聞社
後援=文化庁、フランス大使館 協賛=花王株式会社



今から約100年前、明治中期の日本に18年間滞在したフランス人画家ジョルジュ・ビゴー(安政7(1860)年-昭和2(1927)年)は、諷刺画家、風俗画家、そして雑誌記者や報道写真家として活躍し、数多くの作品を残した。ビゴーは最初、フランスで、挿絵画家として活躍していたが、日本美術愛好家との交流などを通じて、浮世絵の国、日本への憧れを抱き、明治15(1882)年、21歳の時来日した。

次第に日本の生活と文化に通じていったビゴーは、生活の為に、「おはよ」、「また」、「クロッキ・ジャポネ」などの銅版画集を次々に刊行していった。これらの画集には、日本の庶民生活が、好奇と愛情の眼差しで生き生きと描かれている。明治20年代には、新聞、雑誌の仕事をこなして、時局諷刺雑誌「トバエ」を発刊して、在日外国人の為に、時事問題を扱い、諷刺画を数多く描いた。これらの雑誌は、当時の自由民権運動にも影響を与えた。更に、ビゴーは、日本各地の風俗や事件の取材を精力的に行い、生々しいスケッチを数多く残している。明治27(1894)年には、「ザ・グラフィック」紙の特派員として、日清戦争に従軍取材し、朝鮮庶民の姿や従軍兵を描写し、日本人が描けなかった虐げられた人々や戦争の暗部を鋭く表現している。

日清戦争以降、日本は次第に軍国化し、官憲による言論弾圧も強まり、外国人居留地の撤廃が決定され、「古きよき日本」はビゴーにとって、「いたたまれない日本」へと変貌していった。明治32(1899)年、彼はついに日本を離れ、フランスへ帰国した。ビゴーは、パリ郊外、ピエールのアトリエで、67歳の生涯を終えている。

本展は、フランスの遺族の方々が所蔵していた作品を中心に、油彩、水彩、スケッチ、デッサン、版画、ポスター、アルバム、書簡など400点近くの大部分が未公開の作品で構成され、画家、ジャーナリストとしてのビゴーの全体像を再認識するうえで、初めての本格的な回顧展となり、多数の入館者数を記録した。

渋谷区は、昭和60(1985)年5月に、パリ市六区との間に文化交流協定を結び、既にパリ市六区の三美術館所蔵品の展覧会をも開催している。ビゴーが通った美術学校や帰国後住んだ場所は、パリ市六区にあり、本展は、日本での展覧終了後、パリ市六区区役所でも開催されて大きな反響を呼んだ。日本とフランスのかけ橋となったビゴーの展覧が、渋谷区とパリ市六区で相ついでで開催されたことは、両区文化交流にとって大変有意義であった。



■特別展 ジョルジュ・ビゴー —明治日本を生きたフランス人画家—
240×250cm B判変形 200P
カラー図版 48P
モノクローム図版 70P
「メッセージ」 ジルバール・ペロル、ピエール・バス
「ジョルジュ・ビゴー再考」 酒井忠康
「日本におけるG.ビゴー」 清水 勲
「ジョルジュ・ビゴー／ふたつの顔を持つ画家」 エレーヌ・コルスヴァン
「諷刺画家としてのビゴー」 清水勲
出品作品リスト・年譜・参考文献・ビゴー関係国内地図

福武コレクション 国吉康雄

会期=昭和62(1987)年5月26日(火)~7月19日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



近代日本の美術が、ヨーロッパとくにフランスの圧倒的影響のもとに展開してきたのは周知の如くである。それに比して、美術における日本とアメリカの関係は極めて希薄であった。美術のうえでは、アメリカ自体が、今世紀初頭にヨーロッパの影響を脱しつつ独自の展開を遂げるに至るまでは、日本同様に後進国であったためである。しかし、日米両国の美術における関係が皆無であったわけではなく、アメリカ美術が独自の展開を始めたこの時期に、アメリカで学び、アメリカ美術界で活躍した日本人たちがいる。清水登之、野田英夫、石垣栄太郎、国吉康雄らである。彼らは、日系二世の野田を除き、移民として渡米し、働きながら学ぶなかで美術にたいする眼を開いていった。なかでも、アメリカ絵画史において大きな足跡を残した日本人画家、それが国吉康雄であった。

国吉康雄は、明治22(1889)年に岡山に生まれ、17歳で単身渡米し、働きながら学ぶなかで画才を見いだされ、ロサンゼルス、ニューヨークの美術学校で学び、昭和4(1929)年にニューヨーク近代美術館で開催された「19人の現存アメリカ作家展」に最年少で選ばれ、「アメリカ画家」としての地位を確立した。また、昭和19(1944)年に「アメリカ合衆国絵画展」で一等賞を受賞、昭和22(1947)年にはアメリカ美術家組合の初代会長に就任、昭和23(1948)年には、ホイットニー美術館で大回顧展が開催されるなどの輝かしい足跡を残して、昭和28(1953)年にニューヨークでガンの為に没した。

本展では、国吉康雄の生地岡山に本社を置く福武書店のコレクションの中から油彩、素描、版画、写真作品など130点を陳列した。初期の幻想的な作品から、憂愁と情感にみちた女性像に代表されるアメリカン・シーンの作品、さらに、晩年の道化や仮面を描いた象徴的画風の作品までを含む充実したコレクションは、国吉康雄の画業の全貌を語ると同時に、それらの作品は今世紀前半、アメリカに渡った日本人移民が受けた人種差別の苦しみ、戦時下における苦悩、さらには、大恐慌下の社会問題を如実に伝えるものでもあった。

本展を通して、過去の日米関係、そして現在、将来の日米関係に思いをはせた人もいたのではなからうか。



■特別展 福武コレクション 国吉康雄

24.0×25.0cm B判変形 120P

カラー図版 32P

モノクローム図版 18P

「国吉康雄の人と芸術

—アメリカと日本— 小倉忠夫

「出品作品リスト・国吉康雄小伝」 味岡義人

関連年表・主要参考文献

岡山市立オリент美術館所蔵 オリントのガラス

会期=昭和62(1987)年8月11日(火)~9月27日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロン・ミュージーゼ、特別陳列室
共催=岡山市立オリент美術館



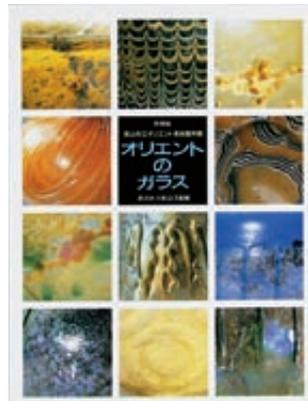
ガラスは、ガラス質の釉薬が陶器などの施釉製品から離れて、独自に形態を持ったもので、最古のガラス製品は紀元前三千年紀後半のメソポタミアの遺跡から出土している。ガラスによる容器の製作は、メソポタミアやエジプトで前16-15世紀頃から始まり、以後、前1千年紀後半までイラン・イラク、環地中海域でガラスの製造が盛んになった。この時代の製作方法は、コア・ガラスと呼ばれ、金属棒を芯にして中型を作り、周りに溶けた色ガラスを巻きつけて器体を作り、冷却して芯をとり出して仕上げる技法で、簡便だった為、盛行した。

前1世紀に、ローマ領シリアで、吹きガラスの技法が開発された。吹きガラスには、型吹きと宙吹き2種類の製法がある。宙吹きガラス技法は、ガラスや鉄製のパイプの先に溶けたガラスをつけ、息を吹き込んで自由に成形し、ポンテを用いて切断し成形する方法で、この技法が確立されると、比較的大きなガラス容器の大量生産が可能となった。更に、ガラスの色も無色透明に近いものが生みだされるようになり、各種のガラス器が製作されるようになった。

地中海世界を中心とした吹きガラスの伝統は、周辺世界に広まり、ローマ帝国の広大な交易網によって、ローマン・ガラス製品はヨーロッパ各地はもとよりインド、アフガニスタン、中国にまで伝播されることとなった。この傾向は、ローマン・ガラスの伝統を引きついだササン朝ペルシャやイスラム時代のガラスについても同様であった。

岡山市立オリент美術館は、岡山学園理事長故安原真二郎氏が、情熱を傾けて蒐集されたオリントの美術、考古遺品の岡山市に対する寄贈を契機に設立されたもので、現在、約3千点の作品を所蔵している。

本展は、岡山市立オリент美術館の所蔵品のなかから、シリア、イランを中心としたオリントのガラス容器、製品150余点を選び、陳列したものである。これらの中には、正倉院御物の切子瑠璃碗と同型体のイラン出土、円形切子装飾瑠璃碗などをはじめとするササンのカット・ガラスやシリア出土の類品の少ない把手付三連瓶などの貴重な作品も含まれている。すずやかで虹色に輝く古代ガラスの美は、夏期の入館者を魅了し、時宜を得た展覧となった。



■特別展
岡山市立
オリент美術館所蔵
オリントのガラス
27.5×21.0cm 104P
カラー図版 24P
モノクローム図版
24P
「オリントのガラス」
谷一尚
出品目録・
古代オリント遺跡地図・
古代オリント年表
文献

松濤美術館 現代の版画 1987

会期=昭和62(1987)年10月13日(火)~11月23日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



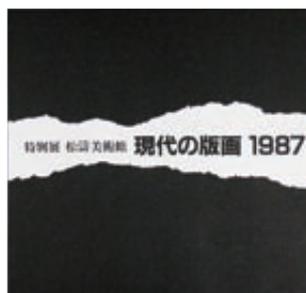
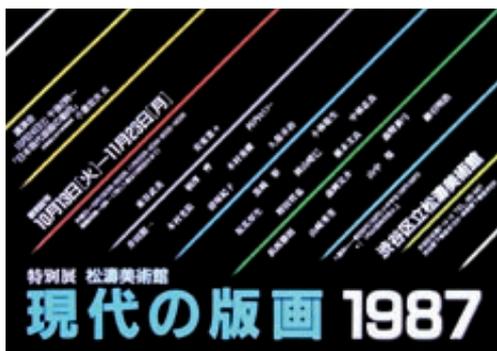
本展は版画を通して、現在の美術動向を探ろうという試みである。第一線で活躍している版画家の活動をつぶさに見、現在あるいは将来にわたって版画における表現と版画という表現媒体のもつ可能性を展望しようとするものである。この展覧会は第一回目のものであり今後定期的にこの企画を続けることを計画している。

戦後日本の版画表現の推移のなかで大きな転換期となったのは、60年代から70年代初頭にかけての革新的な一連の動きである。いわく「版概念の拡大」と言われるものである。今回の出品作品に限って言えば、新奇な表現形態は見あたらない。しかし、それは当然のことであって、各作家が版画というものの正体を見極め、「拡大」した意識を充分咀嚼しているからである。伝統的ともいえるこれらの表現形式ではあるが充分見ごたえのあるものであった。あらゆる事が試されてきた今日、版画というものも一つの表現を入れる器であるというあたりまえのことから出発しようとしている。つまり、問題は何をどの様に表現したかということである。

そのひとつの動向があったとするならば、数名の作家に共通した表現ではないだろうか。今までの多くの版画家が普遍的な版画の意味を問いつづけ作品が無機質化しているのに対し、これらの作品は個的なものから発想し表現を深めていることが分かる。大上段に構えた姿勢ではなく、例えば意識の迷路から生みだされたものである。今後こうした世代の作家がどのような展開を見せるのかも興味あるところである。

招待作家22名を選出し新作の出品を依頼し、出品作品に対し二つの賞を設けた。現在最も充実した作品を制作し活発な活動を続けている版画家たちである。作家の選抜と作品の審査には次の6名の方々に依頼した。小倉忠夫氏、木島俊介氏、桑原住雄氏、藤井久榮氏、三木多聞氏、藤田國雄である。最終的には依頼した22名の作家から総点数69名の出品があった。

なお、松濤美術館賞には木村光佑の「Relation-S2」が、優秀賞には橋本文良の「Table Top Suite Version2」が受賞した。



■特別展 松濤美術館 現代の版画 1987
24.0×25.0cm B判変形 96P
カラー図版 22P
モノクローム図版 34P
「版画の現在」 藤井久榮
「現代の版画1987について」 瀬尾典昭
略歴・作家のことば・総目録

橋本コレクション 中国の墨竹

会期=昭和62(1987)年12月8日(火)～昭和63(1988)年1月24日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

白居易の「養竹記」(唐文粹卷七十七)に「竹似賢何哉、竹本固、固以樹徳、君子見其本、則思善建不拔者、竹性直、直以立身、君子見其性、則思中立不倚者、竹心空、空以體道、君子見其心、則思応用虚受者、竹節貞、貞以立志、君子見其節、則思砥礪名行夷險一致者」とある。イネ科の植物である竹は、中国では異名を君子、此君などといい、その植物としての特性から、君子を象徴する植物として、古くより詩文や絵画の主題とされてきた。

絵画においては、北宋時代の後半、蘇軾、文同らにより文人の墨戯としての墨竹画が、絵画の一ジャンルとして確立され、元代には、李衍がでて「竹譜詳録」を著し、また、呉鎮、倪雲林、趙松雪、顧安らが優れた墨竹画を残した。明代にはいると、夏昞が墨竹画家の筆頭としてあげられ、また、沈周、文徴明らの文人画家が輩出し、文人の気概を竹にたくして描いた。明末清初においては、徐枋や萬壽祺という遺民画家が、その高節にふさわしい、清浄かつ孤高の境地を示す墨竹の佳品を残している。清代には、朱端、戴明説らが墨竹画家として上げられるが、特に、乾隆年間に揚州を中心に活躍した揚州八怪、中でも、鄭板橋、金冬心の二人が墨竹を以て知られ、近代の呉昌碩に連なっていく。

本展では、過去2回に引き続き、収集家、研究者として、国際的にも知られる橋本末吉氏の中国絵画コレクションのなかから、元末の顧安をふくめ、明清時代を中心に、近現代に至る画人82家111点の竹を主題とした作品、及び鄭板橋の書一点を陳列し、中国絵画史上における墨竹画の軌跡を概観した。



■特別展 橋本コレクション 中国の墨竹

24.0×25.0cm B判変形 120P

カラー図版 24P

モノクローム図版 28P

「墨竹史略」 古原宏伸

「明末清初の墨竹

—徐枋・王鐸・戴明説— 曾布川寛

「出品目録・鄭板橋礼賛」 近藤秀実

画人略伝・墨竹関連年表・墨竹関連主要参考

文献・欧文出品目録

前田寛治

会期=昭和63(1988)年4月5日(火)~5月22日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

本展は大正から昭和初期にかけて活躍し、日本近代美術史に輝かしい足跡を残した前田寛治の芸術を、代表作を含む生涯を通じた作品で紹介した。東京美術学校在学中の初期の作品から絶筆まで油彩画60点、素描21点を陳列した。

当時の多くの若い画家がそうであるように、前田寛治も東京美術学校を卒業すると間もなく渡仏する。パリは華やかなエコール・ド・パリの時代であった。滞仏中は、ゴッホ、セザンヌの影響から次第にアングル、クールベに惹かれてゆく。多くの日本からの画学生が新しい傾向を取り入れてゆくのに対し、前田寛治は古典的写実的な表現を追求してゆく。西欧絵画の造形的な基盤であったこうした絵画に眼を向けた者は数少なかった。

約2年半の滞仏の後、帰国した前田寛治の活躍にはめざましいものがあった。帝展で特選となり一躍新進画家とし脚光を浴びる。一方で、帝展の環境にあきたらずパリ時代に親交を結んだ仲間たち、里見勝蔵、佐伯祐三、児島善太郎、木下孝則と「1930年協会」を結成し中心的な役割を果たす。また、「前田写実研究所」を設立し後進の指導にあたりと共に、『中央美術』、『美之國』といった雑誌に評論を展開してゆく。

大正末から昭和初期にかけては日本近代洋画が激しく揺れ動いた時期であった。フォービスム、キュビスムなどの吸収、前衛美術の著しい台頭、さらにはプロレタリア美術の席捲といった様々な様式が錯綜した時代であった。こうしたなかで、前田寛治は写実理論を展開し、時代を先導していこうとしていた。

前田寛治が後世に与えた影響は彼の存命当時の華々しさから比べるとむしろ物足りない気さえする。それは彼が33歳という短命の故であるのか、あるいはその後の時代が寛治を必要としなかったのか。精根をかけて作りあげた「1930年協会」は彼の死と共に消滅し、これを引き継ぐように「独立美術協会」が設立される。日本的フォービスムの誕生とされるこの協会がその後続いてゆくことを考えると、前田寛治が目指したものは日本人の資質に合致しなかったのかも知れない。事実、寛治自身でさえもフォービスムの要素を多分に有している。そうした矛盾こそ彼の魅力であり、時代の流れに反逆した一個の個性だったというべきなのだろう。



■特別展 前田寛治

24.0×25.0cm B判変形 114P

カラー図版 24P

モノクローム図版 36P

「前田寛治 その生涯と画業」 三谷巖

「父の周辺」 前田棟一郎

「砂丘社と前田寛治」 前田明範

出品目録・年譜・参考文献・参考作品

石垣栄太郎

会期=昭和63(1988)年6月7日(火)~7月17日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

本展は、前年に開催した国吉康雄に続く、いわゆるアメリカ派の画家の一人として知られる石垣栄太郎の初めての本格的な回顧展であった。

石垣栄太郎は、明治26(1893)年に、捕鯨の町として知られる和歌山県太地に船大工の子として生まれた。当時、今日捕鯨に反対している欧米諸国が日本近海で鯨の乱獲をしたために、太地の近海捕鯨がなりたたなくなり、石垣の父は移民として渡米。ついで、石垣も父に呼ばれて渡米する。16歳であった。石垣もまた、国吉康雄と同じく、働きながら学ぶなかで美術を志し、カリフォルニア、ついで、ニューヨークに出てジョン・スローンに師事した。この間、渡米中の社会主義者片山潜らと親交を結び、独自の思想を形成していった。大正14(1925)年独立美術家協会展に出品した「鞭打つ」によりソシアル・シーン派の中堅画家として認められ、以後、昭和26(1951)年に、マッカーシズムのあおりで帰国するまで、恐慌下のアメリカ社会の抱える問題をテーマとした「街」「失業音楽隊」など、あるいは、第二次世界大戦前後のファシズム・帝国主義と戦う民衆をテーマとした「群像」「捕虜」などを描き続けた。その一方で、サッコ、ヴァンゼッティの死刑反対集会に参加したり、進歩的文化人の団体ジョン・リード・クラブの創立委員として活躍、あるいは、日中戦争の時期には中国民衆に対する救援活動に夫人の綾子とともに積極的に参加するなど、自らの思想を行動をもって表現した。

石垣栄太郎は、アメリカから半ば追放される形で帰国したために、残された作品は多くなく、また、状態も良好ではなかったが、和歌山県立近代美術館をはじめとする美術館、ならびに石垣綾子氏の協力を得て、国内にある油彩作品の殆どにあたる39点、ニュー・ディール政策下に描かれた壁画の下絵3点及びテッサン72点を陳列することができた。本展の開催とほぼ時期を同じくして、東京都美術館等で開かれた「1920年代日本展」に、行方不明となっていた「アメリカン・コサック」「馬上の男」がソ連よりもたらされたこととあわせて、本展の開催により、石垣栄太郎の画業と彼の思想の一端が改めて認識されたことと思われる。同時に、前年度開催の国吉康雄展とともに、アメリカ派の再認識の機会となったこととも思われる。



■特別展 石垣栄太郎
24.0×25.0cm B5判変形 126P
カラー図版 36P モノクローム図版 36P
「石垣栄太郎の芸術」 酒井哲朗
「石垣栄太郎の思い出」 石垣綾子
参考図版・出品目録・石垣栄太郎とアメリカ(味岡義人)
略年譜・文献目録・資料紹介

タイ・ベトナムの古陶磁

会期=昭和63(1988)年8月9日(火)~9月25日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

東洋陶磁といえば中国陶磁が歴史も古く技術的にも傑出したものであるが、朝鮮あるいは日本においても独自の価値をもつ陶磁の歴史があったことは周知のことである。インドシナ半島の古陶磁についても同様のことがいえよう。タイあるいはベトナムにおいても古くより陶磁器が焼かれ、それらは中国や朝鮮の陶磁とはまた違ったあじわいを持つものとして、古来日本でも一部の数寄者に「安南」あるいは「宋胡録」などの呼称をもって愛玩されてきた。本展は近年の東南アジア古陶磁への世界的な関心のたかまりをかんがみ、タイとベトナムの古陶磁の名品を陳列し、その歴史を概観しようとするものである。

タイの古陶は9世紀、カンボジアのクメール族によるクメール陶(ロップリ陶)からはじまる。淡い黄色味をおびた灰釉陶のほか、11世紀には黒褐釉の美しい壺や瓶もつくられた。象や兎をかたどった愛らしい容器も焼かれている。タイ中部では13世紀にスコタイ王国、14世紀にはアユタヤ王国が成立し、タイ北部では13世紀にランナータイ王国が建設されるが、このころになるとタイの各地に窯が築かれ盛んに陶磁が制作された。とくに中部のシサッチャナライ、スコタイ、北部のカロン、サンカンペン、パーンなどは代表的な名窯である。中部で焼かれた鉄絵の文様をもつ青磁器は輸出用に量産もされ、日本でも「宋胡録」と呼んで珍重した。

ベトナム陶磁の歴史は中国漢代にまでさかのぼるが、ベトナム独自の陶磁が焼かれはじめたのは11世紀に成立した李王朝以降である。12-14世紀には印花文様や刻文のある美しい青磁や白磁が生みだされている。「安南」として珍重された青花は14世紀にはじまり、15世紀には五彩(色絵)も製作されるようになってベトナム陶磁は最盛期をむかえた。これらの陶磁は海外にも輸出されたが、日本においても桃山時代から茶人などに好まれ、日本からの注文で作られたと思われるものもある。

本展では、以上のようなタイ・ベトナムの陶磁を(1)ベトナム陶磁、(2)タイ陶磁を分けてそれぞれ概観し、さらに日本におけるその受容を(3)伝世品のコーナーで偲べるように3グループにわけて展観した。タイ・ベトナムの陶磁史を体系的に展望した企画として、専門家以外の人々にまで好評を得た。



■特別展 タイ・ベトナムの古陶磁
24.0×25.0cm B判変形 100P
カラー図版 24P モノクローム図版 36P
「タイ・ベトナムの古陶磁概観」長谷部楽爾
「南海古陶磁回想」伊東祐淳
出品目録・タイ・ベトナムの古陶磁地図
タイ・ベトナムの古陶磁関連年表・主要参考文献

アメリカの水彩画 —ホイッスラーからワイエスまで—

会期=昭和63(1988)年10月18日(火)~11月27日(日)
会場=地下1階主陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、日本経済新聞社
併催:特別陳列 大正の詩人画家 富永太郎



テキサス州ヒューストン所在の石油、天然ガス会社トランスコ・エナジー社は、質の高いアメリカ水彩画のコレクションを蔵していることで有名である。本展は同コレクションから、19世紀と20世紀のアメリカを代表する60作家66点による水彩画を選び陳列したものである。

アメリカ大陸での水彩画は16世紀から始まるほど古い歴史を有している。近年に於ける水彩画興隆の第一期は18世紀から19世紀前期のイギリスで興った。その影響を受けて、合衆国では、19世紀と20世紀に水彩画が大変盛んになり、広く普及したのである。初期のアメリカ水彩画は、東部に植民した人々の間で、大自然を描いた人々や、国境の西方拡大につれて軍隊や調査隊に随行して、インディアンの風俗や中西部の大自然をスケッチして貴重な記録を残したいいわゆる探険画家と呼ばれた人々によって数多く残されている。前者には、本展出品のW.G.ウォールやサミュエル・コルマンらがあり、後者はG.カトリン、トマス・モランなどが挙げられる。

アメリカでの水彩画普及に大きな貢献をしたアメリカ水彩画家協会に加わった画家の中で、J.C.サージェントとウィンスロー・ホーマーの二人は、アメリカ絵画史の中で高く評価されているばかりではなく、水彩画の名手として知られ、合衆国の水彩画の水準を一挙に高めた画家であった。19世紀から20世紀にかけて、多くの画家達がヨーロッパで学び、印象派や、立体派、野獣派などといった新しい様式、見方を学び伝え、合衆国の独自の画風、様式を作り上げていった。又、地方に根ざした芸術を標榜する「地方主義」や都市の貧民を描いた反アカデミズムの「ジ・エイト」などの画家達による運動も起こり、アメリカ近代絵画を豊かでダイナミックな内容にしていっていった。戦後は抽象表現主義、ポップ・アートの画家達など前衛芸術家によってアメリカ水彩画は多彩な展開をしめしている。

本展には、ガイ・ウォールから、ホイッスラーを経て、マーク・トビー、アンドリュウ・ワイエスに至るまで、アメリカ近代絵画の流れが水彩という形式を通して、わかりやすく概観できるように構成されている。これまで日本では、アメリカの美術がかなり紹介されてきているが、大半が20世紀以降の現代美術に焦点があてられてきた。本展は初期開拓時代の貴重な絵画も数点含まれており、加えて水彩画だけによるアメリカ美術の流れを網羅した展覧は日本で初めてであり、意義が大きかったといえる。本展はこれまでで最高の入館者数を記録した。



■特別展 アメリカの水彩画
—ホイッスラーからワイエスまで—
24.0×25.9cm B判変形 140P
カラー図版 66P
トランスコ・コレクション
「アメリカの水彩画概観」 ビーター・C・マーズジョ
「作品目録・解説」 マーサ・テリル
「作家解説」 ジョアン・S・ロビンソン・年表・参考文献

京都国立近代美術館所蔵 アメリカの写真家たち

会期=昭和63(1988)年12月13日(火)~平成元(1989)年1月22日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
後援=京都国立近代美術館



本展は京都国立近代美術館の協力を得てその収蔵品の中から、20世紀前半のアメリカに焦点をあてその代表する写真家16名による154点の写真を陳列した。

写真には記録性と芸術性という二つの意味がある。つまり、現実の光景を瞬時にしてありのままの姿を写し取ることができる。また、芸術の一分野として造形表現をも可能にしていた。20世紀に入りアメリカではそうした写真の特性を追求し展開していった。

アメリカの写真は「近代写真の父」と呼ばれるアルフレッド・スティーグリッツの出現により大きく変貌する。それまでの写真が絵画的な表現や主題を模倣したピクトリアルなものであったのに対し、スティーグリッツはフォト・セッション(写真分離派)運動を展開し写真独自の表現を認め、その芸術性を提唱した。写真特有の機能を使い眼で捉えた現実をそのままに定着しようとした。一方でそれは、アーモリー・ショー以来ヨーロッパの美術を吸収しながら独自の表現を形成しようとしていたアメリカ美術が孕む時代の流れにも呼応するものであった。

アメリカの写真の独自性とはその社会と大地によるものである。工業化社会の発展にによる巨大な都市の形成、その対比として雄大な高野の広がる大自然の存在という二面性、その光景はアメリカそのものの象徴であった。摩天楼あるいはそこにうごめく人々や、大自然のなかに写真家は被写体を見いだした。F64グループのメンバーであったエドワード・ウェストン、アンセル・アダムス、イモージェン・カニングムは雄大な自然を題材に神秘性とそのメカニズムを鮮明に再現した。ドロシア・ラングはFSA(農業安定局)に参加し大恐慌以後の農業の状況を記録し、貧困に喘ぐ農民の姿をありのままに写しだした。ユージン・スミスの活動は『ライフ』などのジャーナリズムと結びつき社会矛盾を告発する大きな力となった。

20世紀前半のアメリカの写真は現実のあらゆる真実を再現できると信じ、記録することで芸術性を獲得していった。本展に見られるような偉大な写真家たちが輩出しアメリカの写真は黄金時代を迎えることとなる。



■特別展 京都国立近代美術館所蔵
アメリカの写真家たち
24.0×25.0cm B判変形 192P
モノクローム図版 154P
京都国立近代美術館の写真コレクション
「アメリカン・イメージ」
—聖性を巡る巡礼— 伊東俊治
出品リスト・技法解説・作家略歴・
関連年表・主要参考文献

木村忠太

会期=平成元(1989)年4月4日(火)~5月28日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室



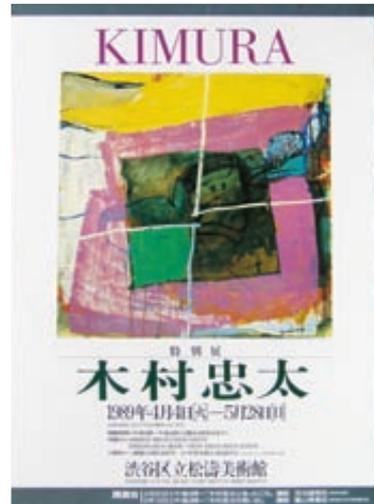
本展は、木村忠太が独自の画風を確立したとみられる昭和40(1965)年から、死にいたるまでの国内外の代表作約100点(油彩・パステル・デッサン)を陳列した、日本では初めての本格的な展覧会であった。

木村忠太は大正6(1917)年高松市に生まれ、昭和62(1987)年7月3日パリで70年の生涯を閉じている。昭和28(1953)年、画家36歳の時にフランスに渡って以後ついに日本に帰ることなく、パリに定住して制作活動を続けた。

木村ははじめボナールの光に満ちた室内情景に強く影響を受け、光を自らの画面に取り込むべく精進を続けるが、渡仏後しばらくの模索期間をへた後、抽象性の強い色面とデッサン風の線描を駆使した独自の画風と方法論を確立するにいたる。木村は常に自然から受ける感動から出発したが、描こうしたのは対象である自然そのものではなく、対象と画家の間に生じた火花のような感動であり、その再現を模索しつつキャンバスとの格闘を続けたのである。その制作過程において、画家は自然に対して畏敬を持つという日本人的素質を強く意識し、強い感動の力に押し迫られるかのように絵筆を進める。しかし、一方では感動の主体である画家の感性が働き、油彩画という西洋のマチエールの獲得にも努めた。画家は感動に対して服従的であるという点で東洋的であり、あくまでも造形作家として感動をマチエールの中に再現しようと努める点では西洋的であった。

完成された作品はあるリアリティを持つにいたるが、それは対象自体の真実ではなく、対象が画家の心に生じさせた感動のリアリティであり、その意味で画家の“魂の真実”であった。木村の絵画は、あくまでも内面的リアリティを追求していたために抽象性の強い画面となっているが、自然からの感動をよりどころとし続けるかぎり、具象的であり続けた。木村が自らの絵画を「アブストラクトの次の時代に来るもの」と自負したのはこのような意味においてである。

彼の画業は、昭和55(1980)年のパリ、グランパレ美術館での現代美術国際フェアにおける展覧や、昭和60(1985)年ワシントン、フィリップス・コレクションでの展覧会などにおいて、現代における絵画のあり方に対する一つの解答例として高い評価を受けているが、このたびの展覧により、日本においても一層評価の機運が高まることであろう。



■特別展 木村忠太
28.5×23.0cm 150P
カラー図版 96P
「キムラを発見する」アーサー・C・ダント
「キムラ」デニス・サットン
「絵画とは光の表現だ—木村忠太氏の思い出」
富山秀男
「光の画家 木村忠太」住谷晃一郎
作品目録・年譜・文献目録

橋本コレクション 中国近現代絵画

会期=平成元(1989)年6月13日(火)~7月23日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



中国の近代は、1840年の阿片戦争を以て始まる。以後、太平天国の乱、義和団事変、辛亥革命、五・四運動、日中戦争、更に国共内戦、中華人民共和国の成立、文化大革命を経て現在に至るこの150年は、波乱に富んだ中国の歴史の中でも、際立った激動の時代であった。この間、中国は様々な面で近代化を成し遂げていった。

絵画においても、伝統的の文人画から職業的の文人画へ、更に、日本や欧州への留学生が伝えた西洋絵画の影響を受け、また日本などに倣って美術学校が設立され、國畫の誕生へと展開していった。

中華人民共和国の成立以後は、絵画の世界に於いても社会主義思想の具現化としての一面が見られ、長い中国絵画の歴史の上でも、制度的、思想的な面でも極めて顕著な変化が見られた時期であった。

本展では、橋本末吉氏収集の中国絵画コレクションの中から、近代初期、上海を中心に活躍した海上派の虚谷、任伯年をはじめとし、呉昌碩、齊白石、徐悲鴻、張大千ら中国近現代を代表する画人百五十餘人の作品を陳列し、中国絵画の伝統を継承しつつ、新たな境地を切り開いていった軌跡を概観した。

時に中国では天安門事件が勃発、文化大革命以来の路線闘争の中で画家達が今後どの様な創作活動を展開していくのかに思いをはせざるを得なかった。



■特別展 橋本コレクション
中国近現代絵画
24.0×25.0cm B判変形 186P
カラー図版 36P
モノクローム図版 52P
「盗作の論理」
—国画改良運動始末— 古原宏伸
「任伯年から呉昌碩へ」 曾布川寛
「賀天健の絵画観」 山岡泰造
「現代中国における画家」
—李苦禪の場合— 味岡義人
出品目録・画人略伝・
中国近現代絵画略年表・文献

三雲祥之助

会期=平成元(1989)年8月8日(火)~9月24日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



三雲祥之助は明治35(1902)年京都に生まれ、昭和57(1982)年に80才の生涯を終えた。ヨーロッパで油絵を学んだ三雲は、帰国後、春陽会などを中心に意欲的に作品を発表し続けた。また、武蔵野美術大学教授として後輩の育成に尽力し、教育者としても大きな功績を残した。更に、美術に関する著述を発表し、美術雑誌にも多くの評論を寄せるなど多方面の分野で活躍した。

三雲の画業は10年間に及ぶヨーロッパ生活から始まる。京都大学を中退した三雲は、大正14(1925)年渡仏し、サロン・ドートンヌにも入選を重ねるようになった。南仏、スペインなどに題材をとった作品は堅牢な写実をもとにした作品である。昭和10(1935)年の帰国から第二次大戦そして戦後の復興期までは、庶民生活や風俗を描くかわら、卓上の静物など身近の題材を愛情込めて描いた。

1950年代になると、三雲の関心は、形態の単純化と立体感、画面構成などに注がれた。その前半期には、画家とモデル、室内など自己と日常の事物をテーマとし、大らかな線と色面による画面の明るさ、節度感を示している。しかし、後半期には、画面は一転して明暗のコントラストとヴォリューム感を強調した力強い作風へと変化する。「パリの審判」や「サロメ」といったギリシャ神話や聖書から題材を採ったテーマを群像形式で表現した作品が多く描かれた。

1960年代になると、筆のタッチを強調した事物と背景が同化し、混沌とした情緒的具象スタイルに変化してゆく。しかし、1970年代から80年代初頭の晩年期は、様式上の様々な実験、試行錯誤の成果が昇華・総合された円熟期であった。この時期の中心的テーマは女性像であった。その前半は端正な女性像、後半は柔かな筆触とニュアンスのある色彩による裸婦像に本領を発揮した。これらの女性像は気品あるエロティシズムを堪えており、三雲が追求した豊かさと生の喜びが表現されている。

本展は、武蔵野美術大学所蔵作品を中心に、油彩画80点に、デッサン、彫刻などを加えた110余点の代表作で構成された。昭和の60年間画業を積み重ねた三雲祥之助の大回顧展であり、多くの人々の注目を集めた。



■特別展 三雲祥之助
24.0×25.0cm B判変形 112P
カラー図版 36P
モノクローム図版 36P
「三雲祥之助の世界」 桑原住雄
「三雲祥之助 若き日の素顔と群像」
三宅正太郎
「三雲祥之助の思い出」 小川マリ
出品リスト・年譜・主要関連文献

渋谷区・パリ市六区文化交流特別展 19世紀ローマ賞絵画 パリ国立高等美術学校所蔵

会期=平成元(1989)年10月17日(火)~12月3日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、パリ国立高等美術学校
後援=読売新聞社、フランス大使館

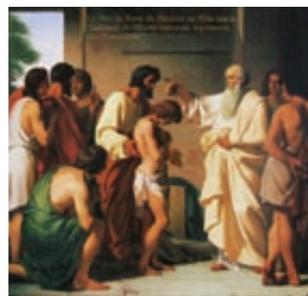
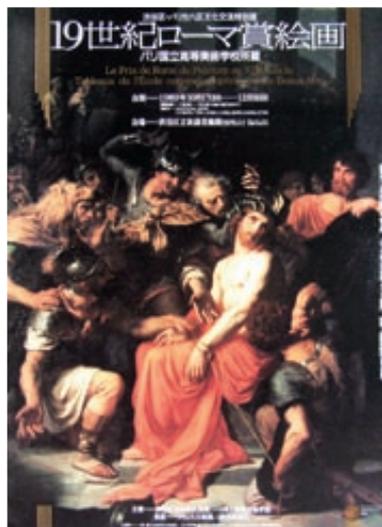


本展は昭和60(1985)年に調印された渋谷区とパリ市六区の文化交流協定にもとづいて開催されたもので、昭和60(1985)年の秋に開催された「エベール・ドラクロワ・ザッキン」展に続く第2回目の展覧会である。陳列作品は六区にあるパリ国立高等美術学校の所蔵品の中から、ローマ賞絵画とそれに関連する作品、油彩画43点とデッサン20点の合わせて63点である。

パリ国立高等美術学校は17世紀中葉にアカデミーの教育機関として創設され、アカデミーの理念—古典を範とした理想美を追及する古典主義—を普及するための重要な役割を果たした。その美術学校で年一度行われる最大のコンクールとして、大きな関心と注目を集めたのがローマ賞であった。寛文3(1663)年から始まり昭和43(1968)年まで300年以上も連綿と存続しており、現在でも形は変わったもののこの伝統は引きつがれている。厳格な規定に則った実技選考を行い同規格の歴史画を最終審査対象としたものであった。大賞受賞者は殆どが25歳までという若き才能で、報奨として政府給付によりローマのヴィラ・メディチにあったフランス・アカデミーに5年間留学し、帰国後はアカデミーを担う芸術家として将来を嘱望された。

出品作品は膨大なローマ賞大賞受賞作品の中からもっとも充実していたフランス革命後の寛政9(1797)年から第二帝政時代の文久1(1861)年までの時期を取り上げたものである。展覧会の構成は代表的な作品や特徴的な作例を取り上げるものではなく、一つの区切られた時代をそのまま提示するという方法である。このローマ賞絵画は一定の基準によって描かれた一連の作品として、年毎の変化は微妙であるにもかかわらず長い年月を通してみることで19世紀という時代精神を明確に示している。

アカデミーの画家は“アカデミズム”という蔑称とともに最近まで、一部の画家を除き著しく低い評価を受けており、作品も一般には殆ど見るができなかった。またローマ賞も一般に馴染みのあるものとは言えないが、近年のアカデミーの再評価とともに注目を集めるようになった。その意味で時宜を得た展覧会であったと言える。



■渋谷区・パリ市六区文化交流特別展

19世紀ローマ賞絵画

パリ国立高等美術学校所蔵

240×25.0cm B判変形 148P

「芸術と教育機関：パリ美術学校

(エコール・デ・ボザール)」

ジャック・テュイリエ

「パリ美術学校(エコール・デ・ボザール)での

1797年から1863年における絵画教育」

フィリップ・グリュンシェック

出品リスト・参考文献

秋山泰計の版画

会期=平成元(1989)年12月19日(火)~平成2(1990)年2月4日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

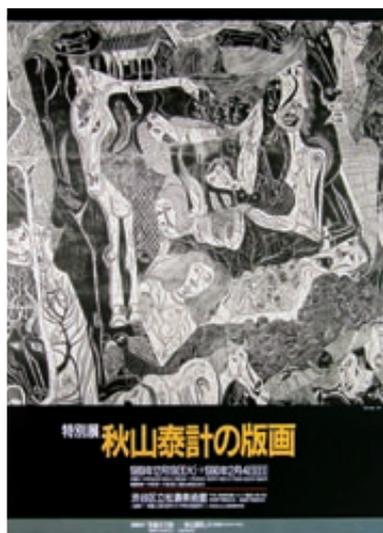


本展は、秋山泰計の木版画のうち主要作すべてを含む71点のほか、フロッタージュや染色作品など総数80余点を展覧し、ユニークな芸術家の軌跡を展望しようとした。

秋山泰計と昭和2(1927)年高松に生まれ、昭和61(1986)年同地で没した版画家である。彼は「おびからくり」などの奇抜な紙造形を数々発案した、ユニークなデザイナーとして著名であったが、東京藝術大学で漆工芸と彫刻を習得し、それぞれに際立った才能を見せるというように、極めて多才で好奇心の旺盛な作家であった。昭和31(1956)年、芸術を捨てるかのように卒然とブラジルに渡るが、創作意欲やみがたく、この地で始めた版画製作はついに彼の一生の仕事となった。

秋山泰計の版画は木版画が主要なものであるが、作風上前期と後期に大きく分けられる。前期はブラジル滞在中から始められ、昭和41年頃、作者40歳頃までの、リアリティともヒューマンスティックとも評されるような版画群で代表される。重量感あふれる人物像や熱気に満ちた風景画は、若い作者の情熱と苦悩を反映して表現主義的であり、描く対象のリアリティに作者の感情を盛り込もうと努める姿勢が見られる。ところが、後期に移行するにしたがって、画面は観念的・装飾的となり、ユーモラスで諧謔的な作風になる。表面に打ち出されていた作者の感情はしだいに画面のうしろに隠されていき、事象を抽象し戯画化する醒めた眼が支配的となる。とって、作者の心情や姿勢が冷めてしまったり消極的になったわけではない。人間や動物、生きとし生けるものすべてが渾然と、ほとんど無規律にひしめきあうような画面を持つ晩年の作品群には、社会や人生の激流に飲み込まれつつも、その中で懸命にもがく人間の姿が、辛辣ではあるが同時に暖かいまなざしをもって描かれているのである。

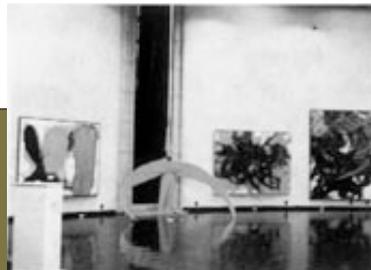
このような秋山の画業を振り返ってみると、彼が終始一貫して“人間”を正視しながら表現したことに気づかされる。秋山はその刀の切れの冴えのごとく俗事には無欲で潔癖な人物であったが、特にかれの小品からは事物の観照における繊細さや情味が感じ取れ、かれの温かい人柄がよく示されている。



■特別展 秋山泰計の版画
24.0×25.0cm B判変形 98P
カラー図版 24P
モノクローム図版 39P
「転生の人 秋山泰計
一捨てられていたスケッチブック」 田口安男
「独歩の鬼才、秋山泰計」 林 温
出品作品リスト・略年譜・資料

〈具体〉未完の前衛集団 —兵庫県立近代美術館所蔵作品を中心に—

会期=平成2(1990)年4月10日(火)~5月27日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
協力=兵庫県立近代美術館

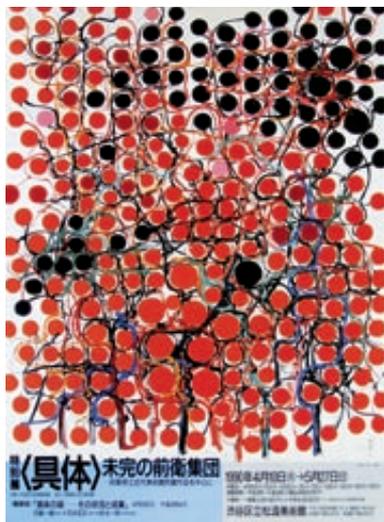


戦前から活躍していた画家・吉原治良の周辺に、戦後、若い意欲的な作家たちが集まり、彼に師事するグループが形成される。これが昭和29(1954)年に「具体」と名乗り、具体美術協会が発足することとなる。以後、彼らは機関誌『具体』の発行、「真昼の太陽にいどむモダンアート実験展」、東京および関西での「具体展」の開催、「舞台を使用する具体美術展」など、グループとして新鮮な活動をめざましく展開する。アイデア溢れる発想、卓抜な宣伝力、めまぐるしいまでの活動の内に、具体は海外進出をも果たし、各国で支持を受けた。

当時の日本は、戦後の精神的な混乱の後に、作家たちは大小のグループを結成し、新しい価値と活動の方法を探求した時期にあった。シュルレアリスムをはじめ海外の美術の動向や、社会的な問題意識がクローズアップされるなかで、具体は「絶対に人の真似をしない」を合い言葉に、それらを乗り越えた視点を持ちえたのだと言える。

昭和47(1972)年に解散されるまで、具体は様々な局面を迎えたが、今回は、その最も創造的な時期である1965年までの初期に焦点をあてた。旧山村コレクション25点を含む兵庫県立近代美術館の所蔵作品を中心に、代表的な18作家の絵画・立体作品55点を展示し、ビデオ・記録写真などの豊富な資料を加えて、具体初期の活動を概観できる内容とした。また、会期中、座談会で作家・評論家とともに具体の意味を回顧する場を得、さらに映画会で当時の実験映画を放映することができたのも、展示会の意義を高めた。

近年いくつかの海外展に出品し、再評価が急激にすすんでいる具体は、関東では長く展覧の機会がなかった。よって多くの関心呼び、あらたな評論活動の発端となったことを付け加えておく。



■特別展 〈具体〉未完の前衛集団
—兵庫県立近代美術館
所蔵作品を中心に—
24.0×25.0cm B判変形 132P
カラー図版 54P
「具體美術宣言」 吉原治良
「拡散と凝縮 吉原治良と具体美術協会」
中島徳博
「[具体]への入口」 千葉成夫
「ラディカルな欠如
—初期・具体美術協会—」 光田由里
具体のことは・出品リスト・
出品資料リスト:具体誌、記録写真、
映像資料・作家略歴・主要参考文献資料・
年表:具体美術協会年譜、
関西前衛グループ活動年譜、
関西前衛グループ資料

版画に見るジャポニズム

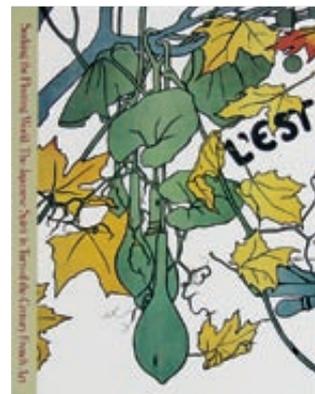
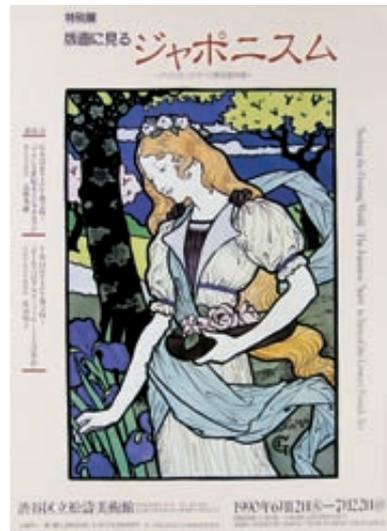
—アメリカ・ジマーリ美術館所蔵—

会期=平成2(1990)年6月12日(火)~7月22日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

19世紀中葉から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパでは、産業革命の進展、中産階級の台頭など社会の激しい変化に対応して、印象派、後期印象派、アールヌーボーなど新しい様式を掲げた美術運動が次々と興った。旧来の伝統的なモチーフ、様式にあきたりず新しい芸術を模索していた画家や美術家達の中から、当時、商品として、あるいは万国博覧会を通してヨーロッパに大量に輸入され始めていた日本の美術工芸品の新鮮な美しさに驚き、日本美術に深く心酔する人々が多く現れた。彼らは日本美術の持つ平明さ、大胆さ、繊細さ、装飾性に新たな芸術創造の活路を求めたのであった。フランスの美術批評家デュルティによって“ジャポニズム”と命名されたこの日本文化に対する強い関心とその受容は深く静かにヨーロッパ社会に浸透したのである。

当時のヨーロッパ社会では、交通、商業の発達、文化の大衆化などにより、ポスター、カレンダー、印刷物や雑誌の装丁、挿し絵、室内装飾などのグラフィック・アートに対する需要が急速に増大した。これらのグラフィック作品制作に積極的に関わったアーティスト達は、当時、彼らを魅惑していた日本の美術工芸品の中でもとりわけ浮世絵の持つ斬新な非対称の構図、明るく強い色面、抑揚のある精緻な線、写実的であると同時に大胆に単純化されたモチーフ、などの諸特質に強く影響され、それらを摂取、応用して独自の新しい作品を生みだしていった。

アメリカ・ニュージャージー州にあるラトガース大学に設置されたJ.V.ジマーリ美術館は国際ジャポニズム研究センターとして知られている。本展は、同館が所蔵するヨーロッパのジャポニズムの作品の中から、リトグラフ、エッチング、木版画などの版画作品を中心に、水彩画、パステル画、写真などのグラフィックアートに焦点を合わせて、19世紀後半に活躍したフランス人作家71人による154点の作品を紹介した。日本初公開の珍しいグラフィック作品に影響を与えた浮世絵を並べて陳列し、影響関係がよく分かるように展示した。ジャポニズムの関心が高まっている折、大きな関心と呼びおこした。



■特別展 版画に見るジャポニズム展
29.0×22.6cm 152P
カラー図版 88P
「浮世を尋ねて
—19世紀末のフランス美術にみる日本の精神」
フィリス・ロイド
「ジャポネズリーとジャポニズムのはざまから」
谷田博幸
作家解説・主要参考文献

松濤美術館 現代の版画 1990

会期=平成2(1990)年8月7日(火)~9月16日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



この企画は版画のもつ特有の表現をとおして、現代の美術に発言しようとしている作家を紹介することを目的に始められたものである。版画という表現メディアが美術のなかで不可欠な要素の一つとして認識される状況をふまえ、同時代の関係のなかで捉えることにより、版画の位置を確認し、その意味と可能性を見定めようとするものである。およそ3年毎の開催を予定しており、昭和62(1987)年に第1回展をおこない、今回はその第2回目である。

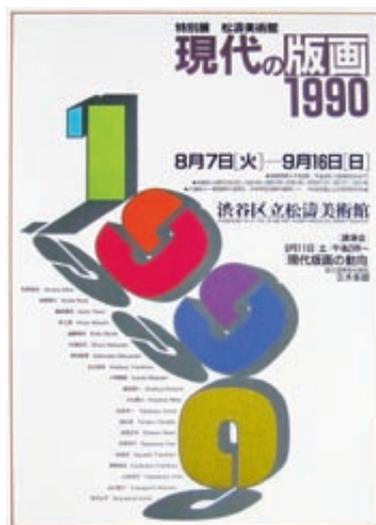
本年は他の美術館でも版画に関わる展覧会が多く開催され、版画に対する注目度の大きかった年であった。前回の第1回展の時の停滞気味の版画の状況とは明らかに異なっていた。それは、版画の表現が現在新たな展開をみせているということの証左であり、それゆえ多くの重要な問題点が浮彫りにされたと言える。

本展にみられた特徴は、写真を使用した版画の多さとその独自性の追求、または写真そのものの提示であった。また、ペインティングとの併用やNECOプリントやゼロックスという新規な技法による作品とインスタレーション的な方法を流用した展示も特筆すべきであろう。さらに全体を通じて画面が大型化しているのも近年に共通した特徴であった。ジャンルの境界が曖昧になってきた今日の版画表現を端的に示す展示となったように思われる。

出品作家の選択と受賞作品の選定は前回と同様に、小倉忠夫、木島俊介、桑原住雄、藤井久栄、三木多聞、藤田國雄の6名からなる選定委員会に委託した。

出品作家は秋岡美帆、池田良二、磯見輝夫、井上厚、遠藤竜太、大浦信行、岸中延年、北辻良央、小枝繁昭、越谷賢一、小山愛人、高原洋一、田中孝、出店久夫、永原ゆり、林孝彦、筆塚稔尚、山口啓介、山本容子、若月公平の20人の作家であり、49点の作品の出品があった。

なお、松濤美術館賞には山口啓介の「水路一王の方舟」が、優秀賞には岸中延年の「Spring into View 90-5」が選ばれた。



■特別展 松濤美術館 現代の版画 1990
24.0×25.0cm B判変形 94P
カラー図版 60P
「今日の版画状況について」 小倉忠夫
「版画の現在地点」 瀬尾典昭
総目録

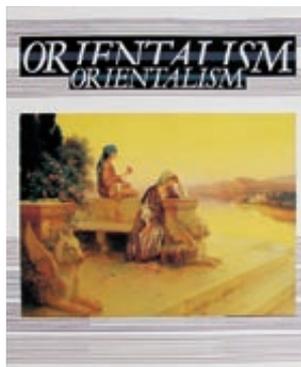
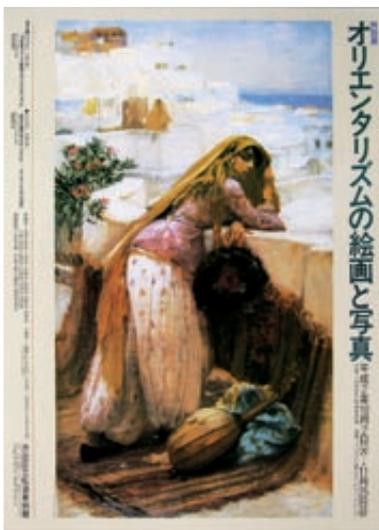
オリエンタリズムの絵画と写真

会期=平成2(1990)年10月2日(火)～11月25日(日)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュゼ、特別陳列室
 協賛=フジパン・富士カントリーグループ

19世紀の初頭から世紀末にかけてのヨーロッパの芸術家はオリエント(イスラム教文化圏)に対し強い興味を覚え、祈りの情景、オダリスク、アラブの騎士たち、広大な砂漠に行く隊商などオリエント世界への憧れを主題に作品を作りあげた。いわゆるオリエンタリズム絵画の出現である。この背景には、当時のヨーロッパ列強諸国の政治的、経済的な関心が強く働いていた。遙かな異国の地への憧憬を胸に自らオリエントへ旅立ったロマン主義の画家ドラクロワが、北アフリカの光の下で色彩家としての本領を見いだしたことは周知の通りだが、当時の多くの画家が色彩と官能性に充ちた世界を求めて夢のオリエントを訪れ、異国情緒にあふれた作品を描いていった。そして、アカデミズム絵画の中においても、オリエンタリズムは主要なモチーフとして定着してもいったのである。

本展は、東方の風物をテーマとした絵画作品50余点とオリエンタリズムの普及に大きな役割を果たした19世紀の写真60余点、そして、同時代の美術状況の中でのオリエンタリズムを位置付けるために、フランス・アカデミズムの画家たち、印象派に連なる風景画家たちの作品など40余点を陳列した。又、併せて、写真部門では、現代の写真家がオリエンタリズムに挑んだ作品30余点を陳列した。

近年、欧米で学問的にオリエンタリズムが研究されているが、日本でも旧来のイスラム世界観をみつめなおす契機になった展観と思われる。



- 特別展
 オリエンタリズムの絵画と写真
 27.0×22.4cm 248P
 カラー図版 150P
 「オリエンタリズムとアカデミー絵画」
 阿部良雄
 「遅れてきたロマン主義者
 —ギュスターヴ・ドレ」 酒井忠康
 「中心の神秘へ
 —写真のオリエンタリズム—」
 伊藤俊治
 「日本の写真家によるオリエンタリズム検証
 —今、何故オリエンタリズムか?—」
 石原悦郎
 「私とオリエント」 加藤卓男
 オリエンタリズム年表・参考文献

海老原喜之助 —その生涯と作品—

会期=平成2(1990)年12月11日(火)～平成3(1991)年1月27日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



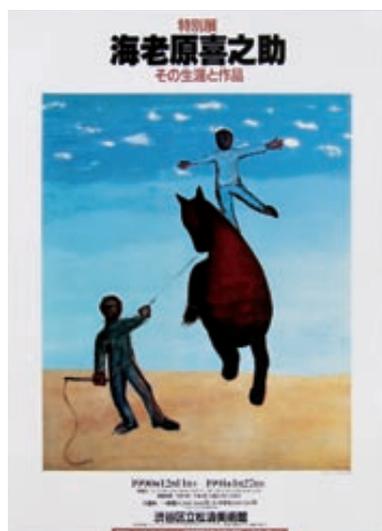
海老原喜之助は、昭和の洋画壇にあって巨匠と呼ぶにたる作家である。本展では、66年に及ぶ生涯の各時期を代表する油絵71点とデッサン・版画・絵付け陶器等22点によって画風の展開をたどり、同時に豊富な写真パネルも合わせて展示して、作品と生きざまの両面から、その魅力を探ろうとした。

海老原喜之助は明治37(1904)年、鹿児島市に生まれた。18歳で上京し、翌年にはすぐフランスに渡っている。この頃の画風は夭折の画家であった村山槐多や高間筆子の影響を受けたフォービズム的なものであった。パリでは藤田嗣治に師事し、エコール・ド・パリの新進気鋭の画家として注目を集めた。特に青と白の色調に統一され、東洋的な趣を持った雪景色の連作は、「エビハラの青」と呼ばれて高い評価を得ている。

30歳で帰国し、翌年独立美術協会の会員に迎えられ、この独立展への初めての出作品である「曲馬」は、我が国の洋画壇に新風を吹き込むものとして大きな反響をまきおこした。この作品に見られる形態の極端なまでの単純化と、そのことによってかもしだされる詩情はこの時期の作品群に共通した特徴であり、フランスでの経験によって生み出されたものであった。

戦後、海老原は、デッサンに没頭する苦悩の数年間をすごしているが、熊本市への転居以後、次々と力作を発表し、数々の賞に輝いている。この時期、作者の眼は明らかに時代や社会の方に向けられている。マチエールや画面構成の面でも力強さが増し、海老原の画業の中でも最も充実した時期であった。晩年の作品にはまた新たな展開が観られ、夢幻性の強い浪漫主義的なものとなっている。

このように、海老原の画風は時代とともに変遷を重ねている。特に日常の中からモチーフを拾いあげて、そこに時代性を反映させた作品が多くみられるが、彼は常に前向きな姿勢で時代に向き合い、その熱い心情を絵に表現した画家であった。その意味で、海老原は昭和の洋画壇とともに生き、それをリードする存在であったと言えるだろう。



■特別展 海老原喜之助
—その生涯と作品—
27.7×23.0cm 152P
カラー図版 104P
「海老原喜之助の芸術的道程」 針生一郎
「人間・海老原への旅」 大沢健一
「海老原喜之助のこと」 大沢昌助
「名作[市場]」 亀倉雄策
年譜・写真でたどる生涯の軌跡・参考文献・
出品目録

橋本コレクション 中国の絵画 一明末清初一

会期=平成3(1991)年4月9日(火)~5月26日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



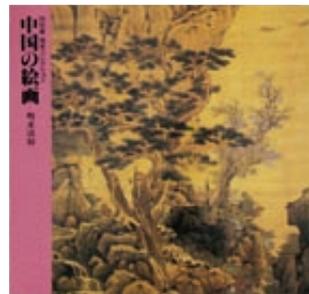
長い中国の歴史の中でも、明末清初という時代は政治、社会、経済、文化のあらゆる面で特筆される時代の一つであるといえよう。政治的には、王朝の交代、それも漢民族王朝から満州族という異民族王朝による統治という激しい変化であり、社会的には商人を中心として松江、揚州、杭州、南京などの都市が活況を呈し、経済的には貨幣経済が浸透して所謂資本主義的要素の萌芽が見られ、文化的には都市を中心に庶民文化が深く広い展開を示すなどの様相を呈したのである。

こうした時代、絵画の世界においても、宮廷、文人、士大夫、商人などの様々な階級の需要に応じる形で、極めて多様な絵画が作られていった。

中国絵画の一つの柱である文人画が官僚士大夫によって担われ続ける一方で、文人画家とはいわれるものの、職業画家と紙一重ともいえる画家たちが多数登場してくる。文人画の主流である呉派も、古画の研究を怠るなどして形式化していくが、それに替わり松江出身の董其昌が古画の研究を第一とする理論を唱導して、文人画に新たな息吹を与えてその地位を確立し、それが清初の四王へ受け継がれて清朝の正統的画風として定着し、清朝宮廷絵画の一つの柱となっていく。この董其昌と同時に、明末の不安な世相を反映するかのような怪異とも言える山塊や人物を描く呉彬、丁雲鵬などの奇想派と呼ばれる一群の画家達が出現し異彩を放っている。更に、王朝交代に際して、二朝に仕えることを拒み、胸中の鬱屈した思いを画筆に託した石濤、傅山らの遺民画家と呼ばれる画家達が個性的な作品を残す。また、戦禍を受けたとはいえ、清朝の安定とともに経済的再建を遂げた都市には、それぞれの都市の風土と需要に応じて、松江、南京、揚州などに独自の画風が育まれ、商人の経済力の増大を背景とする新安派なども登場して、未曾有ともいえる複雑な様相を呈していったのである。

本展は、当館に寄託される国際的にも著名な橋本末吉氏蒐集の中国の絵画のなかから、橋本末吉氏が最も関心を抱かれ、力を入れて集められた明末萬暦年間から清初の康熙年間までの約150年間にかけて活躍した中国の書画家約80作家120点余の作品を陳列し、個性溢れるそれぞれの作品を通して、この時代の絵画の多様化の軌跡を見とるとともに、明末清初という時代についても考えてみた。本展の圖録には、東洋學の泰斗京都大学名誉教授宮崎市定先生に玉稿を賜わり、本展をより意義あるものとしていただいた。

惜しむらくは、本展の開催を前にして、橋本末吉氏が病のために急逝されたことである。橋本末吉氏は、その蒐集された絵画を蔵することなく、日本の研究者は勿論、諸外国の研究者などの利用に供し、中国絵画史研究の発展に残された足跡は極めて偉大なものがあるといえる。橋本氏のご冥福を祈るとともに、その遺志を小館としても可能な限りひきついでいきたいと考える。



■特別展 橋本コレクション
中国の絵画 一明末清初一
24.0×25.0cm B判変形 200P
カラー図版 39P
モノクローム図版 49P
「明末清初という時代」 宮崎市定
「橋本コレクションの明末清初絵画」 曾布川寛
「董其昌とその時代」 味岡義人
出品目録・畫人略傳・
明末清初中国書画史関係年表
明末清初参考文献目録・欧文目録

渋谷区立松濤美術館 所蔵作品展

会期=平成3(1991)年6月4日(火)～6月30日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



渋谷区松濤美術館は、平成3(1991)年10月に開館10周年を迎えた。開館から平成3(1991)年6月までに46回の特別展に加え、区内在住作家展を中心に展覧会活動を行ってきた。この10年間に、出品作家ならびに関係者の方々により作品の寄贈を受け、その数は平成3(1991)年6月まで、20作家、241点に達した。

本展は当館開館10周年を記念して、所蔵品の中より代表作品81点を陳列した。陳列作品は絵画、彫刻、工芸、版画など多数のジャンルに及び、現存作家の作品を中心に物故作家の作品を混えている。

本展を契機にして開館10年のあゆみをふりかえるとともに、貴重な作品を御寄贈して下さった方々ならびにご協力くださった方々に謝意を表すものである。



■渋谷区立松濤美術館 収蔵品目録I
昭和57年—平成3年(1982—1991)
25.4×20.2cm A4判 124P
カラー図版 24P
モノクローム図版 63P
作家略歴・収蔵品総目録・
寄贈者一覧

野島康三とその周辺 —日本近代写真と絵画—

会期=平成3(1991)年7月16日(火)～9月1日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



野島康三(明治22(1889)年-昭和39(1964)年)は、大正期の絵画主義写真の全盛時代と、昭和初期から始まる新興写真の双方の時代にわたって活躍した。日本近代写真において、最も重要な写真家のひとりであるが、その作品の全容が紹介されたのは、これが初めての機会であった。

現在までの日本の写真史は、とすれば、絵画や彫刻などの他の視覚的表現分野から隔離されたかたちで記述されがちであったが、実際には、作風や表現の考え方の上でも、作家たちの交流の面でも、またさらには写真の利用のされかたに関しても、密接なつながりがあったことは事実である。野島というひとりの人物が、絵画にも興味を持ち、彫刻家や文筆家とも親しく交わり、芸術全般のパトロンとしても活躍したほか、画廊経営、出版活動にも大きな業績を残したことから、本展では、この面を重視し、彼の写真作品を、同時代の親しかった洋画家たちの作品とともに展示し、その係わりをあらたにかんがえる機会を提供するよう努めた。

野島が最も数多く作品を残している、絵画主義(ピクトリアリズム)の写真は、非常に精緻な技術を要して、手作業で印刷を行うもので、その陰影の美しさと表現力の強さにおいて、野島作品をはじめとする、日本の近代が生み出した作品群は、ユニークな個性を世界的に認められるべき質の高いものであるが、戦後は、“写真らしくない写真”として評価を受けないままであった。本展で紹介された野島作品の圧倒的な密度は、そうした今までの評価を考え直す機会を広く提供したという点でも、特筆されるであろう。

また、野島は、絵画主義(ピクトリアリズム)の写真から一転して、光や被写体、印画技法のすべてを大きく変えて、新興写真へと取組みはじめ、再び大きな成果をあげたが、その変化の動機、および経緯について今後の研究であきらかにすることができれば、より大きな時代のながれを記述するための貴重な証となるであろう。

なお、本展は、京都国立近代美術館との共同企画として開催された。



■特別展 野島康三とその周辺

29.8×21.1cm A4判 176P

カラー図版 103P

「野島康三序論」 ジェフリー・ギルバート

「野島康三の肖像」 飯沢耕太郎

「野島康三の裸婦像をめぐって」 光田由里

「(見る人)としての野島康三」 光田由里

野島康三略年譜・野島康三のこぼれ

出品作家略歴

兜屋書堂活動歴ほか・主要参考文献抄

写真技法解説

開館十周年記念特別展 中国の漆工芸

会期=平成3(1991)年9月17日(火)~11月4日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



中国の漆工芸はじつに五千年に及ぶ歴史をもっており、日本をはじめ東洋各地の漆工芸の母体とも言える存在である。現在でこそ漆器について“japan”という英語が用いられているが、我が国の漆器の技法も、そのほとんどが中国において生み出されたものである。

漆工芸の歴史は、器胎装飾技法の発展の歴史と言い替えることができる。古く漢代を中心として彫漆の技法が全盛を誇ったが、唐代以降には幾重にも塗り重ねた漆の層から細密な文様を彫り出す彫漆の技法が登場し、もっとも一般的な技法として広く行われた。この技法で飾られた盆や椀は即座に我が国にも輸入され、堆朱や堆黒の名称で珍重されたのである。中でも全面に曲線的な幾何文様を彫り出した意匠が特徴的であるが、日本ではこれを特に屈輪と呼んで愛好し、同種の文様は鎌倉彫りなどにも取り入れられた。さらに、漆の表面を針彫りし、そこに金箔を埋め込んで文様をあらわす鎗金(我が国では沈金と呼ぶ)、線彫りした区画内を彩漆で埋めて文様をあらわす填漆(我が国では存星)、薄く切った貝片をはめ込んで文様を作り出す螺鈿といった様々な技法も考案され、中国漆工芸の世界は、ますます豊かなものとなっていったのである。

中国の漆器は、保存が難しいといった理由もあって、まとまったコレクションは世界的に見てもごくわずかである。そうした中で、今回公開することができたコレクションは、その質と量はもちろん、用いられた技法の多様さという面でも屈指のものであろう。展示総数は123点を数えたが、宮廷周辺で使用されたと見られる皇帝の象徴である龍の文様がほどこされた第一級の作品も多く含まれるなど、開館十周年記念特別展を飾るにふさわしい内容であった。



■開館10周年記念特別展
中国の漆工芸
29.8×23.0cm A4判 131P
カラー図版 90P
「中国の漆工芸」西岡康宏
図版解説・文献目録・用語解説

多田美波

光の迷宮

会期=平成3(1991)年11月26日(火)～平成4(1992)年1月26日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

本展は多彩な活動を展開している多田美波の作品のなかから彫刻に焦点をあて、もっとも初期のブロンズ彫刻から新作の陶板による作品までの36点と、各地に設置してある野外彫刻の写真パネルをあわせて展示した。

多田美波は1950年代後半から制作を始めており、今回初出品であった最初期の具象的なブロンズ彫刻を数点制作したのち、すぐに抽象造形の世界を模索するようになる。抽象形態に移行した直後こそ構成的な作風であったのが、ただちにアルミニウムを叩き出した一種破壊された形態の不安定な作品を制作するようになり、やがて、彼女の形態を決定づけた半球のドーム状で表面が鏡状になった作品を制作する。その発想の原点は、ある空間に置かれた物体の周囲との関係である。従来の単体で独立した存在であるよりも、包まれた空間との相互の働きかけにより生まれる世界を目指している。

そこで彫刻と空間の接点となるのは視覚である。風景(光)の透過と反射という原理をもとに、作品の歪んだ表面は周囲の風景を取り込み非日常の光景を体験させる。つまり、作品の形態(表面)を媒介にして、現実の光景とそこに映し出される光景との実像と虚像の絡み合いを生じさせる。非日常の光景こそは作品のおかれた場所と周囲の環境とを共存させる仕組みであり、それが多田の環境への働きかけとってよい。

環境への働きかけと同時に重要なものは、作品に使われる材質である。ステンレス、ガラス、アクリル樹脂、アルミニウムと従来になかった素材や組み合わせを試みるようになる。作品の形態感には素材の特性が強く反映しており、その特性からの発想が根底となっている。

彼女の造形思考が確立していった50年代から60年代にかけての特徴的な動向は、反芸術とよばれる作品群を生み出した読売アンデパンダン展と、環境造形に対する認識の強まりが指摘されよう。多田の制作にもその動向の影響を無視できない。つまり、彼女の発表は70年代にかけて宇部や神戸の野外彫刻展を中心として、また建築物の内部における照明デザイン・レリーフまた外壁デザインとして展開されており、わが国の経済成長を背景として、都市地域のなかに彫刻が浸透していき、さらに急増していった建築物を中心とする都市景観との結び付きとも無視できない。

そういった意味で、単純でシャープな抽象形態を重視し、素材的にも無機的にも工業素材を多用していた多田の作品は、戦後のモダニスタイルの究極の姿であったのかも知れない。

彼女の作品の性格上、野外に設置してある大型のものが多く、ひとつの会場に移動してその全貌を観ることは困難であり、本来なら設置してある各々の場所で観るのが適当であるかも知れない。だが幾分小型の作品ではあったが、これだけをまとめた展覧会は今までになく、作家の活動を充分提示できたのではないかと思う。



■特別展 多田美波
24.0×25.0cm B判変形 112P
カラー図版 3SP
参考文献 30P
「多田美波の建築関連作品」 毛利伊知郎
「環境への融和
—多田美波の彫刻の場合」 瀬尾典昭
年譜・文献目録・作品リスト

日中国交正常化20周年記念展 明清の書と絵画 江蘇省美術館所蔵

会期=平成4(1992)年4月9日(木)~5月26日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室

六朝以来の古都南京は、歴代王朝にあって江南の中心都市として政治、経済、文化の面で重要な地位を占めた。特に、絵画の世界では、明末清初の都市経済の発展を背景に龔賢を筆頭とする金陵八家が輩出したことで知られる。

江蘇省美術館は、解放前の昭和11(1936年)に国立美術陳列館としてこの南京に建てられ、昭和31(1956)年に現在の呼称に改められた中国でも歴史の最も古い美術館の一つで、特に明清以後の中国書画の収集をもって知られる。その内容は、明代の呉派文人画、浙派、清代の婁東派、虞山派、揚州八怪、京口派、海上派に及び、明末清初以後の中国絵画の展開を語るうえで貴重なコレクションであり、書跡においても、明清の文人の書を中心とする精品を収蔵している。

本展では、その中から、明清時代の絵画72点、書跡27点を陳列し、明朝中葉から清末までの中国絵画の軌跡を概観した。今回の出品作品の中には、黄克晦、夏霖、董朝用、周貴如などの画家の孤本ともいえる作品も含まれ、これらの作品は中国絵画の専門家の関心を集めた。また、黄克晦の「金陵六景図」、張培敦の「清儀閣読書図」、査士標の「行書七絶」などの作品は一般の来館者にも好評であった。

本展は、日中国交正常化20周年を記念して、秋田市立千秋美術館、伊丹市立美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会との共催により開かれたものであり、中国側からは、徐天敏江蘇省美術館名誉館長はじめとする代表団が来日し、相互の友好を深めることができたことは喜ばしいことであった。また、日中相互の交渉過程において、日本に留学中の画家傅益玉女史に御尽力いただいた。女史は、戦前に武蔵野美術大学で学んだ中国画壇の重鎮として知られる故傅抱石氏を父にもたれる。父子二代にわたり日中両国の文化交流に関わっておられ、国交正常化20周年を記念した展観にふさわしい人の活躍を得たといえよう。



■日中国交正常化20周年記念展
江蘇省美術館所蔵 明清の書と絵画
24.0×25.0cm B5判変形 188P
カラー図版 34P
モノクローム図版 26P
「江蘇省美術館沿革」朱 葵
「流派の次々に登場する明清の書画
—江蘇省美術館所蔵の明治書画概論—」
馬鴻増
「明清の絵画」 味岡義人
出品目録解説・畫人略傳・参考文献目録・
明清画家年譜
明代略図／清代略図

文明の十字路・ダゲスタン —コーカサスの民族美術—

会期=平成4(1992)年6月3日(水)~7月19日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
後援=外務省、在日ロシア連邦大使館
特別協力=ロシア連邦ダゲスタン共和国美術館、
ロシア科学アカデミー、ダゲスタン学術センター、国立民族学博物館

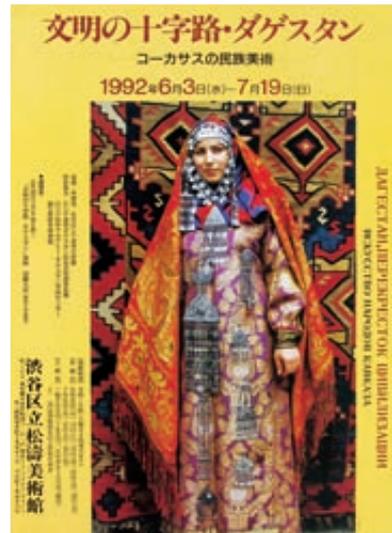


ロシア連邦の一部であるダゲスタン共和国は東をカスピ海に臨み、西と南をけわしいコーカス山脈が連なる複雑な地形の国で、北東コーカサスに属している。この地域は古来より、幾多の民族が侵入し、融合を繰り返してきた。ダゲスタンはアジアとヨーロッパの接点であると同時に、北方ステップの騎馬遊牧民族世界と西アジアの農耕定住社会とを結ぶ文明の十字路的作用を果たしてきた。

他方、山岳地帯を中心に、アヴァール、ダルギン、クムイクなど30を越す民族がモザイク状に居住し、極めて地域性の強い固有の伝統文化を育んで今日に伝えてきている。中でも、ダゲスタンの金属工芸は、精巧なデザインと高度な技術により、中世以来周辺諸国に名声を馳せていた。特にダルギン人の村クバチ村の金属工芸が名高い。又、アヴァール人の村ウンツクルでは銀象嵌の木工が盛んである。絨毯製作ではフチニ、デルベントが、フェルト製作ではラハタ村などが有名である。陶器はイスピク、スレフケントなどで作られ、ラック人の村バルハルの低火度の無釉土器もよく知られている。ダゲスタン工芸の製作者は金属器などを除いて主に女性達であったといえる。

本展はダゲスタン文化省の熱意と好意により、首都マハチカラ所在のダゲスタン共和国美術館及び、ロシア科学アカデミー・ダゲスタン学術センターの2ヶ所が所蔵する貴重な作品を外国に公開したものである。ダゲスタン美術館からは、金属器、木工芸、敷物、染織品、陶器、装身具、生活用品などの粋ともいえる作品の数々を、学術センターからは、1万2千年前の石器から、青銅器時代の金属製品、土器そして中世イスラムの陶器を初めとする考古遺品の数々を公開した。その中には、東西南北の文化交流を証明する遺品として、古代エジプトのスカラベ、バルト海の琥珀、プトレマイオス朝やビザンティンの貨幣、イランの陶器、遊牧民のバックル、中国、宋代の青磁など貴重な作品約200点が出品された。

ダゲスタンは長年外国に国を閉ざしていたため、その文化と美術の実態は殆ど海外に知られていなかった。ダゲスタンの民族の貴重な文化遺産がこれほどの規模で海外に公開されたのは初めてのことであり、ソビエト連邦が崩壊し、ロシア連邦が形成された激動期のロシア情勢と合いまって、民族とその文化遺産を公開した本展は多くの人々の注目と関心を集めた。



■特別展 文明の十字路・ダゲスタン

—コーカサスの民族美術—

29.6×22.0cm A4判 82P

カラー図版 60P

「ダゲスタン・その自然と人々」 杉村棟

「古代ダゲスタンの歴史と文化」 福井泰民

「ダゲスタンの文化と生活」 杉村棟

「ダゲスタンの生活と伝統工芸」 杉村棟

出品作品総目録・地図・年表・

コーカサス・ダゲスタン関連主要文献

生誕百年 中川紀元

会期=平成4(1992)年8月5日(水)~9月13日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



中川紀元(明治25(1892)年-昭和47(1972)年)は、ある意味で、近代日本の洋画家として典型的な生涯を送ったといえるのではないだろうか。

明治25(1892)年長野県辰野町に生まれ、白樺派の時代に芸術を憧憬し、洋画にひかれる青春時代を送った。一方で、父が漢学者で塾を開いていたこともあり、自身、漢籍に親しんで育った。生糸産業の隆盛で地元には活気があり、有志の人々の援助を受けて、渡仏。パリを中心に約2年間滞欧した。この間、大胆に単純化した線描と明るく平面的な色使いの画風をつかみ、それまでの印象派風の作風から抜け出している。中川の滞欧作は、二科展に送られて大きな評判を呼んだ。そして現在も、この時期の作品が彼の代表作と考えられている。

帰国した中川は、洋航帰りの洋画家が誰しもそうであったように、日本に住み続けながら欧州で獲得したものをどのように発展させるか、について試行錯誤した。啓蒙的な著作を出版したり、「アクション」設立に参加するなど、華やかに活動を開始したのだが、「アクション」は短命に終わって中川は二科に残った。大震災後に、「バラック装飾社」を作るなどして社会的な活動と美術を結びつけようとした試みも、挫折した。制作においても、立体派の手法を独自に翻案して日本人の人物像に生かす試みをしたのだが、中川は油彩画に行き詰まりをかんじて、日本画を始めたりする。この、大正末期から戦前までの迷いの多い時期は、現存作も少なく、よく知られていなかったが、実際には意外に質の高い制作時期だったことが、今回の調査で明らかになった。

戦後は、1960年代初頭に、墨絵の筆法をとり入れた枯淡な味わいの画面で、再び独特の画風を作り出した。油彩画に、東洋画の技法と精神を溶け込ませようと努めてきた、帰国以来の中川の長い画業のひとつの到達点がこの頃のものであろう。

中川は、今までマチスやフォービズムとの関係でのみ、滞欧作が論じられてきた程度で、その屈曲の多い画業全体を見直す機会のほとんどなかった画家である。今回は、彼の絵の多様な変容を跡づけ、時代背景の中で中川が模索してきたものを浮かび上がらせることができ、有意義であったといえる。

本展は、中川の生誕地である町の、辰野町郷土美術館と共同の企画展である。出品作75点に加え、焼失などで展示不可能な39点の作品の図版を参考として展示およびカタログの挿図として添えた。



■特別展 生誕百年 中川紀元
29.6×21.0cm A4判変形 134P
カラー図版 80P
「中川紀元—変転の軌跡」 赤羽美洋
「底の深いパッション
—「アクション」時代の中川紀元を中心に—
五十殿利治
「線の画家」 光田由里
作家のことは・年譜・参考文献抄・
作品リスト・参考図版リスト

中野恵祥

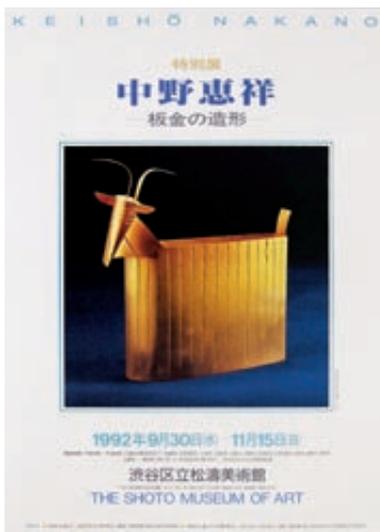
—板金の造形—

会期=平成4(1992)年9月30日(水)~11月15日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室

中野恵祥(明治32(1899)年-昭和49(1974)年)は、ほぼ昭和時代を通して活躍した金工家である。始めて工芸部門が設けられた第八回帝展(昭和2(1927)年)に28歳の若さで初入選して以来、戦後まもなくの第三回日展(昭和22(1947)年)に出品した「双鳥鈕香炉」(東京藝術大学芸術資料館蔵)が特選を受賞するなど、帝展・文展・日展を中心に、意欲的な作品の発表を続けた。

恵祥は、幼少より白崎白善や香取秀真に師事して、彫金・鍍金・打出しなど、金工全般にわたる幅広い確かな技術を身につけていたが、展覧会出品作として世に問うたのは板金による作品であった。鍍金をはじめとする伝統的な金工の仕事にも終生たずさわり続けたが、日展等への出品作には、板金を用いた現代的な感覚のものにこだわった。それは真鍮などの板金を折り紙のように自由に組み立てて、蛙や牛といった身近なモチーフを作り出したもので、従来の金工作品の重々しいイメージとは異なる軽快な作品群であったが、写実と抽象をほどよく織り混ぜることによって、金工という伝統的なジャンルに、大胆で清新な造形感覚を吹き込もうとする企てであったと言えるだろう。

今回の展観では、日展などに出品した代表作を中心とする89点を選んで、彼の芸術の軌跡を振り返った。世に出ることを嫌って黙々と仕事を練けた恵祥は、これまで知る人の少ない存在であったかと思われる。今回の本格的な規模のものとしては初めての回顧展によって、中野恵祥の名は、板金という身近な素材に現代的な感性を表現した作家として認知されたものと思う。



■特別展 中野恵祥
—板金の造形—
24.0×25.0cm B5判変形 72P
カラー図版 24P
モノクローム図版 29P
「中野恵祥について」 中野政樹
「真鍮の匂い」 渾田豊次郎
出品目録・略歴

三木富雄

会期=平成4(1992)年12月2日(水)～平成5(1993)年1月24日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室



本展は三木富雄の耳をモチーフにした彫刻約70点とそれ以外のコラージュ、版画、デッサンなど約80点、併せて約150点を展示した回顧展である。

三木富雄(昭和13(1938)年-昭和53(1978)年)は、はじめアンフォルメルの影響を強く受けたが、篠原有司男らと読売アンデパンダン展に反芸術と呼ばれる作品を出品するようになる。昭和37(1962)年はじめての耳の作品を制作し、翌年に発表して以来、死去するまで耳を作り続けた。彼の耳は同時代の美術界のなかで高い評価を受けたにもかかわらず、マンネリと批判されることも多かった。ダダ的なジャンク・アートやコラージュを制作するなどたびたび転向を試みるが評価は芳しくなく、彼は耳に対する宿命的なものを感じていた。

三木の作品を戦後美術のなかで俯瞰するとき、きわめて特異な存在であることに気付く。それは、60年代を象徴する反芸術の中心的グループであるネオ・ダダ・オルガナイザーに参加しなかったことでもわかるように、ポップ的なもの、あるいはハプニングとは一線を画していた。彼の作品の根底にあるのはモノに対する偏愛と螺旋状に深まる暗い精神世界である。彼の造形世界は同時代とも、またその前後の時代ともうまくつながらない。強いて言うならば、ダダイズム以後の精神世界から生まれたものと言えるかも知れない。それゆえ彼は自作に対する説明の言葉を用意できなかったのであり、周囲はそれをひとつの様式としか観ることが出来なかった。そこに彼の絶望的な苦悩があった。

三木富雄は60年代を代表するもっとも重要な作家でありながら、いままでも系統的に展示されたことはなかった。死の直後の81年の福岡市美術館で開かれたのが唯一の美術館での個展であり、その後は小規模のものが画廊で開かれたにすぎず、それらは作家を評価する上で重要なものであったが出品数は限られており充分なものとはいえなかった。したがって、40歳の短い生涯ながら制作した作品の多くはいまだ未発見であったり、その行動もまだまだ充分な調査はおこなわれていなかった。

今回の展覧会にあたり、経歴における新事実や、新たな作品が多く発見された。最初の耳である〈バラの耳〉をはじめ初期の耳の作品、映画『他人の顔』のセット、耳以外の作品も多く展示できたこと、さらに若い頃の行動や二度のニューヨーク滞在中の行動がある程度明らかになったことは成果であった。とくに、耳の出品数もいままでもない規模であったし、耳以外の作品も併せて展示し三木の全体像を知るうえで重要な展観であったと信じる。

三木と同時代の動向については、いまだまとまった研究が少なく、各作家を改めて捉え直す作業から始めなければならない。その意味で、三木に関する情報も多く集まり、これからの調査に期待できであろう。



■特別展 三木富雄
28.0×22.5cm A4判変形 149P
カラー図版 92P
モノクローム図版 13P
「外部の耳」 建畠哲
「彼は耳を選び、そして作りつづけた」
瀬尾典昭
「耳以前、耳以後、そしてニューヨーク時代」
瀬尾典昭
作家の言葉・年譜・参考文献・作品リスト

現代ドイツのジュエリー・デザイン

会期=平成5(1993)年4月7日(水)~5月23日(日)
会場=地下1階主陳列室



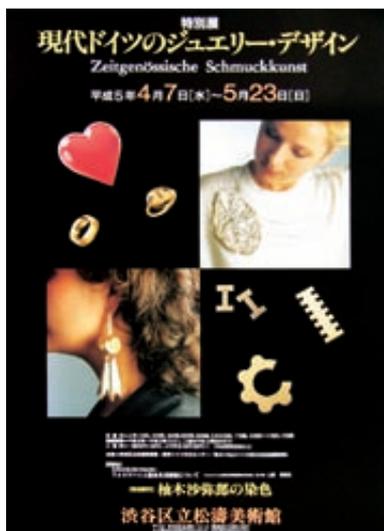
人間は、身を飾るといふ欲求をもって生まれてきた存在といえる。そして、原始から現代まで、人間が自らを飾りたててをしなかった文明は存在しなかったといえよう。その意味では、人間の歴史において、装飾品は古くより最も身近な芸術品であったとって過言ではない。同時に、装飾品は、権力の象徴であったり、宗教的な意味合いを持つなど、それぞれの装飾品をうみだした民族、時代、文化を反映する存在でもあったといえる。

本展は、1989年に、ifa(ドイツ対外文化交流研究所)が、ドイツの宝飾工芸の中心として名高いフォルツハイムなどで活躍するジュエリー・デザイナー25名71点の作品を選んで構成したもので、欧州、アジア各国を巡回し、小館が、日本における会場となったものである。

出品された作品は、必ずしも宝石や貴金属が使われているわけではなく、むしろ、合成樹脂や木、紙などの極めて普遍的に存在する素材が用いられており、作品選択の基準が、芸術表現の優秀性、高度な技術、そして、作者の個性が見られることに重点の置かれていることが知られる。

本展により、現代ドイツにおいて、芸術分野の一つとして、ジュエリー・デザインが極めて重要な地位を占めていることが伺われるとともに、ドイツ芸術の一端を窺い知る好機となったと考える。

また、陳列にあたっては、ifaより機材、陳列ケース、照明器具などが付帯して送られ、また陳列にあたる人員が派遣されてきたが、それらのケースの機能的なデザイン、照明技術の優秀性、効率的な陳列方法など教えられることが多く、その点でもドイツ文化の一端を見ることができた。



■特別展
現代ドイツのジュエリーデザイン
27.0×22.0cm A4判変形 108P
カラー図版 55P
「序(Forword)」 ヘルマン・ポリッヒ、
カロラ・ボーデンミュラー
「ジュエリーと言外の意味」
エリカ・ビレター
「ドイツにおける宝飾デザイン
—あるめざましい発達段階」
フリッツ・ファルク
「所見」 イェンスルーディガー・ロレンツェン
「椅子がテーブル」 ザビーネ・シュトロベル
出品目録

片瀬和夫 —なげるかげ—

会期=平成5(1993)年6月9日(水)~7月18日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



渋谷区立松濤美術館の建築は、日本の美術館建築の中でもきわめてユニークなものである。外観や建物中央の池だけではなく、展示空間も個性的で、高さ6.4mの湾曲した壁面をもつ扇型の地下1階陳列室と、それとは一転してこじんまりしたベルベット張りの壁面の2階陳列室からなり、2階は喫茶室も兼ねている。こうした建築物の特性を十分に活かすために、今までも色々と絵画や彫刻をオーソドックスに展示する以外の方法を検討してきた。そして本展では、主としてインスタレーションの手法で作品を発表している作家、片瀬和夫氏の個展ということで、この課題とも本格的に取り組むことになった。

片瀬和夫氏は昭和22(1947)年静岡に生まれ、昭和50(1975)年に単身ドイツに渡って以来カッセルに居を定め、ヨーロッパを中心に世界的に活躍する現代作家。日本での発表の機会は20年ぶりで、本格的な個展は初めてであった。片瀬は写真ネガを用いて、光、オブジェ、ガラスなどと組み合わせ、瞑想的な空間を作り出すことで知られ、そこに社会的問題意識や東洋的思想の理解を示してきた。今回は、地下1階展示室に日本で制作する新作インスタレーションを1点、2階特別陳列室には既発表のインスタレーションを特にアレンジしたものを設置し、2階サロンミュージゼにはこれまでの代表的な写真作品を展示することとなった。

新作《なげるかげ》は、光と陰を対立物ではなく反転しあう関係物としてとらえる片瀬の存在論の集大成となる作品で、日本での発表ということもあり、障子をイメージした光の間と西洋建築をイメージした陰の間を併置するものであった。二つの「間」の製作には日本の職人的技術の粋を活かして成功し、自然光と人工光の両方の効果が作用して、設置物と展示室空間の特性が調和し、説得力のある作品となり、反響を呼んだ。

展覧会カタログも作家自身のデザインにより、これまでの仕事の集積がとらえやすいものとなった。



■特別展 片瀬和夫
—なげるかげ—
29.0×22.0cm 142P
カラー図版 45P
モノクローム図版 13P
「渋柿の味」 古田紹欽
「ユーラシアの行脚／西洋的見地から
考察した片瀬和夫の作品についての
覚書き」 クラウス・ホフマン
「作家の言葉」 片瀬和夫
作家略歴・主要参考文献

フィリップ・パロスコレクション 絵はがき芸術の愉しみ —忘れられていた小さな絵—

会期=平成5(1993)年8月4日(水)~9月12日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



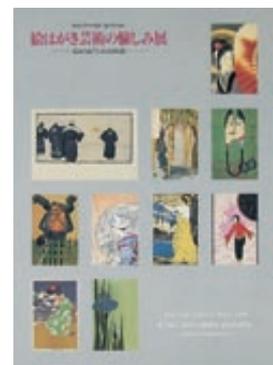
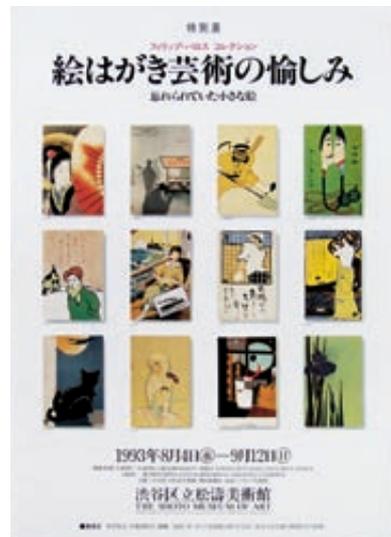
本展は私人蒐集家フィリップ・パロス氏の3000点を越える日本の絵はがきコレクションのなかから厳選した653点を展示した。絵はがきは明治末から昭和初期にかけて大流行したのだが、本展ではそのなかからとくに絵画的に優れたものを主眼として選定された。

これらの絵はがきには当時の様々な分野の有名無名の作家がたずさわり、豊かな発想で表現を展開している。日本画家では橋本雅邦、鏑木清方、梶田半古、平福百穂など、洋画家では浅井忠、中村不折、岡田三郎助、和田英作など、版画家では太田三郎、橋口五葉、前川千帆など、また風刺・挿絵画家の竹久夢二、落谷虹児、中沢弘光、高島華宵、一条成美、杉浦非水、墨池亭黒坊などがいた。時代を反映し、浮世絵風のものからアールヌーボー調まで多彩さがみられるとともに、大きな画面では見られない奇抜な発想や洒落た表現も見逃せない。そのなかでも特筆すべきは墨池亭黒坊であろう。彼の経歴は不明であるがその卓抜した着眼点と葉書の小さな画面におさめる構成力は見事である。

現在より情報の伝達手段に乏しかったこの時代、安価で大量に出回る絵はがきはたんに通信手段である以上の役割を担っていた。現在もよく見かける観光地の土産物屋にあるようなものや美術館で売っている名画の複製といったものから、女性のプロマイド様のもの、広告宣伝用に制作されたもの、事件や出来事の報道記録用に発行されたものなど様々である。

こうしてみると、絵はがきの大流行のなかには明治末から昭和初期にかけての雑誌、新聞、写真、版画などの複製文化の進展と広範な広がり、さらには美術の大衆化が見て取れるだろう。多くの人々はこうした過程において、複製物により視覚的な擬似体験を得るとともに、そこに写された事物は潜在的に人々の共有する図像となってゆく。今一步視点を深めるならば絵はがきの大流行とは文化あるいは美術の大きな流れの一端であったことがわかるであろう。

当時の風俗習慣がしのばれるという方々をはじめ、絵はがきに興味のある人々などや様々なジャンルにまたがった様式であることを反映した多くの入館者の人気を集めた。



■特別展 フィリップ・パロスコレクション

絵はがき芸術の愉しみ —忘れられていた小さな絵—

25.5×19.0cm 252P カラー図版 203P

「絵はがき芸術の愉しみ展に寄せて」 フィリップ・パロス

「過ぎ去った日本の姿」 エリカ・ベシャル＝エルリー

「絵はがきの黄金時代における日本の

挿絵画家たち」 フィリップ・パロス

「絵はがきの語ること

—絵画の大衆化の波のなかで— 山梨俊夫

「絵はがきの芸術性

—その俳句との関連をめぐって— 富田 章

「絵はがきの印刷技術について」 瀬尾典昭

作家略歴、主要参考文献

中世庶民信仰の絵画 —参詣曼荼羅・地獄絵・お伽草子—

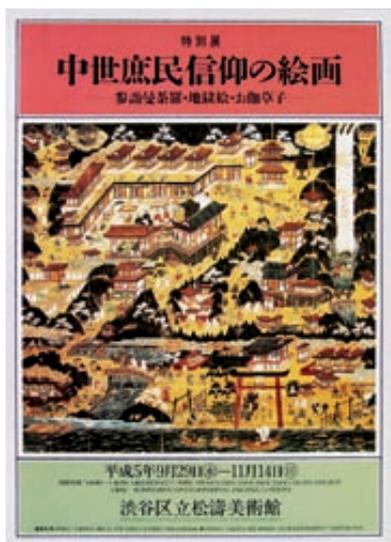
会期=平成5(1993)年9月29日(水)～11月14日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



室町時代から桃山時代にかけての美術のイメージとしてまず連想されるのは、雪舟の水墨画や枯山水の庭園などが一般的であろうか。この展覧会のテーマである宗教絵画は、いわばそれらのかげに隠れた存在であり、信仰史の資料としてはともかく、美術作品としての評価はこれまで決して高いものではなかった。しかし、この時代に制作された数多い宗教絵画のうち、絵解きなどの方法によって庶民を信仰に導く目的で描かれた作例には、それまでの仏画が示していた画一的とも言える表現を乗り越えて、自由で素朴な表現の中に庶民の純朴な信仰心を感じさせるものが見られる。

この展覧会では、参詣曼荼羅、地獄絵、お伽草子を三本の柱として構成した。参詣曼荼羅は中世後期から近世初期にかけて集中して描かれたと考えられる作品群で、多くの参詣者でにぎわう寺社の景観を大画面に描き出したもの。地獄絵は古代から描き継がれてきた画題であり、その時代の庶民の信仰の内面に深くかかわる。中世の作例には、地獄の惨状を描きつつも、地藏などによる救済を描き加えたものが多い。お伽草子は室町時代に始まる短編物語で、さまざまな内容の物語が含まれるが、本展でとりあげた本地物などの宗教的テーマのお伽草子絵作品には、庶民の素朴な信仰が示されている。

この三者は一見無関係であり、これまでこの三者を取り上げて同じ土俵に上げた展覧会は試みられてこなかったのだが、先述した素朴な様式という点でこの三者には共通する要素を認めることができ、その新しい表現様式は現代にも通ずるものである、というのが本展の主張であった。今回の限られた展示作品によってそのような主張を十分に示しえたかどうかは心もとないが、かなりの専門性の強い展観であったにもかかわらず、多くの入場者を得たことを付記しておく。



■特別展 中世庶民信仰の絵画
—参詣曼荼羅・地獄絵・お伽草子—
24.0×25.0cm B判変形 92P
カラー図版 58P
「参詣曼荼羅について」 福留敏男
「中世の地獄絵に描かれた救済」
矢島 新
「社寺縁起絵からお伽草子絵巻へ」
矢島 新
図版解説・文献目録

ペイズリー文様の展開 —カシミアショールを中心に—

会期=平成5(1993)年12月1日(水)～平成6(1994)年1月30日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

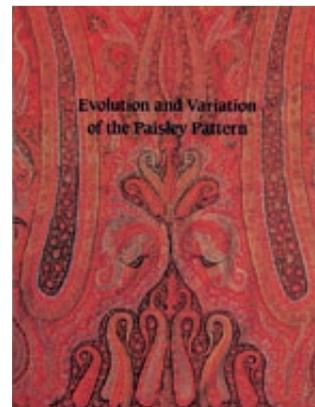
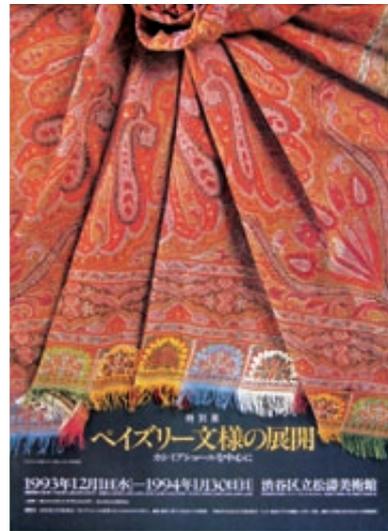


しずく形、勾玉形をしたペイズリー文様は華やかでかつ動的な印象を与える為、男性のネクタイから女性のバック、スカーフ、ドレス、室内装飾にと、服飾、デザインのあらゆる分野に巾広く使われている。現代社会の装飾デザインで王者の如く感じられるペイズリー文様は、どのようにして生まれ、発展して日本をはじめとする世界に広まったかを実物の染織品などによって分かりやすく示し、それが表現された様々なテキスタイルの美を示すのが本展の目的であった。更に、ペイズリー文様はインドを中心に東南アジア、西アジアそしてヨーロッパにまで広がって様々なヴァリエーションを生んでいる。本展では地下1階の第1展示室に、インド、イラン、東南アジア、中央アジアの染織品を、2階のサロンミューゼに、ヨーロッパのショールなどの染織品を陳列して、アジアと西欧の文様に表現された、造形意識、デザイン感覚の相違を対比させてみせることを心がけた。更に、アジアの手織に対して、ヨーロッパのジャカード機械の発明による機械織りの相違も理解できたかと思う。

もう一点は、インドの17世紀のムガル王朝の王侯貴族の着用する着物やショールの裾にほどこされた一本の草花がしだいに複雑化し、曲がって、伸びてゆく様を18世紀後半の王侯ショールの実物展示などによって示した。それはしだいに大型化していった文様がショールの中央部分をおおいつくし、文様が大きなデザインを構成するようになる。このようなショールの発展の歴史を、初期のショール、幅広のショール、19世紀後半のインドのショール、更に、ヨーロッパにおける19世紀のショールの変遷をも実物展示によってたどれるように構成した。

本展の特徴の一つは、17世紀にカシミールでペイズリー文の発生をうながしたと思われるイランのサファヴィー朝、カジャール朝の草花文様を示す染織品の逸品を展示したことである。第二に山辺コレクション、平山コレクションの協力を得て、初期ペイズリー文のインドの染織品と、19世紀後期のショールの逸品、インドの貴族の貴重な染織品などが展示できたこと。第三に、ヨーロッパのデザイン意欲を表現する19世紀のフランス、ドイツのデザイン画を、津和野の亀井コレクションから借用して展示できたことも本展を豊かな内容にした一因であった。

様々な染織品を通して華麗なペイズリー文様の生成発展と展開を提示した本展は日本国内ばかりではなく世界的にも初めての試みであると評価された。



■特別展 ペイズリー文様の展開
—カシミアショールを中心に—
29.5×23.0cm A4判変形 190P
カラー図版 136P
モノクローム図版 22P
「カシミアショールの歴史」 道明三保子
「ペイズリー文様の発生と展開」 福井泰民
「ペイズリー文様雑感」 平山美知子
用語解説
ショール(ペイズリー文様)の道18-19世紀
カシミールの歴史とショール産業
出品作品リスト・参考文献

橋本コレクション 十八世紀の中国絵画 —乾隆時代を中心に—

会期=平成6(1994)年4月6日(水)~5月22日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

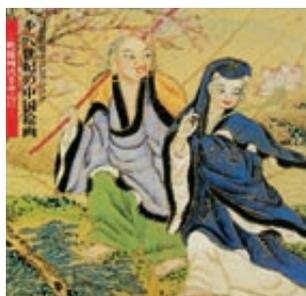
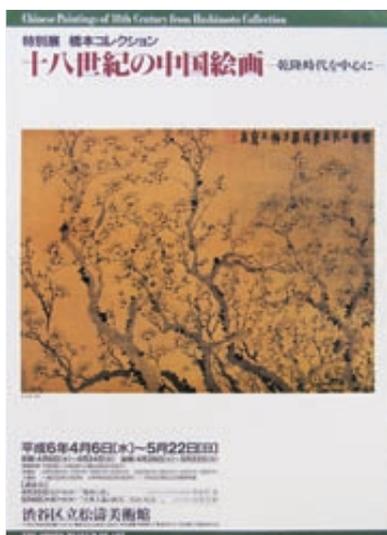
小館はこれまで、5回にわたり橋本コレクションによる中国絵画の展観を行ってきた。

今回のテーマとした18世紀は、清朝の康熙帝の末年から雍正帝をはさみ、乾隆帝の時代にはほぼ相当する。秦の始皇帝以来、歴朝に多くの皇帝が現れたが、満州族という異民族の生まれにもかかわらず、中国史上最も傑出した皇帝に数えられるのがこの3人である。この3人の皇帝の統治下において、清朝は、当時の欧州諸国を凌駕する未曾有の繁栄を遂げたのは周知の如くである。18世紀は中国の時代であったといえよう。

政治的安定のもとに、経済的繁栄が築きあげられ、その経済力を背景に清朝文化は爛熟の時代を迎えた。その典型を塩都として栄えた揚州に見ることができる。塩の取り引きを基として富を築いた揚州塩商は、名画や図書をあつめ、学者や芸術家を庇護したために、全国各地から揚州に文人墨客が集まり、揚州は学芸の中心として確固たる地位を築いたのである。

しかし、嘉慶帝以後、反乱の頻発やそれにとまなう国家財政の悪化などにより、清朝は急速に衰退をみせ、道光帝の時代、阿片戦争に破れて以後、帝国主義諸国の蹂躪を許すことになっていき、揚州もまた、急速に学芸の中心の地位をすべりおちていったのである。

本展では、清朝全盛時代の乾隆年間を中心に、前後する康熙、雍正、そして嘉慶、道光の絵画を陳列し、正統派、宮廷画家、在野の揚州八怪、さらには近世日本絵画の成立に大きな貢献をした来舶画家の作品などを陳列し、中国古典絵画の終焉までの奇跡をたどった。先に開催した、「中国近現代絵画」「明末清初」の間に位置づけられる作品群である。橋本コレクションの主要な作品の紹介は、中国絵画の歴史的展開の意味では、一応の完結をみたといえよう。今後は、更に主題をしぼっての陳列を試みたいと考える。



■特別展 橋本コレクション
十八世紀の中国絵画
—乾隆時代を中心に—
24.0×25.0cm B5判変形 276P
カラー図版 70P
モノクローム図版 64P
「橋本コレクションについて」
山岡泰造
「古典主義の終焉
—仿ということ—」 古原宏伸
「十八世紀の揚州八怪」 曾布川寛
「乾隆時代と揚州
—時代の背景—」 味岡義人
出品目録・人略傳・年表・
乾隆絵画文献目録

残された楽園 ネイチャーフォトグラフィー

会期=平成6(1994)年6月8日(水)~7月17日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

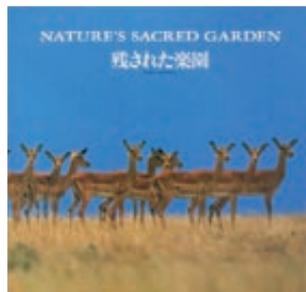
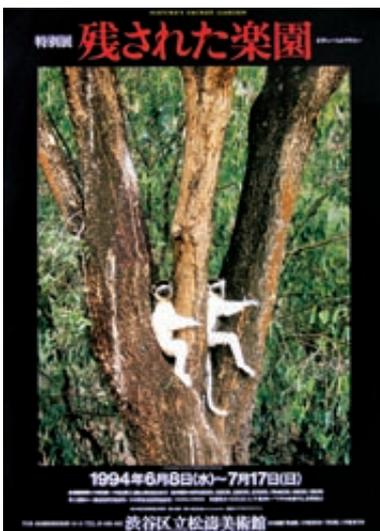


本展では動植物、海洋生物、先住民などのジャンルにおいて世界のジャーナリズムの第一線で活躍する10名の写真家による206点の写真を展示した。

出品作家は各国におよび、日本からは海洋生物に魅せられた伊東勝敏、ダイビングとともに海中の撮影をおこなう大方洋二、日本の野性生物や穏やかな四季の織りなす自然を撮り続けている久保敬親、南米からアフリカ大陸まで辺境の地にカメラを向ける関野吉晴、アラスカに住み人間、自然、動物をこよなく愛する星野道夫、昆虫写真家として世界を駆ける松香宏隆、また米国からは個人では困難な大がかりな海中写真に挑むビル・カートシンガー、海洋生物とりわけクジラ撮影の第一人者といわれるフリップ・ニクリン、プレーリー地帯や北極圏、インディアンなどを精力的に撮り続けるジム・ブランデンバーク、さらにオランダから数多くの先進的テーマを手掛け優れた独創的なカメラアングルをもったフランス・ランティンギを選んだ。

ここ10年くらいのうちに自然を対象にした雑誌が出版されるなど、年をおうごとに自然や環境について関心が高まっている。地球規模での自然破壊、公害問題が深刻化し、平成4(1992)年に開催された地球サミット以降、人間と自然の共生が重要なテーマとなってきている。私たちが体験できる自然環境、動植物は日常生活の中に身近な都市環境のなかにある。それは順応した姿として見落としがちであるが大切な自然の一部でもある。さらに、私たちがほとんど体験できない自然環境もある。海中深い生物の生態、極北の生活や自然、人跡未踏の密林の奥地などである。また、そういった地理的な条件だけでなく僅かな瞬間しか姿を現さない時間的な条件もある。

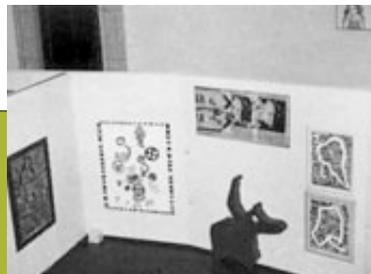
写真家たちはそうした私たちの体験できない自然環境を、写真という装置で具さに目の前に提供してくれる。それらは疑似体験ではあっても遠い場所も出来事もまさに一目瞭然とする事が出来る。自然の美しさ、不思議さ、たくましさなど、地球に生きる物の本来の姿—残された数少ない楽園の存在を認識できるだろう。そこから私たちは自然にたいしていかなる視点をもちえるのかが試されていると言えるだろう。



■特別展 残された楽園
ネイチャーフォトグラフィー
25.0 × 25.5cm 168P
カラー図版 142P
出品写真家紹介・撮影地地図・
作品解説

フランスの肖像 —ルノワール、ピカソ、 マン・レイからバルテュスまで—

会期=平成6(1994)年8月3日(水)~9月18日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージエ、特別陳列室

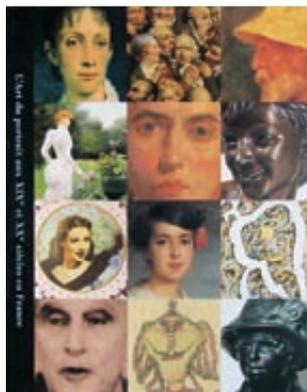


肖像は命に限りある人間の姿を写し、とどめ、残したいという基本的な欲求から生まれたもので、古くから時代の権力者や特権者の肖像が作られ、モニュメントやシンボルとして社会的に機能してきた。

しかし近代になり、フランスで革命が起こって市民階級が台頭してくると、肖像はもっと広い範囲の、大衆の市民が持ちうるものとなった。写真が発明されると、絵画や彫像以外の、もっと簡便な肖像を得ることが可能となり、肖像はますます多数作られるようになりえた。この時代は、人の姿を写すという造形芸術のひとつの機能が大きく状況を変えたため、絵画や彫刻が写実的な役割から放たれて、様々なスタイルを生み出していくことになる、変革期の始まりとも重なっている。

本展では、こうした19世紀後半の変革期以降のフランスに的をしぼって、肖像画や肖像彫刻の多様な展開を紹介した。フランス各地の美術館、個人コレクションから珍しい作品も多数出品された。約100年間にわたる、油彩画、彫刻のみならず写真、オブジェ、ビデオなどフランス現代美術の最新の成果を含んだ、多様な分野の作品約100点を、時代順や様式別などにとらわれない、内容に従った展示方法で紹介することにした。展示は、正面像、側面像、背面像といった人物の向きや、正統的女性像と悪女の像といった道徳性、自画像、集団肖像、権力者像、家庭人の肖像などの公共性といった面から構成され、最後に死者の像を掲げて、肖像が人間の死と深く結び付いた芸術であることを示すものである。

猛暑の中を多数の入館者が訪れ、話題を呼んだ展覧となったが、アンケートによると従来の方法と異なる展示方法について賛否両論もみられた。こうした議論を含めて、今までに例のない展覧内容を提示できたことは意義深い試みだったといえよう。



■特別展 フランスの肖像
—ルノワール、ピカソ、マン・レイから
バルテュスまで—
28.0×22.5cm 162P
カラー図版 121P
「メッセージ」
ジャン=ベルナール・ウーブリユ
「主よ、主はわがために
来たまいしや。」
ジャン=ミシェル・リベット
出品目録

渋谷区・パリ市六区文化交流特別展 フランス国立貨幣博物館

会期=平成6(1994)年10月12日(水)~12月4日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



渋谷区はパリ市6区と文化交流を継続している。その事業の一環として、既に松濤美術館に於いて過去2回の企画展を実施してきた。(エペール・ドラクロア・ザッキン展。フランス国立美術学校、ローマ賞絵画展。)今回はその第3回目の特別展である。

フランス国立貨幣博物館は、昭和63(1988)年にパリ市6区にあるフランス造幣局の中に開設された貨幣とメダルの博物館である。ここでは古代から現代にいたるフランスのコインやメダルを陳列する他、貨幣制度や制作技術、流通機構などの一般の人々の理解と知識を深める為に創設された。

本展は、フランス国立貨幣博物館の所蔵品の中から、古代から現代までのフランスを代表する640点のメダルとコイン及びその拡大模型を、更に、現代フランスの代表的なブロンズ彫刻の作家の代表彫刻31点を加えて陳列し、他に貨幣関係の歴史資料を加えて全750点あまりの作品で構成されている。

紀元前のフランスはローマ人にガリアと呼ばれており、ケルト人などが居住していた。彼らはギリシャ・ローマ人と接触して、抽象的図柄の独自のコインを製造した。本展ではマケドニア、フィリップ2世の金貨や、フランス各地の種々のケルト貨幣が出品された。

中世では、シャルルマーニュ大王はローマ帝国のデナリウス貨幣を手本として、フランク王国のドゥニエ貨を作成したが、これは中世全般を通じての基本通貨となっていた。この時代は王の肖像の他、宗教的なモチーフが貨幣に刻まれた。

15世紀から18世紀後半の旧体制の時代はアンリ3世、4世とも重要な通貨を作成し、ルイ13世は金貨とエキュ銀貨を発行、続いてルイ14世は自身の肖像を数多くの貨幣・メダルを発行したがそれらの多くが出品された。

共和政の時代には市民社会にふさわしい自由・平等を象徴するヘラクレスと女神の5フラン貨やマリアンヌ貨に種々女の図柄が使われた。

第1次大戦以降、銀などの貴金属が減少して、小額貨幣としてのアルミニウムが登場し、紙幣の時代となった。

メダルとしては、ダリヤやマチエールなどの一流作家によるデザイン作品が数多く出品された。又、日本の美術品や風俗をテーマにした外国作家によるメダルも数多く出品されて注目を集めた。

本展は、フランス文化の粋ともいえる貨幣とメダル二千年の歴史を示す作品750点により構成されて、日本に於けるフランス貨幣の初めての展覧会として愛好家のもとより一般の人々の関心を集めた。



■特別展

渋谷区・パリ市六区文化交流特別展
フランス国立貨幣博物館
24.0×25.0cm B5判変形 168P
カラー図版 78P
モノクローム図版 28P
「貨幣の歴史」 J.ブローブル
「メダルから芸術的ブロンズまで」
L・ケールベ・ヴィロン
「フランス国立造幣局」 J.M.ダーニス
「貨幣の技術」 J.ブローブル
出品リスト・文献・用語解説・地図

現代の版画1994

会期=平成6(1994)年12月14日(水)～平成7(1995)年1月29日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



本展は、昭和62(1987)年からはじめ3、4年おきに開催している「現代の版画」シリーズの第3回目である。「現代の版画」は今日の美術のなかで、版画をとおして発言しようとしている作家に注目し、版画というジャンルから美術の展開を見てみようとする企画である。オリジナリティをもち将来的にも新たな方向を示しうるとされる注目すべき作家を、毎回20名前後選び、新作を依頼するものである。

今回の出品作家は、飯塚二郎、出原司、井出創太郎、大島成己、太田三郎、海東忠彦、杉山晶子、鈴木頼子、曾根光子、高浜利也、西村正幸、藤木正則、増田史朗、宮井里夏、山本麻友香、横田亜弓、艾沢詳子の17名で出品総数は53点であった。

前2回について設けていた賞を今回からは取り止めた。それは展覧会の焦点を、より状況を示す方向に向けるためであり、いきおい受賞作ひとつをもって見られることを避けるためである。

17名の作品は様々な方向を指した作品群でありひとつの傾向としてまとめることは困難であるが、今回の特徴を一言で現すならば、版画らしくない版画ということがいえるかもしれない。版画家が版画だけを専門に制作するという姿勢から、さまざまなメデュームのなかのひとつとして意識する傾向が強まり、彫刻や絵画などと平行してまた交互に関係を持ちながら制作することが増えたためと見られる。そして表現形態もフレームを飛び出し、インスタレーションの方法をとるものが多かった。

しかしながら、本展が今日の版画表現の形態や概念性への柔軟さをみせる一方で、その限界をも露呈していたのは事実である。版画というジャンルがひとえに技術区分で捉えられることを前提としているならば、「版」であることの積極的な意味を見いだせない今日の、「(絵)画」であることの不可欠な意味を追究することこそ作品生成に重要であろうと思われたのである。



■特別展 現代の版画1994
29.7×21.0cm 124P
カラー図版 85P
「版画に対する意識と視点」
瀬尾典昭
出品作品目録参考作品目録

香港・梅雲堂所蔵 張大千の絵画

会期=平成7(1995)年4月5日(水)~5月21日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

辛亥革命後、中国は急激な変革を迎え、あらゆる面で近代化に向かって歩み始めた。絵画においても、西洋や日本の影響を受けつつ新しい中国絵画が上海を中心に展開されていった。そうした中で、中国の伝統的絵画を継承し、中国古典絵画の研究を通じ、優れた天分により、独自の絵画世界を創造し、中国絵画史上に一つの金字塔を樹立したのが張大千である。

張大千は1899年に四川省で生まれ、明末清初の石濤、八大山人から遡り、董源、巨然、王蒙などの古典的絵画を研究し、ついで敦煌に赴き、敦煌壁画の臨摹に努めた。中国に共産党政権が誕生して後は、ブラジル、アメリカなどに住みつつ欧米各国や香港、台湾に往来し、各国で展覧会を開催して国際的にも活躍、また、1956年にはピカソとも交わりを結び、後年には「東洋のピカソ」とも称されている。1957年に眼を患って以後は、潑墨潑彩による独創の絵画世界を形成し、1976年に台湾に帰り住み、1983年に台北に卒した。

日本との関係は極めて深く、青年時代に兄で虎の画を善くしたことで知られる張然孖とともに日本に留学したのに始まり、香港、台湾への往復の途次には日本に立ち寄り、眼病の治療や、日本で画材を購入して多くの作品を日本で制作している。晩年の潑墨潑彩の作品には、日本画のたらしこみの技法が応用されているともいわれる。

梅雲堂は、張大千と四十余年の長い交わりを持った高嶺梅氏と夫人の詹雲白女士及びその十一人の子が、張大千の藝術を広く伝え、併せて中国近代絵画に対する国際的認識を高めるために創設したもので、張大千藝術を語るうえで不可欠な作品を多数所蔵していることで知られ、これまでも香港、台湾、東南アジア各国、欧米での展覧会はその所蔵品が数多く出品されている。

本展では、梅雲堂所蔵の張大千絵画120点を陳列し、早期の古典研究をもとにした清新俊逸な画風の作品から、敦煌壁画を学んで以後の中期の瑰偉雄奇な作品、そして晩年の潑墨潑彩による独創の絵画世界の形成に至るまでの張大千の画業を回顧した。

本展では、奈良大学の古原宏伸先生より、張大千を中心とする倣の問題について御講演いただいた。中国画の倣古と創新の問題について考える一つの良い契機になったと思われる。



■特別展 香港・梅雲堂所蔵 張大千の絵画
24.0×25.0cm 204P
カラー図版 108P
「梅雲堂所蔵張大千絵画の鑑賞」 高美慶
「張大千先生の山水画」 古原宏伸
「張大千事略」 味岡義人
出品目録・略年譜・主要文献目録

—変容する神仏たち— 近世宗教美術の世界

会期=平成7(1995)年6月6日(火)~7月23日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



この展覧会は、平成5(1993)年の特別展「中世庶民信仰の絵画」の後を受けたもので、それに続く近世(江戸時代)の宗教美術を取り上げた。300年近くも続いた近世は、一般に宗教が墮落し、宗教美術も衰えた時代といわれるが、庶民のレベルで見れば、檀家制度が定着し、日本的な信仰の形態である神仏習合が完成するなど、宗教が生活にもっとも深く浸透し、影響を持った時代であった。宗教美術の面でも、禅の改革者白隠の気魄あふれる書画や、生涯を旅に過ごした造仏聖円空や木喰の素朴な仏像、細密な文字絵で敬虔な仏画を描き続けた加藤信清の作品など、様々な作家によって個性豊かな作品群が生みだされている。大津絵や浮世絵などの新しいメディアによって宗教美術が庶民に広く普及したのもこの時代であるし、各地の寺院にのこる宗教美術作品のかかなりの部分は、この時代に製作されたものなのである。

もっとも、近世の宗教美術全般を見渡すと、前代のそれを踏襲したにすぎない造形的に見どころの少ない作品が多いのも事実である。本展はそのような作品は極力省こうと努めた。また、石仏や絵馬、あるいは社寺の装飾彫刻など、近世宗教美術の一端を担う重要な作品群でありながら、今回取り上げることができなかったものも多かった。その意味では、本展は近世宗教美術の全貌の概観は目指さなかった。

今回取り上げようと試みたのは、主題や様式など何らかの点で近世的な新しい表現内容を持った作品である。宗教美術の大衆化にともなって、従来見かけることのなかった大胆な構図や戯画的な内容を持った作品が登場してくるが、それらのユーモアあふれる表情豊かな表現には、堅苦しいイメージが先行した以前の宗教美術には見られなかった新鮮な魅力がある。また、造仏聖が各地に彫り遺した素朴な仏像や、禅僧が余技で描いた書画などは、専門的な訓練を受けていない素人の造形であるが、真摯な修行の末にたどり着いた宗教的境地があられたものも多く、近世の“人格の表現”として評価されるであろう。

今回の展覧では、若冲や大雅といった著明な絵師の作品から、大津絵や地獄絵などの庶民の信仰に基づくものまでを含む83点によって、そのような近世らしさを探り出そうと努めたが、近世宗教美術の豊饒な世界を少しでも示しえたとすれば幸いである。



■特別展 —変容する神仏たち—
近世宗教美術の世界
25.7×19.0cm 108P
カラー図版 72P
「変容する神仏たち
—近世宗教美術の世界」 辻 惟雄
概説と作品解説(矢島 新)

大正・昭和の水彩画

—蒼原会の画家を中心に—

会期=平成7(1995)年8月8日(火)~9月24日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

明治時代は水彩画が大変はやった時代であった。一時は油彩をしのぐほどでもあった。当時の代表的な水彩画家として、三宅克己、丸山晚霞、大下藤次郎、吉田博などがある。特に大下藤次郎は水彩美術雑誌「みづゑ」を刊行し、水彩画の為の日本水彩画会研究所などを設立して、明治後期の日本における水彩画の向上と普及に努力した。

やがて、大正期に入り、同2年には日本水彩画会が設立され、南薫三、石井柏亭、赤城泰舒などの水彩画家が活躍するようになった。しかし、大正期は、明治後期に比べると水彩画は美術的に革新性を欠き、新鮮味を失っていった。又、展覧会場では大型の強い油彩に比して弱く、その為、水彩を捨て油彩に向かう者が大半であった。この時期に注目すべき水彩画を残したのは油彩画家であり、萬鉄五郎、古賀春江、岸田劉生、坂本繁次郎、長谷川利行などがすぐれた水彩画を残している。

このような水彩画の不振を打破しようとして結成されたのが蒼原会の運動である。大正11(1922)年、日本水彩画会研究所の若き画家、小山良修、中西利雄、富田通雄の三人が東京で水彩画家の研究グループを作った。東京三脚会という会はのちに蒼原会と名を改め、全国に水彩画の普及活動を展開していった。毎月写生会を催し、展覧会を行い、地方支部を結成した。又、「新興水彩」という水彩画雑誌を刊行した。大正11年から昭和15年頃までが活動のピークだった。特に中西利雄は水彩を油彩に負けないものとするため、不透明水彩を併用したり、画面の大型化に挑戦した。他に医者であった小山良修は会のまとめ役として活躍し、銀行員だった富田通雄も南画的水彩を残した。東京では、渡部菊二、不破章、荻野康児、岡田正二、藤江志津、小堀進などが活躍し、多くの傑作を残している。

更に注目すべきは地方の蒼原会の作家である。九州では、宮崎羊邨、田代順七、瀬戸内地方では名柄正之、西原務、杉原茂右衛門、長田健二、岐阜では上田栄一、北海道では繁野三郎、野口俊一、佐藤進などが独自の作品を残している。

戦後になって蒼原会の活動は終えんの方角に向かったが、この運動の中から日本水彩画会が継続され、新たに水彩連盟が結成されており、蒼原会は、日本近代水彩画史上に大きな功績を残したといえる。

本展では、当館始めて以来の最高入館者数を記録し、図録も完売した。水彩画の新しさ、やさしさが油彩中心の自己主張の強い現代絵画に疲れた人々にいこいと安らぎを与えたともいえよう。更にこれまで水彩画の展覧会が非常に少なかったことも一因であろう。重要性があるにもかかわらず、蒼原会の活動を地方作家の作品をも含めて、体系的に紹介する試みがこれまで一度を行われてこなかった。今回の展覧会によって、モダニズムの流れやアカデミズムの流れからはずれ、傍流となった水彩画の日本絵画史において果たした存在と意義がみなおされたといつてよいであろう。その証拠に岐阜では、上田栄一の初めての個展が開催され、北海道でも佐藤進の大回顧展開催などがあり、蒼原会を含めた近代日本水彩画に対する見直しと研究が展開されつつある。



■特別展 大正・昭和の水彩画
—蒼原会の画家を中心に—
29.5×22.5cm 168P
カラー図版 119P
蒼原会:忘れられた水彩画普及運動
「みづゑにかけた画家たち」 福井泰民
「私観蒼原会始末随想記」 松島 靖
「葦のすいから天井覗く」 岡田節男
蒼原会資料・参考図版・作家略歴・出品目録

—闇を刻む詩人—
日和崎尊夫
木口木版画の世界

会期=平成7(1995)年10月10日(火)～11月19日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



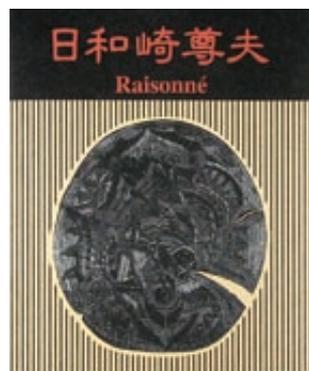
日和崎尊夫の初期から晩年までの約500点の版画作品と、あわせて版木やビュランなどの制作道具の遺品を展示した。生まれ故郷であり作家の愛した地元高知の県立美術館と共同企画で開催した日和崎の芸術の全貌を紹介する初の回顧展である。

木口版画は19世紀の西欧で隆盛し、おもに書物の挿絵として用いられた技法である。堅い木口の版画に刻むため精密で微細な表現ができるのが特色である。日本には明治中頃にやはり印刷目的で導入されたが、やがて写真製版にとって代われ急速に衰退した。

日和崎尊夫は、戦後、衰退していたその木口版画を独学で蘇らせた。そして本来書籍や活字に従属し実用に供されていたこの技法を、個の表現として高めることに見いだしたことは高く評価されている。60・70年代の質的に大きく変わろうとしている美術状況の中で彼は異端の存在だったにもかかわらず、時流に逆らうかのように緊張感をはらみつつ自らの表現を究めたのである。宿命的なまでに木口版画の制作と普及に傾注した彼の影響も受け、この技法をつかう版画家が幾人も生まれたことから存在の大きさが窺える。

その作品は黒の画面の中にビュランで刻み込んだ微細な白描が、暗い宇宙の闇から星の光芒が差し込むように無限の増殖を繰り返すイメージを持っている。

本展では現在までの調査で判明した可能な限りの作品を紹介することをもくろんだ。美術学校卒業から版画をはじめた頃の貴重な色彩をほどこした板目木版の作品と「星のたたかい」「鳥魚」「窓の中・鏡」など初期の木口版画、代表作を次々発表し充実していた時期の「KALPA」「海淵の薔薇」などのシリーズ、彼を本質的に育んだ詩と画の合作「星と舟の唄」「薔薇刑」「ピエロの見た夢」「卵」「緑の導火線」などの詩画集、また仲間たちとの「鑿の会」での作品や同人誌「鑿」、最後の火花をほとばしらせた晩年の「未来都市」「永却回帰」などを展示し、またカタログも全作品を網羅したレゾネの性格も持たせた。「カルパ」とは悠久の時を意味する日和崎が持ち続けた世界であり、その生涯をかけた「カルパ」の深遠なる精神世界の表現を感じていただけたと思う。



■闇を刻む詩人 日和崎尊夫 木口木版画の世界
26.9×22.3cm 199P
カラー図版 33P
「刻み込まれた星雲
—日和崎尊夫の木口木版画— 岡田隆彦
「脚とビュラン—断章 日和崎尊夫—」 柄澤 齊
「カルパは駆け抜け—日和崎尊夫 人と作品—」
鍵岡正謹
「詩へのオマージュ」 影山千夏
「瘦身の内に —日和崎尊夫と1970年代の状況」
瀬尾典昭
日和崎尊夫年譜
文献資料目録
出品リスト

映画伝来

—シネマトグラフと〈明治の日本〉—

会期=平成7(1995)年12月5日(火)～平成8(1996)年1月21日(日)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
 主催=渋谷区松濤美術館、朝日新聞社
 後援=映画生誕百年祭実行委員会、フランス外務省、フランス大使館
 助成=国際交流基金、芸術文化振興基金
 協賛=稲畑産業株式会社、資生堂、コニカ株式会社
 協力=リュミエール兄弟協会、フランス国立映画センター、リュミエール研究所
 松下電器、日本航空



明治28(1895)年12月に、パリでリュミエール兄弟が映画を初公開してから、ちょうど百年目にあたる平成7年度、映画生誕百年を記念する各種事業が開催された。本展もその一環にあたり、リュミエール社の映画と、日本との係わりについて実証し、考察する展覧会として企画された。

スクリーンに映る、動く映像は、当時シネマトグラフと名づけられ、盛んに輸出されていた。これが日本に渡って人々の評判をとったのは、世界初公開から1年余り後の明治30(1897)年2月、大阪・南地演舞場を皮切りとする。同時に、フランス人技師により日本の風物もシネマトグラフに撮影されて、日本映画が作られたのである。

その当時の短いフィルムが33編現存しており、これをまとめて〈明治の日本〉と題し、今回ビデオ上映した。大阪・南地演舞場の内部を模したスクリーンセットに〈明治の日本〉を映写するほか、南地演舞場で初公開されたプログラムの再上映も行った。加えてリュミエール社の初期映画、日本人の手による初期日本映画のビデオ上映も合わせて行った。

さらに、初めて日本に渡ったシネマトグラフの技師コンスタン・ジレルの写真や手紙と、明治31(1898)年に来日した同技師がブリエル・ヴェールの写真・書簡などの新発見の資料を展示した。二人の撮影した映画や、旅の資料から、帝国主義の世界を映画がどのようにめぐり、何を映し出してきたかがうかがわれる。

これらの映画草創期のフィルム、資料と合わせて、初期映画の題材について考察するセクションをも設けた。海外を旅して撮影された初期映画には、各地の街頭風景、農業などの労働、食事のような風俗、そして芸能が重要なテーマであった。これらの主題が映画に先攻するメディアである絵画、書籍、写真などにどのようにとらえられていたかを比較対象として提示し、異文化との接点として、映画の伝来を考える一助とした。

当時はフランス・リュミエール社のシネマトグラフの他に、エジソン発明のアメリカ産映画も多数輸入されており、両者の関係は錯綜していたが、本展ではエジソン側の映画には触れなかった。映像の展示は美術展示と時間・空間面で異なっており、今回も工夫を試みたが、今後とも課題にしたい。



■特別展 映画伝来

シネマトグラフと〈明治の日本〉

21.5×15.3cm 204P

カラー図版 24P

映画以前

「映像文化に流れ込んだもの」山口昌男

「カメラが捉えた日本『明治の日本』から

『リュミエール映画日本篇』へ」古賀太

「ジレルとヴェール

世紀末日本を訪れた二人の映画技師」

光田由里

「『聞奏の章』『天国、しかも曖昧なる-』日本」

吉田喜重

「シネマトグラフとは何だったのか

イデオロギー装置としての映画」小松 弘

「描かれた〈明治の日本〉日本への／

日本からのまなざし」木下直之

『明治の日本』上映記録

大阪初上映プログラム(南地演舞場)

映画伝来年表

江戸の人形 —祈りと遊びの世界—

会期=平成8(1996)年4月9日(火)~5月26日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

人形は「かたしろ」「ひとがた」などと呼ばれ、人の身代わりとして災厄や汚れを取り除くといった呪いや信仰の具として使われてきた。

一方で、這子(ほうこ)と呼ぶ人形を作り、子供の成長の無事を祈る風習も生まれ、さらには、遊びの道具としての雛人形が生まれ、雛祭りが今に受け継がれている。

江戸時代には、人形は多面的に展開し、雛人形も寛永雛、享保雛などそれぞれの時代の流行と特徴を持つ雛人形が生まれた。

また、子供の遊具とは別に、御所人形などの大人の鑑賞の世界で愛でられる嵯峨人形などが誕生し、地方ではそれぞれの地方の特色を濃厚に持つ郷土人形が作られ、また、精巧な動きをするからくり人形は、江戸時代の科学技術の一端を示す物である。

本展では、江戸時代の這子(ほうこ)や雛人形、京都で制作された御所人形、佐賀人形から、地方の特色を豊かにもつ堤人形などの郷土人形、精緻な細工による動きを誇るからくり人形まで約350点を陳列し、信仰とも結びついた江戸の人形の雅やかな美を検証した。

本展の出品作、中でも御所人形の多くを京都の御門跡より拝借することができた。「枕草子」に、子供が這い這いしつつ何かをつまみ上げてみせる様が可愛いといったような記述があったが、正にそれを思わせる人形の姿であり、その人形を愛でたであろう姫宮の心もまたおしはかれるものであった。



■特別展 江戸の人形
—祈りと遊びの世界—
24.0×25.0cm 176P
カラー図版 112P
「日本の人形」 山辺知行
「心の文化、雛祭」 西澤形一
「日本の人形—御所人形・
嵯峨人形・賀茂人形—」 切畑 健
「郷土人形の魅力」 千葉惣次
出品目録
用語解説
主要参考文献目録

版画の1970年代

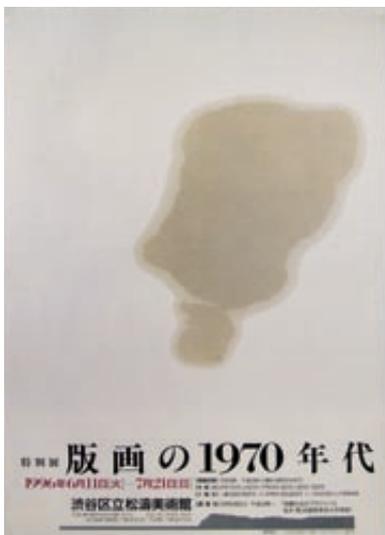
会期=平成8(1996年)6月11日(火)~7月21日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

本展は1970年代に制作された、およそ60名の作家による版画作品を120点ほど展示し、多くの作家が版画に目を向けていた「版画の1970年代」の展開を見ようとするものである。

1970年代におけるわが国の版画状況は、戦後のめまぐるしい変遷の中でも特徴的な時代であった。単に技法や表現が多彩だったというだけでなく、その後の方向をも示唆する大きな変化が認められる。この時期、画家はもちろんデザイナーや彫刻家などさまざまなジャンルの作家が、積極的に版画を制作するようになり、版画にとって新たな意味が付加されるきっかけとなった。

版を使う版画といっても、その制作過程では描くという要素も多分にあり、それを根底におきながら版画は成り立っていた。しかし、この時期にはその描くことを極端に省く作品が現れる。描くことに替わるのが、刻む・刷るという方法を行為として認識し、版画というジャンルが持つ意味や制作プロセスの構造を解きあかそうとすることと、映像のもつイメージを引用・記録し表現を展開することであった。

その背景には、時代の美術に呼応する技法と表現を獲得したことが大きな要因であったといえる。このような版画の方法を追究することで、版画は実験的な作品をうみだし、また他のジャンルにも影響を与え、新しい価値を作り出した。本展をとおして、この時期の版画の特質がどのようなものであったかを改めてみる機会となったことと思う。



■特別展 版画の1970年代
29.7×21.1cm 126P
カラー図版 96P
「状況と特質」
—「版画の1970年代」について—
瀬尾典昭
東京国際版画ビエンナーレについて
関連年表
作家略歴
参考文献
出品リスト

日本の象牙美術 —明治の象牙彫刻を中心に—

会期=平成8(1996)年8月13日(火)~9月29日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



世界において、象牙を中心とした動物の牙、角、骨を加工した、いわゆるアイヴォリー使用の用具、彫刻、工芸品はおびただしい数量を数える。太古の昔から人間は、動物の骨角製品を多用してきた。本展には、日本における主に象牙を中心とした骨素材を使用した美術工芸品の歴史をたどった展覧会である。

日本では、奈良時代の正倉院の工芸品の数々に象牙を使用した作品例をみることができる。木工品は象牙を細かく象嵌した木画技法の箱や楽器、更に紅や紺色に染めて文様を白く彫り抜いた撥鏤(ばちる)技法の作品など世界的に最高水準の工芸品が伝わっている。室町から江戸時代にかけて、床の間の飾りの品々に象牙が使用されるようになり、特に戦国大名の高価な茶入れの蓋や茶杓に用いられた。江戸時代は町人の中で印籠や根付の材料としてもはやされ、更に、煙管筒や矢立、女性の櫛、簪など広範囲に使用された。

幕末から明治にかけて、社会が変動して根付がすたれ、代わって明治10年代から、象牙を丸彫りした置物彫刻が盛んに制作された。これらの牙彫り置物彫刻は、木や漆器に貝や象牙を象嵌した芝山象嵌漆器の家具、調度品などとともに、内国勸業博覧会や諸外国万国博覧会に出品され、海外に盛んに輸出されたが、後期にはそのブームも去った。近代のモダニズム芸術の陰に埋もれた感のある象牙彫刻だが、明治中期には、旭玉山、石川光明、島村俊明の優れた牙彫作家が輩出して、木彫復活への契機と橋わたし役を担ったとされている。

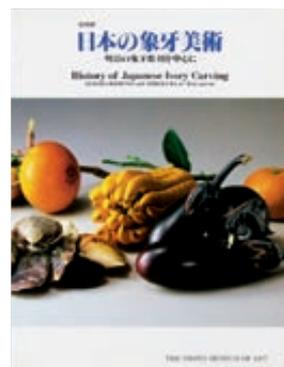
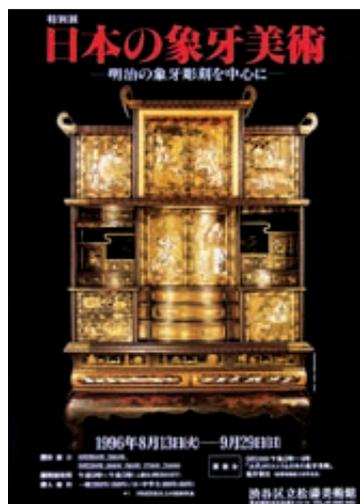
本展は未だかつて総覧されることのなかった、日本の象牙彫刻を590点の作品と古代オリエント、中国、ヨーロッパの作品を加えることによって、世界が象牙彫刻の中に位置づけを試みた。

本展の構成の一要素としては、象牙の着色技法の継承がある。着色技法は古代エジプトから存在する技法で、日本では正倉院の撥鏤技法以後消滅し、江戸の柳川技法の櫛に復興する。更に根付の一部にもみられ、明治以降、安藤緑山の着色置物となって受けつがれてゆく。そして現代に継承されてゆく。本展は、村松親月氏による、撥鏤技法復元作品の陳列と技法の階程の表示や着色材料の陳列を行い、未だ解決されてない着色技法問題へ一視点を示した。江戸末の柳川も撥鏤でなく漆使用の描き技法ではないかとの監察が寄せられた。

本展では、明治、大正、昭和の象牙彫刻の優品作品の出品に主眼が置かれたが、今後は海外に流出した作品を発掘し、比較研究することによって、全体像が描けるようになるであろう。更に、本展には、石川光明、島村俊明らの木彫作品も出品された。牙彫と木彫との関係は、明治の木彫の総合的調査によって可能となると同時に、今後は両者の比較検討が重要な課題となるであろう。

本展では海外に流出した芝山家具の里帰り展ともいえるべく、バブル時に国内に買い戻された作例を可能な限り探して代表作を陳列した。象牙象嵌の芝山家具にも今後、より多くの関心と研究がふりあてられるべきであろうことが予見された。芝山技法の工芸に関しては未だに不明な点が多くあることが今回の調査で認識できたからである。

本展は、日本で初めての象牙彫刻展であり、日本の研究者及び、根付や象牙彫刻制作者をはじめ、海外のコレクターや研究者からも注目される展覧会となった。



■特別展 日本の象牙美術 —明治の象牙彫刻を中心に—
29.3×22.6cm 256P
カラー 図版 136P
「日本の象牙美術展によせて」 高円宮憲仁親王
「日本の象牙美術」 福井泰民
「正倉院の木画と撥鏤について」 木内武男
「象牙の茶道具」 矢崎格
「江戸時代の象牙工芸について」 谷田有史
「彫塑と工芸のはざまで」 大熊敏之
「芝山象嵌」 小泉和子
「明治の牙彫置物盛衰史」 福井泰民
「正倉院撥鏤復元作品制作工程」 村松親月
「象牙彫刻置物制作工程」 小針樹生
「芝山象嵌工芸制作工程」 宮崎輝生
内国勸業博覧会出品の象牙、牙角美術、出品目録
彫刻競技会(東京彫工会)出品の象牙、牙角美術、出品目録
東京彫工会会員名簿
日本の象牙美術出品リスト
参考文献

開館15周年記念特別展 文字絵と絵文字の系譜

会期=平成8(1996)年10月15日(火)~11月24日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室

近世以前の我が国の絵画、あるいは東洋の絵画表現全般を見渡してみると、教養ある文人が自らの絵に書を加えた自画自賛のものをはじめ、詞書きをともなう絵巻物や賛と呼ばれる詩文を持つ禅画、あるいは賛が寄せ書きされた詩画軸など、文字と絵が親しい関係にある作例を多数挙げることができる。ただ、それら絵画から工芸にいたる様々な局面でみられる文字表現のそれぞれにおいて、文字と絵の関わりは一樣ではない。文字を書く人と絵を描く人が同一であるか否か、あるいは文字情報の内容が和歌や源氏物語などの和の範疇に属するものか、漢詩漢文や禅の奥義といった漢に属するものかといった分類も可能であり、文字と絵の関わりについての総合的な把握には、今後様々な観点からの洗い直しが必要であろう。

本展で主に取り上げたのは、単に文字と絵が画面に併存するだけでなく、そこからさらに一步踏み出した作例であるが、それらを文字絵と絵文字の二つに分類することで、文字と絵の係わりを議論する際の手掛かりとなるように意図した。まず文字絵は文字的要素が含まれた絵画表現を指し、①細かな文字の集積によって図様を描き出すものと、②画面の中に文字を隠し込むものの二種を大きく取り上げてみた。文字絵①には経文や梵字を連ねて塔や尊像を描き出した敬虔な宗教的な作例が多く、文字絵②は和歌から抜き出した文字を水辺の情景の中に隠し込んだ筆手絵と呼ばれる典雅な作例から、「へのへのもへじ」のような戯画的なものまで幅が広い。

一方、絵文字としては、③太書きの文字の輪郭の中に絵を描き込むなどして文字を飾るものと、④絵を表音文字のように用いて言語的な意味を伝えるものの二種を取り上げた。この絵文字③のような装飾文字はもちろん西洋にも多くあるが、壽の字を様々に変容させた中国の作例、素朴な味わいを持った李朝の作例、機知に富んだ浮世絵の文字遊びと並べてみると、東洋の文字表現のヴァリエーションの豊かさに驚く。絵文字④で主として取り上げるのは浮世絵の中の判じ物であるが、そのユーモアのセンスは現代でも通じるだろう。

本展で取り上げた諸作品には、これまで美術としてあまり評価されてこなかったものが多い。造形の普遍性や純粋性を評価する西洋近代の価値基準で測れば、それもやむを得ないことであつたのかもしれない。しかし、細密な経文を精魂込めて書き続ける宗教的情熱や、機知に富んだ遊び絵の軽妙な味わいは日本文化の独自の一面を鮮やかに示しており、日本美術の豊かな表情の一つとして、欠くことのできないもののように思われるのである。



■開館15周年記念特別展 文字絵と絵文字の系譜
25.5×19.0cm 136P
カラー 図版 85P
「工芸に見る文字の意匠
—漆芸品を中心として—」 小松大秀
「江戸時代の文字遊び」 稲垣進一
「大小暦略説」 大久保純一
「文字絵と絵文字の系譜
—作品解説を織りこんで—」 矢島 新

女性の肖像 —日本現代美術の顔—

会期=平成8(1996)年12月10日(火)～平成9(1997)年2月2日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



「美人画」「婦人像」「裸婦像」は美術作品の大きな部分を占めているが、どんな目的で、誰を描いたのかを問われないまま一般化し、次第に強固なジャンルになってしまった。しかし、これらの定型化された女性像がなぜこれほどまでに繰り返し描かれるのかについて考えるべき点は多く、しかもほとんど意味のないモチーフ・画題として女性像が確立しているために、問いが欠落したまま覆い隠されている様々の問題がある。

本展では、女性像の定型には収まらないリアルな女性像について考察しようとした。油彩画、日本画、版画、立体など、ジャンルを横断した視野の下、昭和初期から戦中、戦後のリアリズムの時代を中心に、現代に続く具象的な表現の系譜のなかに、どのような観点から新しい人間像が求められ、女性の像として描かれたかを紹介した。

具体的には、「肖像画と自画像」、「母へ／から」「時代の群像」「メディアの中の顔」の4つのパートを設け、それぞれ多様なジャンルを含む展示を行った。

まず、一般化されない個人として描かれた「肖像と自画像」では美術家の家族や友人、女性の美術家自身がモデルになった作品を集めた。身近な人々の姿が真摯に描写された女性の肖像は、男性の肖像画が普通は高名な人物の像であるのに比べ、親密で愛情に満ちた表現がとられる。女性の自画像では、既成の美や女性らしさと自分自身との間の軋轢から、自分をみつめることの困難が重要な主題となっている。

「母へ／から」では、母親像、老母あるいは老女の像について集めてみた。近代日本の女性像のなかで、最も精神性をこめて表されるのは母親像であり、聖母子像を通俗化したような安易な母像を除くと、完成された母としての老母像が最も敬意をこめて描かれる。という仮説を設定してみた。老女像は高い精神を持った人格者として表され、性的オブジェのように扱われる若い女性の像と対照される。女性像にはモデルの年齢の別によって、少女像、婦人像、老女像と分類でき、それぞれに異なった意味が担わされているようだ。

「時代の群像」では、風俗画、プロレタリア美術、戦争画、擬人像など、時代の顔として描写された女性像をとりあげた。

「メディアの中の顔」では、60年代から顕著になった、消費されるイメージとしての女性像の系譜を戦前からたどり、女優やコマーシャルの虚像をめぐって、リアルさの本質的な変容がたどれる内容とした。

従来の時代順、ジャンル別、作家別などの展示はとらず、作品の内容の関連を検討するような見方を提示した。また、様式交代史としての美術史観をとらず、リアリズムの系譜を昭和初期からたどり直すことにより、新たな史観を試みた。



■特別展 女性の肖像 日本現代美術の顔
23.9×18.9cm 132P
カラー図版 91P
「女性の肖像
—日本現代美術の顔について」 光田由里
出品リスト
作品解説
作家略歴

中山岩太

モダン・フォトグラフィー

会期=平成9(1997)年4月8日(火)~5月25日(日)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
 協力=兵庫県立近代美術館、芦屋市立美術館



中山岩太(明治28(1895)年-昭和24(1949)年)は、日本の写真史において、際立った個性をもつ作家として知られているが、その全貌を本格的に紹介するのは、本展が初めてである。兵庫県立近代美術館および芦屋市立美術館に寄託されている中山岩太の会所蔵の作品に加え、阪神・淡路大震災により倒壊した中山写真スタジオから救出された作品や資料などをあわせ、代表作約130点を展示して、日本近代写真の精華である中山作品を展覧した。

中山は、東京美術学校臨時写真科の第1回卒業生で、大正7(1918)年から昭和元(1926)年までニューヨークを中心にアメリカに滞在して活躍し、写真スタジオを経営した後、ヨーロッパに渡り、昭和2(1927)年の帰国までパリの前衛作家たちと交流しつつ、モダニズムの芸術運動を体験している。帰国後は、昭和5(1930)年にアシヤカメラクラブを設立し、先鋭的な写真の造形実験のリーダー的存在となって、モンタージュ、多重露光など華麗なテクニックを駆使した作品を発表し、雑誌「光画」の同人としても活躍した。

徹底して、写真を自己表現の手段と考え、スタジオ内での技巧を凝らした制作を専らにした中山の作風は、写真の記録性を重視する従来の写真史のメインストリームからは、異端視されることもあった。しかし写真が芸術のひとつの分野として確立した現在から見ると、彼の作品の高い芸術性は、十分に新鮮であり、意義深い達成のひとつであることは、うたがいないであろう。

開花した日本のモダニズムと、ファシズムに彩られた文化の日本化が交錯した、1930年代の諸問題は、中山の作品の展開へも色濃く影を落としている。彼はいわゆる「新興写真」が批判され、ストレートな記録的な写真の需要が高まっていく時代の流れの中で、あえてこれに異議を唱えて自己の内面に沈潜し、1940年代には最も写真的でない表現、すなわち抽象表現へと向かった。

中山の制作の軌跡は敗戦に大きく分断され、彼が戦後を十分に生きることなく亡くなったために、中山は単なるモダニストと見なされがちである。しかし、移入モダニズムの手法と自己表現とを厳格に区別しながら、写真というメディアをあらゆるテクニックを持って内面化しようとした彼の仕事は、日本の近代美術史においても、最も真摯ありかただったことは忘れてはならないだろう。



■特別展 中山岩太
 — Modern Photography —
 27.6×21.0cm 192P
 モノクローム図版 126P
 「私的評伝・中山岩太」 中島徳博
 「中山岩太 内面的写真」 光田由里
 純芸術写真、新しい写真、抗議、作家の立場から、
 広告写真に現はれた前衛写真、
 ウォルフ型とマン・レイ型
 (以上中山岩太の原文の再録)
 年譜・没後の主な展覧会・主要文献目録・出品目録

久保 守

会期=平成9(1997)年6月10日(火)~7月20日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

久保守は明治38(1905)年、札幌に生まれた。兄はプロレタリア劇作家の久保栄であった。兄の栄と共に油絵を描き始めた久保は、大正13(1924)年に東京で学び始めた。

藝大卒業後、昭和5(1930)年-昭和6(1931)年のヨーロッパ留学を経て、師梅原龍三郎の勧めで、春陽会から国画会に移籍した。27歳で国画会会友となり、以後同会を舞台に作品を発表し、日本の洋画壇に確固とした地位を築いていった。

昭和19(1944)年、母校の東京藝術大学に戻った久保は、以後27年の長きにわたって後進の育成に携わり、多数の優れた画家を世に送り出している。

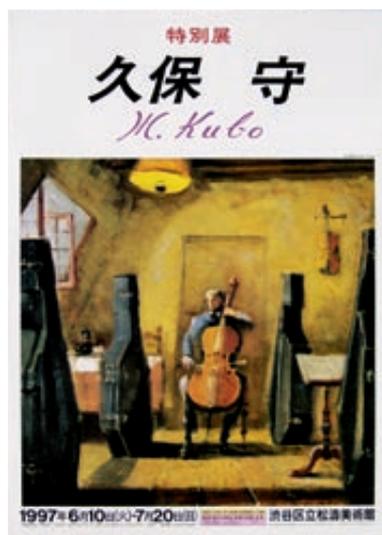
1950年代からは、日本国際具象派美術展、国際形象展などに出品、我が国を代表する画家の一人として、理知的で情感あふれる作風を示した。

久保守の絵画世界は、初期の写実的な画風から、戦後は立体感を強調した力強い実在感豊かな人物画、風景画に変化し、1960年代には、室内の椅子やテーブル、または人物を単純化して組み合わせた幾何学的形態の画面へと変化していった。その後久保は、アトリエの身近な題材を描いた静物画や室内画の他に、楽器を演奏する音楽家や芝居を演じる俳優など、舞台情景を描いた作品群に他の日本人洋画家には見られない独自の画境を拓いた。それらの画面には人生の悲喜劇が造形のドラマとなって繰り広げられ、誰もいないステージや、ひっそり室内に置かれた楽器や静物に形象のハーモニーが奏でられている。

東京藝術大学退官後は、平成4(1992)年暮れに生涯を閉じるまで伊豆高原のアトリエで、更なる新しい境地へ向けて制作に没頭。その一途な探求精神は、穏やかな海辺の風景や生きる喜びを歌い上げた花や静物画に、さらには厳しい情念を託した心象風景絵画などとして結実したと言える。

久保守は油彩による具象絵画の可能性を一貫して追求した画家であり、卓越したデッサン力と緊密な構成力に基づく画面は、都会的な洗練とエスプリを感じさせ、静謐で貴族的な気品を放っている。

本展は、久保守の全作品の中から代表作を数多く選び、油彩約85点にデッサン、水彩、陶器などあわせて約120点の作品で構成した没後初めての大規模な回顧展である。



■特別展 久保 守

24.0×25.1cm 146P

カラー図版 84P

モノクローム図版 13P

「久保守賛」 瀧 梯三

「未完の変貌」 白根光夫

「晩年の修羅」 山口安男

「フォルムの室内楽 久保先生の想い出」

志村節子

「久保 守 一美の螺旋階段を登った画家

あるいは音楽の形象化を夢みた詩人」 福井泰民

「わが半生の記」 久保守の原文の再録

参考写真・年譜・出品目録

日中国交正常化25周年記念・ 江蘇省美術館所蔵 20世紀の中国絵画

会期=平成9(1997)年8月5日(火)~9月21日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
共催=読売新聞社、美術館連絡協議会

20世紀の中国社会は、辛亥革命、日中戦争、中華人民共和国の成立、文化大革命などを経て、政治的、社会的に激変し、今日では改革開放政策のもとで新たな道を歩んでいる。

絵画の世界でも、政治的、社会的、そして思想的な影響を受け大きな変革が見られた。従来の古典的文人画から、国画へ絵画の主流は移り、日本や欧州への留学生がもたらした日本画や西洋絵画の影響により、その国画もしだいに変貌を遂げていった。また、絵画の学習方法も、従来の臨模を中心とする方法から学校教育中心に変わっていった。さらに中華人民共和国成立後は、同じ山水や人物を描いても、そこには、祖国の発展を歌い上げ、国家建設に邁進する人民の姿を描くなど、共産主義思想の影響を受け主題が変化していく。文化大革命時代には、多くの画家が他の知識人たちと同じように批判を受け、投獄や自殺に追い込まれたものもいた。また、描かれた作品も時代を反映した独特なものとなっている。そして、近年の改革開放政策のもとで、作風は自由に、主題も多様なものへと変わりつつある。

本展では、国画の展開にかかわった呉昌碩から、日本や欧州へ留学して新風をもたらした徐悲鴻、傅抱石などから、現代画壇で個性を発揮する傅小石、石大法などの作品100点を陳列し、20世紀中国絵画の歩みを顧みた。

今日、例えば上海美術館で開かれているビエンナーレなどでは、より自由な作風の作品が見られる。とはいえ、まだ、政治的・思想的に制限されている部分も多くあるのも事実である。今後とも、中国絵画がより魅力的なものになるためには、より一層の自由が必要であると思う次第である。

なお、本展は、江蘇省美術館の全面協力のもと、読売新聞社・美術館連絡協議会との共催で開かれ、長崎県立美術博物館、八戸史美術館に巡回した。



■特別展 日中国交正常化
25周年記念・江蘇省美術館所蔵
20世紀の中国絵画
29.7×22.5cm 218P
カラー図版 88P
「20世紀中国絵画の発展の軌跡」
馬鴻増
「《現代国画分野展望》紹介」
徳山 光
出品目録・作品解説・画人略伝・
文献目録・年表

山口蓬春 —新日本画への軌跡—

会期=平成9(1997)年9月30日(火)～11月16日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
共催=山口蓬春記念館



本展は神奈川県逗子にある山口蓬春記念館と共同企画した展覧会である。山口蓬春の本画71点、下図・素描など20点を展示し、平成3(1991)年に開館した山口蓬春記念館での調査・研究成果もふまえて、代表作を網羅した作家の全貌を展望する回顧展となった。

山口蓬春は、大正・昭和と激動の時代を、伝統の継承と時代に即した感覚のなかで、新しい日本画の可能性を模索し続け、近代の日本画の進むべきひとつの方向を示した画家である。

一時は洋画家をめざし東京美術学校西洋画に学ぶのだが、それがのちに彼の様式の根底をなすことになる。最初期の作品で、写生の感覚を残した卒業政策《晩秋》《雨霽》はそうした蓬春の出自を物語る作品である。大正15(1940)年、華々しく画壇へデビューを果たすことになった帝国美術院展覧会へ出品した話題作《三熊の那智の御山》は残念ながら出品できなかったが、同寸下図を展示することでその一端を伺えたかとおもう。松岡映丘を師とし彼が率いる新興大和絵会に参加するなかで、風景に対する独自の表現と鮮麗な色彩を導入し日本画に新たな魅力を生み出した。その時期の大作《潮音》《緑庭》《扇面流し》といった作品を展示できたことは大きな成果であった。

昭和5(1930)年には福田平八郎、木村莊八らと六朝会の結成に参加するが、流派を越えた彼らとの交流は、西洋画の経験と東洋の古典の研究をふまえての新日本画をかたち作るうえで重要な過程であった。《立葵》《溪》《春汀》などは小品ながらこの時期を示す優品である。また同時に、朝鮮の朝市を題材にした《市場》や台湾風物を取材した《南嶋薄暮》も風景画を本領とする蓬春の一面を示す作品として重要である。

戦後の出発点となった《山湖》は、近代的感性による、清麗な色彩と爽快な画面構成で蓬春芸術の新境地を示すものである。以後次々と作品を発表し、伝統的な技法を低流に、西欧の近代絵画や時代感覚を意識した制作姿勢は、日本画の枠にとらわれない蓬春モダニズムと形容される世界を作り出してゆく。《榻上の花》《夏の印象》《青沼新秋》などの戦後初期を飾る作品は、「蓬春モダニズム」といわれる作風を遺憾なく見せている。冷徹な写実性のみられる《盤中壽》《冬菜》など、また《留園胎春》《夏》《秋》《陽に展く》など晩年にむかっても衰えることのない充実した作品は圧巻である。《望郷》《宴》といった一風変わった話題作も見逃せない作品である。

とくに戦後、日本画滅亡論、日本画第二芸術論が唱えられ日本画の危機が囁かれたときに画壇のなかにあって、西欧絵画の造形性を吸収した新しい日本画のあり方を示した蓬春の業績は大きく、今回の回顧展ではその蓬春芸術の魅力が存分に堪能できたと思う。



■特別展 山口蓬春 —新日本画への軌跡—
27.0×22.0cm 164P
カラー図版 112P
「山口蓬春先生の思い出」 大山忠作
「山口先生のこと」 高山辰雄
「山口蓬春と現代」 井上研一郎
作品解説・出品目録・参考図版目録・
年譜・参考文献

慈愛の造形 木喰の微笑仏

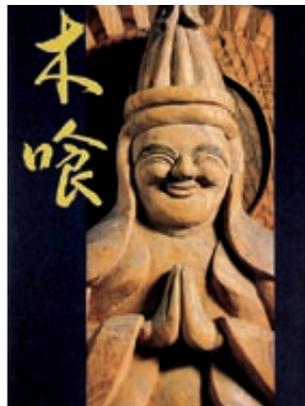
会期=平成9(1997)年12月2日(火)～平成10(1998)年1月25日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室
共催=朝日新聞社



江戸中期の遊行僧木喰(享保3(1718)年-文化7(1810)年)は、各地を遍歴しながら千体を超える仏像を刻んだことで知られる。名のりを得度時の行道から、人生の節目を迎える度に五行菩薩、明満仙人とかえているが、現在は木喰の通称で呼ばれることが多い。五穀を絶つという厳しい木食戒を行う僧を木食僧といい、木喰もその一人であったことに由来する名であるが、仏像背面の墨書に口偏を付した木喰と署名することが多く、木喰再発見の功労者である柳宗悦もこの呼称を好んで使用している。

山梨県の山村に生まれた木喰は、五十代半ばに日本回国の旅に出、後半生をほとんど旅に過ごしながら、六十歳を過ぎた頃から仏像を彫りはじめ、八十歳で千体仏の造像を発願し九十歳までの十年間にこれを達成、その後も死を迎えるまで造仏の旅を続けた。まさに超人的な生涯である。その仏像は彫技の訓練を受けた専門仏師の技術を見せる作品とは異なり、一木彫りの素朴な味わいに魅力がある。一体一体丹念に彫り込まれて丸みを帯び、口もとに笑みを浮かべた微笑仏と呼ばれるものが多い。そこには厳しい修行に人生をおくった木喰の宗教的到達点が示されており、見るものに感銘と安らぎを与える。本展は新潟、静岡、京都、兵庫、山口をはじめ、全国から集められた晩年の微笑仏を中心に、書、絵画などの関係資料を加えた総数約百三十点の展観によって、慈愛に満ちた木喰仏の世界を振り返った。

この展覧会は大阪朝日新聞社と郡山市立美術館との共同企画によるものであったが、入館者数・図録販売数ともに当館の過去最高を記録した。九十三歳の高齢で没した木喰の生涯は、厳しい修行と衆生済度を願っての造仏の旅に明け暮れつつ、老齢にいたって千体仏造像という偉業を達成するという、エネルギーでありながら、なおかつ無欲なものであった。この展覧会へ寄せられた大きな支持は、木喰のそうした超人的な生きざまが、衣食足りた生活をおくりながらも働き詰めで定年を迎え、その後の長い老後の指針を見い出せずにいる現代人にとって、深い反省と共感を呼ぶものであったからかと思われる。



■特別展 慈愛の造形 木喰の微笑仏
29.7×22.5cm 200P
カラー図版 156P
「木喰仏の原型は萬福寺にあり」
西村公朝
「真言僧としての木喰」 宮坂省勝
「木喰の微笑 一神か仏か仙人か」
山折哲雄
「木喰の生涯とその時代」 矢島新
作品要点解説・足跡図・
足跡と作仏一覧表・年譜・出品目録

イギリス工芸運動と濱田庄司 —工芸家たちのユートピア 1900s - 1930s—

会期=平成10(1998)年4月7日(火)~5月24日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
共催=東京新聞

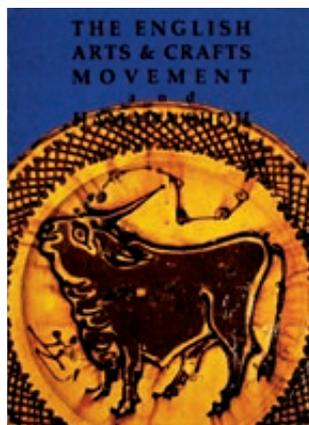


この展覧会は、濱田庄司とバーナード・リーチを軸として、1900年前後から30年代までを中心にイギリス工芸運動の動向をとらえ、日本の民芸運動のひとつの精神的な原点をみようとするものである。

大正9(1920)年、濱田庄司はバーナード・リーチの強い誘いに従って、イギリス西南端の港町セント・アイヴスを訪ね、二人は協力してこの地に日本式の登り窯を築き、繊細で美しい作品を数多く制作する。

当時のイギリスは、画家、彫刻家、工芸家たちが都市の喧噪から離れて、芸術家村(コロニー)や工芸家集団(ギルド)を形成し、多彩な活動を展開していた。濱田はセント・アイヴスとディッチリングの美術家・工芸家たちのくらしぶりに強く影響を受けて大正13(1924)年帰国するや、間もなく終生の活動の拠点を益子に定める。彼は田舎暮らしのなかで工芸とともに理想の暮らしを追求することになる。さらにこれと前後して、柳宗悦、河井寛次郎らと「民芸」を提唱し、のちにこれは大きな工芸運動へと発展する。ウィリアム・モリスから西欧社会に始まった工芸を核としたユートピア思想は1920年代には西欧各地に波及してゆく。そうした世界的規模の現象のなかで日本の民芸運動が起こり、それは、イギリスの工芸運動とも大きな接点があったことが改めて検証された。

イギリスと日本両国に残された作品を集め、東西をまたぐ工芸作品が展示されるというまたとない展覧会となった。濱田庄司やバーナード・リーチの陶器などをはじめとして、ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスによる装丁本、チャールズ・R.アシュビーの装飾品や原画、エドワード・ジョンストンの文字デザイン、デイヴィッド・ジョーンズの絵画、エセル・メイレの染色品、さらには六世尾形乾山や河井寛次郎の陶器、黒田辰秋の木工品、柳宗悦の民芸運動の資料や濱田の愛したイギリス家具など約200点を展示する幅広い構成であった。



■特別展
イギリス工芸運動と濱田庄司
—工芸家たちのユートピア 1900s-1930s—
26.0×19.0cm 188P
カラー図版 108P
「濱田庄司と工芸家村の系譜」
長田謙一
「チビング・キャムデンから
ディッチリングへ」
マーゴット・コーツ
「ディッチリナー工芸家村」
ティモシー・ウィルコックス
「交通機関のデザイン計画の
シンボルとなった文字デザイン」
柏木博
「濱田庄司と益子の
[手仕事の集団]をめぐって」
萬木康博
作家略歴・主要作品解説・主要文献

中国絵画をたのしむ

—橋本コレクションを中心に—

会期=平成10(1998)年6月9日(火)~7月20日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

当館に寄託されている橋本コレクションは、大阪府高槻市にお住まいであった故橋本末吉氏が収集された中国絵画及び書跡約800点からなる。橋本氏は、慶応義塾を卒業後、大蔵省に入られ、その後アルコール専売の社長を務められるなどした方で、学生時代より美術品収集に関心を持たれ、茶道具、古銭あるいは国焼きの陶磁器などを収集したが、最後にもっとも強く興味を抱かれ、中国絵画の収集に専念された。橋本コレクションの内容は、明代以後の中国の絵画及び書であり、これまでの中国絵画の鑑賞が宋・元絵画を中心としていたことと一線を画している。特に、明代の宮廷画家を多く輩出した浙派、江戸時代に来日し日本近世画壇の形成に大きな影響を与えた来舶画人、近現代の画家など従前あまり重視されなかった作家の作品に強く関心を寄せられ、その収集は極めて充実している。また、画史には大きく名を留めない画家の作品の収集にも努められた。

橋本氏は、その収集を私蔵することなく、多くの研究者に門を開いた。関西在住の研究者は勿論のこと、東京などの各地の研究者、さらには中国・台湾・欧米等からも多くの研究者が橋本家を訪れ、多くの作品を見る機会を与えられ、その研究を発展させていった。同時に、中国絵画に興味を持つ多くの人が橋本家を訪れ、橋本氏のお人柄に惹かれ、中国絵画収集の道に進まれ、橋本氏の助言を受けながらその収集を充実させていった。書家、大学教授、実業家など職業は様々だが、一様に橋本氏のお人柄を慕い、橋本氏と同じく中国絵画を楽しまれた。その収集は、必ずしも伝世の名品ばかりというわけではないが、それぞれの収集家の感性により選ばれた作品であり、収集家の思いが込められ、収集家の個性が現れているものばかりである。

本展では、橋本コレクションを中心として、橋本氏とともに中国絵画を楽しんだ方々のコレクション約130点を陳列し、併せて個々の収集家の方々より文章をいただき、中国絵画についての考えを伝えていただいた。



■特別展 中国絵画をたのしむ
—橋本コレクションを中心に—
24.0×25.0cm 176P
カラー図版 48P
モノクローム図版 41P
「明末清初絵画の魅力」 浅野 均
「鴛鴦の契り」 池田方彩
「橋本さんの茶碗」 内山勝利
「意、古と会う」 尾崎蒼石
「近代中国絵画に魅せられて」
月影館主人
「自然と中国絵画」 多名賀昭雄
「中国絵画：寸感」 物部晃二
「明清の絵画」 山岡泰造
「古典からの出発」
—明・清・近代絵画における
伝統と創新一— 吉田晴紀
作品解説(吉田晴紀)・画人略伝・
文献/書籍総・作品目録

江戸の遊び絵 —遊びと祝いの浮世絵の世界—

会期=平成10(1998)年8月4日(火)~9月20日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



浮世絵の展覧会は各地で数多く開かれているが、やはり美人画や風景画を扱うものが大半を占めているだろう。本展はそのようなよく知られた名品ではなく、従来あまり知られていなかった遊びの浮世絵を対象とした。すなわち様々な事物を組み合わせて別の新しいイメージを作り出す寄せ絵、一つの頭を複数の胴体が共有する奇体画、上下反転しても違う顔に見える顔面絵、切り抜いて遊ぶ切抜絵や組上絵、曲面である刀の鞘にゆがめて映すと正しく見えるさや絵をはじめ、仕掛絵、折りかわり絵、身振絵、影絵、隠し絵、ひも絵、くぎ絵、一筆画、文字絵、絵文字、遊び紋様、判じ絵、地口絵といった作品群である。これらはいずれも遊びの要素を含むので遊び絵の呼称を用いたが、戯画や風刺画のように絵の主題が遊びに関わるのではなく、形や線の面白さといった造形に関わる遊びである。従来こうした浮世絵は一段価値が低いものとして見過ごされがちであったが、アイデアと機知に富んだその斬新な造形は、現代的な感覚にあふれている。

また、同時に取り上げたのが、遊びの感覚と宗教的側面を合わせ持つ祝いの浮世絵である。七福神図と有卦絵がこれにあたり、めでたさを喜んだ江戸庶民の素朴な心情が反映されたものである。有卦絵はめでたさを求めた当時の迷信に基づき、福助や富士、筆、藤といった「ふ」の付くもので構成される祝いの絵で、この展覧会において初めてまとまった展観がなされた。庶民的な遊びの感覚にあふれた近世的な宗教画として、新たな評価が望まれる。

この展覧会は遊び絵研究家の稲垣進一氏のご尽力をいただいて、未紹介作品を多数含んだ180点あまりを出品し、遊びと祝いに関わる浮世絵の魅力あふれる世界を紹介した。地下一階展示フロアに設置したさわって遊ぶコーナーも、夏休みの子供連れなどに好評を博した。



■特別展 江戸の遊び絵
—遊びと祝いの浮世絵の世界—
29.7×21.0cm 96P
カラー図版 71P
「浮世絵と江戸の遊び絵」稲垣進一
「遊び絵を描いた浮世絵師たち」
恵俊彦
「[めでたさ]の図像
—七福神図と有卦絵について—」
矢島新
有卦絵リスト・出品作品リスト

児島善三郎

日本的油彩画の創造者

会期=平成10(1998)年10月6日(火)~11月23日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

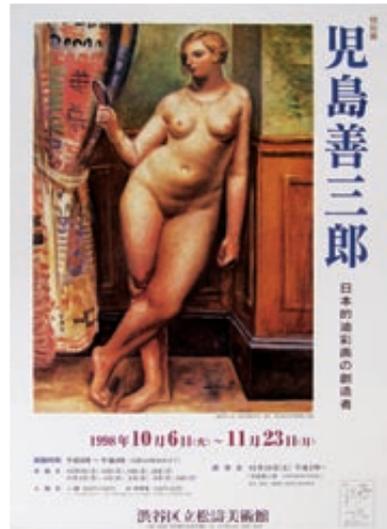
児島善三郎(明治26(1893)年-昭和37(1962)年)は福岡市の出身で、独学で絵画の道に入り、28歳の時、二科美術展に初入選し、板橋や代々木にアトリエを構えて制作に励んだ。大正14(1925)年に欧州に留学し、当時の流行に飛びつくことなく、量感あふれる裸婦など、西洋絵画の基本をふまえた作品を多数遺した。留学中、フランス人に、日本人はあれほど素晴らしい美術、文化の伝統を持っているのに、何故、我々の真似をしようとするのか、と言われたという。児島は以後、日本人の気質にあった独自の油絵を目指して苦闘を重ねた。

帰国後は、渋谷区代々木初台で制作を続けた。昭和6(1931)年には二科会を脱して、西洋の模倣ではない油絵を生み出さんと、林武、三岸好太郎らと独立美術協会を創立する。この代々木時代に続き、国分寺にアトリエを移して(昭和11(1936)年-昭和26(1951)年)、武蔵野の自然をはじめ日本各地の風景を数多く描き、独自のデフォルメで大胆に様式化した作品を残した。その後の荻窪時代(昭和26(1951)年-昭和37(1962)年)には技法にとらわれない雄大、華麗な芸術境地を目指して更に研鑽したが、闘病生活とともに身辺の花などを描いた静物画が増えてゆく。

児島善三郎の絵画は人物、風景、静物とそのモチーフは様々であるが、画風は力強いフォルムと鮮やかな色彩が見事に調和した躍動感溢れる独自の芸術世界を示している。彼は近代ヨーロッパ絵画を学び、それを大和絵や南画などの日本の伝統的な様式美を踏まえて再解釈し、新しい日本人の油彩画を創造して、その後の日本洋画壇の発展に大きな影響を及ぼした。

本展は、いまなお日本の近代絵画史上で高い評価を得ている児島善三郎の約40年にわたる画業を、初期から晩年までの代表的な油彩作品約80点に彫刻、デッサン、水彩画、墨彩画、未公開の陶器や書簡などを加えて、約120点の作品によって構成し、日本人独自の油彩画を目指して苦闘した児島芸術の足跡を辿った。

特に、今回初公開されたデッサンや水彩画、水墨画などは日本や東洋・中国絵画を研究した児島の関心の深さを裏付けるものであり、今後の研究の新しい方向を示すものである。更に、最晩年の荻窪時代に焼かれて絵付けされた陶器ものびのびとした味わいがあり、児島芸術の奥の深さ、豊かさをしのばせるに十分なものがあつた。来館者も児島芸術への理解を深めることのできた展示となった。



■特別展 児島善三郎
日本的油彩画の創造者
24.0×25.0cm 168P
カラー図版 96P
モノクローム図版 12P
「児島善三郎」 副島三喜男
「児島善三郎の霊に捧ぐ—あるいは殉教者の手」
大久保泰
「児島善三郎の水墨・墨彩画と日本人の油絵」
福井泰民
作品リスト・児島善三郎思い出のアルバムより・
児島善三郎から
大久保泰への書簡・年譜・
主要参考文献

写真芸術の時代 —大正期の都市散策者たち—

会期=平成10(1998)年12月8日(火)~平成11(1999)年1月31日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
協賛=資生堂



写真芸術社は、大正10(1921)年-大正13(1924)年の間に東京で活動した、写真による新しい芸術を宣言したグループである。メンバーの福原信三、大田黒元雄、掛札功、福原路草、石田喜一郎らは、精力的な展覧会活動と、雑誌「写真芸術」等の出版によって日本全国の写真作家たちに大きな影響を与えたが、関東大震災によりわずか3年足らずで活動を終えてしまった。本展は、これまでほとんど忘れられていた、写真芸術社の全貌を紹介する初めての機会であり、出品作品の90パーセント以上が当時以後、初めて展覧されるものである。オリジナルプリントと当時の出版物を中心に、プリントが存在しない場合は出版物からの複写資料を用いて、その内容を回顧した。

彼らの新しさは、まず近代化の進む都市をテーマにし、従来の意味での風景を撮るのではなく、街のオブジェや群衆をカメラアイによってクローズアップしたことにあつた。しかも、写真を光と影の諧調に還元して考え、その微妙さに写真の独自性を見だして、自らの芸術手段としたのであつた。こうした態度は世界的に見ても非常に早い、写真のモダニズム的解釈ともいえるのである。

さらに、写真芸術社の特徴は、クローズアップと余白を活かした平面的構成を全面に出したものにあり、ジャポニズム的な要素がその骨格をなしているといえる。彼らの活動から十年近く後に日本で流行したいわゆる「新興写真」がモダニズム的手法の移入であったのに比べると、より独自性をもった活動として評価できるのである。

ジャポニズムとモダニズムが接するようにして生み出された彼らの成果は、絵画主義的写真からモダニズム写真へと展開していく従来の写真史を考え直すうえで意義があるだけでなく、日本近代美術とモダニズムの問題を考えるうえの重要な資料ともなりうるだろう。

大田黒元雄は戦前、著名な音楽評論家として活躍したが、彼の写真制作期間は短く、写真の上での業績は全く省みられることがなかった。本展の出品作により、再評価されたことは幸いであつた。

なお、本展出品作のほとんどが、寄贈あるいは寄託作品となつて、当美術館に保管されている。本展を機会に発見された石田喜一郎の生涯の作品約300点は、日本写真史上欠くことのできない作品群であり、今後まとめた形で紹介したい。



■特別展 写真芸術の時代
大正期の都市散策者たち
27.5×21.3cm 192P
ダブルトーン図版 134P
「写真小論」 大田黒元雄
「写真芸術／ラディカルとメランコリー」
光田由里
出品作家略歴・写真芸術社活動歴・
「写真芸術」総目次
解説・出品リスト

創作版画の誕生 —近代を刻んだ作家たち—

会期=平成11(1999)年4月6日(火)～5月23日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



創作版画は、近代的な個々の芸術表現を獲得していった作品として知られている。明治末期のいまだ「版画」という言葉さえない時代に、山本鼎や石井柏亭を中心とした雑誌『方寸』に集まった画家たちは、新しい版画の発表とともに普及活動を展開する。伝統的な複製版画から決別し、近代意識を背景にした創造的な版画の誕生である。

明治末の自然主義から大正の個性豊かな表現へと変遷する時代、絵画と文学に包まれた揺籃のなかから版画の芸術性は確立した。世紀末の耽美派文学運動「パンの会」や武者小路実篤が率いた白樺派、そして表現主義などを背景にし、『明星』をはじめ『方寸』『月映』『假面』などの美術文芸雑誌に掲載されることによって社会的にも浸透してゆく。画家は油彩画、水彩画を描きながらまた時には陶芸の傍ら版画に傾注してゆき、その模索の中から版画独自の表現を発見していった。

そもそも版画の印刷との未分化のなかからその存在価値を提唱しようとしたのが創作版画であり、大きな美術史のなかに同時性をもって生まれたが、近代意識に裏付けられた版画という性格を、必要以上に意識せざるをえなかった当時の時代状況においては、やがては自画自刻自摺を標榜する狭小な性格と、版画芸術として独自の展開に悩まされていく。

しかし、創作版画運動はわが国の版画の展開に大きな影響を及ぼした画期的な出来事であり、初期の黄金時代とも言えるこれらの作品は、精神的影響と版画芸術の持つ重さはいまなお忘れることはできない。本展では、山本鼎の《漁夫》発表の明治37(1904)年前後から、多くの版画家が集結した日本創作版画協会が結成された大正8(1919)年までを、版画、水彩画、油彩画、素描、装幀など約300点の作品や資料で構成した。近代的な芸術としての版画を創造しようとした作家たちの足跡を辿り、大きな美術の流れを見据えつつ、創作版画の草創期を展望した。



■特別展 創作版画の誕生
近代を刻んだ作家たち
29.7×21.0cm 188P
カラー図版 68P
モノクローム図版 78P
「序版画が美術になるとき」
瀬尾典昭
「反『明治』としての『江戸趣味』
—版画と文学の明治末」 山田俊幸
「版画の見られる雑誌」 瀬尾典昭
作家略歴・関連年譜・出品目録

浮世絵師たちの神仏 —錦絵と大絵馬に見る江戸の庶民信仰—

会期=平成11(1999)年6月8日(火)~7月25日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



近世(江戸時代)の宗教絵画は、日本美術史の中でこれまでほとんど陽の当たらなかつた分野であるが、古くさい仏画が数多く描かれた一方で、新たな時代に即した斬新な表現も生まれている。本展が取り上げたのは、「めでたさ」という言葉に象徴される、江戸庶民の素朴な宗教観の絵画化である。

宗教絵画の庶民化は、近世初頭、大津絵と呼ばれる素朴な仏画に始まるが、これを生み出した上方が伝統的な宗教美術の根強い地域であったためか、大津絵は近世中期から後期に下るにつれて、次第に宗教画としての内実を薄れさせていく。代わって近世中期以降の宗教絵画の庶民化をリードしたのは、急速に発展する江戸の浮世絵であり、各地で目立って増加する奉納絵馬であった。極めて安い値段で購うことができた浮世絵は、基本的には消耗品であり、当時販売されたもののごく一部が遺るに過ぎないが、それでも七福神図、麻疹絵、鯰絵などは今日もかなりの数を見ることが出来る。社寺が発行した墨摺りのお札の類を含めれば、木版印刷によって庶民層に行き渡った宗教画は中世に数倍する。そしてそこには庶民の信仰に根ざした新しい表現が認められるのである。

浮世絵は遊廓や芝居といった市井の風俗一聖に対する俗一を描くものというイメージが強く、一般には宗教絵画の対極に位置するものととらえられている。確かに遊廓や芝居は浮世絵の大半を占める主要なテーマであるし、浮世絵がそこから始まったものであることも疑えぬところであるが、浮世絵は江戸庶民の日常生活に深く結びつきながらその領域を広げていったのであって、信仰的要素が江戸の庶民生活に不可欠なものであった以上、浮世絵がこれを取り上げるようになるのは極めて自然なことであった。

本展が取り上げたのはそのほんの一部分に過ぎないが、宗教的テーマを扱う浮世絵を可能な限り幅広く取り上げるとともに、浮世絵系の絵師が描いたと見られる大絵馬を合わせて展示することにより、活気に溢れた江戸庶民の新しい宗教表現を提示しようと試みた。



■特別展 浮世絵師たちの神仏
—錦絵と大絵馬に見る
江戸の庶民信仰—
25.7×18.2cm 128P
カラー図版 92P
「江戸の庶民信仰」 宮田 登
「庶民信仰を描いた浮世絵師たち」
恵 俊彦
「浮世絵師たちの神仏
—近世の神の表現を中心に—」
矢島 新
参考文献・出品作品リスト

江戸小紋と型紙

—極小の美の世界—

会期=平成11(1999)年8月10日(火)~9月26日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

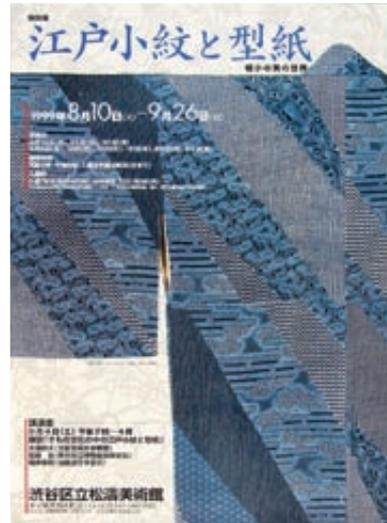
型紙を使って着物の文様を染める技法を型染めといい、我が国に古くからある技法の一種である。型紙などによって染めた細かい文様を小紋といい、ゆかたなどに用いられた中型と対比される。江戸時代に武士の袴などの礼装に小紋が用いられ、各藩は独自の小紋、いわゆる定め小紋(留柄)を考案し、競って精緻な小紋柄を発展させた。江戸中期には、小紋は町人の間にも普及し、明治・大正・昭和へと受け継がれた。これらの小紋柄の着物は昭和以降しだいに江戸小紋と呼ばれるようになった。

柿渋加工の和紙に彫刻刀で彫り上げた型紙は、江戸時代おもに、伊勢、鈴鹿の白子、寺家村を中心に製作され、紀州藩の威光のもとに有利に全国に独占販売された。各地に数多くのこのような伊勢型が残されているが、江戸型、京型、会津型など地域的特色のある作品も一部知られている。残された型紙を見ると、人間技とは思えない極小さに驚く。また、縞、幾何学模様、花鳥風月模様など無限の文様の宝庫となっている。

型紙はデザイン画、美術品という観点から見ても、第一級の作品である。しかるに、日本では、染屋、型屋が、着物の衰退とともに廃業したのに伴い、又、世間の無関心もあり、膨大な数量の型紙が廃棄され、消失していった。しかしながら、一部は欧米に渡り、その細かさでデザインの斬新さに欧米人は驚嘆した。西洋ではロンドン、ウィーンなど各地にもたらされ、ウィーンでは装飾美術館に4万点のコレクションが知られ、ウィーンの工芸運動にも影響を与えた。アメリカではボストンなど東海岸を中心にコレクションが形成され、当地のデザイン教育にも取り入れられた程、高く評価された。しかるに日本では、長い間、省みられることもなく、軽視されてきたことは残念であった。

近年、喜多方など会津地方をはじめ、東北各地の染屋や個人所属の型紙が博物館、資料館などに相ついで寄贈され、整理されて、図録などの内容で刊行されはじめた。このように一部の地方の型紙が展示されつつあるが、これも小規模で散発的であった。本展は東北のみでなく東京、伊勢、関西その他の地域の型紙の優品約150余点を集め、各型紙をアクリル板ではさみ、背後から光りをあてて模様がくっきり見えるように展示した。更にこれまで体系的に展示されることのなかった小紋柄の着物の優品約90点を展示した。

重要文化財の徳川家康ゆかりの小紋着物など重要文化財3点に加えて、袴、江戸町人の小紋衣裳、明治、大正、昭和の各時代の小紋柄の着物の実例を初めて、型紙と平行して比較展示した。これによって、日本の江戸、明治の細密工芸の技術の高さとデザインの素晴らしさを日本人々に、再認識させることができたと思われる。



■特別展 江戸小紋と型紙 極小の美の世界—
30.1×22.6cm 214P
カラー図版 68P
モノクローム図版 95P
「[きもの]文化の中の小紋染め」 長崎 巖
「日本の型染小史」 水上嘉代子
「江戸小紋と染め型紙」 大滝幹夫
「型紙からのメッセージ」 増井一平
「江戸小紋小史着物と型紙にみる小紋の発生と展開」 福井泰民
参考資料図版・出品リスト・文獻

20世紀中国画壇の巨匠 傅抱石 — 日中美術交流のかけ橋 —

会期=平成11(1999)年10月12日(火)～11月21日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

傅抱石は明治37(1904)年に江西省南昌に生まれ、独学で書画篆刻を始めた。江西省第一師範学校に入学後、美術創作と研究を本格的に始め、大正14(1925)年には最初の著作「國畫源流概述」を出版。母校の教員となったが、昭和8(1933)年に徐悲鴻の推挙により日本に留学、帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)で金原省吾教授の薫陶を受け、東洋美術史、彫塑などを学び、昭和10(1935)年に銀座松坂屋で開いた個展では、横山大観や正木直彦らの賞賛を受けている。

同年に帰国。南京中央大学芸術系教授となり、後進の指導に当たるとともに、著作や明末清初の画家石濤に関する研究に努めた。抗日戦争中は一時重慶に移り、抗日宣伝工作に従事。解放後は南京師範学院教授、西泠印社副社長などを歴任し、江蘇省國畫院の設立に尽力して初代院長となり、南京画壇の中心として活躍したが、昭和40(1965)年に急逝。北京の齊白石とともに「二石」と称される中国現代絵画を代表する存在である。

中国の名山大川を遍く巡り、山水、特に雨景及び瀑布にすぐれ、独自に編出した皴法は「抱石皴」といわれている。併せて、「楚辞」等の文学作品や歴史・故事に取材した人物画にもすぐれ、また、横山大観や橋本関雪に倣った作品もあり、近代日中の絵画交流を考える上でも重要な存在である。

本展では、南京の傅氏家蔵作品を中心に、武蔵野美術大学附属図書資料館に収蔵される留学時代の作品及び米国、臺灣、香港、国内の美術館・個人の収蔵品などあわせて約100点を陳列し、20世紀中国画壇の最高峰ともいえる傅抱石の、伝統を踏まえつつ独自の画風を樹立した画業をかえりみるとともに、日中の絵画交流についても考察した。なお、息女の傅益瑤、益玉両氏は現在日本画壇で活躍をしている。



■特別展 20世紀中国画壇の巨匠
傅抱石 日中美術交流のかけ橋—
29.7×22.6cm 194P
カラー図版 96P
モノクローム図版 4P
「20世紀中国画壇の巨匠
— 傅抱石」 葉宗鎬
「近代日中美術交流と傅抱石」
味岡義人

戦後美術を読み直す 吉仲太造

会期=平成11(1999)年12月7日(火)~平成12(2000)年1月30日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



吉仲太造(昭和3(1928)年-昭和60(1985)年)は、京都市に生まれて草創期の行動美術研究所に学び、昭和27(1952)年に上京した。瀧口修造企画によりタケミヤ画廊で2度の個展を開催して評価を獲得し、岡本太郎の呼びかけに応じて二科会にも参加した(61年まで)。60年代以降は、サトウ画廊を主な舞台に、一貫して貸し画廊で発表を続けた。吉仲は孤高の画家である。

本展は、吉仲の画業全体を回顧し、その再評価を求めるとともに、ひとりの芸術家を通して戦後の日本社会の精神史をも読み直すことを目的としている。

昭和21(1946)年から昭和59(1984)年まで制作に専心した吉仲は、文字通り戦後を生き通した画家である。50年代には、いきものと機械を描いた、錯綜したエネルギーギッシュな絵画、60年代の高度成長期には、新聞の株式欄や不動産欄をカラージュした『遺産』シリーズ、さらに70年代にはシルクスクリーンを用いて影像のディペイズマンを試みた『病と偽薬』シリーズを、吉仲は発表してきた。それらは時代の表層への批判にとどまらない、深い予言がユーモアをこめて表現されている。そしてうつ病に苦しみながら彼が最期に発表した白い“非色の絵画”の連作こそは、現代の我々に必要な、黙示録のような深淵なメッセージだと思われるのである。

吉仲の大きく変転する作風を7つの時代に分け、各時代の代表作を展示し、写真、雑誌等の資料も併せて紹介した。それぞれ全く異なって見えるこれらの半世紀にわたる仕事は、硬質で結晶度の高い造形、深い洞察と批判力、そして全体に漂う不思議なユーモアが一貫した個性になっている。

一般には知られることのなかった吉仲太造の画業は、決して一見して親しみやすいというタイプではないが、本展に来館された方々の共感を得ることができたのは幸甚であった。また、朝日、毎日、読売、東京、公明および地方紙各紙、また美術手帖等の専門誌各誌に高い評価を与える展評が掲載され、一定の再評価を得ることができたと思われる。



■特別展 戦後美術を読み直す
吉仲太造
27.1×21.2cm 166P
カラー図版 87P
「画家吉仲太造」 光田由里
「京都、その暖味な微笑
—吉仲太造と、同時代の京都の[前衛]
美術について」 清水左保子
年譜・吉仲太造関連文献再録・
文献目録・出品作品リスト

石井柏亭 絵の旅

会期=平成12(2000)年4月4日(火)～5月21日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

石井柏亭(明治15(1882)年-昭和33(1958)年)は、紀行をつづけた画家である。国内の各地をめぐるには気に入った場所でもくり返し制作した。

近代風景画は、既成の目にさらされた名所絵からはなれて、自らの眼をとおした風景を発見していった歴史である。明治以来の画家たちは、解き放たれたように絵の具をもって各地を歩き山河を描いたが、石井柏亭はそうした画家たちの系譜に連なる存在である。さらには海外へもむかい、初期の代表作を生み出した欧州旅行をはじめ、戦前の朝鮮、満洲、あるいは戦後の米国への旅など、自然の風景や風土を求めつづけた。

柏亭は旅した土地について文章も残しており、単に描くというよりも紀行そのものを記述していったと言ってもよいかもしれない。彼ほど絵と文章一体で風景を描き留めた作家はいないだろう。

明治末に流行し多くの画家に愛された水彩には、もっとも柏亭らしさが活かされている。明治の風景画には自然にたいしての陶醉感がみられるのに対して、柏亭は平凡な自然、散文的な自然をとらえようとしている。水と山が織りなす広がりには彼に欠かせない題材であり、透明な輝きと、平穏な美しさがある。

また、石井柏亭は家族や旅先で見いだした人々を描いている。それは人物とその雰囲気とをひとまとめに包み込むような作品である。人々の佇まいや家族の憩いのひとときのその日常性のなかに、「自然」を見いだした。柏亭は、風景と日常性にある「自然」を発見することによって、日本の特性(ローカル・カラー)を表現しようとした。

柏亭はヨーロッパの芸術動向をいち早く我が国に紹介するほど進歩的であったにもかかわらず、大正時代の主観的作風と西欧の新しい造形理念が広がるなかで、そうしたものを奥に秘めながらあくまで自然の写実を追求した。浅井忠に師事し明治という時代を引き継ぎながらも、他方で大正・昭和という時代を咀嚼する、彼は希有な才能を持っていた。

本展は、おもに水彩画と油彩画に焦点をしばり初期作品から最晩年の作品まで約150点を展示し、現時点で判別できる限りの柏亭作品を網羅した、石井柏亭の回顧展としては、没後もっとも大規模なものであった。



■特別展 石井柏亭 絵の旅
29.7×21.0cm 184P
カラー図版 117P
モノクローム図版 16P
石井柏亭の言葉
「絵の旅人石井柏亭」 瀬尾典昭
参考文献・出品目録・年譜・
主要展覧会出品目録・参考文献

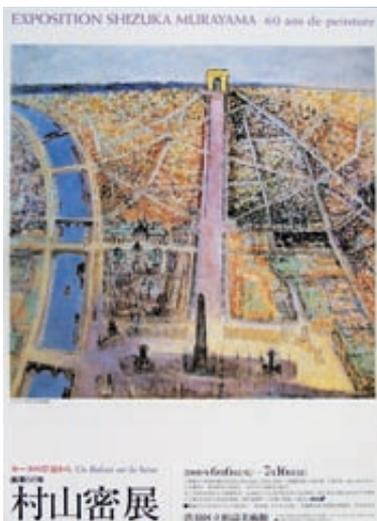
セーヌの岸辺から 画業60年 村山 密展

会期=平成12(2000)年6月6日(火)~7月16日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

茨城に生まれた村山密は、旧制中学卒業後、川端画学校、春陽会洋画研究所に通い、画家としての道を歩み始めた。春陽会では、終生の師となる岡鹿之助の薫陶を受け、春陽会展や文展に入選しつづけ、昭和29(1954)年に岡の勧めにより渡仏、藤田嗣治の庇護の下に、多くの画家や詩人など交わりを結んだ。昭和34(1959)年、今度は永住を決意して渡仏、以来、セーヌ河畔に居をかまえて、制作につとめ、昭和37(1962)年にサロン・ドートンヌに初出品して入選、また、パリ16区主催の風景画のコンクールでド・ゴール大統領賞を受賞してフランス画壇にデビューした。その後、サロン・ナショナル・デ・ボザールで外国作家賞(昭和38(1963)年)、アニエール展でグランプリ(昭和39(1964)・昭和57(1982)年)に輝き、サロン・ドートンヌの審査委員(昭和54(1979)年)、絵画部長(昭和60(1985)年)を歴任、平成3(1991)年にはパリ名誉市民賞であるヴェルメイユ勲章、平成9(1997)年にはシュバリエ・ド・レジオン・ドヌール勲章を受けている。

その作品は、印象主義とキュビズムの融合を目指した初期の「ロッカマドール」(昭和37(1962)・昭和38(1963)年)から、山水画的構成を想起させる「ジュラの渓谷」(昭和44(1969)年)、鳥瞰図的パリの大パノラマである「シャンゼリゼ」や「パリの屋根C」、荘厳さをただよわせる「ルーアの聖堂」など多彩である。そして、多くの作品からは、彼の密という名が示す「しずか、ひそやか、こまやか」な画境、精神性の高さ、詩情が感じられる。

本展では、ムッシュ・ムラの愛称でパリの人々に親しまれている村山画伯の油彩、水彩など合わせて約80点を陳列した。会期中には、来日されていた村山画伯ご夫妻がほぼ毎日のように会場に臨まれ、その温厚にして誠実なお人柄に来館者の多くが感銘を受けたようである。なお、本展は開館以来の最高の入館者数を数えた。



■特別展 セーヌの岸辺から
画業60年 村山密
29.7×22.6cm 144P
カラー図版 94P
「セーヌ河畔のバルコニー」
ミシェル・ヌリザニー
「藤田嗣治、岡鹿之助、そして村山密」
島田康寛
「村山密の絵画
—日本の心でパリを詩う」
金原宏行
年譜・出品リスト

アラベスク文様の世界 中近東・イスラムの祈りと幻想

会期=平成12(2000)年8月1日(火)~9月24日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



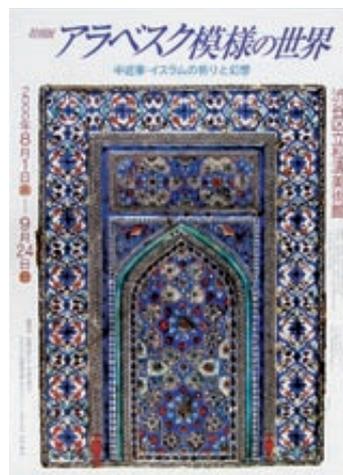
中近東を中心に、西はスペイン、アフリカ、東はインドネシアまで拡大したイスラム世界は高度で多様な文化を展開した。イスラム教では原則として、人間や動物表現を禁じた為、アラベスクと呼ばれる、幾何学文様、植物文様を中心とした無限連続文様が著しく発達した。アラベスクとは原義はアラブ風という意味で、狭義は幾何学的な唐草や蔦などの植物模様のことである。しかし、イスラム圏の模様の中で、人物、動物の図柄も巧みに装飾に取り入れられ、文様の構成要素として生き延びてきている。本展では、アラベスクをイスラムの装飾美術と広く解釈して、様々なジャンルの工芸美術作品の中から、人間描写をも含んだ装飾デザイン作品を多数紹介した。

並河萬里のイスファハン、トプカプ宮殿、アルハンブラ宮殿の写真約30余点で、イスラムの建築装飾を紹介した。本展は幾何学模様、植物模様の他に、これまで、日本で本格的に紹介されることのなかった文字模様に大きく焦点をあてて、紹介することとした。コーランを著したアラビア語は神の言葉として、神聖視、絶対視された。初期の力強いクーヒー体や優美なナスヒー体などと呼ばれる各種の美しい書体で描かれ、埋めつくされた文字装飾や、アラビア書道、ペルシャ書道の世界はイスラム芸術の中で長い伝統を有し、芸術の中でも最高の位置づけを得ている。本展はアラビア文字やペルシャ文字でデザインされた様々な陶器、タイル、カーペットなどを多数紹介し、できるだけ日本語に翻訳することを試みた。

本展の中心作品はラスター彩やラジュバルディナ陶器、トルコのイズニーク陶器、タイルなどイスラム世界各地で展開した陶器、タイルを多数出品して、陶器約80点、タイル約80点を中心に、カーペット30数点染織品、金工品を多数加えて約200点で植物文様、幾何学文様文字文様の多彩なアラベスク模様の世界を鑑賞していただいた。

更に、二階、サロン・ミュージーゼでは、現代日本作家によるアラベスク関連作品を多数紹介した。イスラム美術やアラビア書道は今や、イスラム圏以外の世界にも広がりつつある。ラスター彩の輝きを現代に復興させた加藤卓男氏の陶芸作品20点、アラベスク模様やアラビア文字を独自の感性で漆芸作品その他に造形デザインした故・吉田左源二氏の作品約15点、アクリル絵具でアラビア書道を現代アートとして表現している本田孝一氏の作品5点など、日本の美意識でイスラム美術を融合展開した諸作品を合わせて紹介して、ダイナミックなイスラム美術の多様性と普遍性、現代性を認識していただいた。

本展では、日本でも最もなじみが薄く、紹介の少なかったイスラム美術を建築写真、陶磁器、タイル、カーペット、写本、現代書道作品など257点の作品により、アラベスク模様によるイスラム美術の華麗で幻想的な様式美の世界を鑑賞し理解していただいた。



■特別展 アラベスク模様の世界
中近東・イスラムの祈りと幻想
30.1×23.1cm 198P
カラー図版 120P
モノクローム図版 16P
「アラベスク模様の世界」 福井泰民
「イスラムの美術工芸—生活とデザイン」
杉村棟
「中近東のイスラム陶器とタイル—アラベスク文様とイスラム陶器」
岡野智彦
「アラビア書道概説」 本田孝一
「並河萬里の世界」 吉川奈津子
「ラスター彩と私」 加藤卓男
「吉田左源二の仕事とアラベスク模様」
福井泰民
「アラビア文字の美」 吉田左源二
「アラビア書道芸術と私」 本田孝一
作品リスト・地図・年表・文献

ZENGA 帰ってきた禅画

—アメリカ

ギッター・イエレン夫妻コレクションから—

会期=平成12(2000)年10月10日(火)~11月26日(日)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



近世(江戸時代)の宗教絵画は、日本美術史の中でこれまでほとんど陽の当たらなかつた分野である。確かに作画の技術の高さという観点から判断する限り、この図式に異論をはさむ余地はないが、近世の宗教絵画の中には、新たな価値を表現しようとしたものがある。

近世の臨済禅の改革者である白隠の気魄あふれる書画を一目見るなら、それがそれまでの仏画の物差しではかれぬものであり、新たな価値を主張するものであることが直感されるだろう。白隠はもちろん専門の絵師ではなく、真摯な禅の求道者である。書画を描くのは自らの宗教観を表現するためであり、生計を立てる手段ではない。そこに表現されているのは運筆の技術ではなく、いわば白隠の人格と言うべきものである。それが崇高と見えることもあるが、飄逸、あるいは奇矯と映る場合もあるだろう。いずれにしても、白隠は自らが欲するままに描きたいものを描いたのである。そのような自由な作画態度は、それまでの絵仏師たちが基本的には日々の糧を得るために、貴族や大寺院から注文を受けて仏画を描いたのとは大きく異なっていた。

白隠のみならず、その門下の禅僧たちも、布教のために書画を折に触れて描いており、それらは禅画と呼ばれている。そこに見られる“人格の表現”は、近世の宗教美術が主張し始めた新たな価値であり、欧米にも理解されうる普遍性を持つものであった。国内において禅画はともすれば過小評価されがちであったが、戦後欧米でおこった(禅=ZEN)ブームの中で世界に愛好者を獲得し、各地に禅画のコレクションが形成された。中でも現在ニュー・オリンズに在住するカート・ギッター氏は、陸軍の軍医として日本に滞在したのをきっかけに禅画の蒐集を始め、長い年月をかけて優れたコレクションを築き上げた。そのコレクションには、日本にも希な優品が集められている。

この展覧会は、ギッター・コレクションの初の里帰りを機に、国内の寺院・美術館などに所蔵される白隠の傑出した書画を加えて、その魅力を紹介しようとした。欧米の人々によって見出された美意識を逆輸入することにより、日本文化に対して、相対化されたまなざしを注ごうとする企画であったが、若い人が多数来場し、カタログが記録的な売り上げを見せたことは、そうした狙いがある程度達成されたことを示すと考えている。



■特別展 ZENGA 帰ってきた禅画
 —アメリカ ギッター・イエレン夫妻コレクションから—
 30.0×17.1cm 216P
 「[禅画]再考—アメリカにとってのZENGA・日本美術史にとっての禅画」 山下裕二
 「表現者白隠—その理解のためのノート—」 矢島 新
 「西洋における禅画」 スティーヴン・アディス
 本展関係の臨済宗法系図
 賛・略伝/年譜・主要参考文献

細江英公の写真 1950-2000



会期=平成12(2000)年12月12日(火)～
平成13(2001)年1月28日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、共同通信社

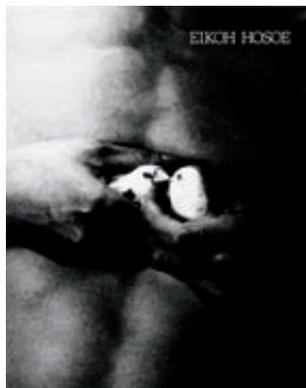
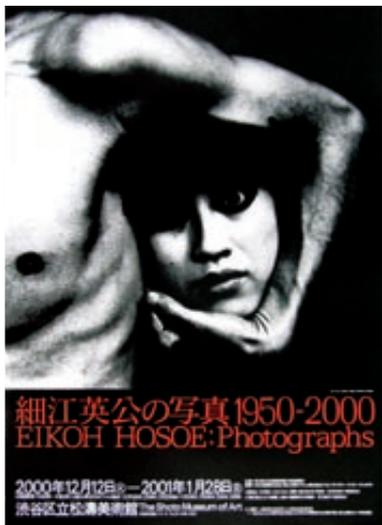
細江英公は、世界でも最も知られた、日本の写真家のひとりである。昭和8(1933)年山形県で生まれ、幼少期から東京で育ち、東京写真短期大学に学び、一貫してフリーランスで写真を撮り続けてきた。

細江は肉体をオブジェのようにとらえ、粗い粒子のなかに鮮烈な性のドラマを描き出した初期の代表作《おとこと女》を昭和35(1960)年に発表する。このとき被写体となった舞踏の創始者・土方巽と再びコラボレーションを行い、日本の原風景とその亀裂を描き出した名作《鎌鼬》を昭和44(1969)年に刊行した。三島由紀夫を写したバロック的な耽美空間《薔薇刑》(昭和38(1963)年)と合わせ、60年代の細江の仕事は爆発的な新しい表現を写真の世界にもたらしたといえる。

70年代の細江は、高度に抽象化した男女の性の対話を《抱擁》(昭和46(1971)年)に結晶させたのち、アメリカを中心に海外へと発表の場を広げていった。国内外でのワークショップや写真のパブリックコレクションの形成に取り組むなど、幅広く活動するようになる。

ほぼ10年をかけてアントニオ・ガウディの建築作品にとりくんだ成果は昭和60(1985)年に《ガウディの宇宙》と題して世に問い、大きな反響を得た。また本展で初めて発表された新作《作品をめぐる人たち》では、50年の自らの写真家生活を回顧し、現在と過去を円環のようにつなぐ新しい時間性を写真のなかに導入しており、現在の細江は母校での教鞭をとるとともにますます活発な活動を続けている。

本展ではこうした写真家細江英公の全貌を多数のヴィンテージプリントで紹介した。とりわけ《鎌鼬》の1メートル四方のパネルは、昭和43(1968)年の個展以来久しぶりに展示したもので、圧倒的な迫力を放っていた。朝日新聞のすぐれた展評をはじめ、各写真雑誌で紹介され、300ページにわたるカタログも好評を得た。



■特別展 細江英公の写真 1950-2000

28.2×22.7cm 292P
ステートメント・2000写真とは?
—細江英公の球体写真二
「元論」 細江英公
「細江英公の想像力」 福島辰夫
「細江英公の写真あらたな物語のために」
岡田信幸
「作品と技法についてのノート」
細江英公・細江賢治
「[へそと原爆]—細江英公の1960年の
実験映画について」 ドナルド・リチー
「“フォト・ベルエポック”—[VIVO]
そして「WORKSHOP写真学校」の時代」
山地祐子
「[鎌鼬]—その成立と現在を中心に」
湯沢 聡
「写真のありか—細江英公オリジナル・
プリントとミニクラブ」 光田由里
「“越え出るもの”と“とどまるもの”
細江英公の二つの[まなざし]」
—(ルナ・ロッサ)を中心に— 江尻 潔
細江英公関連文献再録・年譜・展覧会歴・
文献目録・カタログ

今純三・和次郎とエッチング作家協会 採集する風景／銅版画と考現学の出会い

会期=平成13(2001)年4月3日(火)～5月13日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室



本展は、版画家今純三をキイにして、近代の銅版画の発達史をたどると共に、純三の兄、今和次郎の考現学を紹介したものである。初めてのまとまった展覧会として今純三と今和次郎の兄弟の業績を紹介し、今日ではなじみの薄くなってしまっている「考現学」という言葉のもつ魔力をいま一度認識することができた。また、新発見の作品を多数展示することで、銅版画の普及した時期にあたる大正末から昭和前期の銅版画事情がわかってきた。

今純三は、生涯を版画の研究に情熱をそそぎ、昭和19(1944)年に戦争の激化する東京で不遇のうちに亡くなった近代を代表する銅・石版画家である。執拗に追求した作品の数々は、郷里青森の風景・風物を題材にし、辺境へと向かう眼差しと日常の人々の営みを活写する感性を物語るとともに、銅版画家の先駆者としての執念とも思える戦いでもあった。そして兄の今和次郎は、『日本の民家』や『モデルノロチオ(考現学)』などを著し、“考現学”の造語を生み出したことで著明な民俗・建築学の研究者である。各地の民家や集落の様子、震災後のバラック装飾社での活動や被災バラックのスケッチ、さらに銀座や貧民街などの都市風俗などに採集した記録を多数残している。彼はそれまで見逃されていた人々の隠された行動や様態、日常に潜むさまざまな事物を採集することで自然と社会と人間を捉え直そうとした。二人の兄弟は、大正12(1923)年の大震災を契機にそれぞれ大きく変わる。純三は郷里青森に帰り、銅版画の研究に没入し風景を主とした画風を作り上げ、一方で和次郎は銀座を手はじめに“考現学”調査に関わっていく。純三と和次郎の進む道は異なるが、考現学的な採集する姿勢に切り離せない関係がある。そして彼らの凝視する眼差しは、風景(自然)と人間と暮らしとを大きな調和のなかで捉えようとした希有なものだった。

また、今純三が傾注した銅版画は、昭和前期になって大いに普及発展した新しい表現であった。今純三とともに中心人物であった西田武雄は、日本エッチング研究所と室内社画堂を開設し、機関誌『エッチング』の発行や講習会を開催するなど銅版画の普及に貢献した。いまだ一部の制作者のものであった銅版画の底辺を広めると同時に、美術表現の手段として確立していったのである。その中からは今純三をはじめエッチング作家協会のメンバーなど多くの有能な作家が生まれたが、戦後の銅版画をリードした駒井哲郎もそのひとりであり、今日の銅版画の礎となった時期でもあった。新しい表現を手に入れたエッチャーたちの挑戦として、これまであまり知られなかった銅版画の先駆けとなったエッチャーたちの活動にも注目した。

考現学と銅版画の結びつきは、近代絵画の中にある風景や景観にたいする視点を呼び起こした。風景画という近代になってからのジャンルは、画家がもっている関心やその光景にたいする解釈に寄与している。その意味で考現学の実証的な姿勢は、どこをどのように見るのかという風景画の原点を改めて浮き彫りにした。



■特別展

今純三・和次郎とエッチング作家協会

—採集する風景／銅版画と考現学との出会い—

29.7×21.2cm 196P

「考現学なかりせば、考現学ありてこそ

—兄・和次郎と弟・純三の葛藤の末に」 對馬恵美子

「エッチャーたちの挑戦昭和前期の銅版画普及運動」

瀬尾典昭

「ハーマートン著[エッチングとエッチング作家](1868)

によせて」 気谷 誠

今純三・今和次郎略年譜、近代銅版画関連年譜、

日本エッチング作家協会展覧会記録

室内社画堂展覧会記録、出品目録

開館20周年記念特別展 中国美術の精華 —台北・鴻禧美術館所蔵品展—

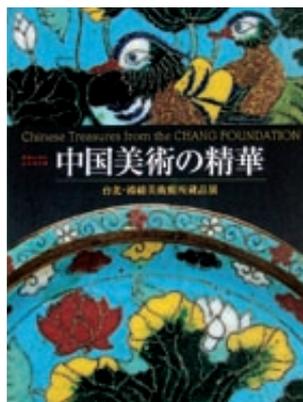
会期=平成13(2001)年5月29日(火)～7月8日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
協賛=花王株式会社
協力=日本アジア航空



鴻禧美術館は台湾の著名な美術収集家故張添根氏のコレクションを基に建てられた美術館で、台北市の中心部のオフィス街仁愛路にある。昭和63(1988)年に、鴻禧芸術文教基金会在が成立して美術館の建設が始まり、平成3(1991)年に鴻禧仁愛大厦地下一階に開館した。台湾で最も著名な私立美術館で、「小故宮」と称されている。

その収集品は、故張添根氏の収集及び子息の張秀政氏が収集したものを中心とし、中国古代の青銅器や玉器にはじまり、金銅仏などの仏教美術、歴代の陶磁器、琺瑯、漆器、茶具、明から現代までの絵画など多岐にわたり、総数3万件余に及ぶ。特に、陶磁器及び田黄(印材)のコレクションは極めて優れ、国際的に高く評価されている。

本展は、鴻禧美術館の全面的な協力のもとに、所蔵品の中から漢から清朝までの陶磁器を中心に、張大千、傅抱石などの近代絵画、六朝から清時代にかけての金銅仏、漆器や琺瑯などの明清工芸、明清時代の文人たちに愛好され彼らの生活を彩った各種の文房具や茶具、極めて小さいものながら独自の芸術性をもつ印材及び鼻煙壺など180点余の優品を選び、多岐に渡って中国芸術の精華を紹介した。なお、本展は、北海道立帯広美術館、下関市立美術館に巡回した。



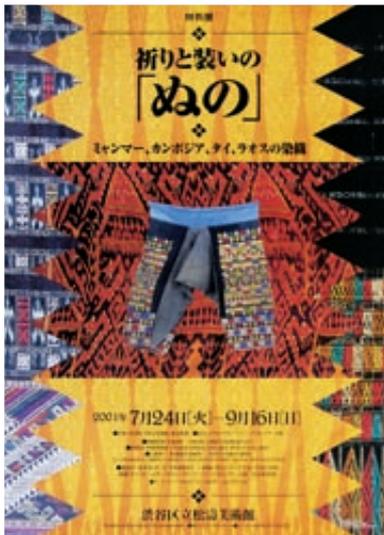
■開館20周年記念特別展
中国美術の精華
—台北・鴻禧美術館所蔵品展—
29.7×22.5cm 184P
カラー図版120P
「序鴻禧藝術文教基金會」
董事長張秀政
「序鴻禧藝術文教基金會」
董事長張秀政
「やすらぎの奥深き世界へ」
—台北・鴻禧美術館」 廖桂英
「寧靜致遠—台北・鴻禧美術館」
廖桂英
出品目録及び作品解説、
中国陶磁史略年表、
中国主要窯址地図、
中国近代絵画略年表

祈りと装いの「ぬの」 ミャンマー・カンボジア・タイ・ラオスの染織

会期=平成13(2001)年7月24日(火)~9月16日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



これまで、東南アジアの染織と言うと、インドネシアの染織が日本では主に紹介されて来た感がある。本展は、タイ、ミャンマー、カンボジア、ラオスのインドシナ半島4カ国の染織品の数々を初めて本格的に紹介したものである。これらの国々には、数多くの少数民族が住んでいる。ナガ、アカ、チン、ハカチン、カレン、ヤオ、カチン、モン、クミ、メオ、ファラムなどの少数民族は高床式住居などに居住し、今なお、機織で手織りの染織品を製作している。これらの少数民族の貴重な衣装に加え、日常で用いられているバスインやサロン、ロンジーなど生活のなかの衣装をも多数紹介した。特に、タイのスカートはマドミーと呼ばれる緋で織られているが、マドミーの優品50点を出品した。更に、ラオスの葬儀を知らせた幟など儀式で用いられた布や仏教寺院に奉納されたカンボジアの精巧な緋など東南アジアで宗教、儀式で使用された布も展示した。染織品約165点に機織用具や仏像そして写真資料も加えて、これら4カ国の染織文化と風土を偲べるように構成した。



■特別展 祈りと装いの「ぬの」
ミャンマー・カンボジア・タイ・
ラオスの染織
28.1 × 21.0cm 160P
カラー図版 112P
「祈りと装いの [ぬの]」
—インドシナ半島の染織品から—
小笠原小枝
「祈りと装いの [ぬの]」
オフエル・シャガン Ofer Shagan
「インドシナ半島の民族と歴史」
福井泰民
模様解説・年表・地図・主要参考文献

眼の革命 発見された日本美術

会期=平成13(2001)年10月2日(火)~11月18日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



「日本美術史」という枠組みは明治時代を通して徐々に形作られたが、その編集は、欧米列強の眼を強く意識するものであった。その結果、宮廷貴族や上級武士などの支配階級の庇護のもとに制作された、技術的に洗練された作品がその大部分を占めることとなった。しかしその後の長い年月の中で、オーソドックスな枠からはみ出す個性的な造形も、次第に美術として認知されるようになっていく。縄文土器や民藝などがその代表である。そうした新たな領域の獲得には、既成の観念にとらわれぬ、新たな価値観の導入が必要であった。今日我々が享受する日本美術の豊かな表情のいくつかは、先人の“眼の革命”によって獲得されたものなのである。

この展覧会では、そのような新しい価値観の導入によって日本美術史の確立後に新たに見出された作品群を、一堂に集めてみようと考えた。序章に室町時代の「わびの革命」を前史として置き、「発見者・柳宗悦」、「岡本太郎の縄文発見」、「アカデミズムの冒険、辻惟雄の奇想の系譜」、「遅れて評価されたもの 近世の宗教美術」の章を立て、「赤瀬川原平の超芸術トマソンの発見」を終章として加えた。柳宗悦が見出した民藝や円空・白隠らの江戸時代の宗教美術などは、あまりに民衆的であったが故に、アカデミックな美術史から除外されたのだろうが、当館ではこれまでそのような民衆的造形を積極的に取り上げてきた経緯があり、そのような流れを受けて立案した企画であった。

遅れて日本美術史に取り込まれた作品は、江戸時代以前を支配した完成度の高さを誇る中国的な価値観や、その後に流入したリアリズムを根幹に据えた西欧的な価値観から外れるが故に、オーソドックスな枠からはみ出したと考えることができる。その意味では、中国や西欧に負けまいと技術を尽くして産み出された作品よりも、そのような見過ごされてきた造形こそが、日本美術の独自の性格を雄弁に語るのではないだろうか。



- 特別展 眼の革命
- 発見された日本美術
- 25.7×18.3cm 124P
- カラー図版 65P
- モノクローム図版 12P
- 「柳宗悦のこと
- 「眼の革命」展に寄せて」 尾久彰三
- 「岡本太郎の痛撃—
- 「日本美術史」の内側と外側」
- 山下裕二
- 「眼の革命発見された日本美術史」
- 矢島 新
- 「発見と写真柳宗悦と野島康三、
- 山崎静村」 光田由里
- 参考文献・関連年表・出品リスト

瀧口修造の造形的実験

会期=平成13(2001)年12月4日(火)~平成14(2002)年1月27日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室



瀧口修造は明治36(1903)年に富山県で生まれ、上京後の1920年代後半にシュルレアリスムの洗礼を受けて、詩作や翻訳などの執筆活動を始め、1930年代には美術評論家として活躍した。戦前の詩作は、戦後の1967年になって初めて「瀧口修造の詩的実験1927-1937」と題されて刊行されている。昭和54(1979)年に東京で没するまで、瀧口は詩、美術、映画、写真、舞踏、音楽、デザインなど幅広い分野の前衛的な仕事を見守り続け、独自の批評活動を行った。

一方で、1959年頃より、彼はデッサンに没頭し始め、「書くことと描くこと」の原点をたどろうという情熱にかられる。瀧口はオートマティックなデッサンだけでなく、バート・ドローイング(焼きこがし)やデカルコマニー(転写技法)、ロトデッサン(器械の回転運動により多重重を描く)など、さまざまな技法の実験を行っている。それらの一部は、個展で発表する一方、親しい友人たちへの贈り物として捧げられたのだった。

瀧口の言葉によらない表現行為は、これまで断片的に知られていたに過ぎない。本展では瀧口没後に故・瀧口綾子氏が保管されていた膨大な詩人の遺品の中から、未発表作品を含む約350点のデッサン、デカルコマニー、バートドローイング、手作りの本、オブジェを選び出し、著書、資料などを加えて、その全貌を紹介した。

瀧口の造形的実験に寄せる情熱、表現の発生を確かめようとする意図、詩や美術評論と造形物との関連など、展示からさまざまなものを読み取っていただけたことは、アンケート、新聞各紙のレビュー、観覧者の声などからうかがうことができた。



- 特別展 瀧口修造の造形的実験
24.6×23.3cm 226P
カラー図版 136P
「私も描く」、「手が先き、先きが手」
(瀧口修造)テキスト
再録
「瀧口修造からの、もうひとつの贈り物」
杉野秀樹
「瀧口修造造形的実験の軌跡」
光田由里
「瀧口さんと
【眼に見えないもの】について」
恩蔵昇
「I also Draw (1961)」
Shuzo Takiguchi
「Another Present from
Shuzo Takiguchi」 Hideki Sugino
「PlasticExperimentsby
Shuzo Takiguchi」 Yuri Mitsuda
年譜・展覧会歴・参考文献・作品リスト

雪村 戦国時代のスーパー・エキセントリック

会期=平成14(2002)年4月2日(火)~5月12日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



雪村は水墨画を描いた禅僧である。戦国時代、現在の茨城県や福島県といった東国を中心に活躍した。文化の中心京都から遠く離れた地にありながら、多くの優れた作品を遺している。

中国画のスタイルをまねようとした当時の多くの水墨画家とは違い、雪村は内面にわき出る自己のイメージを、大胆に画面にぶつけている。サブタイトルにスーパー・エキセントリックという強い言葉を冠したが、雪村の個性的な生き方や思想が生み出した表現の独自性を強調したいがためである。その水墨画はけっして過去のものではなく、現代を生きる我々にも、多くのことを訴えかけてくる。

今回の展覧会は四会場を巡回するもので、アメリカに渡ったいくつかの大作の里帰りを含め、内外から、貴重な作品をお借りして、久方ぶりの大規模な展示を実現することができた。各所蔵家の方々に改めて御礼申し上げたい。

本展が行われた2002年春には、水墨画を扱った大きな展覧会が話題をよんだ。京都国立博物館と東京国立博物館で開催された「雪舟展」である。雪舟は言うまでもなく日本美術史上最大のビッグネームであり、その国立博物館での展覧会は注目を集めることが予想されたが、本展はその東京展と重なる時期をあえて選んだ。雪村の一般的な知名度は必ずしも高くはないが、同じ雪の字を名に持つ雪舟展との相乗効果を期待したのである。予想通り雪舟展のカタログを掲げた観客も相当数見受けられたが、最終結果を見ても、当館としてはかなり多くの観客を獲得し、カタログ販売も大きな伸びを見た。あえて雪舟展にぶつけたことが功を奏し、認知度アップにつながったものと考えている。



■特別展 雪村 戦国時代の
スーパー・エキセントリック
31.6×23.9cm 全216P
カラー図版 157P
「雪村の絵を見つめるために」
山下裕二
「雪村の生涯」 川延安直
「雪村人物画理解の手引き」
—神仙・隠者・文人— 小林めぐみ
「雪村筆〈瀟湘八景画帖〉小論」
荏開津通彦
雪村主要参考文献・出品リスト・
雪村の年表と作品の区分・落款・印譜

百面のかたち 橋岡一路 能面の心と技

会期=平成14(2002)年5月28日(火)~7月7日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



『風姿花伝』を著した世阿弥と父観阿弥、室町時代初期にこの父子によって大成され、六百年をへて現代に受け継がれてきた日本の能。深い精神性を持ち、厳粛ななかに神秘的な幽玄といわれる独特の美意識につらぬかれている。老松と若竹を配した能舞台の凜とした空間性、唐織りの装束の華厳さ、舞や謡曲の優雅さ、能には豊富な世界を醸し出すさまざまな要素が緊密な関係を生み出している。

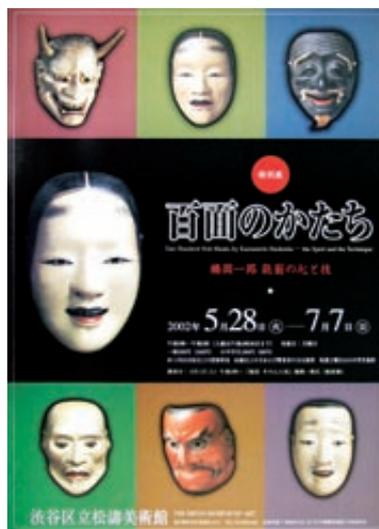
そして能面こそは、もっとも象徴的な存在である。「中間表情」にその特色があるといわれる能面は、能楽師に着けられたとき命を宿し血が通い、真の美しさとともに能の魂があらわれる。神の化身である《翁》、可憐優美な若い女性の《小面》、嫉妬による憤怒のあらわす《般若》、眼窩のくぼんだ死相のただよう《瘦男》、緊迫感あふれる鬼神をあらす《小悪見》、気品に満ちた青年貴公子《中将》、狂乱する中年の女性《深井》など。古くから伝わる多彩な面は名だたる能面師が生みだした名品であり、かけがえのない私たちの宝として永く後世に伝えられてきた。

現代の能面師橋岡一路氏は、卓越した技量をそなえ、能が伝えてきた心を刻んでいる。観世流の名門橋岡家に生まれた作者は、終戦とともに能面師として歩みはじめ、東京美術学校で畑正吉に、さらに宝生流面師鈴木慶雲に入門する。以来、能面の「写し」に厳しい修練をかさねた現代能面師を代表する存在である。

本面の素晴らしさを写し刻むことによって、これから先、何百年も生きる面を打つことが宿命である、と橋岡氏は言う。完成された能面の“かたち”と一点もゆるがせにできない写しの“かたち”、彼は名品と言われてきた多くの能面を今日に甦らせたのである。

本展は作者にとって百面の記念となるものであり、生涯の区切りとなる展覧会である。鮮やかな絵模様の扇や謡本、唐織の装束などをあわせて展示し、華麗なる幽玄美をたたえる能の世界を堪能していただけたと思う。

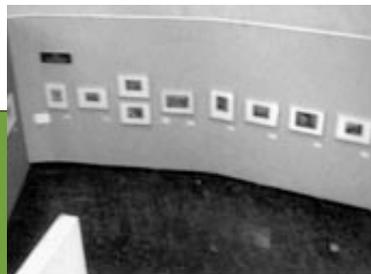
熱心な観客の方が大勢来館されたのは、時間を経て完成されたいまなお受け継がれている伝統の美と、非日常の世界へと誘う古典の世界にたいするあこがれにも似た感情であろうか。あらためて、今日における能楽の人気と隆盛を実感させられた。



■特別展 百面のかたち 橋岡一路 能面の心と技
29.6×18.0cm 全228p
カラー図版 119P
「能面製作の現代」 田邊三郎助
「作者の言葉」 橋岡一路
図版及び作品解説・出品目録・
橋岡一路自筆伝

20世紀写真の探索 写真のモダニズム／ジャポニズム 石田喜一郎とシドニーカメラサークル

会期=平成14(2002)年7月23日(火)～9月8日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室



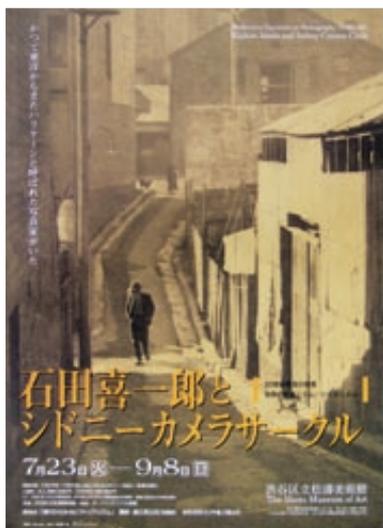
石田喜一郎は長い間は忘れられていた写真作家である。平成10(1998)年に当館で開催した写真展「写真藝術の時代—大正期の都市散策者たち」展で紹介したのは、石田作品が約50年ぶりに公開された機会であった。その折に石田の現存する全写真作品がご遺族のご厚意により当館に寄贈された。以後、調査を重ね、彼が写真作家としての自己を形成したオーストラリアの近代写真史の調査も行ったうえ、本展が実現した。

石田喜一郎(明治19(1886)年-昭和32(1957)年)は秋田県に生れ、上京して大倉組の社員となり、貿易の仕事に従事して大正8(1919)年にシドニーに渡った。この地で鍵山一郎と出会い、写真の手ほどきを受けた石田は、写真による芸術をめざして制作に没頭する。

当地で最も先鋭的な活動を行っていた写真家集団は、シドニーカメラサークルであった。オーストラリアの近代を代表する写真家ハロルド・カズノーを中心に、メンバーは推薦制をとって、新しい芸術的写真を目指すための主導的な展覧会、相互批評による例会を主な活動としたグループである。石田はそこに唯一の非白人として迎えられ、シドニーの写真界の話題をさらう秀作を次々と発表し、ロンドンサロンをはじめ各種の展覧会で活躍した。

大正13(1924)年に関東大震災後の東京に帰国した石田は、日本の写真界とはいかにも異質な、乾いた明るいタッチの作品を発表し、大きな反響を呼び起こす。石田流の明るいプロムオイル印画は、一時、日本中を席捲するほどの大流行となった。福原信三の率いる日本写真会に迎えられ、会の重鎮となった石田は、日本の風景を相手に試行錯誤を繰り返しながらその後も制作を続けた。なにげないなかにも大胆に単純化した画面と大きな余白に彼の到達した境地がうかがわれる。

本展は石田の故郷にほど近い秋田県立近代美術館と、写真家としての故郷であるシドニーのミュージアム・オブ・シドニーに巡回した。



■特別展 20世紀写真の探索
写真のモダニズム／ジャポニズム
石田喜一郎とシドニーカメラサークル
27.4×21.5cm 全204P
モノクローム図版 137P
「石田喜一郎とシドニーカメラサークル～写真における近代と日本」
光田由里
「石田喜一郎とシドニーカメラサークル展によせて」
ジュディ・アニア
謝辞・図版・略歴・出品作家略歴・
鍵山一郎略歴・写真技法
解説・出品リスト・主要
文献

渋谷区制70周年記念 友好都市ゆかりの美術展 —黒田清輝・東郷青児・菱田春草・郷倉和子など—

会期=平成14(2002)年9月24日(火)~10月6日(日)

会場=地下1階主陳列室

協力=鹿児島県鹿児島市、秋田県大館市、東京都羽村市、

長野県飯田市、富山県小杉町、埼玉県神泉村

併催=特別陳列 岸田麗子展



本展は、区制施行70周年を記念して、渋谷区と友好関係を結ぶ6都市の協力を得て開催され、鹿児島県鹿児島市(鹿児島市立美術館)、秋田県大館市(大館郷土博物館)、東京都羽村市、長野県飯田市、(飯田市美術博物館)、富山県小杉町、埼玉県神泉村から、市町村または市立美術館・博物館の所蔵作品を出品していただいた。

鹿児島市からは、日本の洋画界を代表する黒田清輝ら鹿児島出身の作家の作品を中心に、鹿児島の象徴ともいべき桜島を描いた作品、薩摩焼や薩摩切子の伝統を受け継ぐ工芸品、近現代の西洋美術などさまざまな分野の作品が出品された。そして、いまや渋谷の象徴ともいえる忠犬ハチ公の像(現在は二代目)の初代銅像を制作し渋谷区に在住していた彫刻家・安藤照(鹿児島市出身)による、初代ハチ公像の塑像も出品され、好評を得た。

秋田犬であるハチの出生の地・大館市からは、当時盛んに行われていた伝統行事「闘犬」に興じる人々を描いた福田豊四郎《闘犬の日》が出品された。反官展の青龍社に属しながら、帝展に出品し続け、戦後の新しい時代に反応し、生涯新しい日本画の可能性を追求した福田だが、その根底に流れるのは、故郷秋田の風土であり、詩情あふれる素朴な作品世界を創出している。

飯田市からは、出身作家であり、晩年を渋谷区で過ごした日本画家・菱田春草の作品が展示された。

渋谷区も通る玉川上水の源流である羽村市からは、出身作家・並木恒延氏の漆画作品が出品された。「漆で絵を描きたい」という出発点のもと、金粉や貝、卵の殻などを多用した蒔絵や螺鈿などの伝統的手法による作品世界からは、漆の美しさを極限まで引き出し、幻想的で時間を閉じ込めたような漆黒の空間のなか、絹をまとっただけの裸身の女性の息使いが、聞こえてきそうである。

戦時中、学童疎開先として渋谷区の子を受け入れた小杉町からは、親子ともに日本芸術院会員である郷倉千朝、和子の作品が出品された。千朝は、花鳥画や、仏教に取材した大障壁画で有名であり、小杉焼など伝統工芸の復興にも尽力した。その子・和子は、一貫して花鳥に美を求め、近年では特に厳寒に咲く梅を題材に、心象風景ともいべき作品を発表し、女流画家として美術界を牽引する一人である。

また、地名の由縁で友好関係を持つ神泉村は、冬桜や三波石など名勝の地で知られ、夏季に当地を制作拠点とする画家・堀越千秋による、村を流れる神流川の景色を描いた作品が出品された。その鮮やかな色彩の流れは、強い色が大胆に多用されているにもかかわらず、決して濁ることなく力強く表現され、この清流のとうとうと流れる美しい様を表現している。

結果として、その都市の代表的な伝統や特色を伝える作品が一堂に会した。渋谷区にさまざまな文化人が居住していたということを知り知る機会になったばかりでなく、日本の美術とくに絵画史の中で、重大かつ転換期となった明治期の発展史を概観しうる貴重な機会となったと思われる。日本画という用語は、西洋画が日本に移入された近代以降に使われるようになった。ここ至って、日本画・西洋画という二大枠が認知されるのである。近代的な洋画の発展に大きく寄与した黒田清輝をはじめ、多くの後進を育てた藤島武二や和田英作を輩出する一方で、鹿児島は官展系の画家に対して、二科会系の有島生馬、東郷青児なども数多く輩出した。鹿児島という地が、明治からはじまる洋画の移入、発展において、いかになくてはならない画家を輩出した極めて重要な地であるか、本展で確認いただけたことだろう。対照的に、岡倉天心指導のもと、横山大観らとともに近代日本画の発展に大きく寄与した菱田春草の各時期における代表的な作品が展観できたことは、明治期の二大画壇が、互いを意識し葛藤し、独自の発展を試み、その後の日本の美術の基礎となる時代を作り上げた重要な時代を理解する一助となる、幸運な機会であったと思われる。なお、本展は友好展により、入館無料であった。



■渋谷区制70周年記念
友好都市ゆかりの美術展
—黒田清輝・東郷青児・菱田春草・
郷倉和子など—
25.7×8.4cm 全78P
カラー・図版 48P
「日本近代美術の発展
—6都市の作品を中心に」 谷 亜紀
図版・作家紹介・出品作品一覧

生誕100年記念展 小林秀雄 —美を求める心—

会期=平成14(2002)年10月15日(火)～11月24日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、日本経済新聞社
特別協力=新潮社 企画協力=ジパング
巡回館=新潟市美術館、香川県文化会館、尾道市立美術館、MIHO MUSEUM



小林秀雄(明治35(1902)年-昭和58(1983)年)は、日本近代評論の確立者といわれ、文芸評論の一つの芸術の領域にまで高めた評論家である。彼はフランス象徴派詩人や志賀直哉の影響下に文学的形成期を送り、東京帝国大学仏文科卒業後の昭和4(1929)年に「様々な意匠」が雑誌「改造」の懸賞評論第二席に入選。以後、文学・美術・哲学と文芸評論の可能性を広げた。代表作に「無常ということ」「近代絵画」「ゴッホの手紙」「本居宣長」などがある。彼はまた、青山二郎、河上徹太郎などとの交友を通して、骨董にも関心を寄せていた。本展では、彼の評論の対象となった作家や作品、また彼が愛蔵した骨董などを通して、「小林秀雄の眼」、あるいは彼が追求した「美」そのものを考えてみた。



■特別展 生誕100年記念展
小林秀雄 —美を求める心—
21.8×15.5cm 全256P
カラー図版 143P
「美を求める心」小林秀雄
「第一章 近代絵画
第二章 日本の絵画
第三章 骨董への眼終章」小林秀雄
美の年譜・作品リスト・抜粋文英訳・
「美を求める心」英訳

現代日本の水彩表現 にじみ、ぼかし、重ね、線

会期=平成14(2002)年12月10日(火)～
平成15(2003)年1月26日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室



にじみや余白の美を紙上に追求した従来の透明水彩の伝統に対して、戦後、油絵具と水彩絵具の両特質を併せ持つ速乾性で堅牢なアクリル樹皮系の水溶性の絵具が開発され、世界中で使用されている。透明水彩絵具、不透明水彩絵具(グワッシュ)、アクリル絵具の使用により、現代の水彩画はかつてないほどの多様な表現と技法を獲得するようになった。

松濤美術館はこれまで、「アメリカの水彩画」、「大正・昭和の水彩画—蒼原会の画家を中心に—」、など水彩画の展覧会を開催してきた。本展は多様な展開を見せる現代日本の水彩画の状況を紹介するものである。現代モダニズム絵画の氾濫の中で、日本における水彩画の紹介や展覧会が非常に少ない点は多々指摘されていたが、現代の水彩画を俯瞰し、紹介した展覧会は皆無といってよい状況であった。

本展は細密描写の写実的水彩画から抽象的水彩画まで幅広い水彩表現の画家の作品を紹介した。紙やキャンバス地に筆などで描く水彩には、にじみ、ぼかし、かすれ、散らし、渴筆、たらしこみ、余白、ドリッピング、透明感、重なり、など水彩ならではの様々な様相と表現と味わいがみられる。その表現は多様で可能性が尽きることはない。今回は特に、水彩画専門の画家の作品にこだわることなく、油彩画家、彫刻家、立体造形作家、インスタレーション作家、版画家などにより製作された従来の因習的な水彩表現に捉われない斬新な水彩作品をも紹介した。

出品作家:野見山暁治、山田正亮、李禹煥、池田満寿夫、榎倉康二、若林奮、根岸芳郎、山口啓介、難波田史男、カジ・ギヤスデン、小池隆英、丸山直文、崔恩景、杉山尚子、大浦こころ、土屋文明、舟橋淳司、青柳光枝



■特別展 現代日本の水彩表現
にじみ、ぼかし、重ね、線
300×23.0cm 全152p
カラー図版 119P
土屋文明、舟橋淳司、野見山暁治、
難波田史男、池田満寿夫、
カジ・ギヤスデン、青柳光枝
山口啓介、大浦こころ、丸山直文、
若林奮、杉山尚子、榎倉康二、李禹煥、
崔恩景、山田正亮、根岸芳郎、
小池隆英
「現代日本の水彩表現
にじみ、ぼかし、重ね、線」
福井泰民
謝辞・解説・作家略歴・参考文献・
出品リスト

武者絵 江戸の英雄大図鑑

会期=平成15(2003)年4月8日(火)~5月18日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



江戸文化の華である浮世絵は、様々な画題を取り込んで、庶民のニーズに応えるメディアであったが、義経をはじめとする古今の名将や、弁慶や曾我兄弟などの力自慢を描いた武者絵も、美人画、役者絵、風景画などと並ぶ主要なレパートリーの一つであった。嘉永六年に刊行された『江戸寿那古細撰記』では、「豊国にかは、国芳むしや、廣重めいしよ…」の順が示されており、国芳が描く武者絵は、豊国の似顔（役者絵）に次ぎ、広重の名所風景画を上回るほどの人気があったことがわかる。

浮世絵の中の武者たちは、庶民のヒーロー願望を反映するように、超人的なまでの肉体をまとって、驚くばかりの離れ業を演じている。そのような史実から空想の世界に一步踏み出した大胆な表現こそが武者絵の魅力であり、子供から大人まで多くの人々に愛された理由であろう。江戸庶民にとって浮世絵の中で活躍する武者たちは、歴史上の有名人であったばかりでなく、単調な日常を忘れさせてくれるヒーローだったのである。

武士の世が終わって新時代が到来すると、厳密な考証に基づく歴史画が盛んとなる一方で、武者絵は次第に下火となってしまふ。風絵やねぶたのような祭礼の山車の象徴として庶民の間では受け継がれたが、特に戦後は美術史の本道からはずされて、満足な展覧会も開かれずにいたのが実状であった。

しかし武者絵のダイナミックな構図や躍動する肉体表現は、刺激になれた現代においてさえ、十分な魅力を持っているし、国芳らが描く幕末の武者絵の完成度の高さは、江戸文化の成熟を示すものでもある。この展覧会は、そのような魅力溢れる武者絵の世界を、はじめて真正面から取り上げたものであったが、中心的な役割を果たした錦絵をはじめ、絵馬や屏風、絵巻、絵本など様々なメディアに描かれた武者絵を展示することにより、その魅力の一端を示せたのではないかと考える。



■特別展 武者絵
江戸時代の英雄大図鑑
29.7×20.9cm 全144P
カラー図版 112P
「武者絵の世界」 岩切友里子
「武者絵と私」 恵俊彦
「実際のなかの武者絵」 林直輝
「武者絵の絵馬」 矢島新
出品作品リスト

上海博物館展 —中国文人の世界—

会期=平成15(2003)年6月3日(火)~7月13日(日)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
 主催=渋谷区立松濤美術館、読売新聞東京本社、美術館連絡協議会
 巡回館=秋田市立千秋美術館、呉市立美術館、米子市美術館

中国には、文人とよばれる知識階級がいた。文人とは文房（書齋）にいる人という意味であったが、次第に、文徳の人、つまり、学問徳行に優れた人ということになり、さらには、芸術的な風雅さを備えた人を文人と称するようになる。

明代中期を代表する文人に文徵明（文明2(1470)年-永祿2(1559)年）がいる。経済的に発展を遂げた江南の蘇州の文化を代表する人であり、その円満で篤実な人柄によって蘇州の文人たちの中心となった。今回出品された「真賞齋図」は文徵明の友人で収蔵家として知られた華夏の書齋「真賞齋」を描いたものである。松や竹などの樹木、太湖石に囲まれた三間の茅屋、中央の屋内で机に向かい巻物をひろげているのが華夏である。机には各種の文具が置かれ、左の屋内には書籍や画卷などが積み、右の別室では侍童が茶の支度をしている。明代中期の文人の優雅な生活環境を想像する事ができるであろう。図の後には文徵明が華夏のために作った「真賞齋銘」の一文が彼の性格を示すような楷書で書かれている。そして、この図には『乾隆御覧之宝』をはじめとして多くの鑑蔵印（所蔵者が押した印）が押されているが、これもまた、文人たちの間における美術品収蔵の趣味を示すものである。

この展覧会では、こうした文人たちが居住した生活空間である書齋や園林を描いた作品をはじめとして、そこでの雅な集い、また理想とした脱俗の生活を物語る山水図、彼らの高潔な精神を植物に託して画いた墨竹図や墨梅図、文人たちの間での詩文の応酬をものがたる書蹟などのほかに、彼らの書齋に彩をそえた各種の文房具、そして彼らの趣味生活をものがたる琴や茶具など91点を、中国を代表する美術館のひとつ上海博物館所蔵の名品の中から選び陳列した。

上海博物館の所蔵品は毎年のように日本で展示されているが、その多くは羅列的な名品展であった。今回の展示は文人たちの生活、思想を考えると一つの主題にそって作品を選び出した。本展を通して、中国文人の理念を感じ取り、長い中国文化の伝統の本質に近づいていただけたものと思う。



■特別展 上海博物館展
 —中国文人の世界—
 29.2×21.6cm 全174P
 カラー図版 105P
 「メッセージ」 上海博物館館長陳燮君
 「書画と文房具からみた
 明清文人の芸術趣味」 単國霖
 出品目録・作品解説
 画人書人略伝

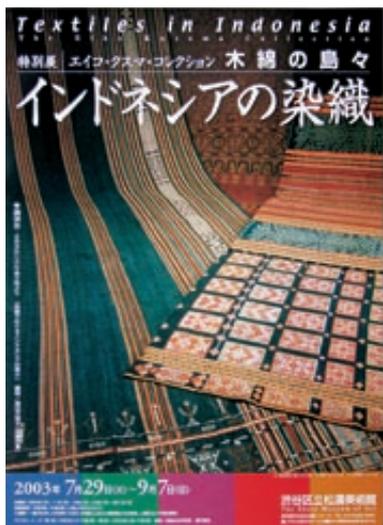
エイコ・クスマコレクション 木綿の島々 インドネシアの染織

会期=平成15(2003)年7月29日(火)~9月7日(日)
会場=地下1階主陳列室 巡回館=福岡市美術館
併催=特別陳列 ジャワ島・スマトラ島の染織
福岡市美術館所蔵 エイコ・クスマ・コレクションより
会期=2003年7月29日(火)~9月7日(日) 会場=2階サロンミューゼ、特別陳列室

インドネシア、ジャカルタ在住の元日本人・エイコ・アドナン・クスマ氏は、長年住むことになったインドネシアの国に貢献したいと、染織品の収集を思い立ち、個人の手で膨大なコレクションを作り上げた。そのすぐれたコレクションのなかから、インドネシアの染織文化を二部構成で紹介する展覧である。

第一部は、福岡市立美術館からの巡回展で、インドネシアの島々を広く網羅する、75点の地方色豊かな木綿の染織品を展示した。スンバ島、フローレス島、中ティモール、スラウェシ島、カリマンタン州などから、経緋、藍染、綴れ織、刺繍、ろうけつ染めなど、多彩な技法と、幾何学模様、動物、植物紋などの数々の模様バリエーションが見られる。これらは日用着のほか、儀式用の布などに用いられた。

第二部は同館の所蔵品になったエイコ・クスマ・コレクションから、スマトラ島とジャワ島の、二島の原産による染織品37点を展覧した。カタログも二部構成とした。



■特別展 エイコ・クスマ コレクション
木綿の島々 インドネシアの染織
29.7×22.7cm 全120P
カラー図版 77P
「インドネシア染織との出会い
私のコレクションをつくりあげてくれた
ミナイの男たち」 エイコ・アドナン・クスマ
「インドネシア東部の木綿の織物」
スワティ・カルティワジュディ・アキヤディ
作品データ・解説
参考文献(和書)
用語解説

2003日本におけるトルコ年 トルコ共和国文化省 現代絵画展 工芸とイズニックタイル展 —伝統を今に引きつぐ魅力にせまる幻のイズニック—

会期=平成15(2003)年9月23日(火)~10月5日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、駐日トルコ共和国大使館



「2003日本におけるトルコ年」のこの年、区内に大使館を置くトルコ共和国と渋谷区の友好を記念して、当館では3つのトルコ関連企画を実施した。本展はその最後の企画である。トルコ共和国文化省(同年9月に文化観光省)の協力を得て、現代絵画からイズニック・タイルや伝統手工芸品にいたる多彩な内容で、色濃く伝統を残す現在のトルコの魅力を紹介する機会となった。

会場は絵画と工芸の二部で構成された。絵画はトルコ近現代絵画史を俯瞰した「トルコ中央銀行コレクション展」(3月開催)に続いて、今回は現代作家を中心に、その後の絵画史の流れを補完する内容となった。全国で数多く展開されたトルコ年展のなかで唯一といってもよい近現代絵画史に焦点を当てた画期的な内容であったといえるだろう。工芸は、イズニック・タイルと伝統手工芸品、トルコ近代化以前に主流であったカリグラフィーで構成。イズニック・タイル部門では、文化省を通してイズニック・タイル財団の全面協力を得て、24点を展覧。代表的な古典作品の模造や文様の忠実な再現が試みられた作品が多くを占めた。オスマン・トルコの繁栄の象徴でもあったイズニック・タイルだが、15~6世紀の繁栄から一転して、後援者たるオスマン帝国の衰退や他窯の躍進などにより、その技術や文献までも17世紀には失われた。20世紀に入り、調査・復興への努力が結実して、イズニック・タイル財団が平成5(1993)年に設立。今日ようやく当時の高い技術的水準にたどり着いた。いま一度その魅力を世界へ向けて紹介することもその主眼に入れてきた財団にとって、本展は非常に小規模ながらその研究成果の結実を示す格好の展示となった。現代的な伝統の継承のあり方を示す視点で、有意義な内容であったと考える。

最後の伝統手工芸部門では、現在も愛用されている銀・銅製品、今も深く信仰されている邪視信仰のナザール・ボンジュウなどを紹介。同時にミニアチュール(細密画)やマープリング、テズヒップ(装飾芸術)も展覧し、現代絵画と比較できる内容となった。会期中には、テズヒップやキリムの作家も来日し、実演も開催。会期後、世界的に有名なトルコの建築家・テュメルテキン氏設計、イズニックタイル財団製作の伝統的なチューリップ文様タイルを使ったモニュメントが渋谷区に寄贈された。なお平成17(2005)年現在、イスタンブル・ウスキュダル地区と渋谷区が正式に友好都市となっている。



■特別展
2003日本におけるトルコ年
トルコ共和国文化省 現代絵画展
工芸とイズニックタイル展
—伝統を今に引きつぐ魅力にせまる
幻のイズニック—
29.7×21.0cm 全72P
カラー図版 41P
トルコ現代絵画について
イズニック・イズニック・タイルとその
再生の物語
イズニックの陶芸
「トルコの手工芸品
および服飾に関して」
ミュージック・カフェジ
用語解説(工芸編)
作家紹介
掲載作品リスト

合田佐和子 影像

—絵画・オブジェ・写真—

会期=平成13(2003)年10月14日(火)~11月24日(月・祝)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



合田佐和子(昭和15(1940)年生まれ)は高知県の出身で、高校在学中に上京し、武蔵野美術学校(現・武蔵野美術大学)在学時には渋谷区に在住していた。本展は、上京後の初期作品から最新作まで、絵画、デッサン、オブジェ、インスタレーション、立体、写真、本、など多岐にわたる合田佐和子の造形物を一堂に会する、初めての総合的な回顧展である。

これまで約40年にわたり、精力的な制作を続けてきた合田は、現代美術関係画廊などでの発表にとどまらず、ポップカルチャーや映画、演劇、グラフィックデザイン、ファッションといった多様な分野で活躍し、注目されてきた。その活動の多様性は、作家の独自性の一面であるにもかかわらず、従来のカテゴリーに収まりきれないために、作家の全貌はこれまで正当に評価されてきたとは言いがたい。本展は合田佐和子の総合的な作家像を提示し、現代美術の文脈からその仕事を回顧するとともに、現代美術の文脈そのものを再考する機会として、企画された。反芸術、概念芸術、ニューペインティングといった動向、潮流とは別の論理が、合田の作家活動を貫いていることを本展覧により示すことができた。

二つの展示室では、地下一階でエジプト渡航以後の近作を、2階展示室では初期作品を展覧した。モノクローム写真をもとに絵画制作を始めた初期と、写真に鉱物やレンズ光を取り入れてより非物質化を強めていく後期の展開を、対照的な展示方法で陳列することで、作品の世界が影から光へと展開している様子を示そうと試みた。サブタイトルの「影像」は「イメージ」の訳語であるが、合田は写真をことに制作の出発点にしキーポイントのひとつにしているため、ドイツ語の写真「Lightbild」に掛けて、欧文タイトルを造語「Shattenbild」としてみた。

反響としては、雑誌の特集、新聞紙面の展評等が挙げられる。

なお、個人所蔵家から初期作品のご寄贈をいただいた。



- 特別展 合田佐和子 影像
—絵画・オブジェ・写真—
27.5×21.9cm 全204P
カラー図版 134P
「航海図」 合田佐和子
「An Acrostic in Rose」
瀧口修造(再録)
「無題」 瀧口修造(再録)
「恋のミイラ」 唐十郎(再録)
「ポップマニエリスムの絵師たち1
終末のあと白の女神に会う
合田佐和子」 日向あき子(再録)
「60年代が眩しい」とか
日向あき子(再録)
「合田佐和子 影像」 光田由里
合田佐和子略年譜
合田佐和子主要文献
出品リスト

谷中安規の夢

シネマとカフェと怪奇のまぼろし

会期=平成15(2003)年12月9日(火)～
平成16(2004)年2月1日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
巡回先=須坂版画美術館、宇都宮美術館



近代版画家の知名度はまだまだ低い場合が多い。その作品の評価も同様である。さすがに棟方志功は抜きんでて別格のごときであるが、それ以外の版画というと本当に心もとない。

しかしながら、その知名度においてマイナーな存在であることと、芸術性の価値がかならずしも一致しているわけではないということは言うまでもない。版画芸術がまだ認知度が低いということは、その独自性がなかなか喧伝されていないという面もいめない。

一様に評価の貶められているのは、それだけの作品でしかないのか、あるいは、何かがまちがっているのか、歴史的な版画のなかにも印象的な画像があり、人々のなかに記憶に残っている作品もあるはずだ。また、その造形性においても美術史的にみても重要な前衛たりえた版画も存在する。

近代の版画のなかには他のメディアではなしえなかった独自の表現がまま見られる。恩地孝四郎、田中恭吉、織田一磨、藤牧義夫、さらには川上澄生らの絵を見ていると、油彩画、日本画の作家にも比しても大きな存在感を感じる。

谷中安規はそうした近代版画のなかでもっとも優れた表現をもちえた版画家のひとりである。現実とまぼろしを浮遊するような感覚でもって、幻想や夢のあふれる世界を表現している。彼のような、つぎつぎと湧きでるイメージを吐きつづける、まさに創造力の横溢する煌めく才能は例をみない。

谷中をとらえる方法として、いくつか要素があろう。モダンとプレモダン、東洋と西洋、聖と俗、性と生、宗教と日常などなどである。そうしたアンビバレンツな傾向が彼の特色である。今回は、1920年代から40年代という時代、大震災をはさんで大正から昭和へと移っていくモダニズムと原風景が混在した時代状況のなかから、谷中の存在をみてみたいと考えた。

独特の表現によって安規ファンと呼ばれる熱狂的なファンがいるが、従来の谷中の愛好家と同時に、若い人達やそして今まで名さえ知らなかった美術愛好家の人々が数多く訪れていただけたのは心強かった。谷中芸術が時代をこえて人々を魅了し受け入れられるものであることが証明された。



■特別展 谷中安規の夢
シネマとカフェと怪奇のまぼろし
25.5×18.3cm 全368P
カラー図版 192P
「動坂にショーウィンドーの剥製はあったのか」[谷中安規の夢]展にあたって
瀬尾典昭
「谷中安規と都市のゴースト」中沢 弥
「谷中安規のロボット画について」
伊藤伸子
「谷中安規における神話的創造力
龍・蛇・虎・異類のものたち」
及川智早
「谷中安規さんの技法」 大野隆司
「谷中安規と
愛書趣味の時代」 山田俊幸
年譜
足跡関連地図
文献目録
出品目録
谷中安規文集

表現者 河井寛次郎

—陶芸・木彫・家具・詞—

会期=平成16(2004)年4月6日(火)~5月23日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
協力=河井寛次郎記念館
巡回先=岐阜県現代陶芸美術館、アサヒビール大山崎山荘美術館、
町田市立博物館 企画協力=浅野研究所

フランスの著名な文化人アンドレ・マルローは、河井寛次郎(明治23(1890)年-昭和41(1966)年)晩年の激しい作風を見て、「ペートーヴェン」と呼んだと言う。民藝の文脈で語られることの多い寛次郎であるが、近代の陶芸家の中でも、最も自己を自由に表現した作家であった。

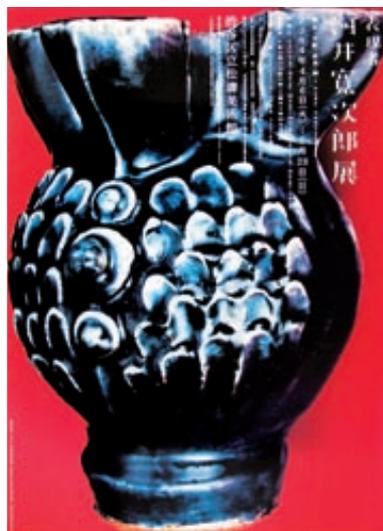
寛次郎は常に成長し続けた陶芸家である。卒業した東京高等工業学校と、その後勤務した陶磁器試験場で身に付けた高度なテクニクを評価された新進作家の時代、柳宗悦らと知り合って、無名の工人が作り出した日用品の簡素で力強い美しさに惹かれた民芸運動の時代。そのような研鑽の日々を経て、戦後は自らの内面からわき出てくる感動を、そのまま造形の中に表現しうる自由な境地に到達したのである。

魔術と呼ばれた釉薬の技は、得意としていた辰砂(赤)をはじめ、呉洲(青)や民芸調の海鼠、独自に造りあげた晩年の碧釉など多彩を極め、いずれも珠玉のような輝きを見せている。京都五条坂の登窯からは、ろくろの技による壺や皿はもちろん、型を用いた扁壺や硯など、思うがままの自由で大胆なかたちが生み出されたが、いずれも美しい釉薬と、筒描、貼文、打薬、練上、泥刷毛目などの多彩な技法で飾られている。晩年には用を離れた陶彫や陶板も試みている。

形への飽くなき関心は、寛次郎を木彫や家具製作など、陶芸以外の分野にも踏み込ませた。著述の中で「新しい自分がみたいのだ—仕事する」と述べるように、自らに枠をはめることなく、晩年に至っても新たな分野に挑戦し続けている。常に新しい技法に挑み、自由な造形世界をひらいた寛次郎の作行きの広さは驚異的である。晩年は書や文筆にも範囲を広げて、自己を思うがままに表現している。

寛次郎の創作活動は、そのように奔放に繰り広げられたが、いずれの作品にも、骨太な寛次郎の個性が色濃くあらわれている。寛次郎は名もない職人の質実な仕事を限りなく尊敬していたが、自身の歩みは、まぎれもなく自由な表現者に至るものであった。

この展覧会では、晩年の自由な境地を示す陶芸作品を中心に、初期や民藝期の代表作、木彫作品、デザインした家具やキセル、書などもあわせて展示して、表現者河井寛次郎の到達点を、多面的に検証しようと試みた。



■特別展 表現者 河井寛次郎
—陶芸・木彫・家具・詞—
21.4×30.2cm 全154P
カラー図版 128P
「不忘の抄」 河井須也子
「骨太な表現者・河井寛次郎の到達点」 矢島 新
「河井寛次郎のことばの世界」 鷲 珠江
河井寛次郎の文章
「河井寛次郎と木の造形」 杉浦美紀
「河井寛次郎の技法」 矢島律子
河井寛次郎年譜 佐野素子
作品リスト

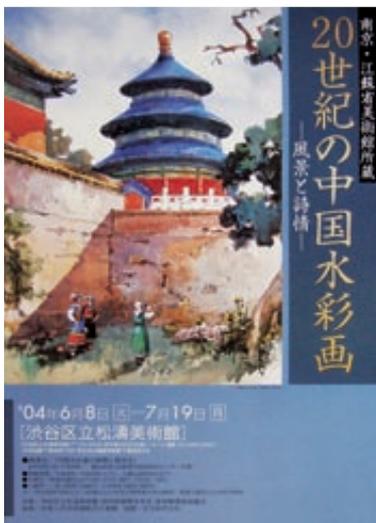
南京・江蘇省美術館所蔵 20世紀の中国水彩画 —風景と詩情—

会期=平成16(2004)年6月8日(火)~7月19日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、読売新聞東京本社、美術館連絡協議会

江蘇省美術館は、中国で最も古い美術館で、当館とは平成4(1992)年と平成9(1997)年の二度にわたり、美術館連絡協議会との共催で中国絵画の展覧会を開催してきた。三回目となる今回は江蘇省美術館の所蔵品から水彩画百点を選んで陳列することとなった。

水彩画は欧州に起源を發し、18世紀の英国で盛んとなったことは周知のごとくである。中国へは、古く明末にイエズス会宣教師により油彩と同時にもたらされたともいうが、本格的には、20世紀に入って、欧州や日本への留学生により伝えられたといえよう。紙に水溶性絵具を用いて描き、にじみやぼかしを多用するという技法の上から、中国固有の国画(紙本淡彩)と共通する画があり、西洋の技法を用いつつも、中国の伝統的な筆法も応用されるなどして、中国的な独自の展開をとげてきた。近代中国では「西学中用」の掛け声の下に西洋文明を中国に取り入れることが唱えられたが、まさに芸術分野での実践例といえることができる。

描かれる内容は、解放前の欧州水彩の引き写しにはじまるもの、建国の熱気あふれる五十年代のいわゆる社会主義リアリズムの影響が濃厚に見られる作品、そして文革時代の空白期間を経て、今日の改革開放政策のもとでの作品と多様であり、また、江南の水郷や西域などの中国の広大な自然や歴史的建造物、風物を描いた作品や少数民族の生活をモチーフにした作品など中国ならではの主題が見られ、中国への旅情がかきたてられもする。本展ではこうした多様な作品の中から、日本留学の陽太陽、余鐘志、欧州に学んだ呉冠中、李劍晨などの作品から現在最前線で活躍する若手作家までの作品を陳列し、20世紀における中国水彩画の概要がうかがいえたものと思う。



■特別展 南京・江蘇省美術館所蔵
20世紀の中国水彩画 —風景と詩情—
29.5×21.6cm 全168P
カラー図版 96P
「今日の江蘇省美術館」 楊企遠
「中国水彩画の道」 鄭偉建
作品解説
作者紹介
出品目録

瑛九 前衛画家の大きな冒険

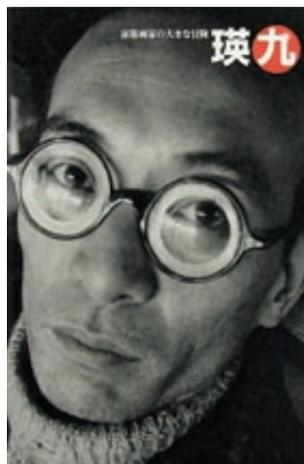
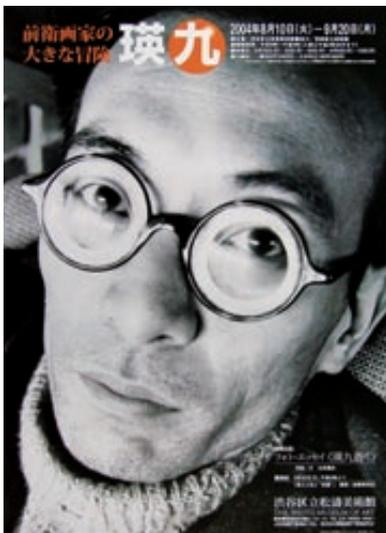
会期=平成16(2004)年8月10日(火)~9月20日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



瑛九は戦前から制作や美術評論を始め長い活動歴をもっていたが、美術史的な立場ははまだ明確ではなかった。前半期のシュルレアリズム傾向の作風はとりとめもなく、根無し草のように評価は低かった。一方、フォトデッサンと版画は例外で、それぞれの分野のなかに独自の表現として高く評価されていたが、部分的に腑分けするような評価であった。彼の様々に変転するメディアや表現の流れを見通すような視点が、ほとんど提示されていなかったのが現状である。

いちばん、わかりやすいのは久保貞次郎らと設立したデモクラート美術家協会での活動であるが、この団体そのものは、造形上の主義主張をともにするというわけではなく、既成の美術団体にたいするアンチテーゼという政治的な意味合いが強かったことで、瑛九の美術上の評価を助けることにはならなかった。そうした瑛九の全制作を俯瞰するとき、最晩年に制作した点描作品こそは、生涯を通底する造形感覚がありその総決算だと考えられる。浦和で48才の生涯を閉じる直前はデモクラート美術家協会の活動をやめ、仲間たちとも距離をおきながらも、点描による油彩画に没入している。光の中から生まれ出たような孤高の世界であり、原点回帰とも言えるそれらの制作は彼の芸術の到達点だった。

本展はその最晩年の3年間に焦点をあて、援助者との往復書簡や瑛九を撮した写真家玉井瑞夫のフォトエッセイとともに、彼のいう「大きな冒険とスリルの世界」に焦点をあてた展示である。アンフォルメル傾向がつよい1950年代の美術状況のなかで、瑛九は孤立した表現を見せていたのは違いないし、それゆえ評価がおくれ、それゆえ評価が高いのも事実である。地下1階の主会場には10数点の点描の大作と20点ほどの小品で構成された作品がならび、瑛九がもつめた点描作品に囲まれた様子を再現できたに違いない。関東で油彩画を中心にした本格的な瑛九展が開かれたのは久しぶりであったことや、長く日の目をみなかった代表作《田園B》という作品が展示され、点描の大作のほとんどが一堂に会することができたことは貴重だったとおもう。



■特別展 瑛九
前衛画家の大きな冒険
29.6×19.6cm 全176P
カラー図版 80P
ダブルトーン図版 38P
「無視のいない午後」
—瑛九の点描作品— 瀬尾典昭
瑛九からの手紙
フォトエッセイ《瑛九逝く》玉井瑞夫
年譜
文献
出品リスト

生誕百年 安井仲治

—写真のすべて—

会期=平成16(2004)年10月5日(火)~11月21日(月)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
 巡回館=名古屋市美術館



写真家・安井仲治(明治36(1903)年-昭和17(1942)年)の生誕百年を記念して、初めての総合的回顧展を開催した。

出品作は、ヴィンテージプリント約150点、1950年代のモダンプリント3点、および本展のためにオリジナルネガから作成したニュープリント約70点で構成した。ニュープリント製作はラボテイクが担当した。

安井自身が作成したヴィンテージプリント出品作では、新発見の重要作品11点を展覧することができた。最も力を注いだのは、これまでほとんど先行研究のない、年代特定・推定の調査である。本展でようやく安井の発表作品の年代的展開が概観できたことで、作家像が改めて浮かび上がってきたものと思われる。

出品したモダンプリント3点は、1950年頃、棚橋紫水が展覧会開催のために作成したものと推定される。これも、今回初めて確認された事項である。

また、ニュープリント作成は、現存しない作品で、発表作品として安井生前に出版物に図版が掲載されたもの、およびオリジナルネガの状態が比較的良好に使用にたえるものに限って作成した。これまで何度か安井の死後ニュープリントが作成されてきたが、オリジナル作品のトリミングに厳密に従って行ったのは、今回がはじめてのことである。これにより、失われた安井の代表作の多くを蘇らせ、彼の写歴をふり返る上での重要な欠落点を補うことができた。

以上のように、本展はこれまでその全貌がヴェールに覆われたままでいた巨匠・安井仲治の写真家としての全貌を、できるだけ忠実に紹介することに努め、その任は果たせたといえる。写真関係者をはじめ、展覧の評価は高く、新聞評・雑誌特集などの反響も少なくなかった。



■特別展 生誕百年 安井仲治
 —写真のすべて—
 29.0×22.4cm 全322P
 ダブルトーン図版 215P
 「父のこと」 安井仲雄
 「安井仲治リアルさの果て
 —写真黄金期の巨人」 光田由里
 「写真のラディカルさ」 中島徳博
 「安井仲治
 —他者の描写・静物の表象」 竹葉 丈
 文献再録
 初期の写真アルバムから
 『安井仲治作品集』
 安井仲治年譜
 参考文献
 カタログ

華麗なるペルシャ絨毯の世界 イラン・ミーリー工房の復元作品と古典作品

会期=平成16(2004)年12月7日(火)～平成17(2005)年1月30日(月)

会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

主催=渋谷区立松濤美術館、千代田トレーディング

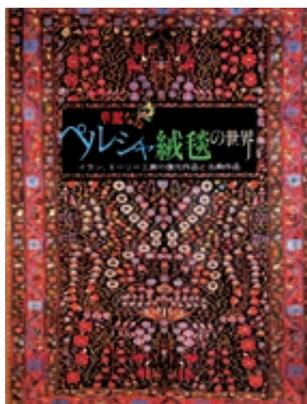
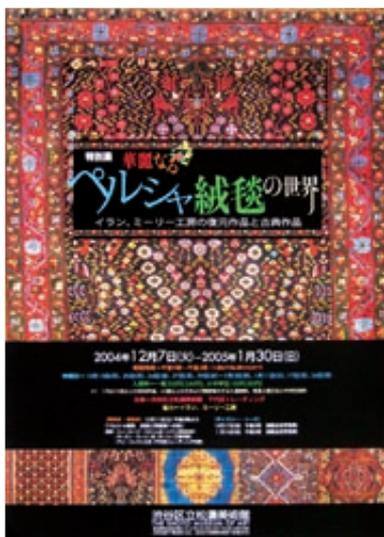
協力=イラン、ミーリー工房

巡回先=岡山オリエント美術館、一宮市博物館

イランの産物として有名なペルシャ絨毯のパイル織(結び織)の技法は、紀元前5世紀頃にもさかのぼると言われている。しかしながらこの長い伝統をほこる工芸技術も、19世紀末頃からは、すたれ始めた。

ミーリー工房では近年、古来の手紡ぎ、天然染色、手織りの過程を研究し、その技術の復活に努めている。本展では、同工房の所蔵する19世紀～20世紀の絨毯約40点に加え、復元製作された古来の技法による絨毯18点とそれが手本としたアンティーク絨毯を併せて展示した。

また、織りの道具、染料などの資料展示のほか、イラン南西部の遊牧民カシュガイ族のテントを展示室内に再現し、手織りの実演も行なった。



■特別展 華麗なるペルシャ絨毯の世界

イラン・ミーリー工房の復元作品と古典作品

29.5×23.0cm 全 248P

カラー図版 114P

「ノットの隠された奥義」 ラズィ・ミーリー

「ペルシャ絨毯：ひとつの文化的連続体」 スイールーズ・バルハム

「アジア諸国の伝統工芸とイラン、ミーリー工房の試み」 福井泰民

「ペルシャ絨毯の模様・デザイン」 福井泰民

「イランにおける手織絨毯の状況」 アリ・ソレマニエ

出品主要作品解説

イランの自然と人々

古典絨毯

絨毯をつくる

ミーリー工房の古典作品と復元作品

建築と美術の中に見る絨毯のモチーフ

作品リスト

主要参考文献

ペルシャ絨毯関連イラン地図

梅原龍三郎

晩年の造形と愛蔵品

会期=平成17(2005)年4月5日(火)~5月15日(日)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
 企画協力=ティー・シー・ディー

梅原龍三郎(明治21(1888)年-昭和61(1986)年)は、日本近代美術の巨匠である。若き日に渡仏してルノワールにその画才を認められ、帰国後白樺派の人々を中心に広く賞賛を受けた。以来、芳醇な色彩と奔放な筆致で見る者を魅了し、日本的な油彩画の完成者として一時代を築いている。

梅原の展覧会は、生前から現在に至るまで頻繁に行なわれているが、この展覧会では、主に戦後の作品と、自身で蒐集した愛蔵品を対比させることに主眼をおいた。梅原の芸術は、しばしば西洋画の伝統と東洋的な美観を融合させたと評されるが、彼自身が蒐集していた美術品に、その創造の秘密がうかがえると考えたからである。

梅原の造形品に対する関心は古代から現代に及び、洋の東西も問わなかった。師のルノワール、ピカソ、ルオーらの名品を身近に置いて愛する一方で、ヨーロッパ古代彫刻やコプト織にも関心を寄せ、中国や日本の品々にも目を向けた。浮世絵や大津絵の平明な色彩と大胆な構図、浦上玉堂や富岡鉄斎の文人画の柔らかく強靱な筆致に魅了され、その名品を愛蔵していたのである。

それら蒐集品の多くは、梅原自身の感性に近い、骨太で、豊かな色彩に溢れ、原始的な生命感に富むものであったが、購入に際して、世間的な評価にとらわれることなく、自らの嗜好に合うかどうか、自らの創造にとって滋養となるかどうか、という基準を常に優先させた結果であった。梅原はコレクションした陶磁器や染織品などをしばしばモチーフとして描いたばかりでなく、模写やスケッチを通してそれら古今の造形からエッセンスを吸収し、自身の制作に役立てたのである。

梅原は生前それらの高価な蒐集品を美術館や博物館に多数寄贈し、社会に大きな貢献をなしているが、この展覧会に際しては、それらの機関やご遺族のご協力で、梅原コレクションの重要な部分を再構成することができた。梅原作品とそのコレクションを交差させる展示によって、梅原芸術の核心に迫れたのではないかと考える。



■特別展 梅原龍三郎
 晩年の造形と愛蔵品
 25.2×20.3cm 全164P
 カラー図版 116P
 『梅原龍三郎をめぐる批評言説』
 光田由里
 『梅原龍三郎とルノワール』 嶋田華子
 『梅原龍三郎の蒐集』 矢島 新
 梅原龍三郎自筆文献再録
 梅原龍三郎略年譜
 一執筆と寄贈を中心に—
 出品リスト、作品解説

會田雄亮展 変貌する陶土 —練込・陶壁・モニュメント—

会期=平成17(2005)年5月31日(火)~7月18日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
巡回館=江別市セラミックアートセンター、山形美術館

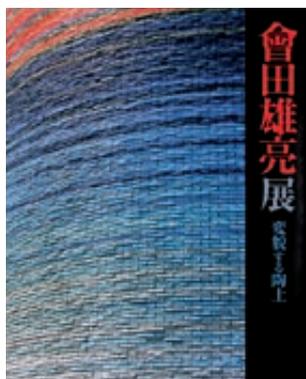
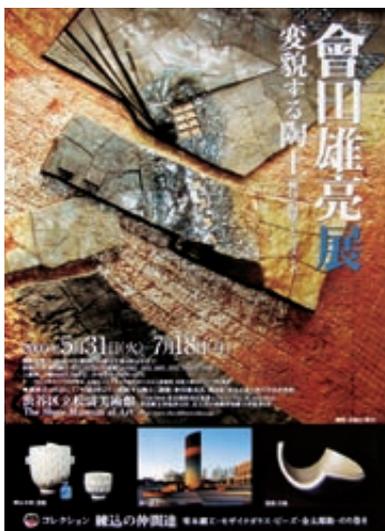


渋谷区在住の陶芸家、會田雄亮の初の本格的な回顧展を開催した。

會田雄亮(昭和6(1931)年東京生まれ)は、千葉大学造園学科で都市計画を専攻するが、卒業後、宮之原謙に出会い師事することで、陶芸の道に入る。昭和36(1961)年、ボストン美術館附属美術学校の講師として招聘されたのを機に渡米し、アメリカ・ベントン社のチーフデザイナーを勤めたのち、帰国。以後、練込技法に魅せられ、さまざまな表情の作品を展開しながら、環境造形にも携わっている。イタリア・ファエンツァ国際陶芸コンペ、吉田五十八賞をはじめ、数々の賞を受賞している。

會田は、自らの仕事を「珪酸塩工業」とあえて呼び、食器から環境造形作品まで、陶土の可能性を追求し、人間との係わりに追究しつづけている。出色の《陶織》など平面作品もまた、従来のタブローの枠を超えた意味合いを持つのであり、絵画、彫刻、建築の空間芸術としての相互関係を問い直すものである。初期の代表作であるキャセロールや練込技法による新作、環境造形作品の写真パネル・マケット、陶織・陶壁などの平面作品のほかに、「コレクション練込の仲間達—寄木細工・モザイクガラス・ビーズ・金太郎飴・のり巻き—」と題して、練込と共通する技法による東南アジアの陶磁器やイタリアのモザイクガラス、日本の寄木細工などを併せて展示した。練込に魅せられた會田が、世界中から集めた作品や菓子に至るまでの膨大なコレクションの、ほんの一部であったが、會田作品のインスピレーションの源をかいま見ることのできるものであり、練込の奥深さを感じさせられる展示であった。

会期中、作家自身による展示解説や講演を開催した。多数の参加者があり、好評であった。



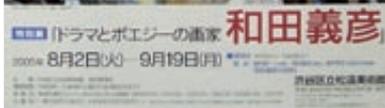
- 特別展 會田雄亮展
- 変貌する陶土
- 27.9×22.7cm 全136P
- カラー図版 104P
- 「近代工芸の創造性
—會田雄亮の位置について」
- 金子賢治
- 「練込みについて」 會田雄亮
- 「會田雄亮の環境造形について」
- 岡部信幸
- 「中国の絞胎」 味岡義人
- 「コレクション『練込の仲間達』」 谷 亜紀
- 年譜
- 出品目録

ドラマとポエジーの画家 和田義彦展

会期=平成17(2005)年8月2日(火)~9月19日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
巡回館=三重県立美術館、茨城県つくば美術館

和田義彦(昭和15(1940)年~)は、三重県に生まれ、愛知県立旭丘高校美術課程を経て昭和34(1959)年に東京藝術大学油画科に進む。昭和39(1964)年に初の個展を開催、翌年の第39回国画会で初入選を果たし画家として歩み始めた。昭和45(1970)年には国画家会員に推挙され、翌年から6年間イタリア政府給費留学生としてローマに留学。その間、スペインにも滞在して本格的な油彩画技法を修得し、昭和52(1977)年の帰国後は国画家や個展などで作品発表を続けた。平成14(2002)年に第25回安田火災東郷青児美術館大賞を受賞するなど、洋画界で高い評価を得ていた。

本展は三重県立美術館、茨城県近代美術館つくば分館(茨城県つくば美術館)館とともに、公立美術館3館の巡回企画展として、読売新聞社と共催したもので、和田氏が渋谷区在住の画家であることから開催に至った。



■特別展 ドラマとポエジーの画家
和田義彦展
30.4×22.5cm 全100P
カラー図版 72P
「和田義彦の絵」加藤貞雄
「ドラマとポエジーの世界」
毛利伊知郎
「和田義彦の芸術
—主題とモチーフ」 舟木力英
主要参考文献
和田義彦略年譜
出品リスト

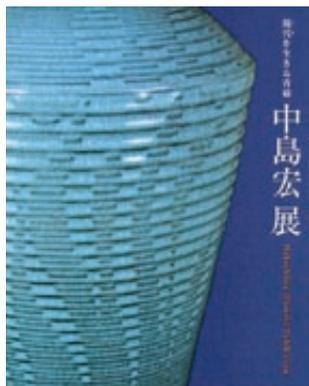
現代を生きる青磁 中島 宏展

会期=平成17(2005)年10月4日(火)～11月20日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
共催=日本経済新聞社
巡回館=福岡市美術館

中国の宋時代に美の極致をむかえたといわれる青磁。中島宏氏は、この最も難しいといわれる青磁に果敢に挑んで、研究と試行を繰り返してきた。

中島宏は昭和16(1941)年に窯元の家生まれ、家業の製陶を手伝い始め、二十代で「どうせつくるなら技術的に難しいが、焼き物の最高といわれる青磁をつくろう」と決意し、中国古窯青磁の完璧なまでの美しさを追求、古陶の「写し」にとどまる作家の中にあって、中国の青銅器に触発されて彫りを入れたり、或は印象派の絵から想を得て釉薬を重ねて色に深みを出す試みに挑みつづけた。「宇宙を作品に表現したい。空は無限に広がる。連想し、空想し、目に見えないものを」と目指す中島氏は、鮮烈な、まさに独創的な中島青磁というべき作品を生み出し、昭和56(1981)年に第一回西日本陶芸展で総理大臣賞を受賞したのを皮切りに、昭和58(1983)年に日本陶芸協会賞、平成8(1996)年にはMOA岡田茂吉大賞、藤原啓記念賞の同時受賞など多くの受賞に輝いている。本展では、作陶50年を記念し、中島芸術の真の魅力を提示すべく、その初期の作品から近作まで100点を選び陳列し、雄大な魅力に溢れる中島青磁の世界を概観した。なお本展は、日本経済新聞社との共催であり、福岡市美術館に巡回した。

また、展覧会閉幕後、中島氏より青瓷彫文壺(平成16(2004)年・出品番号89)をご寄贈いただいた。



■特別展 現代を生きる青磁
中島 宏展
28.0 × 22.4cm 124P
カラー図版 96P
「展覧会によせて」 中島 宏
「中島宏の世界」 乾 由明
「中島宏の現在 —青磁学的認識論」
金子賢治
中島宏年譜
出品目録

幻想のコレクション

芝川照吉

劉生、達吉、柏亭らを支えたもう一つの美術史

会期=平成17(2005)年12月6日(火)~平成18(2006)年1月29日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階サロン・ミュージーゼ、特別陳列室



本展は、明治末から大正期にかけて多くの美術家のパトロンとなった芝川照吉に焦点をあて、その幻といわれたコレクションを再現するように構成した展覧会である。芝川照吉はわが国で一二を誇った羅紗問屋であった芝川商店の創業者一族の人間であり、美術作品の購入、画家の留学費用、展示場建築への出資、美術団体への援助など広く美術界に貢献した。そのエネルギーは、実業よりもほぼ美術家との交流に費やされ、美術家らとの沙龙的な交わりを継続した。大正12(1923)年に芝川は病没するが、その時には1000点をこえる作品を蒐め、近代洋画のコレクションとしては当時では最高の質量であった。その範囲は青木繁にはじまり、岸田劉生を中心とした草土社の画家たち、浅井忠や石井柏亭のまわりに集まった画家たち、そして藤井達吉や近代工芸家たちなどにおよんでいる。こうした中堅から新進の美術家にたいする援助を惜しまなかった芝川存在は、近代洋画が展開するうえにおいて、とくに在野の若い有望な人材にとって大きな支えとなったことは間違いない。

展覧会の構成は、散逸したコレクションを再現するように試みたが、いかんせん多くの作品は行かぬがわからなかった。とはいえ、岸田劉生、青木繁、藤井達吉などのコレクションの中核を占めた作品群の展示風景は圧巻であった。また、芝川自筆のノートや書類など多くの遺品も現存し、芝川の人物像をも明らかにすることができた。そして展覧会後には、日比谷美術館への出資や藤井達吉との関連など美術界にコミットしていた貴重な事実も発見されるという副産物もあった。また、本展で展示された藤井達吉の多数の作品は、未だ一般には評価のなされていない彼の代表作であり、将来的には、藤井の再評価に大きな意味を持つことになるとと思われる。その名を広く知られた大原孫三郎や松方幸次郎らの活動する以前の、日本近代洋画におけるパトロン、コレクターの嚆矢としての存在と、大正の美術の展開に果たした役割を位置づけることができたことと、これだけの存在でありながら今日ではまったく知られていなかった芝川照吉を紹介できたことは何より有意義であった。



■特別展 幻想のコレクション

芝川照吉

劉生、達吉、柏亭らを支えた

もう一つの美術史

29.6×20.7cm 全200P

カラー図版 120P

「芝川照吉と近代美術のパトロンたち」

瀬尾典昭

「芝川コレクションと藤井達吉」

大本文平

「芝川照吉の生涯と美術家たち」

瀬尾典昭

芝川照吉および関連事項年表

照吉日記

芝川照吉蒐集図録

コレクション全作品一覧

出品作家略歴

資料・文献目録

出品目録

台湾の女性日本画家 生誕100年記念 陳進展

会期=平成18(2006)年4月5日(水)～5月14日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、読売新聞東京本社、美術館連絡協議会
特別協力=財団法人陳進記念文化藝術基金會、臺北市立美術館 協賛=花王株式会社
協力=日本アジア航空、女史美術大学
後援=臺北駐日經濟文化代表処、財団法人交流協会
巡回館=兵庫県立美術館、福岡アジア美術館

昭和60(1985)年に日本の統治下に置かれて以後、台湾は、政治的に中国とは異なった道を行ってきたばかりでなく、文化・芸術の面でも独自の展開を遂げてきた。50年後に中華人民に復帰してから、文化・芸術の面で「中国化」が進められ数十年が経過し、政治的・社会的変化の中で、台湾人の中に「台湾文化」に対する共通認識と探求が深まり、「台湾藝術」の形成と展開に対する関心が高まり、日本統治時代の美術に対する研究が進んでいる。陳進は、日本統治時代に活躍をはじめた画家で、生涯を藝術にささげ、20世紀の台湾美術の展開に大きな足跡を残した画家の一人である。

陳進は明治40(1907)年、台湾の裕福な家庭に生まれ、台湾第三高等女学校(現・中山女高)で日本画家郷原古統の教えを受け、卒業後、東京の女子美術学校(現・女子美術大学)に留学。女子美術学校卒業後は、鏑木清方の門に入り、清方、伊東深水などに学んだ。在学中に第一回台湾美術展に入選して頭角をあらわし、昭和9(1934)年の第15回帝展に台湾女性として初入選、その後も帝展、文展での入選を重ね、台湾画壇における地位を不動のものとしていった。戦後、台湾に戻ったが、大陸からきた画家たちとの間に生じた、中国の伝統的絵画である国画と東洋画(=日本画=膠彩画)との対立の中で制作に悩むことになる。しかし、膠彩画技法による制作をつづけ、結婚、そして母親となって以後は、家庭生活を主題として平成10(1998)年に台北に歿するまで台湾女性画家の頂点として活躍し続けた。

「合奏」や「悠」に代表される前半生の作品は、伝統的な日本画技法により台湾の地方色豊かな女性像を描き、結婚後の後半生は、妻・母親・家庭人として日々の生活を慈愛の眼差しをもって描きつづけた。本展は、生誕百年を記念し、陳進記念文化藝術基金會、台北市立美術館の協力を得て、陳進の代表作約80点及び素描などを陳列してその優れた画業を回顧するとともに、20世紀において独自の道を行ってきた台湾美術についても考察した。

本展の開催後、渋谷区に在住される方のご母堂が、臺灣、日本において陳進と親交が有り、陳進から贈られていた菊花図屏風が見つかった。これまで知られなかった作品であり、巡回先の兵庫県立美術館、福岡アジア美術館で陳列された後に、陳進の愛息である蕭成家氏に贈られたことを付記しておく。



■特別展 台湾の女性日本画家
生誕100年記念 陳進展
29.7×22.1cm 全206P カラー図版 90P
「母の思い出」 蕭成家
「陳進100歳記念特展に寄せて」 林 柏亭
「1930年代の陳進—1935年作《悠間》から」 林 育淳
「陳進の女性像と郷土色」
—1930年代の作品を中心に— 飯尾由貴子
「陳進とその時代」 味岡義人
台展・府展出品作品表
出品目録・作品解説
陳進関連作品記事抜粋
年譜、参考文献

開館二十五周年記念特別展 骨董誕生 日本が愛した古器物の系譜

会期=平成18(2006)年5月30日(火)~7月9日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



我々が日常生活で見かける美しい器物は、人の技術を尽くして完璧な形や色を追求したものと、完璧にこだわらずに自然の風合いを残した「味もの」の二種に、大別できるように思われる。完璧を誇るものの美しさは分かりやすいが、形の歪みや色ムラやシミといった「味(景色)」に情趣を感じるのは、文化が熟成してはじめて現れる美意識であろうし、恵まれた周辺に在った日本において、ようやく生み出し得た美学だったのではないか。骨董は古物一般について使われる言葉であろうが、この展覧会では、そのような味ものに限って「骨董」と呼ぶことを提案し、その特殊な美学が生まれた過程を検証しようと試みた。

我が国における器物鑑賞は、完璧なものを敬遠し、味ものを愛でるわびの美学を中心に据えてきた歴史がある。それは室町時代のわび茶に発し、明治時代までは主として茶道具の鑑賞に受け継がれたが、その後欧米から器物をアートとして鑑賞する流儀を学び、用のために生まれた雑器の美しさに気付いた柳宗悦によって新たな方向性を与えられて、味ものを愛でる美学は新たな段階を迎えた。古器物の持つ「味」を選び抜いて、その蒐集に自己を表現する「骨董」が確立したのである。大成者は希代の陶磁器鑑賞家として知られる青山二郎(明治34(1901)年-昭和54(1979)年)。昭和10年代のことであった。

この展覧会では、青山や小林秀雄らによって確立し、戦後白洲正子や安東次男らに受け継がれた「骨董」の歴史を、ゆかりの品によってたどるとともに、現代の数寄者のコレクションもまじえて、「骨董」の神髄を探ろうとした。幸い多くの来館者に恵まれ、古器物鑑賞の世界に、一石を投じる事ができたものと考えている。



■開館二十五周年記念特別展
骨董誕生
日本が愛した古器物の系譜
26.4×18.5cm 全184P
カラー図版 120P
「愉しきかな骨董」 青柳恵介
「モノゴトを楽しむ」 仲畑貴志
「周辺の骨董」 勝見充男
「幻の木器—無用の用を極める—」
千葉惣次
「骨董最前線」 坂田和實
「骨董への道程」 矢島 新
関連年表
参考文献
出品リスト

ポーランド国立ウッチ美術館所蔵 ポーランド写真の100年展

会期=平成18(2006)年7月25日(火)~8月27日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、ポーランド国立ウッチ美術館
後援=ポーランド共和国大使館 協力=日本通運
企画協力=株式会社イデッパ
巡回館=新潟市美術館



ポーランド国立ウッチ美術館所蔵品から精選した、明治45(1912)年から現代までのポーランド作家による写真作品約180点及びビデオ作品約10点を展覧し、日本で初めて、20世紀ポーランド写真の全体像を紹介した。

長い分割時代を経て、第1次大戦後に独立を回復したポーランドでは、1910年代から前衛美術運動が開花し、ロシア、ドイツとの交流のなかで実験的な写真作品が数多く作られた。第二次大戦後は社会主義政権下にもかかわらず前衛的な美術活動が続けられ、1970年代にコンセプチュアル・アートと連動した先鋭的な写真制作が全盛となったことは、これまで日本ではあまり知られてこなかった。

一方で、アウシュビッツに代表される数多くの死、戦禍、さらに民主化をめぐる社会の変貌を記録してきた、ポーランドのドキュメンタリー写真が果たしてきた役割も看過できない。歴史の屈曲のなかで磨かれてきた独自の抵抗精神がこれらから読み取れるとともに、前衛芸術を支えても来たことがうかがわれる。

本展は、ポーランド第二の都市ウッチにある、国立ウッチ美術館所蔵の写真約3000点のなかから、ポーランドの歴史と文化をじかに伝える写真作品およびビデオ作品を選んだが、ことに映像作品は日本初公開のものが多く、意義を認められた。



■特別展

ポーランド国立ウッチ美術館所蔵
ポーランド写真の100年展
25.0×19.0cm 全228P
カラー図版 148P
「ウッチ—近代精神の180年」
木村一貫
「ポーランド国立ウッチ美術館の沿革」
ミロスラフ・ボルシェーヴィッチ
「伝統—継承—変化」
クシシュトフ・ユレッキ
「ポーランドと日本写真の交流
二つの展覧会を中心に」 光田由里
ポーランド写真と歴史略年表
Short Biography of the Presented
Artists (作家略歴)
出品リスト

ISHIODORI SHOWCASE

石踊達哉展

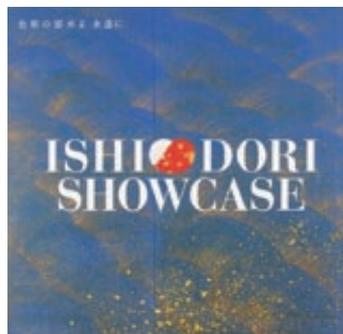
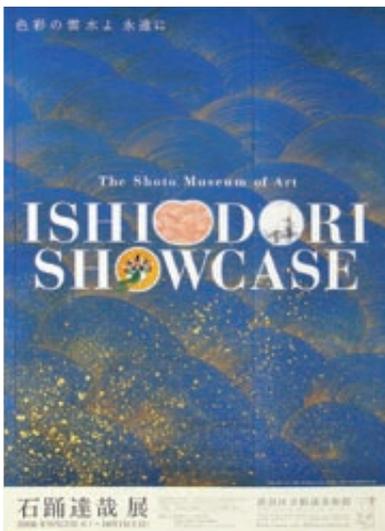
会期=平成18(2006)年9月12日(火)~10月15日(日)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
 巡回館=鹿児島市立美術館



本展は、渋谷とパリを往復しながら、国際的に活躍の場を展開している渋谷区在住の日本画家・石踊達哉(昭和20(1945)年旧満洲生まれ)の現在を紹介する展示である。

松濤美術館では珍しい現代作家の展覧会であり、渋谷区ゆかりの作家でもあることから、当館の独特の建築空間との共作、そして競作することになった。日本画の持つ抽象・象徴・装飾性の三つの伝統を意識した新作約30点で、石踊達哉の現在の作品世界をあますところなく見せたいということで、作家と美術館側、両者ともに、非常に緊張の続く準備期間を経て、この展覧会は完成した。

「青海波」は、石踊にとってエポックメイキングとなった『源氏物語』(瀬戸内寂聴現代語訳、平成8(1996)年-平成10(1998)年)の装幀画の仕事にいて、全巻に共通する表紙として選んだ問題であるが、本展にいても最も重要な作品の一つとなった。常に新しい表現への可能性に挑戦してきた軌跡と結果を内包し、会場全体を一つの作品として提示するための重要な装置としての役割を担わせるべく制作された。吹き抜け会場の曲面を流れるように展示された35メートルに及ぶ《青海波》は、本展で最も展示に苦心した作品でもある。本作を含む全体の構想は、『源氏物語』の装丁画の仕事を手がけている頃から静かに温め続けられていたものである。日本画の可能性、すなわち日本の調度品として出発した屏風などの日本画の形態が、現在の室内空間において、どこまで通用しうるのか、常に伝統を重んじつつ日本画の新しい可能性を追求しつづける、現代に生きる作家としての挑戦の結果をみることで意欲的な展示となった。



■特別展
 ISHIODORI SHOWCASE
 石踊達哉展
 25.0×26.0cm 全76P
 カラー図版 60P
 「青海波讀」 高橋睦郎
 作品リスト
 石踊達哉画歴

迷宮 + 美術館 コレクター砂盃富男が見た20世紀美術

会期=平成18(2006)年10月31日(火)~12月10日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
巡回館=群馬県立近代美術館+高崎市美術館



本展覧会は、群馬県前橋市で個人美術館を運営していたコレクターで、平成13(2001)年に他界した砂盃富男氏のコレクションを紹介したものである。昭和5(1930)年に前橋に生まれた砂盃氏は、50年に日本銀行前橋支店に入行した。その後、銀行勤務の傍らに美術活動を行い、昭和37(1962)年、昭和38(1963)年に読売アンデパンダン展に出品し、昭和38(1963)年には「群馬NOMOグループ」を結成するなど、群馬の前衛美術活動を推進する作家として活動した。作家活動とともに蒐集を始めた作品は、作家としての視点や、各地に転動した先々で知り合った画廊や作家との交流のなかで数や範囲を広げて蓄積され、最終的には400点を越える版画を中心としたコレクションに成長する。平成3(1991)年の退職後には自宅を改装し個人美術館「イサハイ・バル・イマージュ美術館」を開設、独自の切り口による企画展も開催した。

本展は砂盃氏が特に注目した作家を中心に、約130点の国内外の20世紀の美術作品を展示した。また、絵画の制作や、詩の創作など文筆活動もおこなっていた砂盃氏の作品や資料も併せて展示することにより、その多彩な活動の一端も紹介した。戦後版画の個人コレクションとしては国内有数の規模と質を誇るこの作品群を一堂に公開できたことは、一般に、蒐集家の人物像や個人コレクションの全貌がわかりにくいことをふまえれば貴重な展観であったと思われる。展示作品中、海外の作家はシュルレアリズムの作家が多く貴重な蒐集であることに興味をもった観客が多かったことと同時に、現役の日本作家も少なくなくいまなお戦後の活動にコミットしている同時代性も感じられた。近年は個人コレクションの紹介展がしばしば開催され、各地のコレクターの公開と位置付けが試みられるが、本展もそうした流れのなかであって、特に小コレクターあるいはサラリーマンコレクターの存在の重要性に焦点を当てることができた。なお、郷里の群馬県立近代美術館および高崎市美術館との共同で調査研究の成果を披露し、巡回で開催した。



■特別展 迷宮+美術館
コレクター砂盃富男が見た20世紀美術
25.4×19.0cm 全152P
カラー図版 88P
「砂盃富男と私の30年の歩み
—戦争と画家たちをテーマにした
コレクター、評論家、画家、
詩人であった親友—」 佐谷和彦
「展覧会の開催によせて」 砂盃次世
「展覧会の構成について」 熊谷ゆう子
「今日的な、個人コレクションについて
—砂盃富男の場合—」 瀬尾典昭
「砂盃富男 画家、詩人、コレクター、
評論家、美術館主、そして…」
柴谷滋
砂盃富男年譜
砂盃コレクション絵リスト
出品リスト

清原啓一 遊鶏の賦

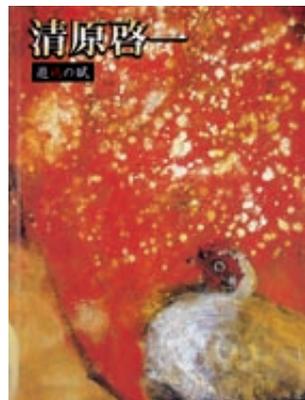
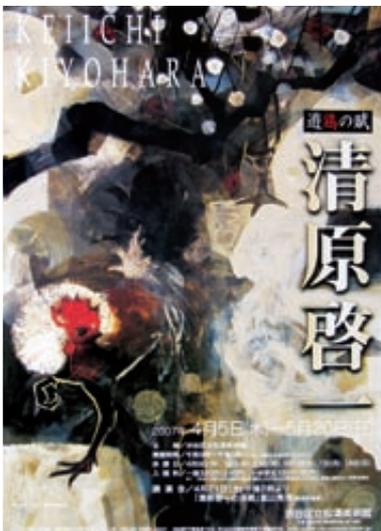
会期=平成19(2007)年4月5日(木)～5月20日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



清原啓一氏は、渋谷区に50年以上住まれたゆかりの作家である。松濤美術館公募展の審査委員長や渋谷区美術振興財団理事などを務められ当館の運営にもご尽力いただいたが、残念ながら展覧会後の平成20(2008)年10月に逝去された。画業60年の集大成ということで新作も出品されるなど熱意を込めて準備されたが、東京では最後の個展となった。その後、富山、尾道などでも開催された一連の回顧展は、同時に出版された『清原啓一画集』とともに、80歳を機に開かれた氏の画業を振り返る格好の展覧会であった。氏の当館での展覧会は、平成4(1992)年の小企画以来のもので、全館を使つての本格的な回顧展としては初めてであった。本展は代表作となった鶏のシリーズを中心に山岳シリーズや花の作品など、初期の作品から最新作まで52点の代表作で構成した。

清原氏は昭和2(1927)年、富山・砺波市に生まれ、富山師範学校、明治大学を卒業されたのち、光風会や日展をおもな発表場所として創作活動をつづけた。数々の受賞を重ね、日本芸術院会員、日展常務理事、光風会常務理事を務められるなど、今日の洋画壇の重鎮として活躍された。

昭和29(1954)年の日展にはじめて鶏を描いた作品を出品したのち、昭和39(1964)年には同展で《群鶏》が特選になるなど今日まで一貫して鶏を題材に描き続け、鶏の画家として評価と名声を得ている。その作風は、横溢する鮮やかな季節感がながれるなか、激しく闘う鶏や長閑に遊ぶ鶏のすがたが象徴性をもって情感豊かに表現された独創的なものである。重厚なマチエールや艶やかな色彩によって装飾性も際立っており、油彩画ながら花鳥画的な画趣があり、まことに希有なものと言える。近年は、故郷富山の剣岳や信州浅間山などの山岳シリーズにも力を入れていた。



■清原啓一 遊鶏の賦
26.4×19.6cm 全88P
カラー図版 64P
「作家の言葉」 清原啓一
「華やかに優雅にそして激しく
—清原啓一の画業60年—」
瀬尾典昭
年譜
画集・展覧会図録一覧
出品リスト

大辻清司の写真 出会いとコラボレーション

会期=平成19(2007)年6月5日(火)~7月16日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
協力=写真実験室の会



長く渋谷に暮らした写真家・大辻清司^{おつじきよし}(大正12(1923)年-平成13(2001)年)。その業績は、写真作品に留まらず、写真というメディアをめぐって、デザイン、編集、出版、評論と積極的に関わることで、現代的な写真観を基礎作る上で大きな足跡を残したものといえる。本展では、写真の思索者としての作家像を打ち出し、美術作家、デザイナー、評論家、ギャラリー運営者、学生らさまざまな立場の人たちとのコラボレーションの成果として大辻の写真的営為を振り返ることを試みた。

ニュープリントによる初期作品の紹介のほか、映像上映、雑誌で発表した作品の額装、ビンテージプリント展示も行い、多様な写真のあり方を示した。カタログでは、大辻の評論活動を紹介するため、代表的文章を再録した。

当展覧会は新聞各紙展評、書評などで好評を得た。



■大辻清司の写真
出会いとコラボレーション
24.0×18.2cm 全248P
カラー図版 172P
「出会いとコラボレーション写真という
メディアをめぐって」 光田由里
大辻清司アンソロジー
「大辻清司実験室①-②」
「写真家大辻清司・播磨期と出発」
大日方欣一
大辻清司クロニクル
グラフィック集団・略年譜(光田由里編)

景德鎮千年展 皇帝の器から毛沢東の食器まで

会期=平成19(2007)年7月31日(火)~9月17日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、朝日新聞社
特別協力=MEKホールディングス 協力=全日本空輸
企画協力=東京国立博物館 コーディネート=S2

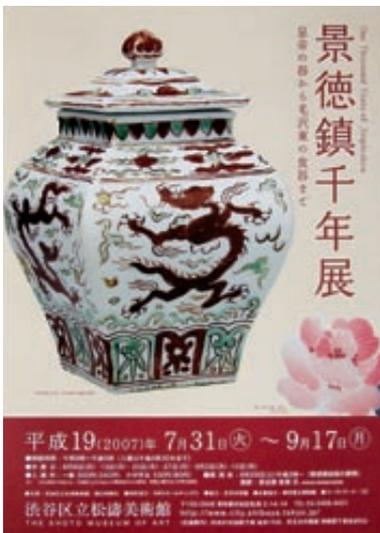


北宋時代の景德元年(1004)年にその元号を冠して「景德鎮」の名前が誕生する。元時代には宮廷向けに白磁を焼き、明・清時代には「官窯」が置かれてその地位はゆるぎないものとなった。生産する陶磁器のスタイルも、明るい水色が美しい青白磁、コバルトを使用した青花、色彩豊かな装飾を施した五彩磁器と、時代の好みやスタイルに合わせて進化を遂げてきた。

清時代の終焉とともに、「官窯」体制も終わりを告げ、陶工たちは民営の道を模索した。それから一世紀が経ち、まさに現代に一度だけ「官窯」が復活した、といえるのが「7501工程」における陶磁器の製作であった。1975年2月、北京の中央政府から、当時の最高責任者・毛沢東のために最高級の食器を作るよう、命令が下る。景德鎮きっての名工たちが、最高の材料を使用し、革新的な技術を開発して、それまで実現したことのなかった1400℃以上の高火度で焼き上げ、ついにこのプロジェクトを完成させる。

本展は、官窯の優品を中心に景德鎮の歴史を紹介する第一部と、純白な薄い素地に鮮やかな紅梅文様の絵付けを施した「7501工程」の磁器を紹介する第二部で構成した。来場者が大変多く、日本人の景德鎮に対する憧憬と愛好が感じられた。知られざる「現代の官窯」の結晶である7501工程は、シンプルな図様であるために一層、景德鎮の誇る透き通り輝くような純白と愛らしい桃色が際立ち、多くの来場者が見入っていた。

岐阜県現代陶芸美術館、茨城県陶芸美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館に巡回したあと、当館で開催された。



■特別展 景德鎮千年展
皇帝の器から毛沢東の食器まで
29.7×22.4cm 全 184P
カラー図版 117P
南京博物院紹介
鴻禧美術館紹介
「7501工程毛沢東専用磁」の
日本巡回によせて 張曙陽
景德鎮窯年表
「官窯について」 今井敦
「吉祥の文様」 谷 亜紀
「器形と技法」 佐野素子
「景德鎮—一千年の先へ」
[[7501工程]—その舞台裏」
「景德鎮千年の歴史」 今井敦
「毛沢東の器—7501工程と中国陶磁史
における位置づけ」 佐野素子
作品解説
出品目録

Great Ukiyo-e Masters 春信、歌麿、北斎、広重

—ミネアポリス美術館秘蔵コレクションより—



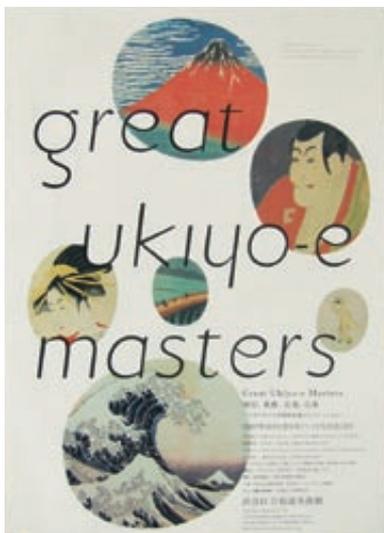
会期=平成19(2007)年10月2日(火)～11月25日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
特別協力=ミネアポリス美術館
協力=JAL日本航空
企画協力=浅野研究所

ミネアポリス美術館はアメリカ中西部唯一の総合美術館であり、日本美術部門でも全米屈指のコレクションを誇っている。中でも浮世絵作品は、クオリティの高さで知られるリチャード・ゲールコレクションを中核に、およそ3000点の多数を収蔵している。今回は同館の全面的な協力のもと、作品の質とコンディションの観点から約250点を厳選して、浮世絵の初期から晩期までを概観する展覧会が実現した。

ミネアポリス美術館の浮世絵コレクションはこれまで公開されることが少なく、その保存状態は極めて良好であるが、今回の展覧には初公開となる作品も多く含まれており、目の肥えた浮世絵ファンをもうならせる内容となった。中でも鳥居派などの初期の作品の状態の良さは特筆すべきものであり、実に36点を数えた鈴木春信作品は世界的にも希少な作品も含んでおり、その色彩の鮮やかさはまさに圧巻であった。

展覧会の後半の見せ場は、それぞれ47点、59点の多きを数えた葛飾北斎と歌川広重の二代ビッグネームの作品群で、その多彩さは多くの観客の期待を裏切らぬものであった。中でも広重の「東海道五拾三次之内」シリーズ全作品を宿駅順に貼り込んだ二冊本は、この有名なシリーズの成立を考える際に大きな意味を持つ重要な作品であった。

本展は内容の素晴らしさが評判を呼んで多くの観客を集め、図録も多数を売り上げた。作品の保全の観点から前期後期に分けてすべての作品を展示替えしたため、二度三度と足を運ばれた方も多かったものと思われる。



■Great Ukiyo-e Masters
春信、歌麿、北斎・広重
—ミネアポリス美術館秘蔵コレクションより—
15.4×21.5cm 全280P
カラー図版 230P
浮世絵師略伝
作品リスト

上海 近代の美術

会期=平成19(2007)年12月11日(火)~平成20(2008)年1月27日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

主催=渋谷区立松濤美術館、読売新聞東京本社、美術館連絡協議会

協賛=ライオン、清水建設、大日本印刷 協力=日本アジア航空

後援=台北駐日経済文化代表処、財団法人交流協会

二千年余りにわたった帝政が崩壊、1912年に中華民国が成立、中国史上最大の転換点にあつて、主要な舞台となったのがアヘン戦争により開港地となった上海であった。開港後の上海は急速な発展を遂げ、中国の富が集中すると同時に、西洋文明が流入し、空前の活況を呈し、その富を背景に、多くの芸術家たちが集まり、伝統文化の再構築を希求すると同時に、近代美術の創造へと動いていった。書や篆刻の分野では、清朝の金石趣味の伝統のもとに、様々な新たな展開が繰り広げられ、絵画においては、清朝正統派の伝統の最後の光芒が見られる一方で、平明な画題を、鮮やかな色彩、力強い筆致で画く画家が活躍し、西洋絵画の影響も指摘されている。また日本の文化人との交流の盛んであったことを示す書画作品も多く残されている。

本展は、大阪市立美術館との巡回展であり、台湾の国立故宮博物館、鴻禧美術館および近現代絵画の収集家として著明な石允文氏所蔵の100点に加えて、国内美術館・個人の所蔵品あわせて200点により、その19世紀後半から20世紀前半に至る激動の時代に上海で花開いた書・画・篆刻などの美術を紹介したものである。

故林宗毅博士が国立故宮博物館、東京国立博物館、和泉市久保惣記念美術館に寄贈された定静堂コレクションが再会することでも意義あるものとなった。



■特別展 上海—近代の美術—
300×224cm 全214P
カラー図版 146P
「海上派、そして日本との関わり」
弓野隆之
「近代上海の書と篆刻」 味岡義人
出品目録および画人・書人・印人略伝
略年表
出品目録

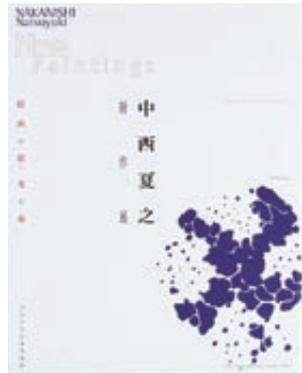
中西夏之新作展 絵画の鎖・光の森

会期=平成20(2008)年4月8日(火)～5月25日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室



1950年代からのキャリアを持つ、日本を代表する現代美術作家・中西夏之(昭和11(1936)年～)。1980年代から絵画作品の豊かな仕事を積み上げてきた中西の新作絵画のみで構成した本展は、現代における抽象絵画の意味を改めて問う機会となった。イーゼルを用いた絵画展示が話題を呼んだ。

展示風景を所収したカタログは好評のため、会期中に増刷した。新聞各紙展評、年間ベスト10など選ばれるなど、好評を得た。



■中西夏之新作展
絵画の鎖・光の森
26.8×21.7cm 全104P
カラー図版 52P
「やわらかな中間地帯」 林道郎
「制作日誌から
《背・白 edgeV》をめぐって」
中西夏之
画家の言葉 中西夏之の絵画論から
「絵画の鎖・光の森」
中西夏之の「絵画」 光田由里
出品リスト
パブリックコレクション
中西夏之略歴(光田由里編)
中西夏之主要刊行物
画家の言葉初出一覧

大正の鬼才 河野通勢 新発見作品を中心に

会期=平成20(2008)年6月3日(火)~7月21日(月)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、読売新聞東京本社、
美術館連絡協議会
協賛=ライオン、清水建設、大日本印刷



河野通勢(明治28(1895)年-昭和25(1950)年)は、二十才そこそこですでに天賦の才能をみせた早熟の画家である。ダ・ビンチ、デューラーなどルネサンスの画家に影響をうけ、粘りつくような徹底した写真描写で知られ、個性のおおい大正時代のなかでもひととき異彩を放っている。関根正二に与えた影響、武者小路実篤や長与善郎をはじめとする白樺派との交流、岸田劉生の率いる草土社への参加など、美術史上の重要性でもかかせない存在だ。

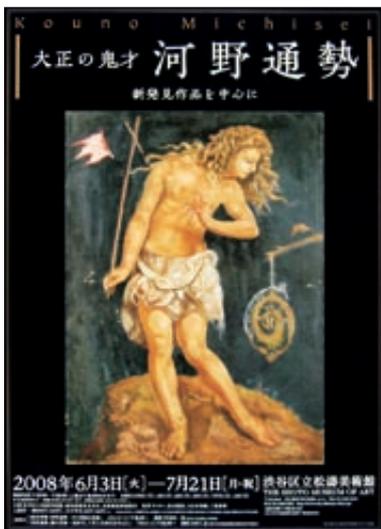
近年になって、残されていたアトリエより大量の未発表作品が発見された。とくに十代後半から二十代前半にかけて執拗に描いた初期風景画や、聖書を題材にした作品群は圧巻だった。また挿絵や装幀の原画や銅版画、日記、スケッチ帖、書簡類など諸々の資料は膨大だった。

本展はこれまでにない規模で開かれた回顧展であり、この新発見作品の数々によって従来の画家像の再検討を迫られることになった。したがって出品作品は主要な油彩画を網羅したうえで、大部分が新発見の作品で占められていた。

その空想と聖性をはらんだ作品群は、奇想にも似た想像力を発揮する近代の画家のなかでは類例をみない表現だ。ともすれば岸田劉生の陰にみられる存在ではあったが、河野通勢という画家を読み直す絶好の機会となり、いままでにない全くあたらしい姿を発見できたと思う。

今回の展覧会は、河野通勢に深い関わりをもつ四つの美術館が共同で開催した。平塚市美術館、足利市立美術館、長野県信濃美術館そして渋谷区立松濤美術館である。渋谷との関係は、河野が上京した時にしばしば滞在しスケッチしたところが代々木や原宿であったということ、彼が参加した草土社の発祥の地であったことがあげられる。

なお、本展が平成20年度の美連協大賞を受賞することとなり、当館の地道な調査研究の成果を評価されたことは意義あることである。



■大正の鬼才 河野通勢
新発見作品を中心に
29.7×22.7cm 全240P
カラー図版 153P
「河野通勢 一奇想と見神のすべて」
瀬尾典昭
「絵空事師・河野通勢
一その挿絵と装丁」 岩切信一郎
河野次郎年譜
「河野通勢 一長野の青春時代」
木内真由美
「河野通勢・画風の変化と
その背景について」 土方明司
「ダイモーンの声」 江尻 潔
河野通勢 大正五年のノートブック
(抄録)
河野通勢 日記(抄録)
「裾花河ノ夕」 河野通勢
主要展覧会出品記録
主要文献目録
出品リスト

生誕100年記念 けとばし山のおてんば画家 大道あや展

会期=平成20(2008)年8月5日(火)～9月21日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
主催=渋谷区立松濤美術館、東京新聞
巡回館=高浜市やきもの里かわら美術館、田川市美術館、
佐喜真美術館、呉市美術館

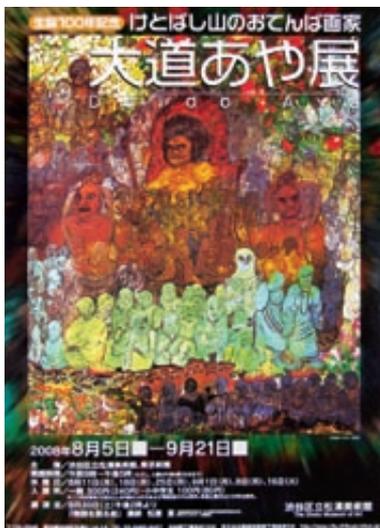


本展は、平成12(2009)年に迎えた日本画家・大道あや^{だいどう}の生誕100年を記念して開催する本格的回顧展である。大道あや(旧姓・丸木、本名/アヤコ)(明治42(1909)年～)は、広島県の飯室村油木(現在は広島市安佐北区安佐町大字飯室)に生まれる。60歳にして初めて絵筆を持ち、91歳までに描いた作品や絵本には、大道がそれまで歩んできた苦難に満ちた人生とは対照的に、動物たち、植物たちが生を謳歌する喜びに満ちあふれた姿が描きだされている。

作家の送ってきた人生をたどることは重要だが、大道の場合、これまで、ややもするとそのことへの関心へ偏りがちであったように思われる。絵本画家・作家としてはともかく、こと日本画家としての大道あやは、兄・丸木位里、そして素朴画家として高く評価された母・丸木スマの影に隠れるような評価のされ方であったのではなかろうか。さらに、主要作品の目される作品の一部が所蔵先不明であることもこれに拍車をかけている。こうした要因が重なって、日本画家としての大道あやに焦点をあて、包括的に回顧する機会に、これまであまり恵まれなかったと思われる。

本展は、作家所蔵の作品と沖縄・佐喜真美術館が所蔵する院展や女流画家協会展に入選した代表的な日本画作品をはじめ、『こえどまつり』などの絵本原画と多彩な資料もあわせて約140点で構成された。大道と親交のあった佐喜真美術館の所蔵する大道作品が館外に貸し出されたのは、今回が初めてである。

松濤美術館を皮切りに、愛知県・高浜市やきもの里かわら美術館、福岡県・田川市美術館、沖縄県・佐喜真美術館、広島県・呉市立美術館に巡回し、各会場で大変な好評を博した。



■生誕100年記念
けとばし山のおてんば画家
大道あや展
25.6×18.2cm 全112P
カラー図版 89P
「大道あやが絵に託した
理想的で平和な情景」 谷 亜紀
略年表
出品目録
参考文献

池口史子展

静寂の次

会期=平成20(2008)年10月7日(火)~11月24日(月)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
 主催=渋谷区立松濤美術館、日本経済新聞社

渋谷区神宮前に住まわれる池口史子^{いけぐちちかこ}氏は、昭和18(1943)年に旧満洲大連に生まれた。東京藝術大学美術学部油画科(山口薫教室)で学び、同大学院在学中より個展を開催。以後、女流画家協会展、立軌展、安井賞展、両洋の眼展など数々のグループ展や招待展に作品を発表し、平成5(1993)年には倫雅美術奨励賞、平成14(2002)年には両洋の眼展で河北倫明賞、平成16(2004)年には第27回損保ジャパン東郷青児美術館大賞を受賞している。今日の具象画壇で顕著な活躍を示す画家の一人である。

1980年代の後半よりてがけた北アメリカの広漠とした大地に広がる光景、或いは寂寥とした異国の街並みを描いた風景画で独自の世界を展開している。近年では損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞作「ワイン色のセーター」に代表される都会的雰囲気の漂う凜然とした女性像をてがけて新たな領域を開いていく。また、妖艶ともいえる生命力を示す花をモチーフとした静物画も多くの人々の注目を集めている。

本展では、東京藝術大学在学中の初期作品から最近作まで75点の油彩作品及び堺屋太一「昨日と違う明日」のために描かれた挿絵原画25点を陳列し、池口氏の画業を紹介した。

なお、本展出品作品の一部により、平成22(2010)年7月8日から18日まで北京の中国美術館で同館主催により「池口史子展」が開催され、好評を博したことを記しておく。



■池口史子展 静寂の次
 30.2×23.1cm 全112P
 カラー図版 80P
 「池口史子の風景」 浅野 徹
 「混沌からの出発」 本江邦夫
 池口史子
 池口史子略年譜
 池口史子主要文献目録
 出品目録

素朴美の系譜 江戸から大正・昭和へ

会期=平成20(2008)年12月9日(火)～平成21(2009)年1月25日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



世界の美術史をリードしてきたヨーロッパや中国では、迫真的な写実を追求する絵画が歴史上大勢を占めていたが、その周辺に位置した日本では、素朴な味わいに富んだ絵画が、時代を超えて盛んに描かれている。本展はそうした日本美術の特性をかなり広い視野でとらえようとした。

室町時代のお伽草子絵巻や、近世初頭の参詣曼荼羅や大津絵などの庶民的な絵画に最初の花を咲かせた素朴美は、江戸時代中期の禅僧白隠によって大きな転換をとげる。近世最大の禅僧である白隠は、人々への教化の手段として素朴な禅画を数千枚も描いたが、いずれも表面的な写実にこだわらずに心の内なる仏を率直に描き出そうとしたものであり、世界の絵画史でも稀な自由な自己表現であった。

また、浦上玉堂や岡田米山人らの南画家がアマチュアの立場で描いた山水画も、リアリズムにこだわらぬ清新な自己表現という点で高度な達成を示している。

近代を迎えて西洋美術の輸入に忙しくなると、素朴美はいったんリアリズムを追求する絵画の陰に隠れてしまうが、日本の伝統に眼が向き始めた大正から昭和の初期にかけて、素朴味あふれる表現は再び噴出する。禅画や南画の自由な自己表現に学ぼうとする画家も現れて、日本的な絵画が探求されたのである。

本展は以上のような認識のもとに、各時代の素朴味有る作品を選んで、その流れを描き出そうとした。まとまった点数を展示した白隠画や、これまで紹介されることの少なかった夏目漱石の南画や、孤高の画家である横井弘三の戦前の作品などが注目を集めた。



■素朴美の系譜
江戸から大正・昭和へ
25.6×18.4cm 全144P
カラー図版 78P
「南画と素朴展」 星野 鈴
「素朴美の系譜」 矢島 新
関連年表
出品リスト

台湾の心・台湾の情 廖修平・江明賢二人展

会期=平成21(2009)年4月7日(火)～5月17日(日)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
 主催=渋谷区立松濤美術館、読売新聞東京本社、美術館連絡協議会
 後援=台北駐日経済文化代表處、行政院文化建設委員會、財団法人交流協会、社団法人日本版画協会
 協賛=ライオン、清水建設、大日本印刷
 特別協力=財団法人寄暢園文化藝術基金會、財団法人巴黎文教基金會

廖修平(1936年～)は台北に生まれ、国立師範大学卒業後の1962年に東京教育大学に留学。ついで、パリに留学し、ハイターの版画工作室で本格的に版画の各種技法を修得、更に米国に渡りニューヨークのブラット・インスティテュートで研究を重ねた。1977年に再来日、筑波大学で教鞭をとり版画研究室創設に尽力。その後米国に居を構えつつ、米国、台湾、大陸などで現代版画の各種技法を伝える。

この間、東京版画ビエンナーレ、サンパウロ国際版画展などの各種国際展で受賞を重ねている。「台湾現代版画の父」と称される彼の作品は、《門》《木頭人》《四季之敘》《黙象》、そして近年の《無語問天》などの諸連作がある。各種の生活用品を符号として用いることで東洋的、台湾的な精神を追求し続けている。

江明賢(1942～)は台中に生まれ、台湾師範大学美術系を卒業。スペインに留学後、米国に在むこと数年、西洋の美学、表現技法を学び、素描・水彩の技法を伝統的水墨画の中に取り入れ、新たな水墨画の道を切り開いた。その後台湾に戻り、台湾、日本、米国、中国などで個展を開くなど国際的に活躍する一方、国立台湾芸術院、台湾師範大学などで後進の指導にあたった。1988年には台湾の国家文芸賞を受賞しています。その作品は成長した台湾・台中の原風景を土台に、台湾各地の特色ある風景、建築を主たるモチーフとして制作、台湾の風土を的確に描写している。

本展では今日の台湾の美術界で指導的立場にある両氏の作品を紹介するとともに、その作品を通して、戦後台湾美術の足跡を検証したいと考えた。



■特別展 台湾の心・台湾の情

廖修平・江明賢二人展

29.7×21.0cm

廖修平の部 全108P

カラー図版 48P

「現代版画の騎手」

廖修平の記号シリーズ版画」 王秀雄

「廖修平の版画と思想」 瀬木慎一

「台湾版画史中の廖修平」 味岡義人

出品目録

廖修平年譜

参考文献

江明賢の部 全108P

カラー図版 48P

「江明賢—郷土への憧憬と

現代水墨画の新境地」 潘禧

「台湾古跡風情之美」に

魅せられて」 森美根子

江明賢作品評論抄録

出品目録／作品解説(味岡義人)

江明賢年譜／主要参考文献

江戸の幟旗 庶民の願い・絵師の技

会期=平成21(2009)年7月28日(火)～9月13日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



これまで当館では、絵馬や浮世絵の展覧会を開催し、江戸時代の豊かな庶民文化を紹介してきた。幟旗もまたこれらと並び、江戸時代の庶民文化を代表する存在であった。

幟旗の多くが、風雨にさらされる消耗品であったために、廃棄されてしまったものも多く、これまで美術作品として十分に評価されることなく、埋もれかけていた。しかし幟旗研究家の北村勝史氏によって評価と収集の先鞭がつけられて以降、鈴木忠男氏(美術コレクター)と、林直輝氏(吉徳資料室主任学芸員)がこれに続いたことにより、江戸時代の幟の、芸術表現としての質の高さが、ようやく見直されようとしている。本展は、三人のコレクターの多大なる協力を得て、三コレクションあわせて五百点近い幟旗から、百点を厳選。その魅力あふれる世界を提示することができた。公立美術館で初の試みである。本展のために作成した図録は、三者にご寄稿いただき、今後の幟の分野で基本的資料となると期待される。本展を機縁に、幟旗を紹介する展覧会が国内外で企画、開催されている。



■特別展 江戸の幟旗
庶民の願い・絵師の技
30.0×20.4cm 全164P
カラー図版 128P
「江戸の幟旗」 北村勝史
「幟の思い出」 鈴木忠男
「幟に魅せられて」 林直輝
作品リスト

生誕120年 野島康三 一肖像の核心展

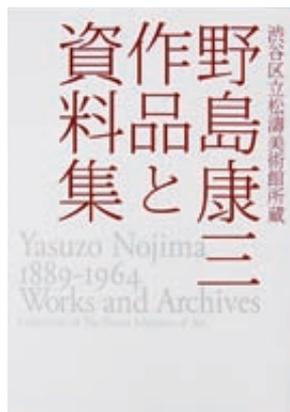
会期=平成21(2009)年9月29日(火)~11月15日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロン・ミュージーゼ、特別陳列室
協力=京都国立近代美術館



平成3(1991)年に京都国立近代美術館と巡回で開催した「野島康三とその周辺」展から約20年を経過するうちに、当館では野島康三作品および資料をご遺族、ご関係者から寄贈を受けることが何度かあった。生誕120年を記念して、それらの公開を兼ね、その後の研究成果をふまえた野島康三の個展を初めて美術館で開催することとした。

人物像において独自の展開を示し得た近代写真の巨人として、代表作をおおまかに年代順に展示し、関連資料を豊富に交えて展示した。なかでも、昭和7(1932)年の個展「女の顔」の出品作品を現存作品のなかで確定し、コーナーを作って展覧できたことには意義があった。

また、同時期に赤々舎から『野島康三写真集』が出版されたことから、図録では通常の展覧会カタログの形式とは別の性格の出版物を発行した。すなわち、寄贈された作品と資料を整理編集し、所蔵品により1冊の作家資料集としてまとめるという初めての試みである。ここには野島家の家系を示す古文書から、ポートレート、野島が関わった出版物、画廊の案内状や関係者の作品などできるだけ図版を交えながら、作家アルバム風にまとめることを考えた。同書は美術館連絡協議会優秀カタログ賞をいただくことができた。



- 生誕120年 野島康三一肖像の核心
渋谷区立松濤美術館所蔵
野島康三 作品と資料
- 序章 解題・年譜
- 1章 渋谷区立松濤美術館所蔵
野島康三作品 解題
- 2章 資料編1 野島家アルバムと
初期作品 解題
- 3章 資料編2 展覧会と出版
兜屋画堂の周辺 解題
- 4章 資料編3 新しい写真運動
『光画』時代の
野島康三 解題
- 5章 資料編4 野々宮ビルをめぐる
解題
- 6章 資料編5 国画会と戦後 解題
- 7章 書簡集 野島康三宛書簡 解題
- 執筆=光田由里

没後90年 村山槐多 ガランスの悦楽

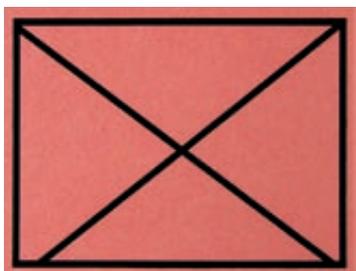
会期=平成21(2009)年12月1日(火)～平成22(2010)年1月24日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室



22歳5ヶ月で逝った夭折の画家、村山槐多(明治29(1896)年-大正8(1919)年)の回顧展である。早熟で多感な青年であった槐多は、絵画と文芸に独特の感性を発揮した、大正が生んだ異色の才能だった。

浪漫性をたたえた表現、比類ない対象把握の凄みは、ほかの何ものでもない槐多の絵としか言いようがない。高村光太郎に「火だるま槐多」と呼ばれ、みなぎる生命力をたたえながらも死に向かうデカダンスをまとった槐多は、貧困と宿痾のうちに烈しく短い生涯を駆け抜けた。彼の生き方は、近代が生み出した「夭折」という魅力的な姿を遺した。美を具現化する方法として、槐多は個人感情の発露と表現とを融合して、あらたな絵画のかたちと画家の姿を私たちに見せてくれた。日本近代美術の青春期とも言えるこの時期、その存在は象徴的でさえある。

今年は槐多が代々木の〈鐘下山房〉で没してから90年にあたる。特に関根正二とともに槐多は、夭折画家として人気があり、あらゆる世代の来館者がみえた。前回の回顧展から10年経て、村山槐多の回顧展を期待していた人々の思いが感じられた。とくに本展は、副題にある「ガランス」のイメージを強調し、タイトルロゴはもちろん、すべてのデザインを統一し、その一環として展示構成にも工夫を凝らした。渋谷駅周辺にある街角ヴィジョンにも、独自の画像を流し宣伝効果を高めた。



■没後90年 村山槐多 ガランスの悦楽
23.0×30.3cm 全180P
カラー図版 130P
「村山槐多の浪漫性について」 瀬尾典昭
小説 「悪魔の舌」
「作品解説」 瀬尾典昭
村山槐多年譜
文献目録
作品リスト

ケンブリッジ大学創立800周年記念 志村 博がシルクスクリーンと映像で綴る 遙かなるグランチェスター・メドー

会期=平成22(2010)年4月6日(火)～5月23日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
後援=ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学出版局

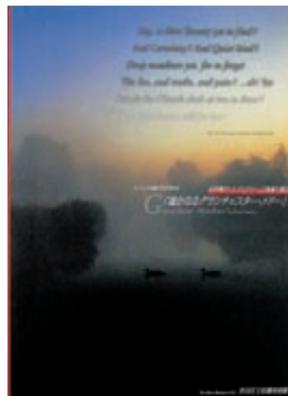


在英35年の美術家・志村博(昭和24(1949)年～)の、グランチェスターをテーマにしたシルクスクリーン版画作品約60点と映像インスタレーション作品を陳列した。

グランチェスターGrantchesterは、イギリスの大学都市ケンブリッジから南3kmにある牧歌的な村の名前である。「グランチェスターを語らずにケンブリッジを語ることは出来ない」と言われるほど、大学の業績や、時代の文化形成に重要な役割を果たしてきた。昭和50(1975)年に、はじめてこの地に訪れて以来、35年間インスピレーションを受け続ける志村博の作品は、グランチェスターという場所を通して、ごく普通に見られる自然環境がなぜ人々を心身ともに潤し、創造の源となりえるのか、私たちに改めて問いかけてくる。ケンブリッジ大学が創立されて800年経過した今日も、グランチェスターは変わらない姿であり続けており、それは大学と住民の絶え間ない努力によるものである。

本展は、企画当初からの志村氏の強い要望により渋谷区在住の世界的なグラフィック・デザイナーである勝井三雄氏が展示監修、図録デザイン・装丁などを担当。当館の空間を最大限活用し、12台のプロジェクターを駆使し、映像と音により、作家の感動をそのまま追体験する空間を創出。当館では初の試みであり、当館の特殊な空間の新たな魅力を提示できたと思う。

本展は、後援のブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学出版局ほか、イギリスのルパート・ブルック協会、凸版印刷株式会社 印刷博物館に多大なる協力のもと、実現した。



■ケンブリッジ大学創立800周年記念
志村博がシルクスクリーンと映像で綴る
遙かなるグランチェスター・メドー
25.7×18.6cm 全120P
カラー図版 100P
「展覧会に寄せて」 志村 博
「志村博作品(シルクスクリーンと映像)
について」 谷 亜紀
「ケンブリッジ大学800周年」
ピーター・バグナメンタ
「ケンブリッジ大学出版局の歴史」
世界最古の印刷・出版機関」 ケビン・テイラー
「関連地図 ケンブリッジとグランチェスター
ケンブリッジ市をとり巻く環境と
グランチェスター村」 ジェイソン・アーチャー
「旧牧師館物語」
ジ・オールド・ヴィレッジ、グランチェス
ター」メアリー・アーチャー
「(再録)The Old Vicarage Grantchester」
ルパート・ブルック
「あるティー・ガーデンの話し“オチャード”、
グランチェスター」 ロビン・カラン
シルクスクリーン/アーカイブス/
映像インスタレーション
出品作品リスト/略年譜/展覧会歴
ブルック参考文献

中國美術館所蔵 中国の扇面画

会期=平成22(2010)年6月8日(火)~27日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

主催=渋谷区立松濤美術館、中國美術館 協力=日本中国文化交流協会

後援=中華人民共和国駐日本国大使館

爽やかな風を起し、涼しさと心地よさをもたらしてくれる扇は、扇風機や空調機の普及した今日でも、我々の日々の生活に欠かせないものである。

宗の詩人蘇轍は「扇は日本より来るも、風は日本の風に非ず。一但日本扇を執れば、風来りて自ずから窮ること無し」(『楊主簿日本扇』・『欒城集』卷十三所収)と詠んでいる。中国で「折扇」と呼び、或は「摺扇」「撒扇」などと呼ばれる「おうぎ」は宗代に日本から中国へもたらされ、次第に中国社会に普及していったもので、日中の文化交流を象徴するものといえる。

本展ではこうした扇面に描かれた絵画作品105点を陳列した。その中の約30点により、明末から民国時代にかけての中国画の伝統的な流れをみていただいた。

また、70点余の作品は、中國美術館が、現在の中国画壇の第一線で活躍する画家たちに依頼して描かれた作品である。小さな、また、特殊な形をした画面だが、そこにはそれぞれの画家の意境が示され、さまざまな技法が駆使されている。これらの作品を通して、伝統を踏まえつつ、新たに創作の道を模索する今日の中国画壇の状況をうかがうことができると考える。また、本展を通して日中の長い交流の歴史を振りかえり、両国の相互理解と交流が深まることを願ってやまない。



■中国の扇面画 中國美術館所蔵
21.0×30.0cm 全160P
カラー図版102P
「中国扇面画藝術の歴史と発展」
載増海
「扇子の歴史」 味岡義人
出品目録/画人略伝/参考文献目録

岡田菊恵

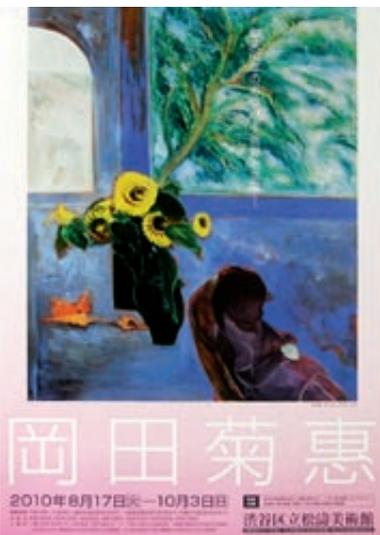
画業60年のあゆみ —色彩と空間—

会期=平成22(2010)年8月17日(火)~10月3日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

岡田菊恵は昭和4(1929)年目白に生まれ、敗戦後初めて男女共学となった東京美術学校(現・東京藝術大学)に、最初に入學した女子学生のひとりである。安井曾太郎教室に学び、昭和26(1951)年に卒業すると、日本アンデパンダン展やタケミヤ画廊のグループ展に出品することで画家としての歩みを始めた。以来、女流画家協会展や立軌会に参加して主要メンバーとして活躍を続けている。家庭でも子育てをしながら、養護学校に勤めて障害者教育に携わり、画業60年の歩みを貫いて今なお活躍中である。

本展は岡田の初期作品から近作まで、全画業を振り返る初めての回顧展である。200号の大作群を中心に、主要作品をそろえ、デッサンや資料を交えて女流画家の長い画業を網羅的に紹介した。



■岡田菊恵
画業60年のあゆみ—色彩と空間—
29.0cm×30.0cm 全116P
カラー図版 82P
「展覧会によせて」 岡田菊恵
「岡田菊恵論」 宝木範義
岡田菊恵略年譜／出品作品リスト

大正イマジユイの世界 デザインとイラストレーションのモダーンズ

会期=平成22(2010)年11月30日(火)~平成23(2011)年1月23日(日)
 会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
 後援=大正イマジユイ学会
 協力=大正100年実行委員会
 企画・運営協力=株式会社キュレイターズ



本展ではポピュラー・カルチャーの旗手として大衆に浸透してゆく大正の新しいイマジユイに注目した。多彩で豊かなデザインとイラストレーションの華を咲かせたこれらのイマジユイは、一人一人の眼に訴えかける親密性を持ちえており、いまなお清らかな輝きをはなっている。

一世を風靡したアール・ヌーヴォー様式の橋口五葉とアール・デコに取り組んだ杉浦非水や小林かいち、あるいは大正を象徴する竹久夢二や高島華宵にみられる少女趣味の抒情性や岡本帰一や加藤まさなどを子供世界の愉しさ。また小村雪岱の洗練された江戸趣味や橘小夢や竹中英太郎らの怪奇幻想美を秘めた時代の雰囲気。そして都市文化におけるモダニズムは恩地孝四郎や古賀春江らを生み出し、プロレタリア美術は柳瀬正夢や村山知義らの前衛を目覚めさせる。やがては大衆の絶大な人気をあつめる演劇/映画、音楽、ファッションなどつながり商業美術に裾野を広げてゆく。

独創的な発想で人気を博した、あるいは奇想幻想の知られざる、画家、版画家、挿絵画家、工芸家たちによる、装幀、挿絵、デザイン画、広告、ポスター、絵はがき、版画などの作品約400点を展示した。

「印刷物としての美術」を、無理なく受け入れる素地があったことと、昔日のイラストを懐かしむ年配の世代ばかりでなく、徐々に新しいデザインとして受け入れる若い世代の観覧者が多く見られ、大正時代のかわいい文化、あるいは洗練されたイラストに、現代的な人気があったことが驚きだった。



■大正イマジユイの世界
 デザインとイラストレーションのモダーンズ
 210×15.0cm 全192P
 カラー図版 192P
 「序」 瀬尾典昭
 「大正イマジユイの世界」 山田俊幸
 第一部 大正イマジユイの13人
 「対談 大正イマジユイの
 魅力を語る」 島本流/谷口朋子
 第二部
 さまざまな意匠
 主要作家データ/作品リスト/
 大正イマジユイ年表

開館30周年記念特別展 牛島憲之 至高なる静謐

会期=平成23(2011)年4月5日(火)～5月29日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

渋谷区立松濤美術館は、本年、開館30周年を迎えた。これを記念して、渋谷区ともゆかりある、戦後の洋画壇に大きな足跡を残した画家牛島憲之の回顧展を開催するはこびとなった。

牛島憲之は、熊本県に生まれ、少年時代から画家を志した。19歳で上京、青春時代の一時期を渋谷区千駄ヶ谷で過ごしている。東京美術学校を卒業した年の帝展に初入選、戦後の第2回日展で《炎昼》により特選を受賞。昭和24(1949)年には須田寿などとともに自由な創作・研究の場として東京藝術大学で後進の育成にも努めた。昭和56(1981)年に日本芸術院会員、昭和57(1982)年は文化功労者となり、翌昭和58(1983)年には文化勲章を受章している。

本展では、学生時代の《風景》から絶筆となった《道一筋》の題が示す通り、「絵かきは孤独でなければならない」の信念のもとに、日本の風土を新しい視野のもとでとらえ、日本の油絵、日本の美を追求し続けたものだった。その作品は、モチーフや技法の試みを積み重ねた上に熟成されたもので、柔らかな線と穏やかな色彩を特徴とし、そこに描きだされた世界は非日常的でありながら、妙にリアルな存在感をもち、詩情にあふれている。本展をとおり、気品ある、至高ともいえる静謐感に包まれた牛島憲之の世界に浸っていただくとともに、日本の油絵について思いをめぐらせることができた。



■開館30周年記念特別展
牛島憲之 至高なる静謐
30.5×22.7cm 全136p
カラー図版 86p
「牛島憲之 その笑顔とともに」
宝木範義
年譜
牛島憲之文献目録
出品目録

チェコ・アニメ もうひとりの巨匠 カレル・ゼマン展 トリック映画の前衛

会期=平成23(2011)年6月14日(火)~7月24日(日)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室
後援=チェコ共和国大使館、カナダ大使館、国際アニメーションフィルム協会(ASIFA)
協力=株式会社日本スカイウェイ、カトーレック株式会社
監修協力=ルドミラ・ゼマン、リンダ・スパーレニー・ゼマン、山村浩二
企画協力=株式会社イデッフ

カレル・ゼマン(1910-1989)は、人形アニメーションや絵本で人気の高いイジー・トゥルンカ(1912-1969)と並ぶチェコアニメーションの創設者であり、巨匠のひとりだ。その生涯100年にあたる2010年から「チェコ・アニメーション もうひとりの巨匠—カレル・ゼマン」展を開催する運びとなった。

ゼマンは第二次世界大戦中、チェコ・アニメーションの発祥地グリーンを拠点にアニメーションの制作を開始した。トゥルンカと同様に、チェコの伝統でもある人形劇への愛着を強く持つ一方で、ゼマンはフランスをはじめとする海外の文化に対する開かれた目を持ち、ガラスの立体によるコマ撮りのアニメーションなどに挑んだのち、ジュール・ヴェルヌの原作をもとに『悪魔の発明』(1958)など、様々な手法を駆使した斬新な映像作品を創り出し、トリック映画の王道を歩んだ。

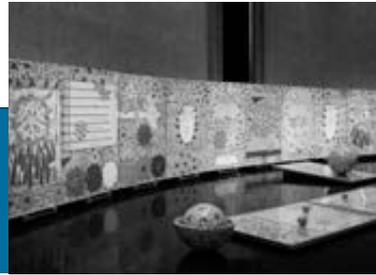
本展は、ご遺族が所有する原画や人形、貴重な制作過程の資料や絵コンテなどの展示やアニメーション作品の上映を通じて、ゼマンの創作活動の全容をたどろうとした。



- チェコ・アニメ もうひとりの巨匠 カレル・ゼマン展
- トリック映画の前衛
- 22.0×28.5cm 全140P
- カラー図版 95P
- 「カレル・ゼマン 語り部、魔術師、そして詩人」
リンダ・スパーレニー
- 「技法でみるカレル・ゼマンにお映像世界」 山村浩二
- 「多面的な表現者 カレル・ゼマンの魅力」 阿部賢一
- 「ゼマン・メリエス」 ジャック・マルテット
- 「チェコ・アニメーション背景史」
ヤン・カシュパル・バーレニー・チェク
- 「映画雑誌でたどるカレル・ゼマンの受容史」 松本育子
- 「カレル・ゼマン略年譜」 柴田勢津子編
- 「日本語参考文献リスト」 松本育子編
- 出品リスト

岡本信治郎展 「空襲25時」

会期=平成23(2011)8月9日(火)~9月19日(月・祝)
会場=地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室



岡本信治郎(昭和8(1933)年東京都生まれ)は独学で絵画を学び、1950年代半ばからアンデパンダン展などに出品をはじめ、個展を開催するなどの活動を通して次第に注目を集めるようになった。当時新しい画材だったアクリル絵の具を用い、フラットでクールな線と明るい原色で、イラスト的でグラフィックな絵画を1962年頃に確立した。戦争、映画、国家、絵画など幅広く主題を選び、ユーモアとレトリックを駆使して、社会への評言を描きだしてきた画家である。

本展は、少年時代に空襲を体験した画家が長年あためてきた戦争というテーマを、新しい桜図、巨大な絵巻として展開する未発表作品約40点を一堂に紹介するテーマ展である。敗戦後60年を経た現代の日本で戦争と平和を改めて問う、岡本信治郎の「見る絵画／読む絵画」は高い評価を受け、全国紙五紙に展評が掲載されるなど話題となった。



■岡本信治郎 「空襲25時」
30.5×20.0cm 全106P
「岡本信治郎の絵画—
評画／シミュラクル／不在」
光田由里
「空襲25時」絵と文 岡本信治郎
「岡本信治郎
アトリエ笑うアトリエ館」
撮影：伊坂義夫
岡本信治郎年譜
パブリックコレクション

宗廣コレクション 芹沢銈介展

会期=平成23(2011)年10月4日(火)～11月20日(日)

主催=渋谷区立松濤美術館、東京新聞

協力=岐阜県美術館

型絵染の重要無形文化財保持者、芹沢銈介(明治28(1895)年-昭和59(1984)年)は、30代前半に民芸運動の創始者で、生涯の師となった柳宗悦と出会い、そして沖縄の伝統的な染色である紅型に衝撃を受けたことを契機に、本格的に染色の道へ入る。河井寛次郎、浜田庄司らとともに民芸運動に参加し、紅型を精神的な支柱にすえつつ、極めて独創的な型絵染を考案。曇りのない明るさと静けさに満ちた芹沢の作品は、国内外で個展が開催されるなど、国際的にも高い評価を得ている。

所蔵者・宗廣陽助氏は、郡上紬の重要無形文化財保持者であった宗廣力三の長男として、岐阜県郡上市に生まれ、芹沢の生涯の師であった民芸運動の創始者・柳宗悦の甥の染織家・柳悦孝に師事、芹沢銈介と出会い、傾倒するようになる。紬織り制作者として、伝統を担っている氏のコレクションは、代表的な型絵染による屏風、暖簾、着物のほか、氏が心から師と慕う芹沢の「手」が強く残る硝子絵や板絵、スケッチ帳などの肉筆作品が充実している。芹沢作品のなかでも、芹沢が直に手掛けたもの、作品の仕上げりまで芹沢銈介が手を触れているものだけに関心がおかれ収集された類まれなコレクションなのである。また宗廣氏は、生涯に5000もの民芸品を蒐集していたといわれている芹沢の影響を受け、独自の観点により国内外の民芸品も多く蒐集している。わずかであったが、芹沢作品とともに陳列できたことも本展の魅力の一つとなった。一人の染織家が自身の研究と芹沢への想いから強い情熱をもって蒐集してきた作品群は、芹沢作品の本質を際立たせ、硝子絵など肉筆画を初めて目にする鑑賞者も少なくなく、再来館がとて多かつたことも今回の展示への関心の高さがうかがえる。宗廣氏による記念ギャラリートークも、大変に盛況であった。



■宗廣コレクション
 芹沢銈介展
 A4判 全134P
 カラー図版 107P
 「芹沢作品収集の思い出」
 宗廣陽助
 「芹沢銈介 いろは文字の魅力
 —宗廣コレクションから」
 正村美里
 「芹沢銈介の型絵染工程」
 「芹沢銈介—模様のはなし」
 藤間 寛
 「芹沢の硝子絵と板絵」
 谷 亜紀
 「芹沢銈介—時代を
 生きる感覚」 千葉真智子
 「作り手への目線」 林 智子
 芹沢銈介年譜
 参考文献
 出品目録

開館30周年記念特別展 渋谷ユートピア 1900—1945

会期=平成23(2011)年12月6日(火)～平成24(2012)年1月29日(日)

会場=地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

東京が江戸情緒を払拭しつつモダン都市へと変貌していた明治から大正・昭和の時期には、渋谷もまたおおきく様変わりした。新時代の展開にともなって、菱田春草や岸田劉生に代表される多くの俊英の美術家たちはここ渋谷に集い、後世に語り継がれるいくつもの美術史が誕生する。

大正時代の渋谷は、今日の喧噪からは想像もつかないですが、国木田独歩が『武蔵野』に描いたように都市と周縁の雑木林が混在する物語が生まれる場所でもあった。そして美術で言えば、旧来の美術から新しい意識をもった美術に変貌をとげる大きな節目となる時期である。東京の中心部に位置する旧市街から新地域への移行という事実は、それ自体がこれからの新しい時代と美術思潮へ向けての青年たちのメッセージだったのだ。近代がもたらした都市化によるその周辺にひろがる郊外という場所の発見は、美術の質の転換という面においても大きな契機となった。

東京には「池袋モンパルナス」「落合文士村」「田端文士村」「馬込文士村」、あるいはもっと周りには浦和の画家村、市川周辺、鎌倉から湘南にかけてと幾つもの美術家や文化人が集い交流した土地がある。そうした場所にならんで渋谷をアーティスト・コロニー(芸術家村)ととらえることも可能であろう。

本展は、渋谷に住んだ美術家、あるいは渋谷を描いた画家を取り上げ、美術家たちがユートピアを夢みたアーティスト・コロニーをかつての渋谷に再発見しようとするものである。



■開館30周年記念特別展
渋谷ユートピア 1900—1945
B5判 全274P
「春草(落葉)伝説」 村瀬雅夫
「内田邸—木造陸屋根の住宅」
岡田理香
「帝都を望みて武蔵野に住む
ユートピアを夢みる
アーティスト・コロニー」
瀬尾典昭
関連年表
出品リスト
渋谷の美術家一覧
附録SHIBUYA'S MAP

開館記念特別陳列 菱田春草

会期=昭和56(1981)年10月1日(木)~11月7日(土)
会場=2階特別陳列室

本展は渋谷区ゆかりの菱田春草の作品9点を選び陳列した。

明治の日本画家菱田春草は、東京美術学校に学び、横山大観、下村観山と共に校長岡倉天心の薫陶を受け、後の日本美術院創立に大きく貢献したことはつとに有名である。その画風は当時は朦朧体と言われ、厳しい批評も受けた。しかしその後、春草は日本美術界を代表する芸術家の一人として高く評価されている。朦朧体とは描線を目立たせず、大気、水その他を一種のボカシを使って表現するものである、当時の日本画の世界では随分目新しい様式として映ったのである。その代表作として陳列した「釣婦」「雨後」「春の朝」があり、いずれも朦朧体によるふくよかで水々しい雰囲気をもよく表現している。晩年、渋谷区代々木の地に住み創作に励んだが、明治44(1911)年惜しくも37歳の若さで逝去した。



■開館記念特別陳列 菱田春草
24.0×25.0cm B判変形 10P
モノクローム図版 5P
「菱田春草の芸術と
代々木のゆかり」 飯島 勇
作家年譜

特別陳列 伊藤若冲

会期=昭和56(1981)年12月2日(火)~昭和57(1982)年11月7日(日)
会場=2階特別陳列室

江戸時代異色の画家として近頃頌に喧伝されている伊藤若冲は、正徳6(1716)年、京都高倉小路の青物問屋の長男として生まれ、寛政12(1800)年85歳で他界した。その画風の特徴は執拗な細密描写の技術に裏付けられた大胆なフォルムの歪形、強烈な色彩の使用、意思的でしかも奇抜な構図などに有る。当然、当時未だ主力であった狩野派の画風とは明らかに軌を異にしたものであり、江戸時代絵画の新機軸を開いたものと言える。描く対象は動物(とりわけ鶏は有名)が意外と多く、若冲の嗜好をうかがわせるが、これを画面にギッシリと詰め合せ、一種の動物天国をも再現しているのも楽しい。一方、日常の俗の世界から離れ、「出山釈迦図」や「涅槃図」などを描いた若冲は、相国寺の禅僧大典禅師などの交友関係からも一種独特の高い精神性を築き上げたものと思われる。陳列した作品は全て東京では初公開のものばかりである。



■特別陳列 伊藤若冲
2.04×25.0cm B判変形 14P
カラー図版 2P
モノクローム図版 5P
「異色の花鳥画家・伊藤若冲」
小林 忠
若冲年譜・若冲参考文献

特別陳列 江戸の人物画 谷信一コレクション

会期=昭和57(1982)年2月17日(火)~4月4日(日)
会場=2階特別陳列室

江戸の人物画には様々な流れがあるが、ここでは谷信一氏寄託品の中から、10点程を選び概観した。山口雪溪の「寒山拾得図」は室町水墨画に傾倒した作風を示し、谷文晁の「寒山拾得図」は骨太で大らかな作風、英一蝶は軽妙洒脱な「風俗図」、一蝶の高弟高嵩谷も洒脱な「人物落馬図」でユーモア溢れる画題を描き、円山応挙は画技の習熟を示す写実的な「老子出関図」、高久隆古も同じく写実味溢れる「人物図」を描き、鈴木其一は端正な描法に小ざっぱりとした色彩で「人物図」を描き、曾我蕭白は習熟ある独特のあくの強い作風で「人物図」(「鶴図」「鹿図」と組)を描いた。この様にわずか十点程の陳列品の中でも、江戸時代の豊富な画派の流れというのが眼の当りに見られ、当時の絵画の華麗な動きが見られるものと思う。

特別陳列 琳派再生 神坂雪佳

会期=昭和57(1982)年4月28日(火)~6月12日(日)
会場=2階特別陳列室

神坂雪佳は京都の地で慶応2(1866)年に生まれ、昭和17(1942)年に歿した。彼はいわゆる江戸時代から続く琳派の流れを近代に忠実に継承した作家として貴重な存在である。最初四条派の画風を学び、後、琳派の絵画へと移って行き、雪佳はここで琳派芸術の内に潜む、美術と工芸との結び付きをも追求し始めた。事実、雪佳は工芸図案家としても有名で、様々な分野で活躍した。又その交友範囲も大変広く、明治36(1903)年には浅井忠らと作陶の趣味団体・遊陶園を作り、それには陶芸家宮永東山、伊東陶山、清水六兵衛(五代)らも参加している。後に設立した佳美会は美術工芸のあり方を模索しつつ、京都工芸界の指導的立場としての役割を果たした。

雪佳の絵画はほのぼのとした温みのあるもので、色彩も上品で着きがあり、観るものに一種の安らぎを与えるものである。



■特別陳列 琳派再生 神坂雪佳
24.0×25.0cm B判変形 36P
カラー図版 2P
モノクローム図版 17P
「神坂雪佳の世界」小林忠
雪佳年譜・参考文献(小林忠)
出品目録

特別陳列 江戸の花鳥画

会期=前期：昭和58(1983)年2月22日(土)~3月6日(日)
後期：昭和58(1983)年3月18日(土)~31日(日)
会場=2階特別陳列室

江戸時代の様々な花鳥画の流れを、谷信一氏寄託品の中から選び陳列し、概観した。江戸時代には狩野派の謹厳実直な画風、土佐派の大和絵風の画、琳派の装飾的で華やかな画風、円山四条派の写実的で豪華な画風、文人達による自由闊達・軽妙洒脱な画風、僧侶等の精神的意義を重視した画風、中国渡来の新しい写実主義を盛り込んだ画風などいくつかの画風があった。これらの画風が刺激し合い、次の時代の絵画の基礎となった。伊年印「草木図」は琳派風の伸びやかで大らかな画風を示し、勝田竹翁「白鷹図」は彩色豊かな堂々たる鷹の姿狩野派風に示し、田中訥言「瓢箪図」は軽みの有る画風である。熊代熊斐「墨梅図」、黒川亀玉「鶏図」、方済「梅に吠々鳥図」などは当時の中国(清)の画風の影響を色濃く反映している。森狙仙「猿猴図」、柴田是真「梅雀図」は円山四条派の流れの中から生まれた。他に文人浦上玉堂の息子の春琴の「墨梅図」、同じく文人田能村竹田を学んだ平野五岳の「梅図」、僧明堂の「竹石図」などを陳列した。

特別陳列 麻生三郎

会期=前期：昭和59(1984)年2月19日(土)~3月4日(日)
後期：昭和59(1984)年3月13日(土)~25日(日)
会場=2階特別陳列室

麻生三郎は大正2(1913)年東京京橋に生まれた。初め同舟舎絵画研究所、太平洋美術学校に学び、エコール・ド・東京に参加、シュールレアリズムの傾向の強い作品を制作した。昭和13(1938)年、25歳のとき渡欧、その芸術に大きな衝撃を受けた麻生は、帰国後、西欧と日本の造形の根本的な対比から出発することになった。昭和14(1939)年芸術文化協会、昭和18(1943)年には松本竣介、鶴岡政男らと新人画会を結成し次々と作品を発表した。戦後、自由美術協会会員となり美術団体連合展に出品、又、数多くの個展を開催するなど、麻生の言う「人間のいる絵」という言葉に表現されるレアリズム観を深化していった。

この展覧には油彩画の小品10点を陳列し創作活動の一端を紹介した。

特別陳列 森 芳雄

会期=平成2(1990)年2月5日(土)～2月17日(日)／3月3日(土)～17日(日)
会場=2階特別陳列室

当館では昭和56年秋「開館記念特別展 森芳雄」を開催した。初期から近代に至る系統的な40余点の陳列であった。その格調高い芸術を鑑賞していただけたことでしょう。

本展は前回に比較し油彩画12点、デッサン6点と小規模ではあるが、その中でデッサンは多数描かれた作品の中から選んで陳列されたものである。デッサンは画家がタブローの下絵に描く場合ばかりではなく、それ自体完結した作品としてみることができる。それは色彩、線といった要素が単純であるだけに画家の物の見方、表現の仕方、また、モチーフに接した時の興奮が直裁に観る者に伝わってくる。特に森芳雄のデッサンには飾ったところがなく制作の舞台裏をみせてくれる。主要テーマである人物画はデフォルメにより実在感のある表現をもたらしている。最初の渡仏以来、数回のヨーロッパを中心とする外国旅行における風景画は臨場感のある空間の広がりを持った画面を作り、身近なモチーフによる静物画は静謐な空間をかもし出している。

日本における油彩画の意味を常に問い続けながらも、安易に日本臭さに墮すことなく、真正面から画面の構造を探り、リアリズムを追求した。戦後の洋画界の大きな原動力となった。

この展観が森芸術のより深い理解の一助となったことと思う。

特別陳列 伊藤隆康

会期=昭和60(1985)年8月20日(火)～9月29日(日)
会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

本展は、渋谷区に在住され、昭和60(1985)年2月に50歳の若さでガンのために逝った伊藤隆康の回顧展である。

伊藤隆康は、昭和9(1934)年に兵庫県明石市に生まれ、昭和33(1958)年に東京藝術大学油絵学科(小磯良平教室)を卒業した。翌34(1959)年、第1回個展で、石膏の中に荒縄・木の枝などを埋め込み表面をアンフォルメ風に整形した作品を発表、その中より5点をシェル美術賞展に出品し、第一席を授けられた。昭和35年(1960)年には第1回ACC展で第二席、昭和36年(1961)年にはバリ青年ビエンナーレ展などに出品のほか、丸善石油美術奨励賞展で佳作賞を受けるなどして新人として輝かしいデビューを飾った。それとともに、36年の第3回個展でプラスチックの製氷皿で作った石膏の半球体を無数に並べた白一色の作品を発表した。「無限空間」シリーズである。従来の絵画的な手法からの離脱の過程は、ここにおいて一つの頂点を迎える。昭和38(1963)年の個展ではプラスチックのジョウゴを壁面に無数にならべ、翌39(1964)年の個展では「無限空間」シリーズの土管を発表。個展終了とともに削減するこれらの作品は、作品の永遠性を否定した所からスタートしたものであり、従来の芸術思想からの離脱を示すものであった。これとともに、アルミ鋳物によるトゲの出たオブジェ、そして、昭和42(1967)年には「負のシリーズ」と「同時に存在するシリーズ」を発表する。これらは、工場機械による制作であり、個人の行為の根拠を残さないという方法論にたったものであり、発注芸術として、また、「負のシリーズ」はライト・アートとしても先駆的なものであった。昭和45(1970)年に万博美術館に出品して以後、建築美術や都市空間のデザインに活動の場を広げ、近年にはアルミによる無限空間、シルクスクリーンによる無限空間を発表し、あわせてビデオ・アートの分野において顕著な活躍を示し始めていた。伊藤の死はこうした新たな展開の時であり、惜しまれてならないものがあるといえよう。

本展では、伊藤の第1回個展出品作から最新のビデオ・アートまで38点と併せて、「土管」などの作品を写真展示することで、抽象表現に絶えることのない実験を繰り返してきたその全貌を紹介できたことと考える。



■特別陳列 伊藤隆康
24×25cm B判変形 10P
モノクローム図版 6P
空間の無限運動を「見たひと」
山口勝弘
略年譜・出品目録

受贈記念特別陳列 村田勝四郎

会期=昭和60(1985)年12月24日(火)～昭和61(1986)年2月2日(日)
会場=2階サロンミュゼ、特別陳列室

昭和60(1985)年3月、松濤美術館は彫刻家村田勝四郎氏より自作の彫刻作品48点の寄贈を受けた。村田氏は昭和6(1931)年渋谷・元代々木にアトリエを移して以来、50年余にわたり区内に在住し旺盛な創作活動を続けられている。寄贈を受けた作品はその永年の活動を物語るもので、昭和初期の帝展出品作から近年の新制作協会展出品作に至る各時期の代表作を網羅した創作活動の全容を示すものといえる。

村田勝四郎氏は明治34(1901)年大阪市北区に生まれた。大正9(1920)年には東京美術学校彫刻科に入学し北村西望教室に入る。彫刻科を卒業すると同研究科に入り、予てよりその造形理念に心酔していた朝倉文夫に師事する。さらに朝倉文夫が主催した若手彫刻家の研究会的集まりであった朝倉彫塑塾に参加し、村田氏の初期の作風が確立する。自然主義的写実彫刻に卓抜した技をみせた朝倉文夫は大正、昭和初期の官展彫刻に指導的役割を果し、村田氏に与えた影響は大きいものがあつた。この時期に村田氏は主に帝展に出品し、ギリシャ彫刻を好んだというその作品は、ポーズに重点をおいた量感ある肉付けと単純化した形態で人体の存在感の表現が特色である。

昭和4(1929)年、朝倉彫塑塾を脱退し、安藤照・堀江尚志・松田尚之らと塊人社を結成した。官展系若手彫刻家の集まりであった塊人社は個性的な集団として当時の彫刻界に新風を吹き込んだ。

また、この頃、富本憲吉の窯に通いテラコッタによる造形を追求した作品を残したことも特筆すべきことである。

戦後、昭和24(1949)年、本郷新の勧めで新制作協会の会員となり、以後今日まで発表を続けている。この時期は村田氏の代表的といえる作品を次々と制作し、奇をてらうことない淡々とした写実精神で人体や動物を表現している。いくたびかの作風の変遷をおせる中で近年では、日本野鳥の会の理事を務めていたことから鳥に対する愛着がみられ、鳥と女、鳥と少年などのテーマで鳥と人間との関係を追求した作品が多く、それは、天空に向けて上昇する人間の夢を鳥に託しているかのようである。

今年85歳の村田勝四郎氏は更に新たな構想を抱き制作に意欲を持ち続けている。



■受贈記念特別陳列
村田勝四郎の彫刻
24.0×25.0cm B判変形 24P
モノクローム図版 17P
「村田勝四郎の仕事」
倉田平吉
出品目録・年譜

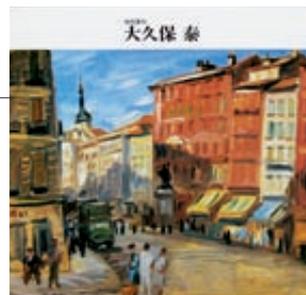
特別陳列 大久保 泰

会期=昭和61(1986)年4月15日(火)～5月25日(日)
会場=2階サロンミュゼ

渋谷区在住の洋画家大久保泰氏は、独立美術協会会員であり、主にヨーロッパの風景画を中心に描き続けている。また大久保氏は当館の発足以来、渋谷区美術振興財団の評議員を務め、当館の「特別陳列渋谷区在住作家の作品」に毎年出品し続けている。

大久保氏は後期印象流やフォーヴィズムの影響を受けつつ、流麗な筆致で対象を捉えた生動感あふれる独自の絵画世界を築いてきた。近年は、北欧から南欧まで、長期のヨーロッパ滞在を繰り返し、現地でキャンバスを立て直接写生をする制作態度をとっており、対象から支えられた生々しい感動を鮮やかに描いている。一方、洋画家としての大久保氏は「古式の笑い」、「ファン・ゴッホ・フィンセント」、「カナの饗宴」といった美術評論などの著者としても知られている。

本展は、これまでのヨーロッパの風景画の代表作数点に加えて、比較的珍らしい、画や日本の風景画を加えて12点の作品により構成した。本展終了後、個展開催の感謝のしるしとして、本展出品作の一つ、「バリの眺め(ペルビルより)」の油彩画一点が当美術館に寄贈された。



■特別陳列 大久保泰
24.0×25.0cm B判変形 12P
カラー図版 1P
モノクローム図版 5P
「鮮度の画家・大久保泰」
久富 貢
略年譜・出品目録

受贈記念特別陳列 脇田愛二郎

会期=昭和61(1986)年7月29日(火)~9月7日(日)
会場=2階サロンミューゼ

脇田愛二郎氏は、渋谷区在住の彫刻家で、環境デザインの分野を中心に多彩な造形活動を展開しており、現在最も注目されている彫刻家の一人である。当館の「特別陳列 渋谷区在住作家の作品」にも出品し続けている。

脇田氏は日本とアメリカで彫刻とデザインを学び、その後両国を中心に数多くの展覧会に出品し、個展を開催している。昭和58(1983)年に平櫛田中賞を受賞、昭和61(1986)年の第2回東京野外彫刻展では大賞を受賞。これまでの主な活動分野は、壁面や路面のデザイン作品、ウィンドー・ディスプレイ、建築空間の演出など多方面にわたり、渋谷区散策道路の標識塔デザインなどにも携さわった。このような多彩な造形表現活動を通して、氏は環境と造形作品との調和、すなわち都市と彫刻と人間との理想的なあり方を一貫して追求し続けている。

本展は脇田氏が10数年来追求している「螺旋、ねじれ」のテーマにもとづいて、「ねじられた柱」シリーズの作品として、本展のために新しく制作したものです。これらの作品は、アルミ、ステンレススチール、真鍮、鉄といった各々独自の表情を持つ異なった素材を用いて、特に「ねじられた柱」の作品群は、天空へと上昇する力強い動勢を示しながら互いに響き合い、独自の調和を奏でた空間を現出した。展覧会終了後、脇田氏の申し出により、本展出品作の中から最もオーソドックスな作品「ねじられた柱1」(鉄)が当館に寄贈された。



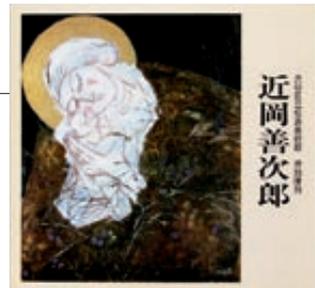
■特別陳列 脇田愛二郎
24×25cm B判変形 12P
カラー図版 3P
モノクローム図版 4P
「脇田愛二郎の造型詩学」 桑原住雄
出品目録・略年譜

特別陳列 近岡善次郎

会期=昭和62(1987)年12月8日(火)~昭和63(1988)年1月24日(日)
会場=2階サロンミューゼ、特別陳列室

渋谷区に在住する洋画家、近岡善次郎の画業の一端を紹介。氏は大正3(1914)年山形県新庄市の生まれ。石井柏亭、有島生馬、山下新太郎に師事し、昭和9(1934)年に一水会会員になる。戦後いち早く渡欧し、フランスをはじめヨーロッパ各地で絵画研究をした。昭和13(1958)年に帰国後、故郷である東北の伝統・風俗を題材とした一連の作品を描き始め、今日にいたっている。その創作活動のあいだに、昭和38(1963)年第6回安井賞を受賞、昭和58(1983)年、明治時代を主題とする学術・芸術に対しておくられる明治村賞を受賞した。

本展では、昭和35(1960)年から昭和62(1987)年までの作品の中から、とくに東北の土壌より生まれ育まれた作品計15点(油彩13点・デッサン2点)を選びすぐって陳列し、氏の特徴ある画業を紹介した。



■特別陳列 近岡善次郎
24.0×25.0cm B判変形 10P
カラー図版 4P
モノクローム図版 3P
「私の絵について」 近岡善次郎
出品目録・略年譜

特別陳列 大正の詩人画家 富永太郎

会期=昭和63(1988)年10月18日(火)~11月27日(日)
会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

富永太郎(明治34(1901)年-大正14(1925)年)は、大正期に夭折した詩人である。幼時より聡明で、絵を好み、府立一中から仙台の旧制二高に進み、そこで文学、絵画への道を歩み始める。人妻への失恋、退学、上海放浪、帰国、その間に、中原中也、小林秀雄らと交わり、ランボーやボードレールの詩を訳し、絵画研究所に通い、詩と絵画の制作をする。しかし、上海放浪時代に病を得、大正14(1925)年11月12日、24歳の若さで、当館にもほど近い代々木富ヶ谷1456番(現在神山町22番地)の自宅で没した。その創作の期間は5年と、あまりに短く、残された作品も、詩が37編、絵画が18点と少ない。富永太郎は、自分が画家として立つか、詩人として立つか最後まではっきりしないままに壮絶な生涯を終えてしまったといえよう。しかし、残された少ない作品からは、富永太郎が「一つのスタイルを創り出す間際にあった」(大岡昇平「富永太郎の詩と生涯」本展図録所収)ことが認められる。本展を通して、富永太郎の芸術の全貌をふりかえるとともに、大正の時代の一つの青春の生きざまに思いをよせる人もあったことと思われる。

なお、本展終了後間もない12月25日、本展開催に御尽力くださった作家大岡昇平氏が、ライフワークとしておられた「富永太郎詩画集」の上梓を前に急逝された。当館での講演会后、少年時代を過ごされた美術館近くの故居のあとに立てられたマンションの一角の小料理屋で酒盃を傾けつつ、夫人や埴谷雄高氏らに往時を語られていた時の温顔を思いだすとともに、昭和の時代の終りを痛切に感じる。謹んで御冥福を祈ります。



■特別陳列
大正の詩人画家 富永太郎
24.0×25.0cm B判変形 60P
カラー図版 15P
モノクローム図版 20P
「富永太郎における創造」
大岡昇平
出品作品目録・
富永太郎小伝(味岡義人)・
年譜・主要参考文献出品目録

特別陳列 ガストン・プティ

会期=昭和63(1988)年2月5日(土)~2月19日(日)
会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

カナダ出身の造形作家ガストン・プティは日本、カナダはもとより、アメリカ、ヨーロッパ、アジア各国で個展を開催し、30年以上の画業を積み重ねている個性的な国際作家である。彼は昭和57(1982)年の第1回松濤美術館公募展で「針の頭」と題する油彩作品で松濤美術館賞を受賞している。プティは昭和5(1930)年、カナダのケベック州に生まれ、又、ドミニコ会の神父でもある。昭和36(1961)年に来日以来、日本を足場にして渋谷区南平台にあるカトリック系ドミニコ会教会の一週にあるアトリエで、日々制作活動に励んでいる。

ガストン・プティの活動領域は多彩である。スタンドグラスのデザイン、教会内装はもとより、油彩、版画(シルクスクリン、木版、エッチングなど)、彫刻、カラージュなどあらゆる領域に及んでいる。その油彩作品をはじめとする平面作品は、初期には昭和35(1960)年の「クレアション」シリーズ、「浮ぶ球体」シリーズ、「青」のシリーズ、「目」のシリーズなど抽象的傾向の作品を続々と制作してきた。しかし1970年代初頭の「まどいの面影」シリーズによって再び具象的な形態を中心とした様式に立ち戻ってきており、「ダビデ王」シリーズ、「現代とその分裂」シリーズなど、具象的描写に抽象的構成を組み合わせた彼独自のスタイルを生み出すに至っている。

プティは、区内に在住する重要なアーティストの一人として、区内在住作家展、及び公募展で度々作品の一部を陳列しているが、今回陳列した作品は、彼がここ数年来手掛けてきた「テキストスタイル」シリーズに連なるもので、本展のために制作された新作の数々である。キャンバスの上にプリント布地を貼り、その上に新たな色彩を重ねた装飾的な作品群は暖簾の華麗な色彩の世界と、折り本や版画のモノクロームの世界との対比によってガストン・プティの華麗で豊饒な世界が現出され、入館者の好評を得た。



■特別陳列 ガストン・プティ
24.0×25.0cm B判変形 10P
カラー図版 4P
モノクローム図版 4P
「ガストン・プティの豊饒な世界」
福井泰民
出品目録・作家略歴

特別陳列 久我 修・勝野正則

会期=平成元(1989)年3月7日(土)~21日(日)
会場=2階サロンミュージゼ、特別陳列室

松濤美術館は、毎年、渋谷区在住、在勤者による公募展を開催している。今回、サロンミュージゼにおいて、公募展受賞以後の活躍が特にめざましい若い作家を選び、その作品を陳列した。

久我修は第2回松濤美術館賞を受賞した作家である。独立美術展を中心に作品を発表し続け、昭和63(1988)年には安井賞展にも出品している。彼は自己の世界観と内面を子供の群れ遊ぶ情景に託して表現している特異な作家である。動きを強調したダイナミックな具象絵画である。久我は初期には、鮮やかな色彩のシュールレアリスムの題材を手がけていたが現在は、子供の情景をテーマに、色彩を抑制した動きを伴った遊びが創り出す空間のダイナミズムを表現している。広場で遊ぶ歪んだ顔の子供達は目だけを残して空間に溶け込み、空間の振動と時間の経過を暗示させる異次元世界を示している。日常目にする何の変哲もない風景が、異星人の子供が繰り広げる風景や地球破壊後の風景であるかのように迫ってくる。久我の閉ざされた内的風景であろうか。無邪気で不気味な矛盾した人間性を久我は子供の姿形を借りて透視しているように思える。

勝野正則は第3回公募展優秀賞を受賞している。彼は自由美術や個展を中心に発表を続けてきた。20代の頃は線を主体とした彫刻を制作していたが、現在はハードボードを素材としたレリーフの平面作品を制作している。「奥行きのある窓」シリーズに代表されるような黒を基調とした近年の作品は、ゆるやかな曲線によって区切られた不整形なボードを微妙に高低差をつけて組み合わせ、境界面に落差と凹みと陰影を生じさせることによって、奥行きと多層空間を生み出している。ハードボードを松煙で着色し、暖みのある画肌を感じさせるが、境界線にハンダ技法の金属埋め込み作業を施して、研ぎすまされた硬質感をも加味している。



■特別陳列 久我 修・勝野正則
224.0×25.0cm
B判変形 10P
カラー図版 4P
モノクローム図版 5P
「オオコクノウラニワ・黒の軌跡」
福井泰民
出品目録・作家略歴

特別陳列 磯村敏之

会期=平成2(1990)年2月18日(土)~3月4日(日)
会場=2階サロンミュージゼ

磯村敏之は、昭和2(1927)年6月、愛知県刈谷市に生まれた。

昭和23(1948)年、東京高等師範学校芸能科油絵に入学。画家としての道はここから始まる。その意味で、戦後絵画の潮流の中で活動してきたわけである。1960年代の主体美術創設に参加する前の一時期、抽象表現主義的な作品を残していることは、時代の流れに反応した証とあって良いであろう。その後、他の多くの画家と同様に社会的現実への関心から、ベトナム戦争をテーマにした一連の作品、或いは高度成長経済の中で破壊されてゆく自然などをテーマとした埋立地や工場を画いた作品を残し、安井賞への出品を重ねてもいる。このように、作品の中に社会的現実を写し出していくことは、戦後民主主義の潮流の中で生きて、また直接にかかわってきた証でもあった。高度成長も終わった1980年代に入ると、磯村の画くモチーフは武甲山などの山、伊豆や佐渡などの海、そして、近年は中国西域、欧州あるいはエジプトなどへの活潑な取材に基づく風景、人物に変わっていく。武甲山のシリーズなどには破壊された自然というテーマが生きてはいるものの、より造形的なものの追求という姿勢が顕著になっているように思われる。それは磯村が以前に画いた工場やガスタックにすでにみられる姿勢でもある。磯村の中で、一つの戦後が終わりを告げ、新たな展開をなしつつあると言えるのではあるまいか。

本展では昭和44(1969)年の「埋立地にて」から、近作の「アンダルシアの白い町」までの11点の油彩と4点の素描を陳列し、磯村の画業を顧みた。



■特別陳列 磯村敏之
24.0×25.0cm B版変形 10P
カラー図版 4P
モノクローム図版 4P
「磯村君へ」 森 芳雄
「磯村敏之の風景」 浅野 徹
出品目録・略年譜

特別陳列 橋本コレクション 中国の墨梅画

会期=平成2(1990)年2月18日(土)~3月4日(日)
会場=2階特別陳列室

梅は中国において、百花の魁として寒風霜雪を冒し、清楚な花を開き、芳烈な香気を発する植物として、人々に愛されてきた。漢代、越の使者が一枝の梅を梁王に送ったことをはじめとして多くの故事が伝えられるが、なかでも、宋の隠士林和靖が鶴を飼い、梅を植えて「疎影横斜水清浅、暗香浮动月黄昏」と詠んだことはよく知られるところである。宋代の人はとくに梅を好んだようで、汜正大が梅樹数百本を植えて花村と名付けたりもしている。梅の淡白で幽雅な趣がこの時代の好尚に合致したものといえよう。墨梅図も、宋代の華光和尚、楊補之らにはじまるといい、その後、元に呉鎮、明初に王冕などの大家が出て、以後、現在に至るまで中国絵画、なかでも文人画の主要なジャンルとなった。

梅を画くことを写梅というが、これは、意を以て写すことに要諦があるからである。また、墨梅の画法の上では、根、幹、枝、梗(梅の若い枝)、籜(老幹から上方に一直線に伸びる新芽の枝)、花の六つの要素で成り立ち、それぞれに精通しなくてはならない。本展では、当館に寄託されている国際的にも著名な橋本コレクションの中から、明代より近代までの墨梅図13点を選び陳列した。折しも梅花の咲き誇る季節であり、画家それぞれの技法とともに、画家の梅花に込めた意を覗きただけだと考える。

特別陳列 来舶画人と長崎派

会期=平成2(1990)年3月13日(土)~3月25日(日)
会場=2階特別陳列室

日本と中国との間には、政治・経済・文化のうえで永い交流の歴史があった。17世紀から19世紀にかけての中国清朝の時代、日本は江戸幕府の鎖国体制下にあったが、長崎を窓口にして交流は続けられ、毎年多くの中国商船が中国の文物を舶載して渡来し、商人とともに、僧侶・医師・儒者などの文化人が往来した。

日本の享保年間には、渡来した沈南蘋一派が中国の伝統的花鳥画を伝え、日本の近世絵画に新風を吹き込み、長崎派花鳥画の基を開き、また、中国商人の中には、伊孚九や江稼圃など画技に優れた者がおり、新知識を求めて来崎する日本各地の文人と交わり、日本南画の形成に多大の影響を与えている。

当館では、昭和61(1986)年に「特別展 橋本コレクション 中国の絵画—来舶画人—」と題して、来舶画人の作品による展覧を行い、好評を博したが、本展では、橋本コレクション、谷コレクションの中から、来舶画人と長崎派の画家の作品を選び陳列し、日本近世における日中の絵画交流の軌跡を、作品を比較しつつ顧みた。

特別陳列 遠藤 享・森本潤一

会期=平成3(1991)年2月10日(土)~24日(日)
会場=2階サロンミュージゼ、特別陳列室

この展覧会はグラフィックデザイナーとして活躍し、同時に版画家でもある遠藤享と森本潤一のオフセットによる版画作品を陳列した。遠藤享15点、森本潤一12点の合計27点である。

遠藤享は一貫して〈SPACE&SPACE〉と名付けられたシリーズを制作している。その作品は、空間をダブらせることにより異空間を現出させるものである。物体の重なり、画像のズレ、エッセイ的な空間感などを駆使した虚の世界である。実際には、一旦撮影した壺、卵、果実、電球などの写真を、ポジ/ネガの交互に変換された映像として形のはめ込みによる画像操作で作品に仕上げてゆく。写真となった現実情報の集積として生成され、完成への過程で物体は非物質的な存在へと変容している。

一方、森本潤一は同様に写真を使用しているが、一切映像に手を加えていない。木片を折る、裂く、あるいは塗る、燃やすという行為の後、その木片の集積を再構成する。しかし、その手ざわりや質感を忠実に再現しながらも、物質の実体は消え去りモノクロームに浮遊する形態の集積に変貌する。木片は本来の意味を剥奪され、いわばその脱け殻だけが意味をもち、抽象性のための抽象を演じている。物質に対する行為がこの作品を支えているのである。

あえて、この二人の作家を組み合わせたのはグラフィック・デザイナーである彼らの感性に共通点がおおく見られるためである。両者共に自ら撮影した写真をもとに構成したオフセットによる作品である。そしてなにより、彼らの事物に対する突き放した目差しには、実在の世界をそれにオーバーラップする異次元に移行させる方法論をはらんでいる。



■特別陳列 遠藤 享・森本潤一
24.0×25.0cm B判変形 21P
カラー図版 4P
モノクローム図版 12P
「実体なき物質の言葉」 瀬尾典昭
「破壊からの創造」 前野寿郎
略歴・出品目録

特別陳列 山口 薫

会期=平成3(1991)年3月5日(土)~3月21日(日)
会場=2階サロンミュージゼ、特別陳列室

本展は当館寄託品の中から、山口薫の初期から晩年までの油彩画20点とデッサン10点、リトグラフ4点、合計34点を陳列した。

山口薫は初期の作風である形態の単純化による緊密な画面から、次第にそれぞれの造形要素、直線、曲線、そして色面を抽出する方法に向かう。モチーフは山野風景や鳥、牛などの動物、あるいは身近な事物であるが、抽象でもって画面を構築するようになる。菱形、円形は彼のそうした形象を代表するものである。一種のバズル化された色面は尚且つ具体的に事物と密接な関連を保ちながら生成する。晩年近くになり彼の作風はそれまでの形態のもつ力が弱まり朦朧とした空間が生まれるが、そうしたなかでも彼の造形姿勢は貫かれているといえる。

山口薫は生涯にわたり具象絵画を描き続けたにもかかわらず、根底には造形的な要素による抽象性の追求が見られる。その具象と抽象の間のなかで彼は近代の多くの画家が求めたモダニズムを具現している。そして、“近代化の中に素朴を”という彼の姿勢が、冷たい抽象ではなく豊かな内面世界の表出に向かわせた要因であろう。彼が追求した造形性は、同時代の画家として具象作品の一典型を与えた功績はおおきい。

特別陳列 清原啓一

会期=前期：平成4(1992)年2月9日(日)～23日(日)
後期：平成4(1992)年3月3日(火)～22日(日)
会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

渋谷区在住の洋画家清原啓一は、昭和2(1927)年、富山県砺波市に生まれた。昭和27(1952)年の日展に初入選し、以後日展・光風会を中心に活動を続けている。昭和34(1959)年の日展で「群鶏」が特選を受賞しているが、氏は以後鶏や薔薇といった花鳥画に類するモチーフに精力を注ぐことになる。それまで花鳥画は、伝統的に日本画に多く見られるモチーフであったと言えようが、氏の鶏や薔薇のモチーフの追求は、日本的な世界を取り込むことによって、新しい日本の油彩の世界を拓こうとする大胆な試みであった。力強く綿密な画面構成は西洋の伝統を踏まえたものに違いないが、明るく装飾的な色彩は、日本的感性を表現したものと言って良いだろう。

今回の展覧会は、油彩画全31点を前期・後期の二期に分けて構成した。前期は主に鶏をモチーフとする作品群によって、氏のこれまでの足跡を振り返ることに主眼をおいた。後期は新作中心の構成としたが、山岳風景が数点加えられている点に新たな展開が見られる。故郷富山の山々などを描いたそれらの作品は、花鳥画における成果を踏まえた上で、やはり日本画において長い伝統を持つ山水画の世界に挑む試みといえよう。



■特別陳列 清原啓一
24.0×25.0cm B判変形 112P
カラー図版 11P
参考図版 8P
「清原啓一の世界」 桑原住雄
清原啓一略年譜・出品目録

特別陳列 野島康三とレディス・カメラ・クラブ

会期=平成5(1993)年2月7日(土)～3月21日(日)
会場=サロンミュージーゼ、特別陳列室

野島康三(明治22(1889)年 - 昭和39(1964)年)は、日本近代写真を代表する、すぐれた写真家である。近年その再評価は高まり、平成3年度に当館で開催した特別展「野島康三とその周辺」を機に、広く知られる存在となった。本展は、同展の続編ともいえる展覧であり、野島に関する調査を続けるうちに浮かび上がってきた、戦前の写真表現の知られざる一面を紹介するものである。

レディス・カメラ・クラブ(以下LCC)は、昭和12(1937)年に発足し、昭和14(1939)年には、戦時体制のために自然消滅してしまった、短命な写真同好会であった。野島が顧問格で指導にあたり、新しい高い教育を受けた、比較的裕福な層の女性たちがメンバーであった。当時は営業写真館以外のいわゆる芸術写真家は、職業として成り立たなかったから、彼女たちはプロではない。しかし、現像・焼き付けをこなし、大量の作品制作に没頭したメンバーもいたのである。今日、忘れられていることではあるが、そうした女性の写真表現者たちは、戦前にも、決してめずらしくはなかったのである。本展では、作品の質及び作品の保存・保管状態ともにごくぐれていた、土浦信子と松永(佐藤)田鶴江の二人を中心に、7人のLCCメンバーの作品を紹介した。戦災などのため現存作品が少ないことが悔やまれ、溝口歌子らの重要作家の作品を紹介できなかったが、彼女らの活動の一端をふり返ることはできた。女性の写真表現は写真史からほぼ完全に欠落しているのが現状だが、本展が今後の研究のきっかけとなればと期待している。合わせて展示したのは、野島の当時の作品で、戦後初めて発表されたものばかりである。これらは、野島が被写体に女性たちの近代的な表情を選んだ理由と成果を示してくれた。LCCで交際した女性たちに、野島は新しい時代と新しい写真のあり方を感じ取ったのではないだろうか。躍動的で屈託がなく、純粋な彼女たちは、野島の白樺派的な教養を揺さぶり、きらめく光の繊細な動きを軽やかにとらえた写真へと、導いたように思われる。こうした、野島の別の面を紹介できたのも収穫であった。
なお、展示作品は、すべて当時のプリントである。



■特別陳列
野島康三とレディス・カメラ・クラブ
24.0×25.0cm B5判変形 24P
モノクローム図版 22P
「レディス・カメラ・クラブと
野島の作風の展開」 光田由里

特別陳列 柚木沙弥郎の染色

会期=平成5(1993)年4月7日(火)~5月23日(日)
会場=2階サロンミュゼ、特別陳列室

本展は現代染色界で、型染めの分野で活躍している柚木沙弥郎の染色作品約35点を陳列した。

柚木は大正11(1922)年に東京に生まれ、東大で美学美術史を学んだあと、倉敷の大原美術館に勤めた。そこで、染色家、芹沢銈介の作品と運命的な出会いを持ち、彼に師事して染色の世界へ入っていった。その後、浜田や河井らが活躍した国画会に出品して現在もその中心作家として活躍している。女子美術大学においても教師として指導し、大きな影響力を残している。

柚木の作品は、型紙と防せんのりを使用する型染めの技法によっているが、そのモチーフは具象から抽象まで幅広い展開を示している。人シリーズのような人形を半抽象化したとほけたユーモア感のある作品や鳥を扱ったシリーズがユニークである。

一方、幾何形態や、自然のいぶきや鼓動を感じさせるダイナミックなくり返しパターンの作品にも幅広い斬新な様式をきり開いている。その根底には日本のモチーフだけでなく、インドやアフリカの力強い土俗的なエネルギーと共通した創作意欲が感じられ、現代日本の染色界の新しい一つの分野をめざしている。



■特別陳列 柚木沙弥郎の染色

28.0×21.0cm

A4判変形 20P

カラー図版 17P

「ゆれる・ひろがる・くりかえず

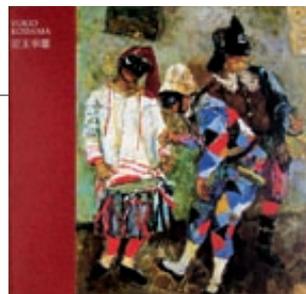
—柚木沙弥郎の染色—」 福井泰民

特別陳列 児玉幸雄

会期=前期：平成6(1994)年2月13日(土)~27日(日)
後期：平成6(1994)年3月8日(土)~21日(日)
会場=2階サロンミュゼ、特別陳列室

児玉幸雄(大正5(1916)年-平成4(1992)年)は異国の風物にこだわり続けた画家である。昭和32(1957)年に渡欧して以来、毎年のようにヨーロッパ各地を廻り、時には中近東やアフリカにも脚を伸ばして題材を求め、精力的な制作を重ねた。多くの日本人画家をはじめ世界中の画家が描いたパリも、児玉が盛んに取りあげた題材であったが、ある文章の中で「いきいきと雑踏する広場の朝市に偶然ぶつかると、思わず快哉を叫びたくなる程の衝動に駆られます」と自ら語っているように、いわゆる名所や旧跡ではなく、庶民の活気あふれる朝市や、そこで生活する名もない人々の生きざまを好んで描いている。単なる異国趣味に終わらぬ人間のありように対する飽くことのない興味と探究心こそが、児玉芸術の核心であったのだろう。

本展は渋谷区に居をかまえて以降の円熟期の油彩画を中心に、晩年盛んに制作した水彩画やリトグラフ(一部展示替えあり)をあわせて構成した。二紀展などに出品した油彩画の大作では、意外なほどに人物が大きな比重を占めており、その構造的な画面構成に特色がある。軽快なタッチの水彩画では、色彩の鮮やかさが印象的であった。



■特別陳列 児玉幸雄

24.0×25.0cm B5判変形 24P

カラー図版 12P

モノクローム図版 7P

「わたしのパリ」 八代修次

特別陳列 西嶋俊親

会期=平成7(1995)年2月12日(日)~26日(日)
会場=2階サロンミュージゼ、特別陳列室

二紀会理事として活躍する西嶋俊親は、東京に生まれ、中学時代より画業を志し、川端画学校に学ぶ。その後、東京美術学校(現・東京藝術大学)に入学、安井曾太郎教室に学び、また、伊藤廉、碓伊之助の指導を受け、以後、具象絵画への道を歩みはじめる。同時に、美術史家山田智三郎の薫陶を受け、ヨーロッパ絵画に対する認識を深めていく。山田には以後30余年にわたり、教えをうけることになる。西嶋の画風の基礎には、学生時代に培った技術と、山田のロココ的絵画教養があるといえる。卒業後は宮本三郎に師事し、昭和32(1957)年の第11回二紀展に初入選。昭和40(1965)年から2年間にフランスに学び、帰国後は、二紀会を主な舞台として、一貫して、安井らに学んだ確固とした写実の技法により、主にイル・ド・フランスをモチーフとして、人間の営みとその悠久さを追究している。作品の題名からも窺われるように、東洋的な自然感が作風の根底にただよっているのも西嶋作品の大きな特徴でもある。

本展では、東京藝術大学時代の作品から近作までの、油彩・水彩あわせて27点を陳列した。本展を通して、その豊かな叙情性あふれる具象絵画の世界にふれられたことと考える。



■特別陳列 西嶋俊親
24.0×25.0cm B5判変形 24P
カラー図版 11P
モノクローム図版 10P
「人間と自然にその悠久を描き50年
—西嶋俊親さんの画業—」
安井収蔵

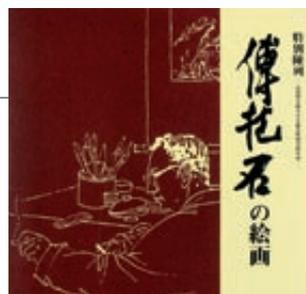
特別陳列 傅抱石の絵画 —武蔵野美術大学美術資料図書館所蔵—

会期=平成7(1995)年3月7日(土)~19日(日)
会場=2階サロンミュージゼ、特別陳列室

傅抱石は、江西省に生まれ、少年時代は陶磁器店で働きながら、独学により書画篆刻をおさめ、その後江西省第一師範学校を卒業、母校の教師を務めていたが、民國22年(1933年・昭和8年)、画家徐悲鴻の推挙を受けて日本に留学、創設間もない帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)に入り、東洋美術史学者金原省吾のもとで美術史、美術理論を、また併せて山口蓬春、川崎小虎、小林巢居に日本画を、清水多嘉示に彫塑を学んだ。金原教授の残した日記には、緻密な指定関係が記されている。また、この留学中には、郭沫若とも親交を結んでいる。昭和9(1934)年に開かれた松阪屋での個展では、横山大観らの絶賛を受けた。民國24年(1935年・昭和10年)に帰国、その後、南京中央大学などの教授をつとめ、多くの著作を著すとともに、後進の指導にあたり、また、江蘇省國画院院長、中国美術協会副主席などの要職に任じられ、北の齊白石とともに「二石」と称された。その作品は、石涛や梅清の研究をもとに、抱石皴と称される独自の皴法を駆使した山水、特に雨景や瀑布を描くに優れ、また、楚辞や赤壁賦などの古典文学に題材をとった人物画は、独自の風格を持ち、中国現代画壇の傑出した存在といえる。

前年に、武蔵野美術大学美術資料図書館で金原教授の御遺族の収蔵品や傅抱石の書簡、金原教授の日記等を併せて陳列され、また、秋には北京の中国美術館で生誕90年を記念しての大規模な回顧展が開催されている。

本展では、武蔵野美術大学美術資料図書館に金原家より寄贈された傅抱石の留日中の絵画24点、書跡2点、印譜1点に当館寄託の橋本コレクションの中の帰国後に描かれた2点の傅抱石作品、及び金原教授が遺された日記、傅抱石の書簡などを併せ陳列し、画家、美術理論家として中国絵画史に偉大な足跡を残した傅抱石の早年の絵画学習の軌跡を探り、同時に金原教授と傅抱石との交情の一端をみた。中国国内での評価にくらべ、日本との関係が密接なのにもかかわらず、日本国内での知名度は高くないのは残念なことであり、今後、大規模な展覧会が開催されることを望んでやまない。



■特別陳列 傅抱石の絵画
24.0×25.0cm A4判 24P
カラー図版 12P
モノクローム図版 4P
「風雨情深六十年」 傅益玉

特別陳列 浜田浜雄 —シュールレアリスムの世界

会期=平成8(1996)年2月4日(土)~25日(日)
会場=2階サロンミューゼ、特別陳列室

本展は、浜田浜雄(大正4(1915)年-平成6(1994)年)の油彩画、写真、デザインなど68点と遺品など関連資料を展示した。

浜田浜雄は昭和前期、日本で急速に浸透したシュールレアリスムの影響を受けた作家である。瀧口修造や詩誌『新領土』の詩人たちとの親交もあり、次々に結成された群小グループの中でもっとも遅い部類になる帝国美術系のグループ「絵画」を結成した。戦争に突入する短い期間のなかで、数は多くないもののきわめて水準の高い作品を発表した。

戦後は、グラフィックデザインに転向し、大辻清司らと「グラフィック集団」を結成し、イラスト、写真なども制作している。

浜田浜雄の作品は東京国立近代美術館に収蔵されている作品のほか、生前、2、3の例外を除いて全く展示公表されることがなかった。79歳で死去した後アトリエにはほとんどの作品が残されており、今回が事実上、初公開であった。

本展を通して、浜田浜雄のシュールレアリスム芸術の全貌を紹介できたことは、仲間であった「絵画」のメンバーのその後もある程度調査が進むとともに、戦時中の幾多の青年画家が経験した困難な時期について一面を紹介できたと思う。



■特別陳列 浜田浜雄
—シュールレアリスムの世界—
29.7×20.9cm 40P
カラー図版 16P
「ダルゴス・ドゥブラッシュ男爵の生涯」 瀬尾典昭
[絵画] 資料 [展覧会記録]
[宣言文] [関連資料]
[作家略年譜]
[グラフィック集団]
資料 [趣意書] [活動記録]
浜田浜雄年譜 出品リスト
[参考図版] [白筆文献]
[関連文献]

特別陳列 谷中安規と料治熊太 『白と黒』の仲間たち

会期=平成8(1996)年3月5日(土)~17日(日)
会場=2階サロンミューゼ、特別陳列室

本展では昭和初頭の版画雑誌『白と黒』に掲載された谷中安規と料治熊太の版画作品を中心に、棟方志功、横井弘三、江南史朗、小川龍彦、川上澄生、前川千帆、平塚運一ら29人の版画の作品69点と料治が刊行した版画雑誌『白と黒』『版幻術』などを展示した。

『白と黒』は日本近代版画の展開において大きな役割をはたした版画雑誌の中で、異例の長きにわたって刊行された重要な雑誌である。編集にあたった料治熊太はまだ無名の谷中安規の才能を見だし援助した人物でもあり、文筆家、編集者として知られており数種の版画雑誌を刊行した。

料治の活動は、広く大衆に普及する版画をめざし、各地の版画家と関係を作りながら版画雑誌の全国的なネットワークをもたらした功績は見逃せない。また、この雑誌を通じて谷中安規、棟方志功など若き俊英を数多く世に出すことになり、料治熊太とそこに集まった版画家たちとの交流を軸に、版画誌の紹介を通して近代版画の足跡と意味を振り返った。



■特別陳列
谷中安規と料治熊太
—「白と黒」の仲間たち—
29.7×21.0cm 40P
カラー図版 8P
「『白と黒』にみる近代版画の大衆化」 瀬尾典昭
料治熊太略歴・主な参考文献
『白と黒』作家一覧・出品リスト

特別陳列 アジアとの出会い —ポルトガル現代絵画

会期=前期：平成9(1997)年2月16日(土)～3月2日(日)
後期：平成9(1997)年3月11日(土)～23日(日)
会場=2階サロンミューゼ、特別陳列室

本展はポルトガルの首都リスボンにある、市立ジナジォギャラリーにより選定されたポルトガルの現代画壇で活躍する13人の大家から中堅、若手の作家の作品44点で構成された。ポルトガルと日本の関係は、古くから16世紀の大航海時代にまで遡る。日本とは最も古く関係がもたれたヨーロッパの国である。

但し、鎖国以後、その緊密な関係は薄らいでいった。そして今日まで、その美術については、殆ど紹介されることがなかった。ポルトガルが政治的に一時独裁体制下にあったこともあり、一部に知られるヨーロッパ現代美術とは断絶も見られるが昭和49(1974)年の革命以後、新たな道を歩んでいることが作品を通して窺われた。

本展はアジア各地を巡回するものであり、日本では、前年にポルトガルとは16世紀に深い繋がりのあった大阪府堺市立博物館で開催され、渋谷区では大使館が区内神宮前にあったことにより開催された。両国の友好、相互理解に多少ながらも貢献しえたと考える。



■特別陳列
Encontro Reunion アジアとの出会い
21.0×29.6cm 37P
カラー図版 26P
二世代のポルトガル人アーティストたち
「堺・東京のジナジォ・ギャラリー」
ジョゼルス・ポルフィリオ
「ポルトガルに於ける造形美術の展望」
ロジェリオリベイロ

特別陳列 区政施行65周年記念 区民所蔵品展

会期=前期：平成10(1998)年2月12日(木)～3月1日(日)
後期：平成10(1998)年3月10日(火)～22日(日)
会場=2階サロンミューゼ、特別陳列室

本展は、区政施行65周年を記念して、区内の学校・法人または個人の所蔵する美術品、工芸品などを陳列したものである。出品作品は、基本的に応募という形をとり、36の機関、個人から応募をいただいた。その内容は、父祖から受け継いだ作品、あるいは、自ら審美眼により収集したものなどさまざまであったが、それぞれに所蔵者の愛着や個性がでており、本展の出品によって、誰の作品か分かり喜んでいただいたものもあった。まだ他にも埋もれたコレクションというものがあるのであろう。



■特別陳列
区政施行65周年記念
区民所蔵品展
25.3×25.3cm 36P
カラー図版 32P
出品目録

特別陳列 日本ペルー国交125周年・移民の100周年記念展 陶芸にみるアンデスの造形美

会期=前期：平成11(1999)年2月12日(金)～28日(日)

後期：平成11(1999)年3月9日(火)～21日(日)

会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

共催=駐日ペルー大使館

渋谷区にはペルー大使館が設置されている。平成11(1999)年は、区内にペルー大使館が設置されて、ちょうど25周年を迎える記念すべき年である。更に本年は、ペルーに日本からの移民が行われて100年目に当たる年でもある。ペルー共和国は最初に日本人を受け入れてくれた国として知られている。又、前年の平成10(1998)年は日本とペルーが国交を樹立して125年目でもあった。

本展はこれらを記念して、長い歴史を有するペルー国の古代の陶器を中心とした展覧会を開催したものである。ペルーは海岸部の砂漠地帯、中央アンデスの山岳地帯、東部のアマゾン平原地帯と大変複雑な地形、風土を形成している。これらの地は豊かな自然と動植物の宝庫としても知られており、本展では60数点のペルーの動植物の写真パネルの展示も合わせて行った。

またペルー大使館の協力を得て、ペルー国立博物館所蔵のアンデスの古代土器17点など総計43点の土器に加えて、古代染織品3点を展示した。

アンデスの人々や、かえるなど動植物をモチーフとした土器製品の造形はまことに素朴で力強く変化に富み、古代の人々のくもりのないナイーブな感情を率直に表現したものである。

これらの陶芸品と動植物の写真を組み合わせた本展によって、ペルー共和国への新たな認識が更に深められ、今後の友好関係発展の一つの契機となったと思われる。



■日本ペルー国交125周年・
移民100周年記念展
陶芸にみるアンデスの造形美

24.0×25.0cm 46P

カラー図版 36P

「古代ペルーの文明と美術」 増田義郎

古代アンデス文明・ペルー共和国年表・

中央アンデスの主要遺跡・

作品リスト

特別陳列

川本喜八郎展 人形のドラマ・半世紀の軌道 (前期：三国志の世界、後期：平家物語の世界)

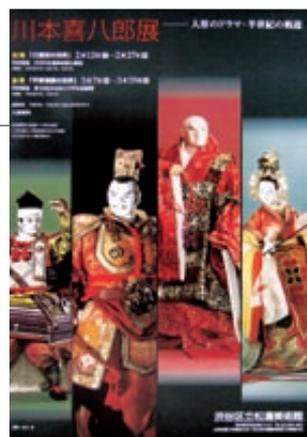
会期=前期：平成12(2000)年2月12日(土)～27日(日)

後期：平成12(2000)年3月7日(土)～19日(日)

会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

渋谷区に生まれ、現在も区内にアトリエを構える人形美術家川本喜八郎は、NHKで放映された人形劇「三国志」と「平家物語」の人形美術を担当し、劇中人物の個性を生き生きと表現した人形作品によって高い評価を得る。その表現は能面や文楽人形などの古典作品についての深い造詣と、日頃の緻密な人間観察に基づいていた。また、人形をコマ撮りして映画を製作する人形アニメーションの第一人者としても知られ、その芸術性の高さは、数々の受賞が証している。

今回の展示では、「三国志」の世界(前期)と、「平家物語」の世界(後期)をそれぞれ構成する人形群像(各40体)を中心に、氏が心血をそそいだ人形アニメーションの紹介(人形15体)もまじえて、人形制作50年の歩みを振り返った。



特別陳列 榎コレクション 口もととあかりの浮世絵

会期=前期：平成13(2001)年2月13日(火)～25日(日)
後期：平成13(2001)年3月6日(火)～20日(火)
会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

渋谷区に在住しておられた故榎恵氏は様々な分野のコレクターとして知られるが、中でも古い灯火具とその浮世絵と、歯に関する浮世絵のコレクションは、特筆すべき質と量を備えている。既に明治期のランプのコレクションについては、当美術館において「明治文学とランプ」(昭和58(1983)年)という特別展で紹介したが、そのコレクションは国立歴史民俗博物館に納められ、明かりに関わる浮世絵の一部は日本のあかり博物館に寄贈されている。

今回の展示では、歯科医師であった氏がもっとも精力を傾けて収集した歯に関わる浮世絵のコレクションを中心に、明かりに関わる浮世絵も加えて、特色ある視点から選ばれた個性的な浮世絵作品を紹介したが、女性の口元のしぐさや、何気ない日常の灯火具に向けられた江戸庶民の細やかな感性をうかがうことができた。お歯黒道具一式や貴重な灯火具も合わせて展示され、好評を得た。



■特別陳列 榎コレクション
口もととあかりの浮世絵
24.0×25.0cm 24P
カラー図版 19P
「私のコレクション
浮世絵 一歯に関する一」 榎恵
「生活美の夢追い人榎恵の世界」
田中延佳
榎恵略歴・出品日歴

特別陳列 新収蔵品展

会期=前期：平成14(2002)年2月12日(火)～24日(日)
後期：平成14(2002)年3月5日(火)～17日(日)
会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

特別陳列 渋谷区制70周年記念 岸田麗子展 [麗子像]以後を生きる

会期=平成14(2002)年9月24日(火)～10月6日(日)
会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

渋谷区制70周年を記念する展覧会として、渋谷区に生まれた岸田麗子をとり上げた。岸田麗子は、日本近代を代表する著名な画家・岸田劉生の長女として大正3(1914)年渋谷区山谷に生まれた。彼女がモデルを務めた、劉生の数々の「麗子像」は、広く知られ、親しまれているが、麗子その人についてはこれまでほとんど知られることはなかった。

劉生の画室でモデルを務めながら、麗子は父から多くを学び、無心に絵を描き始めた。幼い麗子の描画は、劉生の著書「図書教育論—我子への図書教育—」(大正14(1925)年)で詳しく論じられており、そこに収められた描画は、現在東京国立近代美術館に所蔵されている。

しかし劉生は昭和4(1929)年に急逝し、麗子は父であり絵の師でもあった大きな存在を失う。傷心の麗子は父の親友だった武者小路実篤を慕い、「新しき村」の活動を知って演劇部に入り、女優として活躍するようになった。かたわら喫茶店を開き、また絵を描き続けて、自分の道を求めようと努力を続けた。

結婚して和歌山に移り住み、三人の子の母として終戦を迎えた麗子は、これまでの絵画作品の多くを戦災で失ってしまう。しかし再び上京し、生活を整えるべく奮闘し、昭和25(1950)年頃から絵画制作に打ち込み、再び舞台に立つとともに、執筆活動にも精力を注いだ。長年の念願をかなえて著書「父 岸田劉生」(昭和37(1962)年)をようやく上梓したとき、麗子は急逝しなくてはならなかった。

没後40周年にあたり、知られざる岸田麗子の油彩画、日本画、出版物に写真や資料を加え、初めてその生涯を回顧した。



■特別陳列 渋谷区制70周年記念
岸田麗子展—「麗子像」以後を生きる
24.0×25.2cm 全26P
カラー図版 16P
「麗子48年を生きる
—岸田麗子展にあたって」 岸田夏子
主要執筆文献・略年譜・出品リスト

特別陳列 2003日本におけるトルコ年

アイドゥン・ドアン財団 国際漫画コンクール展

会期=平成15(2003)年2月12日(水)~23日(日)

会場=2階サロンミューゼ、特別陳列室

主催=渋谷区立松濤美術館、駐日トルコ共和国大使館、アイドゥン・ドアン財団

企画=THE TURKISH TRADING

協力=FECCO・JAPAN

渋谷区とトルコ共和国は、その駐日大使館が区内にあることから、これまでお互いに交流を深め、友好関係を築いてきた。トルコは、本年を「日本におけるトルコ年」として位置づけ、様々な行事の開催を通じて文化・社会を我が国に紹介し友好を深めている。この「日本におけるトルコ年」の一貫として、渋谷区立松濤美術館では「アイドゥン・ドアン財団 国際漫画コンクール展」を開催することになった。

「アイドゥン・ドアン財団 国際漫画コンクール展」は、各国から応募される国際規模のコンクールであり、すでに19回を重ね、その内容において高い評価を得ている。私たち日本人にとって「漫画」というと少しイメージが掴みにくいが、このコンクールに出品される「漫画」はコマで表現されるいわゆる風刺画というジャンルのものである。社会や政治などをユーモアと鋭いセンスで痛烈に風刺する。そうした一つの画面で完結する密度の高い世界を持っている。トルコ並びに東欧諸国では風刺画にたいする関心が非常に高く、したがって、これらの作品は多彩な技法に裏付けられた芸術表現としても極めて質の高いものであると言える。

この展覧会は、まず最初にトルコ国内で開催され各国を巡回する展覧会の一環である。今回はとくに「テロリズム」というテーマが設けられており、中東地域での緊張した情勢をはらんだタイムリーで今日的な状況を表現するには格好の題材であった。いまなおアフガニスタン戦争後の収束状況がはっきりとせず、そしてイラク戦争が勃発しようとしていたまさにその時にあたって、この「テロリズム」という題材はいっそう私たちに率直に訴えかけるものだったようだ。



■特別陳列

2003年日本におけるトルコ年

アイドゥン・ドアン財団

国際漫画コンクール展

24.0×25.1cm 全32P

カラー図版 28P

あいさつ—駐日トルコ大使館、

アイドゥン・ドアン、

オルハル・ビルギット

特別陳列 2003日本におけるトルコ年 トルコ中央銀行 コレクション展

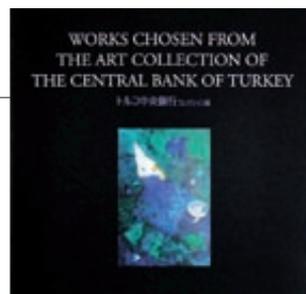
会期=平成15(2003)年3月4日(火)~16日(日)
会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室
共催=駐日トルコ共和国大使館、トルコ共和国中央銀行
協力=(株)朝日アートコミュニケーション

「2003日本におけるトルコ年」を記念して、区内に大使館があるということもあり松濤美術館では、3つのトルコ展を行う。本展は、トルコ共和国中央銀行の協力を得て行う第二弾展である。日本の日本銀行にあたるトルコ共和国中央銀行の絵画コレクションは、トルコ政府関連施設のコレクションのなかでも、傑出した地位を占めている。収集された作品の多様性、質の高さ、そして現代性といった点から見て、美術館に勝るとも劣らないレベルの高いコレクションといえる。

1923年に建国されたトルコ共和国の共和主義的理想と、文化としての芸術に関わる方針に従って、芸術家を支援し、その創作活動を奨励することを目的に、収集が開始された。共和国が派遣した最初の留学生23人中、5人も画家が含まれていたことは、共和国が芸術面からの近代化を重要視していたことが窺いしれる。以後、コレクションは増えつづけ、今日のような多様性に富み、時代の最先端を取りこんだコレクションを形成するに至っている。

トルコ絵画は、伝統的な細密画(ミニチュール)や、テズヒップ(コーランの一節を書いた文字の装飾絵画)やマープリングといった絵画の伝統を持っているが、オスマン・トルコ帝国後期から西欧への関心が高まり、共和国の派遣留学生などによって、それまでの伝統を覆す、西欧絵画に追従した絵画が制作されるようになる。最初期には、アリ・サミ・バヤールら西欧へいち早く行く機会があった軍人作家らが中心に活躍する。初めて迅速な筆法をトルコに持ち込んだイブラヒム・チャルらいわゆる第三世代の作家によって転換期を迎え、ようやくトルコの近代絵画が、西欧からの真似事から独自の発展を開始する真の意味での葛藤が始まる。本展は、中央銀行の芸術顧問であり、トルコで現在最も活躍する作家の一人であるハリル・アクデニズ博士の監修のもと、出品が実現した。33点という少ない点数ながらチャルまでの近代絵画の曙光に活躍した作家を丁寧に展覧し、かつ現在にいたる代表的な作家の作品を網羅した展示となった。日本では展覧会はおろか、出版物においてもほとんど紹介されたことのないトルコの近代絵画の歴史を概観する貴重な機会となり、明治期から友好関係を続けるトルコの現在の芸術に対する関心を高める良い機会となったのではないと思われる。

なお、本展は友好展により、入館無料であった。



■特別陳列
2003日本におけるトルコ年
トルコ中央銀行コレクション展
24.0×25.1cm 全24P
カラー図版 20P
「2003日本におけるトルコ年
「トルコ中央銀行
コレクション展」によせて」
ハリル・アクデニズ
作品リスト

特別陳列 ジャワ島・スマトラ島の染織 福岡市美術館所蔵 エイコ・クスマ・コレクションより

会期=平成15(2003)年7月29日(火)~9月7日(日)
会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

インドネシア、ジャカルタ在住の元日本人・エイコ・アドナン・クスマ氏は、長年住むことになったインドネシアの国に貢献したいと、染織品の収集を思い立ち、個人の方で膨大なコレクションを作り上げた。そのすぐれたコレクションのなかから、インドネシアの染織文化を二部構成で紹介する展覧会である。

第一部は、福岡市美術館からの巡回展で、インドネシアの島々を広く網羅する、75点の地方色豊かな木綿の染織品を展示した。スンバ島、フローレス島、中ティモール、スラウエシ島、カリマンタン州などから、経緋、藍染、綴れ織、刺繍、ろうけつ染めなど、多彩な技法と、幾何学模様、動物、植物紋などの数々の模様バリエーションが見られる。これらは日用着のほか、儀式用の布などに用いられた。

第二部は同館の所蔵品になったエイコ・クスマ・コレクションから、スマトラ島とジャワ島の、二島の原産による染織品37点を展覧した。カタログも二部構成とした。

特別陳列

村林 忠 写真展 1932—1987

会期=前期：平成16(2004)年2月8日(日)～22日(日)

後期：平成16(2004)年3月2日(火)～14日(日)

会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

村林忠(明治36(1903)年-昭和53(1978)年)は、まだ広く知られてはいませんが、写真に対する高い志と類まれなる技術力をもった写真家だった。村林家ご遺族は、これまで当館で開催してきた「写真芸術の時代」(平成10(1998)年)、「石田喜一郎とシドニーカメラサークル」(平成14(2002)年)の調査に協力していただいた関係者で、福原信三のプリンターとして戦前に親しく福原に師事した村林忠その人の作品の調査を始めた機縁もそこにあった。戦前に渋谷区在住だった村林を、渋谷区ゆかりの作家として紹介し、この作家の初めての総合的な展覧を開催することができた。

銀塩写真の制作技術は、いまや衰退または消滅の危機にある。村林の銀塩写真プリントは、技術的にも表現力においてもきわめて高い水準にあり、今日、その作品の存在意義は高まっている。出品したプリントの展示効果には特筆すべきものがあった。また、生涯を通じて遮光の風景を撮影し、ことに戦後の工業地帯の開発風景をとらえた一連の作品は、高度成長期に向かう日本の原風景ともいえる叙情性と現代的でシャープな造形性を備えており、この時期の日本の風景写真を代表するものといつてよい。無料入館時期の、地味な展覧であったにもかかわらず、好評であった。今後の再評価を期待したい。

なお、本展出品作はご遺族からの寄贈を受け、当館所蔵品となった。



■特別陳列 村林 忠写真展 1932-1987

239×24.5cm 全22P

ダブルトーン図版 18P

「村林忠 遮光の写真」 光田由里

村林忠略年譜

掲載作品リスト

特別陳列 日韓現代メタルアート

ジュエリーとオブジェのパレット

会期=前期：平成17(2005)年2月12日(土)～27日(日)

後期：平成17(2005)年3月7日(土)～20日(日)

会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

企画協力=玉井祥子

日本と韓国は、ともに金属工芸の輝かしい歴史を持っている。とりわけ三国時代の古墳から出土した金製の冠に代表される、古代朝鮮半島の金工の素晴らしさはよく知られている。日本の金工は朝鮮半島からの技術者を迎え入れることによって発展したが、日本独自の文化が成熟した江戸時代には、刀装具や装身具などの細かな細工にめざましい洗練を見せ、世界にもまれな技術的達成をみた。

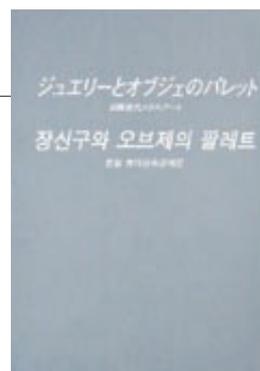
近代になると職人的な技術に支えられてきた日本の金工は転機を迎え、より芸術的な表現を目指して試行錯誤を始めたが、日本による植民地支配という苦難の時代を迎えた韓国は、金工の技術も衰退を余儀なくされてしまう。しかし戦後はその復興に努力して、現在ではかつての栄光を取り戻しつつある。

日韓両国の金工は現在世界的なレベルにあるが、留学生の交換などを通じて今後もお互いに高めあい、良きライバルとして、これからの世界の金工をリードしていくであろう。この展覧会は、日韓両国の若手アーティストから注目される10人を選び、両国の金工の現在を紹介しよう試みた。

招待作家/日本側：平岩共代、平松宏造、水野誠子、篠原行雄、周防絵美子

韓国側：ジョン ヨンイル、キム ビョンチャン、イ クワンソン、

ナム ホワキョン、ペク キョンチャン



■特別陳列 日韓現代メタルアート ジュエリーとオブジェのパレット

256×18.2cm 全40P

カラー図版 20P

「日韓現代メタルアート展に寄せて
一日韓の金工の流れ」

矢島 新

「日本のメタルアートの現在」

平松保城

「韓国のメタルアートと

ジュエリーの現在」

ジョン・ヨンイル

(作家略歴)

特別陳列 むさしの 東松友一の写真

会期=前期：平成18(2006)年2月12日(土)～26日(日)
後期：平成18(2006)年3月6日(土)～26日(日)
会場=2階サロンミュージゼ、特別陳列室

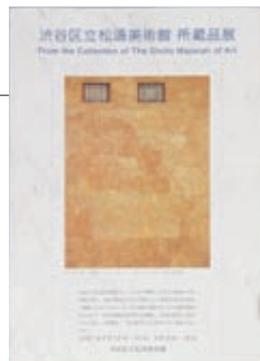
東松友一は武蔵野の自然に魅せられた写真家である。昭和36(1961)年に武蔵野を紹介した新聞コラムに触発されて、朝霞の平林寺に行きその雑木林を撮影した。以降、独学で撮影技術を習得し、狭山、所沢、毛呂山、新座など、国木田独歩が愛でた武蔵野の原風景が広がる東京周辺にその風景を求めた。里山といわれる、よく手入れされたコナラ、クヌギの林の中に分け入り、早朝や夕暮れの空気感を大切に撮影したその写真は、見るものをして清涼な一服のひとときを与える。失われて行くであろうこうした貴重な自然と人間の営みを、よく残している長年の活動には敬意を表したい。



■特別陳列
むさしの 東松友一の写真
24.0×25.0cm 全24P
カラー図版 20P
「むさしの」東松友一
東松友一略歴
目録

特別陳列 渋谷区立松濤美術館 所蔵品展

会期=前期：平成19(2007)年2月10日(土)～25日(日)
後期：平成19(2007)年3月3日(土)～18日(日)
会場=2階サロンミュージゼ、特別陳列室



特別陳列 岩井 敏写真展 マスケラの夢 —ヴェネツィア—

会期=前期：平成20(2008)年2月10日(日)～24日(日)
後期：平成20(2008)年3月1日(土)～16日(日)
会場=2階サロンミュージゼ、特別陳列室

「この世にベネチアやパリがあるというのに、人はどうしてニューヨークなんかに住めるのだろうか」とヘミングウェイは述べている。そのヴェネツィアで毎年2月に開かれるのがカーニバルである。カーニバルといえば賑やかなイメージを抱くが、ヴェネツィアのそれは幻想的という形容がふさわしい。人々は中世風の衣装をまとい、パウッタという仮面を着けて、町のあちこちを思い思いに練り歩く。仮面を着けるようになったのは、カーニバルの期間だけでも身分の垣根を超えて交流を持とうとしたためであり、また、中世に仮面劇「コメディア・デル・アルテ」が一世を風靡し、町のあちこちで上演され、仮面職人という職業もあったことなどから、今に伝えられるところの妖艶なカーニバルとなっていたのである。

渋谷区在住の岩井敏氏は、このカーニバルに魅せられ、毎年このカーニバルに参加し、祭りの様子、多くの仮面をつけた人々を写し続けてきた。本展では多くの作品の中から約50点を選び陳列した。



■特別陳列 岩井 敏写真展
マスケラの夢 —ヴェネツィア—
23.9×24.9cm 全24P
カラー図版 22P
「写真展の開催にあたり」岩井 敏
岩井敏略歴

特別陳列

とよた真帆 絵ときもの展 すべての季、すべての宙

会期=前期：平成21(2009)年2月8日(日)～22日(日)

後期：平成21(2009)年2月28日(土)～15日(日)

会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

女優として活躍しているとよた真帆氏の、フェルトペンやパステルの絵画、エナメルで描いたガラス器および彼女がデザインした友禅の着物、西陣唐織の帯、扇子など、様々な技法で制作した60点ほどの作品を展示した。

アートの本質に迫ろうとする道筋はひとそれぞれであるが、大雑把にあって、アカデミックな教育を受けた場合は、もちろん遅速の差はあるが、一段ずつ階段を昇るようなものである。一方で、これを通らない一部の人のなかには、アートの本質に一足飛びに突っ込んでゆこうとする場合がある。とくに、近代以降では手技の巧拙が直接アートの本質に結びつかない傾向にある。

とよた真帆氏の場合、ポップな色彩や簡略な形態の様からは、現代的に翻訳した花鳥画の世界を思わせる。しかしその実、現実を描いているわけではないし、再現をしようとするのでもない。ある種、シュルレアリスムで言うオートマティスム的な心象の表出である。彼女の制作は難しいことはない。感覚のままに、描けばよい。ただ肝心なのは、本人がそれをコントロールするすべを知っているかどうかだ。彼女ならではの、この軽やかな感性や美意識、その心象風景が見る人々にどのように受けとられたのか興味あるところである。



■特別陳列
とよた真帆 絵ときもの展
すべての季(とき)、
すべての宙(くら)
22.9×18.2cm 全48P
カラー図版 43P
出品作品

特別陳列

魚住誠一写真展 ブロムオイルの美学 1920's - 1930's

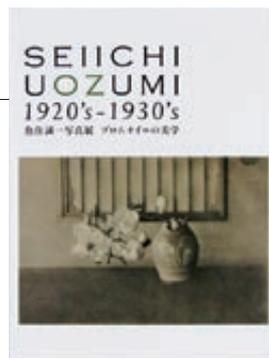
会期=前期：平成22(2010)年2月7日(日)～21日(日)

後期：平成22(2010)年2月27日(土)～3月14日(日)

会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

魚住誠一は明治27(1894)年に三重県松阪市に生まれ、独学で写真を学んだ写真作家で、一般にはほとんど知られていない。1920年代から東京写真研究会など公募展で作品を発表し、数多くの受賞歴がある。大正14(1925)年から数度の中国旅行を行っており、その際に撮影された写真作品は、ほかに類例がほとんどなく、大変貴重であろう。書、篆刻、俳句の素養があった魚住は、彼独自の美学と丁寧な技術でたいへん上品なブロムオイルプリント(顔料を使う手作業の写真印画)を制作していたのである。

渋谷区立松濤美術館では、日本の近代写真の展覧会を平成3(1991)年から継続的に開催し、調査研究およびカタログ制作を続けてきたが、本展もその一環に位置付けられる。ご遺族が当館での写真展覧会にご来場いただいた際、この作家の作品が大切に保管されていることを教えられ、作品および関連資料を当館に寄託していただいたことが本展開催の経緯である。本展で作成した小冊子のカタログが、現在ではほぼ唯一の魚住文献となっている。



■特別陳列
魚住誠一写真展
ブロムオイルの美学 1920's-1930's
25.7×19.2cm 全33P
カラー図版 28P
「魚住誠一略歴」
「魚住誠一の写真
ブロムオイルの美学」
光田由里
掲載リスト

特別陳列

エキレキリエブルアート展 色のシンフォニー

会期=平成22(2010)年7月13日(火)～8月1日(日)

会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

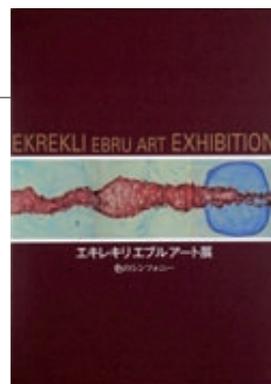
後援=駐日トルコ大使館

協力=エブルアート東京

トルコ共和国の駐日大使館が当区にあり、渋谷区と同国はこれまでもお互いに交流を深めている。「トルコにおける日本年」を記念して「エキレキリエブルアート 色のシンフォニー」展を開催した。

エブルとはトルコ・ペーパー、マーブリングとも呼ばれ、水面に描いた模様を紙や布に写し取る紙装飾美術である。9世紀頃の中央アジアで生まれオスマントルコ時代に盛んになり、現代トルコを代表する伝統美術のひとつでもある。本展は作家であるエキレキリ兄妹による約70点の作品を展示したものである。水模様に映し出された色彩のシンフォニーの、見事な技と芸術をご紹介した。

東西文化の交流地点であり、華麗なる歴史の足跡を色濃く残すトルコの、いまなお続く伝統を紹介し、現代トルコへの理解を深める事の一助となっていたら喜ばしい。



■特別陳列
エキレキリエブルアート展
色のシンフォニー
29.8×21.0cm 全72P
カラー図版 62P
エブルについて
アトリエエブルハウス東京
出品リスト

松濤美術館 30年の記録

会期=平成22(2010)年7月13日(火)～8月1日(日)

会場=地下1階主陳列室

開館以来30年間の展覧会のポスターとカタログを展示した。

特別陳列

平成23年所蔵品展 渋谷区立松濤美術館 所蔵品展

会期=平成23(2011)年2月6日(日)～20日(日)

会場=2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

渋谷区立松濤美術館では、これまで開催してきた企画展などの活動に際し、関係者の方々のご厚意により貴重な美術作品をご寄贈いただいていた。平成23(2011)年10月に開館30周年を迎えることとなった。寄贈作品は1482点(平成22(2010)年12月現在)になり、当館の30年間の活動を反映した内容となっている。ご寄贈者、ご協力者の方々に改めて深く感謝申し上げます。

「対 つい」といえば、靴などのように二つで一組のもの、同種類の一組、双子のようによく似た一対の人や物、あるいは、お互いがいなければ生命をつないでいけない関係など、何かの法則において対をなすもの、という意味を思い浮かべる。同時に「対」は「たい」とも読み、同種のものだけでなく、むしろ異種のもの同士が向かい合う状態や状況に使われることが多い。今回はこの「つい」と「たい」をキーワードに、二人ないし二つあるはいくつかのものが、お互いに在って成り立っている場面を描いている作品を所蔵品の中から選び、陳列した。これらの作品を通して私たちのまわりに当たりまえのようにある、あるいはおかれている状況が、緊張をはらみつつ、厳しくもかけがえのないものであることを、感じていただけたと思う。

併せて2010年度に新たに収蔵された、当財団理事長・黒柳勝太郎氏から寄贈された作品8点と寄託作品2点を展示した。



渋谷ゆかりの美術と作家

当館の活動方針の大きな柱のひとつに、渋谷ゆかりの美術と作家の顕彰という方針がある。開館から30年の間にその理念にもとづき多彩な企画を催してきた。

開館記念展は、当区西原在住の画家森芳雄の回顧展である。同時併催の菱田春草は、代々木で没した渋谷の象徴とも言える近代日本画家である。ほかにも、回顧展形式で開催されたゆかりの美術家の展覧会は多い。特別展では評価の高い物故作家を取り上げることが多かったが、5周年記念で開いた堀内正和は長年原宿に住んでいた彫刻家であり、會田雄亮、石踊達哉、清原啓一ら現役の作家を開催することもままあった。

開館当初から「渋谷区在住作家の作品」と題してゆかりの作家を紹介していたが、それを小企画の個展形式にスケールアップしたのが、「特別陳列」である。これには多くの場合、現役の作家に展覧会をお願いすることが多かった。

また、鍋島焼に代表される渋谷にゆかりの美術、さらに区内在住者所蔵のコレクション展を開催することも多かった。これらのコレクターは何れも長年かけて美術品を蒐集されてきた方々で、快く展覧会として提供していただいた。なかには、松濤で戸栗美術館として展示されている戸栗コレクションを、一般に公開するまえに展観することもあった。

一方、渋谷区は多数の大使館、領事館を有する土地柄である。それに因んで各国との交流展も開かれた。とくに渋谷区とパリ六区との交流事業は数年に亘って継続されたもので、六区の協力のもとに、3回に亘って彼地の美術館博物館から借用した美術品、工芸品の展観がなされ大きな反響があった。また、ポルトガル、ペルー、トルコとは大使館の協力のもと、日項目にすることのなかった国々の美術品の展観へと発展したものである。

ゆかりの美術家

1. 開館記念特別展 森芳雄、開館記念特別陳列 菱田春草(担当:近藤秀実、瀬尾典昭)
8. 特別展 山口薫(担当:瀬尾典昭)
14. 特別展 山脇洋二 金工の世界(担当:近藤秀実)
24. 開館5周年記念特別展 堀内正和(担当:福井泰民)
45. 特別展 海老原喜之助 その生涯と作品(担当:瀬尾典昭)
53. 特別展 生誕百年 中川紀元(担当:光田由里)
79. 特別展 山口蓬春 新日本画への軌跡(担当:瀬尾典昭)
84. 特別展 児島善三郎 日本的油彩画の創造者(担当:福井泰民)
119. 特別展 會田雄亮展 変貌する陶土 練込・陶壁・モニュメント(担当:味岡義人、谷 亜紀)
126. 特別展 ISHIODORI SHOWCASE 石踊達哉展(担当:谷 亜紀)
128. 特別展 清原啓一 遊鶏の賦(担当:瀬尾典昭)
129. 特別展 大辻清司の写真 出会いとコラボレーション(担当:光田由里)
134. 特別展 大正の鬼才 河野通勢 新発見作品を中心に(担当:瀬尾典昭)
141. 特別展 没後90年 村山槐多 ガランスの悦楽(担当:瀬尾典昭)
146. 開館30周年記念特別展 牛島憲之 至高なる静謐(担当:味岡義人)

特別陳列 伊藤隆康(担当:味岡義人)

受贈記念特別陳列 村田勝四郎の彫刻(担当:瀬尾典昭)

特別陳列 大久保泰(担当:福井泰民)

- 特別陳列 脇田愛二郎(担当:福井泰民)
- 特別陳列 近岡善次郎(担当:浅沼桂子)
- 特別陳列 大正の詩人画家 富永太郎(担当:味岡義人)
- 特別陳列 ガストン・プティ (担当:福井泰民)
- 特別陳列 久我修・勝野正則(担当:福井泰民)
- 特別陳列 遠藤享・森本潤一(担当:瀬尾典昭)
- 特別陳列 清原啓一(担当:矢島 新)
- 特別陳列 柚木沙弥郎の染色(担当:福井泰民)
- 特別陳列 児玉幸雄(担当:味岡義人)
- 特別陳列 西嶋俊親(担当:味岡義人)
- 特別陳列 浜田浜雄 シュールレアリスムの世界(担当:瀬尾典昭)
- 特別陳列 川本喜八郎 人形のドラマ・半世紀の軌道(担当:矢島 新)
- 特別陳列 むさしの 東松友一の写真(担当:瀬尾典昭)
- 特別陳列 岩井敏写真展 マスケラの夢 ―ヴェネツィア(担当:味岡義人)

ゆかりの美術・コレクション展

- 2. 特別展 鍋島(担当:近藤秀実、瀬尾典昭)
- 9. 特別展 台湾高砂族の服飾 瀬川コレクション(担当:福井泰民)
- 10. 特別展 明治文学とランプ 榎コレクションを中心に(担当:味岡義人)
- 15. 特別展 戸栗コレクション 有田の染付と色絵 伊万里・柿右衛門・鍋島(担当:味岡義人)
- 25. 特別展 伊東コレクション 古玩の世界(担当:浅沼桂子)
- 特別陳列 榎コレクション 口もととあかりの浮世絵(担当:矢島 新)

国際交流展

- 19. 渋谷区・パリ市六区文化交流協定成立記念特別展 パリ市六区の三美術館所蔵
エベール・ドラクローワ・ザッキン エベールの絵画初公開(担当:福井泰民)
- 39. 渋谷区・パリ六区文化交流特別展 パリ国立高等美術学校所蔵 19世紀ローマ賞絵画(担当:瀬尾典昭)
- 64. 特別展 渋谷区・パリ市六区文化交流特別展 フランス国立貨幣博物館(担当:福井泰民)
- 110. 特別展 トルコ共和国文化省 現代絵画展 工芸とイズニックタイル展(担当:谷 亜紀)
- 特別陳列 アジアとの出会い ポルトガル現代絵画(担当:味岡義人)
- 日本ペルー国交125周年・移民100周年記念展 陶芸にみるアンデスの造形美(担当:福井泰民)
- 特別陳列 2003日本におけるトルコ年 アイドゥン・ドアン財団 国際漫画コンクール展(担当:瀬尾典昭)
- 特別陳列 2003日本におけるトルコ年 トルコ中央銀行コレクション展(担当:谷 亜紀)

区制記念展

区政施行65周年記念 区民所蔵品展

- 104. 特別展 渋谷区制70周年記念 友好都市ゆかりの美術展 黒田清輝・東郷青児・菱田春草・郷倉和子など
(担当:谷 亜紀)
- 特別陳列 渋谷区制70周年記念 岸田麗子展「麗子像」以後を生きる(担当:光田由里)

松濤美術館公募展

1983

会期=昭和57(1982)年2月22日(火)~3月6日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 清原啓一(洋画家)
桑原住雄(武蔵野美術大学教授)
児玉幸雄(洋画家)堀内正和(彫刻家)
八代修次(慶応義塾大学教授)

受賞内容
松濤美術館賞 《TÊTED'ÉPINGLE》
(針の頭) ガストン・ブティ
優秀賞 《子供の領分: 囚》 久我修、
《原宿店景》 荒井朝吉
佳作賞 《家族》 稲垣正敏、
《月見酒》 林美紀子、
《緑色の帽子》 油絵 井上康代、
《シャツ》 版画 菊地靖子、
《鏡獅子》 日本画 橋本とえ

応募・審査状況

1. 応募者・応募作品総数 / 150人・254点
2. 入選者・入選作品総数 / 109人・115点
(内訳 / 在住 109人 在勤・在学0人)



(大賞作品)

1984

会期=昭和59(1984)年2月19日(日)~3月4日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 大久保泰(洋画家)
清原啓一(洋画家)
桑原住雄(武蔵野美術大学教授)
児玉幸雄(洋画家) / 堀内正和(彫刻家)
八代修次(慶応義塾大学教授)

受賞内容
松濤美術館賞
《子供の領分(鏡)》
久我修
優秀賞 《テントのある風景》 橋本純夫、
《星の小屋》 有賀忍、《親子》 小笠原春子
佳作賞 《座像》 井ヶ田三郎、
《工場の煙》 寺山よしみ、
《before3o'clockP.M.》 林美智子、
《少女》 大村寿美子

応募・審査状況

1. 応募者・応募作品総数 / 172人・276点
2. 入選者・入選作品総数 / 87人・100点
(内訳 / 在住 87人 在勤・在学0人)



(大賞作品)

1985

会期=昭和60(1985)年3月3日(日)~17日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 大久保泰(洋画家)
清原啓一(洋画家)
桑原住雄(武蔵野美術大学教授)
児玉幸雄(洋画家) / 堀内正和(彫刻家)
八代修次(慶応義塾大学教授)

受賞内容
松濤美術館賞 《畑とリンゴ》 藤岡篤
優秀賞 《四本足風景》 勝野正則、
《赤い屋根》 成田慎司
佳作賞 《絆》I 内田信、
《裸婦》 伊東賢、
《黄い倉庫》 橋本純夫
《初夏の山》 藤井いよ、
《ゾウ》 金沢淑子

応募・審査状況

1. 応募者・応募作品総数 / 185人・303点
2. 入選者・入選作品総数 / 95人・103点
(内訳 / 在住 77人 在勤・在学18人)



(大賞作品)

1986

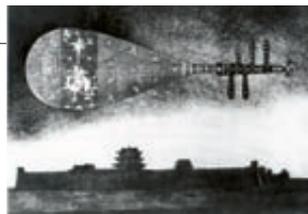
会期=昭和61(1986)年3月16日(日)~30日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 飯田満佐子(日本画家)
大久保泰(洋画家) / 清原啓一(洋画家) / 桑
原住雄(武蔵野美術大学教授) / 児玉幸雄(洋
画家) / 八代修次(慶応義塾大学教授)

受賞内容
松濤美術館賞 《シルクロード遙か》
金井貞夫
優秀賞 《高台の建物》 藤岡進、
《夜景》 田嶋万智子
佳作賞 《静物》 大坪穰、《六月》
高間昭子、《早春杏村》 西澤眞澄、
《風景・赤い家・赤い塀》 石崎寛、
《想》 橋本枇左子

応募・審査状況

1. 応募者・応募作品総数 / 217人・334点
2. 入選者・入選作品総数 / 95人・103点
(内訳 / 在住 77人 在勤・在学18人)



(大賞作品)

1987

会期=昭和62(1987)年3月1日(日)~15日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 大久保泰(洋画家)
清原啓一(洋画家)
桑原住雄(武蔵野美術大学教授)
児玉幸雄(洋画家) / 八代修次(慶応義塾大学
教授) / 堀内正和(彫刻家)

受賞内容
松濤美術館賞 《作品I》 勝又松枝、
優秀賞 《黒衣》 田辺艶子
《はたちに寄せて(10年前の記念写真)》
姫崎由美
佳作賞 《運河沿の家》 書上愼、
《しあわせの予感》 守尾栄
《冬の静物》 山口幸子、
《白い丘の風景》 岩井洋子、
《希望》 大村寿美子

応募・審査状況

1. 応募者・応募作品総数 / 186人・276点
2. 入選者・入選作品総数 / 92人・100点
(内訳 / 在住 73人 在勤・在学19人)



(大賞作品)

1988

会期=昭和63(1988)年2月7日(日)~21日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 飯田満佐子(日本画家)
大久保泰(洋画家)/清原啓一(洋画家)
児玉幸雄(洋画家)/堀内正和(彫刻家)
八代修次(慶応義塾大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/159人・254点
2.入選者・入選作品総数/90人・100点
(内訳/在住73人 在勤・在学17人)

受賞内容

松濤美術館賞 《カナリヤ》 大村寿美子
優秀賞 《貝のある静物》 藤本智子、
《夏の譜》 渡辺瑛子
佳作賞 《雪の朝(ローデンプルグ)》
原正明、《ある街》、寺山よしゐ、《室内》
鈴木聖、《CHAIRNo.10》 岡本裕子、
《水の森》 高橋洋



(大賞作品)

1989

会期=平成元(1989)年2月5日(日)~19日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 清原啓一(洋画家)
桑原住雄(武蔵野美術大学教授)
児玉幸雄(洋画家)/堀内正和(彫刻家)
八代修次(慶応義塾大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/197人・318点
2.入選者・入選作品総数/97人・100点
(内訳/在住77人 在勤・在学20人)

受賞内容

松濤美術館賞
《雪解け(秋田湯沢)》 伊東賢
優秀賞/《夕映えのなか深く》 今道松久、
《水芭蕉》 星和彦
佳作賞 《跡の譜A》 橋本純夫、
《晩秋のリュクサンブル公園(フランスパ
リ)》 原正明、《スタジアム建設風景》 寺山
よしゐ、《2月参道オリオンのページェント》
紺草路、《佃島》 門田勝次



(大賞作品)

1990

会期=平成2(1990)年2月18日(日)~3月4日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 飯田満佐子(日本画家)
清原啓一(洋画家)/桑原住雄(武蔵野美術大
学教授)/菅原猛(美術評論家)/堀内正和
(彫刻家)/八代修次(慶応義塾大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/198人・316点
2.入選者・入選作品総数/91人・93点
(内訳/在住72人 在勤・在学19人)

受賞内容

松濤美術館賞 《もう少しで町》
富家昭雄
優秀賞 《CHAIRNo.41》 岡本裕子、
《沼》 西田美貴子
佳作賞 《舟だまり(朝)》 渡辺瑛子、
《樹陰げんおうのみなも》 岡田桂、
《秋日和》 松葉悦子、
《昼さかりの港I》 青木健一郎、
《黄昏の街》 守尾栄



(大賞作品)

1991

会期=平成3(1991)年2月10日(日)~24日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 飯田満佐子(日本画家)
清原啓一(洋画家)
桑原住雄(武蔵野美術大学教授)
菅原猛(美術評論家)/堀内正和(彫刻家)
八代修次(慶応義塾大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/185人・295点
2.入選者・入選作品総数/96人・96点
(内訳/在住66人 在勤・在学30人)

受賞内容

松濤美術館賞 《残されし日(佃島)》
山村秀昭
優秀賞 《漁村(春)》 野口宏文、
《人形のいる静物I》 中井悦子
佳作賞 《初冬》 松葉悦子、
《林》 木戸愛子、
《月下美人》 黒木春子、
《舟だまり》 青木健一郎、
《満月(猫町シリーズより)》 中村幸夫



(大賞作品)

1992

会期=平成4(1992)年2月9日(日)~23日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 清原啓一(洋画家)
桑原住雄(武蔵野美術大学教授)
菅原猛(美術評論家)/堀内正和(彫刻家)
八代修次(東京家政学院大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/219人・348点
2.入選者・入選作品総数/92人・92点
(内訳/在住71人 在勤・在学21人)

受賞内容

松濤美術館賞 《清地の森》 杉本由明
優秀賞 《神木》 芹澤溪州、
《卓上のものたち》 森川ユキ、
佳作賞 《同潤会代官山アパート》
高木壮六、《青年のコンストラクション》
高橋光、《光厳寺の大桜》山倉一穂、《黒の
バックの静物》 山口幸子、
《冬の風》 今井礼



(大賞作品)

1993

会期=平成5(1993)年2月7日(日)~21日(日) 会場=地下1階主陳列室

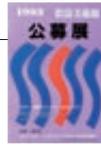
審査委員 (50音順) 飯田満佐子(日本画家)
清原啓一(洋画家) / 菅原猛(武蔵野美術大学教授) / 菅原猛(美術評論家) / 近岡善次郎(洋画家) / 堀内正和(彫刻家) / 八代修次(東京家政学院大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 192人・297点
2.入選者・入選作品総数 / 98人・98点
(内訳 / 在住 70人 在勤・在学 28人)

受賞内容

松清美術館賞 《体内地表》 浜田澄子
優秀賞 《鳥達の水辺》 松葉悦子、
《白い像の立つ広場》 寺山よしゐ
佳作賞 《同調会代官山アパート》
高木壮六、《埋もれ花》 岩井洋子、
《花と人形(窓辺)》 中井悦子、
《ふくろ袋(A)》 志智登志子、
《パリの娘》 福島則子



(大賞作品)

1994

会期=平成6(1994)年2月13日(日)~27日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員 (50音順) 清原啓一(洋画家)
菅原猛(美術評論家)
近岡善次郎(洋画家)
堀内正和(彫刻家)
八代修次(東京家政学院大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 196人・305点
2.入選者・入選作品総数 / 103人・104点
(内訳 / 在住 77人 在勤・在学 26人)

受賞内容

松清美術館賞
《銀河に咲く花》 今道松久
優秀賞 《すわるおんな》 加藤はる美、
《輪廻》 神山裕子
佳作賞 《プラハ風景》 稲葉次男、
《シャルトル(小運河)》 中込二佐子、
《塔の見える村》 寺山よしゐ、
《人形たちの時間》 中井悦子、
《故郷I》 陳 維邦



(大賞作品)

1995

会期=平成7(1995)年2月12日(日)~26日(日) 会場=地下1階主陳列室

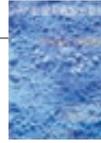
審査委員 (50音順) 清原啓一(洋画家)
菅原猛(美術評論家) / 近岡善次郎(洋画家)
堀内正和(彫刻家)
八代修次(東京家政学院大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 202人・309点
2.入選者・入選作品総数 / 98人・99点
(内訳 / 在住 66人 在勤・在学 32人)

受賞内容

松清美術館賞 《近道》 石塚幸治
優秀賞 《秋の庭》 村松翠、
《対岸の見える風景》 岩井洋子
佳作賞 《林道》 大政倫子、
《蕨ひかる館(ブルージュ)》 中込二佐子、
《巡礼路 ビレネーを越えてA》 橋本純夫、
《巴里のエスプリ2》 荻野高正、
《近隣》 陳 維邦



(大賞作品)

1996

会期=平成8(1996)年2月4日(日)~25日(日) 会場=地下1階主陳列室

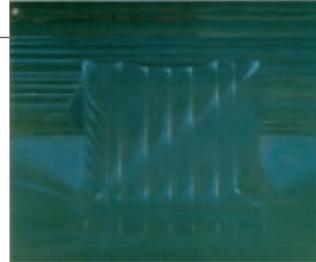
審査委員 (50音順) 飯田満佐子(日本画家)
清原啓一(洋画家) / 菅原猛(美術評論家)
近岡善次郎(洋画家) / 堀内正和(彫刻家)
八代修次(東京家政学院大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 170人・267点
2.入選者・入選作品総数 / 100人・100点
(内訳 / 在住 77人 在勤・在学 / 23人)

受賞内容

松清美術館賞 《夜想曲》 土肥弘樹
優秀賞
《悲しいあなたに安らぎを》 河角小枝子、
《「ノンビ」を見て》 高橋琵琶、
佳作賞 《白い時間》 中居悦子、
《旧き街(ラグーザ)》 寺山よしゐ、
《春の詩》 鷹野秀樹、
《路地裏の夏》 芹澤俊雄、
《チャペルの輝き》 荻野高正



(大賞作品)

1997

会期=平成9(1997)年2月16日(日)~3月2日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員 (50音順) 飯田満佐子(日本画家)
清原啓一(洋画家) / 菅原猛(美術評論家)
戸田康一(日本画家) / 近岡善次郎(洋画家)
堀内正和(彫刻家)
八代修次(東京家政学院大学教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 190人・297点
2.入選者・入選作品総数 / 95人・97点
(内訳 / 在住 75人 在勤・在学 20人)

受賞内容

松清美術館賞 《ガード》 小川靖雄
優秀賞 《樹木I》 杉浦則子、
《夏まつり》 陳維邦
佳作賞 《バラを持つ女》 加藤はる美、
《R-ed.Fタシカ》 馬場尚子、
《溪流》 岡本保孝、
《秋深し(Fox face)》 神山裕子、
《花の詩》 倉橋頌子



(大賞作品)

1998

会期=平成10(1998)年2月12日(木)~3月1日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 清原啓一(洋画家)
菅原猛(美術評論家) / 近岡善次郎(洋画家)
戸田康一(日本画家) / 堀内正和(彫刻家)
八代修次(慶応義塾大学名誉教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 163人・258点
2.入選者・入選作品総数 / 92人・92点
(内訳 / 在住 68人 在勤・在学24人)

受賞作品
松濤美術館賞
《オンフルール旧港》 野村美江
優秀賞 《ローマの露地》 森崎俊子、
《卓上の静物》 岡勝子
佳作賞 《収穫のあと》 河角小枝子、
《青蒼》 鹿毛宏一、
《位置I》 池内孝美、
《夢遊船》 近藤雅信、
《春を待つ冬木立》 三浦園子



(大賞作品)

1999

会期=平成11(1999)年2月12日(金)~28日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 飯田満佐子(日本画家)
清原啓一(洋画家) / 菅原猛(美術評論家)
近岡善次郎(洋画家) / 戸田康一(日本画家)
助川武史(彫刻家)
八代修次(慶応義塾大学名誉教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 197人・308点
2.選者・入選作品総数 / 97人・97点
(内訳 / 在住70人 在勤・在学27人)

受賞作品
松濤美術館賞 《波切漁港》 伊藤正好
優秀賞 《電波中毒》 島田仁、
《近未来~退廃の世界~》 村瀬敏之
佳作賞 《ある投影》 杉山茂、
《98 From My Window》 横田明美、
《華》 藤本智子、
《The Flowing 流れ》 片桐知子、
《夏の夜》 東維邦



(大賞作品)

2000

会期=平成12(2000)年2月12日(土)~27日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 清原啓一(洋画家) 菅原
猛(美術評論家) / 助川武史(彫刻家)
近岡善次郎(洋画家)
戸田康一(日本画家)
八代修次(慶応義塾大学名誉教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 189人・284点
2.入選者・入選作品総数 / 89人・89点
(内訳 / 在住 64人 在勤・在学25人)

受賞作品
松濤美術館賞 《静謐》 東維邦
優秀賞 《黄昏》 藤浪明、
《自我を持つ娘》 梅原久代
佳作賞
《バーチャルゲーム(宝飾)》 鹿毛宏一郎、
《フルメタルスカイ門》 長島正充、
《潮風の吹く時》 阿部香、
《M子と愛猫》 渡辺一松、
《見えない雨》 出射 茂



(大賞作品)

2001

会期=平成13(2001)年2月13日(火)~25日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 飯田満佐子(日本画家)
清原啓一(洋画家、審査委員長)
菅原猛(美術評論家) / 助川武史(彫刻家)
近岡善次郎(洋画家) / 戸田康一(日本画家)
八代修次(慶応義塾大学名誉教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 203人・313点
2.入選者・入選作品総数 / 93人・93点
(内訳 / 在住66人 在勤・在学27人)

受賞作品
松濤美術館賞 《瞬》 小関くに子
優秀賞 《遠い日の記憶》 河角小枝子、
《洗脳》 成清一生
佳作賞 《白の軌跡》 鹿毛宏一、
《夕映えのあし》 倉橋碩子、
《時を越えて2》 輝 計希、
《くつろぐI》 池内孝美、
《川下り》 江 北



(大賞作品)

2002

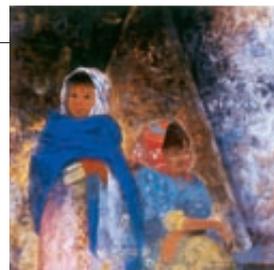
会期=平成14(2002)年2月12日(火)~24日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 清原啓一(洋画家)
菅原猛(美術評論家) / 助川武史(彫刻家)
近岡善次郎(洋画家)
八代修次(慶応義塾大学名誉教授)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数 / 177人・272点
2.入選者・入選作品総数 / 96人・93点
(内訳 / 在住52人 在勤・在学44人)

受賞作品
松濤美術館賞
《クリールの少女》 飯沼春子
優秀賞 《座る》 片岡素子、
《秋を集めて》 阿部香
佳作賞 《甦る-II》 杉浦則子、
《水巷人家》 江 北、
《愛し児聞んで》 渡辺一松、
《アフリカ気分I》 池内孝美、
《白日》 梅原久代



(大賞作品)

2003

会期=平成15(2003)年2月12日(水)~23日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 清原啓一(洋画家)
菅原猛(美術評論家)
近岡善次郎(洋画家)
八代修次(美術評論家、慶応義塾大学名誉教授)
和田義彦(洋画家)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/191人・291点
2.入選者・入選作品総数/92人・92点
(内訳/在住 69人 在勤・在学 23人)

受賞作品

松濤美術館賞
《マティスの墓》 長島正充
優秀賞 《風があそんでいた》 内田修二、
《AIBETSURIKU》 飯沼春子
佳作賞 《Love & Peace》 摩理夫、
《Bright Lights》 楠浦久子、
佳作賞 《長い夜》 安部香、
《アムステルダム》 鈴木美穂子、
《灰色の風景》 河角小枝子



(大賞作品)

2004

会期=平成16(2004)年2月8日(日)~22日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査委員(50音順) 戸田康一(日本画家)
清原啓一(洋画家)/菅原猛(美術評論家)
和田義彦(洋画家)/森野眞弓(版画家)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/179人・275点
2.入選者・入選作品総数/104人・104点
(内訳/在住 77人 在勤・在学 27人)

受賞内容

松濤美術館賞
《ベニス・サンルカのショウウィンドウ》 窪島章子
優秀賞 《翠の波》 輝計希、
《生命誕生》 摩理夫
佳作賞 《室内の静物(赤) A》 岡勝子、
《ヨルダンの老人2003》 鈴木敦子、
《師走の野ばたん》 横田明美、
《どるちえ》 阿部香、
《共鳴》 寺田愛子



(大賞作品)

2005

会期=平成17(2005)年2月12日(土)~27日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 清原啓一(洋画家)
戸田康一(日本画家)/和田義彦(洋画家)
菅原猛(美術評論家)/森野眞弓(版画家)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/188人・289点
2.入選者・入選作品総数/92人 92点
(内訳/在住56人 在勤・在学34人)

受賞作品

松濤美術館賞 《活きる》 石川枝莉子
優秀賞 《戯れる》 渡辺一松、
《stay I》 宇津木佑子
奨励賞 《八月の断面》 鹿毛宏一郎、
《思念-I》 杉浦則子、
《ぬるく・苦い水は・静かに・沈殿する》 山本花樹、
《卓上の静物A》 岡勝子、
《白い布、静物》 池田隆子



(大賞作品)

2006

会期=平成18(2006)年2月12日(日)~26日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 清原啓一(洋画家)
菅原猛(美術評論家)
戸田康一(日本画家)
森野眞弓(版画家)
和田義彦(洋画家)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/159人 249点
2.入選者・入選作品総数/84人・84点
(内訳/在住 61人 在勤・在学23人)

受賞作品

松濤美術館賞 《青の崩壊》 鹿毛宏一郎
優秀賞 《物語のはじまり》 小澤はなき、
《衝動I》 下田嘉子
奨励賞
《A Lily in monochrome》 横山智子、
《無題》 東郷達文、
《古街道》 山梨宜人、
《夜の温度》 高野真知子、
《閑村の晩秋》 小川昭成



(大賞作品)

2007

会期=平成19(2007)年2月10日(土)~25日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 浅野徹(美術評論家)
清原啓一(洋画家)/菅原猛(美術評論家)
高島直之(美術評論家)
森野眞弓(版画家)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/181人・262点
2.入選者・入選作品総数/89人・89点
(内訳/在住66人 在勤・在学23人)

受賞内容

松濤美術館賞 《二條城》 吉岡百合子
優秀賞 《リスボンの夜》 櫻田由香、
《風起女》 勝野正則
奨励賞 《雪道》 井口彌生、
《シエスタ》 山本輝子、
《道》 小林啓子、
《彼ノ音》 重藤裕子、
《First memoryⅢ》 横山智子



(大賞作品)

2008

会期=平成20(2008)年2月10日(日)~24日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順) 浅野徹(美術評論家)
清原啓一(洋画家) / 菅原猛(美術評論家)
戸田康一(日本画家) / 森野眞弓(版画家)

審査状況応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/155人・230点
2.入選者・入選作品総数/86人・86点
(内訳/在住65人 在勤・在学21人)

受賞作品
松濤美術館賞 《紅葉讃歌》 柚村優美
優秀賞 《遊1》 渡辺一松、
《ガーデン》 今井博子
奨励賞 《水門のある風景》 大谷敏久、
《予感》 毒島幸子、
《海と空の怪物》 小野章男、
《刻まれた父の思い出》 成清一生



(大賞作品)

2009

会期=平成21(2009)年2月8日(日)~22日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順)
浅野徹(美術評論家)
菅原猛(美術評論家)
戸田康一(日本画家) / 森野眞弓(版画家)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/170人 254点
2.入選者・入選作品総数/95人 95点
(内訳/在住74人 在勤・在学21人)

受賞作品
松濤美術館賞
《着物の上のカーニバル》 酒井七美
優秀賞 《リズム》 中村嘉宏、
奨励賞 《鈕》 池田由紀子、
《廊の里の初雪》 北岸経子、
《待つ人》 蓮池高夫
《北仏のゆがんだ家》 斎藤史郎、
《見上げたとき》 成清一生



(大賞作品)

2010

会期=平成22年2月7日(日)~21日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順)
相笠昌義(洋画家)
宝木範義(美術評論家)
滝沢具幸(日本画家)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/139人・197点
2.入選者・入選作品総数/85人・85点
(内訳/在住60人 在勤・在学25人)

受賞作品
松濤美術館賞
《赤い静寂》 蓮池高夫
優秀賞 《月夜》 海上ゆかり
奨励賞
《タオルミーナの骨董店》 金森まり、
《奏でる》 渡辺一松、
《緋》 池田由紀子、
《侵入》 鈴木テルオ、
《たより》 絵畑真理子



(大賞作品)

2011

会期=平成23年2月6日(日)~2月20日(日) 会場=地下1階主陳列室

審査員(50音順)
相笠昌義(洋画家)
宝木範義(美術評論家)
滝沢具幸(日本画家)

応募・審査状況

1.応募者・応募作品総数/125人・192点
2.入選者・入選作品総数/86人・86点
(内訳/在住72人 在勤・在学14人)

受賞作品
松濤美術館賞
《無題》 東郷達文
優秀賞 《刻(とき)》 成清一生、
《捕まる》 米腹祐子
奨励賞 《オークシリーズ其の三》 勝野正則、
《Blue Roses 1~15 / 15》 岡伸昭、
《夢想花》 高瀬怜子、
《冬眠》 絵畑真理子、
《大河》 高野真知子



(大賞作品)

渋谷区小中学生絵画展

第1回

会期=昭和57(1982)年3月18日(月)~31日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募数/204点

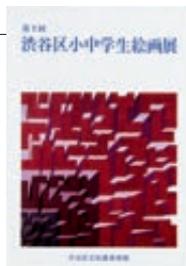
■第1回 渋谷区小中学生絵画展
25.7×18.2cm B5判
カラー図版 2P
モノクローム図版 13P



第2回

会期=昭和59(1984)年3月13日(火)~25日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/201点

■第2回渋谷区小中学生絵画展
29.5×20.8cm 20P
カラー図版 2P
モノクローム図版 17P



第3回

会期=昭和60(1985)年2月5日(火)~17日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/208点

■第3回渋谷区小中学生絵画展
29.5×20.8cm カラー図版 2P
モノクローム図版 18P



第4回

会期=昭和61(1986)年2月18日(火)~3月2日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/205点

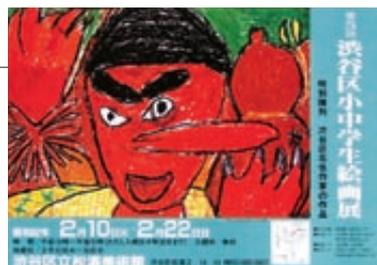
■第4回渋谷区小中学生絵画展
29.5×20.8cm 20P
カラー図版 2P
モノクローム図版 18P



第5回

会期=昭和62(1987)年2月10日(火)~22日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/206点

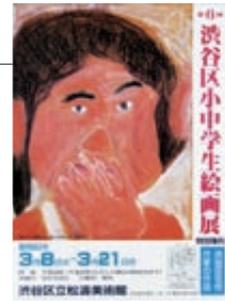
■第5回渋谷区小中学生絵画展
229.5×20.8cm 20P
カラー図版 2P
モノクローム図版 18P



第6回

会期=昭和63(1988)年3月8日(火)～21日(月)
 会場=地下1階主陳列室
 応募総数/207点

■第6回 渋谷区小中学生絵画展
 29.5×20.8cm A4判 48P
 カラー図版 46P



第7回

会期=昭和64(1989)年3月7日(火)～21日(火)
 会場=地下1階主陳列室
 応募総数/201点

■第7回 渋谷区小中学生絵画展
 29.5×20.8cm A4判 48P
 カラー図版 46P



第8回

会期=平成2(1990)年3月13日(火)～25日(日)
 会場=地下1階主陳列室
 応募総数/205点

■第8回 渋谷区小中学生絵画展
 29.5×20.8cm A4判 49P
 カラー図版 47P



第9回

会期=平成3(1991)年3月5日(火)～21日(木)
 会場=地下1階主陳列室
 応募総数/202点

■第9回 渋谷区小中学生絵画展
 29.5×20.8cm A4判 44P
 カラー図版 42P



第10回

会期=平成4(1992)年3月3日(火)～22日(日)
 会場=地下1階主陳列室
 応募総数/207点

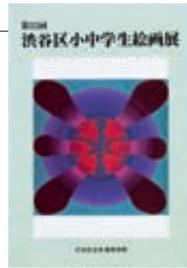
■第10回 渋谷区小中学生絵画展
 29.7×21.0cm A4判 44P
 カラー図版 5P



第11回

会期=平成5(1993)年3月2日(火)~21日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/208点

■第11回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.0cm A4判 44P
カラー図版 42P



第12回

会期=平成6(1994)年3月8日(火)~21日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/207点

■第12回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.0cm A4判 42P
カラー図版 40P



第13回

会期=平成7(1995)年3月7日(火)~19日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/208点

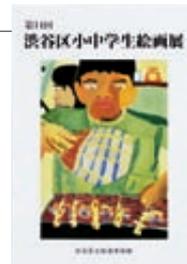
■第13回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.0cm A4判 44P
カラー図版 41P



第14回

会期=平成8(1996)年3月5日(火)~17日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/196点

■第14回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.0cm 全41P
カラー図版 39P



第15回

会期=平成9(1997)年3月11日(火)~23日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/199点

■第15回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.1cm 41P
カラー図版 40P



第16回

会期=平成10(1998)年3月10日(火)~22日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/192点

■第16回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.1cm 44P
カラー図版 41P



第17回

会期=平成11(1999)年3月9日(火)~21日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/194点

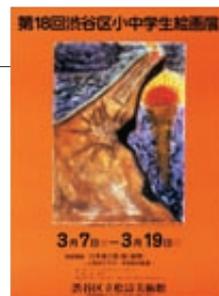
■第17回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.1cm 38P
カラー図版 35P



第18回

会期=平成12(2000)年3月7日(火)~19日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/188点

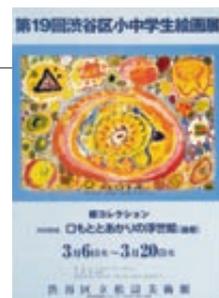
■第18回渋谷区小中学生絵画展
29.5×21.1cm 44P
カラー図版 41P



第19回

会期=平成13(2001)年3月6日(火)~20日(火)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/192点

■第19回渋谷区小中学生絵画展
29.5×21.1cm 44P
カラー図版 41P



第20回

会期=平成14(2002)年3月5日(火)~17日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/192点

■第20回渋谷区小中学生絵画展
29.8×21.1cm 全38P
モノクローム図版 36P



第21回

会期=平成15(2003)年3月4日(火)～16日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/190点

■第21回渋谷区小中学生絵画展
39.8×21.0cm 全40p
モノクローム図版 38P



第22回

会期=平成16(2004)年3月2日(火)～14日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/191点

■第22回渋谷区小中学生絵画展
25.5×18.3cm 全40P
図版 35P



第23回

会期=平成17(2005)年3月7日(月)～21日(月・祝)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/183点

■第23回渋谷区小中学生絵画展
25.5×18.3cm 全40p
カラー図版 36p



第24回

会期=平成18(2006)年3月6日(月)
～19日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/196点
併催:中国小中学生絵画展
会期=平成18(2006)年3月6日(月)
～19日(日)
会場=2階サロンミューゼ、特別陳列室
応募総数/136点

■第24回渋谷区小中学生絵画展/
中国小中学生絵画展(合本)展
29.7×21.0cm 全66P カラー図版 59P
(渋谷区小中学生絵画展36P、
中国小中学生絵画展23P)
「メッセージ」 桑原敏武(渋谷区長)
「[中国小中学生絵画展]開催によせて」
村山保太郎
(渋谷区日中友好協会会長)
「メッセージ」 平山郁夫
(社団法人日中友好協会会長)
「祝辞(賀詞)」 林鐸(北京市西城区人民政府)



第25回

会期=平成19(2007)年3月3日(土)～18日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/193点

■第25回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.0cm 全40P
カラー図版 37P



第26回

会期=平成20(2008)年3月1日(土)～16日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/194点

■第26回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.0cm 全41P
カラー図版 37P
出品リスト



第27回

会期=平成21(2009)年2月28日(土)～3月15日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/187点

■第27回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.0cm 全41P
カラー図版 37P
出品リスト



第28回

会期=平成22(2010)年2月27日(土)～3月14日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/194点

■第28回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.0cm 全41P
カラー図版 37P
出品リスト



第29回

会期=平成23(2011)年2月26日(土)～3月13日(日)
会場=地下1階主陳列室
応募総数/194点

■第29回渋谷区小中学生絵画展
29.7×21.0cm 全41P
カラー図版 37P
出品リスト



事業記録

講演会



演題	期日	講師	参加人数
昭和56(1981)年度			
対談 森芳雄の世界	56年10月10日(土)	森 芳雄 桑原住雄(筑波大学教授)	75人
菱田春草の人と芸術	56年10月31日(土)	飯島勇(山種美術館副館長)	24人
鍋島焼の色絵と染付	56年12月12日(土)	矢部良明(東京国立博物館陶磁室長)	81人
伊東若冲 花鳥画の世界	57年1月9日(土)	小林忠(東京国立博物館資料調査室長)	40人
インドの魅力	57年2月27日(土)	荒 松雄 (東京大学東洋文化研究所教授)	52人
メソポタミアの発掘とその思い出	57年3月20日(土)	江上波夫 (古代オリエント博物館館長)	105人
計	6回		377人
昭和57(1982)年度			
院展の彫刻	57年5月8日(土)	原田実(東京国立博物館)	26人
琳派再生 神坂雪佳	57年5月29日(土)	小林忠(東京国立博物館)	28人
大正文化 白秋と孝四郎	57年7月10日(土)	恩地邦郎 山本太郎	94人
恩地孝四郎と日本の近代版画	57年7月31日(土)	小倉忠夫(国立国際美術館長)	40人
江戸の櫛・簪	57年9月18日(土)	橋本澄子(東京国立博物館)	120人
櫛・簪と江戸文化	57年10月9日(土)	樋口清之(國學院大學名誉教授)	167人
19世紀ヨーロッパの捺染布について	57年12月4日(土)	北村哲郎(共立女子大学教授)	112人
19世紀ヨーロッパのデザイン 染織を中心に	58年1月8日(土)	友部直(共立女子大学教授)	115人
計	8回		702人
昭和58(1983)年度			
日本の洋画家としての山口薫	58年4月23日(土)	朝日晃(東京都美術館)	73人
人間 山口薫	58年5月14日(土)	勝田寛一(多摩美術大学教授)	145人
台湾の思い出とコレクション	58年7月2日(土)	瀬川孝吉	76人
台湾高砂族の文化について	58年8月6日(土)	宮本延人(東海大学名誉教授)	100人
行燈からランプへ	58年9月17日(土)	榎恵(照明文化研究会会員)	150人
明治文化はランプの光より	58年10月8日(土)	樋口清之(國學院大學名誉教授)	125人
辻晋堂と日本彫刻	58年11月16日(土)	三木多聞(文化庁企画官)	38人
辻晋堂のこと	58年12月17日(土)	堀内正和(彫刻家)	107人
計	8回		814人

演題	期日	講師	参加人数
昭和59(1984)年度			
中国絵画雑感	59年4月21日(土)	橋本末吉	92人
橋本コレクションと明清画	59年5月12日(土)	山岡泰造(関西大学教授)	54人
近代ヨーロッパ油画技法のアジアへの 伝播とガラス絵の役割	59年6月24日(日)	佐々木静一(多摩美術大学教授)	98人
ヨーロッパとアジアのガラス絵技法について	59年7月7日(土)	平井達郎(多摩美術大学助手)	65人
山脇洋二 金工の世界	59年9月8日(土)	中野政樹(東京藝術大学教授)	137人
座談会 山脇洋二を語る	59年9月29日(土)	小池岩太郎(東京藝術大学名誉教授) 平松保城(東京藝術大学教授) 山田礼子(ジュエリーデザイナー)	104人
日本のコレクションに見る貿易陶磁	59年12月1日(土)	西田宏子(根津美術館学芸課長)	126人
17世紀の染付と色絵	60年1月12日(土)	矢部良明(東京国立博物館陶磁室長)	110人
計	8回		786人
昭和60(1985)年度			
アメリカインディアン の染織 ナバホブランケット	60年4月20日(土)	角山幸洋(関西大学教授)	69人
ナバホインディアンの ブランケット 20世紀のスタイルと その技法	60年5月11日(土)	小林桂子	104人
アジアの敷物について	60年6月29日(土)	山辺知行(遠山記念館長)	155人
遊牧民の女と織物	60年7月13日(土)	松島きよえ(創作舞踊家)	226人
アメリカ美術の彗星 ジャクソン・ポロックと アクション・ペインティングの 意味	60年8月24日(土)	木島俊介(美術評論家)	103人
ポロックとニューヨークの 美術	60年9月7日(土)	草間彌生	143人
ドラクロワ・エベールと その時代	60年11月17日(日)	高階秀爾(東京大学教授)	240人
ヨーロッパ19世紀の 染織—技術と意匠	61年1月11日(土)	北村哲郎(共立女子大学教授)	79人
19世紀ヨーロッパの 服飾	61年1月25日(土)	石山彰(文化女子大学教授)	72人
計	9回		1,191人
昭和61(1986)年度			
長崎に来た画人たち	61年4月26日(土)	古原宏伸(奈良大学教授)	40人
江戸時代における中国と 日本	61年5月3日(土)	山岡泰造(関西大学教授)	44人
ドイツの素描芸術 デューラーから現代へ	61年6月21日(土)	千足伸行(成城大学教授)	65人
現代ドイツの素描	61年7月5日(土)	松本 透(東京国立近代美術館)	52人
画家としての小堀四郎	61年8月2日(土)	三輪福松(清春白樺美術館長)	60人
現代彫刻の流れと堀内正和	61年10月18日(土)	針生一郎(和光大学教授)	72人

演題	期日	講師	参加人数
堀内正和の彫刻について	61年11月15日(土)	柳生不二雄 (横浜市立美術館準備室参与)	63人
古玩趣味雑感	61年12月13日(土)	伊東祐淳(日本陶磁協会理事)	110人
模倣と創造 18世紀を中心とする陶磁意匠の変革	62年1月15日(木)	西田宏子(根津美術館学芸課長)	92人
計	9回		598人

昭和62(1987)年度

ビゴと明治日本	62年4月18日(土)	清水 勲(日本仏学史学会会員)	73人
ジャポニスムからジャーナリズムへ 画家ジョルジュ・ビゴ	62年5月2日(土)	エレヌ・コルスヴァン (ラクロワ・レバスマン紙東京特派員)	82人
国吉康雄の人と芸術	62年6月6日(土)	桑原住雄(武蔵野美術大学教授)	86人
アメリカに学んだ画家たち	62年7月4日(土)	石垣綾子(評論家)	173人
ガラスを通して見た東西交渉	62年8月15日(土)	江上波夫(古代オリエント博物館長)	182人
古代オリエントのガラスについて	62年9月12日(土)	谷一 尚 (岡山市立オリエント美術館学芸員)	130人
日本現代版画の動向	62年10月24日(土)	小倉忠夫(京都国立近代美術館長)	32人
画竹の見方	62年12月12日(土)	古原宏伸(奈良大学教授)	47人
明末清初の墨竹	63年1月9日(土)	曾布川寛(京都大学助教授)	71人
計	9回		876人

昭和63(1988)年度

寛治の生涯と時代	63年4月16日(土)	瀧 悌三(日本経済新聞編集委員)	45人
石垣栄太郎の思い出	63年6月18日(土)	石垣綾子(評論家)	213人
アメリカに学んだ画家たち	63年7月2日(土)	浅野 徹 (東京国立近代美術館美術課長)	36人
タイ・ベトナムの陶磁について	63年9月10日(土)	長谷部楽爾(恵泉女学園大学教授)	203人
富永太郎の詩と絵画	63年10月22日(土)	大岡昇平(作家)	173人
アメリカの風土と文化 芸術を育んだ社会的背景	63年11月5日(土)	猿谷 要 (東京女子大学現代文化学部長)	153人
アメリカン・イメージ	元年1月14日(土)	伊藤俊治(美術評論家)	125人
計	7回		948人

平成元(1989)年度

木村忠太と会ったころ	元年4月23日(土)	河北倫明(美術評論家)	140人
木村忠太の思い出	元年5月13日(土)	富山秀男(東京国立近代美術館次長)	98人
盗作の倫理 国画改良運動始末	元年6月24日(土)	古原宏伸(奈良大学教授)	52人

演題	期日	講師	参加人数
呉昌碩とその周辺	元年 7月 8日 (土)	曾布川寛 (京都大学人文科学研究所助教授)	62人
対談 三雲祥之助の人と世界	元年 8月 12日 (土)	小川マリ(画家) 桑原住雄(美術評論家)	132人
三雲祥之助とその世界	元年 9月 2日 (土)	針生一郎(美術評論家)	86人
19世紀フランス絵画とローマ賞	元年 10月 22日 (日)	高階秀爾(東京大学教授)	125人
多面の才能 秋山泰計	2年 1月 13日 (土)	田口安男(東京藝術大学教授)	84人
計	8回		779人

平成2(1990)年度

座談会 具体の頃 その状況と成果	2年 4月 29日 (日)	白髪一雄(画家) 元永定正(画家) 針生一郎(美術評論家)	162人
フランス世紀末とジャポニスム	2年 6月 23日 (土)	高階秀爾(東京大学教授)	223人
ヨーロッパのグラフィックアートと浮世絵	2年 7月 14日 (土)	馬淵明子(青山学院短期大学助教授)	137人
現代版画の動向	2年 8月 11日 (土)	三木多聞(国立国際美術館長)	38人
19世紀フランス絵画とオリエンタリズム	2年 10月 13日 (土)	阿部良雄(東京大学教養学部教授)	63人
西洋の鏡の中のオリエン ト オリエントへの心の旅	2年 11月 3日 (土)	板垣雄三 (東京大学東洋文化研究所教授)	53人
海老原喜之助・生涯と芸術	2年 12月 15日 (土)	針生一郎(美術評論家)	61人
計	7回		737人

平成3(1991)年度

橋本コレクションに見る 明末清初の中国絵画	3年 4月 20日 (土)	曾布川寛 (京都大学人文科学研究所助教授)	62人
明代の文人画	3年 5月 4日 (土)	湊 信幸 (東京国立博物館中国美術室長)	83人
野島康三の時代 日本回帰をめぐって	3年 7月 20日 (土)	柄谷行人(評論家)	103人
対談 野島康三の人と作品	3年 8月 10日 (土)	吉川富三(写真家) 金子隆一(写真評論家)	57人
中国の漆器 元・明時代を中心に	3年 10月 19日 (土)	西岡康宏 (東京国立博物館東洋課長)	65人
対談 多田美波彫刻を語る	3年 12月 1日 (日)	多田美波(彫刻家) 岡田隆彦(美術評論家)	105人
造型と景観 ― 多田美波の作品	3年 12月 7日 (土)	中原佑介(美術評論家)	41人
計	7回		516人

演題	期日	講師	参加人数
平成4(1992)年度			
絵画に見る中国の茶道	4年4月11日(土)	古原宏伸(奈良大学教授)	57人
揚州八怪とその周辺	4年5月2日(土)	曾布川寛 (京都大学人文科学研究所助教授)	108人
文明の十字路・ダゲスタン	4年6月20日(土)	加藤九祚(創価大学教授)	287人
中川紀元にみる日本のモダニズム	4年8月15日(土)	北澤憲昭(美術評論家)	97人
日本の金工	4年10月10日(土)	中野政樹(東京藝術大学教授)	103人
昭和の金工と中野恵祥	4年10月31日(土)	樋田豊次郎 (東京国立近代美術館主任研究官)	95人
耳と三木富雄	4年12月12日(土)	赤瀬川原平(作家)	112人
三木富雄と現代美術の一断面	5年1月15日(金)	小倉正史(美術評論家)	47人
計	8回		906人
平成5(1993)年度			
フォルツハイム装身具美術館について	5年5月2日(日)	山原秀郎 (フォルツハイム装身具美術館 国際友の会会員・金工作家)	76人
自作を語る	5年6月12日(土)	片瀬和夫(作家) 山本和弘(美術評論家)	146人
絵はがき芸術の展開とその意味	5年8月7日(土)	富田 章(そごう美術館主任学芸員)	35人
庶民の信仰と絵画	5年10月9日(土)	宮 次男(実践女子大学教授)	107人
参詣曼荼羅の時代	5年10月30日(土)	福原敏男(国立歴史民俗博物館助手)	92人
カシミヤショールの世界 —カシミールからスコットランドまで—	5年12月11日(土)	道明三保子(文化女子大学教授)	131人
インド・東南アジアの染織とペイズリー文様	6年1月22日(土)	小笠原小枝(日本女子大学教授)	342人
計	7回		929人
平成6(1994)年度			
揚州八怪	6年4月30日(土)	曾布川 寛 (京都大学人文科学研究所助教授)	87人
古典主義の終焉—仿ということ—	6年5月4日(水)	古原宏伸(奈良大学教授)	82人
アラスカを旅する	6年6月11日(土)	星野道夫(写真家)	225人
肖像画とその解体	6年8月7日(日)	中山公男(美術評論家)	58人
貨幣にみるフランスの歴史	6年10月29日(土)	堀越孝一(学習院大学教授)	118人
版画をめぐる今日的状況	6年12月25日(日)	篠原資明(京都大学助教授)	41人
父 傅抱石の芸術	7年3月11日(土)	傅益瑤(画家／傅抱石三女)	62人
計	7回		673人

演題	期日	講師	参加人数
平成7(1995)年度			
張大千に贈る花束	7年4月22日(土)	古原宏伸(奈良大学教授)	42人
張大千の芸術的生活	7年5月6日(土)	鶴田武良 (東京国立文化財研究所資料部長)	43人
変容する神仏たち 江戸時代の宗教美術	7年6月17日(土)	辻惟雄 (国際日本文化研究センター教授)	110人
大正、昭和の水彩画について	7年8月19日(土)	金原宏行 (茨城県近代美術館企画課長)	112人
日和崎尊夫と木口木版画	7年10月14日(土)	柄澤齊(版画家)	95人
映画〈明治の日本〉について	7年12月9日(土)	小松弘(映画史家)	97人
計	6回		499人
平成8(1996)年度			
江戸の人形	8年4月28日(日)	千葉惣次(千葉古人形研究所)	42人
からくり人形の実演	8年5月3日(金)	東野 進 (日本科学技術史博物館準備委員会委員長)	86人
消費社会のグラフィック	8年6月29日(土)	柏木 博(武蔵野美術大学教授)	53人
古代オリエントと日本の象牙美術	8年9月1日(日)	福井泰民 (渋谷区立松濤美術館主任学芸員)	126人
工芸作品にみる文字意匠	8年11月2日(土)	小松大秀 (東京国立博物館漆工室長)	52人
絵が文字になり文字が絵になる	8年11月9日(土)	杉浦康平(デザイナー)	120人
美人画はどこへゆく	8年12月22日(日)	田中日佐夫(成城大学教授)	30人
計	7回		509人
平成9(1997)年度			
中山岩太と1930年代の写真	9年4月20日(日)	中島徳博 (兵庫県立近代美術館館長補佐)	59人
中山岩太の魅力	9年5月10日(土)	飯沢耕太郎(写真評論家)	69人
座談会 久保守の世界	9年6月28日(土)	島田章三(洋画家) 田口安男(洋画家) 白根三男(洋画家)	81人
中国近代絵画に及ぼした日本美術の影響	9年9月6日(土)	鶴田武良(東京国立文化財研究所美術部長)	48人
山口蓬春と現代	9年10月4日(土)	井上研一郎(宮城学院女子大学教授)	125人
木喰仏と近世の仏像	10年1月10日(土)	三山 進(跡見学園女子大学名誉教授)	198人
計	6回		580人

演題	期日	講師	参加人数
平成10(1998)年度			
芸術家村の系譜と総合芸術	10年4月11日(土)	長田健一(千葉大学教授)	45人
橋本さんと中国絵画収集	10年6月27日(土)	山岡泰造(関西大学教授)	43人
江戸の遊び絵	10年8月22日(土)	稲垣進一(日本浮世絵協会編集委員)	98人
児島善三郎 日本の油彩画の創造者	10年10月24日(土)	副島三喜男(島根県立美術館館長)	41人
モダンボーイたちの写真的発見	10年12月12日(土)	光田由里(渋谷区立松濤美術館学芸員)	64人
計	5回		291人
平成11(1999)年度			
彫師・伊上凡骨とその時代	11年4月17日(土)	岩切信一郎(東京文化短期大学助教授)	51人
近世の庶民信仰について	11年6月19日(土)	宮田登(神奈川大学教授)	61人
きもの文化の中の江戸小紋と型紙	11年9月4日(土)	大滝幹夫(文星芸術大学教授) 長崎 巖(東京国立博物館染織室長)	217人
傅抱石と中国絵画の革新	11年10月24日(日)	傅益玉(画家)	118人
吉仲太造と戦後日本の精神史	12年1月8日(土)	中原佑介(美術評論家)	67人
対談 人形を語る	12年2月12日(土)	川本喜八郎(人形作家) 岡田えみ子(アニメーション研究者)	170人
計	6回		684人
平成12(2000)年度			
水彩画家石井柏亭	12年4月15日(土)	福田徳樹(平塚市美術館長)	82人
村山密 その人と芸術	12年6月18日(日)	金原宏行(茨城県近代美術館企画課長)	127人
イスラムの美術工芸 生活とデザイン	12年8月12日(土)	杉村 棟(龍谷大学教授)	117人
白隠の絵 力とユーモア	12年10月21日(土)	辻 惟雄(多摩美術大学学長)	72人
21世紀へのおくりもの	12年12月24日(日)	細江英公(写真家)	198人
計	5回		596人
平成13(2001)年度			
回想：西田武雄と若き駒井哲郎	13年4月14日(土)	笠木 實(画家)	85人
鴻禧美術館の陶磁器	13年6月17日(日)	長谷部楽爾(東京国立博物館名誉館員)	127人
染織に見るインドシナ半島の生活と文化	13年8月11日(土)	オフエル・シャガン (オリエンタル・アンティークス代表取締役)	146人
岡本太郎の日本発見	13年10月27日(土)	山下裕二(明治学院大学教授)	80人
瀧口修造の書くことと描くこと	13年12月8日(土)	ヨシダヨシエ(美術評論家)	91人
計	5回		529人

演題	期日	講師	参加人数
平成14(2002)年度			
対談 雪村の夢・仙人の夢	14年4月20日(土)	山下裕二(明治学院大学教授) 南 伸坊(イラストレーター)	212人
能面 その心と技	14年6月1日(土)	橋岡一路(能面師)	250人
現代から見るピクトリアリズム	14年8月10日(土)	細江英公(写真家)	81人
小林秀雄と骨董	14年10月27日(日)	青柳恵介(古美術評論家)	138人
現代水彩の美と可能性	14年12月21日(土)	福井泰民(渋谷区立松濤美術館主任学芸員)	83人
計	5回		764人
平成15(2003)年度			
武者絵のヒーローたち	15年4月19日(土)	岩切友里子(浮世絵研究家)	84人
明時代の文人画	15年6月22日(日)	湊 信幸 (東京国立博物館文化財部長)	121人
染織でめぐるインドネシアの島々	15年8月9日(土)	渡辺万知子(染織作家)	92人
対談 花と嵐	15年10月25日(土)	唐十郎(劇団唐組主宰) 合田佐和子(作家)	143人
対談 谷中安規とその時代	15年12月21日(日)	北村 薫(作家) 大野隆司(版画家)	180人
計	5回		620人
平成16(2004)年度			
河井寛次郎の生涯と芸術	16年4月17日(土)	鷺珠江(河井寛次郎記念館学芸員)	132人
中国水彩画の展開と留学生	16年6月20日(日)	鶴田武良(中国現代美術研究センター代表)	42人
瑛九と私と“田園”	16年8月22日(日)	加藤南枝	52人
いま、仲治への旅	16年10月9日(土)	森山大道(写真家)	138人
ペルシャ絨毯 伝統と再創造への路	16年12月11日(土)	スィールーズ・パルハム ラーズイ・ミーラー アリ・ソレマニエ	145人
計	5回		509人
平成17(2005)年度			
晩年の梅原龍三郎	17年4月9日(土)	富山秀男 (ブリヂストン美術館長)	51人
変貌する陶土	17年6月4日(土)	會田雄亮(陶芸家)	109人
対談 和田義彦の世界	17年9月3日(土)	和田義彦(画家) 森村誠一(小説家)	122人
中島宏の世界	17年10月15日(土)	金子賢治(東京国立近代美術館課長)	52人

演題	期日	講師	参加人数
中島宏展 現代を生きる青磁 記念企画対談	17年10月29日(土)	中島宏(陶芸家) 壇ふみ(女優)	108人
岸田劉生と芝川照吉	17年12月10日(土)	浅野徹(名古屋芸術大学教授)	92人
計	6回		534人

平成18(2006)年度

陳進とその師たち「台展」デビュー前後 記念座談会「楽しきかな骨董！」	18年4月15日(土)	島村 輝(女子美術大学教授)	78人
	18年6月10日(土)	青柳恵介(古美術評論家) 尾久彰三(古民芸研究家) 坂田和實(古道具商)	140人
ポーランド現代写真を語る	18年8月5日(土)	塚原琢哉(写真家)	83人
装飾の絵画史 琳派400年	18年9月16日(土)	古田 亮 (東京藝術大学大学美術館助教授)	55人
友人砂盃氏の思い出とコレクション	18年11月4日(土)	佐谷和彦(佐谷画廊主)	26人
計	5回		382人

平成19(2007)年度

清原啓一の芸術	19年4月21日(土)	富山秀男(美術評論家)	41人
大辻さんの椅子	19年6月23日(土)	谷川俊太郎(詩人)	89人
景德鎮磁器の展開	19年8月25日(土)	長谷部楽爾 (東京国立博物館名誉館員)	145人
浮世絵美人画のツボ!	19年10月13日(土)	浅野秀剛(千葉市美術館学芸課長)	90人
呉昌碩を訪れた日本人たち	19年12月15日(土)	松村茂樹(大妻女子大学教授)	106人
計	5回		471人

平成20(2008)年度

絵画の場所 中西夏之の軌跡	20年4月19日(土)	高階秀爾 (美術評論家、大原美術館館長)	127人
報告 絵画に向けて 紫・白・黒	20年5月11日(日)	中西夏之(画家)	125人
絵空事師・河野通勢 その挿絵と装幀	20年6月21日(土)	岩切信一郎 (東京文化短期大学教授)	85人
河野通勢、線の芸術 長野そして草土社時代を中心に	20年7月5日(土)	山村仁志 (元府中市美術館副館長補佐兼 学芸係長)	51人
物語を語る絵	20年8月30日(土)	松居 直 (福音館書店相談役、 日本国際児童図書評議会会長、 NPOブックスタート理事長)	120人

演題	期日	講師	参加人数
静謐なる絵画	20年10月25日(土)	本江邦夫 (多摩美術大学教授、府中市美術館館長)	42人
座談会 日本の素朴画を語る	20年12月13日(土)	星野 鈴(東京造形大学教授) 浅井京子(八王子市夢美術館館長) 矢島 新(渋谷区立松濤美術館学芸員)	25人
計	7回		575人

平成21(2009)年度

座談会 台湾版画の現況と日本	21年4月7日(火)	廖修平(版画家) 中林忠良(版画家) 森野真弓(版画家) 園山晴巳(版画家)	39人
座談会 幟旗を語る	21年8月22日(土)	北村勝史(幟研究家) 鈴木忠男(美術コレクター) 林 直輝(吉徳資料室学芸員) 矢島 新(跡見学園女子大学教授)	111人
肖像のエニグマ 絵画と写真のまなざし	21年10月18日(日)	岡田温司(京都大学大学院教授)	47人
火だるま槐多を追って	21年12月5日(土)	窪島誠一郎(信濃デッサン館館主)	198人
計	4回		395人

平成22(2010)年度

ケンブリッジとイギリス美術	22年4月24日(土)	桜井 武(熊本市現代美術館長)	30人
扇面画に見る日中美術交流史	22年6月12日(土)	小林宏光 (上智大学国際教養学部教授)	61人
特別対談 今、絵を描くということ	22年9月4日(土)	岡田菊恵(画家) 宝木範義(明星大学教授)	111人
鼎談 大正 一唄うイマジユリィ・踊るイマジユリィ	22年12月11日(土)	谷口朋子(挿絵研究家) 芳賀直子(舞踊研究家) 辺見 海(編集家)	75人
計	4回		277人

平成23(2011)年度

座談会 牛島憲之のひとと作品	23年4月24日(日)	宝木範義(明星大学教授) 牛島葉子(牛島憲之画伯息女) 天方光彦(フジカワ画廊専務)	98人
カレル・ゼマンの映像テクニク	23年6月18日(土)	山村浩二 (アニメーション作家・ 東京藝術大学大学院教授)	93人
空襲25時	23年8月20日(土)	岡本信治郎(出品作家)	96人
芹沢銈介の仕事	23年10月15日(土)	白鳥誠一郎 (静岡市立芹沢銈介美術館学芸員)	90人

美術映画会



上映作品名	期日	共催	参加人数
昭和57(1982)年度			
ルーブル美術館	57年11月28日(日)		70人
遺跡の旅(エジプト編) ほか	57年12月19日(日)		65人
遺跡の旅シリーズ	58年1月23日(日)		19人
近代日本美術—1945年以後— ほか	58年2月27日(日)		41人
観察して描く／配色 ほか	58年3月20日(日)		31人
計	5回		226人
昭和58(1983)年度			
岸田劉生の芸術 I・II ほか	58年4月17日(日)		19人
ルーブル美術館	58年5月15日(日)		75人
藍に生きる ほか	58年6月26日(日)		21人
東山魁夷—風景との対話 ほか	58年7月17日(日)		27人
型絵染—芹沢銈介 ほか	58年8月7日(日)		34人
明治の洋風建築 ほか	58年9月15日(木)		65人
探訪ルポ荷風の夢・夢の東京 ほか	58年10月16日(日)		35人
法隆寺	58年11月20日(日)	NHK共催(2回上映)	147人
国宝の旅立ち ほか	58年12月4日(日)		15人
荒川豊蔵—人間国宝 ほか	59年1月15日(日)		31人
平田郷陽(衣装人形)／鹿兒島寿蔵(紙塑人形)	59年2月19日(日)	NHK共催(2回上映)	82人
エレクトロ絵本	59年3月18日(日)	NHK共催(2回上映)	70人
計	12回		621人
昭和59(1984)年度			
水墨画 中国 —瀟江を行く—	59年4月22日(日)		55人
江陵漢墓 中国 —長城と運河—	59年5月6日(日)		30人
美の美 コロー・ミレー・クールベ I・II	59年7月1日(日)		45人
美の美 世紀末画家ロートレック I・II	59年7月15日(日)		64人
美の美 セザンヌ その孤独なまなざし I・II	59年8月5日(日)		56人
伝統工芸の明日を考える／日本の金工／七宝	59年9月2日(日)		32人
茶の湯釜・長野埴志／梵鐘・香取正彦	59年10月7日(日)		24人
色鍋島／唐津	59年11月18日(日)		38人
柿右衛門／染付・近藤悠三／中国の陶磁	59年12月2日(日)		23人
プラド美術館	60年1月15日(火)		57人
桂離宮 —よみがえる日本の美—	60年2月11日(月)	NHK共催(2回上映)	120人

上映作品名	期日	共催	参加人数
松田権六(蒔絵)／赤地友哉(漆芸)	60年3月17日(日)	NHK共催(2回上映)	18人
計	12回		562人

昭和60(1985)年度

幻の錦	60年4月21日(日)		23人
手漉和紙／森口華弘と京友禅	60年5月5日(日)		41人
遊牧民の染織のみどころについて(松島きよえ氏によるスライド上映)	60年6月16日(日)		168人
真珠の都イスファハン／興亡の都サマルカンド他	60年6月23日(日)		58人
速水御舟／唐招提寺への道(東山魁夷)	60年7月21日(日)		58人
美の美 画家カラヴァッジオの犯罪Ⅰ・Ⅱ	60年8月25日(日)		35人
美の美 ベネチア絵画の光と影Ⅰ・Ⅱ	60年9月15日(日)		31人
美の美 ドラクロワ－ロマン主義の逆説	60年11月24日(日)		28人
美の美 アングルー－古典主義画家の孤独な反乱	60年12月8日(日)		56人
19世紀の浪漫衣装／ブレインカの染織／森口華弘と京友禅	61年1月26日(日)		52人
法隆寺	61年3月2日(日)	NHK共催(2回上映)	46人
土と炎の詩韓国青磁・白磁／塗師誕生日本 漆工芸	61年3月23日(日)	NHK共催(2回上映)	12人
計	12回		608人

昭和61(1986)年度

近代の水墨画／水墨画／万福寺	61年4月27日(日)		48人
江戸時代の朝鮮通信使	61年5月4日(日)		26人
ドイツ実験映画 ラシヤの椅子 ほか	61年6月15日(日)		43人
ドイツ実験映画 S&W ほか	61年6月29日(日)		29人
美の美 幻視の画家ボツシュ	61年7月20日(日)		66人
ルーブル美術館Ⅰ	61年8月17日(日)		48人
ルーブル美術館Ⅱ	61年8月31日(日)		65人
美の美：北野天神縁起絵巻／信貴山縁起絵巻	61年10月5日(日)		24人
十一面観音の道／宗達・空間の魔術師	61年11月2日(日)		34人
荒川豊蔵 志野・瀬戸黒／古九谷	61年12月21日(日)		26人
彫る・棟方志功／美の美 近世異端の画家蕭白	62年1月25日(日)		42人
美の秘密・二つの弥勒菩薩像	62年2月15日(日)	NHK共催(2回上映)	34人
みやびの世界 京都御所	62年3月1日(日)	NHK共催(2回上映)	48人
計	13回		533人

上映作品名	期日	共催	参加人数
昭和62(1987)年度			
ショッキング・オ・ジャポン	62年4月19日(日)		79人
ブラド美術館	62年5月5日(火)		56人
神々のパンテオン／マヤの建築空間	62年6月7日(日)		42人
トマス・ジェファースンの目／アメリカ絵画／アメリカに学んだ日本の画家たち	62年7月5日(日)		28人
ベルシャの栄光・ベルセポリス 文明の十字路・ササン朝ベルシャ	62年8月30日(日)		53人
美の美 クロード・モネ 印象派とはⅠ・Ⅱ	62年9月20日(日)		108人
彫る・棟方志功／浮世絵	62年10月25日(日)		34人
美の美 画家ギュスターブ・モローの館 ウィリアム・ブレイク詩と絵画のあいだ	62年11月22日(日)		53人
美の美：近世異端の画家蕭白／宗達・空間の魔術師	62年12月27日(日)		35人
近代水墨画／中国画／水墨画 山水・京都国立博物館の展示から	63年1月17日(日)		43人
NHK特集 ルーブル美術館・花開くルネッサンス	63年2月11日(木)	NHK共催(2回上映)	47人
NHK特集 ルーブル美術館・巨匠たちの饗宴	63年3月20日(日)	NHK共催(2回上映)	44人
計	12回		622人
昭和63(1988)年度			
美の美 コロー・ミレー・クールベⅠ・Ⅱ	63年4月17日(日)		35人
美の美 セザンヌ その孤独なまなざしⅠ・Ⅱ	63年5月1日(日)		30人
美の美 シケイロス、リベラ、オロスコー終末の日は来た	63年6月19日(日)		36人
美の美：百鬼夜行絵巻／肉筆秘画の世界	63年7月3日(日)		76人
美の美：中国の陶磁／韓国の陶磁	63年8月21日(日)		87人
黒陶ハンネラの村	63年9月4日(日)		38人
円空／ツタンカーメンの秘宝	63年10月23日(日)		45人
江戸二大悪所的美／肉筆秘画の世界	63年11月23日(水)		69人
美の美：ウィリアム・ブレイク／フェルメール	63年12月25日(日)		72人
徳川美術館	元年1月15日(日)		20人
NHK特集 ルーブル美術館・光と影の王国 スペイン黄金時代	元年2月5日(日)	NHK共催(2回上映)	105人
NHK特集 ルーブル美術館・バロックの峰ルーベンスとレンブラント	元年3月19日(日)	NHK共催(2回上映)	40人
計	12回		653人
平成元(1989)年度			
ルーブル美術館Ⅰ・Ⅱ	元年4月23日(日)		43人
ルーブル美術館Ⅲ・Ⅳ	元年5月21日(日)		50人
中国一漓江を行く一／中国農民画の世界	元年6月25日(日)		41人
円山応挙・難福図巻／蕪村の晩年	元年7月16日(日)		29人

上映作品名	期日	共催	参加人数
アントニオ・ガウディ	元年8月20日(日)		107人
美の美 コロー・ミレー・クールベⅠ・Ⅱ	元年9月17日(日)		43人
美の美 アンゲル-古典主義画家の孤独な反乱	元年11月3日(金)		53人
美の美 ドラクロワ-ロマン主義の逆襲	元年11月19日(日)		53人
画家の技法/印象主義と後期印象主義	2年1月14日(日)		24人
キュビズムとモダニズム/未来派	2年1月21日(日)		27人
NHKライブラリ 彫刻家佐藤忠良/彫刻家柳沢義達	2年2月18日(日)	NHK共催(2回上映)	25人
NHKライブラリ グラフィックデザイナー福田繁雄 グラフィックデザイナー栗津潔	2年3月18日(日)	NHK共催(2回上映)	20人
計	12回		515人

平成2(1990)年度

実験映画「具体映画」「顔」「ピチピチ」	2年4月15日(日)		62人
実験映画「喰べた人」「砂」	2年5月20日(日)		55人
印象派Ⅰ マネ・プータン/印象派Ⅱ モネ	2年6月17日(日)		45人
印象派Ⅲ ピサロ・シスレー/印象派Ⅳ ドガ・ルノワール	2年7月15日(日)		41人
版画の技法と表現 1・2・3・4	2年8月19日(日)		85人
加納光於/萩原英雄/深沢幸雄	2年9月2日(日)		41人
古代エジプト 遥かな原風景1・2	2年10月21日(日)		52人
古代エジプト 遥かな原風景3・4	2年11月4日(日)		28人
ダリとシュールレアリズム/クレーとミュンヘン一揆	2年12月16日(日)		27人
キュビズムとモダニズム/未来派	3年1月20日(日)		27人
NHKライブラリ:抽象画家白髪一雄/陶芸家鯉江良二	3年2月17日(日)	NHK共催(2回上映)	11人
NHKライブラリ:蒔絵・みやびの世界/京友禅・みやびの四季を染める	3年3月17日(日)	NHK共催(2回上映)	18人
計	12回		492人

平成3(1991)年度

故宮博物院の名蹟	3年4月21日(日)		32人
安宅コレクションの中国陶磁/近世異端の画家蕭白	3年5月5日(日)		46人
エルミタージュ美術館(ギリシャ・ローマからバロックへ)	3年6月16日(日)		38人
雨のあとヨーロッパでは—ダダとシュールレアリズム—	3年7月21日(日)		28人
マルセル・デュシャン事件	3年8月4日(日)		21人
河北省の剪紙/中国陶瓦/中国美術	3年9月22日(日)		57人
日本の色—王朝装束より/用と美—伝統工芸より	3年10月10日(木)		29人
空間のドラマ—敵島神社管弦祭/風月のデザイナー—遠像と近像	3年11月3日(日)		21人

上映作品名	期日	共催	参加人数
ギルバート&ジョージの世界	3年11月30日(土)		11人
クリスト制作中	4年1月19日(日)		23人
ピカソの20世紀	4年2月16日(日)		37人
ゴッホ 心の旅	4年3月15日(日)		18人
計	12回		361人

平成4(1992)年度

杜十娘	4年4月19日(日)		35人
杜十娘	4年5月3日(日)		29人
エルミタージュ美術館1 永遠の美の歴史	4年6月21日(日)		68人
エルミタージュ美術館2 近代絵画の巨匠たち	4年7月19日(日)		41人
美術の見方1 セザンヌと造形／視覚の変貌	4年8月22日(土)		42人
美術の見方2 構図の探求／絵画を読む	4年9月5日(土)		57人
日本の美：水平と垂直／草のころ	4年10月18日(日)		14人
日本の美：日本人の原風景／境の思想	4年11月1日(日)		24人
他人の顔	4年12月5日(土)		37人
他人の顔	4年12月6日(日)		32人
他人の顔	5年1月16日(土)		72人
他人の顔	5年1月17日(日)		93人
ニューペインティングの旗手たち	5年2月7日(日)		11人
印象派I・II	5年3月7日(日)		11人
計	14回		566人

平成5(1993)年度

柚木沙弥郎一染色の世界／京友禅 森口華弘	5年4月18日(日)		45人
右手の為のコンチェルト	5年5月3日(月)		35人
アンディー・ウォーホール	5年6月26日(土)		55人
クリスト制作中	5年7月3日(土)		35人
世界美の旅：ルノワール／セザンヌ	5年8月21日(土)		50人
世界美の旅：マネ／モネ	5年9月4日(土)		24人
伴大納言絵巻／鳥獣人物戯画／信貴山縁起絵巻	5年10月10日(日)		58人
厳島神社／熊野速玉大社／春日大社	5年11月7日(日)		51人
滲みの感覚／空間のドラマー厳島神社管弦祭り	5年12月4日(土)		16人
風月のデザインー遠像と近像／水平と垂直	6年1月23日(日)		48人
世界美の旅：ゴッホ／ゴーギャン	6年2月20日(日)		67人

上映作品名	期日	共催	参加人数
世界美の旅：ミレー／スーラ	6年3月21日(月)		28人
計	12回		512人

平成6(1994)年度

漢詩紀行：李白／杜甫	6年4月17日(日)		43人
漢詩紀行 蘇東坡ほか／白楽天ほか	6年5月15日(日)		37人
動物たちの王国・アラスカから生中継	6年6月18日(土)		185人
動物たちの王国・アラスカから生中継	6年7月2日(土)		220人
世界美の旅：ルノワール／モネ	6年8月20日(土)		70人
世界美の旅：ピカソ／セザンヌ	6年9月10日(土)		68人
ミロのヴィーナス	6年10月23日(日)		23人
ループルへの招待	6年11月3日(木)		40人
ギルバート&ジョージの世界	6年12月28日(水)		13人
アンディー・ウォーホール	7年1月7日(土)		11人
シルクロード：遥かなり長安／黄河を越えて	7年2月19日(日)		33人
計	11回		743人

平成7(1995)年度

シルクロード 敦煌・幻の黒水城	7年4月23日(日)		38人
故宫博物院の名蹟／ボストン美術館	7年5月7日(日)		39人
京都の魅力 美のすべて：洛中／東山	7年6月10日(土)		58人
京都の魅力 美のすべて：洛北／洛西	7年7月8日(土)		62人
京都の魅力 美のすべて：洛中／東山	7年8月20日(日)		78人
京都の魅力 美のすべて：洛北／洛西	7年9月15日(金)		72人
版画家・小林敬生 一点中継・つくる／萩原英雄 美の世界	7年10月21日(土)		15人
版画家・小林敬生 一点中継・つくる／萩原英雄 美の世界	7年11月4日(土)		24人
版画家・小林敬生 一点中継・つくる／萩原英雄 美の世界	7年11月18日(土)		27人
美術のみかた ジャポニズムの時代 ほか	7年12月24日(日)		47人
京都の魅力 美のすべて 寺院の庭 ほか	8年1月13日(土)		85人
ダリとシュールレアリズム／デュシャン	8年2月17日(土)		35人
世界美の旅 スーラ／セザンヌ	8年3月9日(土)		25人
計	13回		605人

平成8(1996)年度

京都の魅力 美のすべて：京料理・京菓子／京細工	8年4月29日(月)		43人
-------------------------	------------	--	-----

上映作品名	期日	共催	参加人数
京都の魅力 美のすべて：葵祭／京舞 井上八千代	8年5月6日(月)		42人
京都の魅力 美のすべて：仙洞御所／京都御所	8年6月22日(土)		40人
京都の魅力 美のすべて：東寺／平等院	8年7月20日(土)		46人
NHKシルクロード：消えた隊商の民／草原の王国	8年8月24日(土)		41人
NHKシルクロード：灼熱黒砂漠／絹と十字架	8年9月7日(土)		48人
京都の魅力 美のすべて 桂離宮／修学院離宮	8年10月26日(土)		64人
京都の魅力 美のすべて：茶の湯／生け花	8年11月23日(土)		58人
世界美の旅：ルノワール／ゴーギャン	8年12月23日(月)		38人
世界美の旅：ピカソ／セザンヌ	9年1月25日(土)		30人
ブラック 新しい地平	9年2月22日(土)		25人
ミュシャ 愛の世界	9年3月22日(土)		15人
計	12回		490人

平成9(1997)年度

美術のみかた：透視図法／近代の人間像	9年4月26日(土)		18人
日本の美：光と影／もう一つの日本美	9年5月24日(土)		19人
NHKシルクロード 敦煌	9年6月14日(土)		23人
NHKシルクロード 楼蘭王国を掘る	9年7月12日(土)		13人
漢詩紀行：李白／杜甫	9年8月23日(土)		48人
漢詩紀行：白楽天／李白と杜甫	9年9月13日(土)		45人
東山魁夷 山雲濤声／上村松篁 花鳥を描く	9年10月11日(土)		22人
日本のアヴァンギャルド	9年11月8日(土)		15人
国宝：中宮寺・広隆寺／東寺	9年12月23日(火)		62人
国宝：室生寺・神護寺／十一面観音	10年1月24日(土)		164人
NHKシルクロード 流砂の道 西域南道200キロ	10年2月14日(土)		21人
NHKシルクロード 砂漠の民 ウィグルのオアシス・ホータン	10年3月14日(土)		23人
計	12回		473人

平成10(1998)年度

NHKシルクロード 熱砂のオアシス・トルファン	10年4月25日(土)		21人
NHKシルクロード 天山を貫く－南疆鉄道	10年5月23日(土)		18人
漢詩紀行 三国志の世界を行く	10年6月21日(日)		38人
漢詩紀行：蘇東坡と王安石／李昱と陳叔宝	10年7月18日(土)		37人
京都の魅力 美のすべて：三千院・醍醐寺／金閣寺・銀閣寺	10年8月23日(日)		90人
京都の魅力 美のすべて：西陣織・京友禅／数奇屋の美	10年9月12日(土)		47人

上映作品名	期日	共催	参加人数
NHKシルクロード 天山南路・音楽の旅	10年10月31日(土)		26人
NHKシルクロード 天馬の故郷・天山北路	10年11月7日(土)		31人
マルセル・デュシャン事件	10年12月27日(土)		34人
アンディ・ウォーホル	11年1月23日(土)		33人
NHKシルクロード 民族の十字路—カシュガルからパミールへ	11年2月13日(土)		31人
NHKシルクロード パミールを越えて	11年3月13日(土)		12人
計	12回		418人

平成11(1999)年度

現代建築家シリーズ 安藤忠雄	11年4月25日(日)		23人
現代建築家シリーズ 黒川紀章	11年5月16日(日)		33人
国宝法隆寺 I・II	11年6月20日(日)		45人
国宝東大寺 I・II	11年7月25日(日)		53人
NHKシルクロード 覇王の道	11年8月21日(土)		39人
NHKシルクロード 秘境ラダック	11年9月19日(日)		37人
漢詩紀行 詩聖杜甫 長安詠懐／詩聖杜甫 西南放浪	11年10月17日(日)		36人
漢詩紀行 項羽と劉邦／陶淵明と謝靈運	11年11月3日(水)		38人
現代建築家シリーズ 磯崎新	11年12月25日(土)		32人
現代建築家シリーズ 黒川紀章	12年1月22日(土)		23人
川本喜八郎制作アニメ「花折り」「道成寺」「詩人の生涯」	12年2月20日(日)		120人
川本喜八郎制作アニメ「火宅」「いばら姫またはねむり姫」	12年3月19日(日)		147人
計	12回		626人

平成12(2000)年度

セザンヌ—12通の手紙／モネ—印象派の巨匠	12年4月23日(日)		40人
マネ—落選した名画／ゴッホ—アルルのひまわり	12年5月14日(日)		29人
スーラ—点描の画家／ゴーギャン—野生へのあこがれ	12年6月11日(日)		61人
ブルシャンプルー—世界を巡った謎の青／ピカソ—若き日の天才画家	12年7月9日(日)		76人
砂漠とコーラン	12年8月26日(土)		46人
草原の王都—サマルカンド・ブハラ	12年9月3日(日)		64人
日本の美 滲みの感覚／日本の美 光と影	12年10月28日(土)		11人
近世異端の画家蕭白／唐招提寺への道—山雲濤声	12年11月25日(土)		61人
エマク・バキア／細江英公関連ビデオ	12年12月23日(土)		38人
サイコロ城の秘密／細江英公関連ビデオ	13年1月6日(土)		51人
ビデオ対談—守屋行彬VS齊藤義重 ほか	13年2月24日(土)		10人

上映作品名	期日	共催	参加人数
版画の技法と表現 木版画／版画の技法と表現 銅版画	13年3月17日(土)		11人
計	12回		498人

平成13(2001)年度

版画の技法と表現 銅版画／版画の技法と表現 中林忠良	13年4月15日(日)		25人
版画の技法と表現 銅版画	13年5月6日(日)		24人
故宮博物院の名蹟／漢詩紀行：詩聖杜甫・江湖漂泊	13年6月3日(日)		31人
漢詩紀行：蘇東坡と王安石／陶淵明と謝靈運	13年7月1日(日)		65人
シルクロード 玄奘三藏・天竺の旅	13年8月25日(土)		32人
磯井正美のわざー蒔醬の美	13年9月9日(日)		40人
日本の美 水平と垂直／画家カラヴァッジオの犯罪Ⅰ	13年10月13日(土)		35人
日本の美：もう一つの日本美／画家カラヴァッジオの犯罪Ⅱ	13年11月3日(土)		31人
北斎／幕間	13年12月9日(日)		38人
北斎／ひとで	14年1月26日(土)		101人
ピカソの20世紀シリーズ～ブラック 新しい地平／ミュシャ 愛の世界	14年2月23日(土)		33人
修学院離宮／シルクスクリーンベティさんの美術館	14年3月10日(日)		23人
計	12回		478人

平成14(2002)年度

画家の技法／印象派と後期印象派	14年4月28日(日)		31人
洛中／東山	14年5月4日(土)		45人
洛北／キュビズムとモダニズム	14年6月23日(日)		45人
洛西／セザンヌとルノワールの水浴図～モダニズムとヌード	14年7月28日(日)		19人
京都御所・仙洞御所／未来派	14年8月11日(日)		13人
宮廷文化／クレールとミュンヘン一揆	14年9月29日(日)		32人
東寺／ダリとシュールレアリズム	14年10月26日(土)		32人
平等院／ピカソの「ゲルニカ」	14年11月3日(日)		55人
三千院・醍醐寺／抽象表現主義	14年12月23日(月)		34人
金閣寺・銀閣寺／マルセル・デュシャン	15年1月13日(月)		34人
桂離宮／石版画／ジョルジョ・メリエス小作品集	15年2月23日(日)		21人
修学院離宮／シルクスクリーン／ベティさんの美術館	15年3月15日(土)		25人
計	12回		386人

平成15(2003)年度

寺院の庭／バリ 一近代のカレイドスコープ	15年4月20日(日)		16人
----------------------	-------------	--	-----

上映作品名	期日	共催	参加人数
二条城／マティスと表現の問題	15年5月18日(日)		16人
杜十娘	15年6月15日(日)		21人
配所のくらしー蘇東坡と王安石／京の行事	15年7月6日(日)		56人
葵祭／写実と絵画について	15年8月23日(土)		21人
祇園祭／グリーンバーグの美術批評	15年9月27日(土)		7人
京料理・京菓子／スミッソンとセラー モダニズムを越えて	15年10月5日(日)		21人
アンダルシアの犬／西陣織・京友禅	15年11月15日(土)		26人
白黒サイレントムービー カリガリ博士	15年12月9日(火)		17人
白黒サイレントムービー カリガリ博士	15年12月10日(水)		12人
白黒サイレントムービー カリガリ博士	15年12月26日(金)		10人
白黒サイレントムービー カリガリ博士	15年12月27日(土)		12人
白黒サイレントムービー カリガリ博士	16年1月6日(火)		14人
白黒サイレントムービー カリガリ博士	16年1月7日(水)		9人
白黒サイレントムービー カリガリ博士	16年1月17日(土)		31人
京細工／貝殻と僧侶	16年2月11日(水・祝)		13人
朝食前の幽霊／数寄屋の美／茶の湯	16年3月6日(土)		12人
計	17回		314人

平成16(2004)年度

生け花／ループルへの招待Ⅰ	16年4月24日(土)		28人
ループルへの招待Ⅱ／京舞 井上八千代	16年5月23日(日)		24人
ループルへの招待Ⅲ／大蔵流狂言 茂山千五郎	16年6月27日(日)		20人
ポツィチェルリ／古典主義からロマン主義へ	16年7月11日(日)		17人
ティツィアーノ／自然への情熱	16年8月15日(日)		19人
レンブラント／レアリスムの挑戦	16年9月12日(日)		17人
印象派Ⅰ／ラ・トゥール	16年10月24日(日)		14人
印象派Ⅱ／クリムト	16年11月13日(土)		13人
炎熱・イラン南道	16年12月25日(土)		14人
はるかなる大苑	17年1月10日(月)		20人
バレエ・メカニック／印象派Ⅲ	17年2月12日(土)		15人
ベティさんの醜いアヒルの子／ドガ、ルノワール	17年3月12日(土)		11人
計	12回		212人

平成17(2005)年度

ユトリロー悲しみの白／印象派から現代へⅠーセザンヌ	17年4月16日(土)		17人
---------------------------	-------------	--	-----

上映作品名	期日	共催	参加人数
ムンクー叫びに込められたメッセージ/印象派から現代へⅡーゴッホ	17年5月7日(土)		46人
ルーブル美術館の彫刻ーミロのヴィーナス/ 世界美の旅シリーズーガウディーとジョジュール	17年6月25日(土)		20人
エルミタージュ美術館(上巻)	17年7月18日(月)		20人
エルミタージュ美術館(下巻)	17年8月20日(土)		18人
世界の旅シリーズークレー 近代美術 近代美術 実践と論争シリーズー植民地との遭遇	17年9月10日(土)		20人
世界の旅シリーズーカンディンスキー 近代美術 実践と論争シリーズーロダン	17年10月23日(日)		11人
世界の旅シリーズーレオナルド・ダ・ヴィンチ 近代美術 実践と論争シリーズー旗	17年11月12日(土)		18人
世界の旅シリーズーラファエロー 聖母子の画家とその恋人 近代美術 実践と論争シリーズーモンドリアンの芸術	17年12月25日(日)		12人
世界の旅シリーズーベラスケスー 素顔の宮廷画家/近代美術 実践と論争シリーズーベルト・モリゾ、キャスリーン・アドラーのインタヴュー	18年1月14日(土)		12人
エミール・コール作品集/世界美の旅シリーズーゴヤー魅惑のマハ	18年2月25日(土)		11人
ウィンザー・マッケイ「小さなネモ」/世界美の旅シリーズールーベンス	18年3月18日(土)		9人
計	12回		214人

平成18(2006)年度

上村松篁/美術のみかたシリーズ 光と影	18年4月16日(日)		23人
東山魁夷/美術のみかたシリーズ 見えるままに描くまで	18年5月7日(日)		28人
小林秀雄/美術のみかたシリーズ 透視画法	18年6月11日(日)		43人
NHK京都の魅力シリーズ 茶の湯/美術のみかたシリーズ 近代の人間像	18年7月1日(土)		49人
New York Artists Video File 1	18年7月30日(日)		18人
New York Artists Video File 2	18年8月12日(土)		15人
琳派の系譜/美術のみかたシリーズ ジャポニズムの時代	18年9月17日(日)		12人
滲みの感覚/美術のみかたシリーズ セザンヌと造形	18年10月14日(土)		24人
ピカソのカラー・ジュ1912~13年/生成する色彩 加納光於の世界	18年11月12日(日)		16人
クリスト:制作中	18年12月3日(日)		15人
版画の技法と表現シリーズ 木版画 美術のみかたシリーズ 絵画を読む	19年2月17日(土)		24人
白黒サイレントムービー カリガリ博士	19年3月17日(土)		14人
計	12回		281人

平成19(2007)年度

名画の秘密シリーズ オルセー美術館	19年4月8日(日)		14人
名画の秘密シリーズ パリの夜と夢	19年5月13日(日)		8人

上映作品名	期日	共催	参加人数
大辻清司「上原二丁目」他	19年6月10日(日)		28人
大辻清司 映像短編集	19年7月15日(日)		32人
漢詩紀行11 三国志の歴史を行く	19年8月4日(土)		33人
漢詩紀行12 三国志の歴史を行く／漢詩紀行1 李白	19年9月9日(日)		25人
名画の秘密シリーズ 浮世絵とジャポニズム	19年10月20日(土)		28人
名画の秘密シリーズ 浮世絵とジャポニズム	19年11月17日(土)		59人
故宮博物院の名蹟	19年12月16日(日)		25人
故宮博物院の名蹟 故宮／書法之美	20年1月13日(日)		25人
世界美の旅シリーズ ポッティチェリ	20年2月16日(土)		22人
版画の技法と表現シリーズ 石版画			
すてきな三人組(アニメーション)／スイミー(アニメーション)	20年3月8日(土)		14人
計	12回		313人

平成20(2008)年度

中西夏之公開製作 二箇所	20年4月27日(日)		48人
中西夏之公開製作 二箇所	20年5月17日(土)		53人
レオナルド・ダ・ヴィンチ 永遠の微笑み レンブラント 光と影の自画像	20年6月28日(土)		41人
ブリュゲル1 風景画にひそむ寓意 ルーベンス ネロの愛したルーベンス	20年7月19日(土)		36人
世界絵本箱シリーズ まほうつかいのノナばあさん ハロルドまほうのくにへ	20年8月9日(土)		16人
世界美の旅シリーズ フェルメール／ロートレック	20年9月14日(日)		32人
宿命の女とラファエロ前派 ロセッティ、ミレイ 世紀末からのメッセージ ギュスターブモロー、クリムト	20年10月26日(日)		21人
世界美の旅シリーズ フェルメール／マリー・ローランサン	20年11月24日(月)		62人
日本の美シリーズ 日本人の原風景	20年12月14日(日)		31人
国宝シリーズ 鳥獣人物戯画			
日本の美シリーズ 日本の色／国宝シリーズ 源氏物語	21年1月24日(土)		25人
世界美の旅シリーズ クレー 版画の技法と表現シリーズ シルクスクリーン	21年2月21日(土)		8人
世界絵本箱シリーズ かいじゅうたちのいるところ ふしぎなおたまじゃくし	21年3月7日(土)		14人
計	12回		387人

平成21(2009)年度

故宮博物館の名蹟 国宝シリーズ 十一面観音	21年4月18日(土)		21人
-----------------------	-------------	--	-----

上映作品名	期日	共催	参加人数
故宮書方の美 国宝シリーズ 興福寺、当麻寺	21年5月16日(土)		21人
浮世絵とジャポニズム 世界美の旅シリーズ ゴッホ	21年8月1日(土)		30人
ミュシャ 愛の世界	21年10月10日(土)		21人
ゴッホ 心の旅	21年11月7日(土)		13人
レオナルド・ダ・ヴィンチ／東大寺Ⅰ	21年12月12日(土)		18人
ピカソ／東大寺Ⅱ	22年1月16日(土)		19人
ブラック 新しい地平	22年2月20日(土)		13人
世界絵本箱シリーズ ちょっとこわいおはなし ロージーのおさんぽ	22年3月13日(土)		6人
計	9回		162人

平成22(2010)年度

シルクスクリーン／ミロのビーナス	22年4月10日(土)		8人
石版画／プルシャンプルー	22年5月2日(日)		15人
シルクロードシリーズ 黄河を越えて	22年6月19日(土)		32人
国宝シリーズ：法隆寺Ⅰ／法隆寺Ⅱ	22年7月24日(土)		22人
オルセー美術館 セザンヌ	22年9月18日(土)		10人
世界美の旅シリーズ モネ／セザンヌ	22年10月2日(土)		16人
国宝シリーズ 東大寺Ⅰ／伴大納言絵巻	23年1月15日(土)		19人
国宝シリーズ 東大寺Ⅱ／源氏物語絵巻	23年1月22日(土)		46人
世界の美の旅シリーズ ボッティチェリ／国宝シリーズ ボストン美術館	23年2月19日(土)		23人
世界絵本箱シリーズ あつがりカバ／みにくいあひるのこ	23年3月5日(土)		6人
計	10回		197人

平成23(2011)年度

日本の美シリーズ 平泉・中尊寺	23年4月30日(土)		21人
国宝シリーズ 東大寺Ⅰ／Ⅱ	23年5月7日(土)		17人
カレル・ゼマン 悪魔の発明	23年6月25日(土)		104人
カレル・ゼマン ホンジークとマジエンカ	23年7月10日(日)		94人
国宝シリーズ 東寺／神護寺・室生寺	23年8月27日(土)		11人
国宝シリーズ 中尊寺金色堂／姫路城・日光東照宮	23年9月17日(土)		11人
芹沢銈介の美の世界／小林秀雄	23年10月30日(日)		26人
計	7回		284人

美術教室



コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
昭和56(1981)年度				
デッサン・コンテ・パステル	森芳雄・磯村敏之	57年1月30日～3月27日	毎土曜午後 9回	20人(166人)
計1コース				20人(166人)
昭和57(1982)年度				
前期				
デッサン・油絵・水彩	清原啓一・遠藤原三	57年4月28日～7月14日	毎水曜午前 12回	30人(72人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	57年5月1日～7月17日	毎土曜午後 12回	30人(115人)
中期				
デッサン・油絵・水彩	遠藤原三・宮田翁輔	57年9月22日～12月8日	毎水曜午後 12回	30人(66人)
デッサン・油絵・水彩	西嶋俊親・上田慧	57年9月17日～12月3日	毎金曜夜間 10回	30人(63人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	57年9月18日～12月4日	毎土曜午後 11回	30人(85人)
後期				
デッサン・油絵・水彩	遠藤原三・宮田翁輔	58年1月12日～3月23日	毎水曜夜間 11回	40人(41人)
油絵	西嶋俊親・上田慧	58年1月14日～3月25日	毎金曜午前 10回	40人(63人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	58年1月15日～3月26日	毎土曜午後 11回	40人(57人)
計8コース				270人(562人)
昭和58(1983)年度				
前期				
デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	58年4月20日～7月13日	毎水曜夜間 12回	30人(67人)
油絵	西嶋俊親・上田慧	58年4月22日～7月22日	毎金曜午前 12回	30人(52人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	58年5月7日～7月16日	毎土曜午後 11回	30人(113人)
中期				
デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	58年9月21日～12月7日	毎木曜夜間 12回	30人(84人)
油絵	西嶋俊親・上田慧	58年9月23日～12月16日	毎金曜午前 12回	30人(30人)
版画	畑農照雄・村上遊	58年10月1日～12月17日	毎土曜午後 11回	20人(56人)
後期				
日本画	荒井朝吉・久野千代子	59年1月13日～3月16日	毎金曜午前 10回	30人(44人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	59年1月14日～3月31日	毎土曜午後 10回	30人(74人)
計8コース				230人(520人)
昭和59(1984)年度				
前期				
デッサン・油絵	西嶋俊親・上田慧	59年4月27日～7月20日	毎金曜午前 12回	30人(55人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	59年4月28日～7月28日	毎土曜午後 12回	30人(106人)
デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	59年4月25日～11月21日	毎水曜夜間 24回	30人(79人)
中期				
日本画	荒井朝吉・久野千代子	59年9月19日～12月5日	毎水曜午前 12回	30人(41人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	59年9月22日～12月15日	毎土曜午後 11回	30人(93人)
後期				
版画	畑農照雄・山口秀昭	60年1月9日～3月27日	毎水曜午後 11回	20人(22人)
油絵	西嶋俊親・上田慧	60年1月11日～3月29日	毎金曜午後 11回	30人(25人)
計7コース				200人(421人)

昭和60(1985)年度

前期				
デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	60年4月17日～11月27日	毎水曜夜間 24回	30人(101人)
油絵	西嶋俊親・上田慧	60年4月19日～7月5日	毎金曜午前 12回	30人(55人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	60年4月27日～7月13日	毎土曜午後 12回	30人(98人)
中期				
版画	畑農照雄・山口英昭	60年9月13日～11月29日	毎金曜午後 12回	20人(29人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	60年9月14日～12月7日	毎土曜午後 12回	30人(140人)
後期				
日本画	荒井朝吉・久野千代子	61年1月8日～3月26日	毎水曜午前 11回	30人(60人)
油絵	西嶋俊親・上田慧	61年1月17日～3月28日	毎金曜午前 11回	30人(34人)
計7コース				200人(517人)

昭和61(1986)年度

前期				
デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	61年4月16日～7月16日	毎水曜夜間 12回	30人(64人)
油絵	西嶋俊親・上田慧	61年4月18日～7月4日	毎金曜午前 12回	30人(47人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	61年4月12日～7月12日	毎土曜午後 12回	30人(95人)
中期				
デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	61年9月10日～12月3日	毎水曜夜間 11回	30人(78人)
版画	畑農照雄・山口忠一	61年9月12日～11月28日	毎金曜午後 12回	20人(29人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之	61年9月13日～11月29日	毎土曜午後 12回	30人(98人)
後期				
日本画	荒井朝吉・久野千代子	62年1月14日～3月25日	毎水曜午前 11回	30人(37人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
油絵	西嶋俊親・上田慧	62年1月9日～3月27日	毎金曜午前 11回	30人(26人)
計8コース				230人(474人)

昭和62(1987)年度

前期

日本画	戸田康一・小川幸治	62年4月14日～6月30日	毎火曜午後 12回	20人(50人)
油絵	西嶋俊親・上田慧	62年4月17日～7月10日	毎金曜午前 12回	30人(54人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之・佐藤善勇	62年4月11日～7月25日	毎土曜午後 12回	30人(140人)

中期

デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	62年9月2日～12月2日	毎水曜夜間 11回	30人(76人)
版画	畑農照雄・山口忠一	62年9月11日～11月27日	毎金曜午後 12回	20人(24人)
デッサン	森芳雄・磯村敏之・佐藤善勇	62年9月5日～12月5日	毎土曜午後 11回	30人(102人)

後期

油絵	西嶋俊親・上田慧	63年1月12日～3月29日	毎火曜夜間 11回	30人(48人)
日本画	荒井朝吉・久野千代子	63年1月13日～3月30日	毎水曜午前 11回	30人(36人)
計8コース				220人(530人)

昭和63(1988)年度

前期

デッサン	磯村敏之・佐藤善勇	63年4月12日～7月12日	毎火曜夜間 12回	35人(67人)
日本画	戸田康一	63年4月13日～7月6日	毎水曜午後 12回	25人(29人)
デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	63年4月9日～7月23日	毎土曜午後 12回	35人(83人)

中期

デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	63年9月7日～11月23日	毎水曜夜間 12回	35人(96人)
版画	畑農照雄・山口忠一	63年9月2日～12月2日	毎金曜午後 12回	20人(20人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	63年9月3日～11月26日	毎土曜午後 12回	35人(66人)

後期

油絵	西嶋俊親・上田慧	元年1月10日～3月28日	毎火曜午前 11回	35人(54人)
日本画	荒井朝吉・久野千代子	元年1月11日～3月29日	毎水曜午前 10回	24人(24人)
計8コース				244人(439人)

平成元(1989)年度

前期

デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	元年4月4日～7月4日	毎火曜午後 12回	35人(55人)
日本画	戸田康一・小川幸治	元年4月6日～7月29日	毎木曜夜間 12回	25人(27人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
デッサン	磯村敏之・佐藤善勇	元年4月8日～7月15日	毎土曜午後 11回	35人(77人)
中期				
デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	元年9月6日～11月22日	毎水曜夜間 12回	35人(72人)
版画	畑農照雄・山口忠一	元年9月8日～12月8日	毎金曜午後 12回	21人(21人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	元年9月9日～11月25日	毎土曜午後 12回	35人(91人)
後期				
油絵	西嶋俊親・上田慧	2年1月23日～3月27日	毎火曜午前 9回	35人(76人)
日本画	荒井朝吉・久野千代子	2年1月24日～3月28日	毎水曜午前 10回	30人(41人)
計8コース				251人(460人)

平成2(1990)年度

前期				
水彩画	大和屋巖・北尾和子	2年4月10日～7月10日	毎火曜午後 12回	35人(60人)
デッサン・油絵	遠藤原三・宮田翁輔	2年4月11日～7月11日	毎水曜夜間 12回	35人(73人)
デッサン	磯村敏之・佐藤善勇	2年4月14日～7月7日	毎土曜午後 12回	35人(65人)
中期				
デッサン・油絵	磯村敏之・佐藤善勇	2年9月5日～11月28日	毎水曜夜間 12回	35人(99人)
版画	畑農照雄・山口忠一	2年9月7日～11月30日	毎金曜午後 12回	20人(16人)
日本画	戸田康一	2年9月1日～12月8日	毎土曜午後 12回	35人(38人)
後期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	3年1月15日～3月26日	毎火曜午前 10回	35人(77人)
日本画	荒井朝吉・久野千代子	3年1月9日～3月27日	毎水曜午前 10回	35人(53人)
計8コース				265人(481人)

平成3(1991)年度

前期				
水彩画	大和屋巖・北尾和子	3年4月9日～7月9日	毎火曜午後 12回	35人(50人)
油絵	遠藤原三・宮田翁輔	3年4月10日～7月17日	毎水曜夜間 12回	35人(78人)
デッサン	磯村敏之・佐藤善勇	3年4月13日～7月6日	毎土曜午後 11回	35人(75人)
中期				
油絵	遠藤原三・宮田翁輔	3年9月4日～11月27日	毎水曜夜間 11回	35人(86人)
版画	畑農照雄・山口忠一	3年9月6日～11月29日	毎金曜午後 12回	25人(18人)
日本画	戸田康一・田部井月四	3年9月7日～11月16日	毎土曜午後 10回	25人(40人)
後期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	4年1月21日～3月17日	毎火曜午前 9回	35人(42人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
日本画	荒井朝吉・久野千代子	4年1月22日～3月25日	毎水曜午前 9回	35人(38人)
計8コース				260人(427人)

平成4(1992)年度

前期

デッサン	磯村敏之・佐藤善勇	4年4月15日～6月24日	毎水曜午後 8回	35人(73人)
日本画	戸田康一	4年4月16日～7月2日	毎木曜午後 8回	20人(12人)
油絵	遠藤原三・宮田翁輔	4年4月17日～6月26日	毎金曜夜間 8回	35人(35人)

中期

油絵	遠藤原三・宮田翁輔	4年9月3日～11月5日	毎木曜夜間 8回	35人(35人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	4年9月4日～11月6日	毎金曜午後 8回	35人(50人)
版画	畑農照雄・山口忠一	4年9月5日～11月7日	毎土曜午前 8回	20人(15人)

後期

油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	5年1月13日～3月17日	毎水曜午前 7回	35人(42人)
日本画	荒井朝吉・久野千代子	5年1月16日～3月20日	毎土曜午前 7回	31人(31人)

計8コース

246人(293人)

平成5(1993)年度

前期

油絵	遠藤原三・宮田翁輔	5年4月15日～7月15日	毎木曜夜間 10回	30人(39人)
水彩画	松島靖・児崎昌子	5年4月16日～7月16日	毎金曜午後 10回	25人(46人)
デッサン	磯村敏之・佐藤善勇	5年4月10日～7月17日	毎土曜午後 10回	30人(69人)

中期

油絵	遠藤原三・宮田翁輔	5年8月26日～10月28日	毎木曜夜間 8回	30人(29人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	5年9月3日～11月12日	毎金曜午後 9回	30人(32人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	5年8月28日～11月13日	毎土曜午前 10回	25人(73人)

後期

油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	6年1月12日～3月23日	毎水曜午後 8回	30人(61人)
日本画	戸田康一	6年1月13日～3月24日	毎木曜午後 8回	20人(21人)

計8コース

220人(370人)

平成6(1994)年度

前期

油絵	遠藤原三・宮田翁輔	6年4月7日～7月7日	毎木曜夜間 10回	30人(77人)
水彩画	松島靖・児崎昌子	6年4月8日～7月8日	毎金曜午後 10回	30人(122人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
手作り創作絵本	岩田斉・帆足幾久子	6年4月9日～7月2日	毎土曜午前 10回	20人(29人)
中期				
デッサン	磯村敏之・佐藤善勇	6年9月7日～11月30日	毎水曜午後 9回	30人(63人)
版画	林美紀子・山崎香文子	6年8月19日～11月25日	毎金曜午後 10回	25人(14人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	6年8月20日～11月12日	毎土曜午前 10回	25人(68人)
後期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	7年1月11日～3月15日	毎水曜午後 9回	30人(41人)
日本画	戸田康一	7年1月12日～3月16日	毎木曜午後 7回	20人(12人)
計8コース				210人(426人)

平成7(1995)年度

前期				
油絵	廣畑正剛・一の瀬洋	7年4月11日～7月4日	毎火曜午後 10回	30人(44人)
パステル画	遠藤原三・宮田翁輔	7年4月13日～7月6日	毎木曜夜間 10回	30人(77人)
水彩画	松島靖・水野道子	7年4月14日～6月30日	毎金曜午後 10回	30人(87人)
中期				
銅版画	森野眞弓・小野芳浩	7年8月29日～12月12日	毎火曜午後 10回	20人(12人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	7年9月6日～12月6日	毎水曜午後 10回	30人(50人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	7年9月2日～11月18日	毎土曜午前 10回	30人(75人)
後期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	8年1月10日～3月13日	毎水曜午後 9回	30人(48人)
日本画	戸田康一	8年1月11日～3月14日	毎木曜午後 10回	20人(13人)
計8コース				220人(406人)

平成8(1996)年度

前期				
パステル画	遠藤原三・宮田翁輔	8年4月10日～7月10日	毎水曜夜間 10回	30人(76人)
人物画	高田明義・福田千恵子	8年4月11日～7月11日	毎木曜午後 10回	30人(65人)
水彩画	松島靖・水野道子	8年4月12日～7月12日	毎金曜午後 10回	30人(104人)
中期				
木版画	林美紀子・山崎香文子	8年9月5日～11月21日	毎木曜午後 10回	20人(23人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	8年9月6日～11月22日	毎金曜午後 10回	30人(55人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	8年9月7日～11月16日	毎土曜午前 9回	30人(80人)
後期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	9年1月8日～3月19日	毎水曜午後 8回	30人(34人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
日本画	戸田康一	9年1月23日～3月13日	毎木曜午後 8回	20人(14人)
計8コース				220人(451人)

平成9(1997)年度

前期				
油絵	高田明義	9年5月15日～7月17日	毎木曜午後 8回	30人(46人)
水彩画	松島靖・水野道子	9年5月16日～7月18日	毎金曜午後 8回	30人(72人)
後期				
木版画	林美紀子・山崎香文子	9年9月4日～10月30日	毎木曜午後 8回	20人(20人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	9年9月5日～11月7日	毎金曜夜間 8回	30人(64人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	9年9月6日～11月1日	毎土曜午前 8回	30人(101人)
計5コース				140人(303人)

平成10(1998)年度

前期				
水彩画	松島靖・水野道子	10年5月13日～7月15日	毎水曜午後 8回	30人(85人)
日本画	戸田康一	10年5月14日～7月16日	毎木曜午後 8回	20人(20人)
油絵	内山懋・茂登山東一郎	10年5月15日～7月17日	毎金曜午後 8回	30人(53人)
中期				
版画	林美紀子・山崎香文子	10年9月3日～11月5日	毎木曜午後 8回	20人(15人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	10年9月4日～11月6日	毎金曜夜間 8回	30人(40人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	10年9月5日～11月7日	毎土曜午前 8回	30人(66人)
後期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	11年1月20日～3月17日	毎水曜午後 8回	30人(46人)
水彩画	新出紀久雄・醍醐芳晴	11年1月22日～3月12日	毎金曜午後 8回	30人(62人)
計8コース				220人(387人)

平成11(1999)年度

前期				
水彩画	大和屋巖・北尾和子	11年5月8日～7月10日	毎土曜午前 8回	30人(62人)
パステル画	遠藤原三・宮田翁輔	11年5月12日～7月14日	毎水曜夜間 8回	30人(51人)
日本画	戸田康一	11年5月13日～7月15日	毎木曜午後 8回	20人(13人)
中期				
版画	林美紀子・山崎香文子	11年9月2日～11月18日	毎木曜午後 8回	20人(17人)
油絵	廣畑正剛・吉本 哲	11年9月10日～11月19日	毎金曜午後 8回	30人(33人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
デッサン	磯村敏之・佐藤善勇	11年9月18日～11月20日	毎土曜午後 8回	30人(80人)
後期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	12年1月12日～3月15日	毎水曜午後 8回	30人(39人)
水彩画	新出紀久雄・水野道子	12年1月14日～3月17日	毎金曜午後 8回	30人(62人)
計8コース				220人(357人)

平成12(2000)年度

前期				
日本画	戸田康一	12年5月11日～7月13日	毎水曜午後 8回	20人(9人)
油絵	内山懋・茂登山東一郎	12年5月12日～7月14日	毎金曜午後 8回	30人(37人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	12年5月13日～7月15日	毎土曜午前 8回	30人(73人)
中期				
水彩画	水野道子・粟田口博	12年9月6日～11月8日	毎水曜午後 8回	30人(55人)
木版画	林美紀子・山崎香文子	12年9月7日～11月9日	毎水曜午後 8回	20人(22人)
デッサン	磯村敏之・佐藤善勇	12年9月8日～11月10日	毎金曜夜間 8回	30人(70人)
後期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	13年1月10日～3月14日	毎水曜午後 8回	30人(31人)
水彩画	新出紀久雄・舟橋淳司	13年1月12日～3月16日	毎金曜午後 8回	30人(50人)
計8コース				220人(347人)

平成13(2001)年度

前期				
日本画	戸田康一	13年5月10日～7月26日	毎水曜午後 8回	20人(7人)
油絵	遠藤原三・宮田翁輔	13年5月11日～7月27日	毎金曜午後 8回	30人(34人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	13年5月12日～7月28日	毎土曜午前 8回	30人(84人)
中期				
木版画	林美紀子・山崎香文子	13年9月5日～11月7日	毎水曜午後 8回	20人(13人)
水彩画	水野道子・粟田口博	13年9月6日～11月8日	毎水曜午後 8回	30人(33人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	13年9月7日～11月9日	毎金曜夜間 8回	30人(31人)
後期				
水彩画	新出紀久雄・舟橋淳司	14年1月10日～3月14日	毎水曜午後 8回	30人(43人)
油絵	内山懋・茂登山東一郎	14年1月11日～3月15日	毎金曜午後 8回	30人(23人)
計8コース				160人(268人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
平成14(2002)年度				
前期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	14年5月29日～7月13日	毎水曜午後 8回	30人(34人)
デッサン・パステル	遠藤原三・宮田翁輔	14年5月31日～8月2日	毎金曜午後 8回	30人(73人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	14年6月1日～8月3日	毎土曜午前 8回	30人(59人)
中期				
木版画	林美紀子・山崎香文子	14年9月25日～11月20日	毎水曜午後 8回	30人(14人)
水彩画	水野道子・粟田口博	14年9月26日～11月21日	毎木曜午後 8回	30人(55人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	14年9月27日～11月22日	毎金曜夜間 8回	30人(43人)
後期				
水彩画	新出紀久雄・舟橋淳司	15年1月9日～3月13日	毎木曜午後 8回	30人(57人)
油絵	内山懋・茂登山東一郎	15年1月10日～3月14日	毎金曜午後 8回	30人(28人)
計8コース				240人(363人)

平成15(2003)年度

前期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	15年5月7日～7月9日	毎水曜午後 8回	30人(34人)
パステル	遠藤原三・宮田翁輔	15年5月9日～7月11日	毎金曜午後 8回	30人(47人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	15年5月10日～7月12日	毎土曜午前 8回	30人(44人)
中期				
デッサン・油絵	和田義彦	15年9月24日～11月19日	毎水曜午後 8回	20人(35人)
水彩画	水野道子・粟田口博	15年9月25日～11月20日	毎木曜午後 8回	30人(40人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	15年9月26日～11月21日	毎金曜夜間 8回	30人(32人)
後期				
水彩画	新出紀久雄・舟橋淳司	16年1月8日～3月11日	毎木曜午後 8回	30人(55人)
油絵	内山懋・茂登山東一郎	16年1月9日～3月12日	毎金曜午後 8回	30人(32人)
計8コース				230人(319人)

平成16(2004)年度

前期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	16年5月12日～7月14日	毎水曜午後 8回	30人(40人)
パステル	遠藤原三・宮田翁輔	16年5月14日～7月16日	毎金曜午後 8回	30人(37人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	16年5月15日～7月17日	毎土曜午前 8回	30人(59人)
中期				
油絵(初級)	廣畑正剛・一の瀬洋	16年9月15日～11月17日	毎水曜午後 8回	30人(24人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
水彩画	水野道子・粟田口博	16年9月9日～11月18日	毎木曜午後 8回	30人(47人)
油絵(中級)	磯村敏之・佐藤善勇	16年9月17日～11月19日	毎金曜夜間 8回	30人(25人)
後期				
水彩画	新出紀久雄・舟橋淳司	17年1月13日～3月17日	毎木曜午後 8回	30人(52人)
油絵	内山懋・茂登山東一郎	17年1月14日～3月18日	毎金曜午後 8回	30人(37人)
計8コース				240人(321人)

平成17(2005)年度

前期				
油絵	西嶋俊親・佐久間公憲	17年5月11日～7月13日	毎水曜午後 8回	30人(36人)
パステル	遠藤原三・宮田翁輔	17年5月13日～7月15日	毎金曜午後 8回	30人(72人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	17年5月14日～7月16日	毎土曜午前 8回	30人(57人)
中期				
水彩画	水野道子・粟田口博	17年9月7日～11月9日	毎水曜午後 8回	30人(51人)
木版画	林美紀子・山崎香文子	17年9月8日～11月10日	毎木曜午後 8回	20人(14人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	17年9月9日～11月18日	毎金曜夜間 8回	30人(32人)
後期				
水彩画	新出紀久雄・舟橋淳司	18年1月12日～3月16日	毎木曜午後 8回	30人(47人)
油絵	内山懋・茂登山東一郎	18年1月13日～3月17日	毎金曜午後 8回	30人(41人)
計8コース				230人(350人)

平成18(2006)年度

前期				
デッサン・パステル	西嶋俊親・佐久間公憲	18年5月31日～6月28日	毎水曜午後 5回	30人(50人)
油絵	内山懋・茂登山東一郎	18年6月2日～6月30日	毎金曜午後 5回	30人(27人)
水彩画	大和屋巖・北尾和子	18年6月3日～7月1日	毎土曜午前 5回	30人(40人)
中期				
小中学生と初心者のためのデッサン・水彩画	水野道子・粟田口博	18年7月26日～8月23日	毎水曜午後 5回	30人(50人)
デッサン・パステル	遠藤原三・宮田翁輔	18年7月28日～8月25日	毎金曜午後 5回	30人(32人)
後期				
水彩画	新出紀久雄・舟橋淳司	18年9月13日～10月11日	毎水曜午後 5回	30人(20人)
日本画	戸田康一	18年9月14日～10月12日	毎木曜午後 5回	20人(23人)
油絵	磯村敏之・佐藤善勇	18年9月15日～10月13日	毎金曜夜間 5回	30人(26人)
計8コース				230人(268人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
平成19(2007)年度				
前期				
デッサン・パステル	西嶋俊親	19年6月6日～7月4日	毎水曜午後 5回	25人(31人)
油絵	茂登山東一郎	19年6月8日～7月6日	毎金曜午後 5回	25人(23人)
水彩画	北尾和子	19年6月9日～7月7日	毎土曜午前 5回	25人(31人)
中期				
水彩画	水野道子	19年8月15日～9月12日	毎水曜午後 5回	25人(20人)
パステル	内山懋	19年8月16日～9月13日	毎木曜午後 5回	25人(26人)
油絵	宮田翁輔	19年8月17日～9月14日	毎金曜午後 5回	25人(14人)
後期				
水彩画	新出紀久雄・舟橋淳司	19年10月24日～11月21日	毎水曜午後 5回	25人(29人)
油絵	山崎弘	19年10月26日～11月23日	毎金曜夜間 5回	25人(28人)
計8コース				200人(202人)

平成20(2008)年度

前期				
はじめての日本画	戸田康一	20年4月8日～5月20日	毎火曜午後 7回	15人(8人)
油絵	遠藤原三	20年4月18日～5月16日	毎金曜午後 5回	25人(15人)
水彩画	新出紀久雄・舟橋淳司	20年4月26日～5月24日	毎土曜午前 5回	25人(21人)
中期				
水彩画	水野道子	20年6月18日～7月16日	毎水曜午後 5回	25人(32人)
はじめての油絵・パステル	西嶋俊親	20年6月5日～7月11日	毎木曜午後 7回	20人(23人)
水彩・パステル	内山懋	20年6月13日～7月11日	毎金曜午後 5回	25人(38人)
後期				
油絵	茂登山東一郎	20年10月10日～11月21日	毎金曜夜間 7回	25人(29人)
水彩画	北尾和子	20年10月25日～11月22日	毎土曜午前 5回	30人(50人)
計8コース				190人(216人)

平成21(2009)年度実績

前期				
油絵	山崎弘	21年4月17日～5月15日	毎金曜午後 5回	25人(24人)
水彩画	舟橋淳司	21年4月19日～5月17日	毎日曜午前 5回	25人(31人)
中期				
水彩画	水野道子	21年8月1日～9月12日	毎土曜午前 6回	25人(41人)
油絵	廣畑正剛	21年8月2日～9月13日	毎日曜午前 6回	25人(21人)

コース	講師	期間	コース	定員(応募者)
小中学生のための 絵画教室	北尾和子	21年8月25日～8月27日	火-木午後連続 3回	20人(21人)
後期				
パステル	西嶋俊親	21年10月8日～11月12日	毎木曜午後 6回	25人(43人)
油絵	茂登山東一郎	21年10月9日～11月13日	毎金曜午後 6回	25人(18人)
パステル・油彩	内山懋	21年10月10日～11月14日	毎土曜午前 6回	25人(17人)
計8コース				195人(216人)

平成22(2010)年度実績

前期				
水彩画	水野道子	22年4月14日～5月19日	毎水曜午後 6回	25人(30人)
油絵	宮田翁輔	22年4月18日～5月23日	毎日曜午前 6回	25人(24人)
中期				
小中学生のための 立体アート教室	山崎香文子	22年8月26日～8月28日	木-土午後連続 3回	20人(48人)
後期				
油絵	茂登山東一郎	22年9月2日～9月30日	毎木曜午後 5回	25人(26人)
水彩画	小沢優子	22年9月5日～10月3日	毎日曜午前 5回	25人(48人)
計5コース				120人(176人)

平成23(2011)年度実績

前期				
パステル	宮田翁輔	23年6月24日～7月22日	毎金曜午後 5回	25人(41人)
水彩画	小沢優子	23年6月25日～7月23日	毎土曜午前 5回	25人(35人)
中期				
小学生のための 立体アート教室	山崎香文子	23年8月17日～19日	水-金午後連続 3回	20人(22人)
水彩画	水野道子	23年10月12日～11月9日	毎水曜午後 5回	25人(40人)
油絵	山崎弘	23年10月13日～11月10日	毎木曜午後 5回	25人(31人)
計5コース				120人(169人)



講師	期日	参加人数
昭和57(1982)年度		
磯村敏之(洋画家)、榎戸真喜(版画家)	57年11月21日(日)	1人
磯村敏之(洋画家)、榎戸真喜(版画家)	57年11月23日(火)	3人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年1月23日(日)	17人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年2月27日(日)	8人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年3月27日(日)	4人
計	5回	33人
昭和58(1983)年度		
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年4月24日(日)	3人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年5月22日(日)	7人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年6月26日(日)	4人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年7月24日(日)	8人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年8月7日(日)	6人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年9月25日(日)	12人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年10月23日(日)	8人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	58年11月27日(日)	4人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)、畑農照雄(版画家)	58年12月18日(日)	5人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	59年1月15日(日)	3人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	59年2月26日(日)	6人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	59年3月25日(日)	3人
計	12回	69人
昭和59(1984)年度		
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	59年4月29日(日)	4人
遠藤原三(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	59年5月20日(日)	4人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	59年6月24日(日)	5人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	59年7月22日(日)	6人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	59年8月4日(土)	5人
磯村敏之(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	59年9月23日(日)	6人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	59年10月20日(土)	5人
西嶋俊親(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	59年11月25日(日)	7人
遠藤原三(洋画家)、畑農照雄(版画家)	59年12月16日(日)	5人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	60年1月15日(火)	9人
宮田翁輔(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	60年2月17日(日)	2人

講師	期日	参加人数
西嶋俊親(洋画家)、飯田満佐子(日本画家)	60年3月3日(日)	7人
計	12回	65人

昭和60(1985)年度

遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	60年4月28日(日)	7人
磯村敏之(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	60年5月19日(日)	6人
宮田翁輔(洋画家)、畑農照雄(版画家)	60年6月16日(日)	1人
西嶋俊親(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	60年7月7日(日)	7人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	60年8月25日(日)	6人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	60年9月22日(日)	7人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	60年11月4日(月)	6人
西嶋俊親(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	60年12月1日(日)	8人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	61年1月15日(日)	8人
磯村敏之(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	61年2月23日(日)	8人
宮田翁輔(洋画家)、飯田満佐子(日本画家)	61年3月16日(日)	4人
計	11回	68人

昭和61(1986)年度

西嶋俊親(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	61年4月20日(日)	6人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	61年5月18日(日)	6人
磯村敏之(洋画家)、飯田満佐子(日本画家)	61年6月22日(日)	8人
宮田翁輔(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	61年7月6日(日)	5人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	61年8月3日(日)	7人
西嶋俊親(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	61年8月24日(日)	9人
西嶋俊親(洋画家)、戸田康一(日本画家)	61年10月19日(日)	8人
宮田翁輔(洋画家)、戸田康一(日本画家)	61年11月16日(日)	4人
西嶋俊親(洋画家)、畑農照雄(版画家)	61年12月21日(日)	7人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	62年1月25日(日)	7人
磯村敏之(洋画家)、戸田康一(日本画家)	62年2月14日(土)	3人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	62年3月7日(土)	5人
計	12回	75人

昭和62(1987)年度

西嶋俊親(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	62年4月26日(日)	5人
遠藤原三(洋画家)、畑農照雄(版画家)	62年5月17日(日)	6人

講師	期日	参加人数
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	62年6月21日(日)	2人
磯村敏之(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	62年7月19日(日)	9人
西嶋俊親(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	62年8月16日(日)	10人
遠藤原三(洋画家)、戸田康一(日本画家)	62年9月6日(日)	4人
佐藤善勇(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	62年10月18日(日)	7人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	62年11月15日(日)	9人
畑農照雄(版画家)、戸田康一(日本画家)	62年12月27日(日)	6人
宮田翁輔(洋画家)、滝沢具幸(日本画家)	63年1月24日(日)	6人
西嶋俊親(洋画家)、戸田康一(日本画家)	63年2月7日(日)	6人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	63年3月21日(日)	4人
計	12回	74人

昭和63(1988)年度

佐藤善勇(洋画家)、戸田康一(日本画家)	63年4月24日(日)	7人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	63年5月15日(日)	7人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	63年6月26日(日)	8人
磯村敏之(洋画家)、戸田康一(日本画家)	63年7月17日(日)	6人
遠藤原三(洋画家)、戸田康一(日本画家)	63年8月28日(日)	9人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	63年9月18日(日)	7人
磯村敏之(洋画家)、畑農照雄(版画家)	63年10月30日(日)	14人
西嶋俊親(洋画家)、戸田康一(日本画家)	63年11月20日(日)	7人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	63年12月25日(日)	7人
宮田翁輔(洋画家)、戸田康一(日本画家)	元年1月22日(日)	6人
宮田翁輔(洋画家)、戸田康一(日本画家)	元年2月11日(土)	6人
遠藤原三(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	元年3月19日(日)	6人
計	12回	90人

平成元(1989)年度

宮田翁輔(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	元年4月16日(日)	6人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	元年5月28日(日)	9人
西嶋俊親(洋画家)、戸田康一(日本画家)	元年6月18日(日)	4人
磯村敏之(洋画家)、畑農照雄(版画家)	元年7月23日(日)	10人
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	元年8月20日(日)	8人
西嶋俊親(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	元年9月3日(日)	6人
磯村敏之(洋画家)、戸田康一(日本画家)	元年10月29日(日)	11人

講師	期日	参加人数
宮田翁輔(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	元年 11 月 5 日 (日)	5人
磯村敏之(洋画家)、畑農照雄(版画家)	元年 12 月 3 日 (日)	10人
西嶋俊親(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	2 年 1 月 28 日 (日)	5人
磯村敏之(洋画家)、畑農照雄(版画家)	2 年 2 月 25 日 (日)	13人
宮田翁輔(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	2 年 3 月 18 日 (日)	3人
計	12 回	90人

平成2(1990)年度

西嶋俊親(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	2 年 4 月 22 日 (日)	7人
磯村敏之(洋画家)、畑農照雄(版画家)	2 年 5 月 6 日 (日)	15人
宮田翁輔(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	2 年 6 月 24 日 (日)	2人
西嶋俊親(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	2 年 7 月 1 日 (日)	2人
磯村敏之(洋画家)、宮田翁輔(洋画家)	2 年 8 月 26 日 (日)	3人
遠藤原三(洋画家)、戸田康一(日本画家)	2 年 9 月 15 日 (日)	8人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	2 年 10 月 28 日 (日)	7人
遠藤原三(洋画家)、畑農照雄(版画家)	2 年 11 月 18 日 (日)	4人
戸田康一(日本画家)	2 年 12 月 16 日 (日)	3人
西嶋俊親(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	3 年 1 月 15 日 (火)	5人
西嶋俊親(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	3 年 2 月 10 日 (日)	6人
宮田翁輔(洋画家)、田部井月四(日本画家)	3 年 3 月 17 日 (日)	10人
計	12 回	72人

平成3(1991)年度

西嶋俊親(洋画家)、戸田康一(日本画家)	3 年 4 月 29 日 (月)	10人
遠藤原三(洋画家)、畑農照雄(版画家)	3 年 5 月 19 日 (日)	13人
磯村敏之(洋画家)、宮田翁輔(洋画家)	3 年 6 月 23 日 (日)	5人
佐久間公憲(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	3 年 7 月 28 日 (日)	7人
佐藤善勇(洋画家)、畑農照雄(版画家)	3 年 8 月 4 日 (日)	6人
宮田翁輔(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	3 年 9 月 29 日 (日)	8人
佐藤善勇(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	3 年 10 月 20 日 (日)	11人
佐久間公憲(洋画家)、畑農照雄(版画家)	3 年 11 月 3 日 (日)	6人
磯村敏之(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	3 年 12 月 15 日 (日)	13人
西嶋俊親(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	4 年 1 月 15 日 (水)	14人
宮田翁輔(洋画家)、戸田康一(日本画家)	4 年 2 月 9 日 (日)	3人

講師	期日	参加人数
佐久間公憲(洋画家)、佐藤善勇(洋画家)	4年3月22日(日)	8人
計	12回	104人

平成4(1992)年度

遠藤原三(洋画家)、畑農照雄(版画家)	4年4月26日(日)	9人
磯村敏之(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	4年5月17日(日)	6人
佐久間公憲(洋画家)、佐藤善勇(洋画家)	4年6月7日(日)	0人
宮田翁輔(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	4年7月5日(日)	14人
磯村敏之(洋画家)、畑農照雄(版画家)	4年8月8日(土)	8人
遠藤原三(洋画家)、戸田康一(日本画家)	4年9月6日(日)	16人
宮田翁輔(洋画家)、佐藤善勇(洋画家)	4年10月4日(日)	4人
西嶋俊親(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	4年11月3日(火)	15人
遠藤原三(洋画家)、畑農照雄(版画家)	4年12月6日(日)	5人
佐藤善勇(洋画家)、荒井朝吉(日本画家)	5年1月17日(日)	5人
磯村敏之(洋画家)、西嶋俊親(洋画家)	5年2月11日(木)	8人
宮田翁輔(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	5年3月21日(日)	12人
計	12回	102人

平成5(1993)年度

佐藤善勇(洋画家)、戸田康一(日本画家)	5年4月25日(日)	2人
遠藤原三(洋画家)、佐久間公憲(洋画家)	5年5月16日(日)	1人
宮田翁輔(洋画家)、畑農照雄(版画家)	5年6月19日(土)	14人
磯村敏之(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	5年7月10日(土)	17人
遠藤原三(洋画家)、佐藤善勇(洋画家)	5年8月14日(土)	7人
佐久間公憲(洋画家)、戸田康一(日本画家)	5年9月12日(日)	7人
磯村敏之(洋画家)、畑農照雄(版画家)	5年10月16日(土)	15人
佐久間公憲(洋画家)、松島靖(水彩画家)	5年11月3日(水)	6人
宮田翁輔(洋画家)、戸田康一(日本画家)	5年12月5日(日)	5人
磯村敏之(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	6年1月29日(土)	5人
佐藤善勇(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	6年2月19日(土)	14人
宮田翁輔(洋画家)、畑農照雄(版画家)	6年3月20日(日)	10人
計	12回	103人

平成6(1994)年度

戸田康一(日本画家)、松島靖(水彩画家)	6年4月24日(日)	6人
----------------------	------------	----

講師	期日	参加人数
西嶋俊親(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	6年5月22日(日)	8人
佐久間公憲(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	6年6月19日(日)	11人
磯村敏之(洋画家)、児崎昌子(水彩画家)	6年7月3日(日)	10人
宮田翁輔(洋画家)、佐藤善勇(洋画家)	6年8月13日(日)	20人
岩田斉(絵本作家)、松島靖(水彩画家)	6年9月3日(土)	11人
佐久間公憲(洋画家)、戸田康一(日本画家)	6年10月16日(日)	7人
宮田翁輔(洋画家)、畑農照雄(版画家)	6年11月27日(日)	11人
西嶋俊親(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	6年12月24日(土)	10人
磯村敏之(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	7年1月21日(土)	15人
遠藤原三(洋画家)、松島靖(水彩画家)	7年2月12日(日)	8人
佐久間公憲(洋画家)、佐藤善勇(洋画家)	7年3月19日(日)	3人
計	12回	120人

平成7(1995)年度

磯村敏之(洋画家)、佐久間公憲(洋画家)	7年4月30日(日)	8人
宮田翁輔(洋画家)、戸田康一(日本画家)	7年5月21日(日)	4人
西嶋俊親(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	7年6月24日(土)	11人
佐藤善勇(洋画家)、松島靖(水彩画家)	7年7月22日(土)	8人
廣畑正剛(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	7年8月27日(日)	11人
佐久間公憲(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	7年9月3日(日)	28人
磯村敏之(洋画家)、戸田康一(日本画家)	7年10月28日(土)	6人
廣畑正剛(洋画家)、宮田翁輔(洋画家)	7年11月11日(土)	3人
遠藤原三(洋画家)、佐久間公憲(洋画家)	7年12月23日(土)	3人
佐藤善勇(洋画家)、松島靖(水彩画家)	8年1月15日(月)	6人
廣畑正剛(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	8年2月10日(土)	11人
佐藤善勇(洋画家)、戸田康一(日本画家)	8年3月16日(土)	5人
計	12回	104人

平成8(1996)年度

遠藤原三(洋画家)、小野芳浩(版画家)	8年4月21日(日)	5人
廣畑正剛(洋画家)、宮田翁輔(洋画家)	8年5月19日(日)	3人
佐久間公憲(洋画家)、松島靖(水彩画家)	8年6月23日(日)	4人
西嶋俊親(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	8年7月7日(日)	11人
宮田翁輔(洋画家)、戸田康一(日本画家)	8年8月25日(日)	8人
佐藤善勇(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	8年9月22日(日)	11人

講師	期日	参加人数
磯村敏之(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	8年10月19日(土)	10人
西嶋俊親(洋画家)、松島靖(水彩画家)	8年11月16日(土)	12人
佐藤善勇(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	8年12月21日(土)	8人
宮田翁輔(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	9年1月26日(日)	8人
佐久間公憲(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	9年2月23日(日)	20人
遠藤原三(洋画家)、松島靖(水彩画家)	9年3月15日(土)	9人
計	12回	109人

平成9(1997)年度

佐藤善勇(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	9年4月19日(土)	20人
佐久間公憲(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	9年5月17日(土)	18人
遠藤原三(洋画家)、松島靖(水彩画家)	9年6月21日(土)	9人
宮田翁輔(洋画家)、水野道子(水彩画家)	9年7月19日(土)	12人
西嶋俊親(洋画家)、戸田康一(日本画家)	9年8月31日(日)	16人
高田明義(洋画家)、林美紀子(版画家)	9年9月21日(日)	10人
宮田翁輔(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	9年10月18日(土)	19人
遠藤原三(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	9年11月1日(土)	16人
西嶋俊親(洋画家)、松島靖(水彩画家)	9年12月20日(土)	20人
佐久間公憲(洋画家)、戸田康一(日本画家)	10年1月25日(日)	25人
高田明義(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	10年2月21日(土)	12人
宮田翁輔(洋画家)、松島靖(水彩画家)	10年3月21日(土)	15人
計	12回	192人

平成10(1998)年度

内山懋(洋画家)、醍醐芳晴(水彩画家)	10年4月18日(土)	16人
佐藤善勇(洋画家)、水野道子(水彩画家)	10年5月16日(土)	5人
遠藤原三(洋画家)、戸田康一(日本画家)	10年6月28日(日)	10人
西嶋俊親(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	10年7月19日(日)	16人
茂登山東一郎(洋画家)、松島靖(水彩画家)	10年8月8日(土)	12人
宮田翁輔(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	10年9月6日(日)	14人
磯村敏之(洋画家)、水野道子(水彩画家)	10年10月17日(土)	13人
内山懋(洋画家)、戸田康一(日本画家)	10年11月14日(土)	11人
佐久間公憲(洋画家)、松島靖(水彩画家)	10年12月26日(土)	5人
遠藤原三(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	11年1月9日(土)	8人
宮田翁輔(洋画家)、松島靖(水彩画家)	11年2月20日(土)	9人

講師	期日	参加人数
茂登山東一郎(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	11年3月20日(土)	7人
計	12回	126人

平成11(1999)年度

宮田翁輔(洋画家)、戸田康一(日本画家)	10年4月24日(土)	1人
遠藤原三(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	10年5月15日(土)	15人
西嶋俊親(洋画家)、松島靖(水彩画家)	10年6月12日(土)	8人
佐藤善勇(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	10年7月10日(土)	21人
内山懋(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	10年8月14日(土)	3人
茂登山東一郎(洋画家)、醍醐芳晴(水彩画家)	10年9月11日(土)	8人
磯村敏之(洋画家)、宮田翁輔(洋画家)	10年10月31日(日)	9人
佐藤善勇(洋画家)、戸田康一(日本画家)	10年11月21日(日)	10人
廣畑正剛(洋画家)、林美紀子(版画家)	10年12月26日(日)	12人
遠藤原三(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	11年1月29日(土)	17人
西嶋俊親(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	11年2月26日(土)	16人
磯村敏之(洋画家)、水野道子(水彩画家)	11年3月18日(土)	15人
計	12回	135人

平成12(2000)年度

宮田翁輔(洋画家)、戸田康一(日本画家)	12年4月22日(土)	3人
遠藤原三(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	12年5月13日(土)	16人
佐久間公憲(洋画家)、水野道子(水彩画家)	12年6月25日(日)	18人
茂登山東一郎(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	12年7月16日(日)	16人
内山懋(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	12年8月5日(土)	14人
宮田翁輔(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	12年9月16日(土)	21人
遠藤原三(洋画家)、水野道子(水彩画家)	12年10月15日(日)	13人
西嶋俊親(洋画家)、戸田康一(日本画家)	12年11月5日(日)	10人
宮田翁輔(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	12年12月23日(土)	18人
茂登山東一郎(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	13年1月27日(土)	2人
西嶋俊親(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	13年2月17日(土)	17人
内山懋(洋画家)、水野道子(水彩画家)	13年3月10日(土)	4人
計	12回	152人

平成13(2001)年度

西嶋俊親(洋画家)、舟橋淳司(水彩画家)	13年4月21日(土)	13人
----------------------	-------------	-----

講師	期日	参加人数
遠藤原三(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	13年5月12日(土)	19人
廣畑正剛(洋画家)、山崎香文子(版画家)	13年6月10日(日)	6人
佐藤善勇(洋画家)、佐久間公憲(洋画家)	13年7月8日(日)	6人
戸田康一(日本画家)、茂登山東一郎(洋画家)	13年8月18日(土)	9人
宮田翁輔(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	13年9月2日(日)	8人
内山懋(洋画家)、林美紀子(版画家)	13年10月7日(日)	7人
佐久間公憲(洋画家)、水野道子(水彩画家)	13年11月11日(日)	5人
遠藤原三(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	13年12月22日(土)	12人
宮田翁輔(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	14年1月27日(日)	15人
西嶋俊親(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	14年2月16日(土)	20人
戸田康一(日本画家)、茂登山東一郎(洋画家)	14年3月16日(土)	3人
計	12回	123人

平成14(2002)年度

内山懋(洋画家)、舟橋淳司(水彩画家)	14年4月13日(土)	12人
遠藤原三(洋画家)、栗田口博(水彩画家)	14年5月11日(土)	12人
宮田翁輔(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	14年6月15日(土)	14人
茂登山東一郎(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	14年7月6日(土)	21人
遠藤原三(洋画家)、戸田康一(日本画家)	14年8月31日(土)	8人
水野道子(水彩画家)、西嶋俊親(洋画家)	14年9月28日(土)	18人
佐藤善勇(洋画家)、栗田口博(水彩画家)	14年10月19日(土)	5人
佐久間公憲(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	14年11月17日(日)	15人
茂登山東一郎(洋画家)、舟橋淳司(水彩画家)	14年12月22日(日)	3人
内山懋(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	15年1月12日(日)	24人
宮田翁輔(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	15年2月16日(日)	13人
磯村敏之(洋画家)、水野道子(水彩画家)	15年3月9日(日)	12人
計	12回	157人

平成15(2003)年度

遠藤原三(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	15年4月26日(土)	20人
茂登山東一郎(洋画家)、栗田口博(水彩画家)	15年5月10日(土)	6人
西嶋俊親(洋画家)、舟橋淳司(水彩画家)	15年6月29日(日)	7人
戸田康一(日本画家)、新出紀久雄(水彩画家)	15年7月13日(日)	10人
磯村敏之(洋画家)、水野道子(水彩画家)	15年8月2日(土)	13人
佐久間公憲(洋画家)、和田義彦(洋画家)	15年9月7日(日)	3人

講師	期日	参加人数
宮田翁輔(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	15年10月18日(土)	11人
遠藤原三(洋画家)、茂登山東一郎(洋画家)	15年11月1日(土)	7人
佐藤善勇(洋画家)、粟田口博(水彩画家)	15年12月20日(土)	2人
西嶋俊親(洋画家)、舟橋淳司(水彩画家)	16年1月24日(土)	8人
大和屋巖(水彩画家)、木本和幸(洋画家)	16年2月15日(日)	13人
新出紀久雄(水彩画家)、内山懋(洋画家)	16年3月13日(土)	33人
計	12回	133人

平成16(2004)年度

茂登山東一郎(洋画家)、水野道子(水彩画家)	16年4月10日(土)	14人
宮田翁輔(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	16年5月8日(土)	8人
佐藤善勇(洋画家)、粟田口博(水彩画家)	16年6月26日(土)	3人
磯村敏之(洋画家)、遠藤原三(洋画家)	16年7月3日(土)	7人
舟橋淳司(水彩画家)、廣畑正剛(洋画家)	16年8月14日(土)	11人
佐久間公憲(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	16年9月11日(土)	14人
西嶋俊親(洋画家)、戸田康一(日本画家)	16年10月30日(土)	6人
宮田翁輔(洋画家)、水野道子(水彩画家)	16年11月21日(日)	15人
新出紀久雄(水彩画家)、遠藤原三(洋画家)	16年12月26日(日)	31人
佐藤善勇(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	17年1月8日(土)	16人
廣畑正剛(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	17年2月19日(土)	17人
佐久間公憲(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	17年3月19日(土)	39人
計	12回	181人

平成17(2005)年度

新出紀久雄(水彩画家)、内山懋(洋画家)	17年4月23日(土)	29人
茂登山東一郎(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	17年5月14日(土)	13人
宮田翁輔(洋画家)、舟橋淳司(水彩画家)	17年6月26日(日)	15人
佐久間公憲(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	17年7月9日(土)	15人
西嶋俊親(洋画家)、水野道子(水彩画家)	17年8月21日(日)	17人
遠藤原三(洋画家)、粟田口博(水彩画家)	17年9月19日(月)	10人
宮田翁輔(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	17年10月30日(日)	35人
佐久間公憲(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	17年11月20日(日)	9人
舟橋淳司(水彩画家)、林美紀子(版画家)	17年12月11日(日)	8人
西嶋俊親(洋画家)、水野道子(水彩画家)	18年1月21日(土)	13人
茂登山東一郎(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	18年2月18日(土)	18人

講師	期日	参加人数
遠藤原三(洋画家)、栗田口博(水彩画家)	18年3月11日(土)	7人
計	12回	189人

平成18(2006)年度

新出紀久雄(水彩画家)、宮田翁輔(洋画家)	18年4月30日(日)	50人
内山懋(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	18年5月14日(日)	12人
茂登山東一郎(洋画家)、舟橋淳司(水彩画家)	18年6月3日(土)	8人
佐久間公憲(洋画家)、水野道子(水彩画家)	18年7月9日(日)	10人
西嶋俊親(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	18年7月29日(土)	16人
遠藤原三(洋画家)、新出紀久雄(水彩画家)	18年8月27日(日)	46人
内山懋(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	18年9月24日(日)	18人
茂登山東一郎(洋画家)、北尾和子(水彩画家)	18年10月7日(土)	15人
舟橋淳司(水彩画家)、宮田翁輔(洋画家)	18年11月11日(土)	7人
西嶋俊親(洋画家)、水野道子(水彩画家)	18年12月2日(土)	12人
新出紀久雄(水彩画家)、佐久間公憲(洋画家)	19年2月11日(日)	40人
内山懋(洋画家)、大和屋巖(水彩画家)	19年3月10日(土)	18人
計	12回	252人

平成19(2007)年度

水野道子(水彩画家)	19年4月28日(土)	10人
茂登山東一郎(洋画家)	19年5月19日(土)	4人
大和屋巖(水彩画家)	19年6月17日(日)	16人
遠藤原三(洋画家)	19年7月16日(月)	6人
北尾和子(水彩画家)	19年8月19日(日)	14人
佐久間公憲(洋画家)	19年9月2日(日)	4人
水野道子(水彩画家)	19年10月14日(日)	8人
内山懋(洋画家)	19年11月10日(土)	2人
舟橋淳司(水彩画家)	20年1月20日(日)	5人
遠藤原三(洋画家)	20年1月27日(日)	6人
佐久間公憲(洋画家)	20年2月17日(日)	3人
新出紀久雄(水彩画家)	20年3月15日(土)	38人
計	12回	116人

平成20(2008)年度

宮田翁輔(洋画家)	20年4月26日(土)	2人
-----------	-------------	----

講師	期日	参加人数
廣畑正剛(洋画家)	20年5月10日(土)	3人
大和屋巖(水彩画家)	20年6月14日(土)	10人
佐久間公憲(洋画家)	20年7月13日(日)	5人
林美紀子(版画家)	20年8月24日(日)	4人
舟橋淳司(水彩画家)	20年9月20日(土)	10人
戸田康一(日本画家)	20年11月1日(土)	2人
大和屋巖(水彩画家)	20年11月23日(日)	16人
山崎弘(洋画家)	21年1月17日(土)	7人
舟橋淳司(水彩画家)	21年1月25日(日)	4人
山崎香文子(版画家)	21年2月15日(日)	4人
宮田翁輔(洋画家)	21年2月28日(土)	2人
計	12回	69人

平成21(2009)年度

宮田翁輔(洋画家)	21年4月19日(日)	2人
廣畑正剛(洋画家)	21年5月17日(日)	7人
水野道子(水彩画家)	21年8月30日(日)	6人
北尾和子(水彩画家)	21年10月17日(土)	8人
内山懋(洋画家)	21年11月15日(日)	7人
舟橋淳司(水彩画家)	21年12月13日(日)	6人
佐藤善勇(洋画家)	22年1月17日(日)	7人
廣畑正剛(洋画家)	22年2月21日(土)	7人
宮田翁輔(洋画家)	22年3月6日(土)	4人
計	9回	54人

平成22(2010)年度

水野道子(水彩画家)	22年4月18日(日)	9人
茂登山東一郎(洋画家)	22年5月8日(土)	9人
内山懋(洋画家)	22年6月20日(日)	7人
舟橋淳司(水彩画家)	22年8月21日(土)	7人
北尾和子(水彩画家)	22年10月3日(日)	14人
林美紀子(版画家)	22年12月4日(土)	5人
小沢優子(水彩画家)	23年2月12日(土)	5人
山崎香文子(版画家)	23年3月6日(日)	7人
計	8回	63人

講師	期日	参加人数
平成23(2011)年度		
北尾和子（水彩画家）	23年7月24日（日）	15人
舟橋淳司（水彩画家）	23年9月19日（月）	8人
茂登山東一郎（洋画家）	23年10月23日（日）	5人
計	3回	28人

夏休み見学会



タイトル	内容	開催日	参加人数
昭和61(1986)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「小堀四郎展」および館内見学	61年8月23日(土)	11人
昭和62(1987)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「オリエントのガラス展」および館内見学	62年8月21日(金)・22日(土)	141人
昭和63(1988)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「タイ・ベトナムの古陶磁展」および館内見学	63年8月19日(金)・20日(土)	108人
平成元(1989)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「三雲祥之助展」および館内見学	元年8月25日(金)・26日(土)	124人
平成2(1990)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「現代の版画1990展」および館内見学	2年8月24日(金)・25日(土)	131人
平成3(1991)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「野島康三とその周辺展」および館内見学	3年8月23日(金)・24日(土)	55人
平成4(1992)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「中川紀元展」および館内見学	4年8月20日(木)・21日(金)	113人
平成5(1993)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「絵はがき芸術の愉しみ展」および館内見学	5年8月19日(木)・20日(金)	124人
平成6(1994)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「フランスの肖像展」および館内見学	6年8月17日(水)・18日(木)	155人
平成7(1995)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「大正昭和の水彩画展」および館内見学	7年8月17日(木)・18日(金)	95人
平成8(1996)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「日本の象牙美術展」および館内見学	8年8月22日(木)・18日(金)	86人
平成9(1997)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「20世紀の中国絵画展」および館内見学	9年8月21日(木)・22日(金)	98人
平成10(1998)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「江戸の遊び絵展」および館内見学	10年8月20日(木)・21日(金)	147人
平成11(1999)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「江戸小紋と型紙展」および館内見学	11年8月19日(木)・20日(金)	115人
平成12(2000)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「アラベスク文様の世界展」および館内見学	12年8月10日(木)・11日(金)	130人
平成13(2001)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「祈りと装いのぬの展」および館内見学	13年8月8日(水)・9日(木)	75人

タイトル	内容	開催日	参加人数
平成14(2002)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「石田喜一郎とシドニーカメラスクール展」 および館内見学	14年8月24日(土)・25日(日)	147人
平成15(2003)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「木綿の島々 インドネシアの染織展」および館内見学	15年8月7日(木)・8日(金)	113人
平成16(2004)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「瑛九 前衛画家の大きな冒険展」および館内見学	16年8月26日(木)・27日(金)	79人
平成17(2005)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「和田義彦展」および館内見学	17年8月10日(水)・11日(金)	127人
平成18(2006)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「ポーランド写真の100年展」および館内見学	18年8月3日(木)・8日(火)	103人
夏休み小中学生のための美術館見学会	「ポーランド写真の100年展」見学会および ミニ音楽会クラリネット演奏	18年8月19日(土)	13人
平成19(2007)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「景德鎮千年展」および館内見学、 わーくしょっぷ「エッチンググラス作り」	19年8月9日(木)・8月10日(金)	109人
平成20(2008)年度			
夏休み小中学生のための美術館見学会	「大道あや展」および館内見学、 大道あやの絵本作品のよみきかせ、 わーくしょっぷ「デコうちわ」	20年8月21日(木)・8月22日(金)	75人
平成21(2009)年度			
夏休み親子美術館見学会	「江戸の幟旗展」 および館内見学	21年8月18日(火)・8月19日(水)	110人
平成22(2010)年度			
夏休み親子美術館見学会	「岡田菊恵展」 および館内見学 わーくしょっぷランプシェード制作	22年8月19日(木)・8月20日(金)	113人
平成23(2011)年度			
夏休み小中学生のための美術館 見学会&わーくしょっぷ	「岡本信治郎展」 および館内見学 わーくしょっぷ「エコバック、うちわ作り」	23年8月10日(水)・8月11日(木)	32人

コンサート

回数	タイトル	期日	出演者	参加人数	
平成15(2003)年度					
第1回	午後のコンサート in松濤美術館	15年6月13日(日)午後	松崎怜子、 佐份利恭子、 馬淵昌子、丸山康雄、 江口有香	48人	
第2回	午後のコンサート in松濤美術館	15年11月7日(日)午後	高桑英世、馬淵昌子、 丸山康雄	98人	
平成17(2005)年度					
第3回	歌の花束コンサート in松濤美術館	17年6月12日(日)午後	二期会マイスターズジグラー	116人	
第4回	オータムコンサート in松濤美術館	17年11月6日(日)午後	吉澤実、中根康美	107人	
平成18(2006)年度					
第5回	日曜午後のコンサート in 松濤美術館	18年6月18日(日)午後	川上さとみトリオ	110人	
第6回	日曜午後のコンサート in 松濤美術館	18年11月19日(日)午後	小杉美也子、 岡崎晶子、 金澤彩香、 戸谷智子、高橋義人、 菊池まゆ子	140人	
平成19(2007)年度					
第7回	日曜午後のコンサート	19年6月24日(日)午後	TREAM Quartett: 佐藤昌子 (フルート)、 藪恵美子 (オーボエ)、 大城涼子 (クラリネット)、 下田太郎(ホルン)、 榎本真理(ファゴット)	ハイドン 「ディベルティメント」、 日本の四季の歌メドレー ほか	119人
第8回	日曜午後のコンサート	19年11月18日(日)午後	PAN DES DEUX: ウォル(パンフルート)、 ユキ (ピアノ・シンセサイザー)	「春の海」 「展覧会の絵」ほか	105人

回数	タイトル	期日	出演者	参加人数	
平成20(2008)年度					
第9回	日曜午後のコンサート	20年6月22日(日)午後	こんのひとみ (おはなし、うた)、 吉川正夫(ピアノ)、 渡辺剛(ヴァイオリン)	「おはよのうた」 「パパとあなたの 影ほうし」ほか	116人
第10回	日曜午後のコンサート	20年10月12日(日)午後	chika (ピアノ)、 俵山昌之(ベース)、 藤井学(ドラム)	「Both sides now」 「Scarborough fair」ほか	92人
	ソロピアノ・コンサート 2008in松濤美術館	20年10月21日(火)午後	スティーブ・ドブログス (ピアノ)	「Black bird」 「Ebony Moon」ほか	102人
平成21(2009)年度					
第11回	日曜午後のコンサート	21年5月4日(月・祝)	太田久遠 (二胡)、 足本美代子 (揚琴)	「蘇州夜曲」ほか	83人
第12回	日曜午後のコンサート	21年12月6日(日)	寺田正彦(キーボード)、 武藤祐生(ヴァイオリン)、 OVERHEDS (映像演出)	「ロティの結婚」ほか	83人
平成22(2010)年度					
第13回	日曜午後のコンサート	22年12月5日(日)	松崎晟山 (尺八)、 新福かな、 橋本みぎわ、 鎌田美穂子 (箏、三弦、十七弦)、 石井千鶴 (小鼓ほか)	「春の小川」ほか	68人
平成23(2011)年度					
開館 30 周年 記念コンサート		23年10月10日(月・祝)	ヴォルフエルト・ ブレデローデ ソロピアノコンサート	「Meander」ほか	88人



学芸員実習



大学名	期間	日数	人数
昭和56(1981)年度			
青山学院大学	56年9月1日～9月12日	11日間	1人
1校			1人
昭和57(1982)年度			
学習院大学	57年7月21日～7月27日	6日間	3人
東京学芸大学、実践女子大学	57年7月29日～8月11日	12日間	2人
青山学院大学	57年8月12日～8月27日	14日間	4人
中央大学	57年9月1日～9月14日	12日間	3人
5校			12人
昭和58(1983)年度			
実践女子大学	58年7月11日～7月21日	10日間	2人
上智大学、学習院大学	58年7月26日～7月31日	6日間	4人
中央大学	58年8月2日～8月14日	12日間	3人
武蔵野美術大学	58年8月16日～8月23日	7日間	2人
青山学院大学	58年8月24日～9月5日	11日間	1人
武蔵野美術大学	58年8月29日～9月5日	7日間	3人
6校			15人
昭和59(1984)年度			
学習院大学、実践女子大学	59年7月21日～7月27日	6日間	4人
武蔵野美術大学	59年7月29日～8月5日	7日間	4人
実践女子大学、跡見学園女子大学	59年8月8日～8月14日	7日間	4人
東京学芸大学、中央大学、青山学院大学	59年8月18日～8月31日	12日間	5人
立教大学	59年9月1日～9月14日	12日間	3人
8校			20人
昭和60(1985)年度			
学習院大学	60年7月23日～7月28日	6日間	3人
東京学芸大学、専修大学、青山学院大学	60年7月30日～8月12日	12日間	4人
武蔵野美術大学	60年8月13日～8月19日	6日間	4人
実践女子大学	60年8月22日～8月28日	6日間	3人
立教大学、中央大学	60年9月1日～9月14日	12日間	4人
8校			18人
昭和61(1986)年度			
実践女子大学	61年7月18日～7月24日	6日間	4人
武蔵野美術大学、昭和女子大学	61年7月25日～7月31日	6日間	3人

大学名	期間	日数	人数
中央大学、青山学院大学	61年8月1日～8月7日	6日間	4人
専修大学、学習院大学	61年8月12日～8月17日	6日間	4人
立教大学、跡見学園女子大学	61年8月26日～9月7日	12日間	3人
9校			18人

昭和62(1987)年度

学習院大学	62年7月21日～7月27日	6日間	5人
立教大学、武蔵野美術大学、都立大学	62年7月28日～8月3日	6日間	5人
中央大学、青山学院大学	62年8月4日～8月10日	6日間	4人
跡見学園女子大学、筑波大学	62年8月11日～8月16日	6日間	4人
実践女子大学、専修大学	62年8月18日～8月23日	6日間	4人
多摩美術大学、昭和女子大学	62年9月1日～9月6日	6日間	3人
12校			25人

昭和63(1988)年度

中央大学、青山学院大学	63年7月25日～7月30日	6日間	5人
中央大学、学習院大学	63年8月1日～8月6日	6日間	4人
立教大学、多摩美術大学	63年8月8日～8月13日	6日間	4人
実践女子大学、跡見学園女子大学	63年8月15日～8月21日	6日間	4人
跡見学園女子大学、武蔵野美術大学、鶴見大学	63年8月23日～8月28日	6日間	5人
9校			22人

平成元(1989)年度

学習院大学、都立大学	元年7月25日～7月31日	6日間	5人
立教大学、青山学院大学	元年8月1日～8月7日	6日間	5人
跡見学園女子大学、専修大学、武蔵野美術大学	元年8月8日～8月15日	6日間	5人
鶴見大学、多摩美術大学	元年8月16日～8月22日	6日間	5人
中央大学、東京学芸大学、聖心女子大学	元年8月23日～8月29日	6日間	5人
実践女子大学、専修大学、筑波大学	元年8月30日～9月5日	6日間	5人
14校			30人

平成2(1990)年度

立教大学、東海大学	2年7月25日～7月31日	6日間	5人
鶴見大学、東海大学	2年8月1日～8月7日	6日間	5人
跡見学園女子大学、中央大学	2年8月8日～8月14日	6日間	5人
青山学院大学、武蔵野美術大学	2年8月15日～8月21日	6日間	5人
聖心女子大学、専修大学、多摩美術大学	2年8月22日～8月28日	6日間	5人
実践女子大学、大正大学	2年8月29日～9月4日	6日間	5人

大学名	期間	日数	人数
学習院大学	2年9月24日～9月30日	6日間	4人
13校			34人
平成3(1991)年度			
立教大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学	3年7月15日～7月20日	6日間	5人
聖心女子大学、昭和女子大学、武蔵野美術大学	3年8月20日～8月25日	6日間	5人
青山学院大学、学習院大学	3年9月16日～9月21日	6日間	5人
跡見学園女子大学、中央大学	3年12月18日～12月23日	6日間	5人
実践女子大学、立教大学、お茶の水女子大学	4年1月8日～1月15日	6日間	6人
11校			26人
平成4(1992)年度			
立教大学、筑波大学、学習院大学	4年6月30日～7月5日	6日間	5人
共立女子大学、実践女子大学	4年8月19日～8月25日	6日間	5人
聖心女子大学、大妻女子大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学	4年9月1日～9月6日	6日間	6人
跡見学園女子大学、中央大学、上智大学	4年12月17日～12月23日	6日間	6人
立教大学、青山学院大学、鶴見大学、昭和女子大学	5年1月7日～1月14日	6日間	5人
15校			27人
平成5(1993)年度			
鶴見大学	5年7月13日～7月18日	6日間	1人
跡見学園女子大学、学習院大学	5年8月24日～8月29日	6日間	3人
中央大学、多摩美術大学	5年12月17日～12月23日	6日間	4人
青山学院大学、武蔵野美術大学	6年1月14日～1月21日	6日間	3人
7校			11人
平成6(1994)年度			
青山学院大学、学習院大学、中央大学、都立大学	6年7月21日～7月28日	6日間	5人
鶴見大学、実践女子大学	6年8月16日～8月21日	6日間	3人
跡見学園女子大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学	6年12月17日～12月23日	6日間	5人
学習院大学	7年1月10日～1月15日	6日間	1人
10校			14人
平成7(1995)年度			
青山学院大学、学習院大学、跡見学園女子大学	7年6月13日～6月18日	6日間	5人
鶴見大学、昭和女子大学、帝京大学、日本女子大学、明星大学	7年8月7日～8月12日	6日間	7人
名古屋芸術大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学	7年12月16日～12月22日	6日間	4人
実践女子大学、和光大学、明治学院大学	8年1月17日～1月21日	5日間	5人

大学名	期間	日数	人数
聖心女子大学、恵泉女学園大学、明治学院大学	8年1月29日～2月3日	6日間	4人
16校			25人
平成8(1996)年度			
学習院大学、実践女子大学、聖心女子大学、都立大学	8年6月25日～6月30日	6日間	5人
跡見学園女子大学、鶴見大学、昭和女子大学	8年8月12日～8月18日	6日間	6人
日本女子大学、東京造形大学、群馬県女子大学、文化女子大学	8年8月27日～9月1日	6日間	5人
青山学院大学、東洋英和女学院大学、トキワ松学園大学	8年9月18日～9月23日	6日間	5人
武蔵野美術大学、多摩美術大学、明星大学	8年12月14日～12月20日	6日間	5人
恵泉女学園大学、明治学院大学	9年2月6日～2月14日	6日間	5人
19校			31人
平成9(1997)年度			
学習院大学、実践女子大学、聖心女子大学、武蔵野美術大学	9年6月24日～6月29日	6日間	6人
清泉女子大学、鶴見大学、昭和女子大学、女子美術大学	9年8月19日～8月24日	6日間	6人
共立女子大学	9年8月26日～8月31日	6日間	3人
日本女子大学、専修大学、トキワ松学園大学	9年9月14日～9月19日	6日間	5人
明治学院大学、多摩美術大学、明星大学	9年12月6日～12月12日	6日間	7人
恵泉女学園大学、東洋英和女学院大学、大東文化大学	9年12月13日～12月20日	6日間	5人
跡見学園女子大学、青山学院大学、和光大学	10年2月25日～3月4日	6日間	5人
21校			37人
平成10(1998)年度			
都立大学、学習院大学、東京女子大学、聖心女子大学	10年7月1日～7月8日	6日間	4人
昭和女子大学、明治学院大学、日本女子大学	10年8月3日～8月8日	6日間	6人
青山学院大学、実践女子大学	10年11月10日～11月15日	6日間	4人
跡見学園女子大学、鶴見大学	10年12月7日～12月15日	7日間	4人
専修大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学、明星大学、トキワ松学園大学	10年12月19日～12月26日	6日間	6人
東海大学、和光大学	11年2月16日～2月21日	6日間	4人
18校			28人
平成11(1999)年度			
東海大学、武蔵大学	11年6月1日～6月8日	6日間	2人
学習院大学、専修大学、都立大学、和光大学、大東文化大学	11年6月29日～7月6日	6日間	5人
青山学院大学、昭和女子大学、帝京大学、女子美術大学	11年8月17日～8月22日	6日間	6人
聖心女子大学、日本女子大学、武蔵大学、創価大学	11年12月9日～12月16日	6日間	4人
実践女子大学、武蔵野美術大学、トキワ松学園大学	11年12月18日～12月25日	6日間	5人
跡見学園女子大学、鶴見大学	12年2月7日～2月12日	6日間	2人
20校			24人

大学名	期間	日数	人数
平成12(2000)年度			
聖心女子大学	12年6月27日～7月5日	6日間	3人
トキワ松学園大学、大正大学、清泉女子大学	12年7月11日～7月16日	6日間	6人
昭和女子大学、武蔵大学、跡見学園女子大学	12年7月27日～8月3日	6日間	5人
日本女子大学、名古屋芸術大学、共立女子大学	12年8月4日～8月11日	7日間	5人
鶴見大学、東洋英和女学院大学、聖心女子大学	12年9月12日～9月17日	6日間	4人
実践女子大学、東海大学、大東文化大学	12年10月9日～10月14日	6日間	5人
学習院大学、青山学院大学、昭和音楽大学、宝仙学園大学	12年12月15日～12月21日	6日間	5人
武蔵野美術大学、明星大学、多摩美術大学、鶴見大学、共立女子大学	12年12月22日～12月28日	6日間	7人
大妻女子大学	13年2月2日～2月9日	6日間	2人
26校			42人
平成13(2001)年度			
青山学院大学、明治大学、明治学院大学	13年6月26日～7月1日	6日間	4人
トキワ松学園大学、東洋英和女学院大学	13年7月3日～7月8日	6日間	4人
女子美術大学、武蔵大学、日本女子大学、千葉大学	13年8月7日～8月12日	6日間	5人
聖心女子大学、実践女子大学、跡見学園女子大学	13年9月4日～9月8日	6日間	5人
清泉女子大学、東京造形大学	13年10月16日～10月21日	6日間	4人
昭和女子大学、武蔵野女子大学、専修大学	13年12月5日～12月12日	6日間	5人
大妻女子大学、立正大学、大正大学、東海大学	13年12月14日～12月21日	6日間	5人
鶴見大学、学習院大学、明星大学	14年1月16日～1月20日	6日間	4人
大東文化大学、宝仙学園大学、昭和音楽大学	14年2月22日～2月28日	6日間	5人
27校			41人
平成14(2002)年度			
多摩美術大学、宝仙学園大学、昭和女子大学	14年6月25日～6月30日	6日間	5人
新潟大学、聖徳大学	14年7月22日～7月27日	6日間	2人
明星大学、日本大学、実践女子大学、跡見学園女子大学	14年8月20日～8月25日	6日間	5人
名古屋芸術大学	14年8月27日～9月1日	6日間	2人
日本女子大学、東洋英和女学院大学	14年9月3日～9月8日	6日間	4人
東京女子大学	14年9月20日～9月28日	6日間	3人
学習院大学、大妻女子大学、清泉女子大学	14年10月1日～10月6日	6日間	5人
共立女子大学	14年10月22日～10月27日	6日間	4人
帝京大学、武蔵野美術大学、明治大学 武蔵大学	14年12月13日～12月20日	6日間	6人
昭和女子大学、東京造形大学、成蹊大学	15年1月21日～1月26日	6日間	3人
青山学院大学、大東文化大学、東海大学	15年2月4日～2月11日	6日間	4人
横浜美術短期大学	15年2月21日～2月27日	6日間	4人
28校			47人

大学名	期間	日数	人数
平成15(2003)年度			
実践女子大学2、立正大学1、専修大学1、日本大学1	15年7月1日～7月6日	6日間	5人
新潟大学1、聖心女子大学2、東京女子大学2	15年7月10日～7月15日	6日間	5人
日本女子大学2、学習院大学1、和光大学1、宝泉女子短期大学1	15年8月5日～8月10日	6日間	5人
昭和女子大学2、成蹊大学1	15年8月19日～8月24日	6日間	3人
大妻女子大学1、清泉女子大学2、共立女子大学2	15年10月28日～11月2日	6日間	5人
東京造形大学2、横浜美術短期大学2、帝京大学1、武蔵野美術大学2	15年12月12日～12月19日	7日間	7人
多摩美術大学2	16年1月12日～1月18日	6日間	2人
大東文化大学2、東洋英和女学院大学2	16年2月2日～2月7日	6日間	4人
23校			36人
平成16(2004)年度			
名古屋芸術大学2、東京工芸大学1、実践女子大学1、東北芸術工科大学1	16年7月14日～7月20日	7日間	5人
宝泉女子短期大学2、大東文化大学1、横浜美術短期大学1、大妻女子大学1、専修大学1	16年8月24日～8月29日	6日間	6人
東京女子大学2、成蹊大学1、聖心女子大学2	16年9月7日～9月12日	6日間	5人
共立女子大学3、清泉女子大学3	16年10月4日～10月10日	7日間	6人
学習院大学2、聖心女子大学2	16年10月26日～10月31日	6日間	4人
武蔵野美術大学2、昭和女子大学2、和光大学1、東京学芸大学1、	16年12月17日～12月23日	7日間	9人
鶴見大学1、東洋英和女学院大学1、明治学院大学1			
23校			35人
平成17(2005)年度			
多摩美術大学2、明治大学1、法政大学1、昭和女子大学1	17年7月5日～7月10日	6日間	5人
東京女子大学2、一橋大学1、名古屋芸術大学1	17年7月13日～7月19日	6日間	4人
共立女子大学1、聖徳大学1、大東文化大学1、成蹊大学1	17年8月9日～8月14日	6日間	5人
清泉女子大学3、聖心女子大学1	17年11月16日～11月21日	6日間	4人
武蔵野美術大学2、横浜美術短期大学2、大妻女子大学1、武蔵大学1	17年12月16日～12月22日	6日間	6人
宝仙学園短期大学2、実践女子大学1、東洋英和女学院大学1	18年1月24日～1月29日	6日間	4人
20校			28人
平成18(2006)年度			
清泉女子大学4、名古屋芸術大学1	18年7月24日～7月29日	6日間	5人
聖心女子大学4、女子美術大学1	18年8月2日～8月8日	6日間	5人
共立女子大学3	18年8月22日～8月27日	6日間	3人
学習院大学2、東京女子大学2	18年9月4日～9月11日	6日間	4人
武蔵野美術大学2、専修大学1、昭和女子大学1、立正大学1	18年11月14日～11月27日	6日間	5人
東京学芸大学2、大東文化大学1、京都造形芸術大学1、東洋英和女学院大学1	18年12月14日～12月19日	6日間	5人
東京学芸大学2、多摩美術大学2、明星大学1	18年12月20日～12月27日	6日間	5人

大学名	期間	日数	人数
宝仙学園短期大学2、横浜国立大学1、横浜美術短期大学1、大妻女子大学1	19年1月22日～1月29日	6日間	5人
22校			37人

平成19(2007)年度

名古屋芸術大学2、武蔵野美術大学1、清泉女子大学2	19年7月23日～7月30日	6日間	5人
聖心女子大学1、聖心女子大学大学院1、青山学院大学2	19年8月7日～8月12日	6日間	4人
共立女子大学2、女子美術大学1、八洲学園大学1	19年8月14日～8月19日	6日間	4人
学習院大学2、成蹊大学1、一橋大学1	19年9月14日～9月19日	6日間	4人
東京女子大学3	19年10月16日～10月21日	6日間	3人
昭和女子大学2	19年11月6日～11月11日	6日間	2人
東京学芸大学2、実践女子大学2	19年12月3日～12月10日	6日間	4人
東洋英和女学院大学2、大東文化大学1、東洋大学1、武蔵野美術大学1	19年12月21日～12月27日	6日間	5人
宝仙学園短期大学2、鶴見大学1、共立女子大学1	20年1月22日～1月27日	6日間	4人
23校			35人

平成20(2008)年度

共立女子大学4	20年7月8日～7月13日	6日間	4人
清泉女子大学1、清泉女子大学大学院1、首都大学東京1、東洋英和女学院大学1	20年7月31日～8月7日	6日間	4人
和光大学2、聖心女子大学2、横浜国立大学大学院1	20年8月19日～8月24日	6日間	5人
大東文化大学2、実践女子大学1、東洋大学1	20年9月15日～9月21日	6日間	4人
学習院大学2、東京女子大学2	20年10月3日～10月10日	6日間	4人
武蔵野美術大学1、青山学院大学2、専修大学1、日本女子大学2	20年12月19日～12月26日	6日間	6人
多摩美術大学2、横浜美術短期大学2	21年1月20日～1月25日	6日間	4人
19校			31人

平成21(2009)年度

清泉女子大学2、東京女子大学2	21年7月1日～7月8日	6日間	4人
実践女子大学2	21年7月13日～7月21日	6日間	2人
法政大学1、清心女子大学1、大東文化大学2、東洋大学1	21年7月23日～7月30日	6日間	5人
学習院大学2、跡見学園女子大学1、鶴見大学1、筑波大学1	21年8月18日～8月23日	6日間	5人
日本女子大学2、国立音楽大学1、共立女子大学1	21年10月14日～10月20日	6日間	4人
東洋英和女学院大学1、東京造形大学2、和光大学2	21年12月18日～12月25日	6日間	5人
東京学芸大学1、昭和女子大学2	22年1月19日～1月24日	6日間	3人
19校			28人

大学名	期間	日数	人数
平成22(2010)年度			
清泉女子大学 2	22年5月20日～5月25日	6日間	2人
共立女子大学 1、東洋英和女学院大学 1	22年6月4日～6月10日	6日間	2人
跡見学園女子大学 2、学習院大学 2	22年8月3日～8月10日	6日間	4人
日本女子大学 1、共立女子大学 1、昭和女子大学 1、大正大学 1	22年8月16日～8月21日	6日間	4人
東洋大学 1、横浜国立大学 1、聖心女子大学 1	22年8月24日～8月29日	6日間	3人
多摩美術大学 2、大東文化大学 2、武蔵野美術大学 1	22年12月17日～12月23日	6日間	5人
実践女子大学 2	23年1月10日～1月16日	6日間	2人
18校			22人
平成23(2011)年度			
昭和女子大学 1、筑波大学 1、清泉女子大学 2	23年8月5日～8月12日	6日間	4人
実践女子大学 1、了徳寺大学 1、女子美術大学 1	23年8月13日～8月19日	6日間	3人
武蔵野美術大学 1、了徳寺大学 1、日本女子大学 1、共立女子大学 2	23年9月6日～9月11日	6日間	5人
学習院大学 2、聖心女子大学 2	23年9月28日～10月5日	6日間	4人
12校			16人

入館状況



展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
昭和56(1981)年度実績				
1 開館記念特別展 森 芳雄 開館記念特別陳列 菱田春草 開館記念特別陳列 渋谷区在住作家の作品	56年10月1日～11月7日	31日間	4,485人	144人
2 特別展 鍋島 特別陳列 伊藤若冲 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	56年12月2日～57年1月24日	40日間	3,333人	83人
3 特別展 三枝朝四郎50年の写真記録 アジアの人間と遺跡 特別陳列 江戸の人物画 谷信一コレクション 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	57年2月17日～3月31日	36日間	2,111人	58人
合計		107日間	9,929人	93人
昭和57(1982)年度実績				
3 特別展 三枝朝四郎50年の写真記録 アジアの人間と遺跡 特別陳列 江戸の人物画 谷信一コレクション 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	57年4月1日～4月4日	4日間	343人	85人
4 特別展 院展の彫刻 特別陳列 琳派再生 神坂雪佳 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	57年4月28日～6月12日	37日間	2,381人	64人
5 特別展 恩地孝四郎 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	57年7月7日～8月15日	35日間	3,298人	94人
6 特別展 江戸の櫛・簪 岡崎智予コレクション 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	57年9月7日～10月24日	39日間	5,232人	134人
7 特別展 19世紀ヨーロッパの染織・デザイン 亀井茲明コレクション 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	57年11月16日～58年1月23日	53日間	6,127人	115人
1983松濤美術館公募展 特別陳列 江戸時代の花鳥画(前期) 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	58年2月22日～3月6日	12日間	2,406人	200人
第1回渋谷区小中学生絵画展 特別陳列 江戸時代の花鳥画(後期) 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	58年3月18日～3月31日	11日間	1,763人	160人
計		191日間	21,550人	112人
昭和58(1983)年度実績				
8 特別展 山口薫	58年4月12日～5月29日	39日間	7,959人	204人

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
9 特別展 台湾高砂族の服飾 瀬川コレクション 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	58年6月21日～8月14日	48日間	4,024人	84人
10 特別展 明治文学とランプ 榎コレクションを中心に 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	58年9月6日～10月23日	39日間	6,171人	158人
11 特別展 辻晋堂	58年11月15日～59年1月15日	48日間	3,844人	80人
1984松濤美術館公募展 特別陳列 麻生三郎(前期) 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	59年2月19日～3月4日	13日間	1,805人	139人
第2回渋谷区小中学生絵画展 特別陳列 麻生三郎(後期) 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	59年3月13日～3月25日	11日間	1,873人	170人
合計		198日間	25,676人	130人

昭和59(1984)年度実績

12 特別展 橋本コレクション 中国の絵画—明・清・近代 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	59年4月10日～5月27日	39日間	6,947人	178人
13 特別展 ガラス絵 ヨーロッパからアジアへの流れ 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	59年6月19日～8月5日	42日間	6,376人	152人
14 特別展 山脇洋二 金工の世界 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	59年8月28日～10月21日	45日間	5,292人	118人
15 特別展 戸栗コレクション 有田の染付と色絵—伊万里・柿右衛門・鍋島 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	59年11月13日～60年1月20日	53日間	6,564人	124人
第3回渋谷区小中学生絵画展 特別陳列 森 芳雄(前期) 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	60年2月5日～2月17日	11日間	2,083人	189人
1985松濤美術館公募展 特別陳列 森 芳雄(後期) 特別陳列 渋谷区在住作家の作品	60年3月3日～3月17日	13日間	1,897人	146人
合計		203日間	29,159人	144人

昭和60(1985)年度実績

16 特別展 19世紀アメリカインディアンの染織 バーラントコレクション ナバホブランケット	60年4月2日～5月19日	39日間	6,585人	169人
17 特別展 中近東遊牧民の染織—松島コレクション—	60年6月11日～7月28日	42日間	8,934人	213人
18 特別展 メトロポリタン美術館所蔵 ジャクソン・ポロックの素描	60年8月20日～9月29日	34日間	6,732人	198人

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
特別陳列 伊藤隆康				
19 渋谷区・パリ市六区文化交流協定成立記念特別展 パリ市六区の三美術館所蔵 エベール・ドラクロワ・ザッキン —エベールの絵画初公開—	60年11月3日～12月8日	29日間	9,520人	328人
20 特別展 美とわざのハーモニー 19世紀末ヨーロッパの捺染布 亀井茲明コレクション	60年12月24日～61年2月2日	30日間	5,065人	169人
受贈記念特別陳列 村田勝四郎の彫刻				
第4回渋谷区小中学生絵画展	61年2月18日～3月2日	12日間	2,242人	187人
特別陳列 渋谷区在住作家の作品				
1986松濤美術館公募展	61年3月16日～3月30日	12日間	2,510人	209人
特別陳列 渋谷区在住作家の作品				
合計		198日間	41,588人	210人

昭和61(1986)年度実績

21 特別展 橋本コレクション 中国の絵画 来舶画人	61年4月15日～5月25日	33日間	5,638人	171人
特別陳列 大久保泰				
22 特別展 Lufthansaコレクション 現代ドイツの素描	61年6月10日～7月20日	36日間	5,659人	157人
23 特別展 小堀四郎	61年7月29日～9月7日	36日間	6,021人	167人
特別陳列 脇田愛二郎				
24 開館5周年記念特別展 堀内正和	61年9月30日～11月24日	47日間	7,062人	150人
25 特別展 伊東コレクション 古玩の世界	61年12月9日～62年1月25日	36日間	4,211人	117人
特別陳列 渋谷区在住作家の作品				
第5回渋谷区小中学生絵画展	62年2月10日～2月22日	11日間	2,267人	206人
特別陳列 渋谷区在住作家の作品				
1987松濤美術館公募展	62年3月1日～3月15日	13日間	2,432人	187人
特別陳列 渋谷区在住作家の作品				
合計		212日間	33,290人	157人

昭和62(1987)年度実績

26 特別展 ジョルジュ・ビゴー —明治日本を生きたフランス人画家—	62年4月7日～5月17日	33日間	9,907人	300人
27 特別展 福武コレクション 国吉康雄	62年5月26日～7月19日	48日間	11,701人	244人
28 特別展 岡山市立オリент美術館所蔵 オリエントのガラス	62年8月11日～9月27日	40日間	15,105人	378人
29 特別展 松濤美術館 現代の版画1987	62年10月13日～11月23日	36日間	7,830人	218人
30 特別展 橋本コレクション 中国の墨竹	62年12月8日～63年1月24日	35日間	5,184人	148人
特別陳列 近岡善次郎				
1988松濤美術館公募展	63年2月7日～2月21日	12日間	2,962人	247人

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
特別陳列 渋谷区在住作家の作品				
第6回渋谷区小中学生絵画展	63年3月8日～3月21日	13日間	2,013人	155人
特別陳列 渋谷区在住作家の作品				
合計		217日間	54,702人	252人

昭和63(1988)年度実績

31 特別展 前田寛治	63年4月5日～5月22日	38日間	10,799人	284人
32 特別展 石垣栄太郎	63年6月7日～7月17日	36日間	7,812人	217人
33 特別展 タイ・ベトナムの古陶磁	63年8月9日～9月25日	41日間	9,969人	243人
34 特別展 アメリカの水彩画 ーホイッスラーからワイエスまでー	63年10月18日～11月27日	34日間	16,625人	489人
特別陳列 大正の詩人画家 富永太郎				
35 特別展 京都国立近代美術館所蔵 アメリカの写真家たち	63年12月13日～平成元年1月22日	30日間	9,055人	302人
1989松濤美術館公募展	元年2月5日～2月19日	12日間	3,008人	251人
特別陳列 ガストン・ブティ				
第7回渋谷区小中学生絵画展	元年3月7日～3月21日	13日間	2,203人	169人
特別陳列 久我修・勝野正則				
合計		204日間	59,471人	292人

平成元(1989)年度実績

36 特別展 木村忠太	元年4月4日～5月28日	42日間	14,302人	341人
37 特別展 橋本コレクション 中国近現代絵画	元年6月13日～7月23日	35日間	4,685人	134人
38 特別展 三雲祥之助	元年8月8日～9月24日	39日間	8,802人	226人
39 渋谷区・パリ市六区文化交流特別展 19世紀ローマ賞絵画 ーパリ国立高等美術学校所蔵ー	元年10月17日～12月3日	39日間	10,936人	280人
40 特別展 秋山泰計の版画	元年12月19日～2年2月4日	35日間	5,330人	152人
1990松濤美術館公募展	2年2月18日～3月4日	13日間	3,104人	239人
特別陳列 磯村敏之				
特別陳列 橋本コレクション 中国の墨梅図				
第8回渋谷区小中学生絵画展	2年3月13日～3月25日	11日間	1,732人	157人
特別陳列 渋谷区在住作家の作品				
特別陳列 来舶画人と長崎派				
合計		214日間	48,891人	228人

平成2(1990)年度実績

41 特別展 〈具体〉未完の前衛集団 ー兵庫県立近代美術館所蔵作品を中心にー	2年4月10日～5月27日	37日間	8,176人	221人
--	---------------	------	--------	------

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
42 特別展 版画に見るジャポニスム —アメリカ・ジマーリ美術館所蔵—	2年6月12日～7月22日	35日間	8,189人	234人
43 特別展 松濤美術館 現代の版画1990	2年8月7日～9月16日	34日間	7,618人	224人
44 特別展 オリエンタリズムの絵画と写真	2年10月2日～11月25日	44日間	9,802人	223人
45 特別展 海老原喜之助 —その生涯と作品—	2年12月11日～3年1月27日	34日間	7,564人	222人
1991松濤美術館公募展	3年2月10日～2月24日	12日間	3,142人	262人
特別陳列 遠藤享・森本潤一				
第9回渋谷区小中学生絵画展	3年3月5日～3月21日	14日間	2,540人	181人
特別陳列 山口薫				
合計		210日間	47,031人	224人

平成3(1991)年度実績

46 特別展 橋本コレクション 中国の絵画 —明末清初—	3年4月9日～5月26日	36日間	8,410人	234人
47 特別展 渋谷区立松濤美術館所蔵作品展	3年6月4日～6月30日	23日間	3,330人	145人
48 特別展 野島康三とその周辺 —日本近代写真と絵画—	3年7月16日～9月1日	41日間	8,577人	209人
49 開館10周年記念特別展 中国の漆工芸	3年9月17日～11月4日	40日間	7,007人	175人
50 特別展 多田美波 光の迷宮	3年11月26日～4年1月26日	45日間	8,667人	193人
1992松濤美術館公募展	4年2月9日～2月23日	12日間	3,407人	284人
特別陳列 清原啓一(前期)				
第10回渋谷区小中学生絵画展	4年3月3日～3月22日	17日間	2,554人	150人
特別陳列 清原啓一(後期)				
合計		214日間	41,952人	196人

平成4(1992)年度実績

51 特別展 日中国交正常化20周年記念展 江蘇省美術館所蔵 明清の書と絵画	4年4月8日～5月17日	30日間	8,042人	268人
52 特別展 文明の十字路・ダゲスタン —コーカサスの民族美術—	4年6月3日～7月19日	39日間	10,257人	263人
53 特別展 生誕百年 中川紀元	4年8月5日～9月13日	34日間	8,894人	262人
54 特別展 中野恵祥 板金の造形	4年9月30日～11月15日	37日間	5,157人	139人
55 特別展 三木富雄	4年12月2日～5年1月24日	37日間	6,862人	185人
1993松濤美術館公募展	5年2月7日～2月21日	11日間	3,059人	278人
特別陳列 野島康三とレディス・カメラ・クラブ(前期)				
第11回渋谷区小中学生絵画展	5年3月2日～3月21日	17日間	2,407人	142人
特別陳列 野島康三とレディス・カメラ・クラブ(後期)				
合計		205日間	44,678人	218人

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
平成5(1993)年度実績				
56 特別展 現代ドイツのジュエリー・デザイン 特別陳列 柚木沙弥郎の染色	5年4月7日～5月23日	36日間	10,467人	291人
57 特別展 片瀬和夫 なげるかげ	5年6月9日～7月18日	33日間	5,695人	173人
58 特別展 フィリップ・バロス・コレクション 絵はがき芸術の愉しみ ―忘れられていた小さな絵―	5年8月4日～9月12日	34日間	10,423人	307人
59 特別展 中世庶民信仰の絵画 ―参詣曼荼羅・地獄絵・お伽草子―	5年9月29日～11月14日	39日間	9,306人	239人
60 特別展 ペイズリー文様の展開 ―カシミアショールを中心に―	5年12月1日～6年1月30日	44日間	13,346人	303人
1994松濤美術館公募展 特別陳列 児玉幸雄(前期)	6年2月13日～2月27日	12日間	3,042人	254人
第12回渋谷区小中学生絵画展 特別陳列 児玉幸雄(後期)	6年3月8日～3月21日	12日間	2,148人	179人
合計		210日間	54,427人	259人
平成6(1994)年度実績				
61 特別展 橋本コレクション 18世紀の中国絵画 ―乾隆時代を中心に―	6年4月6日～5月22日	36日間	7,972人	221人
62 特別展 残された楽園 ネイチャーフォトグラフィー	6年6月8日～7月17日	33日間	13,780人	418人
63 特別展 フランスの肖像 ―ルノワール、ピカソ、マン・レイからバルテュスまで―	6年8月3日～9月18日	38日間	16,501人	434人
64 渋谷区・パリ市六区文化交流特別展 フランス国立貨幣博物館	6年10月12日～12月4日	44日間	7,487人	170人
65 特別展 現代の版画1994	6年12月14日～7年1月29日	34日間	6,705人	197人
1995松濤美術館公募展 特別陳列 西嶋俊親	7年2月12日～2月26日	12日間	3,525人	294人
第13回渋谷区小中学生絵画展 特別陳列 傳抱石の絵画 ―武蔵野美術大学美術資料図書館所蔵―	7年3月7日～3月19日	11日間	1,637人	149人
合計		208日間	57,607人	277人
平成7(1995)年度実績				
66 特別展 香港・梅雲堂所蔵 張大千の絵画	7年4月5日～5月21日	36日間	5,683人	158人
67 特別展 変容する神仏たち 近世宗教美術の世界	7年6月6日～7月23日	40日間	9,424人	236人
68 特別展 大正・昭和の水彩画 蒼原会の画家を中心に	7年8月8日～9月24日	39日間	16,851人	432人
69 特別展 日和崎尊夫 木口木版画の世界 ―闇を刻む詩人―	7年10月10日～11月19日	34日間	7,279人	214人
70 特別展 映画伝来 ―シネマトグラフと(明治の日本)―	7年12月5日～8年1月21日	34日間	9,384人	276人
1996松濤美術館公募展 特別陳列 浜田浜雄 シュールレアリスムの世界	8年2月4日～2月25日	18日間	4,387人	244人
第14回渋谷区小中学生絵画展	8年3月5日～3月17日	11日間	1,990人	181人

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
特別陳列 谷中安規と料治熊太 『白と黒』の仲間たち				
合計		212日間	54,998人	259人

平成8(1996)年度実績

71 特別展 江戸の人形 —祈りと遊びの世界—	8年4月9日～5月26日	38日間	11,116人	293人
72 特別展 版画の1970年代	8年6月11日～7月21日	35日間	5,422人	155人
73 特別展 日本の象牙美術 明治の象牙彫刻を中心に	8年8月13日～9月29日	41日間	12,453人	304人
74 開館15周年記念特別展 文字絵と絵文字の系譜	8年10月15日～11月24日	35日間	8,300人	237人
75 特別展 女性の肖像 日本現代美術の顔	8年12月10日～9年2月2日	41日間	7,413人	181人
1997松濤美術館公募展	9年2月16日～3月2日	13日間	2,855人	220人
特別陳列 アジアとの出会い ポルトガル現代絵画(前期)				
第15回渋谷区小中学生絵画展	9年3月11日～3月23日	12日間	1,809人	151人
特別陳列 アジアとの出会い ポルトガル現代絵画(後期)				
合計		215日間	49,368人	230人

平成9(1997)年度実績

76 特別展 中山岩太 Modern Photography	9年4月8日～5月25日	37日間	7,032人	190人
77 特別展 久保守	9年6月10日～7月20日	35日間	5,370人	153人
78 特別展 日中国交正常化25周年記念 江蘇省美術館所蔵 20世紀の中国絵画	9年8月5日～9月21日	40日間	7,447人	186人
79 特別展 山口蓬春 新日本画への軌跡	9年9月30日～11月16日	40日間	8,353人	209人
80 特別展 慈愛の造形 木喰の微笑仏	9年12月2日～10年1月25日	39日間	21,181人	543人
1998松濤美術館公募展	10年2月12日～3月1日	16日間	3,090人	193人
区制施行65周年記念 区民所蔵品展(前期)				
第16回渋谷区小中学生絵画展	10年3月10日～3月22日	12日間	1,840人	153人
区制施行65周年記念 区民所蔵品展(後期)				
合計		219日間	54,313人	248人

平成10(1998)年度実績

81 特別展 イギリス工芸運動と濱田庄司 —工芸家たちのユートピア 1900s-1930s—	10年4月7日～5月24日	39日間	8,127人	208人
82 特別展 中国絵画をたのしむ —橋本コレクションを中心に—	10年6月9日～7月20日	35日間	5,035人	144人
83 特別展 江戸の遊び絵 遊びと祝いの浮世絵の世界	10年8月4日～9月20日	39日間	9,014人	231人
84 特別展 児島善三郎 日本的油彩画の創造者	10年10月6日～11月23日	40日間	7,796人	195人
85 特別展 写真芸術の時代 大正期の都市散策者たち	10年12月8日～11年1月31日	39日間	7,778人	199人

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
1999松濤美術館公募展 特別陳列 日本ペルー国交125周年・移民100周年記念展 陶芸に見るアンデスの造形美(前期)	11年2月12日～2月28日	14日間	3,370人	241人
第17回渋谷区小中学生絵画展 特別陳列 日本ペルー国交125周年・移民100周年記念展 陶芸に見るアンデスの造形美(後期)	11年3月9日～3月21日	11日間	1,295人	118人
合計		217日間	42,415人	195人

平成11(1999)年度実績

86 特別展 創作版画の誕生 近代を刻んだ作家たち	11年4月6日～5月23日	39日間	4,641人	119人
87 特別展 浮世絵師たちの神仏 一錦絵と大絵馬にみる江戸の庶民信仰	11年6月8日～7月15日	39日間	5,837人	150人
88 特別展 江戸小紋と型紙 一極小の美の世界	11年8月10日～9月26日	39日間	10,477人	269人
89 特別展 20世紀中国画壇の巨匠 傅抱石 一日中美術交流のかけ橋	11年10月12日～11月21日	34日間	8,221人	242人
90 特別展 戦後美術を読みなおす 吉仲太造	11年12月7日～12年1月30日	40日間	5,563人	139人
2000松濤美術館公募展 特別陳列 川本喜八郎 人形のドラマ・半世紀の軌道 (前期・三国志の世界)	12年2月12日～2月27日	13日間	4,284人	330人
第18回渋谷区小中学生絵画展 特別陳列 川本喜八郎 人形のドラマ・半世紀の軌道 (後期・平家物語の世界)	12年3月7日～3月19日	11日間	2,183人	198人
合計		215日間	41,206人	192人

平成12(2000)年度実績

91 特別展 石井柏亭 絵の旅	12年4月4日～5月21日	42日間	7,743人	184人
92 特別展 セーヌの岸辺から 画業60年 村山密	12年6月6日～7月16日	36日間	22,791人	633人
93 特別展 アラベスク模様の世界 中近東・イスラムの祈りと幻想	12年8月1日～9月24日	48日間	9,611人	200人
94 特別展 ZENGA 帰ってきた禅画 —アメリカギッターイエレン夫妻コレクションから—	12年10月10日～11月26日	41日間	10,218人	249人
95 特別展 細江英公の写真 1950-2000	12年12月12日～13年1月28日	37日間	9,470人	256人
2001松濤美術館公募展 特別陳列 榎コレクション 口もととあかりの浮世絵(前期)	13年2月13日～2月25日	12日間	2,606人	217人
第19回渋谷区小中学生絵画展 特別陳列 榎コレクション 口もととあかりの浮世絵(後期)	13年3月6日～3月20日	13日間	1,520人	117人
合計		229日間	63,959人	279人

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
平成13(2001)年度実績				
96 特別展 今純三・和次郎とエッチング作家協会 —採集する風景／銅版画と考現学の出会い—	13年4月3日～5月13日	36日間	4,231人	118人
97 開館20周年記念特別展 中国美術の精華—台北・鴻禧美術館所蔵品展—	13年5月29日～7月8日	36日間	10,444人	290人
98 特別展 祈りと装いの「ぬの」 ミャンマー、カンボジア、タイ、ラオスの染織	13年7月24日～9月16日	48日間	9,325人	194人
99 特別展 眼の革命 発見された日本美術	13年10月2日～11月18日	42日間	7,091人	169人
100 特別展 瀧口修造の造形的実験	13年12月4日～14年1月27日	43日間	7,759人	180人
2002松濤美術館公募展	14年2月12日～2月24日	12日間	2,741人	228人
特別陳列 新収蔵品展(前期)				
第20回渋谷区小中学生絵画展	14年3月5日～3月17日	12日間	1,734人	145人
特別陳列 新収蔵品展(後期)				
合計		229日間	43,325人	189人
平成14(2002)年度実績				
101 特別展 雪村 戦国時代のスーパー・エキセントリック	14年4月2日～5月12日	36日間	16,372人	455人
102 特別展 百面のかたち 橋岡一路 能面の心と技	14年5月28日～7月7日	36日間	10,138人	282人
103 特別展 20世紀写真探索 写真のモダニズム／ジャポニズム 石田喜一郎とシドニーカメラサークル	14年7月23日～9月8日	42日間	4,580人	109人
104 特別展 渋谷区制70周年記念展 友好都市ゆかりの美術展 —黒田清輝・東郷青児・菱田春草・郷倉和子など— 特別陳列 渋谷区制70周年記念 岸田麗子展 「麗子像」以後を生きる	14年9月24日～10月6日	12日間	2,744人	229人
105 特別展 生誕100年記念 小林秀雄 美を求める心	14年10月15日～11月24日	36日間	18,076人	502人
106 特別展 現代日本の水彩表現 にじみ、ほかし、重ね、線	14年12月10日～15年1月26日	37日間	11,591人	313人
2003松濤美術館公募展	15年2月12日～2月23日	11日間	2,596人	236人
特別陳列 2003日本におけるトルコ年 アイドゥン・ドアン財団国際漫画コンクール展				
第21回渋谷区小中学生絵画展	15年3月4日～3月16日	12日間	2,076人	173人
特別陳列 2003日本におけるトルコ年 トルコ中央銀行コレクション展				
合計		222日間	68,173人	307人
平成15(2003)年度実績				
107 特別展 武者絵 江戸の英雄大図鑑	15年4月8日～5月18日	36日間	5,098人	142人
108 特別展 上海博物館展 中国文人の世界	15年6月3日～7月13日	36日間	11,011人	306人
109 特別展 エイコ・クスマ・コレクション 木綿の島々 インドネシアの染織	15年7月29日～9月7日	36日間	5,958人	166人
特別陳列 ジャワ島・スマトラ島の染織 福岡市美術館所蔵 エイコ・クスマコレクションより				

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
110 特別展 トルコ共和国文化省 現代絵画展 工芸とイズニックタイトル展	15年9月23日～10月5日	12日間	1,879人	157人
111 特別展 合田佐和子 映像 絵画・オブジェ・写真	15年10月14日～11月24日	37日間	6,120人	165人
112 特別展 谷中安規の夢 シネマとカフェと怪奇のまぼろし	15年12月9日～16年2月1日	43日間	14,195人	330人
2004松濤美術館公募展	16年2月8日～2月22日	13日間	2,820人	217人
特別陳列 村林忠写真展 1932-1987(前期)				
第22回渋谷区小中学生絵画展	16年3月2日～3月14日	12日間	1,872人	156人
特別陳列 村林忠写真展 1932-1987(後期)				
合計		225日間	48,953人	218人

平成16(2004)年度実績

113 特別展 表現者 河井寛次郎 陶芸・木彫・家具・詞	16年4月6日～5月23日	41日間	9,268人	226人
114 特別展 南京・江蘇省美術館所蔵 20世紀の中国水彩画 風景と詩情	16年6月8日～7月19日	37日間	7,024人	190人
115 特別展 瑛九 前衛画家の大きな冒険	16年8月10日～9月20日	37日間	5,670人	153人
116 特別展 生誕百年 安井仲治 写真のすべて	16年10月5日～11月21日	41日間	7,887人	192人
117 特別展 華麗なるペルシャ絨毯の世界 イラン・ミラー工房の復元作品と古典作品	16年12月7日～17年1月30日	42日間	6,903人	164人
2005松濤美術館公募展	17年2月12日～2月27日	14日間	2,230人	159人
特別陳列 日韓現代メタルアート ジュエリーとオブジェのパレット(前期)				
第23回渋谷区小中学生絵画展	17年3月7日～3月21日	14日間	1,745人	125人
特別陳列 日韓現代メタルアート ジュエリーとオブジェのパレット(後期)				
合計		226日間	40,727人	180人

平成17(2005)年度実績

118 特別展 梅原龍三郎 晩年の造形と愛蔵品	17年4月5日～5月15日	35日間	7,442人	213人
119 特別展 會田雄亮 変貌する陶土 練込・陶壁・モニュメント	17年5月31日～7月18日	43日間	4,566人	106人
120 特別展 ドラマとポエジーの画家 和田義彦	17年8月2日～9月19日	43日間	6,567人	153人
121 特別展 現代を生きる青磁 中島宏展	17年10月4日～11月20日	41日間	7,594人	185人
122 特別展 幻想のコレクション 芝川照吉 劉生、達吉、柏亭らを支えたもう一つ美術史	17年12月6日～18年1月29日	43日間	5,356人	125人
2006松濤美術館公募展	18年2月12日～2月26日	13日間	2,239人	172人
特別陳列 むさしの 東松友一の写真				
第24回渋谷区小中学生絵画展／中国小中学生絵画展	18年3月6日～3月19日	13日間	1,556人	120人
合計		231日間	35,320人	153人

平成18(2006)年度実績

123 特別展 台湾の女性日本画家 生誕100年記念 陳進展	18年4月5日～5月14日	35日間	7,304人	209人
--------------------------------	---------------	------	--------	------

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
124 開館25周年記念特別展 骨董誕生 日本が愛した古器物の系譜	18年5月30日～7月9日	36日間	10,668人	296人
125 特別展 ポーランド国立ウッチ美術館所蔵 ポーランド写真の100年展	18年7月25日～8月27日	30日間	3,819人	127人
126 特別展 ISHIODORI SHOWCASE 石踊達哉展	18年9月12日～10月15日	30日間	5,155人	172人
127 特別展 迷宮+美術館 コレクター砂益富男が見た20世紀美術	18年10月31日～12月10日	35日間	4,560人	130人
2007松濤美術館公募展	19年2月10日～2月25日	14日間	2,768人	198人
特別陳列 渋谷区立松濤美術館所蔵品展				
第25回渋谷区小中学生絵画展	19年3月3日～3月18日	14日間	1,588人	113人
特別陳列 渋谷区立松濤美術館所蔵品展				
合計		194日間	35,862人	185人

平成19(2007)年度実績

128 特別展 清原啓一 遊鶏の賦	19年4月5日～5月20日	40日間	3,847人	96人
129 特別展 大辻清司の写真 出会いとコラボレーション	19年6月5日～7月16日	37日間	4,545人	123人
130 特別展 景德鎮千年展 皇帝の器から毛沢東の食器まで	19年7月31日～9月17日	43日間	21,123人	491人
131 特別展 Great Ukiyo-e Masters 春信、歌麿、北斎、広重 ミネアポリス美術館秘蔵コレクションより	19年10月2日～11月25日	48日間	13,466人	281人
132 特別展 上海 近代の美術	19年12月11日～20年1月27日	36日間	7,886人	219人
2008松濤美術館公募展	20年2月10日～2月24日	13日間	2,721人	209人
特別陳列 岩井敏写真展 マスケラの夢 ヴェネツィア(前期)				
第26回渋谷区小中学生絵画展	20年3月1日～3月16日	14日間	1,932人	138人
特別陳列 岩井敏写真展 マスケラの夢 ヴェネツィア(後期)				
合計		231日間	55,520人	240人

平成20(2008)年度実績

133 特別展 中西夏之新作展 絵画の鎖・光の森	20年4月8日～5月25日	41日間	7,352人	179人
134 特別展 大正の鬼才 河野通勢 新発見作品を中心に	20年6月3日～7月21日	43日間	9,816人	228人
135 特別展 生誕100年記念 けとばし山のおてんば画家 大道あや展	20年8月5日～9月21日	42日間	13,204人	314人
136 特別展 池口史子展 静寂の次	20年10月7日～11月24日	43日間	7,971人	185人
137 特別展 素朴美の系譜 江戸から大正・昭和へ	20年12月9日～21年1月25日	36日間	6,357人	177人
2009松濤美術館公募展	21年2月8日～2月22日	12日間	3,279人	273人
特別陳列 とよた真帆 絵ときもの展 すべての季、すべての宙(前期)				
第27回渋谷区小中学生絵画展	21年2月28日～3月15日	14日間	1,552人	111人
特別陳列 とよた真帆 絵ときもの展 すべての季、すべての宙(後期)				
合計		231日間	49,531人	214人

展観事業名	期間	日数	入館者数	1日平均 入館者数
平成21(2009)年度実績				
138 特別展 台湾の心・台湾の情 廖修平・江明賢 二人展	21年4月7日～5月17日	35日間	3,614人	103人
139 特別展 江戸の幟旗 庶民の願い・絵師の技	21年7月28日～9月13日	42日間	5,564人	132人
140 特別展 生誕120年 野島康三 肖像の核心	21年9月29日～11月5日	41日間	4,855人	118人
141 特別展 没後90年 村山槐多 ガランスの悦楽	21年12月1日～22年1月24日	41日間	11,355人	277人
2010松濤美術館公募展	22年2月7日～2月21日	12日間	2,369人	197人
特別陳列 魚住誠一写真展 プロムオイルの美学1920's-1930's(前期)				
第28回渋谷区小中学生絵画展	22年2月27日～3月14日	14日間	1,217人	87人
特別陳列 魚住誠一写真展 プロムオイルの美学1920's-1930's(後期)				
合計		185日間	28,974人	157人
平成22(2010)年度実績				
142 特別展 ケンブリッジ大学創立800周年記念 志村博がシルクスクリーンと映像で綴る 遥かなるグランチェスター・メドー	22年4月6日～5月23日	41日間	5,906人	144人
143 特別展 中国の扇面画 中國美術館所蔵	22年6月8日～6月27日	18日間	2,364人	131人
特別陳列 エキレキリエブルアート展 色のシンフォニー	22年7月13日～8月1日	18日間	1,613人	90人
併催 松濤美術館30年の記録				
144 特別展 岡田菊恵 画業60年のあゆみ 色彩と空間	22年8月17日～10月3日	41日間	3,901人	95人
145 特別展 大正イマジユリイの世界 デザインとイラストレーションのモダニズム	22年11月30日～23年1月23日	42日間	9,382人	223人
2011 松濤美術館公募展	23年2月6日～2月20日	13日間	2,099人	161人
併催 平成23年所蔵品展 渋谷区立松濤美術館所蔵品展				
第29回渋谷区小中学生絵画展	23年2月26日～3月16日	14日間	1,259人	90人
併催 第29回渋谷区立小・中学校特別支援学級連合展覧会				
合計		187日間	26,524人	142人
平成23(2011)年度実績				
146 開館30周年記念特別展 牛島憲之 至高なる静謐	23年4月5日～5月29日	47日間	7,624人	162人
147 特別展 チェコ・アニメ もうひとりの巨匠 カレル・ゼマン展 トリック映画の前衛	23年6月14日～7月24日	36日間	6,378人	177人
148 特別展 岡本信治郎展「空襲25時」	23年8月9日～9月19日	37日間	4,577人	124人
149 特別展 宗廣コレクション 芹沢銈介展	23年10月4日～11月20日	41日間	7,813人	191人
150 開館30周年記念特別展 渋谷ユートピア1900-1945	23年12月6日～24年1月29日			
合計				

収蔵年度

年度	点数	年度	点数
1981(昭和56)年度		1997(平成9)年度	5点
1982(昭和57)年度	2点	1998(平成10)年度	520点
1983(昭和58)年度		1999(平成11)年度	25点
1984(昭和59)年度	49点	2000(平成12)年度	5点
1985(昭和60)年度		2001(平成13)年度	403点
1986(昭和61)年度	19点	2002(平成14)年度	27点
1987(昭和62)年度	7点	2003(平成15)年度	78点
1988(昭和63)年度	67点	2004(平成16)年度	2点
1989(昭和64/平成元)年度	51点	2005(平成17)年度	80点
1990(平成2)年度	11点	2006(平成18)年度	22点
1991(平成3)年度		2007(平成19)年度	28点
1992(平成4)年度	5点	2008(平成20)年度	
1993(平成5)年度	30点	2009(平成21)年度	
1994(平成6)年度	11点	2010(平成22)年度	24点
1995(平成7)年度	2点	2011(平成23)年度	
1996(平成8)年度	9点	合計	1,482点

収蔵作家

会田雄亮	4点	久保守	4点	堀江於菟	1点
秋山泰計	4点	桑原盛行	1点	堀内正和	3点
阿部新一	7点	合田佐和子	5点	堀武治郎	1点
麻生三郎	1点	児玉幸雄	4点	松永田鶴江	8点
有田四郎	6点	小林和作	1点	村田勝四郎	48点
飯田満佐子	65点	近藤竜夫	2点	村林忠	51点
五十嵐興七	1点	島田貫一郎	1点	室井東志生	2点
池田龍雄	2点	島津保吉	1点	森芳雄	1点
石井柏亭	3点	菅木志雄	1点	森田曠平	2点
石田喜一郎	242点	宗星石	1点	安井仲治	64点
石橋鏗太郎	1点	曾我尾武治	12点	山口啓介	2点
石本正	1点	高木義夫	1点	山口勝弘	2点
磯村敏之	1点	高橋甲子男	3点	山下菊二	1点
伊藤隆康	18点	高森碎巖	1点	山崎静村	30点
上田慧	1点	高山登	2点	山脇洋二	1点
海老原喜之助	65点	瀧和亭	1点	羊石	1点
遠藤享	5点	瀧口修造	1点	吉仲太造	5点
大久保泰	1点	立石春美	1点	吉村益信	2点
大田黒元雄	2点	谷川晃一	1点	廖修平	1点
大辻清司	20点	近岡善次郎	1点	脇田愛二郎	1点
大橋康堂	9点	土浦信子	3点	ヘンリー・アイクハイム	4点
小川マリ	1点	飛田周山	1点	C.E.Wakeford	2点
岡田正二	20点	富田通雄	2点	C.W.Bostock	2点
恩地孝四郎	2点	仲田好江	2点	S.W.Eutrope	1点
鍵山一郎	6点	中田幾久治	4点	H.Cazneaux	7点
掛札功	167点	永瀬義雄	1点	Leonard Misonne	1点
郭徳俊	6点	中島宏	1点	Henri Mallard	2点
勝野正則	1点	中野恵祥	1点	Monte Luke	4点
加藤一	7点	中村孝平	2点	D.J.Webster	1点
上矢津	4点	西嶋俊親	4点	R.G. Allman	1点
川上清次	1点	西田武雄	1点	E. Dittrich	1点
川崎正人	1点	野島稲子	1点	W.S. White	1点
亀田鵬斎	1点	野島康三	35点	Arthur Ford	2点
ガストン・ブティ	2点	橋本文良	4点	C.U.Poole	1点
岸中延年	2点	橋本明治	1点	James E. Paton	1点
木村光佑	4点	長谷川保定	1点	C.Frazier	3点
木島柳鷗	1点	馬場彬	1点	C.R.Pancosar	1点
北川健次	1点	日和崎尊夫	3点	Urushihata	1点
清原啓一	3点	福島金一郎	1点	W.V.Gloeden	1点
久我修	1点	福原信三	18点	不詳	3点
工藤甲人	6点	藤本東一良	1点		

収蔵作品リスト

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
1-OK1-1	(本)	恩地孝四郎	詩文集「季節標」	1935	31.0×36.0	書籍、紙	1982/7/5	富士銀行渋谷支店
2-OK1-2	(版)	恩地孝四郎	Lyrique No.9 はるかな希い	1951	36.6×27.2	マルチブロック、紙	1982/7/5	富士銀行渋谷支店
3-MK1-1	(彫)	村田勝四郎	少女像	1927	18.5×55.0×55.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
4-MK1-2	(彫)	村田勝四郎	壮ちゃんの首	1935	31.0×20.0×20.0	テラコッタ	1985/3/28	村田勝四郎
5-MK1-3	(彫)	村田勝四郎	カワウ	1935	27.0×10.0×14.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
6-MK1-4	(彫)	村田勝四郎	裸婦(とめちゃん)	1936	160.0×45.0×62.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
7-MK1-5	(彫)	村田勝四郎	老人の首	1937	33.0×22.0×20.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
8-MK1-6	(彫)	村田勝四郎	北村透谷記念文学賞牌	1938	17.0×17.0×2.0	テラコッタ	1985/3/28	村田勝四郎
9-MK1-7	(彫)	村田勝四郎	少女立像(よりちゃん)	1938	160.0×42.0×34.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
10-MK1-8	(彫)	村田勝四郎	半坐少女	1938	71.0×35.0×38.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
11-MK1-9	(彫)	村田勝四郎	横隊裸婦	1939	80.0×120.0×52.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
12-MK1-10	(彫)	村田勝四郎	視線	1943	40.0×60.0×28.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
13-MK1-11	(彫)	村田勝四郎	トルソ	1943	85.0×31.0×30.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
14-MK1-12	(彫)	村田勝四郎	右の肘	1943	20.0×32.0×26.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
15-MK1-13	(彫)	村田勝四郎	ヘアピン	1947	64.0×41.0×33.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
16-MK1-14	(彫)	村田勝四郎	ポーズ	1947	42.0×61.0×45.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
17-MK1-15	(彫)	村田勝四郎	手	1954	51.0×31.0×44.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
18-MK1-16	(彫)	村田勝四郎	腕を組んだ立像	1957	82.0×24.0×22.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
19-MK1-17	(彫)	村田勝四郎	T嬢座像	1957	32.0×18.0×20.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
20-MK1-18	(彫)	村田勝四郎	八丈島さん	1957	41.0×22.0×24.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
21-MK1-19	(彫)	村田勝四郎	顔を膝にのせて	1958	68.0×42.0×42.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
22-MK1-20	(彫)	村田勝四郎	牧神の午後	1958	160.0×67.0×65.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
23-MK1-21	(彫)	村田勝四郎	牛	1958	25.0×47.0×14.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
24-MK1-22	(彫)	村田勝四郎	肥った少女	1958	34.0×33.0×25.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
25-MK1-23	(彫)	村田勝四郎	立てひざ	1958	34.0×33.0×25.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
26-MK1-24	(彫)	村田勝四郎	南教授	1960	30.0×14.0×14.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
27-MK1-25	(彫)	村田勝四郎	コリー	1960	13.0×15.0×9.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
28-MK1-26	(彫)	村田勝四郎	ダックスフンド	1963	11.0×18.0×9.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
29-MK1-27	(彫)	村田勝四郎	ダックスフンド	1963	12.0×20.5×5.5	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
30-MK1-28	(彫)	村田勝四郎	ダックスフンド	1963	21.0×30.0×13.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
31-MK1-29	(彫)	村田勝四郎	ダックスフンド	1963	12.0×20.0×6.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
32-MK1-30	(彫)	村田勝四郎	サギと少女	1965	76.0×50.0×51.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
33-MK1-31	(彫)	村田勝四郎	少年とトキ	1967	140.0×47.0×40.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
34-MK1-32	(彫)	村田勝四郎	鳥翁 中西悟堂	1968	31.0×14.0×15.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
35-MK1-33	(彫)	村田勝四郎	津田青楓	1968	33.0×18.0×18.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
36-MK1-34	(彫)	村田勝四郎	白鳥と少年	1970	138.0×45.0×58.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
37-MK1-35	(彫)	村田勝四郎	若きベース奏者	1971	40.0×17.0×20.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
38-MK1-36	(彫)	村田勝四郎	雉を持つ少年	1972	38.0×21.0×18.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
39-MK1-37	(彫)	村田勝四郎	雉を持つ兄弟	1972	90.0×55.0×33.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
40-MK1-38	(彫)	村田勝四郎	語らい	1973	54.0×39.0×19.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
41-MK1-39	(彫)	村田勝四郎	コミミズク	1973	38.0×12.0×25.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
42-MK1-40	(彫)	村田勝四郎	左手をついた女	1973	27.0×19.0×20.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
43-MK1-41	(彫)	村田勝四郎	雉を抱く少年	1973	81.0×20.0×20.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
44-MK1-42	(彫)	村田勝四郎	ささやき	1973	33.0×22.0×23.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
45-MK1-43	(彫)	村田勝四郎	鳩と少年	1973	25.0×32.0×10.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
46-MK1-44	(彫)	村田勝四郎	雉と少年	1973	51.0×26.0×34.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
47-MK1-45	(彫)	村田勝四郎	翼を広げたトキと少年	1977	85.0×64.0×53.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
48-MK1-46	(彫)	村田勝四郎	雉鳩と少年	1979	90.0×32.0×41.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
49-MK1-47	(彫)	村田勝四郎	レダ	1980	31.0×59.0×61.0	石膏	1985/3/28	村田勝四郎
50-MK1-48	(彫)	村田勝四郎	津軽のうた・高橋竹山	1984	45.0×42.0×32.0	ブロンズ	1985/3/28	村田勝四郎
51-YY1-1	(工)	山脇洋二	金彩持國天額	1974	72.7×60.6	金工、銅板、鍍金	1985/3/28	山脇富美
52-OT1-1	(絵)	大久保泰	バリの眺め(パールビルより)	1967	72.7×90.7	油彩、カンヴァス	1986/7/21	大久保泰
53-IT1-1	(絵)	伊藤隆康	作品7-59	1959	115.0×79.0	石膏、塗料	1986/7/21	伊藤倫子
54-IT1-2	(絵)	伊藤隆康	作品12-61	1961	162.0×112.0	石膏、塗料	1986/7/21	伊藤倫子
55-IT1-3	(絵)	伊藤隆康	作品32-61	1961	115.0×79.0	布、石膏	1986/7/21	伊藤倫子
56-IT1-4	(版)	伊藤隆康	無限空間	1961	56.0×40.0	リトグラフ、紙	1986/7/21	伊藤倫子
57-IT1-5	(絵)	伊藤隆康	無限空間5-62	1962	91.0×91.0	石膏	1986/7/21	伊藤倫子

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
58-IT1-6	(彫)	伊藤隆康	コココーラボックス	1965	10.5×47.0×30.0	木箱、プラスチック、塗料	1986/7/21	伊藤倫子
58-IT1-6	(彫)	伊藤隆康	コココーラボックス	1965	10.5×47.0×30.0	木箱、プラスチック、塗料	1986/7/21	伊藤倫子
58-IT1-6	(彫)	伊藤隆康	コココーラボックス	1965	10.5×47.0×30.0	木箱、プラスチック、塗料	1986/7/21	伊藤倫子
58-IT1-6	(彫)	伊藤隆康	コココーラボックス	1965	10.5×47.0×30.0	木箱、プラスチック、塗料	1986/7/21	伊藤倫子
59-IT1-7	(彫)	伊藤隆康	同時に存在するパイプ	1967	60.0×50.0×30.0	木箱、ラッカー塗料	1986/7/21	伊藤倫子
60-IT1-8	(版)	伊藤隆康	無限空間	1979頃	24.7×24.7	シルクスクリーン、紙	1986/7/21	伊藤倫子
61-IT1-9	(版)	伊藤隆康	無限空間	1979頃	28.2×28.7	シルクスクリーン、紙	1986/7/21	伊藤倫子
62-IT1-10	(版)	伊藤隆康	無限空間	1979頃	27.7×27.2	シルクスクリーン、紙	1986/7/21	伊藤倫子
63-IT1-11	(版)	伊藤隆康	無限空間	1979頃	26.6×27.0	シルクスクリーン、紙	1986/7/21	伊藤倫子
64-IT1-12	(版)	伊藤隆康	無限空間	1979頃	28.2×28.9	シルクスクリーン、紙	1986/7/21	伊藤倫子
65-IT1-13	(版)	伊藤隆康	無限空間	1979頃	29.5×29.5	シルクスクリーン、紙	1986/7/21	伊藤倫子
66-IT1-14	(版)	伊藤隆康	無限空間	1979頃	39.2×28.2	シルクスクリーン、紙	1986/7/21	伊藤倫子
67-IT1-15	(版)	伊藤隆康	無限空間	1979頃	40.0×28.0	シルクスクリーン、紙	1986/7/21	伊藤倫子
68-IT1-16	(絵)	伊藤隆康	無限空間	1981	50.0×49.5	陶	1986/7/21	伊藤倫子
69-IT1-17	(彫)	伊藤隆康	26本の線から構成される一本の彫刻	1983頃	21.1×6.6×6.0	ステンレススチール	1986/7/21	伊藤倫子
70-WA1-1	(彫)	脇田愛二郎	ねじられた柱 1	1986	216.0×18.0×18.0	鉄	1987/3/27	脇田愛二郎
71-KK1-1	(版)	木村光佑	Relation-S1	1987	各130.0×90.0	シルクスクリーン、紙	1987/11/24	木村光佑
72-KK1-2	(版)	木村光佑	Relation-S	1987	♂130.0×90.0	シルクスクリーン、紙	1987/11/24	木村光佑
73-HF1-1	(版)	橋本文良	Table Top Suite Version 2 (机上組曲 第2編)	1987	67.0×99.0	シルクスクリーン、紙	1987/11/24	橋本文良
74-HF1-2	(版)	橋本文良	Table Top Suite Version 3 (L) (机上組曲 第3編 L)	1987	67.0×99.0	シルクスクリーン、紙	1987/11/24	橋本文良
75-HF1-3	(版)	橋本文良	Table Top Suite Version 3 (C) (机上組曲 第3編 C)	1987	67.0×99.0	シルクスクリーン、紙	1987/11/24	橋本文良
76-HF1-4	(版)	橋本文良	Table Top Suite Version 3 (R) (机上組曲 第3編 R)	1987	67.0×99.0	シルクスクリーン、紙	1987/11/24	橋本文良
77-CZ1-1	(絵)	近岡善次郎	きのこのおぼけ	1960	116.7×90.9	油彩、カンヴァス	1988/2/26	近岡善次郎
78-KM1-1	(絵)	勝野正則	雨	1985	91.0×152.0	ミクストメディア、ハンダ、 松煙、ハードボード	1989/3/24	勝野正則
79-PG1-1	(絵)	ガストン・ブティ	未来の飛躍 (Elan Vital)	1988	180.0×180.0	油彩、コラーズ、布、カンヴァス	1989/3/24	ガストン・ブティ
80-EK1-1	(絵)	海老原喜之助	農家	1940年代中頃	30.0×34.0	油彩、カンヴァス	1989/3/24	海老原義
81-EK1-2	(絵)	海老原喜之助	牛小屋	1940年代中頃	41.0×53.0	油彩、カンヴァス	1989/3/24	海老原義
82-EK1-3	(絵)	海老原喜之助	家のある風景	1940年代中頃	45.5×53.0	油彩、カンヴァス	1989/3/24	海老原義
83-EK1-4	(絵)	海老原喜之助	人馬習作	1940年代中頃	27.3×22.2	油彩、木炭、カンヴァス	1989/3/24	海老原義
84-EK1-5	(絵)	海老原喜之助	馬習作	1960年代	27.3×22.2	油彩、木炭、カンヴァス	1989/3/24	海老原義
85-EK1-6	(絵)	海老原喜之助	人物習作	1960年代	61.2×49.2	油彩、木炭、カンヴァス	1989/3/24	海老原義
86-EK1-7	(絵)	海老原喜之助	人馬習作	1960年代	24.6×33.2	油彩、カンヴァス	1989/3/24	海老原義
87-EK1-8	(版)	海老原喜之助	弓を射る人	1960年代	64.0×45.1	リトグラフ、紙	1989/3/24	海老原義
88-EK1-9	(版)	海老原喜之助	幾何学人物	1960年代	64.0×45.1	リトグラフ、紙	1989/3/24	海老原義
89-EK1-10	(版)	海老原喜之助	魚を料理する人	1960年代	64.0×45.1	リトグラフ、紙	1989/3/24	海老原義
90-EK1-11	(版)	海老原喜之助	魚を料理する人	1960年代	64.0×45.1	リトグラフ、紙	1989/3/24	海老原義
91-EK1-12	(版)	海老原喜之助	群馬	1960年代	64.0×45.1	リトグラフ、紙	1989/3/24	海老原義
92-EK1-13	(版)	海老原喜之助	天使落ちる	1960頃	64.0×90.8	リトグラフ、紙	1989/3/24	海老原義
93-EK1-14	(版)	海老原喜之助	天使落ちる	1960頃	64.0×90.8	リトグラフ、紙	1989/3/24	海老原義
94-EK1-15	(版)	海老原喜之助	天使落ちる	1960頃	63.5×93.5	リトグラフ、紙	1989/3/24	海老原義
95-EK1-16	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	27.2×38.4	デッサン、鉛筆、紙/(裏)	1989/3/24	海老原義
96-EK1-17	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	26.9×38.0	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
97-EK1-18	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	25.8×37.1	デッサン、鉛筆、紙/(裏)	1989/3/24	海老原義
98-EK1-19	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	25.6×36.9	デッサン、鉛筆、紙/(裏)	1989/3/24	海老原義
99-EK1-20	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	38.0×27.0	デッサン、鉛筆、紙/(裏)	1989/3/24	海老原義
100-EK1-21	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	35.4×25.5	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
101-EK1-22	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	26.2×25.8	デッサン、ペン、インク、水彩、紙	1989/3/24	海老原義
102-EK1-23	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	37.1×27.2	デッサン、鉛筆、色鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
103-EK1-24	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	35.4×25.8	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
104-EK1-25	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	37.4×25.6	デッサン、ペン、インク、鉛筆、 紙/(裏)デッサン、ペン、インク、鉛 筆	1989/3/24	海老原義
105-EK1-26	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	27.1×38.1	デッサン、サインペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
106-EK1-27	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	27.1×38.1	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
107-EK1-28	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	36.3×25.5	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
108-EK1-29	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	36.3×25.5	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
109-EK1-30	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	38.1×27.1	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
110-EK1-31	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	26.3×37.2	デッサン、ペン、インク、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、ペン、インク、鉛 筆	1989/3/24	海老原義
111-EK1-32	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	25.3×35.6	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
112-EK1-33	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	38.1×27.1	デッサン、ペン、インク、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
113-EK1-34	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	35.4×25.5	デッサン、ペン、インク、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
114-EK1-35	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	25.3×35.6	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
115-EK1-36	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	38.1×27.0	デッサン、ペン、インク、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
116-EK1-37	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	38.2×27.2	デッサン、ペン、インク、墨、紙	1989/3/24	海老原義
117-EK1-38	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	27.0×38.0	デッサン、ペン、インク、水彩、紙	1989/3/24	海老原義
118-EK1-39	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	25.6×36.4	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
119-EK1-40	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	25.6×36.4	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
120-EK1-41	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	27.1×31.5	デッサン、ペン、インク、筆、紙	1989/3/24	海老原義
121-EK1-42	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	29.3×22.1	デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
122-EK1-43	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	26.2×18.8	デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
123-EK1-44	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	26.2×18.8	デッサン、ペン、インク、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
124-EK1-45	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	25.3×19.2	デッサン、墨、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
125-EK1-46	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	27.3×22.8	デッサン、ペン、インク、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
126-EK1-47	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	26.1×18.7	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
127-EK1-48	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	31.4×24.1	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
128-EK1-49	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	30.0×22.1	デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
129-EK1-50	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	31.5×22.4	デッサン、ペン、インク、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
130-EK1-51	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	19.2×27.3	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
131-EK1-52	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	28.2×18.7	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
132-EK1-53	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	26.2×18.6	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
133-EK1-54	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	27.2×19.1	デッサン、ペン、インク、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
134-EK1-55	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	26.1×18.7	デッサン、ペン、インク、紙/ (裏)デッサン、鉛筆	1989/3/24	海老原義
135-EK1-56	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	27.1×17.8	デッサン、ペン、インク、墨、紙/ (裏)デッサン、ペン、インク、墨	1989/3/24	海老原義
136-EK1-57	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	26.9×15.5	デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
137-EK1-58	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	27.9×18.0	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、ペン、インク、紙	1989/3/24	海老原義
138-EK1-59	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	25.4×17.8	デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
139-EK1-60	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	20.8×15.4	デッサン、ペン、インク、紙/ (裏)デッサン、鉛筆	1989/3/24	海老原義
140-EK1-61	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	20.8×13.5	デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
141-EK1-62	(素)	海老原喜之助	不詳	1950-1951頃	17.6×11.5	デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
142-EK1-63	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	12.9×16.9	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
143-EK1-64	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	18.6×14.2	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
144-EK1-65	(素)	海老原喜之助	不詳/(裏)不詳	1950-1951頃	18.0×11.1	デッサン、鉛筆、紙/ (裏)デッサン、鉛筆、紙	1989/3/24	海老原義
145-AT1-1	(版)	秋山泰計	母子像	1962	91.0×53.0	木版、墨、紙	1990/2/14	秋山照子
146-AT1-2	(版)	秋山泰計	Casa de Zoomorphismo	1984	60.0×90.5	木版、墨、紙	1990/2/14	秋山照子
147-AT1-3	(版)	秋山泰計	夢の旅II(部分)	1985	91.0×60.0	木版、墨、紙	1990/2/14	秋山照子
148-AT1-4	(版)	秋山泰計	夢の旅II B猫(部分)	1985	51.4×72.6	木版、墨、紙	1990/2/14	秋山照子
149-PG1-2	(版)	ガストン・ブティ	Voyage intérieur(内奥への旅路)	1988	65.0×50.0	エッチング、紙	1990/2/14	ガストン・ブティ
149-PG1-2	(版)	ガストン・ブティ	Sentier ver l'essentiel(潔めの道)	1988	65.0×50.0	エッチング、紙	1990/2/14	ガストン・ブティ
149-PG1-2	(版)	ガストン・ブティ	Ronde des retrouvailles(抜き輪舞)	1988	65.0×50.0	エッチング、紙	1990/2/14	ガストン・ブティ
149-PG1-2	(版)	ガストン・ブティ	Stigmates de gloire(栄光の烙印)	1988	65.0×50.0	エッチング、紙	1990/2/14	ガストン・ブティ
149-PG1-2	(版)	ガストン・ブティ	Naissance multiple(豊かなる創生)	1988	65.0×50.0	エッチング、紙	1990/2/14	ガストン・ブティ
149-PG1-2	(版)	ガストン・ブティ	L'arbre temporel(この世の幕屋)	1988	65.0×50.0	エッチング、紙	1990/2/14	ガストン・ブティ
149-PG1-2	(版)	ガストン・ブティ	L'oeuvre libéré(湧き出る未来)	1988	65.0×50.0	エッチング、紙	1990/2/14	ガストン・ブティ
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ パン A	1965-1985頃	10.5×23.0×8.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ パン B	1965-1985頃	6.5×8.0×9.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ パン C	1965-1985頃	11.0×9.0×2.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 指の箱 A	1965-1985頃	8.0×7.5×5.5	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 指の箱 B	1965-1985頃	7.0×6.2×6.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 指の箱 C	1965-1985頃	6.0×6.0×5.5	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 指 A	1965-1985頃	5.2×5.0×3.5	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 指 B	1965-1985頃	6.0×13.0×7.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 卵の箱	1965-1985頃	6.3×28.5×22.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ フォークの箱 A	1965-1985頃	6.0×28.5×22.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ フォークの箱 B	1965-1985頃	16.0×16.0×5.5	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ トゲの箱 A	1965-1985頃	15.0×32.0×17.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ トゲの箱 B	1965-1985頃	5.0×14.0×7.1	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ トゲの箱 C	1965-1985頃	5.0×14.0×6.9	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ ヘルメット A	1965-1985頃	27.0×27.0×22.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ ヘルメット B	1965-1985頃	25.0×25.5×30.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ ヘルメット C	1965-1985頃	14.0×26.0×22.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ ヘルメット D	1965-1985頃	24.0×25.0×21.5	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 灰皿	1965-1985頃	11.8×11.8×6.8	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ カップ A	1965-1985頃	6.5×13.5×10.2	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ カップ B	1965-1985頃	6.5×13.5×10.3	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 卵 A	1965-1985頃	6.8×6.2×5.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 卵 B	1965-1985頃	5.0×6.0×4.5	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 卵 C	1965-1985頃	5.0×6.0×5.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 卵 D	1965-1985頃	5.0×6.0×5.5	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ 卵 E	1965-1985頃	4.5×6.0×5.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
150-IT1-18	(彫)	伊藤隆康	アルミオブジェ じょうご	1965-1985頃	24.5×21.5×19.0	アルミニウム	1990/2/14	伊藤倫子
151-IM1-1	(絵)	飯田満佐子	枝 (A)	1962	92.0×71.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
152-IM1-2	(絵)	飯田満佐子	枝 (B)	1962	92.0×71.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
153-IM1-3	(絵)	飯田満佐子	冬意 (A)	1962	95.0×77.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
154-IM1-4	(絵)	飯田満佐子	冬意 (B)	1962	95.0×77.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
155-IM1-5	(絵)	飯田満佐子	林間 (A)	1962	90.0×69.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
156-IM1-6	(絵)	飯田満佐子	林間 (B)	1962	90.0×69.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
157-IM1-7	(絵)	飯田満佐子	樹 (A)	1963	72.0×91.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
158-IM1-8	(絵)	飯田満佐子	苑樹 (D)	1966	86.0×123.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
159-IM1-9	(絵)	飯田満佐子	夜色 (A)	1967	57.0×50.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
160-IM1-10	(絵)	飯田満佐子	夜色 (C)	1967	57.0×45.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
161-IM1-11	(絵)	飯田満佐子	夜色 (F)	1967	57.0×50.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
162-IM1-12	(絵)	飯田満佐子	黄韻	1967	58.0×50.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
163-IM1-13	(絵)	飯田満佐子	紅韻	1967	41.0×66.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
164-IM1-14	(絵)	飯田満佐子	媒体	1967	113.0×146.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
165-IM1-15	(絵)	飯田満佐子	啓示	1968	160.0×98.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
166-IM1-16	(絵)	飯田満佐子	応答	1968	160.0×98.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
167-IM1-17	(絵)	飯田満佐子	雙動	1968	147.0×226.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
168-IM1-18	(絵)	飯田満佐子	おはよう	1971	118.0×150.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
169-IM1-19	(絵)	飯田満佐子	ヒッピー卵	1971	118.0×150.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
170-IM1-20	(絵)	飯田満佐子	水の都	1971	118.0×150.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
171-IM1-21	(絵)	飯田満佐子	想い出	1971	78.0×96.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
172-IM1-22	(絵)	飯田満佐子	とんだ卵	1971	78.0×96.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
173-IM1-23	(絵)	飯田満佐子	ともだち	1971	78.0×96.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
174-IM1-24	(絵)	飯田満佐子	今朝のおかず	1971	78.0×96.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
175-IM1-25	(絵)	飯田満佐子	くらげの家族	1971	55.0×70.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
176-IM1-26	(絵)	飯田満佐子	息	1971	149.0×218.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
177-IM1-27	(絵)	飯田満佐子	トレドの子	1972	148.0×214.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
178-IM1-28	(絵)	飯田満佐子	廻想	1972	47.0×55.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
179-IM1-29	(絵)	飯田満佐子	ソヴィエトの人形	1977	42.0×51.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
180-IM1-30	(絵)	飯田満佐子	おしろい	1977	33.0×45.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
181-IM1-31	(絵)	飯田満佐子	山趣	1982	150.0×109.0	墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
182-IM1-32	(絵)	飯田満佐子	幽茂	1986	130.0×79.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
183-IM1-33	(絵)	飯田満佐子	枯叢	1988	97.0×118.0	岩絵具、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
184-IM1-34	(絵)	飯田満佐子	春聲	1986	118.0×38.0	墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
185-IM1-35	(絵)	飯田満佐子	秋景山水	1980	104.0×137.0	墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
186-IM1-36	(絵)	飯田満佐子	雪景山水	1980	94.0×125.0	墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
187-IM1-37	(絵)	飯田満佐子	新浄	1986	36.0×26.0	墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
188-IM1-38	(絵)	飯田満佐子	澄心	1986	48.0×178.0	墨、金箔砂子、紙	1990/2/14	飯田満佐子
189-IM1-39	(絵)	飯田満佐子	野水	1986	120.0×36.0	墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
190-IM1-40	(絵)	飯田満佐子	青山幽情	1986	130.0×51.0	墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
191-IM1-41	(絵)	飯田満佐子	柳色	1988	136.0×33.0	墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
192-IM1-42	(絵)	飯田満佐子	杜甫詩	1961	135.0×19.0	書、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
193-IM1-43	(絵)	飯田満佐子	並木道	1982	93.0×33.0	書、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
194-IM1-44	(絵)	飯田満佐子	村情山趣	1987	47.0×96.0	書、墨、紙	1990/2/14	飯田満佐子
195-UK1-1	(絵)	上田慧	ロココを訪ねて	1984	161.0×130.0	油彩、カンヴァス	1990/2/14	上田慧
196-JT2-1	(絵)	磯村敏之	或る金曜の午後(カシュガル)	1987	107.0×132.0	油彩、カンヴァス	1991/3/30	磯村敏之
197-YK1-1	(版)	山口啓介	水路—王の方舟(Ark- the King's)	1990	120.0×234.0	エッチング、紙	1991/3/30	山口啓介
198-YK1-2	(版)	山口啓介	胞子を蒔く船(Ship- sow a field a spore)	1990	120.0×234.0	エッチング、紙	1991/3/30	山口啓介
199-KN1-1	(版)	岸中延年	Spring into View 90-4	1990	160.0×160.0	フォトエッチング、 ドローイング、紙	1991/3/30	岸中延年
200-KN1-2	(版)	岸中延年	Spring into View 90-5	1990	160.0×160.0	フォトエッチング、 ドローイング、紙	1991/3/30	岸中延年
201-KO1-1	(絵)	久我修	アシタミタユメ	1989	162.0×194.0	アクリル絵具、カンヴァス	1991/3/30	久我修
202-ES1-1	(版)	遠藤享	SPACE & SPACE/NEWSPAPER	1984	45.0×45.0	オフセトリトグラフ、紙	1991/3/30	遠藤享
203-ES1-2	(版)	遠藤享	SPACE & SPACE/PENCIL V	1984	45.0×45.0	オフセトリトグラフ、紙	1991/3/30	遠藤享
204-ES1-3	(版)	遠藤享	SPACE & SPACE/BOTTLE 7	1988	45.0×45.0	オフセトリトグラフ、紙	1991/3/30	遠藤享
205-ES1-4	(版)	遠藤享	SPACE & SPACE/CAN AND SEA II	1989	45.0×45.0	オフセトリトグラフ、紙	1991/3/30	遠藤享
206-ES1-5	(版)	遠藤享	SPACE & SPACE/LIGHT BULB 6	1989	45.0×45.0	オフセトリトグラフ、紙	1991/3/30	遠藤享
207-KK2-1	(絵)	清原啓一	決闘	1987	91.0×117.0	油彩、カンヴァス	1993/3/11	清原啓一
208-HM1-1	(版)	堀内正和	会話のデッサン	1991	40.0×27.0/60.5×43.0	シルクスクリーン、紙	1993/3/11	堀内正和
209-HM1-2	(版)	堀内正和	ボタン	1991	36.5×28.0/60.5×43.0	シルクスクリーン、紙	1993/3/11	堀内正和
210-HM1-3	(版)	堀内正和	正方形+正三角形	1991	18.0×19.5/35.0×42.0	シルクスクリーン、紙	1993/3/11	堀内正和
211-NK1-1	(工)	中野恵祥	鶏頭	1964	高さ64	金工、真鍮、鍍金	1993/3/11	中野政樹
212-NY1-1	(写)	野島康三	無題(佐藤田鶴江像・ネッカチーフ)	1939	37.8×30.4	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
213-NY1-2	(写)	野島康三	無題(佐藤田鶴江像・ネッカチーフ)	1939	37.8×30.4	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
214-NY1-3	(写)	野島康三	無題(佐藤田鶴江像・毛糸帽子)	1939	38.5×30.5	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
215-NY1-4	(写)	野島康三	無題正面(佐藤田鶴江像・毛糸帽子)	1939	38.5×30.5	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
216-NY1-5	(写)	野島康三	無題(佐藤田鶴江像・笠)	1939	38.6×30.5	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
217-NY1-6	(写)	野島康三	無題(佐藤田鶴江像・笠)	1939	38.6×30.5	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
218-NY1-7	(写)	野島康三	無題(佐藤田鶴江像・スキー)	1939	35.9×30.5	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
219-NY1-8	(写)	野島康三	題名不詳(佐藤田鶴江像・ぎんれい花)	1939	36.1×30.4	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
220-NY1-9	(写)	野島康三	題名不詳(佐藤田鶴江像・ぎんれい花)	1939	29.0×25.7	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
221-NY1-10	(写)	野島康三	題名不詳(モデル)	1938-1939	30.5×30.4	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
222-NY1-11	(写)	野島康三	題名不詳(モデル・水着)	1938-1939	34.8×30.7	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
223-NY1-12	(写)	野島康三	題名不詳(和子と田鶴子)	1938-1939	29.3×23.0	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
224-NY1-13	(写)	野島康三	題名不詳(さざえ)	1938-1939	30.0×25.4	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
225-NY1-14	(写)	野島康三	題名不詳(浜辺)	1938-1939	25.9×24.2	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
226-NY1-15	(写)	野島康三	題名不詳(鬼押出)	1938-1939	15.4×23.1	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
227-NY1-16	(写)	野島康三	題名不詳(佐藤田鶴江像・ストール)	1938-1939	27.6×25.3	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
228-NY1-17	(写)	野島康三	題名不詳(ピクニック)	1938-1939	35.5×29.7	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
229-NY1-18	(写)	野島康三	題名不詳(花つみ)	1938-1939	23.0×28.5	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
230-NY1-19	(写)	野島康三	題名不詳(花つみ)	1938-1939	30.0×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
231-NY1-20	(写)	野島康三	白菜	1938-1939	35.5×29.5	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
232-NY1-21	(写)	野島康三	題名不詳(白菜)	1938-1939	29.2×33.3	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
233-MT1-1	(写)	松永(佐藤)田鶴江	扉	1938-1939	28.8×22.5	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
234-MT1-2	(写)	松永(佐藤)田鶴江	題名不詳(洗濯場)	1938-1939	30.0×23.8	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
235-MT1-3	(写)	松永(佐藤)田鶴江	題名不詳(バラ)	1938-1939	28.4×24.8	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
236-MT1-4	(写)	松永(佐藤)田鶴江	題名不詳(女性友人)	1938-1939	30.3×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
237-MT1-5	(写)	松永(佐藤)田鶴江	題名不詳(野島父娘)	1938-1939	33.8×26.9	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
238-MT1-6	(写)	松永(佐藤)田鶴江	題名不詳(野島稲子像)	1938-1939	29.2×23.6	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
239-MT1-7	(写)	松永(佐藤)田鶴江	題名不詳(野島家室内)	1938-1939	29.7×25.3	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
240-MT1-8	(写)	松永(佐藤)田鶴江	題名不詳(やつで)	1938-1939	28.0×25.4	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
241-NI1-1	(写)	野島稲子	題名不詳	1930年代後半	30.0×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1993/6/15	松永田鶴江
242-TS1-1	(絵)	飛田周山	白衣観音図	1932	131.0×33.0	紙本墨画	1994/6/29	飯田満佐子
243-SS1-1	(絵)	宗星石	山水図	1906	136.0×93.5	紙本墨画	1994/6/29	飯田満佐子
244-Yx1-1	(絵)	羊石	松下高士図	不詳	136.0×34.0	紙本墨画淡彩	1994/6/29	飯田満佐子
245-KH1-1	(絵)	亀田鵬斎	思心亭	江戸時代後期	26.0×57.0	紙本墨書	1994/6/29	飯田満佐子
246-KY1-1	(絵)	児玉幸雄	広場の遣化師	1982	F100	油彩、カンヴァス	1994/5/6	児玉純子
247-KY1-2	(絵)	児玉幸雄	古物を売る女	1982	F80	油彩、カンヴァス	1994/5/6	児玉純子
248-KY1-3	(絵)	児玉幸雄	アラゴンの回想	1986	S100	油彩、カンヴァス	1994/5/6	児玉純子
249-KY1-4	(絵)	児玉幸雄	市場の楽団	1980年代	F50	油彩、カンヴァス	1994/5/6	児玉純子
250-NT1-1	(絵)	西嶋俊親	エスカルゴの店 (Rue de Rambuteau)	1966	F60	油彩、カンヴァス	1995/3/15	西嶋俊親
251-NT1-2	(絵)	西嶋俊親	村邑浅春	1980	P100	油彩、カンヴァス	1995/3/15	西嶋俊親
252-NT1-3	(絵)	西嶋俊親	河畔秋霖	1982	F100	油彩、カンヴァス	1995/3/15	西嶋俊親
253-HT1-1	(版)	日和崎尊夫	KAOS No.1	1974	33.7×26.1	木口木版、紙	1996/4/10	日和崎雅代
254-HT1-2	(版)	日和崎尊夫	KALPA 生命	1987	18.1×18.0	木口木版、紙	1996/4/10	日和崎雅代
255-HT1-3	(版)	日和崎尊夫	火の歌	1989	17.8×26.3	木口木版、紙	1996/4/10	日和崎雅代
256-TM1-1	(絵)	富田通雄	スタジオのパレリーナ	1959	90.0×116.0	水彩、紙	1995/10/15	富田雅雄
257-TM1-2	(絵)	富田通雄	溪流	1933	48.7×68.0	水彩、紙	1995/10/15	富田雅雄
258-KD1-1	(版)	郭徳俊	フォードと郭	1975	47.0×34.0	リトグラフ、紙	1996/6/14	郭徳俊
259-KD1-2	(版)	郭徳俊	カーターと郭	1976	54.0×37.0	セリグラフ、紙	1996/6/14	郭徳俊
260-KD1-3	(版)	郭徳俊	レーガンと郭	1976	54.0×37.0	セリグラフ、紙	1996/6/14	郭徳俊
261-KD1-4	(版)	郭徳俊	レーガンIIと郭	1985	54.0×38.5	セリグラフ、紙	1996/6/14	郭徳俊
262-KD1-5	(版)	郭徳俊	ブッシュと郭	1989	53.5×41.0	セリグラフ、紙	1996/6/14	郭徳俊
263-KD1-6	(版)	郭徳俊	クリントンと郭	1993	54.5×41.0	セリグラフ、紙	1996/6/14	郭徳俊
264-YK2-1	(版)	山下菊二	KとMとの人生案内	1972	39.0×27.0	シルクスクリーン、コーラージュ	1997/7/11	笹木繁男
265-KM2-1	(絵)	久保守	婦人像	1930	60.7×49.8	油彩、カンヴァス	1997/9/10	久保多嘉子
266-KM2-2	(絵)	久保守	裸体(Ebauche)	1947	90.2×72.7	油彩、カンヴァス	1997/9/10	久保多嘉子
267-KM2-3	(絵)	久保守	階段のある部屋	1964	97.2×130.3	油彩、カンヴァス	1997/9/10	久保多嘉子
268-KM2-4	(絵)	久保守	秋の歌	1967	97.2×130.3	油彩、カンヴァス	1997/9/10	久保多嘉子
269-OS1-1	(絵)	岡田正二	奇術	1975	162.0×131.0	水彩、コーラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
270-OS1-2	(絵)	岡田正二	青の形成	1978	162.0×131.0	水彩、コーラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
271-OS1-3	(絵)	岡田正二	赤い時間	1978	162.0×131.0	水彩、コーラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
272-OS1-4	(絵)	岡田正二	月と丸のある時間	1978	162.0×131.0	水彩、コーラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
273-OS1-5	(絵)	岡田正二	手賀沼風景	1968以降	50.0×59.0	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子
274-OS1-6	(絵)	岡田正二	西洋風景 街角	1973	28.0×38.0	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子
275-OS1-7	(絵)	岡田正二	西洋風景 街角	1968以降	25.0×18.0	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子
276-OS1-8	(絵)	岡田正二	バラの花	1968以降	40.5×32.5	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子
277-OS1-9	(絵)	岡田正二	静物(瓶)	1968以降	24.0×27.0	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
278-OS1-10	(絵)	岡田正二	茶色の漁村風景	1968以降	24.0×27.5	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子
279-OS1-11	(絵)	岡田正二	漁村(舟と浜)	1968以降	24.0×27.0	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子
280-OS1-12	(絵)	岡田正二	漁村(網)	1968以降	24.0×27.0	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子
281-OS1-13	(絵)	岡田正二	鳥と街(緑)	1968以降	38.0×29.0	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子
282-OS1-14	(絵)	岡田正二	鳥と街(ピンク)	1968以降	38.0×29.0	水彩、紙	1998/8/26	石原美智子
283-OS1-15	(絵)	岡田正二	心象風景	1931頃	17.0×32.0	水彩、コラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
284-OS1-16	(絵)	岡田正二	心象風景	1931頃	17.0×32.0	水彩、コラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
285-OS1-17	(絵)	岡田正二	心象風景	1931頃	17.0×32.0	水彩、コラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
286-OS1-18	(絵)	岡田正二	心象風景	1931頃	17.0×32.0	水彩、コラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
287-OS1-19	(絵)	岡田正二	心象風景	1931頃	17.0×30.0	水彩、コラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
288-OS1-20	(絵)	岡田正二	心象風景	1931頃	17.0×30.0	水彩、コラージュ、紙	1998/8/26	石原美智子
289-IH1-1	(絵)	石井柏亭	萩と山吹	1928	各150.0×149.0	金地、岩彩、屏風2曲1双	1998/11/5	関野克
290-IH1-2	(絵)	石井柏亭	木曾川風景(瀬沼)	1929	37.0×51.5	水彩、紙	1998/11/5	関野克
291-OM1-1-1	(写)	大田黒元雄	(川辺の散歩)手製作品集(無題)より	1921頃	13.5×19.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-2	(写)	大田黒元雄	(室内)手製作品集(無題)より	1921頃	13.4×19.4	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-3	(写)	大田黒元雄	(寺の軒下)手製作品集(無題)より	1921頃	20.8×12.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-4	(写)	大田黒元雄	(樹下)手製作品集(無題)より	1921頃	13.5×19.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-5	(写)	大田黒元雄	(小舟)手製作品集(無題)より	1921頃	17.5×13.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-6	(写)	大田黒元雄	(街路)手製作品集(無題)より	1921頃	19.5×14.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-7	(写)	大田黒元雄	(ベンチの雪)手製作品集(無題)より	1921頃	14.4×17.7	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-8	(写)	大田黒元雄	母子像 手製作品集(無題)より	1921頃	14.0×17.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-9	(写)	大田黒元雄	(馬)手製作品集(無題)より	1921頃	17.8×13.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-10	(写)	大田黒元雄	(窓)手製作品集(無題)より	1921頃	19.0×14.2	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-11	(写)	大田黒元雄	(漁)手製作品集(無題)より	1921頃	13.0×23.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-12	(写)	大田黒元雄	(舗道)手製作品集(無題)より	1921頃	23.7×14.4	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-13	(写)	大田黒元雄	(丘上の木)手製作品集(無題)より	1921頃	17.3×13.2	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-14	(写)	大田黒元雄	(指揮する人)手製作品集(無題)より	1921頃	16.8×14.2	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-15	(写)	大田黒元雄	(双子)手製作品集(無題)より	1921頃	19.3×13.7	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-16	(写)	大田黒元雄	(娘)手製作品集(無題)より	1921頃	17.0×11.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-17	(写)	大田黒元雄	(橋の下)手製作品集(無題)より	1921頃	17.1×13.4	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-18	(写)	大田黒元雄	(カウンター)手製作品集(無題)より	1921頃	12.1×16.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-19	(写)	大田黒元雄	(花瓶の花)手製作品集(無題)より	1921頃	12.2×14.7	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-20	(写)	大田黒元雄	題不詳 手製作品集(無題)より	1921頃		ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-21	(写)	大田黒元雄	題不詳 手製作品集(無題)より	1921頃		ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-22	(写)	大田黒元雄	題不詳 手製作品集(無題)より	1921頃		ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-23	(写)	大田黒元雄	題不詳 手製作品集(無題)より	1921頃		ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
291-OM1-1-24	(写)	大田黒元雄	題不詳 手製作品集(無題)より	1921頃		ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	大田黒鈴子
292-OM1-2	(写)	大田黒元雄	(欧州旅行アルバム)	1921-1924頃			1999/3/30	大田黒鈴子
292-OM1-2	(写)	大田黒元雄	(各種アルバム)	1910年代		ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	村林とみ子
293-IK1-1	(写)	石田喜一郎	朝雲り	1924	8.2×26.2	ブロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
294-WC1-1	(写)	チャールズ・E・カエグランド	A Gray Morning/グレイ・モーニング	1916	7.4×13.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
295-IK1-2	(写)	石田喜一郎	The Gums/護謨樹	1923	25.2×30.5	ブロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
296-IK1-3	(写)	石田喜一郎	Collier/石炭船	1923	22.9×29.5	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
297-IK1-4	(写)	石田喜一郎	Argyle Cut, Sydey/アーガイル・カット	1922	34.8×29.5	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
298-IK1-5	(写)	石田喜一郎	On the South Coast N.S.W./南海岸	1921	24.3×34.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
299-IK1-6	(写)	石田喜一郎	The White Farm House/白い農家	1923	20.5×28.0	ブロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
300-IK1-7	(写)	石田喜一郎	静かなる朝の小川/ Stream in the Quiet Morning	1924	18.5×26.7	ブロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
301-KI1-1	(写)	鍵山一郎	Autumn/秋	1925	13.5×31.0	ブロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
302-KI1-2	(写)	鍵山一郎	Sunshine & Shadow/ サンシャイン&シャドウ	1926	30.4×23.4	ブロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
303-IK1-8	(写)	石田喜一郎	支那風景/A Landscape in China	1929	25.2×33.4	ブロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
304-IK1-9	(写)	石田喜一郎	夏座敷/Summer Rooms	1925頃	30.1×37.6	ゴム印画	1998/11/5	石田喜兵衛
305-IK1-10	(写)	石田喜一郎	The Shell Gathers/潮干狩り	1922頃	23.9×30.5	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
306-IK1-11	(写)	石田喜一郎	Silver and Gray/シルバー・アンド・グレイ	1920年代	27.5×18.4	ブロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
307-IK1-12	(写)	石田喜一郎	Portrait/肖像	1922	31.7×22.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
308-IK1-13	(写)	石田喜一郎	鐵路(鉄路)/Railway	1922	33.2×25.2	ブロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
309-IK1-14	(写)	石田喜一郎	Shadow/影	1923	26.5×20.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
310-IK1-15	(写)	石田喜一郎	The Lane/露地	1923	34.4×25.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
311-IK1-16	(写)	石田喜一郎	湖畔/Australian River Oaks	1922	21.4×28.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
312-IK1-3	(写)	鍵山一郎	(日本人男性肖像)	1925	17.0×24.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
313-IK1-17	(写)	石田喜一郎	Old Sydney/オールド・シドニー	1922	32.4×25.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
314-IK1-18	(写)	石田喜一郎	作業/Landing	1923	33.1×23.4	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
315-IK1-19	(写)	石田喜一郎	錦町河岸/Nishiki Cho Area	1925	39.5×59.6	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
316-IK1-20	(写)	石田喜一郎	老女/Old Age	1923	21.4×31.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
317-IK1-21	(写)	石田喜一郎	Landscape-Penrith/風景-ペンリス	1920年代	25.7×33.6	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
318-IK1-22	(写)	石田喜一郎	砂丘の上/Hilltop	1923	24.2×33.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
319-IK1-23	(写)	石田喜一郎	Morning Light/朝の光	1921	26.2×35.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
320-IK1-24	(写)	石田喜一郎	静かな午後の公園/Park in the Afternoon	1922	30.3×23.7	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
321-IK1-25	(写)	石田喜一郎	An Alley/裏通り	1923	19.2×20.7	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
322-IK1-26	(写)	石田喜一郎	Promenade/プロムナード	1923	35.7×25.7	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
323-IK1-27	(写)	石田喜一郎	Town Hall-Melbourne/メルボルン市庁舎	1922	34.2×20.1	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
324-IK1-28	(写)	石田喜一郎	路上所見-Melbourne/ Street Sketch-Melbourne	1922	33.5×25.9	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
325-IK1-29	(写)	石田喜一郎	題不詳(妻の像)	1921	25.3×20.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
326-IK1-30	(写)	石田喜一郎	(女性肖像・冬)	不詳	25.7×20.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
327-IK1-31	(写)	石田喜一郎	朝の光/Morning Light	1923	26.1×32.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
328-IK1-32	(写)	石田喜一郎	Hill Top Homesiad	1922	24.4×33.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
329-IK1-33	(写)	石田喜一郎	The Corner/街角	1923	32.3×24.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
330-IK1-34	(写)	石田喜一郎	The Bathers/水浴する子供たち	1922	26.8×30.1	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
331-IK1-35	(写)	石田喜一郎	(裸婦二人)	不詳	33.2×23.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
332-IK1-36	(写)	石田喜一郎	消閑術/Killing Time	1923	24.5×33.0	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
333-IK1-37	(写)	石田喜一郎	黎明/Dawn	1924	23.0×30.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
334-IK1-38	(写)	石田喜一郎	Mr. Illingworth at Work/ 制作するイリングワース氏	1922頃	29.5×23.1	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
335-IK1-39	(写)	石田喜一郎	小供/A Child	1927頃	26.3×21.0	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
336-IK1-40	(写)	石田喜一郎	橋の連作 其ノ三/ Bridge Series III At Leisure	1923	25.8×33.4	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
337-IK1-41	(写)	石田喜一郎	Australian Daily Farm/牛のいる風景	1922	28.0×27.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
338-IK1-42	(写)	石田喜一郎	みぎわ/Waterside	1922	23.3×21.7	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
339-IK1-43	(写)	石田喜一郎	Roses/薔薇	1921	26.7×19.0	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
340-IK1-44	(写)	石田喜一郎	牛/Farm	1923	23.5×33.6	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
341-IK1-45	(写)	石田喜一郎	荷揚げ場/Landing Stage	1923	35.5×25.8	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
342-IK1-46	(写)	石田喜一郎	砂遊び/Sand Play	1921	20.8×32.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
343-IK1-47	(写)	石田喜一郎	Fantasy/ファンタジー	1922	33.4×25.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
344-IK1-48	(写)	石田喜一郎	Growing City/延び行く街	1923	26.4×33.9	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
345-IK1-49	(写)	石田喜一郎	The Grove	1923	26.8×33.7	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
346-IK1-50	(写)	石田喜一郎	(建造物正面玄関)	不詳	26.2×20.7	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
347-IK1-51	(写)	石田喜一郎	射影 橋の連作 其ノ四/ Slanting Shadow, Bridge Series IV	1923	25.0×34.0	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
348-IK1-52	(写)	石田喜一郎	橋の連作 其ノ一/Bridge Series I	1923頃	22.7×29.8	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
349-IK1-53	(写)	石田喜一郎	橋の連作 其ノ二/Bridge Series II	1923頃	22.7×29.5	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
350-IK1-54	(写)	石田喜一郎	清掃/A Study at Platform	1925	22.7×28.9	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
351-IK1-55	(写)	石田喜一郎	正午/Afternoon-Quiet	1925	21.2×29.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
352-IK1-56	(写)	石田喜一郎	古き河港/An Old River Port	1925	32.5×22.1	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
353-IK1-57	(写)	石田喜一郎	朝日敦/Dawn	1925	27.4×37.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
354-IK1-58	(写)	石田喜一郎	秋日和/An Autumn Day	1925	26.7×41.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
355-IK1-59	(写)	石田喜一郎	日盛り/Noon	1927	29.5×22.6	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
356-IK1-60	(写)	石田喜一郎	農場	1925	28.5×39.6	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
357-IK1-61	(写)	石田喜一郎	黒い門/Black Gate	1924	27.8×23.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
358-IK1-62	(写)	石田喜一郎	道/Road	1932	27.0×36.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
359-IK1-63	(写)	石田喜一郎	題不詳(二見助郎)/Title Unknown	1920年代	23.2×30.0	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
360-IK1-64	(写)	石田喜一郎	山の禪拝堂	1925	28.3×38.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
361-IK1-65	(写)	石田喜一郎	修道院の聖者/Trappist	1925	38.9×28.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
362-IK1-66	(写)	石田喜一郎	浅草の印象	1925	290×22.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
363-IK1-67	(写)	石田喜一郎	(三その舟)	不詳	260×34.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
364-IK1-68	(写)	石田喜一郎	家/House	1926	21.7×27.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
365-IK1-69	(写)	石田喜一郎	柵/Fence	1928	28.4×35.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
366-IK1-70	(写)	石田喜一郎	葛黄葉/Golden Leaves	1926頃	28.8×22.0	ゴム印画	1998/11/5	石田喜兵衛
367-IK1-71	(写)	石田喜一郎	山雨	1926	23.5×30.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
368-IK1-72	(写)	石田喜一郎	二本の木の影/Two Shadows	1926	21.2×29.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
369-IK1-73	(写)	石田喜一郎	せゝらぎ/Stream	1926	23.6×30.0	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
370-IK1-74	(写)	石田喜一郎	(二本の木と石)	不詳	26.7×37.0	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
371-IK1-75	(写)	石田喜一郎	Landscape/風景	1927	25.7×34.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
372-IK1-76	(写)	石田喜一郎	雪の日/Winter	1927	31.4×38.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
373-IK1-77	(写)	石田喜一郎	雪	1927	30.5×39.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
374-IK1-78	(写)	石田喜一郎	彼等の或朝/Boy's Morning	1927	31.2×39.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
375-IK1-79	(写)	石田喜一郎	たかむら	1928	30.1×23.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
376-IK1-80	(写)	石田喜一郎	桑/Mulberry	1928	28.2×35.9	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
377-IK1-81	(写)	石田喜一郎	垣/Hedge	1928	31.5×28.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
378-IK1-82	(写)	石田喜一郎	藪	1928	27.5×35.6	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
379-IK1-83	(写)	石田喜一郎	風景	1928	23.4×24.6	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
380-IK1-84	(写)	石田喜一郎	ひる/Noon	1928	23.0×27.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
381-IK1-85	(写)	石田喜一郎	城内 其一/Castle Garden I	1930	23.3×29.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
382-IK1-86	(写)	石田喜一郎	城内 其二/Castle Garden II	1930	23.2×29.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
383-IK1-87	(写)	石田喜一郎	(櫻老木とベンチ)	不詳	26.3×33.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
384-IK1-88	(写)	石田喜一郎	池畔	1928	23.2×27.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
385-IK1-89	(写)	石田喜一郎	水辺/Waterside	1928	27.5×36.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
386-IK1-90	(写)	石田喜一郎	冬日 其二/Winter Day II	1928	37.8×29.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
387-IK1-91	(写)	石田喜一郎	朝	1928	28.5×24.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
388-IK1-92	(写)	石田喜一郎	佐原風景/Sketch at Sahara	1933	27.2×34.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
389-IK1-93	(写)	石田喜一郎	(びわの木と外を見る子供)	不詳	28.9×36.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
390-IK1-94	(写)	石田喜一郎	塀/Fence	1927	25.7×31.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
391-IK1-95	(写)	石田喜一郎	題不詳(野原と機械部品)/Title Unknown	1929	26.4×33.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
392-IK1-96	(写)	石田喜一郎	(白い家と黒い庭)	不詳	27.7×26.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
393-IK1-97	(写)	石田喜一郎	残光	不詳	27.3×34.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
394-IK1-98	(写)	石田喜一郎	工場地帯風景/Factory Area	1929	24.5×34.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
395-IK1-99	(写)	石田喜一郎	(黒い林と石垣)	不詳	30.3×37.4	ゴム印画	1998/11/5	石田喜兵衛
396-IK1-100	(写)	石田喜一郎	傘	1927	24.4×23.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
397-IK1-101	(写)	石田喜一郎	くもり/Cloudy	1928	21.6×28.3	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
398-IK1-102	(写)	石田喜一郎	丸の内	1928	23.0×29.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
399-IK1-103	(写)	石田喜一郎	(くずれた石壁)	不詳	23.3×30.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
400-IK1-104	(写)	石田喜一郎	朝/Morning	1929	29.9×28.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
401-IK1-105	(写)	石田喜一郎	(珍丁花)	不詳	26.8×20.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
402-IK1-106	(写)	石田喜一郎	(珍丁花大)	不詳	29.5×22.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
403-IK1-107	(写)	石田喜一郎	漢口街頭所見/A Sketch in a City of China	1929	33.3×36.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
404-IK1-108	(写)	石田喜一郎	雪/Snow	1930	25.9×35.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
405-IK1-109	(写)	石田喜一郎	嵐山	不詳	26.0×34.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
406-IK1-110	(写)	石田喜一郎	(石と笹等)	不詳	21.8×29.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
407-IK1-111	(写)	石田喜一郎	縁先	不詳	22.0×29.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
408-IK1-112	(写)	石田喜一郎	門	1935	33.8×26.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
409-IK1-113	(写)	石田喜一郎	子供 二/Children II	1933	27.4×36.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
410-IK1-114	(写)	石田喜一郎	子供 一/Children I	1933	27.2×36.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
411-IK1-115	(写)	石田喜一郎	(海・濃)	不詳	23.0×29.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
412-IK1-116	(写)	石田喜一郎	吉野梅林	不詳	23.2×29.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
413-IK1-117	(写)	石田喜一郎	(すずはし)	不詳	29.4×23.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
414-IK1-118	(写)	石田喜一郎	小田急淡澤風景/Shibusawa	1934頃	26.5×32.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
415-IK1-119	(写)	石田喜一郎	無題 其二/Untitled II	1934頃	27.0×36.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
416-IK1-120	(写)	石田喜一郎	無題 其一/Untitled I	1934頃	26.7×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
417-IK1-121	(写)	石田喜一郎	題不詳(大黒丸)/Title Unknown	1920年代	26.0×36.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
418-IK1-122	(写)	石田喜一郎	大阪城(其ノ三)	1931	23.5×29.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
419-IK1-123(写)		石田喜一郎	(水辺遊び)	不詳	23.3×29.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
420-IK1-124(写)		石田喜一郎	題不詳(橋と三菱倉庫)/Title Unknown	1930年代	26.5×37.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
421-IK1-125(写)		石田喜一郎	(川辺の木立ち)	不詳	22.7×29.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
422-IK1-126(写)		石田喜一郎	杉	1930	23.8×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
423-IK1-127(写)		石田喜一郎	大阪城(其ノ二)	1931	26.4×29.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
424-IK1-128(写)		石田喜一郎	朝/Morning	1931	25.6×33.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
425-IK1-129(写)		石田喜一郎	(議事堂と並木)	不詳	26.1×31.9	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
426-IK1-130(写)		石田喜一郎	橋畔/Bridge Side	1932	29.3×27.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
427-IK1-131(写)		石田喜一郎	題不詳(煙突と橋)/Title Unknown	1930年代	27.9×36.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
428-IK1-132(写)		石田喜一郎	(番外・女性立像)	不詳	29.2×21.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
429-IK1-133(写)		石田喜一郎	しぶき	不詳	24.8×42.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
430-IK1-134(写)		石田喜一郎	題不詳(尺八)/Title Unknown	1930年代	29.0×37.6	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
431-IK1-135(写)		石田喜一郎	山麓/Mountainside	1934	27.4×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
432-IK1-136(写)		石田喜一郎	(竹垣と木)	不詳	31.6×37.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
433-IK1-137(写)		石田喜一郎	(少年写生)	不詳	24.4×29.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
434-IK1-138(写)		石田喜一郎	大利限の空/Sky above the Otone River	1931	26.2×32.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
435-IK1-139(写)		石田喜一郎	(通運丸)	不詳	24.4×29.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
436-IK1-140(写)		石田喜一郎	山雨/Rain in the Mountain	1930	22.8×29.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
437-IK1-141(写)		石田喜一郎	ゴルフ場風景/Golf Links	1931	26.6×35.0	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
438-IK1-142(写)		石田喜一郎	佐原風景/Sketch at Sahara	1931	25.6×33.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
439-IK1-143(写)		石田喜一郎	山中の雪/Snow in the Mountain	1930	26.7×34.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
440-IK1-144(写)		石田喜一郎	奈良郊外の秋/Autumn at Nara Suburb	1930	25.6×35.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
441-IK1-145(写)		石田喜一郎	北支風景/A Sketch at Northern China	1930	26.6×35.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
442-IK1-146(写)		石田喜一郎	老人の像 肖像	1926頃	25.8×17.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
443-IK1-147(写)		石田喜一郎	かげ/Shadow	1932	23.4×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
444-IK1-148(写)		石田喜一郎	(すずきと工場)	不詳	25.7×32.8	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
445-IK1-149(写)		石田喜一郎	大阪城(其ノ一)	1931	29.7×23.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
446-IK1-150(写)		石田喜一郎	題不詳(寢屋)/Title Unknown	1930年代	24.2×29.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
447-IK1-151(写)		石田喜一郎	題不詳(材木屋)/Title Unknown	1930年代	26.7×34.6	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
448-IK1-152(写)		石田喜一郎	材木	不詳	26.2×36.6	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
449-IK1-153(写)		石田喜一郎	(橋の街灯)	不詳	29.0×37.6	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
450-IK1-154(写)		石田喜一郎	潮来情景/A Scene at Itako	1932	26.8×35.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
451-IK1-155(写)		石田喜一郎	裏まち/An Alley	1932	36.7×27.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
452-IK1-156(写)		石田喜一郎	題不詳(橋のたもとの人)/Title Unknown	1930年代	26.5×36.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
453-IK1-157(写)		石田喜一郎	菊	1930	35.5×26.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
454-IK1-158(写)		石田喜一郎	Mountain Decoration/ マウンテン・デコレーション	1923	27.0×35.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
455-IK1-159(写)		石田喜一郎	The Bathers/水浴	1923	20.5×25.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
456-IK1-160(写)		石田喜一郎	夕影/Evening Shadow	1920	26.5×22.3	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
457-IK1-161(写)		石田喜一郎	(ペールをまとう裸婦)	不詳	32.5×21.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
458-IK1-162(写)		石田喜一郎	題不詳/Title Unknown(蛇の目傘の女)	1920年代	25.5×21.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
459-IK1-163(写)		石田喜一郎	(裸婦)	不詳	22.2×34.4	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
460-IK1-164(写)		石田喜一郎	(海と松)	不詳	27.0×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
461-IK1-165(写)		石田喜一郎	畑/Field	1934	26.8×35.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
462-IK1-166(写)		石田喜一郎	(雪原)	不詳	27.5×37.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
463-IK1-167(写)		石田喜一郎	(麦とあざみ)	不詳	30.5×38.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
464-IK1-168(写)		石田喜一郎	(麦とあざみ小)	不詳	24.2×30.3	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
465-IK1-169(写)		石田喜一郎	(もみじの影)	不詳	23.5×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
466-IK1-170(写)		石田喜一郎	(苔 大)	不詳	30.0×38.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
467-IK1-171(写)		石田喜一郎	(山と葱)	不詳	33.3×26.1	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
468-IK1-172(写)		石田喜一郎	(苔 小)	不詳	22.0×28.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
469-IK1-173(写)		石田喜一郎	(材木)	不詳	26.0×35.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
470-IK1-174(写)		石田喜一郎	(木の幹)	不詳	26.2×34.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
471-IK1-175(写)		石田喜一郎	(丸い山)	不詳	22.5×27.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
472-IK1-176(写)		石田喜一郎	(山影)	不詳	29.0×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
473-IK1-177(写)		石田喜一郎	(積み藁)	不詳	30.5×38.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
474-IK1-178(写)		石田喜一郎	(溪流)	不詳	30.2×37.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
475-IK1-179(写)		石田喜一郎	(畑)	不詳	30.5×36.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
476-IK1-180(写)		石田喜一郎	苔寺 二	不詳	28.5×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
477-IK1-181(写)		石田喜一郎	苔寺 一	不詳	36.6×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
478-IK1-182(写)		石田喜一郎	(苔 大)	不詳	29.5×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
479-IK1-183(写)		石田喜一郎	中之島風景/Riverside	1937	26.3×36.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
480-IK1-184(写)		石田喜一郎	(北支)	不詳	30.0×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
481-IK1-185(写)		石田喜一郎	題不詳(子供ふたり)/Title Unknown	1937年代	25.5×30.6	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
482-IK1-186(写)		石田喜一郎	樹/Tree	1943	36.2×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
483-IK1-187(写)		石田喜一郎	(神 一)	不詳	35.3×30.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
484-IK1-188(写)		石田喜一郎	家/House	1943	33.2×30.1	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
485-IK1-189(写)		石田喜一郎	(苔と木)	不詳	35.3×30.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
486-IK1-190(写)		石田喜一郎	(北支寺院)	不詳	29.8×37.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
487-IK1-191(写)		石田喜一郎	北支風物 一	不詳	30.2×37.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
488-IK1-192(写)		石田喜一郎	北支風物 ver.	不詳	30.0×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
489-IK1-193(写)		石田喜一郎	北支風物 二/Sketch of Northern China II	不詳	30.0×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
490-IK1-194(写)		石田喜一郎	池畔/Lakeside	1938	30.5×34.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
491-IK1-195(写)		石田喜一郎	(垣)	不詳	27.5×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
492-IK1-196(写)		石田喜一郎	(雪の農場)	不詳	36.6×30.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
493-IK1-197(写)		石田喜一郎	桑/Mulberry	1934	26.5×36.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
494-IK1-198(写)		石田喜一郎	(雪の木)	不詳	36.5×30.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
495-IK1-199(写)		石田喜一郎	屋根/Roof	1943	27.5×37.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
496-IK1-200(写)		石田喜一郎	(三つ又の木)	不詳	38.0×30.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
497-IK1-201(写)		石田喜一郎	池畔/Lakeside	1938頃	35.3×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
498-IK1-202(写)		石田喜一郎	浜の納屋/Beach House	1934	27.2×35.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
499-IK1-203(写)		石田喜一郎	(桜の幹)	不詳	26.0×34.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
500-IK1-204(写)		石田喜一郎	題不詳(船と三人の男)/Title Unknown	1930年代	27.5×34.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
501-IK1-205(写)		石田喜一郎	無題	1937	26.1×36.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
502-IK1-206(写)		石田喜一郎	(宝塚温泉箕面)	不詳	36.2×23.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
503-IK1-207(写)		石田喜一郎	夕景/Evening City	不詳	36.2×23.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
504-IK1-208(写)		石田喜一郎	残照/Sunset	1934	26.0×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
505-IK1-209(写)		石田喜一郎	溪谷	不詳	30.0×25.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
506-IK1-210(写)		石田喜一郎	城のある風景/Castle	1931	29.6×38.0	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
507-IK1-211(写)		石田喜一郎	光り/Beam	1934	26.1×35.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
508-IK1-212(写)		石田喜一郎	山	不詳	26.5×35.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
509-IK1-213(写)		石田喜一郎	春/Spring	1952	34.7×40.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
510-IK1-214(写)		石田喜一郎	乱れ薄	不詳	27.5×34.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
511-IK1-215(写)		石田喜一郎	(テラス)	不詳	35.5×43.1	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
512-IK1-216(写)		石田喜一郎	朝(二)	不詳	27.3×37.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
513-IK1-217(写)		石田喜一郎	侘びしき光/Light of Sadness	1949	23.5×31.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
514-IK1-218(写)		石田喜一郎	霧の朝	不詳	27.4×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
515-IK1-219(写)		石田喜一郎	朝(一)	不詳	27.6×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
516-IK1-220(写)		石田喜一郎	風景	不詳	28.0×34.3	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
517-IK1-221(写)		石田喜一郎	老木/Old Tree	1950	27.4×34.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
518-IK1-222(写)		石田喜一郎	晩秋	不詳	24.1×33.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
519-IK1-223(写)		石田喜一郎	河原	不詳	33.9×27.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
520-IK1-224(写)		石田喜一郎	(もみじの影 ver.)	不詳	29.4×36.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
521-IK1-225(写)		石田喜一郎	(苔と木 ver.)	不詳	30.1×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
522-IK1-226(写)		石田喜一郎	(雪景色と二本の木)	不詳	30.4×38.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
523-IK1-227(写)		石田喜一郎	(雪の水辺)	不詳	30.2×38.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
524-IK1-228(写)		石田喜一郎	(河原と森)	不詳	30.2×38.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
525-IK1-229(写)		石田喜一郎	(雪溶け)	不詳	30.5×38.2	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
526-IK1-230(写)		石田喜一郎	(雪の山)	不詳	30.5×38.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
527-IK1-231(写)		石田喜一郎	(雑木林)	不詳	38.2×30.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
528-IK1-232(写)		石田喜一郎	朝(二)ver.	不詳	29.1×38.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
529-IK1-233(写)		石田喜一郎	(雑木)	不詳	27.2×35.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
530-IK1-234(写)		石田喜一郎	(雪の山 ver.)	不詳	28.7×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
531-IK1-235(写)		石田喜一郎	(杉木立)	不詳	27.7×36.1	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
532-IK1-236	(写)	石田喜一郎	(雑木 ver.)	不詳	27.7×35.9	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
533-IK1-237	(写)	石田喜一郎	(雑木 ver.2)	不詳	27.9×37.1	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
534-IK1-238	(写)	石田喜一郎	(河原と森 ver.)	不詳	27.7×36.6	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
535-IK1-239	(写)	石田喜一郎	(そり)	不詳	28.0×37.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
536-IK1-240	(写)	石田喜一郎	(雑木林 ver.)	不詳	37.0×27.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
537-FS1-1	(写)	福原信三	池 其一	1930年代前半	24.4×29.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
538-FS1-2	(写)	福原信三	温泉場	1930年代前半	22.6×28.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
539-FS1-3	(写)	福原信三	題不詳(裏木戸)	不詳	30.0×22.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
540-KI1-4	(写)	鍵山一郎	SHADOWPLAY/動く影	1926	25.9×30.7	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
541-BC1-1	(写)	セシル・W・ポストック	En Passant/去来	1922	27.3×34.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
542-ES2-1	(写)	S.W.Eutrope	A Spring Morning	不詳	21.6×28.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
543-CH1-1	(写)	ハロルド・カズノー	Castlereagh Street, Sydney/ キャッスルレー街	1917頃	33.9×29.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
544-ML1-1	(写)	Leonard Misonne	Pature	1923	30.0×39.0	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
545-MH1-1	(写)	アンリ・マラード	Das Disaster/凶事	1919	22.3×31.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
546-CH1-2	(写)	ハロルド・カズノー	The Razzle Dazzle/ラッズル ダッズル	1908	28.2×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
547-BC1-2	(写)	セシル・W・ポストック	An Old-World Harbour/古港	1919-1920	26.2×35.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
548-CH1-3	(写)	ハロルド・カズノー	Pitt Street, Sydney/ピット 街	1909	27.4×24.3	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
549-LM1-1	(写)	モンテ・リューク	SEHELLA/シェイラ	1922	直径25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
550-LM1-2	(写)	モンテ・リューク	Eve Gray/イヴ・グレイ	1923	34.6×24.3	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
551-WD1-1	(写)	ダグシー・J・ウエブスター	La Baigneuse/水浴	1916頃	25.3×18.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
552-CH1-4	(写)	ハロルド・カズノー	Corrimal/風景	不詳	20.5×26.5	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
553-AR1-1	(写)	R.G.Allman	La Geunesse	不詳	24.8×18.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
554-CH1-5	(写)	ハロルド・カズノー	from an Etched Negative/ エッチング効果	1920	22.5×27.7	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
555-DE1-1	(写)	E.Dittrich	(菊)	1932	30.5×28.2	プロムオイル・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
556-MH1-2	(写)	アンリ・マラード	The Open Gate/開いた門	1921	24.5×29.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
557-CH1-6	(写)	ハロルド・カズノー	The Black Barge/黒い艦載艇	1920年代	25.0×28.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
558-LM1-3	(写)	モンテ・リューク	Wistful Eyes	不詳	28.2×21.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
559-WC1-2	(写)	チャールズ・E・ウエイクホード	The Burning Barge/燃える艦載艇	1923	19.0×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
560-KI1-5	(写)	鍵山一郎	肖像	1926	31.0×24.0	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
561-KI1-6	(写)	鍵山一郎	裏のドリス/Dorris	1926	30.8×26.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
562-WW1-1	(写)	ウリアムズ・シュワート・ホリット	Melody of Morn/朝のメロディー	1916	30.0×24.1	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
563-FA1-1	(写)	アルチュール・フォード	Surf Canoeing/サーフィン	1921	31.2×17.3	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
564-CH1-7	(写)	ハロルド・カズノー	Japanese Blind/ジャパニーズ・ブラインド	1915	24.0×19.8	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
565-LM1-4	(写)	モンテ・リューク	Beauty Eyes/ビュー ティー・アイズ	1923	35.5×25.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
566-FA1-2	(写)	アルチュール・フォード	Mid Crime And Smoke	不詳	23.0×30.5	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
567-PC1-1	(写)	C.U.Pooler	all on a Summer's Day	不詳	17.7×24.4	ゼラチンシルバー・プリント	1998/11/5	石田喜兵衛
568-PJ1-1	(写)	ジェームズ・E・ベイトン	Symphony/シンフォニー	1917頃	27.2×32.0	プロマイド	1998/11/5	石田喜兵衛
569-FS1-4	(写)	福原信三	廣告板 作品集「巴里とセーヌ」の10/ Tableau à Annonce. "PARIS ET LA SEINE" No.10	1913-1921	20.0×25.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
570-KI2-1	(写)	掛札功	習作 軽井沢 Miss Thompson	1919	34.0×26.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
571-KI2-2	(写)	掛札功	(三本の木)/Three Trees	不詳	19.8×20.2	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
572-KI2-3	(写)	掛札功	(庭、聖路加か)	不詳	19.5×24.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
573-KI2-4	(写)	掛札功	平和廟所見/Sketch of the Temple	不詳	29.1×20.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
574-KI2-5	(写)	掛札功	(舞台写真)/Dance	1923頃	19.7×24.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
575-KI2-6	(写)	掛札功	野菊咲く頃/The Wild Chrysanthemum Season	1921頃	19.3×24.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
576-EH1-1	(写)	ヘンリー・アイクハイム	ポット・メーカー 5	不詳	23.5×19.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
577-KI2-7	(写)	掛札功	諏訪湖/Lake Suwa	1923	19.8×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/18	掛札満
578-KI2-8	(写)	掛札功	北海道旭川郊外「午後」	不詳	28.0×21.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
579-KI2-9	(写)	掛札功	庭の菊	不詳	18.0×24.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
580-KI2-10	(写)	掛札功	出帆(横浜)/Sailing, Yokohama	1921頃	21.5×28.3	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
581-KI2-11	(写)	掛札功	箱根(強羅)	不詳	24.0×20.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
582-IY1-1	(写)	五十嵐興七	(肖像)江木写真館	不詳	27.0×20.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
583-EH1-2	(写)	ヘンリー・アイクハイム	ピアニスト ジョセフ・ホフマン氏像	不詳	24.0×18.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
584-KI2-12	(写)	掛札功	もやひ船/Moored Boat	1922頃	15.5×24.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
585-KI2-13	(写)	掛札功	三越/Mitsukoshi Department Store	1921頃	24.5×16.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
586-KI2-14	(写)	掛札功	(樹間の白い富士)	不詳	25.0×18.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/18	掛札満
587-KI2-15	(写)	掛札功	(雪の笹)	不詳	13.5×17.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
588-KI2-16	(写)	掛札功	若桐/Young Paulownia	1922	28.5×20.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
589-KI2-17	(写)	掛札功	利根川/Tone River	1922頃	19.8×24.4	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
590-KI2-18	(写)	掛札功	夜/Night	1923	14.5×23.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
591-KI2-19	(写)	掛札功	荒模様8/Stormy Ocean	1922頃	22.0×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
592-KI2-20	(写)	掛札功	帝劇/The Imperial Theater	1921	16.5×20.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/18	掛札満
593-KI2-21	(写)	掛札功	最初の上陸隊	1925	21.5×27.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/18	掛札満
594-KI2-22	(写)	掛札功	富士	1927	20.5×38.2	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/18	掛札満
595-KI2-23	(写)	掛札功	鯉 日比谷公園/Carp, Hibiya Park	不詳	22.0×17.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/18	掛札満
596-HY1-1	(写)	長谷川保定	朝風	不詳	20.5×28.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
597-KI2-24	(写)	掛札功	(外国人男性二人像)	不詳	30.0×24.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
598-KI2-25	(写)	掛札功	相談/Discussion	1922頃	21.5×25.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
599-PC2-1	(写)	C.R.Pancoast	In Fairmount Park Philadelphia	不詳	20.5×15.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
600-EH1-3	(写)	ヘンリー・アイクハイム	(雪景)	不詳	23.5×19.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
601-KI2-26	(写)	掛札功	(モニュメントの前の人物)	不詳	29.5×24.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
602-KI2-27	(写)	掛札功	初秋/Beginning of Autumn	1921	21.0×25.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
603-KI2-28	(写)	掛札功	浅草/Asakusa	1920	27.5×20.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
604-KI2-29	(写)	掛札功	仁王像・長野/The Deva King, Nagano	1921頃	22.0×18.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
605-KI2-30	(写)	掛札功	明察十香	不詳	18.0×24.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
606-KI2-31	(写)	掛札功	大阪図書館/Library in Osaka	不詳	17.3×24.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
607-KI2-32	(写)	掛札功	朝鮮 バゴダ公園の裏門/1917					
			Back Gate of Bagoda Park, Korea	不詳	24.2×15.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
608-KI2-33	(写)	掛札功	(見上げた富士山)	不詳	29.0×21.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
609-KI2-34	(写)	掛札功	浅間牧場/Asama Meadow	1920	19.5×27.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
610-KI2-35	(写)	掛札功	朝鮮海峡にて/At the Korean Strait	1921	15.5×25.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
611-KI2-36	(写)	掛札功	昭和三年二月(着物姿の女性像)	1928	22.5×13.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
612-KI2-37	(写)	掛札功	浅間牧場其四 牧場に咲く花/ Asama Meadow No.4, Flowers Blooming at the Meadow	1922	23.5×27.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
613-KI2-38	(写)	掛札功	画題 曇り日 大正十四年秋	1925	24.0×22.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
614-KI2-39	(写)	掛札功	故飛行家ナイルス氏/The Late Mr. Niles, Pilot	1921頃	27.0×17.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
615-KI2-40	(写)	掛札功	(ポートレート)		19.5×25.0		1999/3/30	掛札満
616-KI2-41	(写)	掛札功	芦ノ湖 箱根/Lake Ashino, Hakone	1921	20.0×24.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
617-IK1-241	(写)	石田喜一郎	The Collier/石炭船	1922	24.0×31.5	プロムオイル・プリント	1999/3/30	掛札満
618-IK2-1	(写)	石橋鑑太郎		不詳	20.0×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
619-xx-xx	(写)	不詳	大津	1920	27.5×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
620-HO1-1	(写)	堀江於菟(乙熊)	早春の樹枝 掛札功推薦	不詳	26.5×35.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
621-KI2-42	(写)	掛札功	小田原/Odawara	1918	28.2×39.2	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
622-KI2-43	(写)	掛札功	お茶の水/Ochanomizu	1920	21.3×29.3	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
623-KI2-44	(写)	掛札功	水蓮 於小石川植物園/ Waterlilies at Koishikawa Park	1922	20.8×26.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
624-EH1-4	(写)	ヘンリー・アイクハイム	To Mr.Kakefuda Chion in Kyoto		29.5×40.0		1999/3/30	掛札満
625-KI2-45	(写)	掛札功	(芦ノ湖)/Lake Ashino	1921頃	21.0×26.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
626-Ux-1	(ウルシハタ)		(築地聖路加)	不詳		水彩画	1999/3/30	掛札満
627-GW1-1	(写)	W.Von.Gloeden	(複製写真)	不詳	26.5×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
628-KI2-46	(写)	掛札功	江ノ島	不詳	24.0×27.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/18	掛札満
629-KI2-47	(写)	掛札功	(喫煙する裸婦)	不詳	24.0×27.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
630-FC1-1	(写)	シャルル・フレージャー	A.R.P.S. Reception Committee	不詳	27.0×33.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
631-KI2-48	(写)	掛札功	(那智の瀧)	不詳	45.5×21.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
632-KI2-49	(写)	掛札功	(灯笼)	不詳	34.0×29.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/18	掛札満
633-KI2-50	(写)	掛札功	(森永)	不詳	28.0×35.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
634-KI2-51	(写)	掛札功	(雪の林)	不詳	32.0×36.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
635-KI2-52	(写)	掛札功	(下から見た富士山)	不詳	27.0×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
636-KI2-53	(写)	掛札功	(雑木)	不詳	30.0×37.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
637-KI2-54	(写)	掛札功	(雪に一本の木)	不詳	34.0×36.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
638-KI2-55	(写)	掛札功	大正十二年九月/September, 1923	1923	31.5×31.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
639-KI2-56	(写)	掛札功	(雪の東照宮)		43.5×35.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
640-KI2-57	(写)	掛札功	(日光の橋)		36.5×27.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
641-KI2-58	(写)	掛札功	白溪(溪谷)		38.5×31.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
642-KI2-59	(写)	掛札功	(少年水浴)		35.5×44.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
643-KI2-60	(写)	掛札功	(富士落日)		25.5×43.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
644-KI2-61	(写)	掛札功	(富士落日)		43.5×17.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
645-KI2-62	(写)	掛札功	犬 昭和4年3月31日	1929	25.0×20.0	プロマイド	1999/3/30	掛札満
646-KI2-63	(写)	掛札功	(富士落日)		15.5×28.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
647-KI2-64	(写)	掛札功	(飛行機 1)		24.5×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
648-KI2-65	(写)	掛札功	(飛行機 多)着彩		21.5×29.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
649-KI2-66	(写)	掛札功	(飛行機 1)		21.5×26.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
650-KI2-67	(写)	掛札功	(飛行機 3)		22.0×27.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
651-KI2-68	(写)	掛札功	(飛行機 1)		22.5×27.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
652-KI2-69	(写)	掛札功	(飛行機 多)		26.5×21.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
653-KI2-70	(写)	掛札功	(飛行機 多)水平		15.5×26.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
654-KI2-71	(写)	掛札功	(飛行機 1)着彩		22.0×28.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
655-KI2-72	(写)	掛札功	(飛行機 1)Na		28.0×22.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
656-KI2-73	(写)	掛札功	(飛行機 2)		16.0×22.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
657-KI2-74	(写)	掛札功	(飛行機 多)		22.5×28.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
658-KI2-75	(写)	掛札功	(飛行機 1)		24.0×21.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
659-KI2-76	(写)	掛札功	(飛行機 1)文字あり	1939	20.0×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
660-KI2-77	(写)	掛札功	(飛行機 1)		22.0×28.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
661-KI2-78	(写)	掛札功	(飛行機)		20.5×22.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
662-KI2-79	(写)	掛札功	(飛行機)		29.5×23.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
663-KI2-80	(写)	掛札功	(ポートレート)		24.0×18.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
664-KI2-81	(写)	掛札功	(複製ポートレート)		27.5×21.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
665-KI2-82	(写)	掛札功	(女性ポートレート帽子)		31.0×21.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
666-KI2-83	(写)	掛札功	自室にて 自画像		19.5×24.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
667-xx-xx	(写)	不詳	(掛札功氏ポートレート)		20.0×26.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
668-KI2-84	(写)	掛札功	(高峰美枝子)		39.0×22.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
669-KI2-85	(写)	掛札功	(高峰美枝子)		30.5×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
670-KI2-86	(写)	掛札功	(高峰美枝子)		30.5×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
671-KI2-87	(写)	掛札功	(高峰美枝子)		29.5×21.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
672-KI2-88	(写)	掛札功	(庭の着物姿婦人)		22.5×17.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
673-KI2-89	(写)	掛札功	(水戸宅)		24.0×30.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
674-KI2-90	(写)	掛札功	(中野宅1階室内)		30.5×24.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
675-KI2-91	(写)	掛札功	(中野宅座敷室内)		25.0×31.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
676-KI2-92	(写)	掛札功	(鶴)		25.0×31.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
677-KI2-93	(写)	掛札功	(食器)		20.5×12.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
678-KI2-94	(写)	掛札功	画題「悲」		19.5×15.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
679-KI2-95	(写)	掛札功	(裸婦、踊り)		23.0×15.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
680-KI2-96	(写)	掛札功	(裸婦、踊り、正面)		22.5×14.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
681-KI2-97	(写)	掛札功	(裸婦、座)		22.5×17.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
682-KI2-98	(写)	掛札功	(裸婦)		21.0×15.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
683-KI2-99	(写)	掛札功	(瀧、二人)		37.0×16.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
684-KI2-100	(写)	掛札功	お茶の水/Ochanomizu	1921頃	37.0×20.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
685-KI2-101	(写)	掛札功	夏の箱根 芦ノ湖/ Lake Ashino, Hakone in the Morning	1921	18.5×27.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
686-KI2-102	(写)	掛札功	エキシビジョン・ゲーム		20.0×25.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
687-KI2-103	(写)	掛札功	木曾川		17.5×28.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
688-KI2-104	(写)	掛札功	流れ/Current	1924	20.5×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
689-KI2-105	(写)	掛札功	牛「北海道函館郊外トラビスト」		21.5×29.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
690-KI2-106	(写)	掛札功	耕作/Plowing	1924	20.5×29.3	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
691-KI2-107	(写)	掛札功	(蓮)		21.5×29.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
692-KI2-108	(写)	掛札功	初夏		22.5×29.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
693-KI2-109	(写)	掛札功	奈良/Nara	1924頃	17.5×24.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
694-SK2-1	(写)	島田貫一郎	昭和三年十二月		20.5×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
695-KI2-110	(写)	掛札功	春日神社道		18.5×24.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
696-KI2-111	(写)	掛札功	(舟)		21.0×28.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
697-KI2-112	(写)	掛札功	イブの悲しみ 北村四海氏作/ "Eve" by Kitamura Shikai	1921頃	26.5×20.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
698-SY1-1	(写)	鳥津保吉	No.3 山田風景		25.0×33.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
699-KI2-113	(写)	掛札功	(丸の内)昭和五年九月		25.0×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
700-KI2-114	(写)	掛札功	浅間牧場其七/Asama Meadow No7	1922	27.6×20.6	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
701-KI2-115	(写)	掛札功	(水路、はしけ、木)		25.0×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
702-KI2-116	(写)	掛札功	燈台/Lighthouse	1923	29.0×21.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
703-KI2-117	(写)	掛札功	鏡子 黒生 瓦焼き/Tile Maker, Chosi	1921	17.3×27.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
704-KI2-118	(写)	掛札功	(湖と山)		23.0×31.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
705-KI2-119	(写)	掛札功	(逆光の木)		24.0×31.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
706-KI2-120	(写)	掛札功	(水流と奇岩)		20.0×27.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
707-KI2-121	(写)	掛札功	海豹島 ロッペン島とカモメ		24.5×32.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
708-KI2-122	(写)	掛札功	(黒い逆光の風景)		24.0×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
709-KI2-123	(写)	掛札功	水流と渓谷		23.5×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
710-KI2-124	(写)	掛札功	(寺院の組物)		31.0×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
711-KI2-125	(写)	掛札功	(下から見た富士)		33.5×25.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
712-KI2-126	(写)	掛札功	(海辺)		31.0×23.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
713-KI2-127	(写)	掛札功	(大津)			ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
714-KI2-128	(写)	掛札功	(東大寺)		21.0×20.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
715-KI2-129	(写)	掛札功	(丘と牛)		23.0×33.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
716-KI2-130	(写)	掛札功	熊谷一彌氏/Mr. Kazuya Kumagai/ No.1 "Nice Return" JPS Shiseido Bldg	1922-1930頃	21.0×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
717-KI2-131	(写)	掛札功	天龍峡 "Narrow Passage" Ginza Tokyo		19.5×25.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
718-KI2-132	(写)	掛札功	山百合		21.3×9.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
719-KI2-133	(写)	掛札功	朝 1924年		21.6×26.7	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
720-KI2-134	(写)	掛札功	昭和五年九月	1930	24.5×30.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
721-KI2-135	(写)	掛札功	Nest Builder	1934	20.2×15.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
722-KI2-136	(写)	掛札功	熊野灘	1935	11.7×16.1	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
723-KI2-137	(写)	掛札功	(水谷八重子)	1936	29.4×20.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
724-KI2-138	(写)	掛札功	(庭の池)		13.5×14.4	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
725-KI2-139	(写)	掛札功	(参道 杉並木)		16.8×11.3	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
726-KI2-140	(写)	掛札功	(庭)		11.5×16.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
727-KI2-141	(写)	掛札功	(牡丹)		16.5×11.3	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
728-KI2-142	(写)	掛札功	(神社と桜)		12.0×16.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
729-KI2-143	(写)	掛札功	第一 山田市中澤家墓地内加藤ツウ女墓		16.0×11.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
730-KI2-144	(写)	掛札功	第三 二見浦南より臨む		11.4×16.3	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
731-KI2-145	(写)	掛札功	第四 鳥羽町日和山三木本部		11.8×15.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
732-KI2-146	(写)	掛札功	第五 熊野灘アワビ取船		11.5×16.3	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
733-KI2-147	(写)	掛札功	第五 相可口 尾鷲汽車中		11.0×16.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
734-KI2-148	(写)	掛札功	第六 湊峡見物プロペラ船 新宮町から湊八丁まで		11.5×15.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
735-KI2-149	(写)	掛札功	第七 湊峡物プロペラ船中		10.8×15.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
736-KI2-150	(写)	掛札功	第八 雨雲 熊野川湊峡付近		16.0×11.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
737-KI2-151	(写)	掛札功	第九 雨景色 新宮町ヨリ湊八丁へ行く途中		10.8×16.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
738-KI2-152	(写)	掛札功	第十 湊峡雨到湊八丁入口		16.2×11.7	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
739-KI2-153	(写)	掛札功	第十一 湊峡		16.0×10.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
740-KI2-154	(写)	掛札功	第十二 湊ホテル 湊亭(招仙閣)		16.3×11.6	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
741-KI2-155	(写)	掛札功	第十三 湊ホテル(招仙閣)		16.0×11.6	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
742-KI2-156	(写)	掛札功	第十四 湊峡 後師交代		11.8×16.2	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
743-KI2-157	(写)	掛札功	第十六 湊峡 筏		11.5×16.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
744-KI2-158	(写)	掛札功	第十七 湊ホテル別館		16.0×11.6	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
745-KI2-159	(写)	掛札功	第十八 湊ホテル別館		16.5×11.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
746-KI2-160	(写)	掛札功	第十九 湊峡 湊ホテル前 プロペラ船渠場		11.2×15.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
747-KI2-161	(写)	掛札功	第二十 那智灘遠望		11.8×16.2	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
748-KI2-162	(写)	掛札功	第二十一 那智灘(直下四十三尺)		16.2×11.7	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
749-KI2-163	(写)	掛札功	第二十三 那智灘壺		16.5×11.3	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
750-KI2-164	(写)	掛札功	第二十四 西国第一番札所那智山観音入口	不詳	11.4×15.4	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
751-KI2-165	(写)	掛札功	第二十五 尾鷲町安全索道(人箱)	不詳	16.4×11.8	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
752-KI2-166	(写)	掛札功	第二十六 尾鷲町安全索道(箱窓ヨリ写ス)	不詳	11.0×16.0	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
753-KI2-167	(写)	掛札功	第二十五 尾鷲町安全索道(一里二十分)	不詳	15.8×10.4	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
754-FC1-2	(写)	シャルル・フレージャー	On the Sacred Ganges	不詳	30.0×40.5	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
755-FC1-3	(写)	シャルル・フレージャー	The Taj Mahal	不詳	35.2×27.2	ゼラチンシルバー・プリント	1999/3/30	掛札満
756-FS1-5	(写)	福原信三	新光と其諧調 其二	1924	21.2×28.7	フォトグラビュール	1999/3/30	掛札満
757-FS1-6	(写)	福原信三	溪間	1924	28.8×21.4	フォトグラビュール	1999/3/30	掛札満
758-FS1-7	(写)	福原信三	(秋)	1925頃	28.7×11.4	フォトグラビュール	1999/3/30	掛札満
759-FS1-8	(写)	福原信三	(三津海岸風景)	1926	28.7×21.5	フォトグラビュール	1999/3/30	掛札満
760-FS1-9	(写)	福原信三	新麦の穂	不詳	21.4×28.7	フォトグラビュール	1999/3/30	掛札満
761-FS1-10	(写)	福原信三	(梅林)	不詳	22.5×28.7	フォトグラビュール	1999/3/30	掛札満
762-FS1-11	(写)	福原信三	(梅林 山)	不詳	23.0×29.0	フォトグラビュール	1999/3/30	掛札満
763-FS1-12	(写)	福原信三	(梅林 道)	不詳	28.7×21.4	フォトグラビュール	1999/3/30	掛札満
764-FS1-13	(写)	福原信三	(梅林 遠景)	不詳	23.0×29.0	フォトグラビュール	1999/3/30	掛札満
765-YT1-1	(版)	吉仲太造	マヤ	1973	54.3×39.3	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
766-YT1-2	(版)	吉仲太造	花	1973	54.3×39.3	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
767-YT1-3	(版)	吉仲太造	像=男	1974頃	54.5×39.5	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
768-YT1-4	(版)	吉仲太造	像=女	1974	54.5×39.5	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
769-YM1-1	(版)	吉村益信	CUT SEA A	1973	39.8×54.8	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
770-YM1-2	(版)	吉村益信	CUT SEA B	1973	39.8×54.8	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
771-KS1-1	(版)	上矢津	BLACK OUT 73I	1973頃	31.2×43.4/39.1×54.4	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
772-KS1-2	(版)	上矢津	BLUE OUTCROP	1974	47.0×38.0/66.0×50.4	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
773-KS1-3	(版)	上矢津	YELLOW OUT	1974	39.5×54.9	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
774-KS1-4	(版)	上矢津	OUT OF TIME	1974	42.0×35.0/65.5×50.4	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
775-BA1-1	(版)	馬場彬	Paper Compass	1973	35.0×55.7/39.7×44.3	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
776-KK3-1	(版)	川上清次	縁乱図	1973頃	45.4×28.0/51.4×34.2	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
777-IT3-1	(版)	池田龍雄	陰	1973頃	36.0×36.0/38.4×38.4	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
778-IT4-2	(版)	池田龍雄	陽	1973頃	36.0×36.0/38.4×38.4	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
779-TK1-1	(版)	高橋甲子男	輪と青い花	1973	30.5×33.0/39.7×54.7	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
780-TK1-2	(版)	高橋甲子男	割られたマスカン	1972	54.5×79.3	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
781-TK1-3	(版)	高橋甲子男	青い花	1973	35.5×34.5/29.4×54.7	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
782-KT1-1	(版)	近藤竜夫	Three Diagonal Stripes, Green. 74	1974	32.3×46.7/50.4×65.7	シルクスクリーン、和紙	1999/8/31	佐藤友太郎
783-KT1-2	(版)	近藤竜夫	Three Diagonal Stripes, Blue. 74	1974	32.3×47.0/50.4×65.7	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
784-KK1-3	(版)	木村光佑	SR.2	1975	51.6×37.0/65.1×50.5	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
785-KK1-4	(版)	木村光佑	SR.1	1975	51.2×36.6/65.1×50.5	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
786-KM3-1	(版)	桑原盛行	群組織の相関	1973頃	57.2×54.5	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
787-TN1-1	(版)	高山登	遊殺I	1973頃	51.0×36.0/65.8×50.3	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
788-TN1-2	(版)	高山登	遊殺II	1974頃	51.3×36.0/65.8×50.3	シルクスクリーン、紙	1999/8/31	佐藤友太郎
789-SK1-1	(版)	菅木志雄	空置	1973	50.4×35.8/64.5×46.7	シルクスクリーン、和紙	1999/8/31	佐藤友太郎
790-NK2-1	(絵)	中村孝平	WORK'88-B	1988	181.0×91.0	アクリル絵具、鉛筆、フロッキー・ジュ、和紙	2000/4/28	中村孝平
791-NK2-2	(絵)	中村孝平	WORK'88-A	1988	181.0×91.0	アクリル絵具、鉛筆、フロッキー・ジュ、和紙	2000/4/28	中村孝平
792-IH1-3	(版)	石井栢亭	木場	1914	24.0×18.0	木版、紙	2000/9/20	石井洋
793-YT1-5	(絵)	吉仲太造	棺	1964	130.0×97.0	新聞紙、釘、パネル	2000/7/7	吉仲久子
		吉仲太造	写真、ノート等資料一式	1950-80年代			2007/7/7	吉仲久子
794-KH2-1	(絵)	加藤一	静物	1953	F50	油彩、カンヴァス	2001/10/1	加藤充子
795-KH2-2	(絵)	加藤一	魚(化石)	1960	F40	油彩、カンヴァス	2001/10/1	加藤充子
796-KH2-3	(絵)	加藤一	洋子	1976	F40	油彩、カンヴァス	2001/10/1	加藤充子
797-KH2-4	(絵)	加藤一	女たちの肖像	1981	F150	油彩、カンヴァス	2001/10/1	加藤充子
798-KH2-5	(絵)	加藤一	横たわる女たち	1982	F150	油彩、カンヴァス	2001/10/1	加藤充子
799-KH2-6	(絵)	加藤一	ねむり	1992	M60タテ	油彩、カンヴァス	2001/10/1	加藤充子
800-KH2-7	(絵)	加藤一	女たち	1997	F100	油彩、カンヴァス	2001/10/1	加藤充子
801-KW1-1	(絵)	小林和作	風景	不詳	15.8×22.7	油彩、カンヴァス	2001/10/1	飯田満佐子
802-FT1-1	(絵)	藤本東一良	南仏の丘カーミュ	1988	38.0×45.0	油彩、カンヴァス	2001/10/1	飯田満佐子
803-FK1-1	(絵)	福島金一郎	エッフェル塔遠望	不詳	23.0×32.0	油彩、カンヴァス	2001/10/1	飯田満佐子
804-NY2-1	(絵)	仲田好江	静物	不詳	45.0×38.0	油彩、カンヴァス	2001/10/1	飯田満佐子
805-NY2-2	(素)	仲田好江	無題(人形デッサン)	不詳	48.0×31.0	コンテ、紙	2001/10/1	飯田満佐子

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
806-KK4-1	(絵)	工藤甲人	安居	不詳	12.0×16.0	紙本墨画淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
807-KK4-2	(絵)	工藤甲人	蝸牛の道	不詳	24.0×33.0	紙本着彩	2001/10/1	飯田満佐子
808-KK4-3	(絵)	工藤甲人	さくらんぼ	不詳	25.0×24.0	紙本着彩	2001/10/1	飯田満佐子
809-KK4-4	(絵)	工藤甲人	冬の蝶	不詳	40.0×31.0	紙本着彩	2001/10/1	飯田満佐子
810-KK4-5	(版)	工藤甲人	春の水	不詳	31.5×39.5	リトグラフ	2001/10/1	飯田満佐子
811-KK4-6	(版)	工藤甲人	いのち	不詳	30.2×45.5	リトグラフ	2001/10/1	飯田満佐子
812-TS2-1	(本)	高森幹巖	画冊	1886	13.5×10.0	絹本淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
813-OR1-1	(絵)	大橋康堂	入蜀圖卷	不詳	19.5×1800.0	紙本淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
814-OR1-2	(本)	大橋康堂	支那写生冊	1930	28.2×22.7	紙本淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
815-OR1-3	(本)	大橋康堂	支那写生冊	1930	28.2×22.7	紙本淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
816-OR1-4	(本)	大橋康堂	写生冊	不詳	23.7×28.5	紙本淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
817-OR1-5	(絵)	大橋康堂	仿大痴山水圖	不詳	32.3×42.6	紙本水墨	2001/10/1	飯田満佐子
818-OR1-6	(絵)	大橋康堂	山水圖	不詳	38.3×42.4	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
819-OR1-7	(絵)	大橋康堂	梅圖	不詳	43.2×34.5	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
820-OR1-8	(絵)	大橋康堂	山水圖	1947	135.0×49.0	紙本水墨	2001/10/1	飯田満佐子
821-OR1-9	(絵)	大橋康堂	山水圖	不詳	136.0×69.0	紙本水墨	2001/10/1	飯田満佐子
822-IM1-45	(絵)	飯田東籬(満佐子)	墨竹	1968	131.4×32.6	紙本水墨	2001/10/1	飯田満佐子
823-IM1-46	(絵)	飯田東籬(満佐子)	墨梅	1992	138.7×34.0	紙本水墨	2001/10/1	飯田満佐子
824-IM1-47	(絵)	飯田東籬(満佐子)	芙蓉圖双幅	不詳	136.0×69.0	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
825-IM1-48	(絵)	飯田東籬(満佐子)	四季山水	不詳	135.0×59.0	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
826-IM1-49	(絵)	飯田東籬(満佐子)	歳寒三友	不詳	67.4×57.4	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
827-IM1-50	(絵)	飯田東籬(満佐子)	探秋圖	1991	139.7×36.4	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
828-IM1-51	(絵)	飯田東籬(満佐子)	青山流水	1976	47.7×61.4	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
829-IM1-52	(絵)	飯田東籬(満佐子)	墨梅(梅圖)	1955	136.0×22.0	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
830-IM1-53	(絵)	飯田東籬(満佐子)	山水圖 A	不詳	136.0×59.7	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
831-IM1-54	(絵)	飯田東籬(満佐子)	夏景山水 H	1947	129.4×62.0	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
832-IM1-55	(絵)	飯田東籬(満佐子)	山水圖 D	不詳	136.0×69.2	紙本水墨	2001/10/1	飯田満佐子
833-IM1-56	(絵)	飯田東籬(満佐子)	秋景山水圖 B	1941	102.4×68.7	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
834-IM1-57	(絵)	飯田東籬(満佐子)	夏景山水圖	1948	140.5×33.5	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
835-IM1-58	(絵)	飯田東籬(満佐子)	雪景山水圖 G	不詳	138.2×60.5	紙本水墨	2001/10/1	飯田満佐子
836-IM1-59	(絵)	飯田東籬(満佐子)	山水圖	不詳	87.4×62.0	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
837-IM1-60	(絵)	飯田東籬(満佐子)	唐人圖	不詳	15.0×10.8	紙本淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
838-IM1-61	(絵)	飯田東籬(満佐子)	書	不詳	19.8×19.8	紙本墨書	2001/10/1	飯田満佐子
839-IM1-62	(絵)	飯田東籬(満佐子)	枇杷圖 I	不詳	29.4×43.1	紙本淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
840-IM1-63	(絵)	飯田東籬(満佐子)	柳塘圖	不詳	124.7×27.6	紙本水墨淡彩	2001/10/1	飯田満佐子
841-IM1-64	(絵)	飯田東籬(満佐子)	御嶽風景	1949	40.0×36.0	絹本水墨	2001/10/1	飯田満佐子
842-IM1-65	(絵)	飯田東籬(満佐子)	御嶽靈峰	1949	34.5×54.0	紙本水墨	2001/10/1	飯田満佐子
			写真雑誌「写真月報」ほか 資料1式(354点)				2001/10/19	魚住満也
843-AS1-1	(版)	阿部新一	モッコしよい	1934	12.0×9.0/14.3×11.1	銅版、紙	2003/3/20	阿部秀子
844-AS1-2	(版)	阿部新一	無題	1934	9.0×12.0	銅版、紙	2003/3/20	阿部秀子
845-AS1-3	(版)	阿部新一	一隅	1935	9.0×6.5	銅版、紙	2003/3/20	阿部秀子
846-AS1-4	(版)	阿部新一	白樺のスロープ	1935	12.0×16.0	銅版、紙	2003/3/20	阿部秀子
847-AS1-5	(版)	阿部新一	夜景	1935	9.0×12.0	銅版、紙	2003/3/20	阿部秀子
848-AS1-6	(版)	阿部新一	あべしんいち	不詳	9.0×6.0	銅版、紙	2003/3/20	阿部秀子
849-AS1-7	(版)	阿部新一	題名不詳	1936	15.0×18.0	銅版、紙	2003/3/20	阿部秀子
850-NT2-1	(版)	西田武雄	樹木	1935	6.0×9.0	銅版、紙	2003/3/20	阿部秀子
851-HT2-1	(版)	堀武治郎	西田さんのお顔	1935	9.0×6.0	銅版、紙	2003/3/20	阿部秀子
852-AS2-1	(版)	有田四郎	硫黄精錬所	1942頃	21.0×24.0	銅版、紙	2003/3/20	佐々真木子
853-AS2-2	(版)	有田四郎	水辺の木	1942-1944	15.0×22.0	銅版、紙	2003/3/20	佐々真木子
854-AS2-3	(版)	有田四郎	海老名弾正氏肖像	1942-1944	21.0×13.0	銅版、紙	2003/3/20	佐々真木子
855-AS2-4	(版)	有田四郎	田園風景	1942-1944	12.5×17.0	銅版、紙	2003/3/20	佐々真木子
856-AS2-5	(版)	有田四郎	子等の育った家	1942	19.0×15.0	銅版、紙	2003/3/20	佐々真木子
857-AS2-6	(版)	有田四郎	不詳	不詳	21.0×24.0	銅版、紙	2003/3/20	佐々真木子
858-ST1-1	(版)	曾我尾武治	布晒す	1935	34.5×28.0	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
859-ST1-2	(版)	曾我尾武治	冬木立	1936	27.0×28.5	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
860-ST1-3	(版)	曾我尾武治	船の修理所	1936	46.5×36.0	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
861-ST1-4	(版)	曾我尾武治	不詳	1936	18.0×18.0	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
862-ST1-5	(版)	曾我尾武治	月島にて	1937	21.0×36.0	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
863-ST1-6	(版)	曾我尾武治	浅春	1938	29.5×28.5	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
864-ST1-7	(版)	曾我尾武治	不詳	1938	36.0×39.0	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
865-ST1-8	(版)	曾我尾武治	波止場	1939	36.5×39.0	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
866-ST1-9	(版)	曾我尾武治	入り江	1940	43.0×36.0	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
867-ST1-10	(版)	曾我尾武治	樹間風景	不詳	17.5×16.7	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
868-ST1-11	(版)	曾我尾武治	不詳	不詳	27.0×36.0	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
869-ST1-12	(版)	曾我尾武治	不詳	不詳	18.0×24.0	銅版、紙	2003/3/20	曾我尾幹夫
870-MT2-1	(写)	村林忠	本所	1932	30.3×23.6	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
871-MT2-2	(写)	村林忠	無題	1933	28.5×25.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
872-MT2-3	(写)	村林忠	灌	1936	36.3×27.3	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
873-MT2-4	(写)	村林忠	柵	1937	27.5×37.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
874-MT2-5	(写)	村林忠	関にて	1938	35.0×39.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
875-MT2-6	(写)	村林忠	上高地の朝	1939	39.0×32.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
876-MT2-7	(写)	村林忠	光るスキー	1941	31.0×39.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
877-MT2-8	(写)	村林忠	温泉宿	1942	26.0×36.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
878-MT2-9	(写)	村林忠	残雪	1942	29.5×37.3	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
879-MT2-10	(写)	村林忠	寂	1940	46.5×40.3	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
880-MT2-11	(写)	村林忠	女1	1942	41.0×33.8	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
881-MT2-12	(写)	村林忠	女2	1942	52.7×42.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
882-MT2-13	(写)	村林忠	語らひ	1949	42.0×33.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
883-MT2-14	(写)	村林忠	女B	1975	40.5×33.2	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
884-MT2-15	(写)	村林忠	老漁夫	1981	40.0×33.2	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
885-MT2-16	(写)	村林忠	黒の肖像画 3	1986	41.0×33.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
886-MT2-17	(写)	村林忠	銀座裏	1952	38.2×28.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
887-MT2-18	(写)	村林忠	有沢山荘 1	1957	41.0×33.3	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
888-MT2-19	(写)	村林忠	有沢山荘 2	1957	39.5×31.2	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
889-MT2-20	(写)	村林忠	光る屋根	1963	33.5×40.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
890-MT2-21	(写)	村林忠	駒沢競技場にて	1964	31.5×38.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
891-MT2-22	(写)	村林忠	影	1977	39.0×32.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
892-MT2-23	(写)	村林忠	新しい家	1977	41.5×33.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
893-MT2-24	(写)	村林忠	白いホテル	1987	41.0×33.3	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
894-MT2-25	(写)	村林忠	習作	1948	41.3×33.2	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
895-MT2-26	(写)	村林忠	ポート	1955	41.0×33.2	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
896-MT2-27	(写)	村林忠	初春の賦	1980	40.7×33.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
897-MT2-28	(写)	村林忠	魚網	1983	33.2×40.8	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
898-MT2-29	(写)	村林忠	砂山暮色	1954	33.8×41.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
899-MT2-30	(写)	村林忠	埋立地風景 1	1959	32.3×39.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
900-MT2-31	(写)	村林忠	埋立地風景 2	1961	33.5×40.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
901-MT2-32	(写)	村林忠	埋立地風景 4	1961	40.2×32.2	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
902-MT2-33	(写)	村林忠	送電線 1	1961	41.2×33.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
903-MT2-34	(写)	村林忠	造成地	1963	32.5×39.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
904-MT2-35	(写)	村林忠	強風	1964	33.5×39.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
905-MT2-36	(写)	村林忠	築堤工事場にて	1965	33.0×39.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
906-MT2-37	(写)	村林忠	送電線 2	1965	41.0×34.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
907-MT2-38	(写)	村林忠	京浜工業地帯	1966	33.5×40.9	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
908-MT2-39	(写)	村林忠	あみ	1955	41.5×34.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
909-MT2-40	(写)	村林忠	漁港元朝	1963	39.5×32.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
910-MT2-41	(写)	村林忠	輝雲	1963	40.0×33.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
911-MT2-42	(写)	村林忠	黎明	1964	33.5×40.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
912-MT2-43	(写)	村林忠	都会の雲	1968	39.5×32.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
913-MT2-44	(写)	村林忠	東京港	1978	32.0×39.3	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
914-MT2-45	(写)	村林忠	雨後の朝	1979	40.5×32.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
915-MT2-46	(写)	村林忠	湖畔夕映	1974	40.2×32.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
916-MT2-47	(写)	村林忠	雲	1976	40.8×33.8	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
917-MT2-48	(写)	村林忠	下田風景	1965	33.6×40.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
918-MT2-49	(写)	村林忠	湖	1979	40.5×33.5	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
919-MT2-50	(写)	村林忠	湖	1974	32.3×40.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
920-MT2-51	(写)	村林忠	福原信三先生後姿	1930年代	32.3×40.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
921-FS1-14	(写)	福原信三	対話 作品集「巴里とセーヌ」の8/ Dialogue, "PARIS ET LA SEINE" No.8	1913-1921	24.5×18.4	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
922-FS1-15	(写)	福原信三	釣り 作品集「巴里とセーヌ」の4/ Pêcheurs à la Ligne, "PARIS ET LA SEINE" No.4	1913-1921	25.3×19.3	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
923-FS1-16	(写)	福原信三	池畔 作品集「巴里とセーヌ」の7/ Près d'une étang, "PARIS ET LA SEINE" No.7	1913-1921	25.5×19.7	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
924-FS1-17	(写)	福原信三	小聖地	1934	36.0×27.0	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
925-FS1-18	(写)	福原信三	櫻のトンネル	1930年代	29.7×23.7	ゼラチンシルバー・プリント	2004/3/29	村林とみ子
		村林忠	「風景写真の第一歩」ほか資料一式(11点)				2004/3/29	村林とみ子
926-NK3-1		中田幾久治	自画像	1931	28.5×27.2/33.5×31.3	銅版	2004/3/29	吉留直輝
927-NK3-2		中田幾久治	自画像	1932	26.0×18.9/18.8×14.4	銅版	2004/3/29	吉留直輝
928-NK3-3		中田幾久治	自画像	不詳	17.8×14.5/15.1×11.8	銅版	2004/3/29	吉留直輝
929-NK3-4		中田幾久治	渋谷川	不詳	40.0×31.6	鉛筆	2004/3/29	吉留直輝
930-KM4-1		川崎正人	新竹市の城門	1935	11.8×15.0	銅版	2004/3/29	吉留直輝
		日本エッチング協会会員の證		1930	24.0×15.8		2004/3/29	吉留直輝
931-GS1-1		合田佐和子	銀幕	1985		銅版画集	2003/12/9	宮澤壮佳
932-GS1-2		合田佐和子	海神のお供…白夜	1964	20.0×17.0×25.0	ミクストメディア・オブジェ、ビーズ、 タツノトシ	2003/12/9	宮澤壮佳
933-GS1-3		合田佐和子	ミュートント(い)	1966-1967	直径13.7×2.8	ミクストメディア・オブジェ、紙粘土、 ビーズ等、羽根、アクリル絵	2003/12/9	宮澤壮佳
934-GS1-4		合田佐和子	眼の指輪	1968	直径2.4	ミクストメディア・オブジェ	2003/12/9	宮澤壮佳
935-GS1-5		合田佐和子	極色彩のタマゴ 小	1968	2.7×1.3	ミクストメディア・オブジェ、紙粘土、 アクリル絵具、クリアラッカー	2003/12/9	宮澤壮佳
			書籍「NAGASE 人と芸術」(限定番号995号)	1978			2004/8/27	永瀬テル子
936-NT1-4	(絵)	西嶋俊親	晴暄	1975	F100	油彩、カンヴァス	2004/8/27	西嶋俊親
937-NY1-22	(写)	野島康三	読書(和子像)	1940	35.0×29.0	写真	2006/2/1	星和子
938-NY1-23	(絵)	野島康三	びわ	1926	23.5×40.0	油彩	2006/2/1	星和子
939-NY1-24	(絵)	野島康三	不詳(手鏡を持つ裸婦)	1926	19.4×13.5	油彩	2006/2/1	星和子
940-NY1-25	(絵)	野島康三	不詳(風景)	1920年代か	30.8×39.5	油彩	2006/2/1	星和子
941-NY1-26	(絵)	野島康三	不詳(髪に手をおく裸婦)	1920年代か	25.0×18.0	油彩	2006/2/1	星和子
942-NY1-27	(絵)	野島康三	不詳(座裸婦)	1920年代か	25.0×18.0	油彩	2006/2/1	星和子
943-NY1-28	(素)	野島康三	不詳(裸婦デッサン)	1920年代か	28.0×21.5	鉛筆	2006/2/1	星和子
944-YS1-1	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
945-YS1-2	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
946-YS1-3	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
947-YS1-4	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
948-YS1-5	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
949-YS1-6	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
950-YS1-7	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
951-YS1-8	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
952-YS1-9	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
953-YS1-10	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
954-YS1-11	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
955-YS1-12	(写)	山崎静村	木喰上人作木彫仏	1925頃		写真	2006/2/1	星和子
		野島康三	「にこれる海」ほか資料4件				2006/2/1	星和子
956-YN1-1	(写)	安井仲治	或る船員の像	1927(2004)		ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
957-YN1-2	(写)	安井仲治	静物	1927(2004)		ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
958-YN1-3	(写)	安井仲治	南国浅春	1927(2004)		ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
959-YN1-4	(写)	安井仲治	雨もよひ	1927-1928(2004)		ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年月日	寄贈者
960-YN1-5	(写)	安井仲治	(童女スケッチ)	1928	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
961-YN1-6	(写)	安井仲治	(農夫喫煙)	1928	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
962-YN1-7	(写)	安井仲治	路傍閑語	1928	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
963-YN1-8	(写)	安井仲治	(童女スケッチ)	1928	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
964-YN1-9	(写)	安井仲治	子供	1928-29	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
965-YN1-10	(写)	安井仲治	馬場町	1929	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
966-YN1-11	(写)	安井仲治	古びた家	1929	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
967-YN1-12	(写)	安井仲治	平野町	1929	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
968-YN1-13	(写)	安井仲治	道	1930	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
969-YN1-14	(写)	安井仲治	火力発電所風景	1930	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
970-YN1-15	(写)	安井仲治	(警官)	1930	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
971-YN1-16	(写)	安井仲治	工事場	1930-1931	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
972-YN1-17	(写)	安井仲治	旗	1931	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
973-YN1-18	(写)	安井仲治	検束	1931	(2004)	ゼラチンシルバー・プリントに オイルメディウム、油	2006/2/1	安井仲雄
974-YN1-19	(写)	安井仲治	歌	1931	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
975-YN1-20	(写)	安井仲治	メーデーの写真	1931	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
976-YN1-21	(写)	安井仲治	相剋	1932	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
977-YN1-22	(写)	安井仲治	プロベラー	1932	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
978-YN1-23	(写)	安井仲治	秋風	1933	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
979-YN1-24	(写)	安井仲治	蛾(一)	1934	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
980-YN1-25	(写)	安井仲治	子供	1934	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
981-YN1-26	(写)	安井仲治	海辺	1934	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
982-YN1-27	(写)	安井仲治	ばせを	1931頃	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
983-YN1-28	(写)	安井仲治	風景	1935	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
984-YN1-29	(写)	安井仲治	秩序	1935	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
985-YN1-30	(写)	安井仲治	夏の風景	1935	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
986-YN1-31	(写)	安井仲治	犬	1935	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
987-YN1-32	(写)	安井仲治	魚	1935	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
988-YN1-33	(写)	安井仲治	静物	1936	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
989-YN1-34	(写)	安井仲治	帽子	1936	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
990-YN1-35	(写)	安井仲治	海濱	1936	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
991-YN1-36	(写)	安井仲治	女	1936	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
992-YN1-37	(写)	安井仲治	春雪	1937	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
993-YN1-38	(写)	安井仲治	夕	1937	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
994-YN1-39	(写)	安井仲治	麦畑と富士	1936-1937	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
995-YN1-40	(写)	安井仲治	微風	1937	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
996-YN1-41	(写)	安井仲治	「どん底」	1937	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
997-YN1-42	(写)	安井仲治	アクター	1937	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
998-YN1-43	(写)	安井仲治	男	1937	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
999-YN1-44	(写)	安井仲治	尾鷲風景	1937	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1000-YN1-45	(写)	安井仲治	道	1936-1938	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1001-YN1-46	(写)	安井仲治	球のある構図	1938-1939	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1002-YN1-47	(写)	安井仲治	魚	1938	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1003-YN1-48	(写)	安井仲治	蝶	1938	(2004)	ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
1004-YN1-49	(写)	安井仲治	モニュメント	1938(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1005-YN1-50	(写)	安井仲治	魚	1938(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1006-YN1-51	(写)	安井仲治	掌	1938(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1007-YN1-52	(写)	安井仲治	秋	1939(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1008-YN1-53	(写)	安井仲治	夕	1939(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1009-YN1-54	(写)	安井仲治	磁力	1939(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1010-YN1-55	(写)	安井仲治	磁力	1939(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1011-YN1-56	(写)	安井仲治	磁力	1939(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1012-YN1-57	(写)	安井仲治	惜別	1939-1940(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1013-YN1-58	(写)	安井仲治	白衣勇士	1940(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1014-YN1-59	(写)	安井仲治	夜	1940(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1015-YN1-60	(写)	安井仲治	地上	1940(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1016-YN1-61	(写)	安井仲治	風景	1940(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1017-YN1-62	(写)	安井仲治	勁い葉と枯れる草	1940(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1018-YN1-63	(写)	安井仲治	上賀茂にて(三)池	1941(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1019-YN1-64	(写)	安井仲治	上賀茂にて(一)月	1941(2004)		ゼラチンシルバー・プリント	2006/2/1	安井仲雄
1020-AY1-1		會田雄亮	陶板 虹よ走れ	1996	90.0×90.0	陶板、板	2006/2/1	會田雄亮
1021-AY1-2	(工)	會田雄亮	練上方向流し花器	2000	20.0×20.0×h22.5	陶土	2006/2/1	會田雄亮
1022-AY1-3	(工)	會田雄亮	練上春霞文大皿	1998	36.0×36.0×h8.5	陶土	2006/2/1	會田雄亮
1023-AY1-4	(工)	會田雄亮	練上放射紋花卉盛器	2000	34.0×34.0×h12.8	陶土	2006/2/1	會田雄亮
1024-OM2-1	(絵)	小川マリ	びわ小枝	1999	45.5×60.6	油彩	2006/4/3	小川マリ
1025-NY1-29	(写)	野島康三	Y君肖像(山崎静村像)	1921	22.7×21.8	ゴム印画	2007/1/23	山崎定人
1026-YS1-13	(写)	山崎静村	志賀直哉一家	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1027-YS1-14	(写)	山崎静村	岸田劉生と武者小路一家	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1028-YS1-15	(写)	山崎静村	武者小路と犬	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1029-YS1-16	(写)	山崎静村	武者小路夫妻と岸田劉生	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1030-YS1-17	(写)	山崎静村	武者小路実篤	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1031-YS1-18	(写)	山崎静村	岸田劉生	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1032-YS1-19	(写)	山崎静村	少年立像	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1033-YS1-20	(写)	山崎静村	少年 VRAIE et BELL	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1034-YS1-21	(写)	山崎静村	小山内薫像	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1035-YS1-22	(写)	山崎静村	阪東箕介	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1036-YS1-23	(写)	山崎静村	ベレー帽少年	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1037-YS1-24	(写)	山崎静村	関東大震災	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1038-YS1-25	(写)	山崎静村	夏目漱石像	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1039-YS1-26	(写)	山崎静村	夏目漱石像	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1040-YS1-27	(写)	山崎静村	木喰上人作仏像	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1041-YS1-28	(写)	山崎静村	木喰上人作仏像	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1042-YS1-29	(写)	山崎静村	山崎静村像(野々宮時代)	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1043-YS1-30	(写)	山崎静村	山崎静村像(三笠時代)	1920-30年代		ゼラチンシルバー・プリント	2007/1/23	山崎定人
1044-YK3-1	(彫)	山口勝弘	題名不詳	1962頃	61.5×47.5×34.0	布、ワイヤー、紐	2007/1/23	伊藤竜太
1045-NH1-1	(工)	中島 宏	青瓷彫文壺(青磁彫文壺)	2004	高31.0 径37.0	瓷器	2007/2/20	中島宏
1046-KK2-2	(絵)	清原啓一	内と外	1970	97.0×130.3	油彩、カンヴァス	2007/7/7	清原啓一
1047-KK2-3	(絵)	清原啓一	剣岳(ハツ峰)	1994	91.0×72.7	油彩、カンヴァス	2007/7/7	清原啓一
OK2	(写)	大辻清司	いたましき物体(複写)	1949(2007複写)		ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1048-OK2-1	(写)	大辻清司	新宿・夜/太陽の知らない時	1952(1980年代)	24.7×24.8	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1049-OK2-2	(写)	大辻清司	新宿・夜/太陽の知らない時	1952(1980年代)	25.0×24.8	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1050-OK2-3	(写)	大辻清司	開けるな	1953(1980年代)	21.3×21.3	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1051-OK2-4	(写)	大辻清司	開けるな	1953(1980年代)	21.3×21.3	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1052-OK2-5	(写)	大辻清司	陳列窓	1956(1980年代)	21.3×21.0	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1053-OK2-6	(写)	大辻清司	陳列窓	1956(1980年代)	21.3×21.3	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1054-OK2-7	(写)	大辻清司	陳列窓	1956(1980年代)	21.5×21.2	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1055-OK2-8	(写)	大辻清司	氷紋	1956(1980年代)	21.5×21.4	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1056-OK2-9	(写)	大辻清司	氷紋	1956(1980年代)	21.5×21.5	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1057-OK2-10	(写)	大辻清司	氷紋	1956(1980年代)	24.2×23.8	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1058-OK2-11	(写)	大辻清司	(氷紋か)	1956(1980年代)	24.2×23.8	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子

作品番号	列1	作者名	作品名	制作年	寸法(cm)	技法、材質	寄贈年度月日	寄贈者
1059-OK2-12	(写)	大辻清司	航空機	1957(1980年代)	18.8×26.3	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1060-OK2-13	(写)	大辻清司	航空機	1957(1980年代)	24.0×24.0	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1061-OK2-14	(写)	大辻清司	航空機	1957(1980年代)	22.2×28.8	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1062-OK2-15	(写)	大辻清司	(タケミヤ画廊にて左より吉仲太造、河原温、 瀧口修造、池田龍雄、中井勝郎)	1956	68.0×11.1	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1063-TS3-1	(写)	瀧口修造	イタリア紀行	1958	15.9×10.8	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
		(撮影)、大辻清司(プリント)						
1064-OK2-16	(写)	大辻清司	余白のためのショールーム	1968(2007)	22.5×15.8	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1065-OK2-17	(写)	大辻清司	先住者が焼け焦がした後が丸い穴に なっている廊下	1975	16.0×22.3	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1066-OK2-18	(写)	大辻清司	ひと函の過去Ver.	1977	16.7×22.4	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1067-OK2-19	(写)	大辻清司	見えぬ意味を見ぬ意味と	1980	18.0×22.8	ゼラチンシルバー・プリント	2007/9/4	大辻誠子
1068-YK3-2	(絵)	山口勝弘	「新技法読本2 ひっ搔く」に おけるガラス絵	1959	39.8×48.4	ガラス、油絵	2007/9/4	大辻誠子
		大辻清司	書籍「写真ノート」	1989			2007/9/4	大辻誠子
1069-XX-1	(版)	谷川晃一ほか	カルトバント	1982	9.8×5.3	紙、印刷、箱入り、オリジナル・ランプ二組	2007/9/4	谷川晃一
1070-KK5-1	(版)	北川健次	Masuo Ikeda この一つの謎	2003	23.0×17.3	銅版画	2007/10/1	不忍画廊
	(版)	廖修平	生活A	2005	63.0×46.0	紙・シルクスクリーン	2010/6/22	廖修平
	(絵)	瀧和亭	淡彩雄鶏圖	不詳	134.5×34.0	紙本墨畫淡彩立軸	2010/6/22	藤田幸子
	(絵)	木島柳嶋	草蟲圖	1928	129.8×33.0	紙本設色立軸	2010/6/22	藤田幸子
	(絵)	不詳	漢画像石拓本	不詳	31.5×157.8	紙本墨拓横卷	2010/6/22	藤田幸子
	(絵)	森芳雄	冬の松	1959	50.0×60.5	油彩・キャンバス・額装	2010/6/22	サエグサ・ギャラリー
	(絵)	麻生三郎	酒ビンとパン	1971	45.5×38.0	油彩・キャンバス・額装	2010/6/22	サエグサ・ギャラリー
	(写)	野島康三	女の顔	1933	55.2×41.7	ゼラチンシルバープリント	2010/6/22	中村常子
	(写)	野島康三	女の顔	1933	44.0×40.0	ゼラチンシルバープリント	2010/6/22	中村常子
	(写)	野島康三	女の顔	1933	55.2×41.2	ゼラチンシルバープリント	2010/6/22	中村常子
	(写)	野島康三	女	1933	28.8×24.0	ゼラチンシルバープリント	2010/6/22	中村常子
	(写)	野島康三	不詳(土浦信子像)	1933頃	29.9×24.0	ゼラチンシルバープリント	2010/6/22	中村常子
	(写)	野島康三	不詳(土浦信子像)	1933頃	12.0×9.2	ゼラチンシルバープリント	2010/6/22	中村常子
	(写)	土浦信子	湖	1938頃	27.2×22.8	ゼラチンシルバープリント	2010/6/22	中村常子
	(写)	土浦信子	不詳(皿)	1938頃	30.4×25.0	ゼラチンシルバープリント	2010/6/22	中村常子
	(写)	土浦信子	不詳(人形)	1938頃	24.8×14.3	ゼラチンシルバープリント	2010/6/22	中村常子
		野島康三資料一式(137点)					2010/6/22	星 和子
	(絵)	橋本明治	祭	1971	72.7×58.4	紙本着彩	2010/12/15	黒柳妙子氏旧蔵
	(絵)	立石春美	田舎源氏	不詳	64.5×81.5	紙本着彩	2010/12/15	黒柳勝太郎
	(絵)	森田曠平	月夜母子	1973	91.5×58.3	紙本着彩	2010/12/15	黒柳妙子氏旧蔵
	(絵)	森田曠平	遊楽園	不詳	72.7×53.0	紙本着彩	2010/12/15	黒柳勝太郎
	(絵)	石本正	手を置く女	不詳	90.9×65.2	紙本着彩	2010/12/15	黒柳勝太郎
	(絵)	高木義夫	行く春	不詳	116.7×80.3	紙本着彩	2010/12/15	黒柳勝太郎
	(絵)	室井東志生	白い午後	不詳	90.9×65.3	紙本着彩	2010/12/15	黒柳勝太郎
	(絵)	室井東志生	銀扇	不詳	90.9×65.3	紙本着彩	2010/12/15	黒柳勝太郎

施設・運営

施設

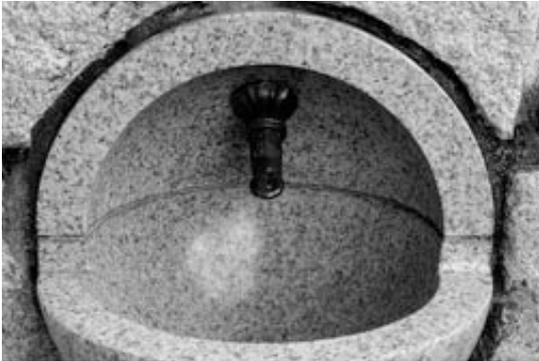
建物概要

位置	東京都渋谷区松濤二丁目14番14号
敷地面積	1,034.57㎡
建物構造	鉄筋コンクリート造 地下2階地上2階建
建築面積	618.40㎡
建物面積	2,027.18㎡
	階層別面積
	塔屋 29.48㎡
	2階 461.20㎡
	1階 305.50㎡
	地下1階 623.95㎡
	地下2階 607.05㎡
建設着工	1978(昭和53)年12月21日
竣工	1980(昭和55)年5月8日
建築工事	株式会社 竹中工務店東京支店
設計	白井晟一研究所
仕上	[外装]
	〈外壁〉
	花崗岩(紅雲石、韓国産)割肌野積
	ボーダー：同材ジェットブラスト(クリカタ付)
	〈屋根〉
	銅板硫化イブシ仕上、一文字葺
	〈揚裏〉
	化粧野地：黒色アルミスパンドレル
	種：ブロンズ磨き一部ヘアライン仕上
	〈中央吹抜部〉
	独立柱(14本)：アルミ押出材、合成樹脂塗装
	カーテンウォール：スチール合成樹脂塗装、
	熱線吸収ガラス入り
	底部：噴水装置(水中照明付)
	ブリッジ：スチール(H型鋼)O・P仕上、
	床／花崗岩(紅雲石 ジェットブラスト仕上)、
	笠木／スチールフラットバー2枚合せ
	〈正面グリル〉
	ブロンズ堅格子磨き
	〈開口部〉
	アルミ発色サッシ、ブロンズ製硫化イブシ仕上
	[内装]
	〈玄関〉
	床：花崗岩(紅雲石、中央部目地有り)
	壁：花崗岩(紅雲石、中央部目地有り)
	天井：オニックス(両面ガラス)光り天井
	〈陳列会場、陳列室〉
	床：ゴムタイル張、
	壁：ジョイントボード二重張、下地・デュッセル仕上
	天井：特殊布張
	〈ギャラリー〉
	床：ゴムタイル張
	ボーダー：花崗岩(紅雲石ジェットブラスト一部磨き)
	手摺：スチール樹脂塗装(フレーム)銅鋼
	揚裏：デュッセル仕上、照明装置付(アクリルルーバー)
	〈サロンミュージゼ・特別陳列室・2階ロビー〉
	床：ウイルトンカーペット二重フェルト下地

	<p>ポーター：花崗岩(紅雲石本磨き) 壁：ブラジリアンローズウッドワトコ仕上、一部ベネツィアンベルベット張 天井：回縁／ブラジリアンローズウッド練付、天井／特殊布張、 吹出口付大型化粧梁／ブラジリアンローズウッド練付</p>														
設 備 内 容	<p>〈電気設備〉 受変電設備(6.6KV、容量275KVA) 調光装置付照明設備 電話交換機設備 防犯警備設備 自動火災報知設備(消火栓連動) 非常放送設備</p> <p>〈空調換気設備〉 空冷ヒートポンプチラー 19.30冷凍t × 2台 加湿装置付空気調和器 5台 自動温湿度調節器 温湿度計測盤</p> <p>〈給排水衛生設備〉 電気給湯設備 4ヶ所 厨房設備 障害者用化粧室(警報装置付) 2ヶ所</p> <p>〈消火設備〉 ハロンガス消火設備(収蔵庫、陳列室、サロンミュージゼ、特別陳列室) 屋内消火栓 スプリンクラー消火設備 防火扉設備</p> <p>〈その他〉 エレベーター：間口2m(入口1.1m)、奥行1.5m、高さ2.3m(入口2.1m)、積載荷重1,300kg 空調換気設備・給排水設備監視盤 ホール用映写・放送設備</p>														
陳 列 室	<p>〈主陳列室〉 地下1階 面積 203㎡ 天井高 6.4m 壁面全長 38.7m</p> <p>〈特別陳列室〉 2階 面積 30㎡ 天井高 2.8m 壁面全長 11.0m</p> <p>〈サロンミュージゼ〉 面積 148㎡ 天井高 3.3m 壁面全長 32.0m</p>														
建 設 費	<table border="0"> <tr> <td>主体建設費</td> <td>787,000千円</td> </tr> <tr> <td>付帯工事費</td> <td>10,144千円</td> </tr> <tr> <td>地質調査費</td> <td>845千円</td> </tr> <tr> <td>設計委託料</td> <td>25,888千円</td> </tr> <tr> <td>工事技術指導料</td> <td>10,497千円</td> </tr> <tr> <td>初年度備品費</td> <td>114,040千円</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>948,414千円</td> </tr> </table>	主体建設費	787,000千円	付帯工事費	10,144千円	地質調査費	845千円	設計委託料	25,888千円	工事技術指導料	10,497千円	初年度備品費	114,040千円	計	948,414千円
主体建設費	787,000千円														
付帯工事費	10,144千円														
地質調査費	845千円														
設計委託料	25,888千円														
工事技術指導料	10,497千円														
初年度備品費	114,040千円														
計	948,414千円														

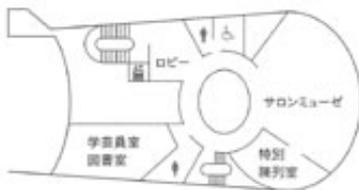
建物内容および面積表

階	室名	面積(m ²)
塔屋	エレベーター機械室	12.80
	その他	16.68
2階	特別陳列室	30.00
	サロンミュージゼ	148.00
	館長室	41.00
	学芸員室	43.50
	ロビー	35.50
	回廊	62.50
	化粧室(男子・女子、障害者)	27.00
	厨房	14.50
	階段その他	59.20
	1階	玄関
ロッカー室		11.50
ロビー		64.50
ギャラリー		35.00
事務室		58.00
職員ロッカー、化粧室		11.50
湯沸室		6.00
階段その他		88.00
地下1階	主陳列室	203.00
	荷解室	15.50
	収蔵庫	78.50
	格納庫	28.50
	ロビー	35.50
	回廊	44.50
	化粧室(男子・女子、障害者)	27.00
	機械室	34.50
	倉庫	10.00
	階段その他	146.95
地下2階	ホール	121.00
	映写室	6.50
	第一制作室	37.00
	第二制作室	34.50
	講師控室	18.50
	ロビー	35.50
	回廊	54.00
	化粧室(男子・女子、障害者)	23.00
	機械室	94.00
	階段その他	183.05
合計		2,027.18

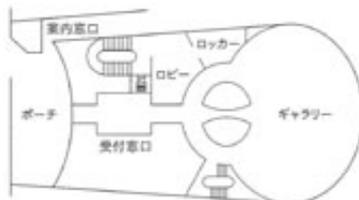


平面図

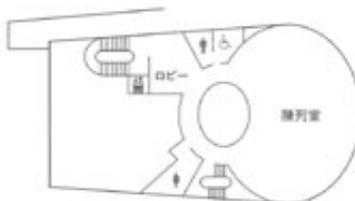
2F



1F



B1F



B2F



断面図



関係法規

渋谷区立松濤美術館条例

昭和55年10月4日
条例第32号

(目的及び設置)

第1条 区民が美術に関して教養を深め、文化的で、情緒に富んだ憩いの場として活用することにより、区民文化の振興発展に寄与するため、渋谷区立松濤美術館(以下「美術館」という。)を東京都渋谷区松濤二丁目14番1号に設置する。

(一部改正…11年39号)

(事業)

第2条 美術館は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

(1) 美術作品その他美術に関する資料(以下「美術作品等」という。)の展示(以下「展観事業」という。)及び美術作品等の保管に関すること。

(一部改正…21年17号)

(2) 美術に関する調査及び研究に関すること。

(3) 実技指導のための美術教室の開設並びに講演会等の開催に関すること。

(4) 美術についての指導、助言、相談に関すること。

(5) 前各号に掲げるもののほか、目的を達成するために必要な事業

(開館時間)

第3条 美術館の開館時間は、次のとおりとし、入館は、それぞれ開館時間の終了30分前までとする。

(本項全部改正…21年17号)

(1) 展観事業(公募に係るものを除く。)の期間午前10時から午後6時まで。ただし、金曜日は、午前10時から午後7時までとする。

(2) 前号以外の期間午前9時から午後5時まで

2 渋谷区教育委員会(以下「教育委員会」という。)が特に必要と認めるときは、前項の規定にかかわらず、開館時間を変更することができる。

(休館日)

第4条 美術館の休館日は、次のとおりとする。ただし、教育委員会が特に必要と認めるときは、これを変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。

(1) 月曜日(国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日(以下「休日」という。)に当たるときは、その直後の休日以外の日)

(改正…11年39号)

(2) 休日の翌日(土曜日、日曜日又は休日に当たるときを除く。)

(改正…11年39号)

(3) 12月29日から翌年1月3日までの日

(改正…元年13号)

(入館料)

第5条 美術館に入館しようとする者は、別表に定める入館料を前納しなければならない。

2 前項の規定にかかわらず、特に必要な場合は、2千円の範囲内で教育委員会がそのつど入館料を定めることができる。

(入館料の不還付)

第6条 既に納付した入館料は、還付しない。ただし、教育委員会が特別の理由があると認めるときは、この限りでない。

(入館料の免除)

第7条 教育委員会は、次の各号のいずれかに該当するときは、入館料を免除することができる。

(一部改正…9年28号)

(1) 身体障害者福祉法(昭和24年法律第283号)に規定する身体障害者手帳、精神保健及び精神障害者福祉に関する法律(昭和25年法律第123号)に規定する精神障害者保健福祉手帳、東京都が発行する愛の手帳又は道府県が発行する療育手帳を提示する者及びこれらの付添者が入館するとき。

(追加…9年28号、一部改正…17年11号)

(2) 60歳以上の者が入館するとき。

(追加…9年28号、一部改正…17年11号)

(3) 区内の小中学校の児童生徒及びこれらの引率者が教育課程に基づく教育活動として入館するとき。

(追加…9年28号)

(4) その他教育委員会が特別の理由があると認めたとき。

(追加…9年28号)

(入館の制限等)

第8条 教育委員会は、次の各号のいずれかに該当すると認めたときは、入館を制限し、又は退館させることができる。

(一部改正…9年28号)

- (1) 秩序を乱すおそれがあるとき。
- (2) 美術作品等又は美術館の施設設備を損傷するおそれがあるとき。
- (3) その他管理上支障があるとき。

(損害賠償)

第9条 美術作品等又は美術館の施設設備に損害を与えた者は、教育委員会が相当と認める損害額を賠償しなければならない。ただし、教育委員会がやむを得ない理由があると認めたときは、その額を減免することができる。

(委任)

第10条 この条例の施行について必要な事項は、教育委員会が定める。

(1条繰上…17年58号)

附 則

この条例は、教育委員会規則で定める日から施行する。

(56年教規則4号56・9・1施行)

附 則(平成元年条例第13号)

この条例は、平成元年4月1日から施行する。

附 則(平成9年条例第28号)

この条例は、平成9年6月1日から施行する。

附 則(平成9年条例第35号)

この条例は、平成9年9月30日から施行する。

附 則(平成11年条例第39号)

この条例は、平成12年4月1日から施行する。

附 則(平成17年条例第11号)

この条例は、平成17年4月1日から施行する。

附 則(平成17年条例第58号)

この条例は、平成18年4月1日から施行する。

附 則(平成21年条例第17号)

この条例は、教育委員会規則で定める日から施行する。

(21年教規則14号21・6・1施行)

別表(第5条関係)

区 分	入館料(1人1回につき)	
	個 人	団体(10人以上)
一 般	300円	240円
小中学生	100円	80円

備考

- (1) 学齢に達しないものは、無料とする。
- (2) 一般とは、小中学校の児童生徒以外の者をいう。

(目的)

第1条 この規則は、渋谷区立松濤美術館条例(昭和55年渋谷区条例第32号。以下「条例」という。)の施行に関し、必要な事項を定めることを目的とする。

(一部改正…12年5号)

(入館の承認)

第2条 渋谷区立松濤美術館(以下「美術館」という。)に入館しようとする者は、条例第5条に規定する入館料を納入し、入館券(別記第1号様式)の交付を受けなければならない。

(一部改正…12年5号)

(入館料の還付)

第3条 条例第6条ただし書の規定により入館料の還付をすることができる場合は、災害その他の事故により入館できなくなつたときとし、還付する額は全額とする。

2 前項の規定により入館料の還付を受けようとする者は、入館券を提出しなければならない。

(入館料の免除)

第4条 条例第7条の規定により入館料の免除を受けようとする者は、あらかじめ渋谷区教育委員会(以下「教育委員会」という。)に入館料免除申請書(別記第2号様式)を提出して、その承認を受けなければならない。

(本条全部改正…9年11号)

2 前項の規定にかかわらず、条例第7条第1号又は第2号に該当するときは、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、愛の手帳若しくは療育手帳又は年齢を証する書類の提示をもつて、教育委員会の承認を受けたものとみなす。

(一部改正…17年8号)

(優待券等の発行)

第5条 教育委員会は、必要な範囲内で、優待券及び招待券を発行することができる。

(入館者の遵守事項)

第6条 入館者は、次の事項を守らなければならない。

- (1) 他人に迷惑をかけ、秩序を乱さないこと。
- (2) 陳列品に触れないこと及び陳列品の近くでインキ等を使用しないこと。
- (3) 許可なく陳列品を模写し、又は撮影をしないこと。
- (4) 所定の場所以外で喫煙又は飲食をしないこと。
- (5) その他係員の指示に従うこと。

2 前項の指示に従わないときは、退館させることができる。

(寄贈及び寄託)

第7条 美術作品等の寄贈又は寄託の申出があつたときは、その作品等について調査研究し、受否を決定しなければならない。

2 美術作品等の寄託は無償とし、収蔵中のものと同一の注意をもつて、良好な状態で保管しなければならない。

3 寄託された美術作品等が災害その他避けられない事故により損害を生じたときは、教育委員会はその責を負わない。

(委任)

第8条 この規則に定めるもののほか、必要な事項は教育長が定める。

(1条繰上…17年16号)

附 則

この規則は、公布の日から施行する。

附 則(昭和59年教規則第4号)

この規則は、昭和59年7月1日から施行する。

附 則(平成9年教規則第11号)

この規則は、平成9年6月1日から施行する。

附 則(平成10年教規則第10号)

この規則は、公布の日から施行する。

附 則(平成12年3月30日教規則第5号)

この規則は、平成12年4月1日から施行する。

附 則(平成17年教規則第8号)

この規則は、平成17年4月1日から施行する。

附 則(平成17年教規則第16号)

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

附 則(平成22年教規則第8号)

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

設立趣旨

建設する美術館の管理についての基本的な方向について

昭和53年7月3日
東京都渋谷区教育委員会社会教育課

1. 美術館運営管理についての基本的な考え方

本区において計画される美術館は、区内美術家の活動拠点であると同時に区民の美術についての学習欲求にこたえる専門施設としての役割を担っている。従って、美術館としての設置目的を果たすためには、渋谷区美術振興財団(仮称)を設け、民間の人材を導入し、創意ある運営管理を期すると同時に、行政の公会計制度から独立した財団の財務会計によって計画的な事業を推進することにより渋谷区の文化振興を目指すことを目標とする。

2. 渋谷区美術振興財団(仮称)について

渋谷区美術振興財団(仮称)は、渋谷区の基本施策に即応して、区内の美術振興に関する事業並びに区が委託する事業を行うことによって、渋谷区の文化の向上に寄与することを目的とする公共的団体であり、区並びに民間の資金を結集し、基本財産の充実を図り、民間の人材による地域性と創意に満ちた自主事業の推進を図ることを指針とする。

3. 財団の設立理由

- (1) 優秀な人材を確保し、効率的な運営管理を期することによって、渋谷の地域に即した区民サービスの充実を図ること
- (2) 美術館の自主企画事業等を計画的に推進するためには、下記の事由により行政の財務制度では困難を伴うこと
 - ・自主企画展は開催のおよそ2年前から作品貸借の具体的な交渉に入ること
 - ・区は会計年度が独立しているため作品収集に支障きたすこと

4. 委託についての考え方

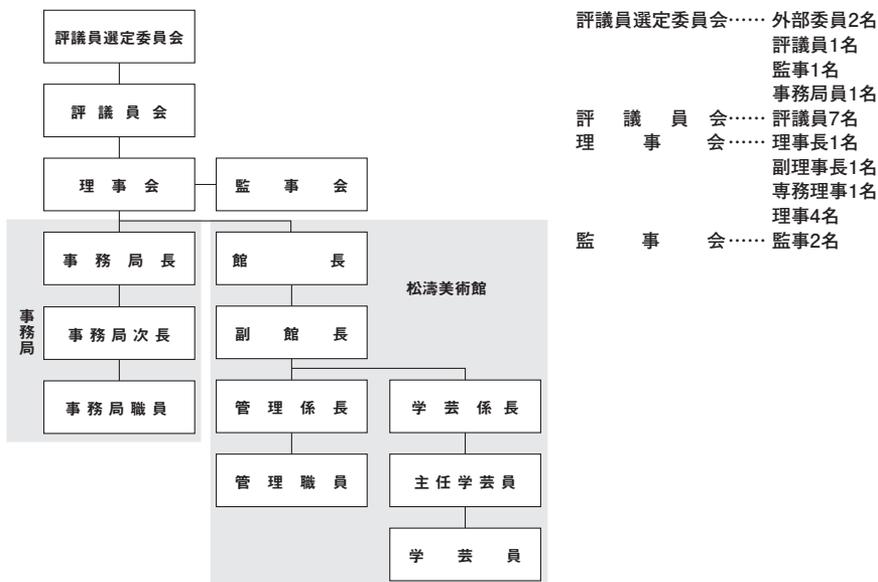
委託にあたっては、施設の基本的な利用条件(開館時間、休館日、入館料等)を除き、展示事業及び施設の維持管理、文化活動の全般にわたって委託する。

組織図

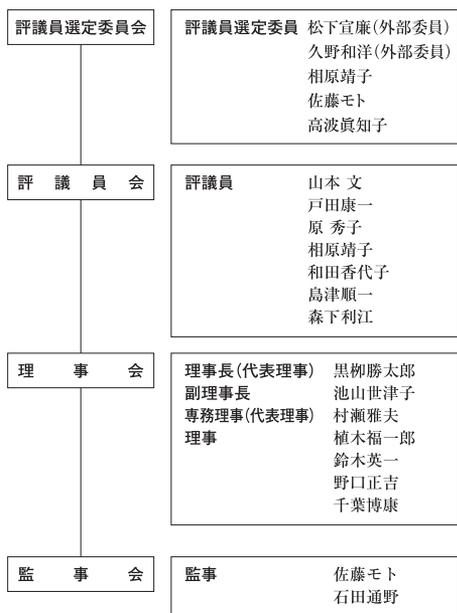
公益財団法人渋谷区美術振興財団

当館は、渋谷区の委託を受けて、公益財団法人渋谷区美術振興財団が運営している。企画展等に関わる諸事業は、機敏でしかも柔軟な経理活動が伴わなければ効果的に推進することが難しいため、行政の公会計制度から独立した財団の財務会計によって計画的な事業を推進することで区民文化の振興を目指しているのである。財団は区の出資により設立され、独自の組織と所要経費をもち、開館時間、休館日、入館料等の美術館の基本的利用条件の決定を除き、施設の維持管理、展観事業及び文化活動の全般にわたって委託されている。

組織図



(公財)渋谷区美術振興財団



定 款

公益財団法人渋谷区美術振興財団 定款

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、公益財団法人渋谷区美術振興財団という。

(事務所)

第2条 この法人は、主たる事務所を東京都渋谷区に置く。

第2章 目的及び事業

(目的)

第3条 この法人は、美術に関する事業を通じて、渋谷区民が幅広い知識と教養を身につけることができるよう支援し、美術活動について一般社会の理解の増進に努め、もって文化の普及と発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 美術に関する知識及び教養の向上発展を図るための美術作品の展示
- (2) 美術教育普及のための講演会、映画会、相談会等の開催
- (3) 美術に関する調査研究及び文化活動の指導助言
- (4) 展覧会の図録及び入館記念品の頒布
- (5) 前各号の事業の用に供する施設の維持及び管理運営
- (6) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

第3章 資産及び会計

(基本財産)

第5条 基本財産は、第4条に規定する事業を行うために不可欠な財産であり、評議員会で決議した財産をもって構成する。

2 基本財産は、評議員会において別に定めるところにより、この法人の目的を達成するために善良な管理者の注意をもって管理しなければならず、基本財産の一部を処分しようとするとき及び基本財産から除外しようとするときは、あらかじめ理事会及び評議員会の承認を要する。

(財産の維持管理及び運用)

第6条 基本財産以外の財産の維持管理及び運用は理事長が行うものとし、その方法は理事会の決議によって定める。

(事業年度)

第7条 この法人の事業年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

(事業計画及び収支予算)

第8条 この法人の事業計画書、収支予算書、資金調達及び設備投資の見込みを記載した書類については、毎事業年度開始の日の前日までに、理事長が作成し、理事会の決議を経て、評議員会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も同様とする。

2 前項の書類については、主たる事務所に、当該事業年度が終了するまでの間備え置き、一般の閲覧に供するものとする。

(事業報告及び決算)

第9条 この法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、理事長が次の書類を作成し、監事の監査を受け、理事会の承認を経て、定時評議員会に提出し、第1号及び第2号の書類についてはその内容を報告し、第3号から第6号までの書類については承認を受けなければならない。

- (1) 事業報告

- (2) 事業報告の附属明細書
 - (3) 貸借対照表
 - (4) 損益計算書(正味財産増減計算書)
 - (5) 貸借対照表及び損益計算書(正味財産増減計算書)の附属明細書
 - (6) 財産目録
- 2 前項の書類のほか、次の書類を主たる事務所に5年間備え置き、一般の閲覧に供するとともに、定款を主たる事務所に備え置き、一般の閲覧に供するものとする。
- (1) 監査報告
 - (2) 理事及び監事並びに評議員の名簿
 - (3) 理事及び監事並びに評議員の報酬等の支給の基準を記載した書類
 - (4) 運営組織及び事業活動の状況の概要及びこれらに関する数値のうち重要なものを記載した書類
- (公益目的取得財産残額の算定)
- 第10条** 理事長は、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律施行規則第48条の規定に基づき、毎事業年度、当該事業年度の末日における公益目的取得財産残額を算定し、前条第2項第4号の書類に記載するものとする。

第4章 評議員

(評議員の定数)

第11条 この法人に評議員7名以上10名以内を置く。

(評議員の選任及び解任)

第12条 評議員の選任及び解任は、評議員選定委員会において行う。

- 2 評議員選定委員会は、評議員1名、監事1名、事務局員1名、次項の定めに基づいて選任された外部委員2名の合計5名で構成する。
- 3 評議員選定委員会の外部委員は、次のいずれにも該当しない者を理事会において選任する。
 - (1) この法人又は関連団体(主要な取引先及び重要な利害関係を有する団体を含む。以下同じ。)の業務を執行する者又は使用人
 - (2) 過去に前号に規定する者となったことがある者
 - (3) 第1号又は第2号に該当する者の配偶者、3親等内の親族、使用人(過去に使用人となった者も含む。)
- 4 評議員選定委員会に提出する評議員候補者は、理事会又は評議員会がそれぞれ推薦することができる。評議員選定委員会の運営についての細則は、理事会において定める。
- 5 評議員選定委員会に評議員候補者を推薦する場合には、次の事項のほか、当該候補者を評議員として適任と判断した理由を委員に説明しなければならない。
 - (1) 当該候補者の経歴
 - (2) 当該候補者を候補者とした理由
 - (3) 当該候補者とこの法人及び役員等(理事、監事及び評議員)との関係
 - (4) 当該候補者の兼職状況
- 6 評議員選定委員会の決議は、委員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。ただし、外部委員の1名以上が出席し、かつ、外部委員の1名以上が賛成することを要する。
- 7 評議員選定委員会は、前条で定める評議員の定数を欠くこととなるときに備えて、補欠の評議員を選任することができる。
- 8 前項の場合には、評議員選定委員会は、次の事項も併せて決定しなければならない。
 - (1) 当該候補者が補欠の評議員である旨
 - (2) 当該候補者を1人又は2人以上の特定の評議員の補欠の評議員として選任するときは、その旨及び当該特定の評議員の氏名

- (3) 同一の評議員(2人以上の評議員の補欠として選任した場合にあっては、当該2人以上の評議員)につき2人以上の補欠の評議員を選任するときは、当該補欠の評議員相互間の優先順位
- 9 第7項の補欠の評議員の選任に係る決議は、当該決議後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時まで、その効力を有する。
- 10 この評議員のうちには、理事のいずれか1人及びその親族その他特殊の関係がある者の合計数又は評議員のうちいずれか1人及びその親族その他特殊の関係がある者の合計数が評議員総数(現在数)の3分の1を超えて含まれることになってはならない。また、評議員には、監事及びその親族その他特殊の関係がある者が含まれてはならない。

(任期)

- 第13条** 評議員の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結のときまでとし、再任を妨げない。
- 2 任期の満了前に退任した評議員の補欠として選任された評議員の任期は、退任した評議員の任期の満了するときまでとする。
- 3 評議員は、第11条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお評議員としての権利義務を有する。

(評議員に対する報酬等)

- 第14条** 評議員には、評議員会に出席の都度、日当として、1人当たり2万円を支給することができる。
- 2 評議員には、その職務を行うために要する費用を弁償することができる。この場合の支給基準については、評議員会の決議により別に定める。

第5章 評議員会

(構成)

- 第15条** 評議員会は、すべての評議員をもって構成する。

(権限)

- 第16条** 評議員会は、次の事項について決議する。

- (1) 理事及び監事の選任及び解任
- (2) 理事及び監事の報酬等の額
- (3) 評議員に対する報酬等の支給の基準
- (4) 貸借対照表及び損益計算書(正味財産増減計算書)並びにこれらの附属明細書の承認
- (5) 定款の変更
- (6) 残余財産の処分
- (7) 基本財産の処分又は除外の承認
- (8) その他評議員会で決議するものとして法令又はこの定款で定められた事項

(開催)

- 第17条** 評議員会は、定時評議員会として毎年定期に年1回開催するほか、必要がある場合に開催する。

(招集)

- 第18条** 評議員会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき理事長が招集する。
- 2 評議員は理事長に対し、評議員会の目的である事項及び招集の理由を示して、評議員会の招集を請求することができる。

(議長)

- 第19条** 評議員会の議長は、その評議員会において出席した評議員の互選により定める。

(決議)

- 第20条** 評議員会の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の過半数が出席し、その過

半数をもって行う。

- 2 前項の規定にかかわらず、次の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の3分の2以上の多数をもって行わなければならない。
 - (1) 監事の解任
 - (2) 定款の変更
 - (3) 基本財産の処分又は除外の承認
 - (4) その他法令で定められた事項
- 3 理事又は監事を選任する決議に関しては、候補者ごとに第1項の決議を行わなければならない。理事又は監事の候補者の合計数が第24条に定める定数を上回る場合には、過半数の賛成を得た候補者の中から得票数の多い順に定数の枠に達するまでの者を選任することとする。

(決議の省略)

第21条 理事が、評議員会の目的である事項について提案した場合において、その提案について、議決に加わることのできる評議員の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の評議員会の決議があったものとみなす。

(報告の省略)

第22条 理事が評議員の全員に対し、評議員会に報告すべき事項を通知した場合において、その事項を評議員会に報告することを要しないことについて、評議員の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示を示したときは、その事項の評議員会への報告があったものとみなす。

(議事録)

第23条 評議員会の議事については、法令の定めるところにより議事録を作成しなければならない。

- 2 前項の議事録には、議長及びその評議員会で選出された議事録署名人2名が記名押印する。

第6章 役員等

(役員の設置)

第24条 この法人に、次の役員を置く。

- (1) 理事6名以上10名以内
- (2) 監事2名以上3名以内
- 2 理事のうち1名を理事長とし、1名の副理事長及び1名の専務理事を置くことができる。
- 3 前項の理事長及び専務理事をもって、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の代表理事とし、副理事長をもって同法第197条において準用する同法第91条第1項第2号の業務執行理事とする。

(役員の選任)

第25条 理事及び監事は、評議員会の決議により選任する。

- 2 理事長及び副理事長及び専務理事は、理事会の決議によって理事の中から選定する。
- 3 この法人の理事のうちには、理事のいずれか1人及びその親族その他特殊の関係がある者の合計数が、理事総数(現在数)の3分の1を超えて含まれることとなってはならない。
- 4 他の同一の団体の理事又は使用人である者その他これに準ずる相互に密接な関係にあるものとして法令で定める者である理事の合計数は、理事総数(現在数)の3分の1を超えて含まれることになってはならない。監事についても同様とする。
- 5 監事は、この法人の理事(親族その他特殊の関係にある者を含む。)及び評議員(親族その他特殊の関係にある者を含む。)並びにこの法人の使用人が含まれてはならない。また、各監事は相互に親族その他特殊の関係があってはならない。

(理事の職務及び権限)

第26条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの定款で定めるところにより、職務を執行する。

- 2 理事長及び専務理事は、法令及びこの定款で定めるところにより、この法人を代表し、この法人の業務を執行し、副理事長は、理事会において別に定めるところにより、この法人の業務を執行する。
- 3 理事長及び副理事長及び専務理事は、毎事業年度に4ヶ月を超える間隔で2回以上自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務及び権限)

第27条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。

- 2 監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、この法人の業務及び財産の状況を調査することができる。

(役員任期)

第28条 理事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結のときまでとし、再任を妨げない。

- 2 監事の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結のときまでとし、再任を妨げない。
- 3 補欠として選任された理事又は監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。
- 4 理事又は監事は、第24条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了又は辞任により退任した後も新たに選任された者が就任するまで、なお理事又は監事としての権利義務を有する。

(役員解任)

第29条 理事又は監事が、次のいずれかに該当するときは、評議員会の決議によって解任することができる。

- (1) 職務上の義務に違反し、又は職務を怠ったとき。
- (2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、又はこれに堪えないとき。

(報酬等)

第30条 理事及び監事には、評議員会において別に定める報酬等の支給の基準に従って算定した額を報酬等として支給することができる。

- 2 理事及び監事には、その職務を行うために要する費用を弁償することができる。この場合の支給基準については、評議員会の決議により別に定める。

第7章 理事会

(構成)

第31条 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(権限)

第32条 理事会は、次の職務を行う。

- (1) この法人の業務執行の決定
- (2) 理事の職務の執行の監督
- (3) 理事長及び副理事長及び専務理事の選定及び解職

(開催)

第33条 通常理事会は、毎年定期的に、年2回開催する。

2 臨時理事会は、次の各号の一に該当する場合に開催する。

- (1) 理事長が必要と認めたとき。
- (2) 理事長以外の理事から、理事長に対して、理事会の目的である事項を記載した書面をもって理事会の招集の請求があったとき。
- (3) 前号の請求があった日から5日以内に、その日から2週間以内の日を理事会の日とする理事会の招集の通知が

発せられない場合に、その請求をした理事が招集したとき。

- (4) 監事が必要と認めて理事長に理事会の招集の請求があったとき。
- (5) 前号の請求があった日から5日以内に、その請求のあった日から2週間以内の日を理事会の日とする理事会の招集の通知が発せられない場合に、その請求をした監事が招集したとき。

(招集)

第34条 理事会は、理事長が招集する。

- 2 理事長が欠けたとき又は理事長に事故があるときは、各理事が理事会を招集する。

(議長)

第35条 理事会の議長は、理事長がこれに当たる。

(決議)

第36条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

- 2 前項の規定にかかわらず、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第197条において準用する同法第96条の要件を満たしたときは、理事会の決議があったものとみなす。

(報告の省略)

第37条 理事又は監事が理事及び監事の全員に対し、理事会に報告すべき事項を通知した場合においては、その事項を理事会に報告することを要しない。

- 2 前項の規定は、第26条第3項の規定による報告には適用しない。

(議事録)

第38条 理事会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成する。

- 2 出席した代表理事及び監事は、前項の議事録に記名押印する。

第8章 定款の変更及び解散

(定款の変更)

第39条 この定款は、評議員会の決議によって変更することができる。

- 2 前項の規定は、この定款の第3条、第4条及び第12条についても適用する。

(解散)

第40条 この法人は、基本財産の滅失によるこの法人の目的である事業の成功の不能、その他法令で定められた事由によって解散する。

(公益認定の取消し等に伴う贈与)

第41条 この法人が公益認定の取消しの処分を受けた場合又は合併により法人が消滅する場合(その権利義務を承継する法人が公益法人であるときを除く。)には、評議員会の決議を経て、公益目的取得財産残額に相当する額の財産を、当該公益認定の取消しの日又は当該合併の日から1ヶ月以内に、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人又は国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

(残余財産の帰属)

第42条 この法人が清算する場合において有する残余財産は、評議員会の決議を経て、国若しくは地方公共団体又は公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人であって租税特別措置法第40条第1項に規定する公益法人等に該当する法人に贈与するものとする。

第9章 公告の方法

(公告)

第43条 この法人の公告は、電子公告によって行う。

2 事故その他やむを得ない事由によって前項の電子公告をすることができない場合は、官報に掲載する方法で行う。

第10章 補則

(委任)

第44条 この定款に定めるもののほか、この法人に必要な事項は、理事会の決議により別に定める。

附則

- 1 この定款は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第106条第1項に定める公益法人の設立の登記の日から施行する。
- 2 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第106条第1項に定める特例民法法人の解散の登記と、公益法人の設立の登記を行ったときは第7条の規定にかかわらず、解散の登記の日の前日を事業年度の末日とし、設立の登記の日を事業年度の開始日とする。
- 3 この法人の公益財団法人への移行後最初の評議員は、次に掲げる者とする。

山本 文	戸田康一	青木宣昭
相原靖子	和田香代子	島津順一
森下利江		
- 4 この法人の公益財団法人への移行後最初の監事は、佐藤モト及び石田通野とする。
- 5 この法人の公益財団法人への移行後最初の理事は、次に掲げる者とする。

黒柳勝太郎	池山世津子	村瀬雅夫
鈴木英一	野口正吉	植木福一郎
- 6 この法人の公益財団法人への移行後最初の代表理事は、黒柳勝太郎とする。
- 7 この法人の公益財団法人への移行後最初の業務執行理事は、池山世津子及び村瀬雅夫とする。

附則

- 1 この定款は平成22年9月1日から施行する。

利用案内

開館時間

[特別展]

- 午前10時～午後6時
- 金曜日は午後7時まで開館

[公募展・小中学生絵画展]

- 午前9時～午後5時
- 最終入館は閉館30分前まで

休館日

毎週月曜日(ただし祝日は除く)
国民の祝日の翌日(ただし土日は除く)
年末年始(12月29日から1月3日)
陳列替え期間中

入館料

一般 300円(240円)
小・中学生 100円(80円)

※60歳以上・障がい者の方は入館無料

※毎週土曜日は小・中学生無料

※()内は10名以上の団体料金

案内図



主要交通機関

山手線 渋谷駅ハチ公口下車 徒歩15分

井の頭線 神泉駅下車 徒歩5分

※駐車場は、当館、付近にもありません。

渋谷区立松濤美術館 30年のあゆみ 昭和56年—平成23年
30 YEARS OF THE SHOTO MUSEUM OF ART 1981-2011

平成23年12月発行

編集・発行 渋谷区立松濤美術館
〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14
TEL 03-3465-9421

制作 アート印刷株式会社